姫路市

播磨・長越遺跡Ⅲ

2012（平成24）年3月

兵庫県教育委員会

播磨・長越遺跡Ⅲ

兵庫県文化財調査報告　第432冊

兵庫県教育委員会

23教Ⓣ1-036 A4

兵庫県文化財調査報告　第432冊

姫路市

長越遺跡Ⅲ

（飯田湯田遺跡）

－（二）船場川水系船場川流域治水対策事業に伴う発掘調査報告書－

2012（平成24）年３月

兵庫県教育委員会

空中写真（東上空から）

空中写真（南上空から）

巻頭図版２

空中写真（西上空から）

竹の前遺跡空中写真（南東上空から）

調査区全景（南から）

SH01全景（南から）

巻頭図版４

SH01焼失状況（西から）

SH01焼失状況（西から）

SH06全景（南空から）

SH06建築材検出状況

巻頭図版６

出土土器

竪穴住居跡出土土器

庄内甕

巻頭図版８

四国からの搬入土器

竹の前遺跡出土土器

例　言

1．本書は姫路市飯田に所在する長越遺跡（飯田湯田遺跡）ならびに姫路市手柄に所在する竹の前遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所が計画・施工する（二）船場川水系船場川流域治水対策事業に伴うものである。

3．確認調査は平成15年度に、本発掘調査は平成20年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・兵庫県立考古博物館が調査担当した。

4．確認調査は吉識雅仁・渡辺　昇が、本発掘調査は渡辺　昇・上田健太郎が担当した。

5．調査で使用した方位は国土座標第Ⅴ系を使用し、水準は兵庫県設定の２級基準点ならびに３級基準点を使用した。

6．調査の結果、長越遺跡と同一の遺跡であると判断されたので、調査段階では飯田遺跡で契約したが、長越遺跡として報告し、同名となることから長越遺跡Ⅲとした。

7．基準点の測量ならびに平面図の図化は㈱サンコムに委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。

8．遺構写真は調査担当者が撮影した。図版１の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。それ以外の空中写真は㈱サンコムに委託して撮影したものである。

9．整理作業は、平成21～23年度の3ヵ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。

10. 執筆は本文目次の通りで、編集は前山三枝子の協力を得て渡辺が行った。

11. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中1-1-1）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。ご活用ください。

12. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご教示を得ました。感謝致します。（敬称略・順不同）

松本正信・加藤史郎・秋枝　芳・義則敏彦・大谷輝彦・小柴治子・中川　猛・福井　優
森岡秀人・松下まり子・森下大輔・合田幸美・堀本祐二・信里芳紀・乗松真也・
荒木幸治・高上　拓・山中良平・姫路市教育委員会

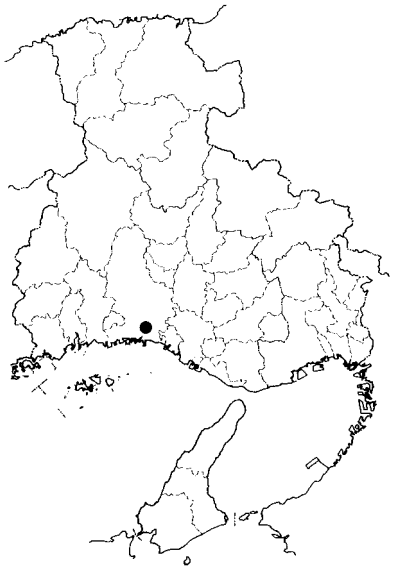


図1　長越遺跡（姫路市）の位置

本　文　目　次

例　言

Ⅰはじめに…………………………………………………………　渡辺

　1．調査に至る経緯と既往の調査……………………………………………1

　2．確認調査の経過と結果……………………………………………………2

　3．本発掘調査の経過…………………………………………………………3

　4．整理作業の経過……………………………………………………………5

Ⅱ　位置と環境……………………………………………………渡辺…………7

Ⅲ　長越遺跡の遺構………………………………………………渡辺

　1．竪穴住居跡………………………………………………………………12

　2．落ち込み…………………………………………………………………15

　3．土坑………………………………………………………………………16

　4．溝…………………………………………………………………………16

　5．旧河道……………………………………………………………………17

Ⅳ　長越遺跡の出土遺物

　1．土器…………………………………………………………渡辺………… 18

　2．石器…………………………………………………………上田………… 40

Ⅴ　竹の前遺跡の遺構と遺物……………………………………上田

　1．1区の遺構………………………………………………………………72

　2．2区の遺構………………………………………………………………73

　3．出土遺物…………………………………………………………………74

　4．まとめ……………………………………………………………………75

Ⅵ　科学分析

　1．長越遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）………………㈱加速器分析研究所…… 80

　2．長越遺跡Ⅲ出土遺物の自然科学分析…………………………パリノ・サーベイ㈱…… 83

Ⅶ　おわりに………………………………………………………渡辺………… 100

挿　図　目　次

図1　長越遺跡（姫路市）の位置………… i
図2　昭和49年度調査区（長越遺跡Ⅰ）…… 1
図3　平成15年度調査区（長越遺跡Ⅱ）…… 3
図4　調査風景……………………………… 3
図5　長越遺跡調査区の位置……………… 4
図6　調査風景……………………………… 5
図7　整理作業風景………………………… 6
図8　長越遺跡の位置と周辺の遺跡……… 8
図9　長越遺跡Ⅰ土器出土状態…………… 10
図10　壇場山古墳…………………………… 10
図11　播磨国分寺跡………………………… 11
図12　豆腐町遺跡…………………………… 11
図13　遺構配置図…………………………… 102
図14　土器分類図…………………………… 103

表　目　次

表１　長越遺跡周辺の遺跡一覧 …… 9
表２　出土石製品一覧表 …… 41
表３　長越遺跡出土土器観察表 …… 42～71
表４　竹の前遺跡出土土器観察表 …… 77～79

巻頭図版目次

１　上　空中写真 (東上空から)
　　下　空中写真 (南上空から)
２　上　空中写真（西上空から）
　　下　竹の前遺跡空中写真（南東上空から）
３　上　調査区全景（南から）
　　下　SH01 全景（南から）
４　上　SH01 焼失状況（西から）
　　下　SH01 焼失状況（西から）
５　上　SH06 全景 (南から)
　　下　SH06 建築材検出状況
６　　出土土器
７　上　竪穴住居跡出土土器
　　下　庄内甕
８　上　四国からの搬入土器
　　下　竹の前遺跡出土土器

図版目次

図版１　調査区平面図
図版２　土層断面図
図版３　SH01 実測図
図版４　SH02 実測図
図版５　SH03 実測図
図版６　SH04 実測図
図版７　SH05・SH06 実測図
図版８　SH07 ～ SH09 実測図
図版９　SH10 実測図
図版 10　SH11 実測図
図版 11　SH12・SH13・SK01 実測図
図版 12　SK02・SK03・SR01 実測図
図版 13　SD03・SD06.　SD11 実測図
図版 14　SD09・SD10 実測図
図版 15　土器実測図（1）
図版 16　土器実測図（2）
図版 17　土器実測図（3）
図版 18　土器実測図（4）
図版 19　土器実測図（5）
図版 20　土器実測図（6）
図版 21　土器実測図（7）
図版 22　土器実測図（8）
図版 23　土器実測図（9）
図版 24　土器実測図（10）
図版 25　土器実測図（11）
図版 26　土器実測図（12）
図版 27　土器実測図（13）
図版 28　土器実測図（14）
図版 29　土器実測図（15）
図版 30　土器実測図（16）
図版 31　土器実測図（17）
図版 32　土器実測図（18）
図版 33　土器実測図（19）
図版 34　土器実測図（20）
図版 35　土器実測図（21）
図版 36　土器実測図（22）
図版 37　土器実測図（23）
図版 38　土器実測図（24）
図版 39　土器実測図（25）
図版 40　土器文様他拓影
図版 41　石器実測図
図版 42　竹の前遺跡平面図
図版 43　竹の前遺跡土層図
図版 44　竹の前遺跡遺構実測図（1）
図版 45　竹の前遺跡遺構実測図（2）
図版 46　竹の前遺跡遺構実測図（3）
図版 47　竹の前遺跡遺構実測図（4）
図版 48　竹の前遺跡土器実測図（1）
図版 49　竹の前遺跡土器実測図（2）

写真図版目次

1 上 空中写真（南西上空から）
下 空中写真（南東上空から）
2 空中写真（国土地理院撮影）
3 上 調査区空中写真（東上空から）
下 調査区空中写真（南上空から）
4 調査区空中写真
5 上 飯田橋からの景色（後方は長越遺跡Ⅰ）
下 全景（南から）
6 調査区全景（南から）
7 上 全景（北から）
下 竪穴住居跡群（南東から）
8 上 竪穴住居跡群（南から）
下 竪穴住居群（南西から）
9 上 SH01 全景（西から）
下 SH01 全景（南から）
10 上 SH01 検出状況（北から）
中 SH01 検出状況（東から）
下左 SH01 検出状況（南から）
下右 SH01 検出状況（西から）
11 SH01 炭化材検出状況
12 上 SH01 低床部全景
下左上 低床部土杭・台石
下右上 台石検出状況
下左下 調査風景
下右下 調査風景
13 上 SH02 全景（南から）
下左上 SH02 堆積状況
下右上 壁溝堆積状況
下左下 床面土器出土状態
下右下 中央土坑堆積状況
14 上 SH03 全景（南から）
下 SH03 堆積状況（南から）
15 上 SH04・SH05 全景（南西から）
下 SH04 全景（南東から）
16 上 SH04 全景（北東から）
下左上 SH04 堆積状況
下右上 調査風景
下左下 遺物出土状態
下右下 中央土坑遺物出土状態（西から）
17 上 SH06・SH12 全景（東から）
下 SH06・SH12 全景（西から）
18 上左上 SH06 焼土杭検出状況（東から）
上右上 SH06 土器出土状態
上左下 SH06 焼土杭断面（東から）
上右下 SH06 焼土杭出土状態（東から）
下左上 SH06 炉跡断面
下右上 SH06 炭化材出土状態
下左下 SH06 炭化材出土状態
下右下 SH06 炭化材出土状態
19 上左 SH06 東壁炭化材
上右 SH06 西壁炭化材
下左上 東壁断ち割り
下右上 西壁断ち割り
下左下 SH06 炭化材
下右下 網状炭化材（剥ぎ取り）
20 上 SH06 土器出土状態（南から）
下 SH06 出土状態
21 上 SH07（南から）
中 SH08（北から）
下 SH08（西から）
22 上左 SH08 土器出土状態（西から）
上右 調査風景
中 SH09・10・11（南から）
下左 SH09 ～ 11 の切り合い
下右 SH09（南から）
23 上 SH09・SH10 遺物出土状態（南から）
SH10（南から）
24 上 SH10 堆積状況（南から）
中 SH10 土器出土状態
下左 SH10・11 の切り合い
下右 調査風景
25 上 H11（南から）
中左 SH11 炉跡
中右 SH11 土器出土状態
下左 SH13（西から）
下右 SH13（北から）
26 上 SK01 土器出土状態
上左下 SK02 アゼ（北西から）
上右下 SK03 アゼ・土器出土状態（北西から）
下左上 SK02 アゼ（北から）
下右上 SD01 アゼ（南から）
下左下 SD06 アゼ（南から）
下右下 SD09（西から）
27 上左上 SD02 上層アゼ（東から）
上右上 SD02 土器出土状態（西から）
上左下 SD02 土器出土状態（西から）
上右下 SD02 土器出土状態（西から）
下左上 SR01（北から）
下右上 SR011（南から）
下左下 SR01 アゼ（北から）
下右下 中央アゼ（南から）
28 上 旧河道土器出土状態
下 調査風景
29 出土遺物集合（1）

30　出土遺物集合（2）
31　出土遺物集合（3）
32　胎土薄片（1）
33　胎土薄片（2）
34　胎土薄片（3）
35　胎土薄片（4）
36　胎土薄片（5）
37　上左上　SD09（西から）
　　上右上　SD10 アゼ（西から）
　　上左下　SR01 アゼ（南から）
　　上右下　SR01 アゼ（北から）
　　下左上　SR01 アゼ（北から）
　　下右上　SR01 アゼ（北から）
　　下左下　SX01 土器出土状態
　　下右下　SK02 調査風景
38　上左上　SX04 土器出土状態（東から）
　　上右上　現地説明会
　　上左下　考古学者養成セミナー
　　上右下　実測風景
　　下左上　上層スキ溝（南から）
　　下右上　上層水田アゼ（南から）
　　下左下　15 年度調査区（長越Ⅱ）の現況
　　下右下　船場川ゴミ集積状況
39　出土遺物（1）
40　出土遺物（2）
41　出土遺物（3）
42　出土遺物（4）
43　出土遺物（5）
44　出土遺物（6）
45　出土遺物（7）
46　出土遺物（8）
47　出土遺物（9）
48　出土遺物（10）
49　出土遺物（11）
50　出土遺物（12）
51　出土遺物（13）
52　出土遺物（14）
53　出土遺物（15）
54　出土遺物（16）
55　出土遺物（17）
56　出土遺物（18）
57　出土遺物（19）
58　出土遺物（20）
59　出土遺物（21）
60　出土遺物（22）
61　出土遺物（23）
62　出土遺物（24）
63　出土遺物（25）
64　出土遺物（26）
65　出土遺物（27）
66　出土遺物（28）
67　出土遺物（29）
68　出土遺物（30）
69　出土遺物（31）
70　出土遺物（32）
71　出土遺物（33）
72　出土遺物（34）
73　出土遺物（35）
74　出土遺物（36）
75　出土遺物（37）
76　出土遺物（38）
77　出土遺物（39）
78　出土遺物（40）
79　出土遺物（41）
80　出土遺物（42）
81　上　　竹の前遺跡　Ⅰ区全景（東から）
　　下　　竹の前遺跡　Ⅱ区全景（北から）
82　左上　竹の前遺跡　SD02-a 全景（南西から）
　　竹の前遺跡　SD02-a 中層土器出土状況（南西から）
　　左下　竹の前遺跡　SD02-a（北東から）
　　右下　竹の前遺跡　SD02-b（北東から）
83　上　　竹の前遺跡　SD02 土層断面（中央部・南西から）
　　下　　竹の前遺跡　SD02 土層断面（北部・南から）
84　上　　竹の前遺跡　SB02（北東から）
　　下　　竹の前遺跡　SX01（北東から）
85　左上上　竹の前遺跡　SB01P2-1 土層断面（西から）
　　左上下　竹の前遺跡　SB02P2-1 土層断面（東から）
　　左下上　竹の前遺跡　SA02P2 土層断面（北から）
　　左下下　竹の前遺跡　SA04P2 土層断面（西から）
　　右上上　竹の前遺跡　SB02P1-1 土層断面（東から）
　　右上下　竹の前遺跡　SB03P1-2 土層断面（西から）
　　右下上　竹の前遺跡　SA04P1 土層断面（南西から）
　　右下下　竹の前遺跡　SA04P3 土層断面（南西から）
86　竹の前遺跡　出土遺物（1）
87　竹の前遺跡　出土遺物（2）
88　竹の前遺跡　出土遺物（3）
89　炭化材（1）
90　炭化材（2）

Ⅰはじめに

１．調査に至る経緯と既往の調査

長越遺跡は姫路市飯田字長越・湯田に所在する遺跡である。1974年から２ヵ年にわたって建設省（当時）が計画する姫路バイパス建設に先立って調査が実施されて知られることになった遺跡である。兵庫県を代表する弥生時代末から古墳時代初頭の集落跡である。その後、船場川東側では区画整理事業が計画され、東川遺跡・大鳥遺跡・飯田カスカエ遺跡・畑田遺跡として同時期の集落跡も姫路市教育委員会によって調査されている。船場川流域は上流に向かって竹の前遺跡・小山遺跡・黒表遺跡・橋詰遺跡と弥生時代後期の集落が集中している。庄内式土器が多く出土していることで特によく知られている。

長越遺跡は昭和49・50年度に全面調査が行われた庄内期の遺跡である。同報告書（播磨・長越遺跡　昭和53年　兵庫県教育委員会）掲載の今里幾次氏の「長越遺跡調査前史」によると、昭和20年代まで標高10m以下の低地に遺跡存在は考えられておらず、唯一千代田遺跡だけであった。（長越遺跡は標高4.5m）それが、30年代以降遺跡数は増加し、姫路市内の縄文・弥生時代遺跡総数の占める割合も高くなっていった。丘陵部の増加率に比べると桁が変わるほどの増加である。昭和初期には１割にも満たなかった遺跡が、30年代には３割、40年代終わりには４割近くなり、現在では半数を超えているものと思われる。標高も２m近くまでの低い部分で遺跡は確認されている。

バイパス建設で知られるようになった長越遺跡であるが、実はその確認は昭和31年２月である。今里氏の栗木遺跡（飾磨区今在家）をテーマにした姫路市文化財研究講座の発表で、船場川下流域の低地に広く弥生時代の遺跡分布の可能性が示唆された。それを受けて現地踏査された増田重信氏によって長越遺跡は確認された。今里氏への葉書に「飯田の西に微高地が２ヵ所あり、弥生式土器と須恵器の破片を採集した。西が字大町､東が字湯田である」と記されている。東側の微高地が長越遺跡である。旧道（現在のバイパスの南側道路）における水道管設置掘削での採集であった。今回本発掘を行った調査区の西側集落内であり、この部分周辺が長越遺跡発見となった水道管設置工事隣接部と思われる。

昭和49・50年度に調査された長越遺跡は、竪穴住居跡15棟（落込み１も住居跡と考えれば16棟）・掘立柱建物１棟と土坑・落込み・溝・大溝が検出されている。竪穴住居跡は切り合い関係があり４小期に細分され、播磨の土器編年の基準となった。集落は東西２群に分けられ、中央空間地に掘立柱建物が存

図２　昭和49年度調査区（長越遺跡Ⅰ）

在しており、両群共有の倉庫かと考えている。今回調査区と比べて古い段階（長越Ⅰ・Ⅱ期）の竪穴住居跡も存在しており、今回調査区（本報告）に分村した可能性が高い。この大溝は平成20年度調査区（長越Ⅲ）に延びているものと思われる。大溝に合流するように東側で支流が存在し、その部分に水量調整のための堰が設置されている。また、合流部西側には橋と考えられる遺構もある。その周囲で石製模造品（剣形・有孔円板・双孔円板・勾玉）を使った祭祀が行われている。石製模造品祭祀の最も古い事例である。コンテナで500箱余りに及ぶ多量の土器が出土しており、長越遺跡Ⅰ～Ⅲ式に分類されている。当時は広大な調査面積の印象があったが、3000㎡余りで、遺跡の稠密なことが理解されよう。調査区内南側には大溝が東西に通っており、現在名の水尾川と船場川の旧河道を結ぶ運河的な役割を担っているとともに、主要な水路として利用されていた。それは昭和49年度の同時期に調査された２遺跡の類似性による。船場川は長越遺跡である。水尾川は構・権現遺跡、中地・天神遺跡であり、両遺跡も古墳時代初頭の遺跡で60ｍの空閑地があり別遺跡としているが、同一遺跡として捉えられる。竪穴住居跡６棟と大溝２条で長越遺跡と同じ状況を呈していた。１棟の竪穴住居跡は長さ14ｍもある多角形プランの大形住居跡である。今回の確認調査は吉識氏と担当したが、奇しくも30年前２人は東西に分かれて長越遺跡、構・権現遺跡の調査に参加していた。その際に運河的な話をした。同時代の共通項のある遺跡であることと、長越遺跡で船が出土したことによる。また、特筆されるのは古墳時代中期の馬埋葬土坑である。兵庫県での最古例であり、重要である。長越遺跡では墓が確認されていないが、中地・天神遺跡では墓域が確認されているのも注目される。

船場川･水尾川ともに姫路平野を流れる河川である。低地の比高差が少ない沖積地を流れることから、たびたび氾濫していた。それを解消するために河川改修事業が計画された。昭和40年代から計画施工され、下流から順次行われている。その一貫として分布調査・確認調査が数回実施され、遺跡の広がりが明らかになった。調査結果から飯田遺跡は長越遺跡と同一の遺跡として考えられるので平成15年調査区を長越遺跡とし、報告も「長越遺跡Ⅱ」とした。改修事業は北側にも計画されており、字長越と同じ遺跡となることは明白である。このことからも今回調査区も長越遺跡として報告するもので書名も「長越遺跡Ⅲ」とした。

２．確認調査の経過と結果

船場川は２級河川ではあるが、比較的水量の多い河川である。姫路平野を流れ、姫路城跡の西側外堀の機能も果たしている。姫路城跡から河口まで６㎞近くあるが、比高差は12ｍ前後と少ない。長越遺跡から河口までは3.5㎞で比高差は３ｍ前後である。そのため、大雨の際に姫路市街地の低い部分が浸水することが重なったことから、船場川の河川改修事業が計画された。河口から順次計画施工されている。それに合わせて主に南側から分布調査も実施している。長越遺跡周辺の分布調査は、平成５年度に実施され隣接地を含めて遺物が採集されている。また、長越遺跡の南東部分に位置することからも遺跡の存在が十分に予想された。飯田橋以南について平成14年度に兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所からの依頼により確認調査を実施した。調査対象地は飯田橋の南側部分で、飯田橋から南に約幅20ｍ、長さ220ｍの部分である。山田清朝を担当者とし、２×４ｍを基本としたトレンチを14ヶ所設定して確認調査を行った。調査は平成14年６月10・11日の２日間実施した。その結果、北半部分において溝とともに全面で包含層が確認されたので、本発掘調査が必要とされ、平成15年度に２回にわたって本発掘調査を行った（長越遺跡Ⅱ）。その春に実施した１回目の本発掘調査時に、飯田橋以北の確認調査が合わ

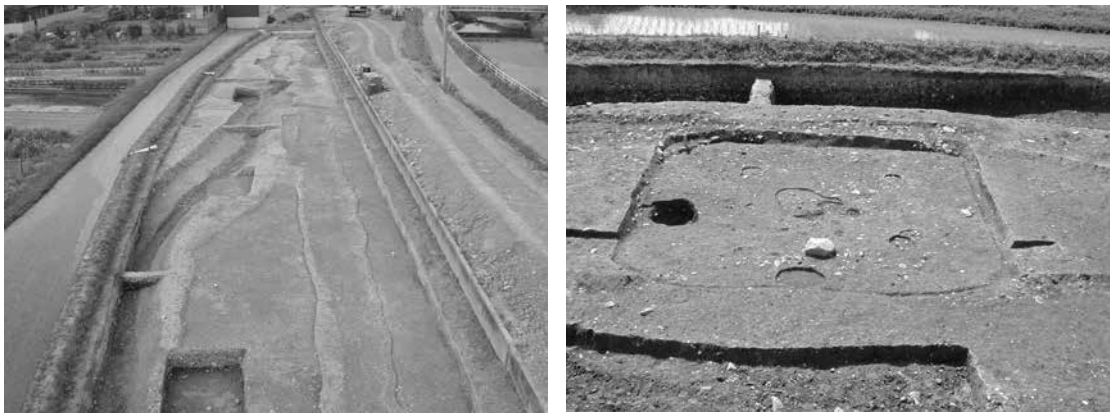


図３　平成15年度調査区（長越遺跡Ⅱ）

せて実施された。その結果、北側にも遺跡が広がっていることが明らかとなり、長越遺跡Ⅰにより接する地点となった。長越橋までの部分で今回調査の北側に位置しており、平成20年度に本発掘調査を実施した。（本報告・長越遺跡Ⅲ）。その際の大溝は昭和49・50年度調査の大溝と同一のものと思われ、同一集落であることは確実である。確認調査はまず重機によって表土から掘削し、断面観察を行いながら、遺構・遺物の存在しそうな部分は人力掘削に切り替え精査した。調査は平成15年６月６日～20日に実施した。その結果、北半部分において溝とともに全面で包含層が確認されたので、本発掘調査が必要とされた。

調査主体　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

事務担当		所　長	平岡憲昭
		主　幹	輔老拓治
	総務課	課　長	森　俊彦
	企画調整班	主任調査専門員	井守徳男
		主　査	甲斐昭光
		課　付	稲田　毅
	調査第１班	調査専門員	吉田　昇
調査担当	調査第１班	主　査	吉識雅仁
		主　査	渡辺　昇

図４　調査風景

３．本発掘調査の経過

確認調査の成果を受けて、平成20年度に本発掘調査を実施した。年度末の２月２日に現地立会いし、調査準備に入った。10日に調査範囲を確定し、調査用の杭を打設した。14日から北端から南に向かって機械掘削を開始した。機械掘削土は南側部分に横置きした。確認調査結果を基礎にして盛土・耕土と床土を機械掘削の対象とするが、一部黒褐砂礫も上部は機械によって除去した。安全が確保出来る距離になってから、機械掘削と平行して北側から適宜壁面を整形するとともに、現状の機械掘削面で面精査する。確認調査トレンチや撹乱坑を掘り下げ、垂直的な資料を得るように努めた。面精査の際に撹乱土の入っている部分や残っている部分は掘り下げた。北半の遺構面は新しい（近世か？）時期の耕作痕以外の遺構は確認できず、古墳時代以降の包含層（黒褐砂礫）も堆積（残存）していなかった。そのため、僅かに人力掘削を行ったものの、ほとんど面精査に近い状況であった。竪穴住居跡を中心とする集落跡

図５　長越遺跡調査区の位置

で遺構は集中していた。それに対して南半の遺構は旧河道を主とするもので濃密な包含層が厚く存在した。上面に近世の旧河道がある以外は古墳時代の堆積で早い段階に埋没したことが窺われる。古墳時代以降の堆積土は遺物が少なかった。遺構は溝が主体で上部では旧河道と思われる大溝が調査区内を流れていた。遺構は堆積状況を確認・記録するためのアゼを幾つか設定して掘り下げの参考にした。アゼをはじめ壁面の土層断面図と写真撮影を行い、アゼを除去した。遺物の出土状況も適宜記録（写真･実測）している。３月10日に遠景とともに図化するために空中写真撮影を行った。全景写真や部分写真は足場を適所に随時立てて行った。同日記者発表を行い、３月14日（土）に現地説明会を開催した。関東からも足を運んでいただくなど多数の参加を得た。現地にて17日に中間検査を受けた。一部断ち割りなどの作業・記録作成に22日まで費やした。SH01は一部拡張し、全貌を明らかにした。平行して埋め戻しを行い24日にすべての調査を終了した。

調査主体　兵庫県教育委員会
事務担当　兵庫県立考古博物館
館　長　石野博信
副館長　藤原　悟
埋蔵文化財調査部長　若生晃彦
主　幹　岡崎正雄
総務課　課　長　前川浩子
主　査　大西晃彦
企画調整班　主　査　小川弦太
調査第１班　調査専門員　吉田　昇
調査担当　調査第１班　課長補佐　渡辺　昇
技術職員　上田健太郎
調査参加者　赤壁千恵子・奥田智子・赤壁　静・前田陽子・佐藤朋子
藤田　泉・石野照代

図６　調査風景

４．整理作業の経過

整理作業は平成21～23年度の３ヶ年で実施した。本発掘調査と同じく兵庫県中播磨県民局長と兵庫県教育長が契約を交わして実施した。平成21年度は水洗いから接合作業までを、平成22年度は実測作業からトレース作業・分析鑑定を、平成23年度はレイアウトから報告書刊行までの作業を行った。ともに兵庫県立考古博物館で行った。

調査主体　兵庫県教育委員会
事務担当　兵庫県立考古博物館
館　長　石野博信
副館長　藤原　悟（平成21年度）・安部邦明（平成22・23年度）
埋蔵文化財調査部長　若生晃彦（平成21・22年度）・高尾尚登（平成23年度）
主　幹　吉田　昇（平成22年度）・深井明比古（平成23年度）
総務課　課　長　前川浩子

		主　査	大西晃彦
		事務職員	川原聡介（平成22・23年度）
	整理保存課	調査専門員	森内秀造（平成21年度）
		課　長	村上泰樹（平成22・23年度）
		課長補佐	岡田章一（平成21・22年度）
		主　査	篠宮　正・山本　誠（平成22・23年度）
		主　査	深江英憲（平成23年度）
調査担当	調査第１課	課長補佐	渡辺　昇
	企画調整課	主　査	上田健太郎
	整理保存課	嘱託員	前山三枝子・森本貴子・柏原美音・佐伯純子・加藤裕美 佐々木誓子・増田麻子・古谷章子・栗原美緒・有田遥香 吉田優子・眞子ふさ恵・島村順子・又江立子・三好綾子 奥野政子・藤尾裕子・嶺岡美見・吉村あけみ・小野潤子 上田沙耶香
保存処理	整理保存課	主　査	岡本一秀
		嘱託員	岡田美穂・桂　昭子・浜脇多規子

図７　整理作業風景

Ⅱ　位置と環境

長越遺跡は姫路平野南側の姫路市飯田字長越・湯田に所在する遺跡である。東側に船場川が流れており、船場川の縁辺微高地に遺跡は営まれているが、地形が複雑に入り組んでおり、旧河道も遺跡内を通っている。

姫路平野は播磨中央部の市川によって開析された平野であり、東西 9.8㎞、南北 7.5㎞の兵庫県では最も広い平野となっている。その中央を市川が流れているが、現在の河道に安定したのは近世になってからである。弥生時代には幾度となく河道を変えていたことは確実である。平地の下には旧河道と微高地が存在している。氾濫時は船場川が本流の流れとなったことも十分に想像される。現在の大日線付近から姫路城跡の東外堀である三左衛門堀（川）を本流が南下していたであろうと考えられている。船場川は砥堀から市川と分かれているが、ある時期の氾濫などによってつながったと考えられており、本来は大野川から流れてきた河川とされている。船場川流域は弥生時代から古墳時代にかけて多くの遺跡が立地していることは、常に氾濫を受けていたわけではなく、それ以上に可耕地として肥沃な平地を与えられていたことを示している。「播磨国風土記」には市川は小川と記され、西側に大川が存在している。「大日本地名辞典」では船場川を大川に比定している。船場川は手柄山にあたり、蛇行して長越遺跡近くから直線的に南下している。その主軸方向は西側の水尾川と同じで約 20° 東に振っており、復原されている条里地割に即している。

旧石器時代の遺跡は但馬・丹波では良好な調査例があり、播磨でも明石市・小野市の東播磨では層位的な調査が実施されているが、西播磨では良好な例がない。たつの市碇岩遺跡でまとまっているのが良好な例である。単独の出土例が知られているだけで、まとまった調査例はない。縄文時代の遺跡も同様である。丁・柳ケ瀬遺跡など中期から後期にかけての遺物が出土しているが生活跡は明瞭でない。早くに調査された辻井遺跡が人骨出土などで著名であるが、他にまとまった調査例はない。晩期になって低地にも遺跡が拡大されるようになって、姫路平野の遺跡は増加する。

弥生時代になると遺跡数は増大する。弥生時代から奈良時代にかけて姫路平野が播磨の中心であったことを示す遺跡の稠密さと内容を誇っている。姫路城下町にある本町遺跡でも弥生土器が出土しており、姫路城北西の八代深田遺跡は中期から後期の土器がまとまって出土しており、編年資料として使われている。八代深田遺跡東側を流れる船場川は、JR と交差する付近に南畝町遺跡・豆腐町遺跡があり、その西側に学史に残る千代田遺跡がある。船場川に近い南畝町遺跡・豆腐町遺跡は中期からの遺跡で溝（河道）・土坑が調査されている。船場川から離れた千代田遺跡と東側の北条遺跡では前期の遺構が検出されている。北条遺跡のさらに東にある市之郷遺跡は当地の拠点集落で前期から弥生時代を通して古墳時代・奈良時代と生活している。前期には木棺墓も築かれている。中期には竪穴住居跡・木棺墓や周溝墓も調査され、後期にも多数の竪穴住居跡が検出されている。古墳時代にも継続し、５世紀の竪穴住居跡群があり、韓式土器などの渡来系遺物が多数出土している点は注目される。奈良時代には官衙的な遺構・遺物もあり、氏寺と思われる市之郷廃寺も建立される。西側の北条遺跡・豆腐町遺跡でも奈良時代になると掘立柱建物や井戸などの遺構が検出されており、出土遺物にも墨書土器や漆紙文書・二彩壺・円面硯などの官衙的遺物が多く見られる。鉄滓や羽口の出土や多量の製塩土器など播磨国府の工房としての機能を保有していたようである。漆の付いた土器が多いのも豆腐町遺跡の特徴である。中世になると遺

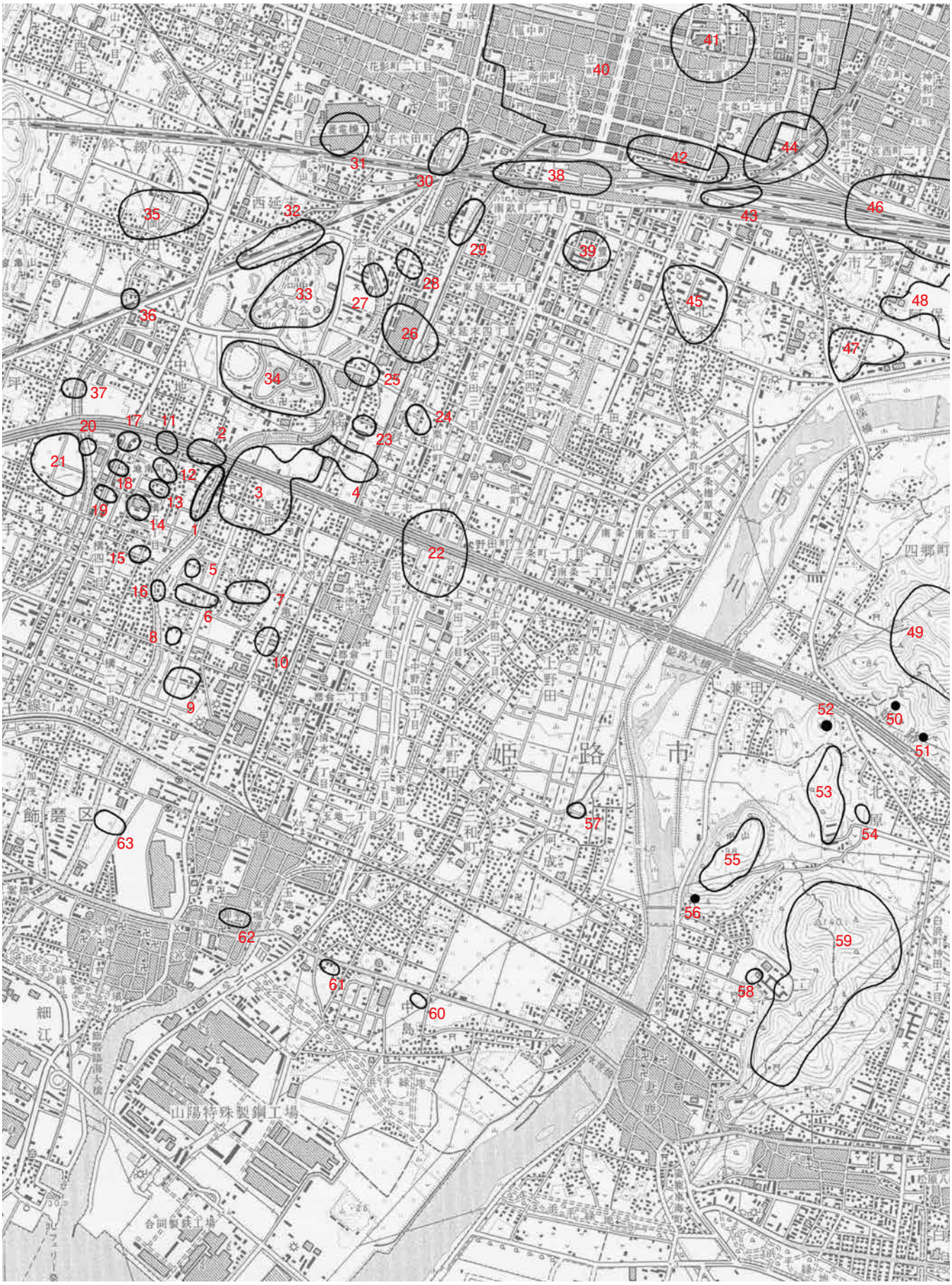


図８　長越遺跡の位置と周辺の遺跡（S=1：25,000）

表１　長越遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡の時代
1	長越（飯田湯田）遺跡	姫路市飯田	弥生～古墳
2	長越遺跡	姫路市飯田	弥生～中世
3	畑田遺跡	姫路市飯田	縄文～中世
4	竹の前遺跡	姫路市手柄	弥生～古墳
5	カスカエ遺跡	姫路市飯田	弥生～中世
6	飯田カスカエ遺跡	姫路市飯田	縄文～古墳
7	善慶田遺跡	姫路市飯田	弥生～古墳
8	笹山田遺跡	姫路市飯田	平安
9	大鳥遺跡	姫路市飯田	縄文
10	石ケ坪遺跡	姫路市亀山	縄文～弥生
11	邨東遺跡	姫路市中地	弥生
12	東久保遺跡	姫路市中地南町	弥生
13	大町遺跡	姫路市飾磨区構５丁目	弥生
14	大塚遺跡	姫路市飾磨区構５丁目	古墳
15	真福寺遺跡	姫路市飾磨区構５丁目	弥生～古墳
16	構遺跡	姫路市飾磨区構３丁目	縄文～弥生
17	西久保遺跡	姫路市中地南町	弥生
18	中地天神遺跡	姫路市中地南町	弥生～中世
19	権現遺跡	姫路市中地南町	縄文～弥生
20	中ノ町遺跡	姫路市玉手	弥生
21	大石橋遺跡	姫路市玉手	弥生～中世
22	三宅遺跡	姫路市飾磨区三宅	奈良
23	浜田遺跡	姫路市手柄	弥生
24	古屋敷遺跡	姫路市手柄１丁目	弥生～古墳
25	小山遺跡	姫路市延末	弥生～古墳
26	黒表遺跡	姫路市東延末	弥生～古墳
27	橘詰遺跡	姫路市延末	縄文～古墳
28	村淵遺跡	姫路市延末１丁目	弥生
29	君田遺跡	姫路市東延末町	弥生
30	南畝町遺跡	姫路市南畝町	弥生
31	千代田遺跡	姫路市千代田町	縄文～弥生
32	西延末遺跡	姫路市西延末	弥生
33	手柄山北丘古墳群	姫路市西延末	古墳
34	手柄山南丘古墳群	姫路市西延末	古墳
35	八反長遺跡	姫路市岡田	弥生
36	堂田遺跡	姫路市岡田	縄文～弥生
37	丁田遺跡	姫路市町坪・中地	弥生～古墳
38	豆腐町遺跡	姫路市豆腐町	弥生～平安
39	豊沢遺跡	姫路市豊沢町	弥生
40	姫路城城下町跡	姫路市本町	中世～近世
41	本町遺跡	姫路市総社本町	奈良
42	駅前町遺跡	姫路市駅前町	弥生～近世
43	朝日町遺跡	姫路市北条	弥生～奈良
44	神屋町遺跡	姫路市神屋町3丁目	弥生～平安
45	北条遺跡	姫路市北条	弥生～古墳
46	市之郷遺跡	姫路市市之郷	弥生～平安
47	阿保遺跡第１地点	姫路市阿保	平安～中世
48	阿保遺跡第２地点	姫路市阿保	弥生～中世
49	仁寿山古墳群	姫路市四郷町東阿保	古墳
50	梅ヶ枝墓地前古墳	姫路市北原	古墳
51	打越山古墳	姫路市北原	古墳
52	兼田丸山古墳	姫路市兼田	古墳
53	兼田古墳群	姫路市兼田	古墳
54	才田遺跡	姫路市北原	古墳・奈良
55	国府山城跡・甲山遺跡	姫路市飾磨区妻鹿	弥生～中世
56	甲山経塚	姫路市飾磨区妻鹿	中世
57	ヒジ倉遺跡	姫路市飾磨区阿成	古墳～中世
58	飾磨高等学校周辺遺跡	姫路市飾磨区妻鹿	弥生
59	御旅山古墳群	姫路市飾磨区妻鹿	古墳
60	南通り遺跡	姫路市飾磨区中島	平安～中世
61	西通り遺跡	姫路市飾磨区中島	古墳～中世
62	光明寺跡	姫路市飾磨区御幸	近世
63	構石田遺跡	姫路市飾磨区構	中世

跡は明確でなくなるが、北条遺跡・畑田遺跡では墓や掘立柱建物が検出されている。鎌倉時代に播磨守護所が加古川に置かれるようになり、播磨の中心を維持できなくなるが、黒田氏による初期姫路城跡そして羽柴秀吉によって播磨の中心地として復活し、次いで慶長５年（1600）池田輝政による姫路城跡建築・城下町整備によって完全たるものになる。城下町として近世を謳歌し、明治維新によって鉄道が敷設される。明治 21 年（1888）12 月に山陽鉄道会社によって兵庫から姫路まで開通している（同年６月兵庫明石間が先に開通）。その遺構が豆腐町遺跡などで確認されている。初代・２代目の機関車転車台や扇形車庫が調査されている。その後、周辺地域との合併などで増大し、平成８年には中核都市として指定され、改めて播磨の中心となった。文化財の観点からも姫路城が世界文化遺産となり、整備活用が図られ、兵庫県の文化財的なリーダーの位置を保っている。

船場川を下ると手柄山周辺には多くの遺跡が並んでいる。上流から村淵遺跡・橘詰遺跡・黒表遺跡・小山遺跡・生矢神社裏遺跡・竹の前遺跡・畑田遺跡と続く。畑田遺跡（旧船場川東区整遺跡第６地点）の対岸（西側）に長越遺跡は立地している。畑田遺跡は弥生時代中期から生活を営んでいる集落で長越

図９　長越遺跡Ⅰ土器出土状況

図10　壇場山古墳

遺跡と同時期にも大規模なムラを形成している。溝で囲まれた建物や大形の円形周溝墓も築かれている。長越遺跡より早くから生活をはじめ長期間続く集落である。銅鏃も出土している。橋詰遺跡なども早くから庄内式土器の出土が知られており、庄内期の集落が密集している地域である。小山遺跡は、この中では最も大きな集落で長い期間を通して生活しており、古墳時代まで継続している。初期須恵器も出土している。船場川西側の手柄山は独立丘陵で早くに開発されたことから、正式な調査は行われておらず、不分明な点が多い。弥生時代末の墳丘墓から古墳時代を通しての葬送地に利用されていたようである。鏡や埴輪なども出土している。手柄山南側に位置する竹の前遺跡は弥生中期から庄内期にかけての旧河道と溝が多く調査されており、多量の土器が出土している。龍を描いた絵画土器は興味深い。また、竪穴住居跡も複数検出され、洪水後も生活を続けている点が長越遺跡と異なっている。中世の掘立柱建物も検出されている。

長越遺跡は船場川の西側微高地に存在する。北側には遺跡が広がらず、東西方向もバイパス建設時の調査でほぼ明らかになっており、南側にのみ広がっていることが明らかであった。西行きのバイパス側道は十分な調査が行えなかったが、長越遺跡と同時期かやや古い集落が存在するようで、さらに南側に広がっていると予想されていた。それが今回調査した地点である。長越遺跡の西側は異なる微高地に郇東遺跡が存在する。長越遺跡と同時期の集落で銅鏃も出土している。有茎のえぐりの深いタイプである。長越遺跡でも２本出土しており、船場川東区整遺跡第６地点でも無茎の銅鏃が出土している。隣接した地域で銅鏃の出土が集中している。「播磨国風土記」では当遺跡周辺は飾磨郡伊和里とされており、宍粟郡伊和君が移住してきたと伝承されており、滑石製模造品から長越遺跡と伊和遺跡の関連が想起される。長越遺跡の東側は三宅の地名が残り、やはり風土記に出てくる飾磨御宅と考えられている。遺称地が三宅遺跡で奈良時代の遺物が散布している。長越遺跡でも奈良時代の墨書土器が存在し緑釉陶器が出土している。

三宅遺跡の東側市川を越えたところには、高地性集落である小富士山遺跡・仁寿山遺跡がそびえている。周辺では数少ない高地性集落で、近代には旗振り山としても活用されていた。周辺には阿保百穴や坂元古墳群・見野古墳群など後期古墳群が広がっている。前期古墳である御旅山３号墳は南東方向にあり、中期の奥山大塚は仁寿山の南側に、宮山古墳は仁寿山の北側に位置する。宮山古墳は５世紀後半の３基の竪穴式石室を埋葬主体とし、金製垂飾付き耳飾りや初期須恵器など豊富な副葬品が出土している。前記の市之郷遺跡との関連が考えられる。現状で間を市川が流れていることから、分離されがちであるが、本来の地形などを考慮すれば埋葬者と強く関係した集落であろうと考えられている。

長越遺跡の西側の水田地帯には微高地上に多くの遺跡が確認されている。これらは今里幾次・増田重信・木谷幸夫・松本正信・加藤史郎各氏らの努力の賜物である。邨東遺跡・中地天神遺跡・カスカエ遺跡・丁田遺跡・権現遺跡、そこから南西に向かって西田遺跡・五位田遺跡・タテノ遺跡・石ヤ田遺跡・加茂構居・桜ケ坪遺跡・栗木遺跡の各遺跡が確認されている。弥生時代後期から古墳時代の遺跡が多かったが、縄文晩期の甕も西田遺跡などで確認されている。中地天神遺跡は馬の埋葬土坑で知られており、(構)権現東遺跡では長越遺跡と類似する大溝が検出されている。この地域は姫路バイパス以外にも幹線道路や下水道工事、水尾川河川改修事業によって発掘調査が行われているが、未だ全体像が浮かんでこない。また、船場川東と同様に大井川周辺も土地区画整理事業が計画され、新たな事実も判明している。水尾川河川改修事業では権現遺跡・八反長遺跡・堂田遺跡が全面調査され、岡田遺跡・西庄遺跡で確認調査が実施されている。縄文時代晩期から弥生前期にかけて、弥生後期の土器がまとまって出土しており、八反長遺跡では木製品も多量に出土している。

長越遺跡周辺の船場川流域は庄内式土器が多数出土する地域というのが大きな特徴である。長越遺跡に代表される庄内甕の存在は特殊で大和・河内から導入され、この地で播磨産の庄内甕を生産している。庄内甕の存在は古墳時代初頭の播磨の位置付けを象徴するものと思われる。

図11　播磨国分寺跡

図12　豆腐町遺跡

Ⅲ　長越遺跡の遺構

検出した遺構は、竪穴住居跡 14 棟・落ち込み４基・土坑４基・溝 11 条・ピット数基と近世水路・旧河道である。調査面は１面で実施したが、遺構の時期は２時期あり、古墳時代初頭と近世から近代にかけての時期である。

近世の遺構は近世の水路と考えられる SR01 と耕作痕跡である。調査区南半に限られている。SR01 は幅 2.5m で北西から南東に向かって調査区を東西に走っており、検出した長さは 15m を測る。断面箱形で深さ 0.3m である。杭列が打ち込まれ、護岸用の板材も挟み込まれている。

水田関連の遺構は畦畔と鋤溝である。畦畔は大畦畔と思われるもので高さ 0.2m 前後、幅 0.6m を測る。鋤溝は原則的には南北方向であるが、不定方向のものも確認している。

調査区は 440㎡と狭小な幅 10m の細長い部分である。その北半が集落跡で竪穴住居跡が稠密に築かれている。南半が近世水路・水田を検出し、下層は旧河道である。

１.竪穴住居跡

14 棟検出しているが、切り合い関係が多く全体像がわかる住居跡は少ない。１棟としたが建て替えが認められるもの（SH02）もあり、面積の割りには多くの竪穴住居跡が確認されており、非常に密集した集落跡であることが判断できる。

SH01（図版３　巻頭図版３・４　写真図版９～ 12）

調査区北東隅南側の東壁沿いで検出した方形プランの竪穴住居跡で、調査区東側に延びていたが、一部拡張して調査した。焼失住居跡で炭化材が多く残っていた。全体は調査していない。高床部があるが、オーソドックスなプランではなく、複雑な形状をしていた。一応、２時期あり変化したと考えている。下面（SH01a）では南東辺を調査していないが、土質が変化している部分があり、そこに板材が置かれている（SH01b の南東辺になる）。南西辺近くには板材を止める小ピットがあり杭と思われる。この部分で空間を区切っているようで、板壁があったかもしれない。南西辺だけ壁溝を有しているのも特徴的である。南西辺中央に沿って土坑があり、中から壁肩部にかけて被熱している。通常の炉跡よりも工房跡の要素を感じる。径 0.4m、深さ 0.4m の不定円形である。その北側にも同形の円形土坑があるが、こちらは焼けておらず、深さは 0.5m と深く円礫を入れている。この２基の土坑を囲むように東西 1.4m、南北 1.15m を僅かに掘り窪めている。北西辺のみ全体を把握しており長さ 4.2m を測る。南西辺は 3.3 m、北東辺は 1.5m 調査している。北西辺沿いに高床部がある。低床部との差は３㎝前後と僅かであるが、北東辺に向かって段差部分に板材があり、板壁の可能性がある。幅 1.15m で南西辺中央の２基の土坑を囲う落ち込み肩部まで高床部は続いている。前記したように南東辺は区切っており、高床部になっていたかもしれない。低床部隅に２基のピットを確認しており、主柱穴と思われる。２基の心々間距離は 2.0m である。それ以外に高床部に３基、低床部に２基のピットがある。床面はいずれも強く焼けており、上下２面と考えない方が良い根拠となる。下面の炭化材は板材だけで、他は小片である。

上面（SH01b）は長さ 4.4m、幅 3.1m の長方形プランの竪穴住居跡で中央がやや弧状になる。炭化材が多数見られ、中央から放射状になっているものの、北西辺はその位置（板壁が）倒れた状況を示しているように思える。床面までの深さ 0.20m と浅い。高床部と低床部があり、比高５㎝前後である。

低床部は長さ2.55m、幅1.55mで、南西辺中央に方形の土坑を敷設する。南東辺のみ1.3mで他辺は1.0mの台形を呈し、深さはなく土質が変化しているだけで、上面に平石を据えている。

SH02（図版4　写真図版13）

調査区中央北側に位置し、調査区内で全貌がわかる住居跡の1つで長越遺跡Ⅲの中で最も規模が大きい。ほぼ同じ位置で南から北に縮小している。調査区内の他住居跡は別名称を与えたが、本住居跡は北辺を同じくしており、建て替えでなく単なる縮小（南辺の移動）の可能性が高いと思ったので、古い方をSH02a、新しい方をSH02bと報告する。古い遺構として下面にSD06があり、SH13を切っている。

SH02aは南側に大きいもので、壁溝が途絶えている。南辺5.2m、東辺6.4m、北辺5.2m、西辺5.9mを現況で測る。南西と北東隅は角張っているが、他の2隅は隅円になっている。床面の深さは0.1mと浅くSH02bと同じ高さである。南辺中央に土坑が築かれている。東西0.85m、南北0.55m、深さ0.18mである。長方形で底は丸くなっており、北側はSH02b壁溝に切られている。柱穴は明瞭でないが、南東隅に近いＰ4は主柱穴で新段階に利用したかと思われる。確実に古段階と出来る遺物はない。

SH02bは北辺と西辺は共有しているが、僅かに縮小している。南辺4.7m、東辺5.3m、北辺5.0m、西辺4.8mを現況で測る。中央で測ると東西5.1m、南北5.7mになる。幅0.2～0.3m深さ0.1mの壁溝を巡らせており、西辺は隅が丸くなっており、幅が狭くなっている。東辺中央に土坑を設けている。南北1.15m、東西0.6mの南側が狭い不定円形をしており、深さ0.15mである。焼土・炭は含まれない。南東隅は壁溝が切れており、その両端にピットが見られる。Ｐ4は古段階を利用したと思われ、ピットは心々間で1.1m離れており、入口かと思われる。床面中央は極端ではないが、一段下げられ低床部になっており溝も設けている。溝は幅・深さともに0.1mと小さいものである。その内側に主柱穴があり4本柱である。主柱穴は0.4mと深い。心々間距離すなわち低床部の規模は南辺2.5m、西辺2.6m、北辺2.85m、東辺2.1mで深さは0.1m前後と浅い。東辺は南から0.5mの部分から北西隅まで0.35m張り出していて入口に対応しているように見える。土器は低床部に多く見られた。

SH03（図版5　写真図版14）

SH02南側に位置し微高地縁辺に近い。SH06・SH12・SH14を切っている。南辺4.1m、東辺4.0m、北辺3.9m、西辺3.9mの隅円方形で、隅部の円形が多く中央で測ると南北4.95m、東西4.95mの方形になる。幅0.1～0.15m深さ0.1mの壁溝が巡る。南辺中央には壁溝から直交して幅0.2m、長さ1.3mに直線に溝が延びている。南東隅には東西1.2m、南北0.65mの不定方形の土坑が深さ0.2m掘られている。炭を含むが炉跡ではない。床面中央に4本柱穴があり主柱穴と思われ、その内側が一段低くなっている。心々間距離はすべて2.4mの正方形となる。低床部中央に10（いちまる）土坑が存在する。西側に東西0.45m、南北0.8m、深さ0.05mの不定方形があり、被熱し焼土・炭が確認される。東側に径0.4m、深さ0.35mの円形土坑がある。土器は低床部の方が多いが顕著ではなく、高床部からも出土している。

SH04（図版6　写真図版15・16）

調査区中央東側で検出され、SH06・SH12を切っている。やや歪な長方形プランである。深さ0.1m未満で残存状態の悪い遺構で、特に東側はかろうじて検出できた。南北4.3m、東西3.4mを測る。現況では西辺が短く、東辺は弧になっている。壁溝は検出していない。南東隅近くの南辺沿いに長径0.5m、短径0.3mの楕円形に焼土が認められた。上屋構造は4本柱と思われ、中央に土坑がある。残存度の割りには床面から多くの遺物が出土している。南東主柱穴の横には平石が置かれていた。

SH05（図版7　写真図版15）

調査区中央東壁沿いで検出している。南西コーナーを調査しており、北側を SD09 に切られている。残存長は南北 1.4m、東西 1.3m を測る。残存状況は悪く、深さ 0.1m である。壁溝は認められず、床面は平坦で、柱穴は確認していない。遺物は小片だけである。

SH06（図版 7　巻頭図版 5　写真図版 17 ～ 20）

調査区中央の微高地南端で、早い段階で築かれており、多くの遺構に切られている。西側は SH14・SH03 に、東側は SH04 に、上面は SD09・SD10 に切られている。唯一 SH12 を切っている。焼失住居で埋土全体に炭化材が広がっていた。平面形態は長方形で、南北 4.1m、東西 3.45m を測る。深さは最大で 0.25m である。ピットは 6 基あり、平石が 2 ヶ所置かれていた。南東部の平石と北辺コーナー部の 2 基のピットが主柱になると思われ、4 本柱の上屋と思われる。心々間の距離は 2.6m を測る。北側と南側のコーナー部に土器が置かれていたが、南側の土器を取り上げたところ、隅から 0.9m 離れたところに土坑を検出した。長径 0.65m、短径 0.5m の不定形で深さ 0.4m を測る。SH01 と似た隅に位置する深めの土坑である。中央にも円形土坑あり横に焼土･炭が広がっていたので10（いちまる）土坑の可能性が高い。炭化材は全域に散布していたが、集中していたのは北側隅から SH03 に切られる付近であった。SH03 に切られる手前の壁面には網代状の板壁を検出している。炭化物は隅まで延びている。対面する東壁にも炭化した板材を検出している。SH03 に切られた部分は高床部になっていた可能性があり、直交するように炭化した板材を確認している。高床部の板材であろうと思っており､高床部は南北 2.2m､東西 1.1 m になる。1 辺でなくコーナー部だけの高床部である。現状では板材幅の 0.1m 余りしか推定できない高さである。その他の炭化材も建築材ではあるが部位や本来の位置が推定できるほどは残っていない。

SH07（図版 8　写真図版 21）

微高地南西にあり、壁溝の一部のみが残存している竪穴住居跡である。東西 1.9m、南北 1.3m 残っている。壁溝は幅 0.15 ～ 0.2m で最大の深さ 0.15m を測る。かろうじて壁溝だけが残った住居跡で、遺物も出土しておらず床面も残存しているか不明である。南側・西側に延びていることが確実であり、住居跡の規模は不明である。

SH08（図版 8　写真図版 21・22）

調査区中央東壁沿いにあり、南側を SD09 に切られている。SH05 にも切られている可能性が高い。SD09 の南側に床面が検出されていないことから、現況に近い部分に南辺があったものと思われる。床面からは比較的多く土器が出土している。壁溝は認められず、明確な柱穴も検出していない。南北 2.45 m、東西 1.7m、深さ 0.05m を測る。

SH09（図版 8　写真図版 22・23）

調査区北側にあり、SH10 の上で SH11 を切っている。床面はほとんど残存しておらず、壁溝のみかろうじて残っていた。西側は幅 0.2m で全長 3.3m あり、南北が隅円になろうとしている。東側の壁溝は SX02 以南しか確認されていないが、SX02 を先に調査したことのよるものである。幅 0.15m で検出長 0.8m を測る。東西溝の間隔は 4.0m あり、この数値が東西長と考えている。南北は 3.4m 床面を検出しており、多少延びるかもしれない。壁溝を有する残存状態の悪い住居跡である。

SH10（図版 9　写真図版 22 ～ 24）

調査区北側中央にあり、全体像のわかる中で最も古い竪穴住居跡である。南北方向に主軸を有し、SH11 に切られ、SH09・SD03 が上面に築かれている。最大で 0.6m 掘り下げられた残存状態の良い住居跡である。南辺 4.45m、東辺 3.55m、北辺３．９m、西辺 3.9m の歪な方形プランで、中央で測ると、

東西 4.5m、南北 4.15m になる。南西部のみ壁溝が残っている。幅 0.1m、深さ 0.05 ～ 0.1m を測る。南辺沿い中央に土坑が存在する。東西 0.6m、南北 0.4m の楕円形で深さ 0.2m である。埋没時の遺構を SX03 として調査した。一気に埋めた土で炭も混じっている。その下面で庄内甕など形のある土器が出土している。床面からは口縁部だけが出土しており、古相を示しそうである。

SH11（図版 10　写真図版 22・24・25）

調査区北壁沿いで検出した住居跡で SH10 の上にあり、SH09 に南西部を切られている。底面で SD11 を確認した。調査段階で SX01・SX02 として調査したものであるが、最終的に下げたところ住居跡であると判明した。SH10 を先に掘り下げたので南西部分を欠いているが、調査時の判断ミスである。東西 5.1m で北側は調査区外に延びており、調査した長さは南北 2.65m である。深さは 0.2 ～ 0.25m とやや深い。南辺中央に土坑が認められる。東西 1.1m、南北 0.6m のやや歪な方形で、深さは床面から 0.2m を測る。中央に位置するピット（P 2）からは焼土が出土している。西側のピットは主柱穴かと思われ、長径 0.3m、短径 0.25m、深さ 0.3m を測る。柱痕跡を確認している。4 本柱の南西部のみ検出したと考えている。遺物は床面からは少なく小片である。埋没段階で SX01 から讃岐からの壺口縁部が出土している。

SH12（図版 11　写真図版 17）

調査区中央南側にあり、SH06・SH04・SH03 に切られている。南東コーナーのみ検出しており、残存長は東西 2.1m、南北 0.95m、深さ 0.15m を測る。

SH13（図版 11　写真図版 25）

調査区中央に位置し、SH02 に切られた住居跡である。竪穴住居跡の南東隅だけが残っている。主軸方向は SH10 と同じで南北を向いている。南北 3.1m、東西 0.7m 残存している。隅円方形である。コーナーから 1.1m のところに土坑が東辺に沿って設けられている。長径 1.1m、短径 0.7m の楕円形で不明瞭な 2 段になっている。深さは肩部から 0.4m あり、推定床面からは 0.2m 掘り込まれている。小片しか出土していない。

SH14（図版 5　写真図版 14）

SH03 に切られており、SH06・SH12 を切っている微高地縁辺部近くに位置している。SH03 より一回り大きくやや軸を振っている。北辺は 4.8m あり、東辺は 2.4m、西辺は 2.3m 残存している。床面の残存長は 2.8m である。深さ 0.1m の方形プランで壁溝は認められない。

2. 落ち込み

SX01・SX02

調査区北端で検出した遺構で並んでおり別の遺構として調査したが、最終的に同一遺構と判断した。SH11 と改称し、埋没段階の違いと判断した。

SX03

SX02 に切られた遺構で落ち込みとしたが、竪穴住居跡の廃棄段階の面であることが判明した。下面で柱穴が検出され SH10 とした。その上面の遺構である。比較的まとまって遺物が出土している。

SX04

微高地南端で検出した方形の遺構である。南側は旧河道肩部になっている。南北 3.0m、東西 0.5m、深さ 0.2m を測る。床面に凹凸があることと柱穴・壁溝などを検出していないので落ち込みとしたが、竪穴住居跡の可能性もある。

3. 土坑（図版 11・12　写真図版 26）

住居跡内の土坑を除いて 4 基検出しているが性格のわかる土坑はない。

SK01

旧河道肩部で検出している。最大径 96cm、深さ 18cmの不定形プランの土坑である。土師器小片が数点出土しているだけで図化したのは高杯 1 点である。

SK02

調査区中央東側で土坑と溝が集中して検出されている。その北端に位置しており、SD10 に南東部分を切られている。短径 80cmで長径は不明で残存長 57cmの楕円形か隅円方形プランである。底面は平たく深さ 12cmを測る。土師器が数点出土している。

SK03

SK02 の東側に位置する隅円長方形の土坑である。主軸は N30° W で底は平坦であるが、北側の方が僅かに低くなっている。短辺 88cm、長辺 146cm、深さ 14cmを測る。底ではなく、埋土に礫とともに土師器がやや多く入れられている。ただ小片が多く、２点しか図化していない。炭も含まれ、地山土もブロックで入っており、人為的に埋められている。

SK04

SK03 の南側にあり、SD09 に北側を切られている。平面プランは隅円方形と思われ、半分前後が残存しているようである。幅 55cmで長辺の残存長 36cmで深さは 14cmを測る。底面はやはり平坦である。土師器小片が出土しており、SK02 ～ 04 は同時期の同じ性格の遺構と思われる。埋土はオリーブ黒シルト質極細砂で 1 層である。

4. 溝（図版 13・14　写真図版 26・27）

18 条検出しているが､小規模なものが大半である。下記の溝以外は幅 0.2m､深さ 0.1m 前後のもので、長さは２m を越えるものはない。

SD01

調査区北西隅で検出した幅 0.3m の直線に延びる溝で、長さ 1.85m あり調査区北側に続いている。深さは 0.1 ～ 0.2m と浅い。

SD03

SH10 の西肩部上面に掘られた南北方向の溝で長さ 1.6m と短い。北側は幅 0.2m で細く尖って終結する。南側の方の幅が広く最大で 0.38m を測る。

SD04

SD03 に切られた直線的に延びる溝で主軸は SD01 と同じ N10° W である。幅 0.14 ～ 0.2m と細く、長さ 1.9m を測る。

SD06

調査区北東隅から西壁中央部に向かう溝で、人工の溝と考えている。主軸は N40° E で直線に延びており、調査区外両方に続いている。調査区内で 21.5m の直線に走る溝である。底は全体的には丸く凹凸のある部分もあるが、平坦で台形の断面のところもある。底面のレベルはほとんど変化なく、逆に中央付近 SH02 北側付近がやや深くなっている。出土遺物は少なく小破片が主体である。深さ 0.4m 前後。

SD08

微高地南端にある溝でN40° EとSD06と同じ方位を採る。旧河道肩部手前で終わっており、流れ込んではいない。幅0.4m、長さ3.8mを測る。深さは0.15～0.25mと浅く底は平坦である。延長上にSD10があり、同一の溝かもしれない。

SD09

調査区中央東側で旧河道肩部北側に位置する溝で弧を描いている。幅0.3～0.45mを測る断面浅いU字形の溝である。調査区東側に延びており、中央をSD10に切られている。SH05･SH06･SK04を切っている。東から弧状で南に延びる溝で全長7.5mを測る。溝の中では最も多くの遺物を保有している。土師器に限られ13点図化している。今回調査した遺構の中では時期は新しい。

SD10

調査区中央にあり北東から南西に流れる溝で、主軸はN50° EでSD06などに近いがやや東に強く振っている。長さ4.6m、幅0.4m前後、深さ0.1mの直線的な溝である。北側の方が細くなっているが、残存状況の差かもしれない。

SD11

調査区北端にあり、今回調査した中で最も古い遺構である。平面的には上にSD06・SH11（SX01）があり、その底面で検出したものである。SD06から直交方向から北側に弧を描いて延びている人工の溝である。最大幅1.1mで調査した長さ4.2mを測る。深さは上面の遺構底から0.1～0.2mであるが、本来の遺構面からだと0.3mはあったろうと思われる。遺物はほとんど出土していない。

5.旧河道

上層に近世の水路SR01があり、下層に調査区南半全体に位置する旧河道がある。

SR01（図版12　写真図版27）

北東から南西方向に流れるもので、肩部に杭を打ち込み護岸施設を設けている。主軸はN45° Eを採る。西側肩部に杭を打ち板材を挟み、岸を補強している。幅1.9mで深さ0.4mを測る。肩部はやや崩れているが、断面形は方形である。シルト質極細砂層が堆積しており、グライ化している。堆積土中央付近に有機質を含む層があり、溝底と思われる。現状で長さ16m直線に延びており、調査区外に延びている。南西部は一部削平されており、良好には残存していない。

遺物は土師器が多く、流路の時期を示すものは陶磁器類と自然木で出土数は少ない。18世紀頃の流路と思われ、近代以降に埋没したと思われる。現在の地割りと同じ方位である。

旧河道（図版12　写真図版28）

調査区南半にあり、大きく２時期に分かれる。下層（暗灰砂）の流路方向は判然としないが、上層は北東から南西に流れていると思われる。微高地の東側を流れており、肩部まで遺構が築かれている。層は細かく分かれ、複雑に氾濫堆積をしていたことが理解される。上層の南肩は調査区南端から４ｍのところで確認している。この部分で測ると幅14.5mになる。現在の船場川旧河道と考えても良い河道である。下層の河道は上層より広いものであるが、時期的に南北の肩が同時期かは断定できない。複数時期の氾濫による河道と思われる。北側は竪穴住居跡群の下に延びている。ただ、出土土器から大きな時期差は認められず、短期間のものである。長越遺跡Ⅱや畑田遺跡のように弥生土器もほとんど含まないので周辺の集落も短期間のものと思われる。一部は長越遺跡Ⅰの大溝と考えている。

Ⅳ　長越遺跡の遺物

（1）土器

住居跡出土の土器は全体的に保存状態が悪く磨滅している。同様に落ち込みや浅い溝出土土器の多くも残存状態は良好とは言えない。それに対して旧河道出土土器の多くは保存状態が良い。

1.住居跡出土遺物

SH01 出土遺物（1～7）

1 は二重口縁壺口縁部で、薄手に仕上げられ、口縁部は外反する。擬口縁部上面に竹管文付きの円形浮文を付ける。径1.4cmと大きめの浮文である。二重口縁の変化点より下に垂れている。外面は灰褐で、内面は橙を呈する。ヨコナデで仕上げている。*2* は丸底で球形の体部をもつ小型壺である。全体に歪で腹径で最大11.5cm最小10.6cm、頸部径で最大7.0cm最小6.5cmと差がある。内面はナデ仕上げで灰白、外面はヘラミガキで仕上げられ灰白～黄灰をしている。外面下半の器表に凹凸があることからタタキが施されていた可能性がある。器壁はやや薄めで、底部がやや厚くなっている。底部付近に黒斑がある。*3* は外反する甕口縁部で端部は内側につまむように仕上げている。ヨコナデが施され、内面は浅黄橙、外面は灰白である。*4* は甕底部である。底部再成形で粘土紐の継ぎ目残り中央が上げ底になっている。外面は右上がりのタタキで灰白である。内面は板ナデと思われ灰白である。底面はナデ仕上げで平滑になっている。*5* は底部再成形の甕底部でユビ成形からナデ仕上げをしている。不安定な平底でタタキ底かもしれない。内面赤灰、外面明赤褐で粗砂含む。*6* は椀形高杯で裾部を欠いている。内湾し端部丸い杯部で口径11.3cmを測る。ヨコナデ仕上げで内面にはミガキが見られる。筒部は中実で裾部は外反している。外面はミガキである。内面は灰白で一部黒褐、外面灰白～橙をしている。*7* は一応大型の鉢口縁部としておく。甑の可能性もある。直立ぎみで端部は内側につまみ出している。内面には粘土紐が認められ、外面はハケ整形である。色調は外面がにぶい黄橙、内面が灰白である。

SH02 出土遺物（8～54）

8 は壺口縁部で外傾し途中で屈曲してやや開いて丸い端部になる。内面灰白で外面にぶい橙である。外面に粘土紐継ぎ目見られ､斜め方向のハケ整形からヨコナデを施す。内面はナデからヨコナデである。頸部は明瞭な稜線を有してから体部に続く。内面はハケ整形である。*9* も外傾する口縁部を持つ壺である。端部近くでやや開き端部は尖りぎみに薄くなり丸く納める。内面は灰白、外面は淡黄橙で、ヨコナデ仕上げ。*10* は二重口縁壺の小片である。山陰系で内外面ともににぶい橙を呈する。頸部から短く外反し甘い稜線を有して緩やかに外反する。端部は丸く、全体にヨコナデである。*11* は二重口縁壺の口縁部である。頸部から外傾し屈曲して擬口縁部となり内傾し端部近くで反る形態をする。端部は丸くヨコナデ仕上げ。灰白で粗砂多く含んでいる。表面磨滅顕著。*12* は前代の遺物で、弥生前期壺口縁部である。外反するもので端部は角張りぎみである。内面には粘土紐継ぎ目残り、内外面とも灰白でナデ仕上げである。*13* は浅い径が大きめの鉢と思われるが、断定出来ない。外傾し端部角張る。外面はにぶい黄橙でハケ整形している。波状文のように施文しているよう見える。内面はユビおさえが見られ灰白である。*14* ～ *22* は底部である。*14* は丸底で内湾する体部に続く。内面は褐灰でユビ成形からナデ整形。外面は浅黄橙～橙でハケ整形している。タタキ成形されていたかもしれない。黒斑が認められる。*15*

は左上がりのタタキ成形の甕で上げ底ぎみになっている。底面はナデで丁寧に仕上げている。内面もナデ仕上げである。内面の色調は灰白、外面はにぶい黄橙～褐灰を示す。*16* は器壁の薄い平底でやや上げ底になっている。突出平底で、内面は黄灰、外面はにぶい黄橙である。底面はナデ仕上げで、内面はくもの巣状のハケ整形が見られる。外面には黒斑があり、細砂含む。*17* は不安定な小さな平底で体部は内湾する。一応甕底部としたが、器壁が薄く端部近くの可能性が高く鉢かもしれない。底面には木葉痕が見られる。ユビ成形からナデ仕上げである。内面は褐灰で外面はにぶい黄橙である。*18* は突出平底で、内面は灰白、外面は褐灰である。ユビ成形ののち外面はハケ整形、内面・底面はナデ仕上げである。底面に木葉痕が見られる。*19* は小型の甕底部で上げ底になっている。底部再成形でタタキ底である。内面はユビ成形からナデで灰白である。外面はタタキからナデ仕上げしており、やはり灰白で粗砂含む。黒斑がある。*20* は不安定な平底で強く焼けている。外面はタタキからナデでにぶい黄橙、内面はハケ整形でにぶい橙をしている。底面はナデ調整を施し、粗砂含む。*21* は尖り気味の丸底で内面はナデで灰白～にぶい黄橙、外面はハケ整形からナデを施し灰白～浅黄橙である。底部は器壁 1.4㎝とやや厚手である。内面には有機質が付着している。*22* は上げ底の底部で底面も丁寧にナデで調整している。内外面ともにナデ整形で浅黄橙を呈している。甕底部であろう。*23* はミニチュアかとも思われる小型壺である。口縁部を欠いており、平底から内湾し体部中位に最大腹径 8.4㎝を有する。頸部の内面は甘い稜線で絞り目が見られる。内面はユビ成形からナデ、外面は左上がりのタタキからナデを加える。内外面ともに黄灰で、器壁は厚めである。*24* もミニチュアで平底から内湾する体部になる。ユビ成形からナデている。内面灰白、外面にぶい黄橙で粗砂含んでいる。黒斑が見られる。底部が大きめである。*25* は口縁部を欠いた二重口縁壺である。短い頸部から内湾する体部に続く。内外面とも灰白で、内面はヘラケズリ、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。*26* ～ *39* は甕口縁部である。*26* は外面タタキ成形ののち口縁部を折り曲げて形成している。タタキが縦方向に残っている。ヨコナデで仕上げている。稜線は甘く外反している。内面は浅黄橙、外面はにぶい黄橙である。*27* は外反しており端部は尖っている。内面の稜線はシャープである。ヨコナデ仕上げで化粧土を塗布している。内面は灰白～褐灰、外面は浅黄橙～にぶい橙である。*28* は内傾する体部から外反する口縁部で端部は丸い。外面は右上がりのタタキでにぶい黄橙、内面はナデ調整で褐灰、口縁部はヨコナデである。*29* は内外面とも浅黄橙で、内傾する体部から明瞭な稜線を持たずに外反する口縁部になる。中央部は厚く端部は薄く尖り気味である。体部外面はハケ整形、内面はナデである。*30* ～ *34* は外傾する口縁部で端部をつまみ出している。庄内甕と思われる口縁部である。*30* は内外面とも灰白を呈しヨコナデで仕上げている。器壁薄く、端部肥厚ぎみである。*31* は外反ぎみで端部は肥厚している。内面の稜線は鋭い。色調は浅黄橙～灰白で、外面はタタキ、内面はヘラケズリである。口縁部はヨコナデで端部は内側につまみ出し面となっている。*32* はくの字で内面の稜線は鋭く突出している。内面ハケ整形ののち全体にヨコナデで仕上げている。端部は僅かに内側につまみ出し端面となっている。内面はにぶい黄橙、外面は黒である。*33* はやや大型で口径 17.2㎝を測る。端部は尖っており、内面の稜線は甘い。内外面ともに灰白でヨコナデ仕上げ。*34* は内外面ともに灰黄でヨコナデ仕上げ。薄く直線的に延び端部肥厚し部分的に面になっている。*35*・*36* は内湾ぎみの口縁部で端部が外側につまみ出されている。頸部の稜線は甘い。*35* は内面褐灰、外面浅黄橙でヨコナデ仕上げ。*36* は器壁薄くシャープな印象を受ける。角度は緩やかに延び端部は丸い。色調は内面灰白、外面浅黄橙である。*37* も内湾ぎみの口縁部であるがつまみ出さず、端部は丸く納める。ヨコナデ仕上げで、色調は浅黄橙～にぶい橙を呈する。*38* は内湾ぎみであるが途中で

変化があり、頸部の非常に短い二重口縁状になっており、端部丸い。頸部は外反し体部は外傾する。内面はヘラケズリと思われる。口縁部はヨコナデで、内面橙、外面にぶい橙をしている。*39* は口径が最大径となる甕口縁部で、内湾する体部から外反する口縁部で端部丸い。体部はナデ整形しているが、内面は強く施すことによって段が出来ている。内面は浅黄橙、外面灰白である。*40* は高杯杯部で屈曲しながら外傾している。外面に明瞭な稜線を持たないタイプと思われ、端部は丸い。内面は浅黄橙でヘラミガキがなされている。外面から端部はヨコナデで灰白である。外面下端に１ヶ所籾痕が見られる。*41* は高杯脚部で外傾しており､端部は尖っている。杯部との接合部で剥がれている。表面磨滅しているが、ナデ調整かと思われる。色調は橙～浅黄で細砂含む。３方透孔で径１㎝前後である。*42* も高杯脚部で外傾している。３方透孔かと思われる。内外面とも褐灰でハケ整形からナデている。*43* も高杯脚部で裾部を欠いている。外傾し裾広がりになろうと思われる。色調は灰白で内面には絞り目が見られる。杯部との接合部で剥がれており､接合面を歯車状にギザギザにしている。*44* は脚台で甕のものであろうか。外反し端部丸い。ヨコナデ仕上げで外面の一部にヘラミガキが見られる。灰白で細砂含み、底は平坦である。*45*・*46* は製塩土器である。脚台Ⅳ式の脚台部である。*45* はやや器高が高めで外傾する。灰白～にぶい橙でナデ整形であろう。器壁は薄く仕上げている。*46* は僅かに外反す脚台で端部は尖っている。ユビ成形からナデ整形している。内面はにぶい橙、外面は淡赤橙である。*47* は鼓形器台で突帯が残っている。内湾する上台で端部は面になり肥厚ぎみである。にぶい橙で細砂含む。ヨコナデで外面はヘラミガキである。下台内面はヘラケズリが施されている。*48*・*49* は器台である。*48* は上台部で裾部との接合部で割れている。内湾ぎみで端部尖る。内面浅黄橙、外面橙で、ヨコナデからナデ調整を加える。*49* は下台部で直線的に広がり端部尖る。色調は褐灰～にぶい黄橙で器肉は黒褐である。４方透孔があり、内面は板ナデ、外面は横方向のヘラミガキがなされる。

SH03 出土土器（50 ～ 54）

50 は甕口縁部で外傾し端部丸い。頸部内面の稜線は余り鋭くない。灰白でヨコナデ仕上げ。*51* は壺口縁部で外傾するが直線でなく屈曲し端部丸い。ヨコナデで、色調は内面浅黄橙、外面灰白である。*52*・*53* は鉢で、*52* は椀形で内湾する口縁部で端部丸い。丸底で粘土紐が看取される。内面灰白、外面浅黄橙でハケ整形からナデ調整している。*53* は分割成形した甕底部に似る内湾する浅いものである。端部は丸く丸底である。灰白で表面磨滅しているが、ハケ整形かと思われる。粘土紐も観察できる。*54* は器台で、下台部の破片で端部を欠く。直線的に広がり４方透孔である。内面は灰黄褐で、ヘラケズリののちハケ整形しナデで仕上げている。外面はにぶい黄橙でヘラミガキがなされている。金雲母を多く含み河内からの搬入品である。２次焼成を受けている。

SH04 出土土器（55 ～ 68）

55 は甕でほぼ完形である。くの字口縁でやや外反し端部肥厚ぎみに丸い。体部は下膨れぎみで長胴である。小さな上げ底となる平底に続く。体部は右上がりのタタキで分割成形である。接合部を中心にナデが見られる。内面は板ナデで底には工具痕が見られる。底面もナデで、口縁部はヨコナデである。灰白～黒で砂粒僅かに含む。*56* は半分以上残存している甕で小さな平底から内湾する体部で長胴ぎみで頸部に続く。頸部内面の稜線は甘く､口縁部は外反し端部角張る。色調は灰白～黒で､内面の方が黒っぽい。外面は右上がりのタタキ成形ののち上半はハケ整形し、全体にナデ仕上げである。内面はユビ成形からヘラケズリののちナデで仕上げる。粘土紐痕が残っている。口縁部はヨコナデである。外面全体に煤・有機質が付着している。*57* は外反する口縁部で端部は丸く刻み目が施されている。内面はハケ

整形がなされ、全体にヨコナデである。頸部内面の稜線は鋭く、体部は内湾している。平行タタキで、内面はユビ成形からハケ整形をし板ナデ調整を行う。にぶい黄橙で細砂含む。刻み目の間隔広く単位がありそうである。刻み目があるが淡路ではないような気がする。*58* は小さな平底から球形の体部になり。口縁部は短く外反し端部丸い。にぶい黄橙～褐灰で細砂含む。内面は縦方向のヘラケズリで上半は板ナデで消している。外面は右上がりのタタキから縦方向のハケ整形を行う。球形を示す新しい傾向の割りには上半の器壁がやや厚い。口縁部はヨコナデである。*59* ～ *61* は庄内甕である。頸部内面の稜線は *59*・*60* は鋭いが、*61* はやや甘くなっている。*59* は体部内面ヘラケズリで口縁部は内外ともハケ整形からヨコナデである。灰白で口縁部は直線的に延び端部は内側につまむようにして端面となっている。*60* は口縁部外反ぎみで端部肥厚ぎみにつまみ出している。ヨコナデ仕上げで、体部は内面ヘラケズリで灰白、外面はハケ整形でにぶい黄橙である。*61* は緩やかに屈曲して外傾する。端部は内側につまみ出し沈線状となった端面になっている。*62* は讃岐から搬入された甕である。平底から内湾する体部で肩部は張っている。頸部内面の稜線は鋭く短く外傾する口縁部になる。端部は上方につまみ上げ端面になっている。内面は黄褐、外面は暗灰黄で細砂含む。内面はユビ成形からヘラケズリで指圧痕明瞭である。外面は縦方向のハケ整形で底部近くはヘラミガキで仕上げている。口縁部はヨコナデである。*63* は内湾する体部の破片であるが、外面に木葉痕が見られる。粘土紐が残りナデ仕上げである。にぶい黄橙～褐灰を呈する。*64* ～ *66* は底部である。*64* は上げ底で内湾する体部に続く。ドーナツ状になっている。内面は灰黄でユビ成形から板ナデと思われ工具痕が残る。外面は灰白でタタキ成形からナデである。*65* は突出平底で内湾する体部になる。内面は灰白でナデ､外面はユビ成形からハケ整形で褐灰をしている。*66* は僅かに上げ底となる古相を示す底部である。前代のものと思われる。体部は外反しタタキをナデ整形している。にぶい橙を呈し、粗砂を含む。内面はにぶい黄橙でナデである。底面もナデ調整で黒斑がある。*67* は脚台である。外反し端部丸い。器高は低く、ユビ成形からナデ整形で、外面はミガキを施す。体部内面は粗いハケが見られる。灰白で粗砂含む。*68* は手焙り形土器である。作りは丁寧とは言えない。手捏ねに近く、ユビ成形から板ナデ・ナデ整形である。粘土紐も明瞭に看取される。平底から球形になり、上半を窓状に開け周囲に低い鍔を付けている。黄灰～灰白を示し、退化した形式である。

SH06 出土土器（69 ～ 90）

69 は外反ぎみに広がる口縁部で端部は外側に尖る。壺と思われる。ハケ整形ののちヨコナデで仕上げる。内面は褐灰～にぶい黄橙、外面は黒～にぶい黄橙で黒斑がある。*70* も同タイプの壺口縁部で外反し端部丸い。褐灰～浅黄橙でヨコナデである。粘土紐明瞭に残る。*71* は二重口縁壺の口縁部破片である。稜線を持って外傾し端部尖る。口縁部下端に竹管文付きの円形浮文を配置する。磨滅しており、内面黄灰、外面灰白をしている。*72* は二重口縁でヨコナデである。甕かと思われ、山陰の形状をしている。明褐灰で細砂含む。*73* も同様の山陰系の甕口縁部である。強いヨコナデが施され､擬凹線状になっている。内面はにぶい橙、外面は橙である。*74* は小さな平底から丸みのある倒卵形の体部に続く大形土器である。二重口縁となる壺と思われる。内面はにぶい橙～黒褐でユビ成形からハケ整形し板ナデ・ナデ調整をする。外面はにぶい橙～褐灰で水平方向のタタキからハケ整形を行う。ハケには精粗２種がある。内面に籾跡と思われる痕跡がある。*75* ～ *78* は甕である。*75* はくの字口縁で頸部内面の稜線は甘い。体部は内湾しナデ仕上げである。口縁部はヨコナデで器壁は厚めで端部は尖る。内面はにぶい赤褐で外面は明赤褐で粗砂含む。*76* は口縁部を折り曲げて成形しており、端部に凹凸が残っている。くの字で内面の稜線は甘く、端部は丸い。内面灰白、外面にぶい橙でヨコナデで仕上げている。*77* は外傾

する口縁部で端部は丸く、外面に波状文が施されている。*78* はやや底が残る尖り底から内湾し、ほぼ器高の中位に最大腹径 21.8㎝を有する。頸部内面の稜線は鋭く、口縁部はやや外反し端部は丸い。外面は灰白～明赤灰で右上がりのタタキからハケ整形する。内面は灰白～黒でユビ成形からヘラケズリのちハケ整形している。口縁部はヨコナデで端部は端面になっている庄内甕である。内面には炭化物が付着し、全体に強く焼け赤変している。*79* ～ *83* は底部である。*79* は底部再成形で不安定な平底で体部は内湾する。内面はナデで黄灰、外面はにぶい橙で右上がりのタタキからナデを施す。底面もナデである。*80* も底部再成形で底面は平坦で木葉痕が見られる。色調は黄灰～黒褐で粗砂含む。内面は板ナデで、外面は細かいタタキからナデ仕上げである。ナデは丁寧でミガキ状になっている。*81* も底部再成形で体部は緩やかに内湾し低めである。内面は黒褐でナデ､外面は灰白～黒でタタキから丁寧なナデ仕上げ。*82* も底部再成形で底面はナデで中央が凹んでいる。緩やかに内湾する体部で、内面はにぶい黄橙を示し板ナデと思われ工具痕が残っている。外面は右上がりのタタキで褐灰である。*83* は平底から外傾しており、底面はやや上げ底になる。灰白でナデ仕上げである。底面にはケズリが見られる。*84* は鉢か椀形高杯杯部である。内湾し端部尖っている。表面磨滅著しく、成形技法は明らかでない。内面はハケ整形かと思われ、明褐灰～にぶい橙をしている。外面はにぶい橙～褐灰で粗砂含む。２次焼成を受けている。*85* は小型丸底壺である。僅かに残る底から内湾する体部で肩が張る。頸部内面の稜線は鋭く口縁部は外傾し端部尖る。ユビ成形からナデであるが磨滅顕著。内外面ともに化粧土塗布したと思われる。橙～黄橙で器肉は黄灰で、胎土は精良である。器壁も薄く仕上げられた精製土器である。*86* は上げ底から内湾する体部で端部丸い鉢である。強く焼けていることから表面剥離している。底部はユビ成形で作り出し側部に指圧痕が見られる。底面はナデで、口縁部はヨコナデである。色調は赤橙で粗砂含む。黒斑が認められる。*87* は平底から内湾し端部外側に尖る鉢である。内面と底面はナデで黄灰、外面はタタキからナデ仕上げで灰白をしている。黒斑があり､口縁部はヨコナデである。*88･89* は高杯脚部で、杯部との接合部で割れている。*88* の器高は高めで外傾している。４方透孔で径は小さめで高い位置にある。灰白～黒で、内面はナデ、外面はナデから細かいミガキである。*89* は外反ぎみの脚部で残存部端に透孔があるが､個数･大きさは不明である。灰白でナデ仕上げである。*90* は椀形高杯で裾部を欠く。中実の筒部で内側には串を突き刺したものと思われる。灰白～黄灰で器表に凹凸あるもののミガキがなされている。筒部は外傾し内湾ぎみの裾部に続く。４方透孔となる径 0.7㎝の孔がある。

SH05 出土遺物（91 ～ 94）

91 は壺口縁部で内湾する体部から外傾する口縁部になり端部丸い。頸部には粘土紐の継ぎ目明瞭で、体部側は一段凹んでいる。内面は灰白でハケ整形からナデてからヨコナデをしている。外面も同様で灰白～にぶい黄橙をしている。端部周辺に有機質付着している。*92* は甕底部で小さいことからミニチュアかもしれない。内外面灰白で比較的胎土は良好である。ナデ仕上げで内面は一部ミガキがなされているようにも見える。小さな平底である。*93* は脚台Ⅳ式の製塩土器脚台である。やや厚めの底部から外反ぎみに延びる脚台でナデ仕上げしている。内面は灰白～黄灰で､外面は灰白である。粗砂含んでいる。*94* は小さめの器台である。上台は内湾し端部を上方につまみ上げて丸い端部にしている。筒部は中実で、下台部は内湾ぎみに広がり端部丸い。４方透孔がある。内面は浅黄橙～赤橙で､外面は灰白～橙である。全体的にヨコナデを施し、上台部のみナデで仕上げる。

SH08 出土遺物（*95* ～ *100*）

95 は甕で球形の体部から外反する口縁部で端部は内側に尖っている。内面はハケ整形ののちナデ仕

上げで赤橙～にぶい黄橙を呈する。外面はタタキからハケ整形で赤褐である。強く被熱しており表面剥離している。*96* も甕口縁部でくの字で端面に沈線を有している。体部内面は赤橙～灰白でヘラケズリのままで、粘土紐明瞭に残る。外面は赤橙～浅赤橙で右上がりのタタキである。頸部内面の稜線は余り鋭くなく、口縁部は外傾し端部は上方につまみ出す。*97*・*98* は底部で、*97* は僅かに上げ底となる。体部は外傾し､内外面ともハケ整形からナデを施す。色調は灰白で粗砂含む。底面は強いナデが見られる。*98* は僅かに残る平底で壺の可能性が高い。内湾する下膨れの体部で、内面は灰白でヘラケズリである。絞り目状になっている。外面はにぶい黄橙でハケ整形である。*99* は小型丸底壺で外傾し端部尖る口縁部から内湾する球形の体部になる。丸底で、口縁部はヨコナデである。内面は灰白でユビ成形からナデ仕上げ、外面は灰白～黄灰で水平方向のタタキからハケ整形を行う。器高 10.8㎝であるが、最大腹径 12.2㎝と大きめである。*100* は椀形高杯で、内湾する杯部で端部は丸い。内外面ともヘラミガキと思われる。灰白で少量の細砂を含む。筒部は中実で外面はヘラミガキである。脚部は内湾しているがほとんど残存していない。

SH10 出土遺物（101・102）

101 は変化の少ない二重口縁となる甕口縁部である。短く屈曲する頸部から短く外傾し端部肥厚ぎみである。灰白で粗砂含みヨコナデ仕上げ。形態は北近畿か丹波系を示すが胎土は地元のものである。

102 も短く二重口縁となる甕である。頸部以下を欠いている。短く外傾し変化点を持って外反する口縁部で端部丸い。丹波系。

SH10 上層出土遺物（110 ～ 124）調査時に SX03 として調査したもので、下層調査時に住居跡に変更したことから、上層遺物として取り扱う。

110 は外反する壺口縁部で端部は丸く納めているが、やや上方につまんでいる。浅黄橙で細砂と小石粒少量含む。体部内面はナデ、口縁部内面はハケ整形で、外面はヨコナデである。*111* は二重口縁壺の頸部で、直立する頸部から水平に近く外傾し変化するものである。外面には板ナデが施され、工具痕が見られる。全体にヨコナデ仕上げで、橙を呈し粗砂少量含んでいる。*112* ～ *117* は甕である。*112* ～ *116* は庄内甕で *117* は布留傾向甕である。*112* は内傾する体部から甘い頸部内面稜線で外傾し端部角張りぎみである。口縁部中央は外面に膨らんでいる。灰黄褐～にぶい黄橙で内面はナデ、外面・端部はヨコナデである。磨滅著しい。*113* はくの字で内面稜線はやや鈍い。体部外面はハケ整形からナデ、内面はナデ、口縁部はヨコナデである。器表は浅黄橙で、器肉は黄灰である。*114* は内湾する体部から外傾する口縁部で端部は角張り、内側につまみ出している。内面はユビ成形からナデ、外面は水平方向の時計回りのタタキ成形である。口縁部内面はハケ整形で外面はヨコナデである。灰白で細砂含む。*115* は内面の稜線が鋭く、体部口縁部とも外傾している。口縁部中央は膨らんでおり、端部は丸い。内面はハケ整形からナデで他はヨコナデで、頸部外面は強いヨコナデである。内面は灰白、外面はにぶい橙でクサリ礫含む。*116* は球形の体部に外傾する口縁部が付き端部は内側上方につまみ出し端面となる。頸部内面の稜線はあまり鋭くない。浅黄橙～褐灰を呈し、外面は水平方向のタタキからハケ整形、内面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデである。肩部に黒斑があり、粗砂多く含む。*117* は倒卵形に近い体部に外傾する口縁部が付き端部は尖る。色調は浅黄橙～褐灰で薄く仕上げられている。器壁の薄さから内面はヘラケズリと思われるが、明確でない。外面は細筋のタタキののちハケ整形をしている。タタキは縦方向に近い施文である。口縁部もハケ整形が見られる。*118* は壺底部である。平底から内湾する体部になる。底面は平たくナデ仕上げで、黒斑が認められる。内面は黒～黒褐でヘラケズリかと思われる。外面はにぶい褐～黒でタタキから板ナ

デである。讃岐からの搬入品であろう。*119* は大形の鉢で僅かに内湾する体部から外傾する口縁部で端部は角張り端面に沈線がある。内面はナデ、外面はハケ整形からナデ、口縁部はヨコナデである。色調は浅黄橙で小石粒含む。*120* は口径が最も大きい鉢で、丸底であろう底部から内湾する体部になり、頸部でやや屈曲して内湾ぎみに延びる口縁部で端部尖る。内面は灰白～灰黄褐でナデ、外面はにぶい黄橙でハケ整形からナデ仕上げ、口縁部はヨコナデである。頸部に不明瞭な沈線状のものがあるが、粘土紐痕をヨコナデしたことによって生じたものと思われる。形状は精製鉢であるが小石粒も含み、余り丁寧でない。*121* は高杯杯部で浅めに内湾し端部外側に尖らす。磨滅著しいが、ナデ整形ののち内面はミガキ、端部周辺はヨコナデと思われる。内面はにぶい赤褐、外面は橙～灰褐である。*122・123* は器台上台部で *122* は内湾し端部近くで短く外反し端部丸い。筒部との接合部で割れている。外面はケズリ状の強い板ナデで、内面共に次にナデ整形しヨコナデで仕上げる。端部周辺は強いヨコナデによって外反している。にぶい橙～灰白で黒斑がある。*123* は僅かに湾曲するが直線的に延び端部は上方につまみ上げ尖らす。端面になり凹んでいる。内面はハケ整形からナデでにぶい黄橙～灰黄褐､外面は強い板ナデでにぶい橙である。端部周辺はヨコナデで仕上げる。筒部との接合部まで残存している。*124* は製塩土器である。ユビ成形し外面はタタキ､内面は板ナデである。橙～灰白を呈し､砂粒含んでいる。脚台部はユビ成形のままである。

SH11 出土遺物（103 ～ 105）

103 は壺でくの字の口縁部である。内面の稜線は鋭く内面に突出している。口縁部は外傾し端部は丸いがやや内側につまんでいる。強いヨコナデで器表に凹凸が出来ている。中央上に突帯を１条張るがナデで低くしている。内面は灰白～にぶい黄橙でナデ仕上げ。外面はにぶい黄橙～黒でハケ整形からナデ。*104* は突出平底の底部で外面はタタキからハケ整形で淡黄、内面はユビ成形からナデで灰白を呈し粗砂含む。*105* は高杯杯部で少し屈曲しながら開き端部尖る。にぶい黄橙～褐灰で細砂含む。内面はハケ整形からナデ調整。外面はハケ整形で、端部周辺はヨコナデである。

２. 土坑出土遺物

SK01 出土遺物（106）

106 は二重口縁壺で頸部から外反し稜線を持ってからさらに外反し端部は角張る。全体に強いヨコナデで器表に凹凸が生じている。内面は灰、外面は灰白で、細砂多く含む。

SK03 出土遺物（107・108）

107 はくの字の壺口縁部で、体部は球形になろうかと思われる。外傾し端部は外側に尖らせる。ヨコナデで仕上げているが、体部外面はヘラミガキがなされている。内面灰白、外面灰黄褐である。*108* は器台上台部で外反し端部は上方に大きくつまみ出している。端面となり、そこに小さめの円形浮文を付加している。赤褐～暗赤灰を呈し２次焼成を受けている。外面にタタキかと思われる痕跡あるが明瞭でない。ヨコナデで仕上げ、細砂少量含む。壺の可能性もある。

３. 落ち込み出土遺物

SX01 出土遺物（109）

109 は壺口縁部で外反し端部を上方につまみ出して端面としている。ハケ整形からヨコナデであるが、粘土紐痕が残っており丁寧な仕上げではない。灰白～にぶい黄橙で細砂含む。

SX04 出土遺物（125 ～ 141）

125・126 は弥生時代中期後半の壺口縁部である。*125* は外反する頸部からやや屈曲して端部は内外に肥厚している。色調は灰白で、砂粒を含んでいる。ヨコナデ仕上げで焼成は良好である。端面には４条の凹線があり２個一対の棒状浮文が付いている。細めの浮文である。頸部には貼付突帯が巡り指頭圧痕が見られる。*126* は外反し端部はバチ形になる。磨滅しているがヨコナデであろう。灰白で砂粒含む。*127* は庄内甕口縁部である。*127* の表面は灰白、器肉は灰で砂粒少し含んでいる。内傾する体部から外反する口縁部で端部は上方につまみ出し端面になっている。ヨコナデ仕上げで端面には沈線がある。*128* は内湾ぎみの体部から鋭い頸部内面の稜線を持って外傾する口縁部で、端部は外側につまむ。外面は右上がりのタタキで口縁部はヨコナデである。灰白で砂粒含む。*129* は内面ヘラケズリの内傾する体部から明瞭な稜線を有して外傾する口縁部になる。端部はやはり内側上方につまみ上げ端面にしている。体部から口縁部にかけてヨコナデ調整であるが、口縁部外面にタタキが残っている。タタキののち口縁部を形成したものである。内面にはハケ整形が見られる。全体に灰白で外面は黒部分もある。煤付着している。*130* は内湾する体部から鋭い頸部内面の稜線を持って外傾する口縁部になり端部は上方につまみ上げている。内外面ともに灰白で、外面は右上がりのタタキ、内面はヘラケズリで薄く仕上げている。口縁部はヨコナデで端面になる。*131* は鉢で内湾する体部から外反する口縁部で端部は尖る。浅黄橙で外面はハケ整形で口縁部はヨコナデ。*132* ～ *136* は甕である。*132* は内湾する体部から外反する口縁部で端部丸い。内面板ナデ、外面右上がりタタキ、口縁部ヨコナデである。口縁部外面にもタタキ見られ、タタキ成形後に再成形している。灰白で細砂少し含む。*133* も外反する口縁部で内面の稜線鋭い。タタキ成形後に口縁部を作っている。ヨコナデで仕上げ、色調は灰白である。*134* も口縁部外反し再成形で右上がりのタタキで灰白である。ヨコナデで端部丸く内面ケズリである。*135* は吉備からの搬入品である肩は丸いが最大腹径が上位にあり内湾する体部で、内面にぶい黄橙～褐灰でユビ成形からヘラケズリ、外面にぶい黄橙～黒でヘラミガキである。頸部は短く外反し二重口縁となって僅かに内傾し端部は外側につまみ出すように角張っている。口縁部はヨコナデで８条の擬凹線が見られる。*136* は二重口縁の山陰系甕口縁部である。内傾する体部から短い頸部で短く外傾し目立つ鋭い稜線を持って外反する口縁部になる。端部は丸く、色調は灰白である。*137・138* は甕底部である。右上がりのタタキ成形で平底で中央が凹んでいる。*137* は灰白で内面ナデ、外面側面にもナデが見られる。*138* は黄灰で底面には木葉痕がある。内面は板ナデである。*139* は高杯脚部で端部まで残っていない。４方透孔があり外反ぎみである。内面はにぶい黄橙でユビ成形からくもの巣状のハケ整形である。外面は灰白でミガキがなされている。杯部との接合部で割れており、筒部整形のナデが見られる。杯部内面もミガキで、筒部は中実である。*140* は器台上台部で水平に緩やかに外反し端部下方に大きく肥厚している。端面と上面に波状文が施され、仕上げはヨコナデである。灰白を呈し、砂粒僅かに含む。*141* は半月状をした土製品である。複合土器などの一部分か皮袋などの土製品かと想定されるが不明である。内面は灰～暗灰、外面は浅黄橙～灰で、器肉は黒灰である。板状に延び、中央部分が薄く外側が厚くなっている。下面は粘土接合部で他部品との接合部であろう。砂粒含み精製品とは思われない。ユビ成形からナデ仕上げである。

４.溝出土遺物

SD01 出土遺物（142）

142 は甕口縁部で内傾する体部から外傾する口縁部で端部は上方につまみ出し端面となる。内面は灰白～褐灰でナデ整形である。外面は浅黄橙でやはりナデ整形。口縁部はヨコナデで、粘土紐継ぎ目残る。

SD06 出土遺物（143 ～ 148）

143 は甕口縁部で吉備からの搬入品である。外傾してから直立ぎみに外反し端部丸く、端面には擬凹線が施される。にぶい橙で強いヨコナデ仕上げである。頸部内面の稜線は鋭い。*144* は壺口縁部で外反し端部尖っている。ヨコナデで外面はミガキが施されている。内面にぶい赤褐、外面にぶい橙で、細砂含む。讃岐からの搬入品である。*145* は甕口縁部で外反し端部上方につまみ上げ丸く納める。浅黄橙でヨコナデ仕上げ。*146* は壺体部で球形を呈し、肩は丸い。内面はユビ成形からナデ整形で、にぶい橙である。外面はナデ仕上げで橙、頸部はヨコナデである。*147・148* は底部である。*147* は甕で底面は平たくナデている。灰白で細砂含み、外面は右上がりのタタキからナデ、内面はユビ成形からナデである。*148* は壺でドーナツ状の上げ底になっており木葉痕がある。内面は灰白でナデ、外面はにぶい黄橙で右上がりのタタキからナデである。

SD09 出土遺物（149 ～ 161）

149 ～ *153* は壺口縁部である。*149* は頸部稜線甘く外反し端部丸い。灰白で外面の一部はにぶい黄橙である。外面は粗いハケ整形で、端部は水平でなく凹凸がある。*150* は外傾しており、端部は丸くヨコナデ仕上げである。灰白～褐灰で粗砂含む。*151* は二重口縁壺で讃岐からの搬入品である。外反し突帯状に突出しさらに外反し端部角張りぎみ。ヨコナデで仕上げ、内面は横方向のヘラミガキを施す。にぶい黄橙で内面には有機質を塗布している。*152* は器壁薄く外反し端部外側に肥厚し角張り端面に沈線がある。頸部は甘い稜線で体部は外傾する。体部内面はケズリ、外面はナデである。灰白～浅黄橙で胎土は緻密な精製土器である。*153* は僅かに外反する口縁部で端部は内外に肥厚し角張る。灰白で粗いハケ整形、内面と端部はヨコナデを行う。端部周辺は強いヨコナデで端面は沈線状に窪む。*154* ～ *159* は甕である。*154* は内湾する体部から外反する口縁部で端部尖る。内面はユビ成形からナデ整形で指圧痕が明瞭に残る。灰白で細砂含み、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。*155* は内面の稜線鋭く口縁部外傾し端部丸い。内外面ともにハケ整形からヨコナデである。内面黄灰、外面灰白で、粗砂含む。*156* は外反し端部薄くなって丸い。器表灰白で器肉黒を呈し、胎土緻密である。内面はハケ整形をし全体にヨコナデで仕上げる。体部内面はケズリ。*157* は内湾する体部から内湾ぎみに延びる口縁部で端部はつまみ上げる。体部外面はタタキで浅黄橙、内面はケズリで灰白、口縁部はヨコナデである。外面に黒斑があり粗砂含む。*158* の底部と体部は接合出来ないが同一個体であろう。外反する口縁部で端部は外側につまみ出し角張っている。端面となり沈線が施され、ヨコナデ仕上げ。頸部内面の稜線は甘く体部は内湾する。内面は灰白～黄灰でハケ整形、外面は浅黄橙で右上がりの細かいタタキである。底部は尖り底で外面はラセン状のタタキからハケ整形を加え、内面はヘラケズリである。*159* は突出平底の底部で木葉痕が残り未調整である。灰白～暗灰で粗砂多く含む。内面はケズリ、外面は右上がりのタタキから板ナデで黒斑がある。*160* は小形丸底壺で丸底から内湾する体部となり、頸部は大きく稜線も甘く、口縁部は外傾し端部丸い。灰白で粗砂含む。内面はユビ成形からナデ、外面はハケ整形からナデ仕上げ、口縁部はヨコナデである。*161* は鉢で小さめの平底から内湾し端部は外側につまみ出し尖る。底面には木葉痕が見られ、ナデ整形する。その後調整を加えた工具痕が残るが、ヘラ記号状になる。体部はユビ成形からナデで粘土紐痕見られ、余り丁寧な作りではない。底面周辺には黒斑があり、灰白～灰を呈する。

SD11 出土遺物（162）

162 は２次焼成を受けている内湾ぎみの甕口縁部で端部は内側に肥厚する。内面橙、外面浅黄橙でヨコナデ仕上げ。粗砂多く含んでいる。

５.旧河道出土遺物

旧河道・包含層は量が多いので、器種ごとに分類し合わせて報告する。旧河道は近世遺構として調査したSR01の下層にあるものの全体的に氾濫の堆積を示しており、明確に堆積時期を限定することは出来ない。上層である黒褐砂礫層・黒シルト質極細砂混じり砂礫層には確実に須恵器が混じっている。

壺は６種に分けられる。壺Ａはくの字のもの、壺Ｂは口縁部が外反し主に端部が肥厚するもの、壺Ｃは直口するもの、壺Ｄは二重口縁のものである。壺Ｅは長頸壺、壺Ｆは讃岐からの搬入品である。

甕は12種に分けられる。甕Ａは畿内Ⅴ様式の系譜を引くくの字甕、甕Ｂは直口壺に近い形状をするもの、甕Ｃは庄内甕で外面にタタキを残すもの、甕Ｄは庄内甕で外面にタタキを残さない甕、甕Ｅは庄内甕で河内からの搬入品、甕Ｆは丹波系、甕Ｇは淡路系、甕Ｉは山陰系の二重口縁のもの、甕Ｈは二重口縁で山陰以外の甕、甕Ｊは東四国系、甕Ｋは吉備系、甕Ｌは布留傾向甕である。

高杯は中実（高杯Ａ）と中空のもの（高杯Ｂ）、それと椀形高杯（高杯Ｃ）の３種に分けられる。分類として柱状のものも存在するが、今回出土資料にはなかったので３種に分ける。

（１）黒褐砂礫層

須恵器（163・164）

163 は高杯脚部で灰白を呈する。通常の大きさで裾径8.3㎝を測り外反し端部角張る。ロクロナデで仕上げ杯部はナデ仕上げを行う。極細砂含み胎土は良いとは言えない。*164* は杯身で尖りぎみの底部で体部は直線的である。ロクロケズリののちナデ仕上げを行う。明青灰～暗灰で極細砂を多く含む。口縁部は内傾し端部は外側につまみ出している。受部は短く水平に開く。

壺

黒褐砂礫層出土壺はＣとＤに限られる。その他は文様片や端部を欠いている壺である。

壺Ｃ（165 ～ 168・171 ～ 173）

明瞭な直口壺ではなく、外反ぎみの口縁部である。*165* は端部角張り、ハケ整形ののちヨコナデである。にぶい黄橙で細砂含む。*166* も端部を欠くが同タイプと思われる。ハケ整形からヨコナデである。*167* は僅かに外反し端部肥厚している。内外面共にハケ整形から端部周辺はヨコナデで仕上げる。ハケはやや粗めである。にぶい黄橙～灰城で細砂含む。*168* は壺体部でハケ整形が見事で文様のように見え、その上にヘラ描きの直線文が施される。内湾しており、天地逆かもしれない。*171* は内湾する体部でヘラ先の刺突文かヘラ描きの文様が施される。内面はユビ成形からナデで丁寧とは言えない。*172* は内湾する体部から外反し端部は外側に引き出している。内面は灰白～灰黄褐でヘラケズリである。外面は灰黄でハケ整形を施し、口縁部はヨコナデである。細砂多く含む。*173* は内湾する体部で内面はヘラケズリ、外面はハケ整形で長胴ぎみ。口縁部は外反し端部丸い。強く被熱している。

壺Ｄ（169・170・174 ～ 179）

169 は擬口縁部の上部で波状文と竹管文を付加した円形浮文が付けられている。灰黄を呈し胎土は精良である。下部にも波状文が見られる。内面はヘラミガキ。*170* も波状文が施された口縁部であるが壺のタイプは不明である。ナデ仕上げで灰黄を示す。この２点は端部はないが形態から壺Ｄと思われる。*174* は二重口縁で外反し端部肥厚ぎみに角張る。端面に凹線状の窪みあるが明瞭でない。明赤褐を呈しヨコナデ仕上げで砂粒含む。２次焼成を受けている。*175* は直立する頸部から水平ぎみに開き外反する。端部は外側につまみ出し丸く納める。外面はにぶい黄橙でハケ整形からナデそして縦方向のヘラミガキを加える。内面は灰黄褐でナデ仕上げ、口縁部はヨコナデであるが端部近くの方はヨコナデが強く

なっている。口径 21.4㎝で砂粒少量含む。*176* は体部内湾し口縁部は外反し端部丸い。強いヨコナデによって頸部に２条の凹線文のようになっている。体部内面はヘラケズリ、外面はミガキである。*177* は頸部は直立し水平に直線的に伸びてから外反する。擬口縁部は段が付いている。端部近くでやや反り丸く納めるが、端面が残り凹線状の窪みが残る。内外面ともハケ整形からヨコナデである。擬口縁周辺が強いヨコナデを施している。にぶい黄橙で砂粒含む。*178* は口径 20.8㎝で内湾する体部から外反する。体部内面はユビ成形で痕跡明瞭に残し、下半はハケ整形している。外面は右上がりのタタキからナデ整形と縦方向のヘラミガキを施す。内面は灰白、外面はにぶい橙を呈する。口縁部はヨコナデで端部は角張る。擬口縁部に鋸歯文を装飾し竹管文の付けた円形浮文を付ける。２個単位で鋸歯文の谷部に付加し、２個並べて１つ開けている。*179* は擬口縁部が浅く端部を欠いている。不安定な平底から球形に近い算盤玉状の体部で口縁部は外反する。底部近くに黒斑があり、内面も黒くなっている。ユビ成形からナデ・板ナデで内面下半には工具痕が残り、粘土紐の痕跡がよく残っている。灰黄褐で粗砂など砂粒多く含んでいる。外面はにぶい黄橙で、ハケ整形からヘラミガキで仕上げている。口縁部は内外ともミガキである。

底部（180・181）

180・181 は突出平底でタタキ成形からナデを施している。内面も板ナデ整形である。180 は内面に工具痕が残っており、底面はケズリである。181 の底面はナデ仕上げで、ヘラ記号（２条の平行線）が見られる。側面には籾痕が残っている。外面は灰黄で粗いヘラミガキがなされている。

鉢（182・184）

182 は磨滅が著しく明瞭でないが鉢と考えたが、甕かもしれない。丸底に粘土を貼って不安定な平底にしている。体部は内湾し、灰白～黄灰を呈し極細砂多く含む。*184* は内湾する体部で端部は丸い。内外面ともにヘラケズリを行い、内面はハケ整形を施し端部周辺はヨコナデで仕上げる。にぶい黄橙～灰白で粗砂含む。

小型丸底壺（183・185）

183 は算盤玉状の体部で丸底となる。内面はユビ成形で頸部には絞り目が残る。口縁部は残存していないが頸部屈曲し外へ広がる部分まで残っている。外面はにぶい黄橙で下半はナデ、上半はナデ・ハケ整形ののちヘラミガキである。*185* は内湾する体部から外傾する口縁部で端部は丸い。内面は褐灰～赤橙で板ナデか、工具痕が残る。外面はにぶい橙でハケ整形からナデ仕上げ。２次焼成受けている。

甕（186 ～ 199）

甕 A（187・188・195・197）

187 は強いヨコナデによって頸部が凹んでいる。明確に言えないが他地域の影響を受けているような違和感を覚える。にぶい黄橙で体部・口縁部とも直線的に広がる。端部は僅かに肥厚している。体部内面はケズリ、口縁部内面はハケ整形からヨコナデである。*188* は外傾する体部で灰白を呈し砂粒多く含む。内面はケズリ、外面はハケ整形で、口縁部はヨコナデである。口縁部は外傾し端部は丸く外につまみ出している。口縁部は歪で、体部残存部端はノコギリ状になっており意図的に破砕しようとした痕跡かと思われる。*195* は長胴となる球形の体部から外反する口縁部で端部肥厚する。灰黄～黄灰で細砂多く含む。外面はタタキ成形からハケ整形で、肩部にヘラ記号があり、さらにその上に竹管文が施される。内面はハケ整形ののち上半は板ナデが施される。*197* は体部の破片でタイプ不明であるがタタキ成形で竹管文が見られる。

甕 C（186・192 ～ 194）

186 は外傾し端部上方につまみ出している。端部は角張り端面中央は凹んでいる。黄灰～黄灰で外面は有機質を塗布しているか。内面はハケ整形で端部から外面はヨコナデである。口径 16.5㎝と通有の大きさである。体部は残存していないのでタタキの有無は不明であるがそれらは甕Ｃとする（以下も同様に扱う）。*192* は内湾する体部から外傾し端部角張り肥厚ぎみとなり、端面に沈線を有する。外面はタタキで内面はハケ整形である。口縁部外面にはユビオサエが残り、中央が膨らんでおりヨコナデ仕上げ。外面はにぶい黄橙で、内面は灰白～褐灰で細砂含む。*193* は器壁薄くシャープである。口縁部は僅かに外反し端部は内側につまみ出して端面になっており沈線を有する。浅黄を呈し、外面はタタキからヨコナデ、内面はハケ整形である。*194* の胎土は地元であり甕Ｃとしたが技法は河内（甕Ｅ）のものである。内湾する体部から外反する口縁部で端部は丸い。にぶい黄橙で外面は右上がりのタタキ整形からナデている。内面は板ナデで口縁部はヨコナデである。頸部内面の稜線は突出している。

甕Ｋ（189 ～ 191）

189 は内傾する体部から短い頸部で大きく外反し外傾してから直立する。器壁は薄く仕上げられ、端部は角張りぎみである。体部は内面ケズリで灰黄、外面ハケ整形で灰白～黒、口縁部は強めのヨコナデである。*190* は頸部から外傾し突出する擬口縁部となってから内傾し、端部は丸い。口縁部は全体に強いヨコナデで端面には擬凹線が見られる。内面は褐灰、外面はにぶい黄橙である。*191* も頸部は短く湾曲し口縁部は外反してから直立し端部は肥厚して丸い。体部内面はケズリで口縁部はヨコナデで端面には８条の擬凹線が見られる。灰黄～黒で極細砂を含んでいる。

甕Ｌ（196）

196 は内湾する口縁部で端部は肥厚し面になっている。内面はにぶい黄橙で外面は灰黄褐で、細砂含む。ヨコナデ仕上げ。

底部（198・199・201）

198 は底径 3.3㎝と小さい平底から外傾する。内外面ともにハケ整形で底面はナデ仕上げ。底部内面中央が串状の凹みがある。*199* も平底から外傾する底部で外面はハケ整形、底面と内面はナデ仕上げで黄灰で底には黒斑がある。粗砂含み、焼成良好である。*201* は丸底で底はユビ成形で黒斑がある。内面は黄灰で貝殻条痕かと思われる。外面はにぶい黄橙でハケ整形。

甑（200・202 ～ 204・206）

200 はラセン状のタタキ甕の底部に孔を焼成前に有している。底面はタタキ底をナデて平底にしている。左上がりのタタキで内面は粗いハケ（貝殻？）で整形し工具痕が残る。器壁は厚く、にぶい黄橙を呈す。

大型鉢（202 ～ 205）

202 は二重口縁で径が大きいことから鉢としたが甕の可能性もある。体部は直線的に広がり、外面はタタキからハケ整形、内面はヘラケズリからナデ、口縁部はハケ整形からヨコナデ。にぶい黄橙で砂粒多く含む。*203* はくの字口縁で内面の稜線は甘い。内面はにぶい黄橙でヘラケズリ、外面は浅黄橙でハケ整形、口縁部はハケ整形からヨコナデ。*204* は緩やかな二重口縁で直立し端部角張る。灰黄で内面はヘラケズリ、外面はハケ整形である。体部は内湾する。*205* は器壁薄く体部内湾する。灰黄で外面はタタキからハケ整形、口縁部はヨコナデで端部は外側につまみ出す。端部には炭付着しており、吹き零れた状態である。

高杯（206・207）

２点とも脚部である。*206* は低脚で外反し端部近くで湾曲し端部角張る。内面には串先の小孔があり、内面はにぶい黄橙で板状工具痕がある。外面は灰黄を呈しヘラミガキで４方透孔の円孔がある。*207* は低脚高杯で内湾ぎみの脚で端部は下につまんでいる。３方透孔で円板充填法によって杯部と接続する。灰黄褐で外面はハケ整形からミガキを行う。内面はヘラケズリからナデで、短い筒部内面には絞り目がある。

器台（208 ～ 212）

208 は上台で筒部との接合部で割れている。外傾し端部近くで反っている。端部は丸く浅い上台でヨコナデ仕上げである。灰黄で極細砂多く含む。*209* も上台で外傾し端部直立し尖り気味に納める。内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げている。端部周辺は強いヨコナデで擬凹線になっている。*210* は精製土器で図上で完形となる。皿状の内湾する上台で端部上につまみ出す。外面には工具痕が見られヘラミガキがなされる。下台は直線的に延び端部尖る。灰黄褐で４方透孔を有する。内面はハケ整形ののちナデ、外面はヘラミガキで、端部周辺はヨコナデで仕上げる。*211* は下台が高く器高がやや高めとなる。上台は外傾し端部近くで斜め上方に丸くつまみ出す。端面に凹線１条見られ、内外面ともヘラミガキで仕上げる。下台は緩やかに外反し端部丸い。３方透孔で、内面はハケ整形、外面はミガキ、端部はヨコナデである。にぶい黄橙で細砂含む。*212* は外面にタタキが残りヨコナデで仕上げている。灰黄～灰白で脚台内面には工具痕残す。

製塩土器（213 ～ 215）

３点とも脚台Ⅳ式の脚台である。ユビ成形ののちナデている。*213* は内面明褐灰で外面灰白で外反し端部丸い。*214* は灰白でやはり外反し端部丸い。*215* は粘土紐の継ぎ目が見られやや厚めである。外反し端部角張りぎみ。にぶい黄橙を呈し粗砂含む。

（２）黒シルト層

壺

壺Ｂ（223）

223 は内湾する体部から外反する口縁部で端部は上方につまみ上げるように尖っている。内外面ともハケ整形からナデで仕上げ、口縁部はヨコナデで端部周辺は強いヨコナデで端面に２条の沈線を有する。器壁厚く、内面には粘土紐残す。内面は灰黄褐、外面にぶい黄橙で、砂粒多く含む。

壺Ｃ（216・217）

216 は内湾する体部に直口ぎみに外傾する口縁部が付く。端部は角張り、体部肩が張っている。灰白で体部内面はケズリ、外面はナデである。口縁部はハケ整形ののちナデ・ヨコナデを施す。*217* は外反する口縁部で端部尖る。頸部外面に体部との接合があり、内面に突出している。灰黄～暗灰で体部内面にはユビオサエが残っており、粘土紐も見られる。口縁部はハケ整形からヨコナデ。

壺Ｄ（218・219）

218 は外反しさらに外反し端部丸い。強いヨコナデが施され外面はカキメ状になる。にぶい黄橙～浅黄橙を呈する。*219* は大きく屈曲する短い頸部から直立ぎみに立ち上がり端部近くで反り、端部は角張り内外に肥厚する。擬口縁部は外側に突き出る。その上に竹管文施文されている。灰白で体部外面はハケ整形から全体にヨコナデ、端面に有機質付着している。

壺Ｆ（220 ～ 222）

220 はやや長めの頸部から外反し直立するが端部は残存していない。内外面ともにハケ整形からヨコ

ナデで仕上げる。外面中央に１条の凹線があり、外面は黄灰、内面は灰白である。*221* は短い直立する頸部から水平に近く開き内湾ぎみに直立する。端部は角張るが薄めである。頸部には断面三角形の鋭い突帯が貼り付けられ、上下に細かい竹管文が巡らされる。口縁部はナデ整形からヨコナデ仕上げ、内面はヘラミガキを行う。ヘラ描きの斜行鋸歯文を巡らせ、その上に竹管文付きの円形浮文を付加する。円形浮文は６ヶ所に施す。内面は灰黄褐で有機質付着しており、外面はにぶい黄橙である。装飾を施した壺である。*222* は外傾する口縁部が直立し端部付近で僅かに外側に傾け端部角張る。ユビ成形からナデ整形し強いヨコナデを施す。擬口縁部上に１条の凹線が認められる。内面は灰黄褐で有機質塗布している。外面はにぶい黄橙で砂粒多く含む。

文様片（224・225）

２点とも体部の破片でタイプは不明である。*224* はヘラ描きの絵画土器である。放射状の直線と円弧が描かれている。ナデ整形ののち、外面はミガキがなされている。内面はオリーブ黒、外面は灰～灰白である。*225* は波状文が施されている。内面は暗灰黄でナデ、外面は灰黄でタタキからナデである。

甕

甕Ａ（226 ～ 228・234 ～ 236・239）

226 は短めの口縁部で端部は丸くヨコナデである。灰白で細砂を含み、内面に粘土紐見られる。*227* は灰白～暗灰で細砂多く含み、器壁も厚い。端部角張り内湾ぎみの口縁部でヨコナデ仕上げ。*228* は内湾する体部から外反する口縁部で端部は角張り器壁薄い。灰白～黄灰で砂粒少量含み、内面はハケ整形からナデ、外面は右上がりのタタキからナデである。*234* は外反する口縁部でヨコナデ。外面は浅黄橙、内面は橙で砂粒多く含む。粗いハケは貝殻施文と思われる。*235* は水平ぎみに外反して開き端部上につまみ上げている。内面にぶい黄褐、外面灰黄褐で細砂少し含む。甕Ｊの影響を受けているかもしれない。*236* はやや大きめの甕で内湾する体部から外反する口縁部で、端部丸い。灰白で細砂多く含む。*239* は器高 13.05㎝の小形である。短く外傾する口縁部で端部は丸い。体部は倒卵形で小さな平底が付く灰黄で細砂多く含む。内面はヘラケズリからナデ調整で、外面はハケ整形である。底面はナデ、口縁部はヨコナデである。

甕Ｃ（229・230・232・233）

229 は外反し端部内外に肥厚している。粗砂含み、にぶい黄橙を呈し、器壁も厚めである。内面は粗いハケ整形であるが、貝殻であろうか。*230* は口縁部がやや外反し端部は上方につまみ上げている。端面には沈線が見られる。水平に近い細かいタタキである。灰白で細砂多く含んでいる。*232* は口縁部を欠いているがタタキから甕Ｃとした。水平方向のタタキで、内面はユビ成形から一部ケズリでナデ調整を加え、頸部付近のハケ整形である。灰黄～黄灰で細砂少し含む。*233* は内湾する体部で水平のタタキ成形、内面はケズリからハケ整形である。にぶい黄橙～灰白を呈し、細砂含む。口縁部は折り曲げて作りユビ成形が残り、ハケ整形からヨコナデである。端部は丸く肥厚し、外傾するが中央部の断面は膨らんでいる。

甕Ｄ（231）

231 は内湾する体部で内外面ともにハケ整形である。内面はオリーブ黒でユビ成形から横方向ハケののちナデ仕上げ、外面は黒で縦方向のハケ整形である。口縁部は外傾し端部丸く、ハケ整形ののちヨコナデ。

甕Ｋ（237・238）

237·238 は口縁部だけの破片であるが、形態はやや異なる。*237* は内傾し端面に７条の擬凹線があり、端部は尖りぎみである。ヨコナデ仕上げで細砂含む。色調は黒で一部褐灰である。*238* はほぼ直立し端部丸い。ヨコナデ仕上げで端面には擬凹線が施されている。灰黄褐で細砂含む。

底部（242 ～ 244）

242 は突出平底で底部再成形である。外面は右上がりのタタキをナデており、黄灰～灰黄である。内面はナデで灰白。底面には葉脈痕があり、側面には指頭圧痕が見られる。*243* は尖り気味の丸底で外面はタタキからハケ整形でにぶい黄橙～灰白である。内面はケズリで浅黄橙である。*244* は大形の不安定な平底である。ハケ整形からナデている。灰黄～暗灰で細砂と小礫少し含む。底近くに黒斑がある。

小型丸底壺（240・241）

240 は丸底でやや肩の張る体部、口縁部を欠く。ユビ成形から外面底はヘラケズリを施す。内面はナデで外面はハケからナデ、体部上半から頸部はヨコナデ仕上げ。黒斑が上下の対角線上に付いている。*241* は端部近くでやや外反する外傾する口縁部で端部は尖る。体部は内湾し扁平である。内面は灰白でヘラケズリ、外面はにぶい黄橙でハケ整形からナデ。口縁部はハケからヨコナデで細砂含む。

鉢（245）

245 は口径 55.2㎝を測る大形の鉢で底部を欠く。内湾する体部から短く外反し突出した擬口縁から外傾し端部角張る。外面はハケ整形から丁寧にミガキで仕上げている。口縁部も一部ミガキが施されている。にぶい黄橙で粗砂含む。内面には全体に炭化物が付着している。

高杯（246 ～ 251）

高杯 A（249・251）

249 の脚部は外傾し端部は肥厚ぎみに丸く納める。上部はナデで丸く仕上げており、内外面ともにミガキを施す。灰白～にぶい橙で細砂多く含み、４方透孔である。*251* は脚台がやや低いもので４方透孔である。内湾する裾部でハケ整形。杯部は内湾し変化して外反する。端部は丸くヨコナデ仕上げ。杯部と筒部はヘラミガキで仕上げる。内面は明褐灰、外面は灰黄褐で粗砂含む。

高杯 B（246 ～ 248）

246 は底の平たい杯部で外傾し端部近くで僅かに反り端部は尖る。磨滅顕著で化粧土が塗られていたと思われ、ミガキ仕上げである。器肉は灰黄～橙で細砂多く含む。脚部には絞り目がある。*247* は中空としたが、比較的杯底は厚い。緩やかに外反する口縁部で端部丸い。裾部も直線に広がり屈曲して外傾する。脚部内面はケズリ。灰白で細砂多く含む。*248* の脚部は外傾し内面は横方向にケズリを施す。外面はミガキ。杯部は水平に開いてから外傾端部近くで外反する。端部は丸くヨコナデ仕上げで内面はハケ整形で外面はミガキ。灰白～黄灰で細砂多く含む。

高杯 C（250）

250 は端部残存していないが､形状から椀形の可能性が高い。内湾しナデ･ミガキを行う。褐灰を示す。

器台（252 ～ 254）

３点とも精製土器で細砂を含んでいる。*252* は浅く内湾する上台で端部は上方につまみヨコナデ仕上げ。下台は外傾し端部尖る。４方透孔で内面には工具の痕跡がある。灰白～にぶい黄橙を呈する。*253·254* の上台は残存しない。*253* は外反ぎみで端部尖り、４方透孔。にぶい黄橙～灰白で内面はナデ、外面はミガキである。*254* は外傾し端部を内側に曲げており透孔を持たない。灰白で外面はハケ整形ののちミガキである。

脚台（255）

255 は外反し端部は尖りぎみである。灰黄～灰白で内面はハケ整形、外面と端部はヨコナデ仕上げ。

製塩土器（256 ～ 261）

256 は端部を欠いており、外面にタタキが施される。外面は灰黄、内面はオリーブ黒で細砂を含む。ユビ成形からナデ整形する点は他と同じである。*257* ～ *261* は脚台Ⅲ式の製塩土器でユビ成形からナデ整形を行っている。にぶい橙を基調に赤橙～にぶい黄橙をしており、砂粒含んでいる。多くは外反しているが、脚台部だけ残った *258* は内湾し、*261* は外傾している。*259* は特に強く焼け端部が爆ぜている。

（3）確認調査・その他の層

須恵器（262・263）

262 は杯蓋で外面全体に自然釉がかかっている。天井部は丸いが歪で体部は内湾し端部は外側を尖らす。灰～灰白を呈する。*263* は不安定な平底の杯 A である。底面はロクロケズリからナデており、ヘラ記号が施されている。外面は明青灰、内面は灰白で、極細砂多く含む。全体に歪んでいる。

弥生土器（272・273）

小破片ながら *272* は無頸壺と思われる。中期後半のもので３条の凹線が施される。にぶい黄橙で細砂含む。

273 は小片でタイプ不明である。ハケ整形ののちに肩部にヘラ描きの文様が施される。

壺（264 ～ 266・276）

264・*265* は壺 D でヨコナデで仕上げている。*264* は灰白でヘラミガキがなされる。*265* は頸部が直立し水平に開いてから短く外反する。浅黄橙で砂粒含む。*266* は壺 A で長胴の体部から外傾する口縁部で端部丸い。色調は灰白で粗砂含む。内面はケズリ、外面はハケ整形で肩部はカキメ状の横方向の痕跡がある。口縁部はヨコナデで器壁に凹凸がある。*276* は大きさから壺とした底部である。大形の底部で小さな平底を有する。灰白～にぶい黄橙で内外面ともハケ整形である。地元産で外面にはタタキも一部見られる。底面はナデ仕上げ。

甕（267 ～ 271・273）

口縁部が残っているものはすべて庄内甕でタタキがあるもの（甕 C）とないもの（甕 D）、布留傾向甕（L）が出土している。*267* は内湾する体部から外傾する口縁部で端部は上方につまみ端面になっている。内面は淡黄～灰黄でヘラケズリからハケ整形している。外面は灰白～にぶい黄橙で水平方向のタタキからハケ整形をしている。*268* は端部を外側につまみ出している。浅黄橙～にぶい黄橙である。*269* は球形の体部で扁平ぎみで薄く仕上げられている。灰白でヨコナデ仕上げ。*270* も灰白で端部肥厚させ面になる新要素を持つ。外面はハケ整形で細砂多く含む。*271* は外傾する口縁部で内側に折るような端部で面になっている。外面は黒、内面は暗灰黄。

小型丸底壺（274）

274 は丸底を欠いているが丁寧な精製品である。にぶい黄橙で、ハケ整形から細かいミガキで仕上げている。口縁部内面は暗文になっている。

鉢（275）

275 は口径が最大腹径を上回るもので、体部は内湾し口縁部は外傾する。口縁部は折り曲げておりユビ成形からヨコナデである。内面灰黄、外面灰白で細砂多く含む。

脚台（277・278）

277 は製塩土器の可能性もある。ユビ成形から板ナデ・ナデ仕上げである。内面はにぶい黄橙、外面は灰白である。*278* は外反し端部尖り４方透孔がある。大形の脚台であることから鉢の脚台であろうか。灰白で脚台内面以外はヘラミガキで仕上げている。

製塩土器（279・280）

ともに脚台Ⅳ式の製塩土器で砂粒多く含んでいる。色調はにぶい橙で外面の方が明るく橙となる。*279* はユビ成形からハケ整形しており。中実に近い低い脚台である。*280* は内湾する体部に僅かに外反する脚台で端部は丸い。ユビ成形からナデで仕上げる。

6.包含層出土遺物

暗灰砂出土遺物

調査段階で検出した旧河道より古いことから包含層とはしたが、本来は一段階古い旧河道と考えられる層である。層位は異なるが、土器からは明瞭な時期差が認められない。観察表では旧河道と表記。

壺（281 ～ 367）

壺 A（281 ～ 295）

細かく分けると口縁部が外反するもの（A1）、外傾するもの（A2）、屈曲しながら外傾し端部外側につまみ出すもの（A3）に分けられる。さらに端部の形状で丸いもの（a）と角張るもの（b）・肥厚するもの（c）に細分が可能である。

A1a（281 ～ 286）

281 はユビ成形から外面はハケ整形し内外面ともヘラミガキとナデで仕上げている。にぶい黄橙で器表に凸凹が残る。*282* は右上がりのタタキを折り曲げて口縁部を作っている。外面はミガキで仕上げ、内面はケズリから粗いハケ整形ののち板ナデ調整している。にぶい黄橙で細砂含む。口縁部内面も粗いハケからヨコナデ仕上げ。*283* もにぶい黄橙で内外面ともにハケ整形である。端部を欠いているので細分は確実でない。ヘラ描きが１条見られる。*284* は内湾する体部から開くが微妙に屈曲している。内面はハケ整形で褐灰である。内外面ともに有機質が付着している。*285* は内面灰黄褐～淡赤橙、外面にぶい黄橙～灰城で細砂多く含んでいる。ユビ成形からハケ整形し口縁部はヨコナデ。*286* は内面ヘラケズリで口縁部と外面はヨコナデ。にぶい黄橙で端部僅かに外につまむ。

A1b（287）

287 は頸部が厚めになり内面の稜線はない。端部に刻み目を施す。にぶい黄橙～褐灰でハケ整形からヨコナデ仕上げ。内面はナデ仕上げ。

A1c（292・293・295）

292 は外側に肥厚し外面はタタキ、内面はユビ成形、口縁部ヨコナデである。灰黄褐を呈し砂粒含む。*293* は大きく屈曲し両側に肥厚する。にぶい黄橙でハケ整形からヨコナデ仕上げ。*295* はヨコナデ仕上げで外面にヘラ描きの山形に近い波状文が施される。内面はミガキかナデで仕上げられている。灰黄褐で砂粒少量含む。

A2a（289）

289 は灰白で粗砂含んでいる。内面はハケ整形からナデで全体にヨコナデで仕上げる。外面はヨコナデ後部分的にナデ調整を加える。

A2b（288）

288 は強いヨコナデで仕上げることによって、やや屈曲して延びている。内面は灰黄橙、外面はにぶい黄橙で、細砂含む。

A2c（294）

294 の口縁部はハケ整形ののちヨコナデ仕上げ。灰白で極細砂多く含む。端部外側に肥厚する。

A3（290・291）

２点とも端部は丸くおさめており、灰白で粗砂含む。*290* は端部に浅い刻み目が見られる。*291* はユビ成形の凹凸が器表に残っており、ヨコナデ仕上げである。

壺Ｂ（298 ～ 305・309）

298 は肩の張る内湾する体部から大きく外反する口縁部になる。ハケ整形から内外面ともにヘラミガキで仕上げる。外面は強いミガキで面となる。内面は浅黄橙、外面はにぶい黄橙で細砂含む。*299* は頸部 13.4㎝と体部に比べると極端に小さい。特殊なタイプで丁寧に仕上げている。体部は上半しか残存していないが腹径は 40㎝を越えている。内湾しているが扁平ぎみである。ユビ成形からハケ整形しナデ調整である。短く直立する頸部から外傾し端部肥厚する。頸部には断面三角形の突帯が付けられ、端部には刻み目が入れられる。内面は灰白～橙、外面は橙～にぶい黄橙を呈する。*300* は頸部との継ぎ目で割れている。黄灰～灰でヨコナデ仕上げで端部内外に大きく肥厚する。*301* は内面にぶい黄橙～灰黄褐、外面灰黄褐で外面に２条の沈線がある。粘土紐見られる。*302* は内側上方に肥厚しており、部分的に端面が凹線状になっている。ハケ整形ののちナデ・ヨコナデ仕上げで橙である。*303* は直立する頸部から外傾し端部肥厚する。器形的には壺Ｂであるが讃岐からの搬入品と思われる。灰黄～黄灰で雲母などの細砂含む。*304* はタタキをナデ・ミガキで仕上げている。端部周辺は強いヨコナデで両端面が凹んでいる。灰黄で細砂多く含む。*305* は底部を欠いた倒卵形の体部から外傾する頸部そして外反する口縁部になる。体部内面は灰黄でユビ成形から下半はケズリを施す。外面はハケ整形で灰黄褐、口縁部はヨコナデ。*309* は裾部の可能性もある。外反し端部下方に大きく断面三角形に肥厚する。細かいヘラミガキで仕上げる。

壺Ｃ（296・297・307・308）

296 は内湾する体部で内面ケズリ、外面ハケ整形である。口縁部は外傾し端部内外に肥厚する。ハケ整形からヨコナデで、内面にはハケ原体の工具痕が刺突文状に残る。灰黄で体部と口縁端部に黒斑が認められる。*297* は器壁の厚い大形の口縁部である。緩やかに屈曲し端部角張って肥厚する。外面は縦方向のハケ整形からナデ調整､端部周辺のみヨコナデ｡頸部近くに４条の凹線がある｡灰黄で砂粒多く含む。*307* は直立し端部内側につまみ出す。内面は褐灰で工具痕があり、外面はにぶい黄橙である。*308* は球形の体部で外面はタタキからハケ整形でにぶい黄橙、内面はケズリで褐灰を呈する。口縁部はハケ整形からヨコナデで端部尖る。

壺Ｄ（306・311・312・317 ～ 325・327・328・330）

口縁部の形状で壺Ａと同様に細分する。外反するもの（D1）、外傾するもの（D2）、外傾し端部を外側・上方につまみ出すもの（D3）に分ける。

311・*312* は口縁部を欠くが形状から二重口縁になると思われる。*311* は直立する短い頸部で直線文と肩部に波状文を施す。内面はハケ整形からミガキで仕上げているが、さほど丁寧ではない。内面は灰黄褐、外面はにぶい黄橙である。*312* は内湾する体部で内面はユビ成形からハケ整形・ナデ、外面はナデ整形ののち強いヨコナデを施し、竹管文のついた円形浮文を肩部に付け、２条の波状文も施す。頸部は

内外ともハケ整形で、灰黄～黄灰。

D1（319・321 ～ 325・327）

319 は灰白で外反しヨコナデ仕上げ。地元の胎土で磨滅している。*321* は端部丸く納め、ハケ整形からミガキで灰黄褐を呈し細砂含む。*322* の内面はにぶい黄橙を呈しヘラミガキで仕上げている。外面は灰白で波状文が施される。*323* は頸部が長く強いヨコナデで仕上げられ器表凹凸が生じている。にぶい黄橙で器肉は灰である。*324* は低い頸部から外反し端部つまみ上げている。ヨコナデで端部に浅い凹線が認められる。外面に櫛先刺突文をＶ字に連続して装飾している。山形文の１種であろうか。外面浅黄橙、内面にぶい橙で細砂含む。*325* はハケ整形からヨコナデで擬口縁部は大きく突き出す。橙～灰黄褐で細砂含む。*327* は肩の張る体部から短い頸部で大きく外反し端部丸い。ハケ整形ののちヘラミガキ。口縁部は縦方向に平行に施文する。橙～にぶい橙で内面も一部ミガキ。

D2（317・318・320・328・330）

317 は球形の体部から外傾する頸部で口縁部は内湾ぎみに開くが端部は残存していない。ハケ整形からミガキを施す。にぶい黄橙で１条の凹線を有する。*318* も球形の体部から直立する頸部で外傾する。ハケ整形からミガキで口縁部はヨコナデ。にぶい黄橙で内面はケズリが見られ、体部下半に径４㎜の円孔が焼成前に作られる。底部に黒斑、端面には沈線が１条ある。*320* は擬口縁部の突帯部と端面に細かい竹管文を施す。端部には刻み目を有す。内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げている。内面浅黄橙、外面灰白である。*328* は擬口縁部が不明瞭で、強いヨコナデで接続部を仕上げている。にぶい黄橙で細砂含む。口縁部内面下半のみミガキを施す。*330* は内面に有機質を塗布していることから搬入品と考えられる。頸部は外傾してから開き短く直立する。端部は角張り、ヨコナデで仕上げる。にぶい赤褐で端面にはヘラ描き斜行の鋸歯文がある。内面は横方向、外面は縦方向のヘラミガキである。

D3（306）

306 は小形で二重口縁（壺 D）と外反して端部をつまみ出す（壺 A3a）中間の形状である。灰黄で内湾する体部外面には簾状文のような文様を意識した断続的なハケを行っている。口縁部は内外ともに丁寧にミガキで仕上げている。

壺 F（310・326・329・331 ～ 333・357 ～ 367）

310 は他の大形の内傾する二重口縁壺とは異なる讃岐からの搬入品である。小形の直立する頸部を有する。頸部には突帯が付加され刻み目を端部に入れている。内外ともに細かいミガキがなされる。灰黄で細砂含む。*326* は端部内外に肥厚する。内面は有機質付着しヘラミガキ。灰黄で極細砂多く含む。頸部外面はハケ整形で粘土紐残る。*329* は頸部短く稜線不明瞭。灰黄褐で口縁部はヨコナデ、内面ケズリ、外面ハケ整形である。*331* の頸部は内傾し水平に開いてから口縁部は直立する。口縁部はハケ整形で２次焼成を受けている。灰赤～にぶい橙。*332* は外反気味に開き突出してから内傾し端部反る。擬口縁部はユビ成形し、ハケ整形後口縁部はヨコナデ。内面は褐灰～黒褐、外面は灰黄褐で内外面ともに有機質付着。*333* は外反する頸部から内傾する。にぶい黄橙～灰白で体部内面はケズリ、外面はハケ整形、口縁部ヨコナデで黒斑がある。*357* は強いヨコナデで６条凹線を端面に有し、内面には有機質を塗布している。ハケ整形からナデ・ヨコナデで端部反りぎみで丸い。内面にぶい橙、外面灰褐で細砂含む。*358* は外反する頸部から直立に延びる二重口縁で磨滅している。*359* は短い頸部で外反し内傾する口縁部に続く。色調は灰白で白っぽい印象を受ける。頸部外面はハケ整形で他はヨコナデ。*360* は大きく外反する大形品で肩部に断面三角形の突帯を回す。突帯の上下面に刻み目状のヘラ先刺突文を施す。上の頸部

にも２帯のヘラ先刺突文を巡らす。突帯の下には波状文と直線文を巡らす装飾的な壺である。頸部から短く開き突出してから直立し端部反る。内面はユビ成形からハケ整形し有機質付着している。にぶい黄橙で外面は灰白～黄灰で粗砂含む。肩部の残存部端は大きく割れており、意図的に破砕した可能性がある。*361* は短く直立する頸部から外傾し大きく断面方形の突帯を付加し外傾する口縁部になる。端部は内外に肥厚し、突帯端面と上面には *360* と同じヘラ先刺突文を施す。その上には竹管文帯を巡らす。二重に押圧したもので、内側は円形とＣ字状になる。ハケ整形からヨコナデで、内面はにぶい黄橙、外面は灰黄である。*362* はユビ成形からハケ整形し外面は一部ミガキを行う。緩やかに広がり、粘土の継ぎ目で段になっている。頸部はくの字で外傾し突出してから内傾する口縁部で端部やや肥厚して外側に尖る。灰白～灰黄褐でハケ整形から頸部内面はミガキを行っている。口縁部は強めのヨコナデで器表に凹凸が生じている。*363* は外傾してから内傾する端部を欠く口縁部である。ユビ成形からナデで外面は強いヨコナデがなされている。灰黄褐で粗砂含んでいる。*364* は外傾してから明瞭な稜線を持たずに内傾し端部内側につまみ出す。ユビ成形からナデで外面はヨコナデで変化部上部に１条凹線がある。内面灰黄褐、外面にぶい黄橙で粗砂含み、内外面と有機質塗布している。*365* は大きく低く外反してから直立し端部内外肥厚する。ハケ整形からヨコナデで一部ミガキを施す。内外面とも有機質塗布し、内面灰黄褐、外面にぶい黄橙である。*366* は外傾してから甘い稜線を持って短く内傾し端部丸い。ハケ整形からナデ・ヨコナデで、内面はにぶい赤褐で有機質塗布、外面は黒褐で粗砂含む。*367* は器壁厚く内傾してから突出し内傾し、端部外側に尖らす。ユビ成形の凹凸残り、ハケ整形からナデ・ヨコナデ・ミガキである。内面黄灰で有機質塗布、外面は黒褐～にぶい黄橙で胎土良好である。

底部（313 ～ 316・334 ～ 337）

313 は平底で内湾する体部内面は灰黄でユビ成形からヘラケズリである。外面は灰黄褐でナデ仕上げ。*314* ～ *316* は突出平底である。*314* の外面はタタキからハケでにぶい黄橙、内面はユビ成形からハケで灰白である。*315* は下膨れの球形で外面はにぶい黄橙でタタキからハケ整形、内面は灰黄褐でハケ整形、タタキ底である。底部近くに黒斑がある。*316* は内湾する体部下半で丸底に粘土を付加して平底にしている。灰黄で外面はタタキからミガキで消して調整し、内面はハケ整形している。*312* と同一個体であるかもしれない。有機質付着。*334* は大形の壺で外面ハケ整形、底面木葉痕、内面ナデで、僅かに上げ底となる。底部に粘土痕見られ、内面灰白、外面灰黄、器肉褐灰を呈し、粗砂含む。*335* も木葉痕で外面はケズリからミガキで内面は板ナデで黒斑を有する。灰黄で細砂含む。*336* は内湾する体部で底部は中央が凹んでいる。外面はミガキ仕上げで暗灰黄、内面はナデ・板ナデ仕上げでオリーブ黒。底部に黒斑があり、細砂含む。*337* は頸部近くまで残存しており、肩部に波状文帯がある。２本１対にも見えるが明瞭でなく帯状になっている。倒卵形の体部で僅かに上げ底となる底部でナデ仕上げ。外面下半のみヘラミガキが残る。内面灰白～灰、外面にぶい橙である。

文様片（338 ～ 356）

口縁部・肩部に文様が施された破片で、一応壺としているが甕も含まれているかもしれない。ヘラ描きで文様でなく記号状のものが、*338* と *348* である。*338* は竹管文のように円形となり、黄灰で粗砂含む。*348* は２本で１対となったもので川状に施す。

刺突文が *339*・*346*・*354* である。*339* は横方向にＶ字（矢印）が施された羽状で浅い施文である。外面ミガキで灰黄褐、内面ナデでにぶい黄橙である。*346* は肩部に施されており、櫛先刺突文である。ハケ整形からナデで、外面灰黄褐、内面にぶい黄橙である。*354* は頸部下にヘラ先刺突文を細かく巡らす。

淡橙～にぶい橙で細砂含み、外面はミガキである。

波状文が最も多く７点ある。*341* だけがヘラで、それ以外はクシによる施文である。*340* は二重口縁壺で細かい波状文を施す。灰白で内面はヘラミガキ、外面はナデ仕上げ。*341* は内面にぶい黄橙でヘラケズリ、外面灰白でタタキからヨコナデ・ヘラ先波状文である。甕と思われ、搬入品であろうか。*342* は強いヨコナデののち波状文を施した内湾する体部である。内面浅黄橙でケズリ、外面は灰白～褐灰を呈する。*343* は二重口縁で端面を垂下させており、そこに竹管文付きの円形浮文を間隔を開けて付加する。端面に細かい波状文を巡らせ、端部は丸く反っている。灰黄で外面の方がやや暗い。*344* は肩部にしっかりした丁寧な 10 条の波状文を巡らせ、頸部近くに８条の直線文を施す。内面はユビ成形からナデで灰白、外面はにぶい黄橙でナデ調整。頸部には突帯があるように思われる。*345* は内面ハケ整形で灰白、外面はにぶい黄橙で外面全体に波状文が見られる。*347* の内面は凹凸が残り粘土紐の継ぎ目も看取される。にぶい黄～黄灰でユビ成形からケズリ・ナデである。外面は灰黄褐で直線文の上下に波状文帯を配置する。

竹管文は５点あり、そのうちの１点は波状文もある *343* である。*349* は甕で肩部に３個押されている。外面は灰白～褐灰でハケ整形である。内面は黒でナデ整形。*350* はタタキからハケ整形し、その上に３個の竹管文を施す。灰白で内面はナデ仕上げ。*355* は器台で上台部上面に竹管文を巡らす。灰黄褐で細砂含む。*356* は内湾する体部で灰黄を呈し、５個竹管文が押されている。

鋸歯文は２点あり、どちらも斜行のラインが認められる。*351* はにぶい黄橙で粗砂含む。ナデ仕上げで内面はハケ整形である。*352* は口縁部で端部が丸く肥厚ぎみである。ハケ整形からナデ・ヨコナデ仕上げ。外面灰黄褐、内面橙で細砂含む。

甕（368 ～ 388・390 ～ 460・485）細分は旧河道と同じで、庄内甕で体部がないものはＣにしている。

甕Ａ（387・388・392・393・396・397・400・485）

庄内甕の次に多く出土している。図化していないものでは外反する方が多いように思われる。*387* は大形の甕で口縁外傾し端部上につまみあげている。ヨコナデ仕上げで、内面は赤灰、外面は赤褐である。体部内面はヘラケズリで細砂含み、頸部短く大きく屈曲し稜線は有さない。*388* も同種の甕で技法など *387* と同じである。内面灰黄褐～褐灰、外面橙で粗砂含む。*393* は短い頸部で外反し端部角張る。古相を示す。

甕Ｂ（399）

399 は短く外傾し端部角張る。内外面ともハケ整形で灰黄～黄灰を呈する。

甕Ｃ（394・395・407 ～ 430）

最も多く出土している。端部つまみ出して角張るものが多く、端面になり沈線が見られるのも多い。色調は灰黄～黄灰・灰白が多く、極細砂を含んでいる。内面はハケ整形が多く、タタキは平行か右上がりが多い。河内からの搬入品もある。

甕Ｄ（431 ～ 440・442・443）

球形の体部に内湾ぎみの口縁部が多い。端面になるのが多いが、外につまみ出すもの *433* もある。

甕Ｈ（451 ～ 453）

ミガキを施している。口径が小さく体部の方が径が大きくなる。

甕Ｉ（445 ～ 450）

にぶい黄橙～灰白を呈し、器壁が厚いもの *447* もあるが、大半は薄くシャープである。強めのヨコナ

デ仕上げである。

甕Ｊ（390）

390 は頸部内面の稜線は甘い外反する頸部で口縁部短く内側につまみあげている。ユビ成形からハケ・ナデで橙～にぶい黄橙をしている。

甕Ｋ（454 ～ 460）

受口部の稜線が甘いものと鋭いものがある。形態・技法は吉備だが胎土は播磨のものがある（*454*・*455*・*458*）。擬凹線は２点だけである。

甕Ｌ（398・441）

端部は角張るもの *398* と内側に肥厚するもの *441* がある。内湾する口縁部は共通する。

底部

369 ～ *375*・*378* は突出平底で甕Ａの可能性が高い。外面タタキ成形のもの（*369*・*371* ～ *375*・*378*）が多く、*370* はミガキ仕上げである。内面はケズリ（*369*）とハケ整形（*370*･*371*･*374*･*375*）と板ナデ（*372*･*373*・*378*）に分かれる。ハケ整形はくもの巣状になる。*372* は木葉痕があり、*369*・*375*・*378* はタタキ底である。色調は灰白～灰黄のものが多く、*370* には黒斑が見られる。

376・*377*・*379* ～ *382* は平底である。外面タタキ成形のもの（*377*・*382*）とハケ整形（*376*・*379*・*380*）とナデ仕上げ（*378*）に分かれる。内面はケズリ（*379*）、ハケ（*376*・*380*）、板ナデ（*377*・*381*・*382*）の３種がある。*376*・*381* には木葉痕があり、*377*・*382* はタタキ底である。*376*・*382* には黒斑がある。内面にぶい黄橙～灰黄、外面灰白～黒褐を呈する。*379* の胎土は播磨だが全体的に甕Ｊに類している。*380* は外面にヘラ描きの文様（横向きにＶ）が施される。

383 はタタキ底の丸底で黒斑がある。外面は灰白でタタキからハケ整形とナデ調整、内面は黄灰でケズリからハケである。*384* も丸底で内面に放射状の工具痕が見られる。外面はにぶい黄橙でナデ仕上げ、内面は灰白である。*385*・*386* は短い脚台となる底部で、ユビ成形で仕上げている。*385* は黄灰を示し黒斑が認められる。内面には板ナデの工具痕があり内湾している。*386* は外面タタキからナデで灰白、内面ハケからナデでにぶい黄橙で、粗砂含む。内湾する底部で、脚台部は外に開き端部丸い。

461 は平底から内湾する底部で中央に穿孔され甑となっている。タイプは甕Ａであろう。

文様片

368 は内湾するタタキ成形の体部で縦方向３本のヘラ描きがある。内面は灰白でハケ整形、外面は灰黄で細砂含む。*403* はクシ描きで、*406* はヘラ描きで文様を表す。*404* は竹管文、*405* は刺突文である。

鉢（401・462 ～ 478・487 ～ 494・499 ～ 501・521 ～ 525）

丸底と平底があり、頸部の有無もある。小形の鉢は浅い皿状と半球形のものがある。大形は頸部を有し、口径が体部腹径を上回る。くの字と二重口縁がある。*487* ～ *494*･*499* ～ *501* は小形精製鉢であるが、やや粗雑なものもある。

ミニチュア土器（479 ～ 482）

４点出土している。*479* は壺で形態が東瀬戸内のもので搬入品かもしれない。体部に穿孔がある。*480* も壺で手捏ねながら丁寧である。*481*・*482* は鉢で黒斑がある。

手焙土器（483）

小片であるが、手焙りの鍔部と思われる。内傾し端部は内外に肥厚し、端面に細かい波状文を施し竹管文のついた円形浮文を貼付する。

蓋（484）

つまみ部の小さなもので外傾し端部角張る。ミガキ施すが余り丁寧な仕上げではない。

小形丸底壺（496 ～ 498・502 ～ 505）

口径が勝るものと最大腹径とほぼ同じものがある。体部の小さい *496* は東四国の影響であろうか。

製塩土器（495）

495 は赤化するほど強く焼けており粘土紐が見られる。

高杯（507 ～ 520・526 ～ 535）

椀形と有段のものがある。円板充填が多く見られる。*508* は小形の精製土器で裾広がりになる脚部が付くであろう。ミガキで丁寧に仕上げ、化粧土塗布している。*514* は讃岐からの搬入品で高杯は珍しい。杯部と筒部との接合面に凹凸を付けている。また、内面には串状の刺突が残るものが多い。

器台（389・536 ～ 550）

大形と小形があり、中空と中実がある。*541*・*542* は山陰の鼓形器台である。*545* は径小さくミニチュアであろうか。

脚台（551・552）

551 は外反し *552* は内湾し端部肥厚している。ハケ整形で細砂含む。

製塩土器（553 ～ 560）

すべて脚台式で、*560* だけ体部が残っている。タタキ成形で多面体になっている。内湾する体部で搬入品。

その他包含層

黄灰中砂（561 ～ 563）

包含層上層で白磁 *561* 青磁 *562* 須恵器 *563* が 1 点ずつ図化している。

灰砂礫（564 ～ 571）

須恵器・土師器・弥生土器を図化している。須恵器には糸切り底の新しい椀まで含まれる。弥生は中期の壺である。

礫層（572 ～ 584）

土師器・弥生土器が出土し、須恵器は含まない。吉備・山陰の土器も出土している。磨滅著しい。製塩土器が目立ち、*582* は本来器台であるが強く焼け製塩土器への転用と思われる。

褐灰シルト（585・586）

585 は讃岐からの搬入品で、*586* には波状文が見られる。

その他（排土・層位不明など、587 ～ 597）

讃岐の壺 2 点 *588*・*589* が含まれる。*593* は脚台としたが余り見ないタイプである。

（2）石器

S1 はサヌカイトの剥片で、周縁に若干の微細な剥離が認められ、使用痕と考えられる。この使用痕も含め、石材全体の風化が激しい。主要剥離面（図左側の面）右下の面と上下端の面は、本来、素材（原石）の面であったと思われる。

S2 は二等辺三角形状を呈する凹基式の打製石鏃で、全体的に磨耗が激しい。気泡の多い粗悪なサヌカイトを用いつつも、根気よく細かな剥離を試み、横断面形をレンズ状に近づけている。

S3･S4 は小型の砥石で、置き砥石ではなく手持ち砥石と考えられる。S3 は灰白色の凝灰質砂岩を用い、４面の砥面を形成し、いずれも大きく内湾しよく使用されている。S4 は暗灰色の凝灰質極細粒砂岩を用い、非常に緻密な石材であることから仕上げないしは研ぎ直しに用いられたことが考えられる。砥面は隣り合う３面が遺存し、ともによく使用されている。砥面のうち図正面のもののみが比較的平滑で若干内湾するが、両側面の砥面はいずれもよく内湾している。

表２　出土石製品一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	種別	器種	石材	法量(cm)			法量(g)	残存
							長さ	幅	厚さ	重さ	
S1	41	80		石製品	剥片	サヌカイト	3.10	1.80	0.40	3.1	完形
S2	41	80	確認調査トレンチ	石製品	石鏃	サヌカイト	2.30	1.60	4.50	1.2	完形
S3	41	80		石製品	砥石	凝灰質砂岩	4.50	2.55	3.25	24.6	完形
S4	41	80	旧河道	石製品	砥石	凝灰質極細流砂岩	5.45	1.45	0.65	4.5	欠損

表３　長越遺跡Ⅲ出土遺物観察表

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
1	土師器	壺	SH01南東部底床部焼工面	ヨコナデ、竹管文付き円形浮文	稜線を持たない二重口縁で端部丸い	(15.7)	(4.5)			口径1/8	
2	土師器	壺	SH01高床部	内面ナデ、外面ミガキ	球形の体部で丸底		(9.9)	10.6		体部3/4、底部完形	土器2
3	土師器	甕	SH01低床部	ヨコナデ	外反し端部肥厚	(14.6)	(2.2)			口縁1/10	
4	土師器	甕	SH01	外面タタキ、ナデ仕上げ	ドーナツ底から内湾する体部		(2.6)		(5.5)	底部完形	
5	土師器	甕	SH01東側拡張	手捏ねからナデ、タタキ底？	不安定な突出平底から外傾する		(3.0)		(2.4)	底部1/3	
6	土師器	高杯	SH01	ナデ、ミガキ、ヨコナデ	内湾し端部丸い、脚は外半ぎみに延びる	(11.3)	(7.6)			口縁わずか、脚柱部	
7	土師器	鉢	SH01	ユビ成形からハケ・ナデ、ヨコナデ	直線的に開き端部内側に肥厚する	(25.7)	(8.2)			口縁1/12	天地逆かも
8	土師器	壺	SH02アゼ	ハケ成形からナデ・ヨコナデ	屈曲して外反し端部丸い	(15.8)	(8.0)			口縁1/6	
9	土師器	壺	SH02北半	ナデ、ヨコナデ	外形し端部尖る	(13.8)	(5.9)			口縁1/5	
10	土師器	壺	SH02北半	ヨコナデ	外反し稜線持たずに外反し端部尖る		(4.3)			小片	山陰
11	土師器	壺	SH02北半	ヨコナデ	外反し突出してから内傾し端部丸い	(14.0)	(6.2)			口縁1/8	表面磨滅、山陰
12	弥生土器	壺	SH02北半埋土	ナデ	外反し端部角ばる	(11.6)	(4.6)			口縁1/7	
13	土師器	鉢	SH02南半	ユビ成形からハケ・ナデ、ヨコナデ波状文	外傾し端部丸い		(4.3)			口縁小片	
14	土師器	壺	SH02南半	ユビ成形からハケ・ナデ、粘土紐継ぎ目	内湾する		(8.8)			底部1/2	
15	土師器	甕	SH02南半	タタキからナデ	平底から外傾		(4.6)		(4.8)	底部1/3	
16	土師器	底部	SH02アゼ	ハケ成形からナデ・ヨコナデ	平底から外傾		(2.2)		(5.8)	底部2/3	黒斑
17	土師器	鉢	SH02南半床面	ユビ成形からナデ、木葉痕	木葉痕の不安定な平底、内湾する体部		(2.5)		(3.4)	底部1/3	
18	土師器	底部	SH02南半	ハケ成形からハケ・ナデ゛、底ヘラ描き	平底から外傾		(2.5)		(4.6)	底部3/4	
19	土師器	底部	SH02北半	内面ユビ成形からナデ、外面タタキ、タタキ底から底部再整形	上げ底から外反する		(2.4)		(3.5)	底部ほぼ完形	
20	土師器	底部	SH02南半	外面タタキからナデ、底部ナデ	平底から外反		(2.9)		4.6	底部完形	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
21	土師器	底部	SH02	内面ナデ、外面ハケかケズリ	外傾する体部で尖底		(3.5)			底部ほぼ完形	土器1
22	土師器	底部	SH02南半埋土	内面ナデ、外面ユビ成形からナデ、上げ底ナデ	上げ底から外反する		(2.6)		4.0	底部ほぼ完形	
23	土師器	壺	SH02南半	内面絞り、ユビ成形からナデ、外面ヘラミガキ、ナデ？	平底から倒卵形の体部で外傾する口縁部になる		(4.5)		3.0	底部完形	
24	土師器	ミニチュア	SH02ピット5	内面ユビ成形からナデ、外面ナデ	平底から内湾する		(3.4)		(2.6)	底部完形	
25	土師器	壺	SH02南半	内面ヘラケズリ・ヨコナデ、外面ヨコハケ	内湾する体部から短く外傾し二重口縁に		(10.0)	(23.0)		頚部1/10	
26	土師器	甕	SH02アゼ	外面タタキから口縁部折り曲げヨコナデ	外反する口縁部で端部丸い	(18.0)	3.0			口縁1/10	
27	弥生土器	甕	SH02南半	ヨコナデ、化粧土	外反する口縁部で端部丸い	(14.2)	(4.0)			口縁1/4	2次焼成
28	土師器	甕	SH02南半埋土	外面タタキ？からナデ、内面ナデ？、ヨコナデ	内湾する体部から外反する	(13.6)	(6.0)			口縁1/8	
29	土師器	甕	SH02南半埋土	外面ハケからナデ、ヨコナデ、ナデ	外反する口縁部で端部尖る	(14.8)	(4.4)			口縁1/9	
30	土師器	甕	SH02北半	ヨコナデ	外傾する口縁部で端部肥厚	(13.8)	(2.2)			口縁1/9	
31	土師器	甕	SH02南半	内面ヘラケズリからナデ、外面タタキからナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反し端部肥厚する	(16.3)	(4.8)			口縁1/9	
32	土師器	甕	SH02南半	内面ハケ、ヨコナデ		(15.8)	(3.0)			口縁1/6	
33	土師器	甕	SH02ピット1	ヨコナデ	外傾する口縁部で端部上へつまみ上げる	(17.2)	(4.7)			口縁1/13	
34	土師器	甕	SH02	ヨコナデ	外傾する口縁部で端部内側に肥厚	(14.6)	(3.2)			口縁1/6	土器3
35	土師器	甕	SH02南半	ヨコナデ？	内湾ぎみに延びる口縁部で端部外につまみ出す	(15.3)	(4.1)			口縁1/8	
36	土師器	甕	SH02南半	ヨコナデ？	内湾ぎみに延びる口縁部で端部外につまみ出す	(15.6)	(3.3)			口縁1/4	
37	土師器	甕	SH02	ヨコナデ	内湾ぎみに延びる口縁部で端部肥厚ぎみ	(15.7)	(3.2)			口縁1/4	
38	土師器	甕	SH02南半	内面ケズリ、外面ナデ、ヨコナデ	内湾する口縁部で端部丸い	(12.1)	(4.0)			口縁1/7	
39	土師器	甕	SH02北半	内面ユビナデ、外面ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する	(15.8)	(5.2)			口縁1/7	
40	土師器	高杯	SH02	内面ヘラミガキ、ヨコナデ	外傾する、端部丸い	(19.8)	(5.0)			杯部ほぼ完形	土器1、籾痕

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
41	土師器	高杯	SH02北半	ナデ？、透孔3ヶ所	外反する裾部で端部尖る		(6.9)		(13.8)	底部1/4	
42	土師器	高杯	SH02北半	外面ハケからナデ、内面ハケ、透孔3ヶ所か？	内湾する		(4.0)			脚柱部1/3	
43	土師器	高杯	SH02南半	内面絞り目、ナデ、接合面ギザギザにする	外傾する筒部から外反する		(5.8)		(7.8)	脚柱部ほぼ完	黒斑
44	土師器	脚台	SH02南半	ヘラミガキ？、ヨコナデ、ナデ	外反し端部丸い		(3.1)		(6.6)	底部1/7	
45	土師器	製塩土器	SH02南半	ナデ？	薄く外傾し端部丸い		2.2		(4.2)	底部1/6	
46	土師器	製塩土器	SH02アゼ	ナデ、括れ部ユビ成形	外反し端部丸い		(2.3)		(4.2)	脚部1/4	
47	土師器	器台	SH02南半	ヨコナデ、ヘラミガキ、底部ヘラケズリ	内湾する上台部、突帯になり筒部狭い	(9.6)	(4.6)			上台口縁1/4	山陰
48	土師器	器台	SH02北半埋土	ヨコナデからナデ？	内湾し端部尖る	(9.6)	(4.0)			口縁1/3	
49	土師器	器台	SH02	内面板ナデ、外面横方向のミガキ、上台接合のナデ、焼成前円孔4ヶ所	外傾する裾部で端部尖る、上台は外傾		(8.3)		10.6	脚部ほぼ完	
50	土師器	甕	SH03中央土坑	ヨコナデ	外傾し端部丸い	(15.2)	(3.9)			口縁1/9	
51	土師器	壺	SH03南東隅土坑	ヨコナデ	屈曲しながら外傾し端部丸い	(12.6)	(5.2)			口縁1/10	
52	土師器	鉢	SH03北半	ハケからナデ、粘土紐継ぎ目	薄く半球形に内湾し端部丸く内傾する	(9.9)	(4.5)			口縁～底部1/4	
53	土師器	鉢	SH03北半	外面ハケかナデ、粘土紐継ぎ目	内湾し端部丸い	(10.6)	(3.8)			ほぼ完形	
54	土師器	器台	SH03北半	内面ヘラケズリ、ハケからナデ、外面ヘラミガキからナデ、透孔4ヶ所	外傾する		(5.3)		(10.8)	脚部1/2	河内
55	土師器	甕	SH04下	内面板ナデ一部工具痕あり、外面タタキ、途中タタキのちナデ、底部ナデ	ドーナツ底から下膨れの球形体部から外反する口縁部	15.5	23.0	19，6	3.2	ほぼ完形	
56	土師器	甕	SH04下	内面ユビ成形からケズリ？のちナデ、外面タタキのちハケ、ヨコナデ	小さな平底から内湾し口縁部外反し端部角張る	(14.3)	21.0	18.1	3.0	口縁1/3・体部3/4・底部1/2	
57	土師器	甕	SH04下	内面ユヒ成形゛からハケのち板ナデ、刻み目	内湾する体部から外反する口縁部で端部丸い	(18.0)	(9.0)			口縁1/5・体1/3	
58	土師器	甕	SH04下	外面平行タタキからタテハケのちナデ、内面板状工具のナデ、ヘラケズリ	球形の体部で平底、口縁部外反し端部丸い	(15.0)	(17.5)			口縁1/4・体2/3	
59	土師器	甕	SH04東半	内面ハケ、ケズリ、外面ハケからナデ、ヨコナデ	くの字で口縁部外傾し端部上につまみ上げる	(15.8)	(3.1)			口縁1/8	
60	土師器	甕	SH04下	内面ヘラケズリ、外面タテハケ、ヨコナデ	外反し端部肥厚	(16.2)	(3.0)			口縁1/7	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
61	土師器	甕	SH04東半	ハケ、ヨコナデ、端面沈線	外傾し端部角張り肥厚	(17.0)	(3.4)			口縁1/9	
62	土師器	甕	SH04下	内面ユビオサエ、ヘラケズリ、ナデ、外面タテハケ目からナデ、ヘラミガキ	平底から倒卵形の体部になり短く外傾し端部肥厚	(13.8)	(25.5)	(22.0)	(5.0)	口縁1/8・底部1/7	讃岐
63	土師器	壺	SH04下	ナデ、外面木葉痕、内面粘土紐痕	内湾する		(4.7)			体部小片	
64	土師器	甕	SH04アゼ	内面ユビ成形から板ナデ、外面タタキからナデ	上げ底で外傾する		(2.9)		(6.0)	底部1/3	
65	土師器	甕	SH04下	内面ナデ、外面ユビ成形からハケ状工具でナデ？、底部ナデ	平底から内湾する		(3.1)		(3.8)	底部ほぼ完	
66	弥生土器	甕	SH04下	内面ナデ、外面タタキからヨコナデ、底部ナデ	上げ底から外反する体部		(3.9)		(5.8)	底部3/4	2次焼成
67	土師器	脚台	SH04西半	ユビ成形からナデのちミガキ、ヨコナデ	外反し端部丸い		(3.3)		(6.7)	脚底部1/2	
68	土師器	手焙土器	SH04	内面ユビ成形から板状工具のナデ、外面ナデ、底部ナデ	平底で内湾する球形体部　端部僅かに反る		(6.4)		(6.8)	底部1/4・体部3/4	
69	土師器	壺	SH06土器3	内面ハケ目のちミガキ？、外面ヨコナデ、一部にタテ方向の工具のアタリ痕？	外反し端部尖る	(15.4)	(4.2)			口縁1/15	
70	土師器	壺	SH06	外面ヨコナデ、内面ナデ、スス付着	外反し端部丸い	(13.2)	(3.8)			口縁3/4	土器4
71	土師器	壺	SH06	ヨコナデ、貼り付け円形浮文から竹管文	外傾し端部尖る二重口縁部で浮文付く		(3.3)			口縁小片	土器2、炭あり
72	土師器	甕	SH06	ヨコナデ	外反する二重口縁		(2.6)			口縁小片	2次焼成　山陰
73	土師器	甕	SH06床面上面	ヨコナデ、強いヨコナデによる擬凹線状	外反する二重口縁		(3.1)			小片	山陰
74	土師器	壷	SH06	外面ヨコ方向の粗いタタキ、ハケ目、内面ヨコ方向の板ナデ、ハケ、ナデ、指痕	小さな平底からやや倒卵形に近い球形の体部		(44.1)	41.3	6.0	体部7/8・底部1/1	土器8　籾痕
75	土師器	甕	SH06	ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(10.8)	(4.8)			口縁1/3	強く焼ける（赤変）
76	土師器	甕	SH06	ヨコナデ、外面ハケ、口縁部凹凸	内傾する体部に外傾する口縁部	(16.4)	(3.8)			口縁1/7	土器4
77	土師器	甕	SH06	外面波状文、内面ナデ？	外傾し端部丸い		(2.9)			口縁小片	
78	土師器	甕	SH06	外面タタキのちハケ、内面ユビ成形からケズリのちハケ、	倒卵形の体部に尖底、外反する口縁部で端部丸い	(16.6)	22.4	21.7	2.0	口縁1/3・体部7/8・底部完存	土器1
79	土師器	壺	SH06床面上面	外面タタキからナデ、内面ナデ、底部ナデ	突出平底から内湾する		(3.1)			底部3/4	
80	土師器	壺	SH06	内面板状工具のナデ？、外面タタキのちナデ、底面ナデ	突出平底から内湾する		(3.2)		(5.0)	底部1/2	土器6

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
81	土師器	壺	SH06	外面タタキからナデ、内面ナデ	突出平底から内湾する		(2.1)		(5.0)	底部小片	
82	土師器	壺	SH06	内面工具のアタリ痕、側面から底部ナデ	突出平底から内湾する		(2.6)		(4.3)	底部1/2	土器3
83	土師器	底部	SH06焼土坑	ナデ、底部ケズリ	平底から外傾する		(1.9)		(5.1)	底部1/4	2次焼成
84	土師器	鉢	SH06	内面ハケ？	内湾し端部尖る	(12.6)	(5.6)			口縁2/3	土器1　2次焼成
85	土師器	小型丸底壺	SH06	ユビ成形、内外面赤色付着	内湾する体部に外傾する口縁部で端部尖る、尖底ぎみ	11.7	7.9	11.2	2.6	口縁1/2・体部1/2・底部完存	土器4
86	土師器	鉢	SH06	ヨコナデ、外面下部ユビオサエ成形、底部ナデ	上げ底から内湾し端部丸い	(10.2)	5.0		4.4	底体部完・口縁1/2	土器5　2次焼成
87	土師器	鉢	SH06	外面タタキからナデのち板状工具のナデ痕？、内面ナデ、ヨコナデ、底部ナデ	平底から内湾し端部丸い	(10.4)	(5.5)		(3.1)	底部完・口縁1/2	分割成形の下半か　黒斑
88	土師器	高杯	SH06	内面ナデ、外面細かいミガキ？、透孔4ヶ所？	外傾する		(7.3)		(10.0)	脚部1/3	土器6
89	土師器	高杯	SH06	ナデ、透孔3カ所か？	外反する		(2.2)	2.0		脚柱部ほぼ完	
90	土師器	高杯	SH06焼土坑	内面ミガキのち暗文？、外面ミガキかナデ、杯部ミガキ？、焼成前透孔4ヶ所	外傾する裾広がりになり杯部は水平から内湾し端部丸い	(14.9)	(8.7)			口縁1/6・坏部1/3・脚部1/6	
91	土師器	壷	SH05	外面ハケのちナデ？、内面ヨコハケのちナデ、ヨコナデ、端部周辺有機質付着	外反し端部尖る	(11.2)	(5.0)			口縁1/10	
92	土師器	ミニチュア	SH05	ナデ、内面ミガキ？	小さな平底から内湾		(1.6)			底部完形	
93	土師器	製塩土器	SH05	底部ハケからナデ？、ナデ	外反し端部尖る		(2.5)		(4.0)	脚柱部完形	
94	土師器	器台	SH05	外面ミガキのちナデ？、ナデ、ヨコナデ、透孔4ヶ所	筒部中実で浅い上台部、内湾する下台で端部尖る	(7.2)	(7.3)		(9.4)	脚柱部ほぼ完形	
95	土師器	甕	SH08	内面ハケ目のちナデ、外面平行タタキからハケ目のちナデ	球形の体部から鋭い稜線を持つ頸部になり外反する	(15.8)	(13.2)	(17.2)		口縁2/9・体部1/4	
96	土師器	甕	SH08	内面ヘラケズリ、ヨコナデ、外面タタキ、沈線	外傾し端部面で上につまむ	(12.4)	(3.7)			口縁1/2	赤変
97	土師器	壺	SH08	内面ハケからナデ？、外面ハケからナデ、底部強いナデ	僅かな上げ底から外傾する		(4.8)		(5.0)	底部2/3	
98	土師器	壺	SH08	内面タテヘラケズリ？、外面タテハケ目、底部内面絞り目状	小さな平底から内湾する		(5.1)		(2.0)	底部完形	
99	土師器	壺	SH08	内面ユビ成形のちナデ、外面タタキのちハケ、ヨコナデ	球形の体部に外傾する口縁部で端部尖る	(10.1)	10.8	12.2		口縁1/3・体部1/3・底1/2	
100	土師器	高杯	SH08	ヘラミガキ？、底部ナデ	内湾する杯部で端部尖る、中実の筒部	(11.0)	(6.0)			口縁1/9	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
101	土師器	甕	SH10北端	ヨコナデ	内傾する体部に短く外傾しつまみ上げて二重口縁に	(11.7)	(2.7)			口縁1/12	近江の影響
102	土師器	甕	SH10北端	ヨコナデ、外面スス付着	外傾から外反し端部丸い	(12.4)	(1.8)			口縁1/7	
103	土師器	壺	SH11（SX01・02）床面	内面ナデ？、強いヨコナデ、外面ハケのちナデ、ヨコナデ	内傾する体部から外傾する口縁部で端部丸い	17.9	(7.3)			口縁2/5	
104	土師器	壺	SH11	内面ユビ成形からナデ、外面タタキからハケ、底部ナデ	平底から内湾する		(3.3)		(6.0)	底部1/3	
105	土師器	高杯	SH11	内面ハケからナデ、ヨコナデ、外面ヘラミガキかハケ	内湾から緩やかに外傾する杯部で端部尖る	(17.8)	(6.0)			口縁1/10	
106	土師器	壺	SK01	強いヨコナデ、段になる	外反し突出してから外反し端部丸い	(18.8)	(5.7)			口縁若干	
107	土師器	壺	SK03	外面ヨコナデ？、ミガキ？	内傾する体部から外傾する口縁部で端部外につまむ	(13.0)	(6.6)			口縁1/10	
108	土師器	器台	SK03	外面タタキ？からヨコナデ、円形浮文	外傾し端部上につまみ上げる	(18.5)	(2.4)			口縁1/10	
109	土師器	壺	SX01	一部ハケ痕あり、ヨコナデ	外反し端部上につまみ上げる	(21.8)	(7.3)			口縁1/4・頚部3/4	
110	土師器	壺	SX03	内面ハケ、ナデ？、外面ヨコナデ	外反し端部丸い	14.9	(7.7)			口縁1/2	
111	土師器	壺	SX03床面	外面タテ方向の板ナデのちヨコナデ、工具痕、内面ヨコナデ	直立ぎみの頸部から外傾し二重口縁になる		(3.4)	6.7		頚部ほぼ完存	
112	土師器	甕	SX03	外面ヨコナデ、内面ナデ？	内傾する頸部に外傾する口縁部、端部角張る	(14.8)	(4.9)			口縁1/9	
113	土師器	甕	SX03床面	内面ナデ、粘土紐、外面ハケ目？のちナデ、ヨコナデ	内傾する体部から外傾する口縁部で端部肥厚	(15.8)	(4.0)			口縁1/12	
114	土師器	甕	SX03	内面ユビ成形からナデ、ハケ、外面タタキ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部で端部角張る	(15.2)	(7.1)			口縁1/4	土器2
115	土師器	甕	SX03南半	内面ハケ目のちナデ、外面ヨコナデ	内傾する体部に外傾する口縁部、端部丸い	(18.9)	(3.8)			口縁1/6	
116	土師器	甕	SX03	内面ヨコ方向のヘラケズリ・ヘラケズリ、外面平行タタキからタテハケ、ヨコナデ	球形の体部に内湾ぎみの口縁部で上につまみ上げる	(14.3)	(17.5)			口縁・底ほぼ完形体部2/3	黒斑
117	土師器	甕	SX03	内面ケズリ、外面タタキからハケ、口縁部ハケ、ヨコナデ、煤付着	尖り底から長胴球形の体部から外傾する口縁部	(17.1)	29.2	26.0		口縁2/3・体部2/3	土器5
118	土師器	壺	SX03	内面ケズリ？のちナデ、外面平行タタキのちケズリ、底部ナデ	平底から内湾する		(5.35)		7.05	底部完存	讃岐、黒斑、土器3
119	土師器	鉢	SX03	内面ナデ？、外面ハケのちナデ、ヨコナデ、端面沈線？	内湾する体部から外傾する口縁部で端部角張る	(39.5)	(9.5)			口縁1/12	土器2
120	土師器	鉢	SX03	内面ナデ、外面ハケのちナデ、ヨコナデ、粘土紐、煤付着	内湾する体部に外傾する口縁部で端部尖る	(12.3)	4.6		(2.6)	口縁1/9・体部1/4弱	土器4

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
121	土師器	高杯	SX03床面	内面ナデのちミガキ・ナデ、外面ヨコナデ・ナデ、粘土紐継ぎ目	内湾し端部外側に尖る	(11.9)	(3.6)			口縁わずか、体部1/4	2次焼成
122	土師器	器台	SX03	内面ヨコナデのちナデ、外面タテ方向のケズリのちヨコナデ	内湾し端部上につまみ上げ尖る	10.15	(3.0)			杯部ほぼ完形	土器4　黒斑
123	土師器	器台	SX03北半	内面ハケのちナデ、外面ケズリのちナデ、ヨコナデ、煤付着	内湾し端部上につまみ上げ尖る	(10.4)	(2.8)			口縁～杯底3/8	
124	土師器	製塩土器	SX03	内面板ナデ、外面タタキ・ユビオサエ、底部ユビオサエ	体部外反ぎみで筒部中実になり上げ底		(4.4)		4.4	底完	(10)
125	弥生土器	壺	SX04	ヨコナデ、指頭圧痕文突帯、4本の凹線のち棒状浮文2個	外反し端部内外に肥厚する	(20.8)	(6.7)			口縁1/8	写真あり
126	弥生土器	壺	SX04	ヨコナデ？	外反し端部ひこうし角張る	(11.0)	(3.4)			口縁1/10	写真あり
127	土師器	甕	SX04	内面ケズリ、ヨコナデ、端面沈線	内傾する体部から外反し端部内側につまむ	(17.0)	(3.0)			口縁1/8	
128	土師器	甕	SX04	外面タタキ、ヨコナデ	内傾する体部からが外傾する口縁部で端部上につまむ	(14.9)	(4.1)			口縁1/8	
129	土師器	甕	SX04	外面タタキのちヨコナデ・煤付着、内面ハケ	内傾する体部からが外傾する口縁部で端部上につまむ	(15.0)	(3.7)			口縁1/6	
130	土師器	甕	SX04	内面ケズリ、外面タタキ、ヨコナデ	内湾する体部に外傾する口縁部で端部上につまむ	(16.6)	(4.7)			口縁1/14	
131	土師器	鉢	SX04	外面ハケ、ヨコナデ	内湾する体部から外反し端部尖る	(28.0)	(13.6)	(30.0)		口縁1/4	
132	土師器	甕	SX04	内面板ナデ、外面タタキ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反し端部尖る	(19.8)	(5.3)			口縁1/6・体若干	写真あり
133	土師器	甕	SX04	外面タタキのちヨコナデ、内面ナデ？、ヨコナデ？	外反する口縁部で端部丸い	(17.5)	(2.3)			口縁1/6	写真あり
134	土師器	甕	SX04	外面タタキのちヨコナデ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	内傾する体部から外反し端部尖る	(15.0)	(3.0)			口縁1/4	
135	土師器	甕	SX04	内面ユビ成形、ケズリ、ヨコナデ、外面ミガキ、ヨコナデ、8条の擬凹線	肩の張る肩部で短く大きく外反する頸部から内傾する	(14.8)	(13.2)	(22.5)		口縁・体部若干	写真あり　吉備
136	土師器	甕	SX04	内面ケズリ？、外面ヨコナデ	内傾する体部から短く外反し稜線を持って外反	16.3	(8.2)			口縁3/4	山陰
137	土師器	甕	SX04	外面タタキ・ユビオサエ、ナデ、底部端ユビ成形による凹凸あり	ドーナツ底から内湾する		(2.6)		(4.8)	底部1/2	写真あり　黒斑
138	土師器	甕	SX04	内面板ナデ、外面タタキ、底部葉脈痕、中央部凹む	中央凹む平底から外傾		(1.8)		3.2	底部3/4	写真あり
139	土師器	高杯	SX04	ミガキ、ユビオサエ、ハケ、透孔4ヶ所	外反する		(4.1)			脚部1/2	写真あり　2次焼成
140	土師器	器台	SX04	ヨコナデ、端面と上面に波状文	水平ぎみに外反し端部下に垂下し丸い	(37.0)	(1.75)			口縁1/12	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
141	土師器	不明	SX04	ユビ成形、ナデ	水平に延び直立するか	長(11.3)	幅(5.35)	厚(1.8)			複合土器か
142	土師器	甕	SD01	ナデ、ヨコナデ、粘土紐継ぎ目	内湾する体部から外傾し端部角張る	(15.8)	(3.6)			口縁1/5	
143	土師器	甕	SD06	ヨコナデ、外面強いヨコナデによる擬凹線？	外傾し屈曲して内側に外反し端部丸い		(3.2)			小片	吉備
144	土師器	壺	SD06	外面ヘラミガキ？、ヨコナデ	外反し端部尖る		(5.0)			小片	讃岐
145	土師器	甕	SD06	ヨコナデ	外反し端部丸い		(3.1)			小片	石あり
146	土師器	壺	SD06	ヨコナデからナデ	内湾する		(5.5)	(15.0)		体部1/3	表面磨滅
147	土師器	甕	SD06	内面ユビ成形からナデ、外面タタキをナデ消す、底部ナデ	平底から外反する		(3.7)		(5.2)	底部1/2	石あり
148	土師器	壺	SD06	内面ナデ、外面タタキからナデ、底部木葉痕からナデ	ドーナツ底から内湾する		(3.7)		(5.6)	底部2/3	
149	土師器	壺	SD09	外面太いヨコハケ、ナデ	長く外反し端部丸い	(13.3)	(5.9)			口縁～頸部ほぼ完形	
150	土師器	壺	SD09	ヨコナデ	外傾し端部角張る	(13.8)	(6.3)			口縁1/4	表面磨滅
151	土師器	壺	SD09	内面黒色ヨコヘラミガキ、ヨコナデ	外反し変化してさらに外反	(23.8)	(5.3)			口縁1/9	讃岐　有機質塗布
152	土師器	壺	SD09	内面ヨコ方向のヘラケズリ、ヨコナデ、ナデ、端面沈線	外反し端部角張り肥厚ぎみ	(15.6)	(5.3)			口縁1/4	
153	土師器	壺	SD09	内面ハケからヨコナデ、外面タテ方向のハケ目のちヨコナデ	外反し端部角張り肥厚ぎみ	(17.65)	(6.05)			口縁1/6	
154	土師器	甕	SD09	内面ユビ成形からナデ、外面ハケ、ヨコナデ	内湾すら体部に外反する口縁部で端部尖る	(14.2)	(4.1)			口縁1/5	
155	土師器	甕	SD09	内面ヘラケズリ、ヨコハケ、外面ハケ？、ヨコナデ	内傾する体部から外傾する口縁部で端部丸い	(14.3)	(2.8)			口縁1/6	
156	土師器	甕	SD09	内面横方向のヘラケズリ、一部ハケ、ヨコナデ	外反し端部薄く丸い	(17.8)	(3.6)			口縁1/6	
157	土師器	甕	SD09	内面ケズリ、外面ヨコ平行タタキ、ヨコナデ	内湾ぎみの口縁部で端部内側に肥厚、体部も内湾	(17.6)	(4.3)			口縁1/4	
158	土師器	甕	SD09	内面横方向のハケ・縦方向のケズリ、外面右上がりタタキ・縦方向のハケ	倒卵形の体部に尖底、外反する口縁部で端部肥厚	(17.2)	29.0	(23.8)	0.8	口縁1/2、体部1/8、底部1/1	2次焼成
159	土師器	甕	SD09	内面縦方向のケズリのちナデ、外面螺旋状のタタキから板ナデ、木葉痕	平底から内湾する		(5.65)		4.85	底部1/1	黒斑
160	土師器	小型丸底壺	SD09	内面ユビ成形からナデ、外面ハケ？からナデ、ヨコナデ	僅かな平底から半球形の体部、口縁部外傾し尖る	(10.0)	(6.7)			体部1/４	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
161	土師器	鉢	SD09	ユビ成形からナデ・粘土痕あり、底部木葉痕からナデ工具痕？	平底から内湾し端部尖る	11.3	5.85		3.05	口縁1/3、底部1/1	底面ヘラ記号状工具痕2次焼成
162	土師器	甕	SD11	ヨコナデ	内湾ぎみで端部角張る	(15.8)	(3.0)			口縁1/9	2次焼成
163	須恵器	高杯	旧河道（黒褐砂・シルト）	ロクロナデ・ナデ	外反する脚部で端部角		(4.25)		8.3	脚部3/4	5トレンチ
164	須恵器	杯身	旧河道（黒褐砂・シルト）	ロクロナデののち1方向ナデ	直線的に開き内径受部短い	(11.2)	4.1		(10.7)	約1/4	
165	土師器	壺C	旧河道（黒褐砂・シルト）	ハケ整形からヨコナデ	わずかに外反し端部尖る	(14.8)	(6.1)			口縁1/3	
166	土師器	壺C	旧河道（黒褐砂・シルト）	ハケ整形からヨコナデ	外傾する頸部		(6.1)	(9.4)		頸部1/7	5トレンチ
167	土師器	壺C	旧河道（黒褐砂・シルト）	ハケ整形からヨコナデ	外反する口縁部で肥厚	(17.6)	(8.6)			口縁1/10	
168	土師器	壺C	旧河道（黒褐砂・シルト）	ハケ整形、ナデ	内湾する		(8.0)			体部小片	5トレンチ
169	土師器	壺D	旧河道（黒褐砂・シルト）	ヨコナデ、竹管文着き円形浮文・波状文、ミガキ	やや突出	長(3.05)	幅(3.85)	厚1.25		体部小片	
170	土師器	小片	旧河道（黒褐砂・シルト）	波状文、ナデ	外傾する	長(4.7)	幅(2.9)	厚1.0		体部小片	
171	土師器	壺C	旧河道（黒褐砂・シルト）	ユビ成形からナデ、ヘラ描き	内湾する		(8.1)			体部小片	2トレンチ
172	土師器	壺C	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面ハケ、内面ケズリ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部で端部外につまむ	(16.75)	(14.65)			口縁若干、頸部5/6、肩部3/4	2トレンチ
173	土師器	壺C	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面ハケのちヨコナデ、内面ケズリ、ナデ	内湾する体部から外反する口縁部で端部丸い	(13.75)	(17.15)	(23.0)		口縁1/12、頸部1/3、肩部1/3	2次焼成
174	土師器	壺D	旧河道（黒褐砂・シルト）	ヨコナデ	外反する頸部から突出して口縁部外反する	(18.5)	(5.9)			口縁1/7	2次焼成　山陰
175	土師器	壺D	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面ハケからナデのちミガキ、ヨコナデ	直立する頸部から水平に開き突出して外反する	(21.4)	(7.9)			口縁1/4	山陰　2トレンチ
176	土師器	壺D	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ケズリ上からナデ、外面ミガキ、強いヨコナデ	内湾する体部から直立ぎみの頸部、口縁突出して外反	15.3	(11.65)			口縁1/2、肩部1/5	山陰　2トレンチ
177	土師器	壺D	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ハケのちヨコナデ、外面ハケのちヨコナデ、凹線	直立する頸部から水平に開く二重口縁で外反する	23.6	(8.15)			口縁3/4	
178	土師器	壺D	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面タタキからミガキのちナデ、竹管文付き円形浮文貼付、内面ハケ、ユビナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反し突出してから外反し端部角張る	(20.8)	(20.0)	(29.4)		口縁わずか、頸部1/2	2トレンチ
179	土師器	壺D	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面ミガキ、ハケ、内面工具のアタリ痕、ヨコナデからミガキ	小さな平底から扁平な球形の体部、外反する口縁部	頸(10.1)	(23.3)		2.7	頸部1/2、底部ほぼ完形	黒斑　2トレンチ
180	土師器	壺	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面タタキから工具ナデ、ケズリ	平底から内湾する		(3.2)		(4.0)	底部1/3	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
181	土師器	甕	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面板ナデのちミガキ、底部ナデ・ヘラ記号あり	平底から内湾する		(3.75)		4.5	底部1/1	籾痕
182	土師器	底部	旧河道（黒褐砂・シルト）	磨滅のため不明	底部再成形で内湾する		(3.9)		3.3	底部1/1	磨滅
183	土師器	ミニチュア	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面ハケからナデ、ミガキ、内面絞り目、ユビ成形	扁平な球形で外傾する頸部		(5.4)	(8.2)		体部1/2	2トレンチ
184	土師器	鉢	旧河道（黒褐砂・シルト）	ケズリ、ヨコナデ	内湾し端部丸い	(16.0)	(5.3)			口縁、体部ほぼ完形	5トレンチ
185	土師器	小型丸底壺	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面縦ハケから横ハケのちナデ、板ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する短い口縁部で端部丸い	(8.8)	(4.8)			口縁1/7	2次焼成　2トレンチ
186	土師器	甕C	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ハケ、ヨコナデ、口縁部に沈線状の窪み	外傾し端部上につまみ上げる	(16.55)	(2.4)			口縁1/4	2トレンチ
187	土師器	甕A	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ケズリのちナデ、ハケのちヨコナデ、外面ヨコナデ	内傾する体部から短く外反し稜線を持って外傾	(12.7)	(4.35)			口縁1/7弱	
188	土師器	甕A	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ケズリ、外面ハケ、ヨコナデ	内傾する体部から外傾し端部外につまみ出す	(15.7)	(6.0)			口縁1/3	吉備　2トレンチ
189	土師器	甕K	旧河道（黒褐砂・シルト）	ヨコナデ、内面ケズリ、外面ハケ	内傾する体部に短く外反する頸部、外傾し直立する二重口縁になり端部丸い	(11.9)	(3.4)			口縁1/8	吉備
190	土師器	甕K	旧河道（黒褐砂・シルト）	ヨコナデ、擬凹線？	外反する頸部から突出して内傾する口縁部で端部丸い	(13.2)	(3.4)			口縁わずか、頸部1/4	吉備
191	土師器	甕K	旧河道（黒褐砂・シルト）	ヨコナデ、内面ケズリ、擬凹線8条、煤付着	短く外反する頸部から外傾し突出してから直立する	(15.7)	(3.55)			口縁1/9	吉備
192	土師器	甕C	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面横ハケ、外面タタキ、ユビオサエからヨコナデ、端面沈線	内傾する体部から外傾する口縁部で端部肥厚ぎみ	(13.8)	(5.5)			口縁1/6	
193	土師器	甕C	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ハケのちヨコナデ、外面工具のアタリ痕、タタキのちヨコナデ、端面沈線	内傾する体部から外反する口縁部で端部上につまむ	(17.0)	(3.55)			口縁1/4強	
194	土師器	甕C	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面タタキからミガキ、板ナデ、ヨコナデ	肩が張り内湾する体部外反し端部丸い	(15.0)	(7.4)	(18.8)		口縁1/10、体部1/4	河内の影響　2トレンチ
195	土師器	甕A	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ナデ、ハケ、外面ハケからタタキのちナデ、ヘラ記号上から竹管文、ヨコナデ	内湾する長胴の体部で口縁部外反し端部肥厚	(14.1)	(18.8)	(21.2)		口縁1/8、体部1/3	装飾　2トレンチ
196	土師器	甕L	旧河道（黒褐砂・シルト）	ヨコナデ	内傾する体部から内湾する口縁部で端部肥厚	(14.0)	(3.7)			口縁1/4	
197	土師器	甕A	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面タタキからナデ、竹管文	内湾する		(4.8)			体部小片	5トレンチ
198	土師器	甕	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ハケからナデ、外面ハケ、底部ナデ	小さな平底から外傾		(4.4)		3.3	底部1/1	
199	土師器	壺	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面ハケ？からナデ、内面工具ナデ	平底から内湾する体部		(2.1)		2.4	底部完形	黒斑
200	土師器	甑	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面タタキからナデ、内面ユビ成形から貝殻状痕、底部タタキからナデ	平底から内湾する、焼成前穿孔		(5.3)		2.6	底部完形	2トレンチ

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
201	土師器	底部	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面貝殻状痕からナデ、外面ケズリからナデ、ハケ	尖り底から内湾する		(6.1)	(9.6)		底部ほぼ完形	黒斑　5トレンチ
202	土師器	鉢	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ケズリからナデ、ヨコナデ、外面タタキのちハケ	内傾する体部から外反し突出してから外反する	(27.5)	(8.05)			口縁1/9	
203	土師器	鉢	旧河道（黒褐砂・シルト）	ハケからナデ、ケズリ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾し端部丸い	(35.2)	(7.5)			口縁1/8	
204	土師器	鉢	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ケズリ、外面ハケ目、ヨコナデ	内湾する体部で短く外反する頸部、直立する口縁部で端部角張る	(29.4)	(12.15)	(33.4)		口縁～体部小片	黒褐色の砂
205	土師器	鉢	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ユビ成形からナデ、外面タタキのちハケ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する	(31.8)	(15.4)	(33.7)		口縁、頸部5/8、体部1/8	黒褐色の砂　黒斑
206	土師器	高杯	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面串状工具、ミガキ、透孔4ヶ所	外反する裾部で端部角張る		(6.9)		(13.4)	脚部ほぼ完形	
207	土師器	高杯	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面ハケのちミガキ、ヨコナデ、内面絞り目からナデ、ケズリからナデ、透孔3カ所	中空の直立する筒部から内湾ぎみに広がり端部下につまむ		(4.45)		(15.2)	底部4/9	円板充填
208	土師器	器台	旧河道（黒褐砂・シルト）	ヨコナデ、接合部で割れる	内湾してから端部近くで外反し端部丸い	(9.9)	(2.85)			杯部1/4	黒褐色の砂
209	土師器	器台	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ヘラミガキ、外面ハケからミガキ、ヨコナデ	浅く内湾し端部近く直立し端部丸い	(8.9)	(2.4)			口縁1/4	黒褐色の砂（種・木・石あり）
210	土師器	器台	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面ケズリのちミガキ、ヨコナデ、杯部内面ハケ目のちナデ、絞り目ナデ	浅く内湾する上台で端部内側に尖る、下台は外傾し尖る、円形透孔4方	(10.0)	8.85		(11.7)	口縁1/7、底部3/8	
211	土師器	器台	旧河道（黒褐砂・シルト）	外面ミガキ、内面ハケのちミガキ、ヨコナデ、杯部内部絞り目のちナデ、ケズリのちヨコナデ、透孔3カ所	外傾し端部つまみ出す上台、長く外反し端部丸い裾	(10.55)	10.95		(13.65)	口縁2/5、底部1/3	
212	土師器	脚台	旧河道（黒褐砂・シルト）	内面ナデ、外面ヨコナデ、タタキ	外傾する体部に外反する脚台部		(3.5)			脚柱部1/1	5トレンチ
213	土師器	製塩土器	旧河道（黒褐砂・シルト）	ユビ成形	外反し端部丸い		(1.9)		4.7	底部ほぼ完形	5トレンチ
214	土師器	製塩土器	旧河道（黒褐砂・シルト）	ナデ	外反し端部丸い、体部内湾		(2.1)		(4.4)	底部1/3	黒褐色の砂
215	土師器	製塩土器	旧河道（黒褐砂・シルト）	ユビ成形、内面ナデ	外反し端部丸い、体部内湾		(2.8)		4.4	底部完形	2トレンチ
216	土師器	壺C	旧河道（黒シルト）	内面ヘラケズリ、ハケ、内面ナデヨコナデ	内湾する体部から外傾し端部角張る	(13.0)	(8.5)			口縁1/2	
217	土師器	壺C	旧河道（黒シルト）	内面接合痕とユビオサエ、ハケ、外面ハケのち板ナデ、ヨコナデ	内傾する体部から外反し端部尖る口縁部	(16.1)	(9.0)			口縁若干、頸部1/4	石あり　黒斑
218	土師器	壺D	旧河道（黒シルト）	強いヨコナデ（カキメ状になる）	外反してから稜を持ち外反する二重口縁で端部丸い	(16.4)	(4.9)			口縁1/8	山陰　5トレンチ
219	土師器	壺D	旧河道（黒シルト）	外面ハケのちヨコナデ、竹管文	外反する頸部で稜を持ち直立ぎみに外反する	(19.6)	(8.8)			口縁1/4	石あり　讃岐
220	土師器	壺F	旧河道（黒シルト）	外面ハケ、凹線、内面ハケのちナデ、ヨコナデ	外反し直立する		(7.3)			頸部1/8	讃岐

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
221	土師器	壺F	旧河道（黒シルト）	内面ナデからミガキ、ナデ、外面ヨコナデ、竹管文付き円形浮文貼付	短く直立する頸部から外傾し内湾ぎみで端部角張る	21.0	(8.8)			口縁ほぼ完形	讃岐
222	土師器	壺F	旧河道（黒シルト）	ヨコナデ、内面ユビオサエ	外傾から内傾し端部角張る	(30.6)	(10.3)			口縁1/13	讃岐　2トレンチ
223	土師器	壺B	旧河道（黒シルト）	ハケからナデ、ヨコナデ	内傾する体部に外反する口縁部で端部内側に尖る	(13.4)	(9.2)			口縁3/4、体部1/3	2トレンチ
224	土師器	壺	旧河道（黒シルト）	内面ナデ、外面ナデの上からミガキ、ヘラ描き文様	内湾する	長(7.75)	幅(11.2)	厚0.65		体部小片	
225	土師器	小片	旧河道 西壁（黒シルト）	ナデ、外面タタキのちナデ、波状文	内湾する		(5.0)			体部若干	
226	土師器	甕A	旧河道（黒シルト）	内面ケズリ、工具痕、粘土紐の継ぎ目あり、ヨコナデ	内傾する体部に短く外傾する口縁部で端部丸い	12.85	(4.9)			口縁3/4	
227	土師器	甕A	旧河道（黒シルト）	内面ヘラケズリ、ヨコナデ	内湾ぎみの口縁部で体部も内湾し器壁厚い	(14.1)	(4.9)			口縁1/2	2トレンチ
228	土師器	甕A	旧河道（黒シルト）	内面ナデ、外面タタキのちハケ、ヨコナデ	内傾する体部から外反する口縁部、端部角張る	(11.5)	(5.8)			口縁1/6	
229	土師器	甕C	旧河道（黒シルト）	内面ケズリ、ヨコナデ	外反する口縁部で端部肥厚	(17.8)	(4.5)			口縁1/6	5トレンチ
230	土師器	甕C	旧河道（黒シルト）	内面ケズリ、ハケ、外面ヨコナデ、タタキ、端面沈線状に凹む	内傾する体部から外反ぎみの口縁部、端部内につまむ	(16.0)	(4.7)			口縁1/2	石あり
231	土師器	甕D	旧河道（黒シルト）	内面ユビ成形からハケのちナデ、ハケのちヨコナデ	内湾する体部部に外傾する口縁部で端部丸い	(14.9)	(5.9)			口縁1/4	
232	土師器	甕C	旧河道　肩部（黒シルト）	内面タタキ、ヨコナデ、内面ハケ、ケズリ	内湾する球形の体部		(16.5)	(20.0)		体部1/4	
233	土師器	甕C	旧河道（黒シルト）	内面ケズリからハケ、ハケからヨコナデ、外面タタキからハケ	内湾する体部から外傾し端部丸い	(16.2)	(15.5)	(21.0)		口縁2/3、体部1/5	5トレンチ
234	土師器	甕A	旧河道（黒シルト）	ナデ、ハケ、ヨコナデ	外反する口縁部で端部外に尖る、体部内傾	(18.6)	(6.35)			口縁1/3	
235	土師器	甕A	旧河道 肩部（黒シルト）	ヨコナデ、外面ハケ	外反し端部上につまみ上げる	(25.0)	(2.1)			口縁若干	
236	土師器	甕A	旧河道（黒シルト）	内面ケズリ	内湾する体部から外反する口縁部、端部丸い	(18.4)	(11.25)			口縁1/6、肩部1/4	
237	土師器	甕K	旧河道 西壁（黒シルト）	ヨコナデ、擬凹線？	外傾して内傾し端部丸い	(12.2)	(2.3)			口縁1/8	吉備
238	土師器	甕K	旧河道（黒シルト）	ヨコナデ、擬凹線	外反する頸部が外傾し直立ぎみに外反する口縁部	(15.8)	(3.4)			口縁1/7	吉備　5トレンチ
239	土師器	甕A	旧河道（黒シルト）	内面ケズリからナデ、ハケ、ヨコナデ、底部ナデ	小さな平底から内湾し短く外傾する口縁部で端部丸い	(13.25)	13.05	14.25	(2.2)	口縁3/4、体部1/10、底部7/8	5トレンチ
240	土師器	小型丸底壺	旧河道（黒シルト）	外面ヨコナデ、ハケ、ケズリ	丸底で内湾する、口縁部外傾		(7.5)	9.0		体部～底部4/5	黒斑

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
241	土師器	小型丸底壺	旧河道（黒シルト）	内面ユビ成形からナデ、ハケ、ケズリ、外面ハケからナデ、ヨコナデ	扁平に内湾する体部で外傾する口縁部、端部尖る	(9.4)	(7.2)	(10.4)		口縁1/8、体部1/4	
242	土師器	壺	旧河道　肩部（黒シルト）	内面ナデ？、外面タタキのちナデ？、底部葉脈痕	突出平底から外傾する		(3.7)		(5.0)	底部1/2	
243	土師器	甕	旧河道（黒シルト）	外面タタキからハケ、内面ケズリ	尖底で内湾する		(8.5)			底部完形	
244	土師器	底部	旧河道（黒シルト）	内面板ナデ、ハケ	平底から内湾する		(8.7)		6.0	体部若干、底部ほぼ完形	黒斑
245	土師器	鉢	旧河道（黒シルト）	ヨコナデ、口縁部・外面ミガキ	肩の張る内湾する体部から外反し突出して外傾する	(55.2)	(17.6)			口縁1/7	5トレンチ
246	土師器	高杯B	旧河道（黒シルト）	内面ヘラミガキ、絞り目	水平に広がり外反する杯部で端部尖る、筒部直立	(14.4)	(6.45)			杯部1/2	化粧土塗布
247	土師器	高杯B	旧河道（黒シルト）	杯部内面ケズリ	筒部中実で、水平に開き外反する杯部で端部丸い、外傾してから斜めに延びる裾部	(17.3)	11.6		(11.1)	杯部1/2弱、脚柱部1/1	
248	土師器	高杯B	旧河道（黒シルト）	外面ユビ成形からナデ、ヨコナデ、内面ハケ、杯部内面ケズリのちナデ	水平から外傾し端部近くで外反する杯部、筒部外傾	(18.6)	(11.3)			杯部1/2、脚柱部1/1	
249	土師器	高杯A	旧河道（黒シルト）	外面ミガキ、ナデ、ヨコナデ、杯部内面ミガキ、4方透孔	筒部中実で、外傾する裾部で端部肥厚ぎみ		(9.2)		(13.9)	脚柱部1/1、脚端1/9	5トレンチ
250	土師器	高杯C	旧河道（黒シルト）	ヨコナデ、外面ナデ、板ナデ	内湾する		(2.4)			底部小片	5トレンチ
251	土師器	高杯A	旧河道（黒シルト）	外面ミガキ、内面ナデ、ヨコナデ、透孔4ヶ所	内湾し変化して外反する杯部、短く中実の筒部から外傾する	(13.0)	(10.0)			口縁1/2、脚柱部完形	2トレンチ
252	土師器	器台	旧河道（黒シルト）	ヨコナデ、杯部内面工具のアタリ痕	浅く内湾し端部肥厚する上台、外傾し端部外側につまみ出す	(10.3)	8.6		(10.9)	口縁3/4、底部1/3	
253	土師器	器台	旧河道 西壁（黒シルト）	外面ミガキ、ヨコナデナデ、透孔4ヶ所	外反する下台で端部外側につまみ出す、円板充填		(6.0)		(9.2)	底部1/3	
254	土師器	器台	旧河道（黒シルト）	ヨコナデ、外面ハケ一部ミガキあり	外傾し端部内側に折る		(6.4)		(10.85)	脚部1/3	
255	土師器	脚台	旧河道（黒シルト）	ヨコナデ、ハケ、円板充填	脚部外反し端部丸い、体部外傾		(2.9)		(7.9)	脚柱部1/1、脚端1/10	5トレンチ
256	土師器	製塩土器	旧河道（黒シルト）	外面タタキ、ナデ	内湾する体部、脚部外傾か		(2.9)			鉢底部1/1	
257	土師器	製塩土器	旧河道（黒シルト）	ユビ成形、ナデ	外反し端部丸い		(2.6)		(5.0)	底部ほぼ完形	石あり
258	土師器	製塩土器	旧河道（黒シルト）	ユビ成形、ナデ	内湾し端部丸い		(1.5)		(4.8)	底部1/2	
259	土師器	製塩土器	旧河道（黒シルト）	ユビ成形、ナデ	外反し端部丸い、体部内湾		(2.8)		4.6	底部ほぼ完形	石あり
260	土師器	製塩土器	旧河道（黒シルト）	ユビ成形、ナデ	外反し端部丸い、体部内湾		(2.1)		4.8	底部完形	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
261	土師器	製塩土器	旧河道（黒シルト）	ユビ成形、ナデ	外反し端部丸い、体部内湾		(2.8)		4.6	底部完形	石あり
262	須恵器	杯蓋	旧河道　（不明）	外面回転ヘラケズリ、内面1方向の仕上げナデ、ロクロナデ	平たい天井部から内湾し端部外側につまみ出す	14.8	4.75			ほぼ完形	自然釉　5トレンチ
263	須恵器	杯身	旧河道　（不明）	ロクロナデ、回転ヘラケズリのちナデ、底部外面ヘラ記号あり	不安定な平底から外傾する体部で端部丸い	(13.4)	3.6		(9.0)	約1/3	歪　5トレンチ
264	土師器	壺	旧河道　（不明）	外面ミガキ、ヨコナデ	外反する頸部で突出してから外反し端部丸い	(15.8)	(4.6)			口縁1/4	2トレンチ
265	土師器	壺	旧河道　（不明）	ヨコナデ	直立する頸部から水平に開き突出して外反する、端部丸い	22.25	(7.7)			口縁1/1	2トレンチ
266	土師器	壺	旧河道　（不明）	内面ナデ、ケズリ、外面ハケ、タテハケからヨコナデ	体部下膨れの球形で、外傾する口縁部、端部肥厚ぎみ	15.2	(24.5)	(26.0)		口縁ほぼ完形、体部1/3	5トレンチ
267	土師器	甕	旧河道　（不明）	内面横ハケ、ケズリ、外面タタキからハケ、ヨコナデ	内湾する体部に外傾する口縁部で端部肥厚ぎみ	(18.0)	(10.5)			口縁～体部1/3	5トレンチ
268	土師器	甕	旧河道　（不明）	内面ユビオサエからヨコナデ、ケズリ、外面ハケ	内湾する体部から外傾し端部外につまむ	(14.7)	(9.3)			口縁～肩部1/3	5トレンチ
269	土師器	甕	旧河道　（不明）	内面ナデ、ケズリ、外面ハケからナデ、ヨコナデ	内湾する体部に外傾する口縁部で端部丸い	(14.2)	(7.5)			口縁1/4	5トレンチ
270	土師器	甕	旧河道　（不明）	ヨコナデ、外面ハケ	外傾し端部外につまみ出す	(15.6)	(3.8)			口縁1/4	5トレンチ
271	土師器	甕	旧河道　（不明）	内面ケズリ、ハケ、外面ヨコナデ、粘土紐痕	外傾する口縁部で端部内側に肥厚	(14.6)	(3.2)			口縁1/2弱	5トレンチ
272	弥生土器	無頸壺	旧河道　（不明）	ヨコナデ、ナデ、孔、凹線	内湾する		(4.7)			体部小片	
273	弥生土器	壺	旧河道　南壁（不明）	ヨコナデ、ハケ目、外面にヘラ描き	外傾する	長(4.9)	幅(6.35)	厚0.7		体部小片	2トレンチ
274	土師器	小型丸底壺	旧河道　（不明）	内面ヨコナデ、右斜方向の暗文、外面ミガキ、ケズリ	内湾する体部から内湾ぎみに延びる口縁部で端部尖る	(10.9)	(4.3)	(8.2)		口縁1/4	5トレンチ
275	土師器	鉢	旧河道　（不明）	内面ケズリ、ハケ、ヨコナデ	内湾する体部から口縁部外傾	(45.7)	(12.65)	(42.2)		口縁1/5、体部若干	2トレンチ
276	土師器	壺	旧河道　（不明）	外面タタキの上からハケ、ナデ	小さな平底から内湾する		(33.6)		8.8	底部1/1	5トレンチ
277	土師器	製塩土器	旧河道　排土（不明）	内面板ナデ、ユビオサエ、外面工具によるナデ	内湾する体部に外傾する脚台		(3.3)	3.2		体部1/2	2.5トレンチ
278	土師器	台付鉢	旧河道　（不明）	ミガキ、ヨコナデ、杯部内面ユビ成形から工具痕、透孔4ヶ所	内湾する体部で外反する脚台が付く、端部尖る		(9.0)		(12.8)	杯底部1/1、脚部3/4	2トレンチ
279	土師器	製塩土器	旧河道　（不明）	内面ハケ状工具のアタリ痕、底部ハケ？	内湾する体部に短く外傾する脚台で尖る		(2.6)		3.8	底部完形	2。5トレンチ 排土
280	土師器	製塩土器	旧河道　（不明）	ユビ成形からナデ	内湾する体部に外傾する脚台で端部丸い		(2.5)		(3.5)	底部2/3	2。5トレンチ 排土

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
281	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	外面下半ケズリ、ハケからミガキ、内面ヘラミガキ、ヨコナデ	外反し端部丸い	(14.4)	(6.7)			口縁1/3	
282	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	内面粗いハケから板ナデ、外面ヨコナデからタタキのちミガキ	内湾する体部でやや反りぎみに外傾し端部尖る	(13.7)	(8.4)			口縁1/8、体部1/2	写真あり、北半
283	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	ハケ、ヨコナデ	内湾する体部から口縁部外反	(11.2)	(7.9)			口縁近く1/3	
284	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ハケ	内湾する体部から口縁部外反	(13.0)	(6.5)			口縁1/5	
285	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	ハケのちナデ、ハケ	内湾する体部から口縁部外反	(14.8)	(9.4)			口縁1/4	
286	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ケズリ	内湾する体部に外傾し外に引く	(15.2)	(9.0)			口縁2/3	
287	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	ハケのちヨコナデ、外面ハケ、刻み目	外反する口縁部で端部角張る	(14.6)	(6.3)			口縁1/8	石、木、炭、種、葉あり
288	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	強いヨコナデ	外傾する口縁部で端部角張る	(14.0)	(5.7)			口縁1/4	
289	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ハケからナデ、ケズリ	内湾する体部から外傾し端部丸い	(15.8)	(7.3)			口縁1/4	
290	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	内面ハケからナデ、ヨコナデ、刻み目	外傾する口縁部で端部近くで反り丸い	(16.0)	(5.8)			口縁1/4	
291	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ユビ成形の凹凸残る	外傾する口縁部で端部近くで反り丸い	(18.4)	(6.4)			口縁1/4	
292	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	外面タタキのちヨコナデ、タタキ、ヨコナデ	内湾する体部で口縁部外傾し端部外側に肥厚	(13.9)	(9.35)			口縁1/5、頸部1/4、肩部1/3	
293	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、外面ハケからヨコナデ、ヨコナデによる擬凹線	外反する口縁部で端部内外に肥厚する	(17.8)	(5.4)			口縁1/3	
294	弥生土器	壺A	旧河道（暗灰砂）	内面ハケ目、ケズリ、ヨコナデ	内傾する体部から外傾し端部肥厚	(21.3)	(8.9)			口縁1/3	
295	土師器	壺A	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ヘラ描き波状文、内面ミガキかナデ	外反し端部肥厚する	(14.4)	(5.1)			口縁1/8	
296	土師器	壺C	旧河道（暗灰砂）	内面ハケ、工具のアタリ痕、ケズリ、外面横ハケから縦ハケ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部で端部肥厚する	(15.0)	(15.2)	(30.4)		口縁1/10、体部1/8	木、種あり
297	弥生土器	壺C	旧河道（暗灰砂）	外面縦ハケからナデ、凹線4条	外反する口縁部で端部肥厚	(27.4)	(13.7)			口縁1/8	
298	弥生土器	壺B	旧河道（暗灰砂）	外面ハケからミガキ、内面ミガキ	内湾する体部から大きく外反する口縁部で端部外に折り曲げ	(19.6)	(11.0)			口縁わずか、頸部完形	西壁近く
299	土師器	壺B	旧河道（暗灰砂）	外面ハケからナデ、内面ハケ、ナデ、粘土紐、ヨコナデ、頸部に刻み目の突帯	内湾する体部から短く直立する頸部、外傾し端部肥厚する	(18.95)	(15.2)			口縁1/14、頸部8/9	
300	弥生土器	壺B	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ナデ、粘土紐継ぎ目	直立する頸部から外反し端部肥厚する	(18.0)	(5.8)			口縁1/4	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
301	土師器	壺B	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ナデ、外面ヘラ描き沈線2条、粘土紐痕	外反し端部肥厚	(20.0)	(7.1)			口縁1/3	
302	土師器	壺B	旧河道（暗灰砂）	外面ハケからナデ、内面ハケから粘土紐のちハケ？、端面ヨコナデ部分的に凹線状になる	直立する頸部から外傾し端部内側に肥厚する、端面凹む	(21.1)	(7.5)			口縁完形	
303	土師器	壺B	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、外面縦ハケ	直立する頸部から外傾し端部肥厚する、端面浅い凹み	(23.2)	(7.7)			口縁1/3	讃岐
304	土師器	壺B	旧河道（暗灰砂）	外面ヘラミガキ、ハケ、ヨコナデ	外傾してから外反し端部肥厚	(23.8)	(7.45)			口縁1/6	
305	土師器	壺B	旧河道（暗灰砂）	内面ケズリのちナデ・ユビアトあり、外面ハケ、ヨコナデ	球形の体部から外傾する頸部で外反し端部肥厚する	(21.8)	(27.4)	24.7		口縁1/3、頸部完形、体部1/6	
306	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	内面ナデ・ユビオサエ、外面簾状文、ナデ、ミガキ、ヨコナデ	内湾する体部から外反し端部内側上方につまみ上げる	(12.0)	(6.7)			口縁1/3	
307	土師器	壺C	旧河道（暗灰砂）	内面工具痕あり	外傾し端部内側につまむ	(10.6)	(3.7)			口縁1/2	
308	土師器	壺C	旧河道（暗灰砂）	外面ハケからヨコナデ、タタキから縦ハケ、内面ヘラケズリ	内湾する体部から外傾し端部尖りぎみに反る	(11.0)	(14.7)			口縁2/3、体部1/4	
309	土師器	壺B	旧河道（暗灰砂）	ヘラミガキ、ヨコナデ	外反し端部下側に肥厚する		(1.5)		(9.8)	底部1/6	
310	土師器	壺F	旧河道（暗灰砂）	外面ヨコナデからヘラミガキ、内面ヘラミガキ、ユビ成形、刻み目	内傾する体部から直立する頸部で突帯が付く	5.3	(5.0)			頸部完形	讃岐
311	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	外面ユビ成形から直線文のち刺突文・波状文、内面ミガキ、粘土紐の継ぎ目あり	短く外反する直立ぎみの頸部から水平に開く体部		(4.0)	(11.8)		頸部1/4	西壁近く　讃岐
312	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	内面ハケのちヨコナデ・ユビナデ、外面ハケのちヨコナデ、波状文、円形浮文に竹管文施す	内湾する体部から外反する頸部		(11.3)			頸部3/4、肩部1/8	316と同一個体？
313	土師器	甕	旧河道（暗灰砂）	内面ユビ成形、ナデ	平底から内湾する		(8.7)		(9.6)	底部1/2	2次焼成
314	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	外面タタキからハケのちケズリ、内面ハケのちケズリ、底部ケズリのちナデ？	突出平底から内湾する		(5.3)		(7.1)	底部完形	写真あり　北半
315	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	外面ヘラケズリからハケ、タタキ、内面ハケ、底部タタキ？	突出平底から内湾する下膨れの体部		(17.5)	(26.6)	(4.4)	底部ほぼ完形、体部1/2	
316	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	内面ユビ成形からハケかナデ、ヘラミガキ、底部ユビナデ	突出平底から内湾する下膨れの体部		(12.0)		(9.5)	底部4/5	312と同一個体？
317	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	外面ヨコナデのちミガキ、ケズリのちナデ、内面ハケのちナデ、ハケからヨコナデのちミガキ	球形の体部から外傾する頸部になり内湾ぎみに開く口縁部		(11.9)	12.2		頸部～底部完存	
318	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	外面ケズリのちナデ、ハケ目のちミガキ、ヨコナデのとミガキ、内面ナデ、ハケのちミガキ、沈線	下膨れの球形で直立する頸部、口縁部外傾し端部やや肥厚	14.6	12.4	12.55		口縁3/4、体部～底部ほぼ完形	体部に小孔　黒斑
319	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	外反し突出して外反する口縁部で端部反って丸い	(14.0)	(6.9)			口縁1/4	山陰
320	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデからヘラミガキのちナデ、竹管文	直立する頸部から水平に開き突出して外傾する、端部尖る	(19.9)	(6.4)			口縁1/4	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
321	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	ハケのちヘラミガキ、ヨコナデ	外反してから甘い稜を持ち外傾する二重口縁で端部丸い	(18.1)	(5.4)			口縁1/8	
322	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラミガキ、ヨコナデ、波状文	外反し突出してから外反する、端部内側に尖る	(19.0)	(4.8)			口縁わずか	
323	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ケズリ	大きく外反し突出してから外反する口縁部、端部丸い	(19.8)	(10.0)			口縁1/3、頸部1/2	山陰
324	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、口縁部ヨコナデによる浅い凹線、外面ヘラミガキ、クシ先列点文	外反してから稜を持ち外反し端部外側に尖る	(22.0)	(5.3)			口縁1/9	
325	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、外面ハケからヨコナデ・ナデ	外反し突出してから外反する口縁部で端部丸い	(22.6)	(8.3)			口縁1/4	
326	弥生土器	壺F	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリのちナデ、外面ヨコナデ、ハケ目、粘土痕	外反し突出してから外傾する口縁部で端部肥厚	23.0	(8.7)			口縁1/2、頸部1/1	
327	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	外面ハケのちミガキ、ヨコナデのちミガキ、内面ナデ？	肩の張る球形で短く直立する頸部から水平に延び外反する	(19.2)	(17.0)	(24.7)		口縁1/2、体部1/6	
328	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	内面ユビ成形からハケのちミガキ、外面ユビ成形からナデのちヨコナデ	直立する頸部から屈曲して外傾する口縁部、端部丸い	(16.8)	(6.2)			口縁～頸部完形	
329	土師器	壺F	旧河道（暗灰砂）	内面ナデ、ケズリ、外面ハケのちヨコナデ、ハケ	内傾する体部、頸部短く外反し変化して内湾する口縁部	(18.3)	(7.8)			口縁1/4	
330	土師器	壺D	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラミガキのちナデ、外面タタキからヘラミガキ、ヨコナデ、鋸歯文のヘラ描き	外傾する頸部から短く水平に開き直立する、端部角張る	(16.6)	(6.6)			口縁2/3	
331	土師器	壺F	旧河道（暗灰砂）	口縁部ハケ、ナデ	内傾する頸部から水平となり直立する口縁部、端部丸い	18.5	(9.0)			口縁1/2、頸部ほぼ完形	2次焼成
332	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	ハケ、ヨコナデ、外面ユビ成形	直立する頸部から水平に開き内傾する、端部丸く反る	(20.6)	(7.8)			口縁1/4	東四国
333	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ目	内湾し大きく外反する頸部で突出してから内傾する	17.45	(10.4)			口縁1/1	東四国
334	土師器	底部	旧河道（暗灰砂）	外面細かいハケからナデ、底部木葉痕	僅かな上げ底から外傾する		(3.2)		(7.4)	底部完形	
335	土師器	底部	旧河道（暗灰砂）	内面板ナデ、外面ケズリからヘラミガキ、底部ナデ・木葉痕？	平底から外傾する		(2.1)		4.0	底部完形	木、種あり
336	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	内面板ナデの上からナデ、外面ヘラミガキ、ユビ成形の凹凸残る	ドーナツ底から外傾する		(8.2)		5.7	底部1/1	
337	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	外面ヘラミガキ？、波状文、底部ナデ	上げ底から肩の張る球形の体部	(近く)15.0	(33.6)	(36.0)	(6.6)	体部1/3	
338	土師器	甕	旧河道（暗灰砂）	ナデ、ヘラ描き文？	外反する		(1.8)			体部小片	
339	土師器	壺	旧河道　SR01（暗灰砂）	内面ナデ、外面ミガキ、矢印の刺突文	内湾する		(4.2)			体部若干	石、木、炭、種、葉っぱあり
340	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	外面ヨコナデからヘラナデ、内面ヘラミガキ	外傾してから外反する		(3.3)			口縁近く小片	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
341	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	外面直線文から波状文のちタタキ、内面ヘラケズリ	内湾する		(4.3)			体部小片	
342	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	外面直線文から波状文、内面ケズリ	内湾する		(3.7)			体部小片	
343	土師器	壺	旧河道 調査区中央（暗灰砂）	ヨコナデ、波状文、竹管文付き円形浮文貼付	内湾ぎみで端部近くで反り端部丸い		(4.2)			口縁小片	
344	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	内面ユビ成形からナデ、直線文、波状文	内湾する		(5.0)			体部破片	
345	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	ハケ、波状文	内傾する		(5.7)			体部小片	
346	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	内面ハケからナデ、外面クシ先列点文からナデ	内湾する		(5.2)			体部小片	
347	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	ユビ成形からナデかヘラケズリ、外面波状文から直線文のち波状文、粘土紐の継ぎ目あり	内傾する		(3.6)			体部小片	
348	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	内面ハケからナデ、外面ナデからヘラ描き文	内傾する		(2.7)			口縁近く小片	
349	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	外面ハケから竹管文、内面ナデ、ヨコナデ	内湾する		(4.2)			口縁小片	
350	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	外面タタキからハケのち竹管文？、内面ユビ成形のちナデかハケ	内湾する		(3.6)			体部小片	
351	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	内面ナデからヘラ描き、ハケ？	外反する		(3.1)			体部小片	
352	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	外面ハケからヘラ描き、内面ナデ、ヨコナデ	外反し端部肥厚		(3.3)			口縁部小片	搬入品
353	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	ハケ、ヨコナデ、凹線3条	内湾する体部、外傾する口縁部で端部内外に肥厚する		(5.5)			口縁小片	
354	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	内面ナデ、外面ハケ、ヨコヘラミガキ、刺突文	内湾する体部で外傾する頸部		(4.7)			頸部小片	
355	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、竹管文	水平に開き外反するか		(1.4)			口縁1/5	讃岐　2次焼成
356	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	内面ナデ、ユビオサエ、外面ハケ目、竹管文	内湾する					体部破片	
357	土師器	壺F	旧河道（暗灰砂）	内面ハケからナデ、ケズリ、外面ハケからヨコナデ、凹線6条	外反し突出してから外反する口縁部、端部丸い	(17.9)	(9.2)			口縁わずか、頸部1/3	讃岐
358	土師器	壺F	旧河道（暗灰砂）	磨滅のため不明	内傾する体部、外反する二重口縁で稜線有する		(6.2)			頸部完形	
359	土師器	壺F	旧河道（暗灰砂）	外面ハケからヨコナデ、内面ヨコナデ	外反してから内傾する	受け口(19.8)	(4.6)			受け口1/12	
360	土師器	壺F	旧河道（暗灰砂）	内面ヨコハケ、ユビオサエ、外面ヨコナデ、工具あたり痕、ヘラ先列点文、波状文、直線文	外反する頸部で突帯付く、突出してから外傾する口縁部で端部角張り反る	(21.6)	(12.4)			口縁～頸部ほぼ完形	讃岐　有機質塗布

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
361	土師器	壺F	旧河道 （暗灰砂）	内面ハケ目のちヨコナデ、ナデ、外面ハケ目のちヨコナデ、竹管文、刻み目	直立する頸部から外傾し突帯をつけて外反する、端部肥厚	32.1	(12.6)			口縁1/3	讃岐　有機質塗布
362	土師器	壺F	旧河道 （暗灰砂）	内面ユビ成形からハケ、ヨコナデ、外面強めのヨコナデ、ハケ目、ヘラミガキ	内傾する体部から外傾し突出してから内傾し端部外に角張る	(25.0)	(25.3)			口縁1/6、肩部1/2	讃岐
363	土師器	壺F	旧河道 （暗灰砂）	内面ユビ成形からナデ、外面ヨコナデ	外傾してから突出し内傾する	(27.0)	(8.8)			口縁近く1/10	讃岐
364	土師器	壺F	旧河道 （暗灰砂）	内面ヨコハケからユビ成形、外面ハケからナデ、ヨコナデ	外傾し甘い稜から内湾ぎみに延び端部内側につまむ	(23.6)	(11.7)			口縁1/8	讃岐　有機質塗布
365	土師器	壺F	旧河道 （暗灰砂）	ヨコハケからミガキ、ヨコナデ	外反し稜を持って内湾ぎみに延び端部角張る	(21.5)	(6.8)			口縁1/7	讃岐　有機質塗布
366	土師器	壺F	旧河道 （暗灰砂）	ハケからナデ、ヨコナデ	外傾してから稜線を持って内傾する、端部尖る	(19.3)	(4.6)			口縁1/8	讃岐　有機質塗布
367	土師器	壺F	旧河道 （暗灰砂）	外面ヨコナデ、ハケ目、内面ヘラミガキ	外傾し突出してから内傾する口縁部、端部外につまみ出す	(23.9)	(9.05)			口縁1/3	讃岐　有機質塗布
368	土師器	甕	旧河道 （暗灰砂）	内面タタキからナデのちヘラミガキ、外面横ハケ、ナデ	内湾する	(16.1)	(8.4)	(26.0)		頸部1/12、体部1/11	
369	土師器	甕	旧河道 （暗灰砂）	内面板ナデ？、外面タタキからハケのちナデ、底部タタキ？	平底から内湾する		(9.0)		4.2	底部完形、体部1/4	写真あり　南半
370	土師器	甕	旧河道 （暗灰砂）	内面太いハケ、外面ヘラミガキ、ユビ成形、底部ユビ成形からナデ	不安定な平底から外傾する体部		(5.6)		(6.6)	底部完形	底部再成形
371	土師器	底部	旧河道 （暗灰砂）	内面ハケ目、外面タタキ、底部葉脈痕	上げ底から外傾する		(4.3)		6.3	底部1/1	
372	土師器	甕	旧河道　SR01 （暗灰砂）	内面ナデ、外面タタキ、底部葉脈痕	平底から外反する		(2.4)		5.9	底部完形	石、木、炭、種、葉っぱあり
373	土師器	甕	旧河道 （暗灰砂）	内面板状工具痕、外面タタキ、ヨコナデ、底部タタキ底から板ナデ	平底から内湾する		(2.95)		4.7	底部1/1	
374	土師器	底部	旧河道 （暗灰砂）	内面細かいハケから底ハケ工具の当たり痕、外面タタキからナデ、底部タタキからナデ	上げ底から外傾する		(3.4)		(4.0)	底部完形	黒斑
375	土師器	底部	旧河道 （暗灰砂）	内面ハケ、外面タタキからナデ、底部タタキ	平底から内湾する		(3.6)		5.2	底部完形	底部再成形
376	土師器	底部	旧河道 SR01 （暗灰砂）	ハケ、底部葉脈痕	平底から外傾する		(2.4)		6.2	底部完形	黒斑？
377	土師器	甕	旧河道 SR01 （暗灰砂）	内面板ナデ・ユビオサエ、外面タタキ、底部ナデ	小さな平底から内湾する		(2.8)		(3.0)	底部2/3	石、木、炭、種、葉っぱあり
378	土師器	甕	旧河道 （暗灰砂）	内面板ナデ、ユビオサエ、外面タタキ、底部タタキ	突出平底から内湾する		(4.6)		(4.9)	底部ほぼ完形	
379	土師器	甕	旧河道 （暗灰砂）	内面ヘラケズリ、外面ハケ、底部ヘラケズリ	平底から内湾する		(5.0)		2.95	底部1/1	讃岐の影響
380	土師器	底部	旧河道 （暗灰砂）	外面ハケからナデ、内面ハケ、底部ナデ	上げ底から内湾する		(2.9)		(5.2)	底部1/2	ヘラ記号？

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
381	土師器	底部	旧河道 （暗灰砂）	内面ハケ状工具のアタリ痕、ナデ、底部ナデから木葉痕	平底から内湾する		(3.0)		(2.8)	底部ほぼ完形	
382	土師器	甕	旧河道 SR01 （暗灰砂）	内面板ナデ、外面タタキ、タタキ底	不安定な平底から内湾する		(2.5)		(4.0)	底部1/3	黒斑
383	土師器	底部	旧河道 （暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ハケ、外面タタキからハケ・ナデ、底部タタキ	丸底から内湾する		(8.1)		(6.7)	底部ほぼ完形	黒斑
384	土師器	壺	旧河道 （暗灰砂）	内面工具アタリ痕、外面ナデ	丸底で内湾する		(5.9)			底部完形	
385	土師器	底部	旧河道 （暗灰砂）	内面板状工具アタリ痕、底部手ずくね成形ナデ	内湾する体部で外傾する脚が付く、端部角張る		(2.3)		(4.0)	底部1/2	
386	土師器	底部	旧河道 （暗灰砂）	内面ハケからナデ、外面タタキからナデ、ユビ成形	内湾する体部で外傾する脚が付く、端部丸い		(2.8)		(5.0)	底部1/2	
387	土師器	甕A	旧河道 （暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ヨコナデ	内傾する体部から外傾し端部上につまみ出す	(25.6)	(4.1)			口縁1/13	
388	土師器	甕A	旧河道 （暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ヨコナデ	内傾する体部から外傾し端部上に大きくつまみ出す	(26.0)	(5.0)			口縁1/12	
389	土師器	器台	旧河道 （暗灰砂）	外面ヘラケズリ、内面横ハケ、ヨコナデ	外傾し端部全体に膨らみ厚くなる、丸い	(20.1)	(3.7)			口縁1/7	
390	土師器	甕J	旧河道 （暗灰砂）	内面ユビ成形からハケのちナデ、外面ハケ、ヨコナデ、端部浅い凹線状	内湾する体部に短く外反する口縁部で端部上につまむ	(16.6)	(9.4)			口縁1/4	煤付着、讃岐
391	弥生土器	甕	旧河道 （暗灰砂）	ヨコナデ、ナデ	内湾する体部に短く外反する口縁部で端部上につまむ	(22.9)	(5.1)			口縁1/4	磨滅 讃岐
392	土師器	甕A	旧河道 （暗灰砂）	内面板ナデ、ヨコナデ	外反する口縁部で端部丸い	(13.5)	(5.0)			口縁1/5	
393	土師器	甕A	旧河道 （暗灰砂）	外面縦ミガキ、ヨコナデ、粘土紐	外反する口縁部で端部角張る	(11.8)	(4.1)			口縁1/9	
394	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ナデ、外面タタキ、ヨコナデ	内傾する体部から外傾する口縁部	(14.8)	(4.5)			口縁1/4	煤付着
395	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ハケ目、ヘラケズリ、外面ヨコナデ、ハケ	内傾する体部から外傾する口縁部で端部角張る	(16.6)	(3.55)			口縁1/3	
396	土師器	甕A	旧河道 （暗灰砂）	内面ナデ、ケズリ、外面縦ハケからナデ、ヨコナデ	球形の体部から薄く外傾する口縁部で端部丸い	(10.6)	(9.7)	(13.6)		口縁わずか、体部2/3	
397	土師器	甕A	旧河道 （暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ハケからナデ、ヨコナデ	内傾する体部から外傾する口縁部で端部丸い	(12.8)	(5.5)			口縁1/4	
398	土師器	甕L	旧河道 調査区中央 （暗灰砂）	内面ユビ成形からナデ、ヨコナデ	内湾する体部に内湾する口縁部で端部内側に肥厚	(10.8)	(7.8)			口縁1/4	
399	土師器	甕B	旧河道 （暗灰砂）	外面ヨコハケからタテハケ、細かいハケから粗いハケ、ヨコナデ、刻み目	内傾する体部から外傾する口縁部で端部角張る	(11.4)	(12.5)			口縁2/3、体部1/3	
400	土師器	甕A	旧河道 （暗灰砂）	内面ユビ成形からハケのちナデ、外面ハケ工具のアタリ痕、縦ハケからナデ	球形体部から外傾する口縁部で端部丸い	(13.4)	20.3	(17.7)		口縁～底部ほぼ完形	胎土精良

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
401	土師器	鉢	旧河道 （暗灰砂）	外面タタキからナデ、内面ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾し端部丸い	(20.0)	(12.9)			口縁1/12	木、種あり、顔料塗布か
402	土師器	甕	旧河道 （暗灰砂）	内面横ハケ、ヨコナデ、特異な端部強いヨコナデ	外傾し端部内側につまみ出す		(3.1)			口縁小片	特殊な口縁部
403	土師器	体部	旧河道 （暗灰砂）	内面ナデ工具のアタリ痕、外面タタキからナデクシ描文	内傾する		(3.7)			体部小片	
404	土師器	体部	旧河道 （暗灰砂）	内面ナデ、外面ナデ、ヘラミガキ、竹管文	内湾する	長 (5.1)	幅 (6.25)	厚0.6		体部小片	灰
405	土師器	甕	旧河道 （暗灰砂）	外面ハケ、刺突文のちナデ、内面ハケ	内湾する		(4.3)			体部小片	
406	土師器	甕	旧河道 （暗灰砂）	外面ハケからヘラ描文、内面ヨコナデ	内湾する		(4.2)			体部小片	
407	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	外面タタキからナデ、内面ヘラケズリ、ヨコナデ、沈線	内湾する体部から歪に外傾し端部肥厚	(15.2)	(4.5)			口縁1/6	
408	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ハケからナデ、外面タキからハケ、ヨコナデ	内湾する体部な外傾する口縁部、端部つまみ出す	(14.2)	(4.8)			口縁1/5	河内の影響
409	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	外面ハケからヘラミガキ、内面ヘラケズリ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部で端部丸い	(14.4)	(7.0)			口縁～肩部1/2	
410	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ナデ、内面タタキ、ヨコナデ、端面沈線状に残る	内湾する体部で肩が張る、内湾ぎみの口縁部	(14.6)	(7.0)			口縁1/6	木、種あり
411	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ハケ、外面タタキ上からハケ、ヨコナデ	内湾する体部で頸部稜線鋭く口縁部外傾する	(17.3)	(12.35)	(22.0)		口縁1/2、体部1/8	河内の影響
412	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	外面タタキ上からハケ目一部ヘラミガキ、内面ハケ上からナデ消し、ヨコナデ、粘土紐痕	内傾する体部に外傾する口縁部で端部つまむ	(14.6)	(5.75)			口縁1/6、肩部1/4	河内の影響　煤付着
413	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ヘラケズリ、横ハケ、外面タタキ、ヨコナデ	内湾する体部に外反する口縁部、端部肥厚ぎみ	(16.0)	(4.0)			口縁1/5	
414	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面横ハケからユビナデ、外面タタキからタテハケヨコナデ、端面に沈線1条	内傾する体部から外反する口縁部で端面になり沈線	(17.2)	(5.9)			口縁1/2、体部1/2	
415	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ヘラケズリ、外面タタキ、ヨコナデ	内傾する体部に外傾する口縁部で端部つまむ	(17.5)	(4.8)			口縁1/2	
416	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ハケ一部上からヘラケズリ、外面タタキ上からハケ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部、端部上につまむ	(16.1)	(8.5)			口縁1/4、肩部1/2	
417	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	外面タタキから縦ハケ、内面ヘラケズリ、ハケ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部、端部肥厚ぎみ	(15.6)	(10.3)			口縁完形、体部2/3	
418	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ヨコナデ、外面タタキ、ハケ	内湾する体部から外反する口縁部、端部内側につまむ	(13.6)	(7.85)	(15.0)		口縁1/2、肩部1/8	
419	土師器	甕C	旧河道 （暗灰砂）	内面ヘラケズリ、外面タタキ、ヨコナデ、端面凹線状になる	内傾する体部に外傾する口縁部で端部上につまむ	(17.8)	(3.8)			口縁1/6	
420	土師器	甕C	旧河道　SR01 （暗灰砂）	内面ハケ、外面ロクロナデ、端面沈線	内傾する体部に外傾する口縁部で端部上につまむ	(15.6)	(3.5)			口縁1/6	石、木、炭、種、葉あり

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
421	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、外面ハケかタタキ、ヨコナデ、ヨコナデによる沈線	内傾する体部に外傾する口縁部で端部上につまむ	(17.8)	(3.2)			口縁1/7	河内
422	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	外面タタキからハケ、内面ヘラケズリ、ヨコナデ、端面沈線	内湾する体部から外傾する口縁部で端部上につまむ	(15.4)	(3.8)			口縁1/3	河内
423	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	内面ハケ、ヘラケズリ、ヨコナデ、端面に凹線状あり	内湾する体部から外反する口縁部、端部内側につまむ	(15.5)	(3.8)			口縁1/9	河内
424	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	内面ハケ上からヘラミガキ、ハケ目、外面タタキ、ヨコナデ、粘土紐痕	内傾する体部に外傾する口縁部で端部上につまむ	(15.5)	(5.9)			口縁1/4	灰
425	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、外面タタキからナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反ぎみ口縁部、端部内側につまむ	(16.0)	(4.8)			口縁1/2	河内
426	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ヨコナデ、外面タタキ、ユビオサエ	内湾する体部に外傾する口縁部で端部上につまむ	(24.0)	(9.3)			口縁1/5	
427	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	内面板ナデからナデ、ヘラケズリ、外面タタキ、ヨコナデ、端部凹線状になる	球形体部から外反する口縁部で端部面で肥厚	(15.6)	(19.9)			口縁1/5、体部1/3	西壁近く
428	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	外面タタキからタテハケ、内面ヘラケズリ、ヨコハケ、端部沈線	内湾する体部で外反する口縁部、上につまむ	(14.2)	(11.6)			口縁1/3、体部1/2	
429	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ヨコハケ、外面細かいタタキ、ヨコナデ、端部沈線	内湾する体部から外反する口縁部で端部面で肥厚	(15.7)	(9.5)			口縁1/5	
430	土師器	甕C	旧河道（暗灰砂）	内面ユビ成形からナデ、横ハケ、外面タタキ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部で端部僅かに肥厚	(17.4)	(9.8)			口縁4/5	
431	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	外面縦ハケからナデ消す、ユビオサエ？、内面ヘラケズリ、ヨコナデ	球形体部から外反する口縁部、端面になり上につまむ	(15.1)	(11.0)			口縁2/3、体部1/2	
432	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	外面ハケ、内面ハケからヨコナデ、ヘラケズリ、	内湾する体部から外反する口縁部で端部丸い	(12.8)	(5.5)			口縁1/4	
433	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	内面ナデ、ヨコヘラケズリ、外面ハケからナデ、ヨコナデ	内傾する体部に外傾する口縁部で端部尖る	(13.2)	(6.0)			口縁1/4	
434	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ハケ目のちヨコナデ、外面ハケ目、ヨコナデ	内湾する体部に内湾ぎみの口縁部、端部外につまむ	(13.2)	(6.1)			口縁1/3、頸部1/4	
435	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	外面タテハケ、から一部ヨコハケ、内面ヘラケズリ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾し端部肥厚	(12.2)	(5.6)			口縁～体部1/4	
436	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	外面タテハケからヨコハケのちナデ、内面ヘラケズリ、ヨコナデ	内湾する体部に内湾ぎみの口縁部、端部外につまむ	(13.6)	(7.7)			口縁1/2	
437	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	外面ハケからナデ、内面ヘラケズリ、ヨコナデ、沈線	内湾する体部に内湾ぎみの口縁部、端部外につまむ	(12.0)	(9.3)			口縁1/3	
438	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、外面ハケ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部で端部肥厚	(14.0)	(9.5)			口縁1/2、体部1/3	
439	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ヨコナデ、外面ハケ目、粘土紐痕	内傾する体部から外傾する口縁部、端部外につまむ	(14.2)	(5.25)			口縁1/3	
440	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	内面ユビ成形からナデ、外面ハケ目、ヨコナデ	内湾する体部に内湾ぎみの口縁部、端部外につまむ	(13.2)	(6.1)			口縁・頸部・肩部1/4	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
441	土師器	甕L	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	外傾する口縁部で端部肥厚	(13.8)	(2.9)			口縁1/7	
442	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	外面ハケからナデ、内面ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部で端部丸い	(13.6)	(3.7)			口縁1/7	
443	土師器	甕D	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	内湾する体部に内湾ぎみの口縁部、端部外につまむ	(13.55)	(5.45)			口縁、頸部1/4	
444	土師器	甕	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ユビオサエ	内湾する体部に内湾ぎみの口縁部、端部外につまむ	(16.9)	(5.0)			口縁2/3	
445	土師器	甕I	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、ヨコナデ	短く外反する頸部から突出し外反する口縁部で尖る	(13.7)	(4.4)			口縁1/7	山陰
446	土師器	甕I	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、外面ハケ、ヨコナデ	内傾する体部から短く外反しさらに外反する二重口縁	(15.0)	(5.2)			口縁1/7	山陰
447	土師器	甕I	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、外面ハケ、ヨコナデ	外反する頸部から突出し外反し端部尖る	(15.3)	(6.6)			口縁1/5、頸部完形	山陰
448	土師器	甕I	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラケズリ、外面ハケ、ヨコナデ、口縁部ユビ成形からヨコナデ	内湾する体部から短い頸部になり大きく突き出て外反	(17.0)	(6.2)			口縁1/5	山陰
449	土師器	甕I	旧河道（暗灰砂）	内面ユビ成形、ハケ？、ヘラケズリ、外面ハケ、沈線	外反する頸部から突出し外反し端部角張り外につまむ	(15.8)	(8.1)			口縁1/4	山陰
450	土師器	甕I	旧河道（暗灰砂）	外面ヘラミガキからナデ、内面ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反し水平から外反し端部丸い	(16.0)	(10.1)			口縁1/5、頸部2/3	山陰
451	土師器	甕H	旧河道（暗灰砂）	内面ハケ？からナデ、外面ヘラミガキ、ヨコナデ	内湾する体部から短い頸部突出して直立し端部丸い	(10.0)	(5.0)			口縁1/9	
452	土師器	甕H	旧河道（暗灰砂）	外面ヘラミガキからナデ、内面板状工具ナデからミガキ、強いヨコナデ	扁平な球形で短い頸部から直立し端部丸い	(8.6)	(8.8)			口縁わずか、体部1/4	
453	土師器	甕H	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	外傾し突出してから内傾する口縁部	(4.8)	(3.2)			口縁1/4	
454	土師器	甕K	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	外傾してから直立し端部丸い	(10.8)	(2.7)			口縁1/8	
455	土師器	甕K	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラケズリ	内傾する体部から短い頸部、内傾し端部丸い	(14.1)	(3.6)			口縁1/8	
456	土師器	甕K	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、擬凹線	頸部短く外傾してから直立し端部丸い	(15.8)	(3.4)			口縁1/8	吉備
457	土師器	甕K	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラケズリ、擬凹線	内傾する体部から外傾し内傾する、端部丸い	(16.0)	(3.9)			口縁1/10	吉備
458	土師器	甕K	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラケズリ、擬凹線	外傾してから突出し外傾する端部丸い	(16.4)	(3.6)			口縁1/12	山陰
459	土師器	甕K	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラケズリ、擬凹線7条	内傾する体部から外傾し内傾する、端部丸い	(15.8)	(4.4)			口縁1/10	吉備
460	土師器	甕K	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ目のちヨコナデ	肩が張り内湾する体部から外傾し内傾する、端部丸い	(12.7)	(10.45)	(18.7)		口縁5/8、肩部1/5	吉備

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
461	土師器	甑	旧河道（暗灰砂）	内面ハケからナデ、外面タタキからナデ、底部ナデ、孔あり	平底から内湾する、焼成前穿孔		(3.5)		4.6	底部完形	
462	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ナデ、ヨコナデ、外面底部ヘラケズリ	外傾ぎみで端部尖る	(12.0)	(5.0)			口縁～底部1/4	
463	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	外面ユビ成形からナデ、ヨコナデ	内湾し端部丸い	15.6	5.7			近完形	
464	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラミガキ、外面ナデ、ヨコナデ	内湾し端部丸い	(16.7)	5.3			口縁4/5	木、種あり
465	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	外面ヘラミガキ、内面ハケからナデ、ヨコナデ、ヨコナデによる凹線	内湾する体部から水平ぎみに開き端部角張る	(21.8)	(6.4)			口縁1/7	
466	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	内面ユビ成形からハケかナデ、ヨコナデ	内湾し端部尖る	(12.6)	(5.5)			口縁1/5、底部完形	
467	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	内面板ナデ、外面ハケからナデ？、端部周辺ヨコナデ	内湾し端部丸い	(14.0)	(5.0)			口縁1/3	2次焼成
468	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ナデ、底部ナデ	平底から内湾し端部尖る	(8.8)	(4.2)		2.8	底部完形、口縁わずか	石あり
469	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	内面板状工具のアタリ痕のちナデ、外面ナデ、底部ナデ・ヘラ記号あり	小さな平底から内湾し端部角張りぎみ	9.75	5.45		2.9	口縁一部欠損、ほぼ完形	
470	土師器	鉢	旧河道 調査区中央（暗灰砂）	内面板ナデ？、ヨコナデ、外面ユビ成形、底部ヘラ状工具	上げ底から内湾し端部丸い	(10.7)	(6.1)		3.9	口縁1/2、底部完形	
471	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ハケ、ヨコナデ	内湾する体部から短く外傾する口縁部で端部角張る	(33.7)	(8.55)	(36.0)		口縁小片	
472	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	内面ハケの上からヘラミガキ、外面ヘラミガキ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部で端部肥厚	(37.5)	(8.5)			口縁1/9	
473	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	内面タテヘラミガキからヨコヘラミガキ、外面ヨコヘラミガキ、ヨコナデ、刻み目	内湾する体部から外反し端部上につまみ上げる	(37.4)	(13.6)			口縁1/10	
474	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ケズリ、外面ハケか板ナデ、凹線	内湾する体部、短く外反する頸部に直立し端部角張る	(37.0)	(19.1)	(37.3)		口縁1/4、体部1/8	
475	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面沈線状の凹み	外反し突出してから外傾	(39.7)	(7.4)			口縁1/4	灰
476	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヨコヘラケズリ	内湾する体部、短く外反する頸部に直立し端部丸い	(32.2)	(11.8)			口縁1/5	
477	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ユビ成形、ヨコナデ、底部ヘラ工具痕	浅く内湾し端部丸い	(10.9)	(3.0)			口縁～底部1/2	
478	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	内面ヘラミガキ？、外面ハケからナデ、ヨコナデ、焼成前突孔	内湾し端部薄く丸い	(15.8)	4.5			口縁わずか、底部1/2	煤付着
479	土師器	ミニチュア壺	旧河道（暗灰砂）	内面ハケからナデ、絞り目、外面ハケから工具でナデ？、穿孔か	平底から算盤玉状になる		(3.4)		(2.8)	底部1/2、体部1/2	搬入品？
480	土師器	ミニチュア	旧河道（暗灰砂）	内面ユビ成形、外面ナデ、工具ナデ	平底から内湾		(3.8)		(2.8)	底部～体部1/3	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
481	土師器	ミニチュア鉢	旧河道（暗灰砂）	手ずくね、内面ナデ、外面ハケ目	平底から内湾し端部尖る	4.25	2.85		2.6	近完形	
482	土師器	ミニチュア鉢	旧河道（暗灰砂）	手ずくね、タタキか工具痕から板ナデ？、底部ナデ	突出平底から外傾し端部尖る	(5.3)	(4.5)		(3.4)	底部1/2、体部1/4	
483	土師器	手焙土器	旧河道（暗灰砂）	外面ハケ、ヨコナデ、内面ユビ成形からナデ、波状文から円形浮文	内傾し端部内外に肥厚		(2.8)			小片	黒斑
484	土師器	蓋	旧河道（暗灰砂）	外面ヘラミガキからナデ、内面ミガキ、ナデ	浅く外傾し端部角張る、つまみ小さめで柱状	(17.4)	(5.4)			口縁1/5	河内
485	土師器	甕A	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ユビ成形からナデ板状工具によるナデ、外面タタキからハケ	球形体部から内湾ぎみで端部丸い	(12.2)	(12.4)	(13.6)		口縁1/7、底部完形	焼成後穿孔
486	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ユビオサエ成形、外面ヨコナデから板状工具のナデ	内湾する体部から外傾する口縁部、端部肥厚ぎみ	(12.1)	(10.0)			口縁1/4、体部1/3	
487	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	内湾する体部から外傾し端部尖る	(10.2)	(3.6)			口縁1/4	
488	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	内湾する体部から外傾	(12.2)	(4.3)			口縁1/6	2次焼成
489	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	内湾する体部に浅い二重口縁で外反し丸い	(15.0)	(3.0)			口縁1/4	
490	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヨコナデのち暗文、外面ケズリ	丸底で内湾する体部、外傾してから上方に延び尖る	15.3	5.5			口縁1/2、体部1/2	
491	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	内湾する体部から内湾する口縁部で端部丸い	(11.8)	(5.0)			口縁1/7	
492	土師器	小型丸底壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ナデ	内湾する体部から外傾する口縁部で端部丸い	(11.2)	(6.0)			口縁1/3	
493	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ハケからナデ	体部内湾し外傾する口縁部	(14.2)	(7.8)			口縁1/3、体部1/2	
494	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、外面ヘラミガキ、ヘラケズリ	体部内湾し甘い稜線から内湾する口縁部で端部尖る	(11.8)	(7.5)			口縁1/4	
495	土師器	製塩土器	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ナデ	体部内湾し口縁部外反する	(13.1)	(7.9)			口縁1/9	
496	土師器	小型丸底壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ナデ、外面タテハケからナデ、底部ナデ	内湾する体部から外傾する口縁部で端部丸い	(8.6)	(8.4)			口縁1/3、体部～底部完形	
497	土師器	小型丸底壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ユビ成形、外面ヘラケズリからナデ	球形の体部から外反する口縁部で端部外側につまみ出す	(9.0)	(10.4)			口縁ほぼ完形、体部	
498	土師器	小型丸底壷	旧河道（暗灰砂）	内面ハケ工具のアタリ痕、外面ヨコナデ、ケズリからナデ？	浅く内湾する体部で頸部内面稜線鋭く口縁部外傾する	(10.8)	(6.2)			底部完形	
499	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ユビ成形からナデ、ヨコハケ、外面ハケからナデ	浅く内湾する体部から口縁部外傾し端部尖る	(11.4)	(5.2)			口縁わずか、体部1/3	
500	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、外面ハケからナデ	半球形の体部から外傾し端部尖る	(12.0)	(6.6)			口縁わずか、底部1/2	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
501	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ユビ成形からナデ、外面ハケからナデ	内湾する体部から外傾する口縁部で端部反って丸い	(11.9)	8.2			口縁1/4、体部1/3	
502	土師器	小型丸底壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ナデ、外面縦ハケからナデ、ケズリ	内湾する体部から稜線明瞭な頸部、口縁部外傾し端部尖る	(9.8)	(7.6)	(10.0)		口縁わずか、頚径1/5	
503	土師器	小型丸底壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ケズリ、外面ハケからナデ、ハケか板ナデ痕	内湾する体部から稜線明瞭な頸部、口縁部外傾し端部尖る	(9.8)	(5.7)			口縁～底部1/2	
504	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ハケから縦ミガキ、外面ヨコミガキ	外傾する口縁部で端部尖る	(8.8)	(5.4)			口縁～頸部ほぼ完形	
505	土師器	小型丸底壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ユビ成形、粘土紐痕	内湾する体部から屈曲して外傾する口縁部で端部尖る	(8.8)	(7.7)			口縁1/7、体部1/3	
506	土師器	壺	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ナデ、外面タタキのちナデか	口縁部外傾し端部近くで反る	(16.8)	(6.1)			口縁1/6	
507	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ヘラケズリ	内湾し端部尖る	(13.6)	(3.8)			口縁1/3	
508	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデからヘラミガキ、内面底部ヘラミガキ	杯部小形で平底から内湾し口縁部外傾し尖る	(8.4)	(4.6)			口縁1/2	化粧土塗布
509	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	杯部内面ミガキ、脚部内面絞り目、ユビオサエ、外面ナデ・ユビオサエ	内湾する杯部に外反する裾部、中空筒部		(8.5)			坏部1/3、脚若干	有機質付着
510	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラミガキ	内湾する杯部下半から外反し端部尖る	(17.8)	(5.6)			口縁1/8	
511	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヨコハケからヘラミガキ、外面ヘラケズリからナデ、円板充填	平たい下半から外反する口縁部で端部尖る	(18.2)	(5.3)			口縁1/4	
512	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ハケからミガキ、外面沈線1条、円板充填	内湾する下半から外反し端部丸い、筒部外傾	(19.4)	(6.8)			口縁1/5	
513	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	内面ヨコナデ上からハケ、ナデ、外面ヨコナデ	水平ぎみから外反する口縁部で端部角張る	(24.0)	(5.6)			杯部1/4	灰
514	土師器	壷	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	水平ぎみから突出し外反する口縁部で端部丸い	(22.5)	(5.7)			口縁1/4	讃岐
515	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラミガキ、ハケからナデ、外面ヘラケズリ、脚部内面絞り目、ハケ、脚部外面ヘラミガキからナデ	内湾する下半から外反し端部尖る、筒部外傾、中空	(22.6)	(10.4)			口縁1/4、脚柱部1/2	黒斑
516	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキからハケ、円板充填で中央串状刺突	内湾し突出してから外反する杯部で端部丸い、筒部外反し中空	(27.6)	(16.0)			口縁1/4、脚柱部1/2	
517	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ハケからナデ、外面ユビオサエからハケ、ケズリ？	内湾する下半から2段に外反し端部丸い	(20.2)	(7.0)			口縁1/3	
518	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	内面ミガキ？、脚部内面ケズリ、ヨコナデ外面ミガキ	外反する裾部で端部尖る、杯部内湾		(6.2)		10.2	底部1/4	
519	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ミガキ、脚部内面ナデ	外傾し変化して不落裾部		(4.4)			脚部若干	接合面に串状筋
520	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ミガキ、ヨコナデ、ナデ	外傾する		(3.0)			脚部若干	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
521	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ	内湾し端部丸い	(18.9)	(4.7)			口縁1/4	
522	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ハケ、ケズリからナデ、外面ヘラケズリからナデ	内湾し端部尖る	(14.8)	(4.0)			口縁～底部2/3	
523	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ヘラミガキ	内湾し端部丸い	(14.0)	(5.3)			口縁1/4	
524	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、外面ハケからナデ、ヘラケズリ、端部沈線状になる	内湾し端部丸い	(13.2)	(5.6)			口縁1/5	
525	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラミガキからナデ、外面ハケからナデ	内湾し端部丸い	(11.8)	(4.5)			口縁1/4	
526	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外面ケズリからヘラミガキ、底に串状刺突	水平に開き外反ぎみの口縁部で端部丸い	(11.0)	(4.6)			口縁わずか	
527	土師器	鉢	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ	内湾し端部丸い	(9.8)	(4.6)			口縁1/6	
528	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ヘラミガキ	内湾し端部丸い	(13.0)	(4.6)			口縁1/2、体部1/2	
529	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ミガキ、ナデ、4方向穿孔	内湾し端部尖る杯部から中空の短い筒部から低く外傾し端部尖る	11.3	8.8		(15.8)	口縁3/4、底部1/4	写真あり、南半
530	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	脚部内面板ナデ、絞り目のちナデ、ハケ、外面ハケのちミガキ、4方向穿孔	中空の外傾する筒部から外傾し端部丸い裾部		(6.2)		(17.5)	底部若干	
531	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ユビオサエ調整、外面ハケからナデ、4方向円孔	内湾ぎみに低く延びる裾部		(3.2)		(17.6)	脚部ほぼ完形	
532	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、外面タテハケからヘラミガキ、3方向円孔	中実筒部から外反し端部尖る		(7.0)		(10.2)	底部1/6	
533	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	外面ケズリからハケのちミガキ、内面板ナデ、3方向円孔	外傾してから外反する		(7.0)		(13.2)	底部1/4	接合面に串状筋
534	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	内面ナデ、外面縦ハケからナデ、脚部内面ハケからヘラミガキ、孔3方向	内湾し端部下につまむ、短い中実		(5.7)		(11.9)	脚部ほぼ完形	黒斑
535	土師器	高杯	旧河道（暗灰砂）	内面ケズリ、ハケからナデ、外面工具当たり痕、ケズリ、ミガキ、孔3方向	外反し端部丸い		(6.3)		(11.6)	底部3/4	
536	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	外面ヨコナデ、内面ミガキ	外傾し端部角張る		(2.5)		(9.6)	脚部1/2	
537	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、7条凹線から円形浮文と竹管文	外反し端部大きくつまみ上げ面になる	(23.5)	(3.7)			口縁1/6	
538	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヨコハケからヘラミガキのち竹管文、外面ハケからヘラミガキ、凹線	外反し他qんぶ肥厚する	(29.0)	(4.5)			口縁1/3	
539	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ナデ、ハケか板ナデ、外面ミガキ	筒部外反し裾部外傾し端部角張る、上台は突出してからが外反し丸い	20.0	14.6	脚 4.0	14.2	口縁・器部ほぼ完形、脚部・底部完形	写真あり　南半
540	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	内面ケズリからハケ・ナデのち、ヘラミガキ、外面ケズリ、ハケのちナデ、ミガキ、4方円形透孔、粘土紐	外反し端部丸い、突出してからさらに外反する上台部で端部尖る	(23.8)	18.15		14.5	口縁1/2、底部5/7	写真あり　北半

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
541	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラケズリ	内面はくの字に開き端部外側につまみ出す、外面凹凸	(11.8)	(5.3)		(11.0)	脚部ほぼ完形	山陰
542	土師器	鼓型器台	旧河道（暗灰砂）	内面ナデ、ケズリ、外面ヨコナデ	下台は内湾、上台は外傾し稜線を持つ		(5.0)			体部若干	
543	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリからヘラミガキ	内湾し端部上につまみ上げ丸い	(10.0)	(2.9)			口縁1/3	
544	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外面ケズリ	内湾し端部上につまむ	(7.9)	(3.2)			口縁1/4	筒部ソケット状になる
545	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、ミガキ	外傾し端部上につまむ		(1.6)		(6.7)	底部1/4	
546	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面ハケからナデ、工具痕、凹線状	内湾し端部尖る	(8.4)	(3.4)			口縁1/3	
547	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	杯部内面ヘラミガキ、外面ミガキ、ヨコナデ、脚部内面ハケ、外面ヘラミガキ、孔	内湾する上台部、内湾する下台部で端部つまむ	(8.8)	(6.1)		(10.6)	脚部3/4	
548	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	内面ハケ状工具のナデ、外面ヨコナデ、ヘラミガキ、脚部内面絞り目、4方孔	外傾する裾部で端部尖る、上台は外傾		(7.3)		(11.4)	脚部ほぼ完形	
549	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面板状工具、外面ヘラミガキ、4方向孔	外傾する裾部で端部尖る、		(7.9)		(12.9)	脚部2/3	
550	土師器	器台	旧河道（暗灰砂）	ヨコナデ、内面横ハケからヘラミガキ、外面ヘラミガキ、凹線、脚部内面絞り目、ケズリ、3方向孔	浅く外傾し端部つまみあげる上台、筒部直で広がる	(10.6)	(6.4)			口縁2/3、脚柱部完形	
551	土師器	脚部	旧河道（暗灰砂）	内面ハケのちナデ、外面ミガキ、工具痕	外反する		(5.0)		(8.3)	底部1/4	
552	土師器	脚部	旧河道（暗灰砂）	内面ナデ、ハケ、ヨコナデ	内湾し端部肥厚し、中実、外傾する体部		(6.9)		9.5	脚部ほぼ完形	
553	土師器	製塩土器	旧河道（暗灰砂）	ユビ成形、ナデ	外反し端部丸い		(2.4)		5.1	底部ほぼ完形	
554	土師器	製塩土器	旧河道（暗灰砂）	ユビ成形、ナデ	外傾し端部丸い、体部内湾		(2.6)		4.9	底部完形	
555	土師器	製塩土器	旧河道（暗灰砂）	ユビ成形、ナデ、内面ハケ工具痕、外面ユビオサエ痕	外傾し端部中央尖る、体部内湾		(2.5)		(4.5)	底部ほぼ完形	
556	土師器	製塩土器	旧河道（暗灰砂）	内面工具のアタリ痕、外面タタキ、ユビ成形	外傾し端部尖る、体部外傾する		(3.3)		(4.2)	底部完形	
557	土師器	製塩土器	旧河道（暗灰砂）	ユビ成形、ナデ、粘土紐	体部内湾、外傾し端部丸い		(2.4)		5.4	底部ほぼ完形	
558	土師器	製塩土器	旧河道（暗灰砂）	ユビ成形、ナデ	体部内湾、外傾し端部丸い		(2.9)		5.4	底部完形	
559	土師器	製塩土器	旧河道（暗灰砂）	ユビ成形、内面ナデ、外面タタキからナデ、ユビナデ	筒部中実で体部内湾、短く延び尖る		(4.2)		(4.6)	底部ほぼ完形	
560	土師器	製塩土器	旧河道（暗灰砂）	内面ハケ、外面タタキからナデ、ユビ成形	内湾する体部、外傾する脚台で端部丸い		(6.9)		(4.4)	底部1/2	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
561	白磁	椀	包含層（黄灰中砂）	ロクロナデから施釉、露胎、ケズリ出し高台	低い高台から内湾する		(3.4)		(6.0)	底部1/2	
562	青磁	椀	包含層（黄灰中砂）	ロクロナデ、文様から施釉、露胎	断面台形の高台で内湾する		(3.4)		(4.9)	底部わずか、体部1/4	
563	須恵器	杯身	包含層（黄灰中砂）	ロクロナデ	内湾する	(11.1)	(3.3)			口縁1/7	
564	須恵器	杯身	包含層（礫層）	ロクロナデ	内湾し反り外反し尖る、受部短く尖る	(11.8)	(3.1)			口縁1/12	
565	須恵器	杯身	包含層（礫層）	ロクロナデ、内面ロクロナデの上からナデ、外面回転ヘラ切りのちナデ	平底から内湾し端部外側に尖る	(11.7)	3.15		(8.6)	約1/4	
566	須恵器	杯	包含層（礫層）	ロクロナデ、高台底沈線状に凹む	平坦な底から外傾し端部尖る、方形の高台	(12.2)	2.8		(8.8)	口縁1/11	
567	須恵器	椀	包含層（礫層）	ロクロナデ、底部回転糸きり	中央が上がる平底から内湾		(1.5)		(5.2)	底部ほぼ完形	
568	須恵器	皿	包含層（礫層）	ロクロナデ	平底から外傾し端部丸い	(16.8)	1.9		(15.0)	口縁1/10	
569	土師器	壺	包含層（灰砂礫）	内面ユビ成形からハケ上からナデ、外面ハケからヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部、端部丸い	(12.6)	(7.65)			口縁～肩部1/4	写真あり
570	弥生土器	壺	包含層（灰砂礫）	外面ヘラミガキ	内傾する体部から直立する頸部		(5.05)			頸部1/1	写真あり
571	弥生土器	壺	包含層（礫層）	外面ナデ、指頭圧痕突帯文、クシ描直線文、波状文	外反する頸部で体部外傾ぎみ		(5.35)			頸部小片	
572	土師器	甕	包含層（礫層）	ヨコナデ、内部ヘラケズリ、擬凹線	短く外反する頸部から斜めに外傾し端部丸い	(11.9)	(3.3)			口縁1/4	吉備
573	土師器	壺	包含層（礫層）	ヨコナデ、外面ヨコナデによる凹線	外反する頸部から内傾し端部近くで外反し端部尖る	(12.6)	(5.0)			口縁1/8	
574	土師器	小型丸底壺	包含層（礫層）	口縁部ヨコナデ、内面ケズリ、外面ナデ	やや肩の張る内湾する体部から鋭い頸部稜線を持ち外傾する口縁部、端部尖る	(10.0)	(7.4)			口縁ほぼ完形、体部1/2	写真あり
575	土師器	甕	包含層（礫層）	ヨコナデ、外面波状文	外反し端部丸い	(19.4)	(2.25)			口縁小片	
576	土師器	甕	包含層（礫層）	内面ヨコナデ、ヘラケズリ、外面ヨコナデ	内傾する体部から内湾する口縁部で外に丸い	(17.4)	(7.45)			口縁2/3	
577	土師器	鉢	包含層（礫層）	ヨコナデ、外面ナデからハケ、内面ナデ、ハケ？、底部再成形からナデ	上げ底から内湾し、口縁部短く外傾し端部丸い	(15.4)	(6.8)			口縁1/3	写真あり
578	土師器	製塩土器	包含層（礫層）	内部ナデ、ユビ成形からナデ	内湾する体部で脚台外傾し端部外につまみ出す		(3.1)		(4.4)	底部ほぼ完形	搬入品か
579	土師器	製塩土器	包含層（礫層）	内部ナデ、ユビ成形	外傾する体部、脚部も外傾し端部丸い		(2.5)		(4.8)	底部1/2	
580	土師器	製塩土器	包含層（礫層）	ユビ成形からナデ	内湾する体部で脚台は僅かに外反、端部尖る		(2.3)		(4.3)	底部1/2	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
581	土師器	製塩土器	包含層（礫層）	ユビ成形、ナデ	外反する脚部で端部丸い、体部内湾		(2.1)		4.4	底部完形	
582	土師器	器台	包含層（礫層）	ヨコナデ、円板充填	内湾し端部丸い	(9.2)	(3.1)			口縁1/5	製塩土器に転用
583	土師器	高杯	包含層（礫層）	ヨコナデ、ナデ、底に串状刺突	内湾し端部反り丸い	(14.8)	(5.2)			口縁3/4	写真あり
584	土師器	器台	包含層（礫層）	ヨコナデ、外面ナデ、底部ナデ、上台内面中心に貫通しない孔	内湾し端部上につまみ上げる上台、外傾する下台	(8.2)	(3.1)			口縁1/2	
585	土師器	壺	包含層（褐灰）	ヨコナデ、内面ナデ	外反し突出して内傾する	(22.6)	(3.8)			口縁1/7	讃岐
586	土師器	体部	包含層（褐灰）	外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ、ハケのちナデ消し、波状文？	内傾する	長 (4.2)	幅 (4.0)	厚 0.75		口縁小片	
587	土師器	甕	包含層	ヨコナデ、内面ヨコハケ、ヘラケズリ、外面タタキ	内湾する体部に外傾する口縁部で端部内側につまむ	(18.0)	(6.3)			口縁1/7	
588	土師器	壺	包含層	ヨコナデ、内面ヨコハケ、外面タテハケ？	外傾して直に上がる		(7.0)	(19.0)		頸部1/7	木あり　讃岐
589	土師器	壺	包含層	内面貝殻条痕、外面タタキからミガキ	不安定な平底から内湾する		(5.1)		6.1	底部完形	讃岐
590	土師器	底部	包含層	内面ナデ、工具アタリ痕、外面ハケからナデ、底部木葉痕	ドーナツ底から内湾する		(4.2)		(4.0)	底部完形	
591	土師器	底部	東側側溝	ナデ、内面底部に工具痕、底部ヘラ描？	小さな平底から内湾する		(4.1)		1.4	底部完形	鉢か
592	土師器	高杯	東西トレンチ	ヨコナデ	外反し端部尖る	(25.8)	(3.2)			口縁1/10	
593	土師器	脚台	2.5トレンチ	内面ナデ、外面縦ハケからナデ、ユビ成形	平底から外反する	(6.8)	(4.2)			底部1/2	
594	土師器	製塩土器	包含層	ユビ成形	外傾し端部丸い		(1.8)		(4.2)	底部1/5	
595	土師器	製塩土器	西側側溝	ユビ成形、ナデ	外傾し端部尖る、体部内湾		(2.8)		(4.8)	底部1/2	鉄あり
596	土師器	脚台	東西トレンチ	ナデ、脚部内面ケズリ、ユビ成形	外反し端部尖る		(4.2)		(6.4)	底部1/2	
597	土師器	脚台	排土	外面ミガキからナデ？、内面ナデ、ハケ、焼成前穿孔	外反し端部内外に肥厚する		(3.7)		(8.0)	底部1/5	木あり

Ⅴ　竹の前遺跡の遺構と遺物

竹の前遺跡において検出した遺構は、１・２区あわせて掘立柱建物跡３棟・柱穴列４列・土坑１基・溝３条・ピット４基である。１区の遺構の時期は弥生時代と中世前半期である。２区出土の遺物量は希少であるものの、およそ奈良時代から平安時代にかけての時期と考えられる。

１．１区の遺構

遺構は、現耕土ないし旧耕土の直下で検出した。遺構検出は１面で実施したが、遺構の時期は少なくとも２時期あり、弥生時代（SB03・SA01・SD02）と中世前半期（SB01・02・SD01）である。

SB01（図版 44・写真図版 85）

調査区北東隅で検出し、調査区外に未検出部分が及ぶが東西方向で１間以上、南北方向で３間以上の側柱建物である。Ｐ１－１・１－２間は1.96ｍ、Ｐ１－１・２－１間は2.09ｍ、Ｐ２－１・３－１間は2.94ｍ、Ｐ３－１・４－１間は2.19ｍを測る。Ｐ１－１～３－１を基準とした主軸方向はN14.6° Wを指向する。

柱穴の直径は19～30cmを測り、検出面からの深さは11～33cmを測る。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は６～８cm程度である。

SB02（図版 45・写真図版 85）

調査区南東隅で検出し、調査区外に建物南側の未検出部分が及ぶ可能性が残るが東西方向で３間、南北方向で２間以上の総柱建物である。建物の規模は、東西ではＰ１－１・１－４間で7.08ｍ、Ｐ２－１・２－４間で7.24ｍを測り、南北ではＰ１－２～３－２間で4.76ｍ、Ｐ１－３～３－３間で4.84ｍを測る。Ｐ１－２～３－２及びＰ１－３～３－３を基準とした主軸方向はN9.1° Wを指向する。

柱穴の直径は22～34cmを測り、検出面からの深さは19～37cmを測る。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は７～11cm程度である。

SB03（図版 44・写真図版 84・85）

調査区南部で検出し、調査区南壁に近いものの１間×１間のみの建物である可能性が高い。桁行方向はＰ１－１・１－２間で2.23ｍ、Ｐ２－１・２－２間で2.35m、梁行方向はＰ１－１・２－１間で1.99ｍ、Ｐ１－２・２－２間で1.89mを測る。Ｐ１－１・１－２及びＰ２－１・２－２を基準とした主軸方向はN37.8° Wを指向する。

柱穴の直径は24～54cmを測り、検出面からの深さは28～33cmとほぼ底が近いレベルに揃っている。柱穴はいずれも切り合い、各々の内側に再度掘削して建物を建て替えている状況が看取される。以上から、床面の削平された竪穴住居跡の主柱穴のみが残存している状況が可能性の一つとしてあげられる。

SA01（図版 45）

柱穴３基が並び、主軸方向はN55.4° Eを指向する。柱穴の直径は23～33cmを測り、検出面からの深さは10～19cmを測る。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は９～14cm程度である。

SK01（図版 44）

調査区西壁際の中央付近で検出した。約半分が調査区外西側に及ぶが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。長軸方向81cm、短軸方向の検出最大幅47cm、検出面からの深さ24cmを測る。埋土から土器は出土していないため、時期は不明である。

SX01（図版 44・写真図版 84）

調査区南側で検出した。掘り方の平面形は隅円方形を呈し、その規模は主軸方向で 1.47m、その直交方向で 79cm を測る。横断面形は箱形を呈し、最深部となる東小口付近でも検出面からの深さはわずか８cm である。棺材そのものは遺存していなかったが、土質の違いから棺痕跡を掘り方の中央部付近で確認することができた。底部での規模は主軸方向で 1.20 m、その直交方向で 52cm を測る。また主軸方向は N54.4° W を測る。なお、北側の側板部分と東側の木口部分のほぼ中央付近の裏込め土内に直径９～ 16cm の亜角礫が配置されており、それぞれ側板、木口板を立てる際の支えとされた可能性が考えられる。

SD01（図版 47・写真図版 81）

調査区北半を横断し、延長 15.2m を検出した。検出幅は一定せず幅 0.85 ～ 3.5m となり、検出面からの最大深 25cm を測る。特に西半部では、最も深い部分が南北に２箇所認められ、埋土は概ね淡い灰黄色を呈するシルトからシルト質の極細砂で構成される。埋土の堆積状況から溝内における埋没の単位に関して２～３度の変遷が看取され、それぞれの横断面形は概ね皿状を呈するが、部分的に逆台形状を呈する箇所も認められる。埋土から出土した土器より、少なくとも 11 世紀後半には掘削されていたと考えられる。

SD02（図版 47・写真図版 82 ～ 83）

調査区の西側を直線的に縦断する溝である。延長 17.2m にわたって検出した。堆積状況により２時期に分かれ､古い時期のもの（SD01-a）が埋没した後に新しい時期のもの（SD01-b）が掘り直されている。SD01-a は最大幅 2.63m、検出面からの深さ 83cm を測り、横断面形は幅広のＶ字形を呈する。SD01-b は最大幅 2.02m、検出面からの深さ 55cm を測り、横断面形は逆台形を呈する。SD01-b では、少なくとも５層及び８層、９層の堆積する直前に掘り直されていることが観察され、管理が及んでいた状況が看取される。また、黒褐色から暗褐色の極細砂で構成される３層から４層上半にかけては弥生時代後期前葉の土器が多く出土している。一方 SD02-a からは弥生時代前期の土器が出土しているが、掘削の時期が弥生時代前期まで遡りうるものか、混入したかは出土量が少ないために判断を保留しておきたい。

２．２区の遺構

中央付近から南側にかけて長方形に近い形状の攪乱が大きく及んでいたが、東半分で柱穴や溝を確認することができ、また南壁では攪乱の影響をさほど受けず、堆積状況を確認することができた。遺構は盛土ないしは旧床土の直下で検出した。それ以下の層序では、淡い黄灰色を基調とする低湿な堆積（１～９層）からなる調査区西半部を中心とする狭い谷地形が観察されているが、これらの層から土器は出土していない。

SA02（図版 46・写真図版 85）

柱穴３基が並び、主軸方向は N76.4° W を指向する。柱間は P1・P2 間で 2.26 m、P2・P3 間で 2.09 m を測る。柱穴の直径は 29 ～ 31cm を測り、検出面からの深さは 12 ～ 22cm を測る。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は９～ 13cm である。

SA03（図版 46）

柱穴が少なくとも２基以上並び､主軸方向は N85.6° W を指向する。柱間は P1･P2 間で 2.43 m を測り、P2 では柱穴の直径が 32cm、検出面からの深さが 16cm、柱痕の直径は 10cm 程度を測る。

SA04（図版 46・写真図版 85）

柱穴３基が並び、主軸方向は N17.6° W を指向する。柱間は P1・P2 間で 2.05 m、P2・P3 間で 1.95 m を測る。柱穴の直径は 25 ～ 36cm、検出面からの深さは 19 ～ 26cm を測る。柱痕が確認できた P2・P3 では直径 15cm 程度である。P1 では柱の抜き取り後に、根石と思われる角礫も一緒に埋められている。P2 底部では土師質の平瓦が礎盤として利用されており、８世紀後半から９世紀代の所産と考えられる。

SD03（図版 47・写真図版 81）

調査区北東側から中央付近にゆるやかな弧を描きつつ延びる。攪乱に切られており、延長 6.6 mを検出した。幅７～９cm、検出面からの最大深 12cm を測り、横断面形はＵ字形を呈する。溝底は北から南に向かってわずかに傾斜する。柱穴に切られるが、埋土から出土した土器は出土していないため、詳細な時期は不明である。

３. 出土遺物

SD01（図版 48・写真図版 86）

1 は白磁の碗で、口縁は断面三角形に近い。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類に分類される。*2* は須恵器の椀で、回転糸切りの底部は平高台がやや突出する。いずれも 11 世紀後半の所産と考えられる。

SD02（図版 48・49・写真図版 86 ～ 88）

出土した土器はすべて弥生土器である。

5 ・*22*・*23*・*32*・*35*・*36* は弥生時代前期後葉から末ないしは中期初頭の土器で、特に *22*・*32*・*35*・*36* は胎土に粗い砂粒が顕著に含まれる。*5* ・*36* は甕、他は壺である。*5* は３条沈線の施された胴部上半から口縁が緩やかに外反する甕である。*32* は広口長頸壺の頚部から体部肩付近に移行する箇所の破片で、貼り付け突帯上に刻み目を施す。*35* は分厚い底部の外面には入念に横方向のミガキが施される。*36* は大型の甕の底部で、底径は 10.2cm を測る。

弥生時代前期後葉から中期初頭の土器を除いたほかは弥生時代後期前葉の土器である。

3 ・*4* ・*6* ～ *14*・*30*・*31* は甕である。*3* は平底から卵形に近い体部が立ち上がり、短い口縁が緩やかに外反しつつ、端部は丸く収められる。*4* は小型品で、やや上げ底気味の底部から内傾気味に開く体部は肩が張り、口縁は屈曲して端部は面を持ち退化した凹線が施される。*6* ・*31* は受け口状の口縁となるが、口縁端部が立ち上がるがつまみ出されない。*7* は口縁端を肥厚させ端面をもつ。内面はヘラケズリを施す。*8* は体部からくの字形に屈曲する口縁が端部を上下に拡張させ、退化した凹線を２条設ける。*9* も緩やかに屈曲する口縁が端部を上下に拡張させ、退化した凹線を２条設ける。体部内面はヘラケズリを施す。*10* は上下に拡張された口縁端にかすかに凹線２条が施された痕跡が看取される。*11* は胴張りし、くの字形に屈曲する口縁が端部を上下に拡張させ、退化した凹線を１条設ける。*12* ～ *14* は甕底部で、いずれも平底で *13* は外方にふんばり気味。*12* はこの一群の中では底径が 3.1cm と小さく、*14* が 5.1cm あるのとは対照的である。

15 ～ *21* は壺である。*15* は吉備系の脚付直口壺。胴部最大径は 30.2cm を測り、備前や播磨の他の出土例も含め直径 18 ～ 20cm のものが多いことから、通常の 1.5 倍程の規模となる。断面 M 字形の突帯を２条施し、その間に８条を１単位とする棒状浮文を付し間隙には縦方向のミガキを施して加飾する[1)]。

16・*17* は口縁部の外反の著しい直口壺で球形の胴部を持ち、いわゆる香東川下流域産土器（大久保 2003）と共通する器形、調整を持つ[2)]。特に頚部上半に右上がりのらせん状の沈線文を施し、その下端

と頚胴部境界に１条沈線を設ける間に *16* では板状原体の先端の刺突による右上がりの斜線文を１段、*17* では同様の斜線文を羽状に２段対置させるのが特徴的である[3)]。なお、上方につまみあげて肥厚させた口縁端部に形成された端面には、*16* では沈線２条、*17* ではナデの条線を沈線状に２条程度施し、口縁の内外面ともにナデの単位により凹凸を造り出すが､内面のほうがより顕著で凹線状に２条以上施す。

18・*19* は広口壷で、いずれも球形の胴部に直口気味の短い口縁部が付くものである。

20・*21* は壷の底部。*20* は外面に粗いナデのような縦方向の幅の広いミガキを施す。

24 ～ *28* は高杯である。*24*・*25* は有稜高杯の杯部で、浅い杯部の屈曲部から口縁が立ち上がり気味に外反しつつ開く。*25* は口径 33.4cm と大型化している。*26*・*27* はラッパ状に開く脚部で、*27* は脚裾端部を肥厚させ端面を設ける。*26* は円孔を中程に４ヶ所、*27* では中程に２箇所のほかさらにやや下方にも４ヶ所穿つと考えられる。*28* は円筒形の脚柱部から屈曲して外反しつつスカート状に開く裾部をもつ。裾端部に端面を設け、退化した凹線を１条施す。

29 は器台で、裾に凹線５条を施し、裾端部は上方につまみ上げ端面を設ける。裾の直径は 28.8cm。

４.まとめ

弥生時代、律令期、中世前半の遺構を検出した。弥生時代は溝及び竪穴住居の可能性のある建物、律令期は柱穴列、中世前半は掘立柱建物と柱穴列で、その他に検出した土坑や木棺墓の時期は不明である。

１区の中世前半と考えられる SB01・02 は主軸方向が南北方向に近く、弥生時代の SB03 の主軸方向は SD02 のそれに近く、２区柱穴列 SA02・SA04 の主軸方向は現在の地割に近い。２区 SA03 は律令期から９世紀と考えられるが、主軸方向は本町遺跡で検討された飾磨郡条里 N23° E とは異なる。

２区 SD02 は、横断面形幅広の V 字形の古い時期のもの（SD02-a）の埋没後に、横断面形逆台形の新しい時期のもの（SD02-b）が掘り直されている。SD02-b は弥生時代後期前葉頃とみられるが、SD02-a は埋土内からの弥生時代前期後葉から中期初頭の土器の出土がごく少量であるため時期の決定には慎重を期したい。

出土遺物では SD02 から出土した弥生土器が大半を占め、前期のものを除くと外面にタタキを施し、口縁を丸く収める甕（*3*）以外は、概ね外面タテハケ調整で、口縁端部を拡張して端面を設け、後期前葉の一群に比定される。とりわけ外来の要素を持つ吉備系の脚付直口壷や讃岐系の直口壷が特筆される。

SD02 は、姫路市教育委員会による竹の前遺跡の平成 20 年度調査（飯田・手柄地区第３次発掘調査）の際に検出された溝と本来同一の遺構と考えられ､当該調査においても良好な出土資料が知られている。

注

１）ただし棒状浮文は、最大で９条残存している箇所が認められる。なお、類例は脚の付くかどうか不明な破片もしくは脚の付かない直口壷を含めて比較対象としているが、２条突帯間の棒状浮文については、赤穂市有年原・田中遺跡や岡山市百間川原尾島遺跡では３条１単位のものが、岡山県赤磐市立道遺跡では４条１単位のものが出土しており、神戸市西区池上北遺跡では棒状浮文を付さず縦方向のミガキのみを一定間隔で設けたものが知られている。

２）胎土も角閃石を含む褐色を呈するが、両者の直接の比較･検討作業を経ていないため早急な結論は差し控えたい。

３）口縁の外反の著しく頚部に凹線からせん状の沈線及び斜線文を施す例は高松市上天神遺跡を中心に、隣接する太田下・須川遺跡にかけてみられる。なお、上天神遺跡では口縁の外反の著しい直口壷が「直口壷Ｃ」と分類される。上天神遺跡では直口壷全体では斜線文が羽状に２段配置される例は一定量認められるものの直口壷Ｃでは１段が一般的であり、その一方で大阪府高槻市芥川遺跡では口縁の外反の著しい器形で斜線文を２段配置する類例が認められる。*17* では２段の斜線文のうち上段が下段を切るが、この２段の斜線文の切り合い関係は太田下・須川遺跡の壷に認められる切り合い関係と共通するものである。

参考文献

秋枝　芳 1984『本町遺跡』姫路市教育委員会

大久保徹也・森格也（編）1995『上天神遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 6 冊　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方整備局

大久保徹也 2003「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社

尾上元規（編）2006『来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡・平岩古墳』岡山県埋蔵文化財調査報告 199　岡山県教育委員会

北山健一郎・森下友子（編）1995『太田下・須川遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方整備局

菅本宏明 1986「池上北遺跡」『昭和 58 年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

高上　拓 2010『太田下・須川遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 124 集　高松市教育委員会

橋本久和 1995 『芥川遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第 18 冊　高槻市教育委員会

姫路市埋蔵文化財センター 2008『飯田・手柄地区発掘調査（第 3 次）調査成果報告会資料』

平井　勝（編）1995『百間川原尾島遺跡 4 』岡山県埋蔵文化財調査報告 97　岡山県教育委員会

横田賢次郎・森田　勉 1978「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究紀要』 4　九州歴史資料館

表４　竹の前遺跡　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
1	白磁	碗	１区　SD01	内外面回転ナデ	断面三角形状の玉縁の口縁	(16.6)	(3.5)			口縁周辺	
2	須恵器	椀	１区　SD01	内外面回転ナデ、底部回転糸切り	平高台がやや突出		(1.9)		(4.0)	底部1/4	
3	弥生土器	甕	１区　SD02-a	外面タタキ、内面	平底から内湾する体部、口縁は外反し端部丸い	(9.6)	14.4		4.2	口縁1/3、底部完形	
4	弥生土器	甕	１区　SD02-a	外面縦方向のミガキ、内面ヘラケズリ、口縁端部に退化凹線	平底から内湾しつつ肩張り	(7.8)	7.3	(8.0)	3.2	口縁1/3、底部完形	口縁と底部の対称位置に黒斑あり
5	弥生土器	甕	１区　SD02-b	ヘラ描沈潜3条	直立する体部		(4.1)			体部小片	
6	弥生土器	甕	１区　SD02-a	外面タテハケ	外傾しつつ立ち上がる口縁	(15.2)	(3.8)			口縁1/4	
7	弥生土器	甕	１区　SD02-a	体部内面ヘラケズリ	口縁端肥厚、端面設ける	(14.0)	(3.3)			口縁1/8	
8	弥生土器	甕	１区　SD02-a	口縁端退化凹線2条	くの字形屈曲口縁の端肥厚	(14.9)	(3.7)			口縁1/9	
9	弥生土器	甕	１区　SD02-a	口縁端退化凹線2条、内面ヘラケズリ	緩やかに屈曲する口縁肥厚	(14.8)	(6.6)			底部1/2	頚部屈曲内部に接合痕
10	弥生土器	甕	１区　SD02-a	外面タテハケ、内面指オサエ後ナデ	口縁端肥厚、端面凹線か	(15.5)	(10.5)	(19.7)		口縁1/4、体部1/10	
11	弥生土器	甕	１区　SD02-a	外面タテハケ、内面ヘラケズリ後ナデ	胴張り、口縁肥厚させ端面に退化凹線１条	(14.5)	(17.9)			口縁1/4強	
12	弥生土器	壺	１区　SD02-a	外面タテハケ、内面ヨコハケ	平底から体部開く		(6.5)		3.1	底部完形	
13	弥生土器	壺	１区　SD02-a	外面ヘラケズリ、内面板ナデで掻き取る	体部最下部分が削られふんばり気味の底部		(3.6)		4.5	底部完形	胎土の色調は讃岐に似るが形態が異なる
14	弥生土器	壺	１区　SD02-a	外面タテハケ、内面板ナデ粘土掻取り	平底から直立気味に開く		(4.9)		5.6	底部3/4	
15	弥生土器	壺	１区　SD02-a	外面縦方向のミガキ、断面M字突帯2条間に棒状浮文8条が6単位、内面ヨコハケ後ナナメハケ	扁平なタマネギ状の胴部に細い頚部と細い脚部がとりつく		(13.1)	30.2		胴部4/5	外面の一部に黒斑あり、内面に接合痕あり
16	弥生土器	壺	１区　SD02-a	外面口縁端凹線2条以上、口縁ナデ、頚部上半に右上がりのらせん状の沈線文、頚部下半タテハケ→板状原体の先端の刺突による右上がりの斜線文を１段→上半のらせん状沈線（ただし斜線文１条のみ沈線を切る）、胴部上半タテハケ、胴部下半粗いヨコハケ後縦方向のミガキ 内面口縁ナデ（条線2条以上）、頚部指ナデ及び指オサエ一部ヘラケズリ及び絞り痕、肩部指オサエ、胴部下半斜め方向のヘラケズリ	外反の著しい口縁、長い頚部、球形の胴部を持つ	(18.6)	(31.0)	(23.1)		口縁1/2、頚部1/2、体部1/6	頚部内面に接合痕、胴部外面残存下端に黒斑あり

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
17	弥生土器	壺	1区　SD02-a	外面口縁端ナデの条線2条以上、口縁ナデ、頚部タテハケ後上半は右上がりのらせん状の沈線文、下半は板状原体の先端の刺突による右上がりの斜線文を羽状に２段対置（上段が下段を切る）、頚胴部境界に沈線1条、胴部上半タテハケ 内面口縁ナデ（条線2条以上）、頚部指ナデ及び指オサエ一部絞り痕	外反の著しい口縁、長い頚部から球形の胴へと移行する	(18.2)	(20.2)			口縁7/8、頚部1/4	頚部内面に接合痕
18	弥生土器	壺	1区　SD02-a	胴部外面上半横方向のミガキ、下半はタテハケ、頚部付近はタテハケ、底部付近は縦方向のミガキ、内面は上半が指ナデ、下半がヨコハケ	やや肩の張る球形の体部、円盤状の底部		(20.1)	(24.0)	5.8	体部1/2、底部完形	
19	弥生土器	壺	1区　SD02-a	外面口頚部タテハケ、外面体部ミガキ（上半斜め及び横方向、下半縦方向）、内面ヨコハケ、底部内面指オサエ	球形の体部から直立気味の頚部をへて口縁が肥厚しつつ外反する	12.5	29.2	25.0	(6.4)	口縁1/2、体部ほぼ完形、底部1/2	
20	弥生土器	壺	1区　SD02-a	外面粗いナデのようなミガキ、内面ナデ	わずかに上げ底状の底部から体部が開く		(4.5)		8.6	底部完形	
21	弥生土器	壺	1区　SD02-a	外面タテハケ後縦方向のミガキ、内面タテハケ後指ナデ	平底の底部から球形の体部		(8.2)		(6.0)	底部ほぼ完形	
22	弥生土器	壺	1区　SD02-a	外面縦方向のミガキ	平底の底部から体部が開く		(6.7)		(7.9)	底部2/3	黒斑あり
23	弥生土器	壺	1区　SD02-a	外面タテハケ、底部付近一部ケズリ、内面ナナメハケ、底部内面指オサエ後ナデ	平底の底部から体部が開く		(9.1)		(8.1)	底部1/4	
24	弥生土器	高杯	1区　SD02-a	外面杯部・脚部ハケ調整後縦方向のミガキ、内面口縁横方向のミガキ、杯部縦方向のミガキ。円板充填痕跡あり	浅い杯部の屈曲部から口縁が立ち上がり気味に外反しつつ開く	23.1	(6.8)			口縁1/4、杯部1/2強	
25	弥生土器	高杯	1区　SD02-a	外面ハケ調整後斜め方向のミガキ、内面摩滅のため不明。	浅い杯部の屈曲部から口縁が立ち上がり気味に外反しつつ開く	(33.4)	(7.7)			杯部1/2弱	
26	弥生土器	高杯	1区　SD02-a	外面ハケ調整後縦方向のミガキ、内面絞り目。透かし円孔4ヶ所か。	ラッパ状に開く脚部		(5.1)			脚部ほぼすべて、脚裾なし	
27	弥生土器	高杯	1区　SD02-a	外面縦方向のミガキ、内面ヨコハケ後ナデ消す。透かし円孔上2ヶ所、下4ヶ所か。	脚部ラッパ状に開き、脚裾を肥厚させ端面		(10.7)		(11.3)	脚部ほぼすべて、脚裾1/12	

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
28	弥生土器	高杯	1区　SD02-a	外面タテハケ後縦方向のミガキ、内面絞り目	中空の円柱状の脚部からスカート状に裾拡がり、脚裾を肥厚させ端面に凹線1条		(19.3)		(18.8)	脚柱部2/3、底部わずか	
29	弥生土器	器台	1区　SD02-a	外面裾凹線5条	端部肥厚させ端面設ける		(4.0)		(28.8)	脚端部1/5	
30	弥生土器	甕	1区　SD02-a	外面細かいナナメハケ、内面ヘラケズリ	口縁端肥厚、退化凹線3条	(15.0)	(7.6)			口縁1/2、体部2/3	籾痕跡
31	弥生土器	甕	1区　SD02-a	外面タテハケ、内面斜め方向ケズリ	受け口状の口縁	(15.4)	(11.0)			口縁1/2	口縁～体部上半に黒斑
32	弥生土器	壺	1区　SD02-b	外面貼り付け突帯、突帯上に刻み目	頚から体部肩に内湾し移行		(3.3)			体部小片	
33	弥生土器	壺	1区　SD02	底部外面指ナデ成形、内面板ナデ	指ナデ成形によりふんばる底部から球形の体部が開く		(3.1)		5.0	底部完形	強く被熱し赤化する
34	弥生土器	壺	1区　SD02-a	内外面ともにナデ	若干上げ底気味の底部		(2.5)		4.8	底部ほぼ完形	強く被熱し赤化する
35	弥生土器	壺	1区　SD02-b	外面横方向のミガキ、内面ナデ	器壁のぶ厚い底部から開く		(3.5)		(10.6)	底部1/4	
36	弥生土器	甕	1区　SD02-b	外面タテハケ	平底で薄手の底部		(4.8)		(10.2)	底部1/4	

Ⅵ科学分析

1.長越遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

長越遺跡は、兵庫県姫路市飯田に所在する。測定対象試料は、弥生時代末（庄内期）と考えられる竪穴住居跡床面出土炭化材３点（No. 1 ：IAAA-101165 ～ No. 3 ：IAAA-101167）である（表１）。

2　測定の意義

材の絶対年代を明らかにする。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から１M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１M に達した時には「AAA」、１M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径１mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

３MV タンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH- 2）をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素

と同等以上）の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ = 68.2%）あるいは２標準偏差（２σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については､特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

竪穴住居跡床面出土炭化材の ^{14}C 年代は、SH01 出土の No. １が 1870 ± 30yrBP、SH06 出土の No. ２が 1920 ± 30yrBP、SH09 出土の No. ３が 2180 ± 30yrBP である。暦年較正年代（１σ）は No. １が 79 ～ 209cal AD、No. ２が 57 ～ 124cal AD、No. ３が 353 ～ 193cal BC の間で、各々複数の範囲に分かれて示される。No. １、No. ２は弥生時代後期、No. ３は弥生時代中期に相当する値となった。

一般に炭化材を試料とする場合、最外年輪部が伐採年、枯死年を示し、内側では年代値が遡ることを考慮する必要がある。また、No. １、No. ２が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal09 に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜 2009、坂本 2010 など)。その日本版較正曲線を用いて No. １、No. ２の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて 50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-101165	No.1	遺構:SH01 層位:床面	炭化材	AaA	**-27.15 ± 0.58**	**1,870 ± 30**	**79.19 ± 0.26**
IAAA-101166	No.2	遺構:SH06 層位:床面	炭化材	AAA	**-22.42 ± 0.34**	**1,920 ± 30**	**78.72 ± 0.25**
IAAA-101167	No.3	遺構:SH09 層位:床面	炭化材	AAA	**-25.69 ± 0.28**	**2,180 ± 30**	**76.26 ± 0.24**

[#3755]

表２（1）

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age（yrBP)	pMC （%）			
IAAA-101165	1,910 ± 30	78.84 ± 0.24	1,874 ± 26	79calAD - 140calAD (53.6%) 155calAD - 168calAD (6.7%) 195calAD - 209calAD (7.8%)	73calAD - 220calAD (95.4%)

表２（2）

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age（yrBP)	pMC （%）			
IAAA-101166	1,880 ± 30	79.14 ± 0.24	1,921 ± 25	57calAD - 90calAD (42.1%) 100calAD - 124calAD (26.1%)	24calAD - 130calAD (95.4%)
IAAA-101167	2,190 ± 30	76.15 ± 0.24	2,177 ± 25	353calBC - 295calBC (48.3%) 229calBC - 220calBC (5.9%) 212calBC - 193calBC (14.0%)	360calBC - 274calBC (55.3%) 262calBC - 169calBC (40.1%)

[参考値]

文献

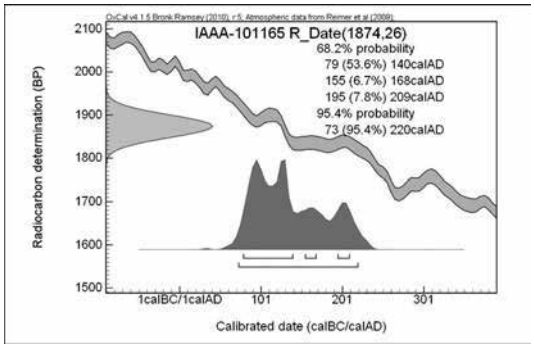
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion：Reporting of 14C data, Radiocarbon 19（3）, 355–363

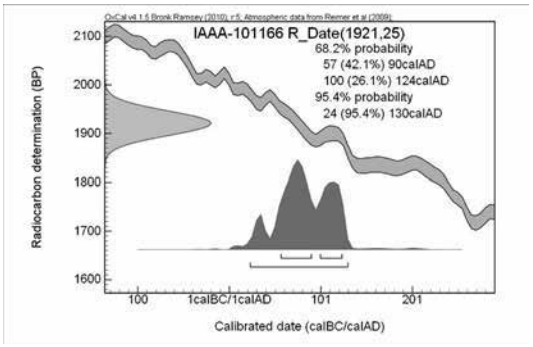
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1）, 337-360

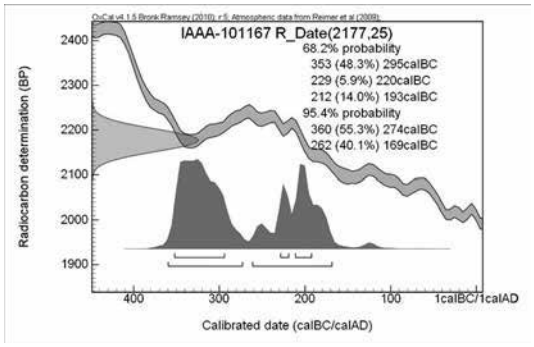
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0 –50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51（4）, 1111–1150

尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代 , 弥生時代の考古学 1　弥生文化の輪郭 , 同成社 , 225–235

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－ , 第 5 回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集 , (株) 加速器分析研究所 , 85–90







[参考] 暦年較正年代グラフ

2.長越遺跡Ⅲ出土遺物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、長越遺跡Ⅲにおいて検出された、古墳時代初頭の住居跡より出土した住居構築材と考えられている炭化材についてその種類を同定し、当時の植物利用について検討する。また、古墳時代初頭の遺物包含層より出土した土師器について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。特に、今回の土師器試料には、発掘調査所見により、讃岐産、河内産、吉備産、因幡産など、近畿や瀬戸内さらには山陰などの地域から搬入された可能性があると指摘された壺や甕の試料もあり、これらの所見と胎土との対応関係あるいは推定される地域性などを検討し、搬入品の可能性について考察する。

Ⅰ.炭化材の樹種同定

1.試料

試料は全て炭化材で、SH01から出土した壁材など4点、SH06の4点、SH09の1点、旧河道の1点の合計10点である。このうち、SH06の試料4点は、1点が垂木？と表記されている他は、全て同一の表記であったため、1-3の仮番号を付して区別している。

2.分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3.結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、針葉樹2分類群（スギ・ヒノキ）と広葉樹4分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・スダジイ）に同定された。なお、SH06の垂木？は、道管が認められることから広葉樹であるが、保存が悪く道管配列等が観察できないため、種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

表1.　樹種同定結果

遺構	位置	番号	樹種
SH01	壁		コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	南東柱		コナラ属コナラ亜属コナラ節
	南西柱		コナラ属アカガシ亜属
	北側垂木		ヒノキ
SH06	垂木?		ヒノキ
		仮1	ヒノキ
		仮2	ヒノキ
		仮3	スダジイ
SH09			スギ
旧河道			コナラ属アカガシ亜属

・スギ（Cryptomeria japonica（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材

部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlcher） ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に１～３個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Quercus* sect. *Cerris*） ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen.* Quercus sect. Prinus） ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*（Makino）Nakai） ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に１～２個幅で放射方向に配列する。孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高。

４.考察

SH01では、壁材と考えられる炭化材がクヌギ節、柱と考えられる炭化材がコナラ節とアカガシ亜属、垂木と考えられる炭化材がヒノキに同定された。クヌギ節、コナラ節、アカガシ亜属は、いずれも重硬で強度が高い材質を有し、加工はやや困難な部類に入る。一方、ヒノキは、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、早材部・晩材部の材質差も少なく、加工は容易である。SH01では壁材や柱材には強度の高い広葉樹、垂木には耐水性・加工性の高い針葉樹が利用されていたことが推定される。

SH06では、垂木？に広葉樹、出土位置不明の３点にヒノキとスダジイが認められた。スダジイは、比較的強度が高いが､加工はやや困難で､保存性も低いとされる。SH01と利用される種類は似ているが、垂木？に広葉樹が利用されており、利用方法・部位に違いが認められる。

SH09は、針葉樹のスギが確認された。スギは、ヒノキと同じく木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが、ヒノキに比べて早材部・晩材部の材質差が大きく、その分加工性も低い。出土状況は不明であるが、SH01やSH06とは異なる種類が利用されていたことが推定される。

同時期の住居跡出土炭化材については、大中遺跡で樹種同定が行われており、クヌギ節やコナラ節の利用が確認されているが、スギやヒノキ等の針葉樹類は確認されていない（高橋,2007）。クヌギ節やコナラ節の利用は、本遺跡の結果とも類似する。一方、大中遺跡では、常緑広葉樹がツバキ属１点のみであり、周囲が二次林化していた可能性が指摘されている。今回の結果では、暖温帯常緑広葉樹林を構成

するアカガシ亜属やスダジイと、二次林を構成するクヌギ節やコナラ節が確認され、周囲に常緑広葉樹と落葉広葉樹が分布していたことが推定される。

針葉樹については、玉津田中遺跡の弥生時代後期～古墳時代の加工材や盤脚部かにヒノキが確認された事例があるが、同時期の建築部材に確認された事例はみられない（島地, 1996)。今回の結果は、ヒノキが建築部材にまで利用されたことを示す結果として重要である。また、スギについては、丹波地域を中心に木製品に利用された例が多く報告されているが、播磨地域では内陸部に位置する下三草・諏訪ノ下遺跡で竪穴住居跡内から出土した用途不明の炭化材に１点確認された例が知られているのみである（島地・林, 1990; 嶋倉, 1991; 伊東, 2006)。今回の結果は、同時期のスギ材利用を考える上でも重要な資料である。

Ⅱ. 土器の胎土分析

1. 試料

試料は、古墳時代初頭とされる遺物包含層から出土した土師器片 20 点である。器種の内訳は、播磨産の所見がある庄内甕が３点、（No. １～３)、同所見の甕および壺が２点ずつ（No. ４、５と No. ６、７)、同所見の高坏および小形丸底壺が３点ずつ（No. ８～ 10 と No.11 ～ 13）あり、讃岐型播磨産とされた壺が１点（No.14)、讃岐産とされた壺が３点（No.15 ～ 17)、河内産、吉備産、因幡産とされた壺が、それぞれ１点ずつ（No.18、19、20）ある。これらを一覧表にして表２に示す。

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲

表2.　胎土分析試料一覧および胎土分類

No.	種別	器種	備考	胎土分類												
				鉱物・岩石組成						粒径組成					砕屑物	
				A2	F6	C1a	C1b	C1c	C7	c	m	f	vf	cs	I	II
1	土師器	庄内甕	播磨産			■						■	■			■
2	土師器	庄内甕	播磨産		■					■	●					■
3	土師器	庄内甕	播磨産		■					■	●				■	
4	土師器	甕	播磨産		■					■			■		■	
5	土師器	甕	播磨産		■					■			●			■
6	土師器	壺	播磨産		■					●			■		■	
7	土師器	壺	播磨産		■							■	■	■	■	
8	土師器	高杯	播磨産		■						■		●		■	
9	土師器	高杯	播磨産		■								●	■	■	
10	土師器	高杯	播磨産		■							●		■	■	
11	土師器	小型丸底壺	播磨産	■									●	■	■	
12	土師器	小型丸底壺	播磨産		■					■		●			■	
13	土師器	小型丸底壺	播磨産	■								●	■	●	■	
14	土師器	壺	讃岐型, 播磨産		■					●	■					■
15	土師器	壺	讃岐産				■				■	●				■
16	土師器	壺	讃岐産				■				■	●				■
17	土師器	壺	讃岐産					■			■	●				■
18	土師器	甕	河内産					■			●	■				■
19	土師器	甕	吉備産			■					■	●				■
20	土師器	甕	因幡産						■		●	■				■

鉱物・岩石組成の各分類内容は本文を参照されたい。
砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径：c;粗粒砂　m;中粒砂　f;細粒砂　vf;極細粒砂　cs;粗粒シルト　●;第二のピーク
砕屑物の割合　Ⅰ:15%未満　Ⅱ:15%以上

内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。
薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

３.結果

観察結果を表２、図１～３に示す。鉱物片では、ほぼ全ての試料で石英と斜長石を主体とするが、試料によってはそれらに加えて角閃石を多く含む組成やカリ長石を少量伴う組成などが認められる。また、岩石片では、凝灰岩を主体とする組成と花崗岩類を主体とする組成が認められる。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A 類から K 類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類によって細分もしている。今回の結果も、その基準に従って分類してみると以下のようになる。

No. ２～ No.10、12、14 は、鉱物片では石英または斜長石を主体とし、微量のカリ長石を伴うことが特徴である。岩石片では、凝灰岩を比較的多く含むことが特徴であり、それ以外に頁岩、流紋岩・デイサイト、花崗岩類、変質岩、珪化岩および火山ガラスという多種類の岩石片および砕屑物を少量または多量含むことが特徴である。凝灰岩を多く含む組成は、これまでの分類の F 類に相当する。F 類は、これまでのところ、F1 類から F6 類まで細分されているが、凝灰岩以外に多種類の岩石片および火山ガラスを伴う組成は、F6 類に分類される。なお、F 類の凝灰岩および流紋岩・デイサイトは結晶質であることも重要な特徴である。

No.11 と No.13 については､凝灰岩を含まないことから F 類に分類することはできない。これらのうち、No.13 は、頁岩と流紋岩・デイサイトおよび花崗岩類の岩石片を少量ずつ含み、さらに火山ガラスを比較的多く含んでいる。このような岩石片組成は、これまでの分類の A2 類に相当する。No.11 は、岩石片は多結晶石英のみであることから、これまでの分類基準を見出すことはできないが、微量ながらも火山ガラスを含むことから、No.13 と同様の A2 類か上述した多数の試料と同様の F6 類かのいずれかである。後述する砂分全体の粒径組成も考慮すれば、No.11 は F6 類よりも A2 類に近い分類であると判断される。

No. 1 と No.15 ～ 20 は、いずれも岩石片の種類構成では花崗岩類を多く含む組成となる。このような組成は、これまでの分類の C 類に相当する。C 類については、供伴する鉱物片のうち、角閃石の多いものを C1 類とし、黒雲母の多いものを C2 類としているが、No.20 以外の試料については、いずれも角閃石の多い特徴が認められることから、C1 類に分類される。さらに、今回の試料では、C1 類の中でも、供伴する鉱物片と花崗岩類以外の岩石片の種類構成に、比較的明瞭な違いが認められることから、C1 類を C1a、C1b、C1c の各類に細分した。C1a 類は、鉱物片の組成において、石英と斜長石は同量あ

表3　薄片観察結果(1)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																																合計
			鉱物片										岩石片																		その他						
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	閃緑岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂質シルト塊	植物片	植物珪酸体							
1	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂	1																																1
		粗粒砂	3	1			2													2															8
		中粒砂	8	2	2		2			1										2															17
		細粒砂	6	2	4		2			5																									19
		極細粒砂	7	2	4		6																												19
		粗粒シルト	6		4		1																												11
		中粒シルト																																	0
	基質																																		256
	孔隙																																		4
2	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂											2		3										1										6
		粗粒砂	8		1								4		10	2	3		2	3	4			2	2	2									43
		中粒砂	9		3								1		8	1			2		1		1			4	1								31
		細粒砂	3		1								1											1											6
		極細粒砂	4		2																														6
		粗粒シルト	2																																3
		中粒シルト																																	0
	基質																																		287
	孔隙																																		8
3	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂													4																				4
		粗粒砂	3										2		8										1	2									16
		中粒砂	3		1										3				1						1	1									10
		細粒砂	2	1	1										2	1																			7
		極細粒砂	2		1																						1								4
		粗粒シルト	2		1																														3
		中粒シルト			1																														1
	基質																																		262
	孔隙																																		3
4	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂	2													1																			3
		粗粒砂											1		5				1												2				9
		中粒砂			1											1																			2
		細粒砂	2										1													1	1								5
		極細粒砂	2		3					1																	3								9
		粗粒シルト	2		1																														3
		中粒シルト																																	0
	基質																																		233
	孔隙																																		7
5	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂	2												1						2					1									6
		粗粒砂	6												6	1			1	1	1				1	6									23
		中粒砂	3		2											1			1							3									10
		細粒砂	2	1			1								1				2							3									10
		極細粒砂	12	1	1														3																17
		粗粒シルト	8		6														1																15
		中粒シルト	5																																5
	基質																																		280
	孔隙																																		4

表3.　薄片観察結果(2)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																														合計
			鉱物片										岩石片																	その他				
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	閃緑岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂質シルト塊	植物片	植物珪酸体	
6	砂	細礫																															0
		極粗粒砂	1																					1		1							3
		粗粒砂	1	1											3	1								1	2								9
		中粒砂	3																2	1													6
		細粒砂	1		1										2				1														5
		極細粒砂	9	1	6				1										1														18
		粗粒シルト	1		1																												2
		中粒シルト																															0
	基質																																197
	孔隙																																8
7	砂	細礫																															0
		極粗粒砂	2												1									1		1			1				6
		粗粒砂	2												2	1				1					1	1							8
		中粒砂	3																														3
		細粒砂	1		3																						6						10
		極細粒砂	4																								6						10
		粗粒シルト	5		4																						1						10
		中粒シルト	1																														1
	基質																																404
	孔隙																																17
8	砂	細礫																															0
		極粗粒砂																								1							1
		粗粒砂			1					1						3																	5
		中粒砂	5		3										1				1			1		1			1						13
		細粒砂	2		3		2								1																		8
		極細粒砂	5	1	2														1								1						10
		粗粒シルト	3	1	1																						1			2			8
		中粒シルト	2																														2
	基質																																383
	孔隙																																8
9	砂	細礫																															0
		極粗粒砂	1													1											1						3
		粗粒砂													2																		2
		中粒砂	1												1												1						3
		細粒砂	1		3										1																		5
		極細粒砂	2		3																												5
		粗粒シルト	2		5				1																								8
		中粒シルト																															0
	基質																																361
	孔隙																																5
10	砂	細礫																															0
		極粗粒砂																								2							2
		粗粒砂	1													1																	2
		中粒砂	5	1	3											1			3							3	1						17
		細粒砂	5	1	7	1						1			2				2														19
		極細粒砂	9	1	3		1												2								1						17
		粗粒シルト	10		8				2																						2		22
		中粒シルト	2																														2
	基質																																435
	孔隙																																8

表3　薄片観察結果(3)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																																合計
			鉱物片										岩石片																その他								
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	閃緑岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂質シルト塊	植物片	植物珪酸体							
11	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂																																	0
		粗粒砂																									1								1
		中粒砂																																	0
		細粒砂																																	0
		極細粒砂	4		1														2								1								8
		粗粒シルト	8	1	3																									1					13
		中粒シルト	1																																1
	基質																																		217
	孔隙																																		6
12	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂																1						1											2
		粗粒砂	2	1											6				1	1				1	1			1							14
		中粒砂			1																			1			2								4
		細粒砂			1										1												6								8
		極細粒砂					1				1																								2
		粗粒シルト	3		2																						1								6
		中粒シルト																																	0
	基質																																		211
	孔隙																																		2
13	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂																																	0
		粗粒砂	1																	1															2
		中粒砂	2																								1								3
		細粒砂	5	1	2							1	1			1																			11
		極細粒砂	6		3								1						1								1								12
		粗粒シルト	6		3																						2								11
		中粒シルト	2		1																														3
	基質																																		311
	孔隙																																		3
14	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂	2										2		1	1																			6
		粗粒砂	11	2									1		21	3	1		7	3						10									59
		中粒砂	17		5								3		23	1			6		1		1		2	12	2								73
		細粒砂	11		6								1		4				8								1								31
		極細粒砂	11	1	2										1																				15
		粗粒シルト	8		1																						1								12
		中粒シルト	4																																4
	基質																																		631
	孔隙																																		30
15	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂	1		2		1									1				1															6
		粗粒砂	6		5		6			1					1				1	7								1	1						29
		中粒砂	20	1	17		13			2			2		1	1			2	8															67
		細粒砂	10	2	28		18			1	1								1	1															62
		極細粒砂	6		12		8			1																									27
		粗粒シルト	1		6		2																												9
		中粒シルト																																	0
	基質																																		657
	孔隙																																		18

表3　薄片観察結果(4)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																														合計
			鉱物片										岩石片																その他				
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	閃緑岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂質シルト塊	植物片	植物珪酸体	
16	砂	細礫																															0
		極粗粒砂			1											1																2
		粗粒砂	14	4	4		2			1				1	3	2			2	6					1		2					42
		中粒砂	15	5	9		10			1	1		2		4	2				9							1					59
		細粒砂	6	3	18		9			5	4		2		1	1				2												51
		極細粒砂	6		8		1			2																							17
		粗粒シルト	3		2		1																										6
		中粒シルト																															0
	基質																																486
	孔隙																																12
17	砂	細礫																		1													1
		極粗粒砂				1	1													5													7
		粗粒砂	1		7	1	2													8													19
		中粒砂	2		48	1	8													8	1												68
		細粒砂	4		46	2	9			2																							63
		極細粒砂	1		22		3																										26
		粗粒シルト	1		11		1																										13
		中粒シルト	1		2																												3
	基質																																591
	孔隙																																3
18	砂	細礫																															0
		極粗粒砂																							1								1
		粗粒砂																		1					1								2
		中粒砂	1		4		4			2										4													15
		細粒砂	2		11		7			3																							23
		極細粒砂			5		7			2																							14
		粗粒シルト			2				1																								3
		中粒シルト																															0
	基質																																238
	孔隙																																2
19	砂	細礫																															0
		極粗粒砂	1																	3													4
		粗粒砂	11	2	1															8													22
		中粒砂	13	9	15		1													8					1								47
		細粒砂	8	9	7		4													2													30
		極細粒砂	3	2	12		1		1		1																						20
		粗粒シルト	5		7																											1	13
		中粒シルト	1		1																												2
	基質																																476
	孔隙																																14
20	砂	細礫																															0
		極粗粒砂		1	1														1														3
		粗粒砂	3		2															8													13
		中粒砂	20	5	9					1										5													40
		細粒砂	35	2	7			1								1			2	1													49
		極細粒砂	11	2	11			1		1																							26
		粗粒シルト	4		9																												13
		中粒シルト			1																												1
	基質																																476
	孔隙																																12

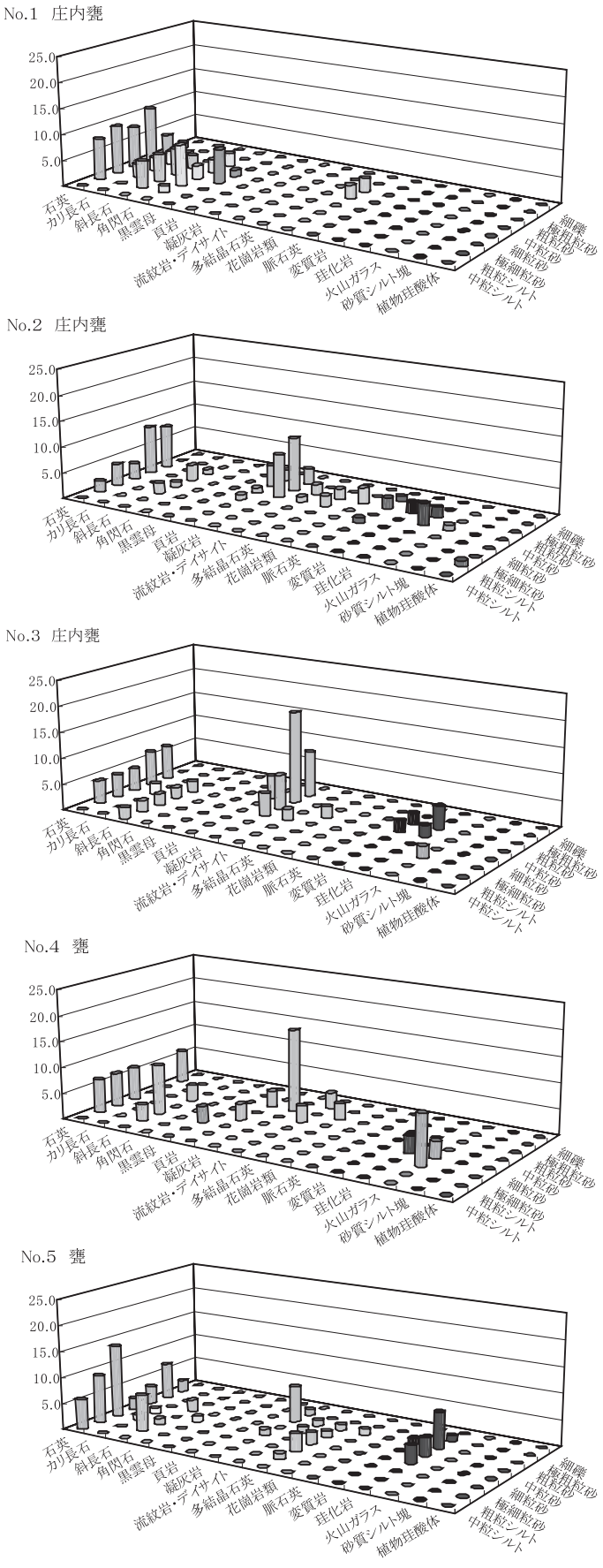


図１.各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)

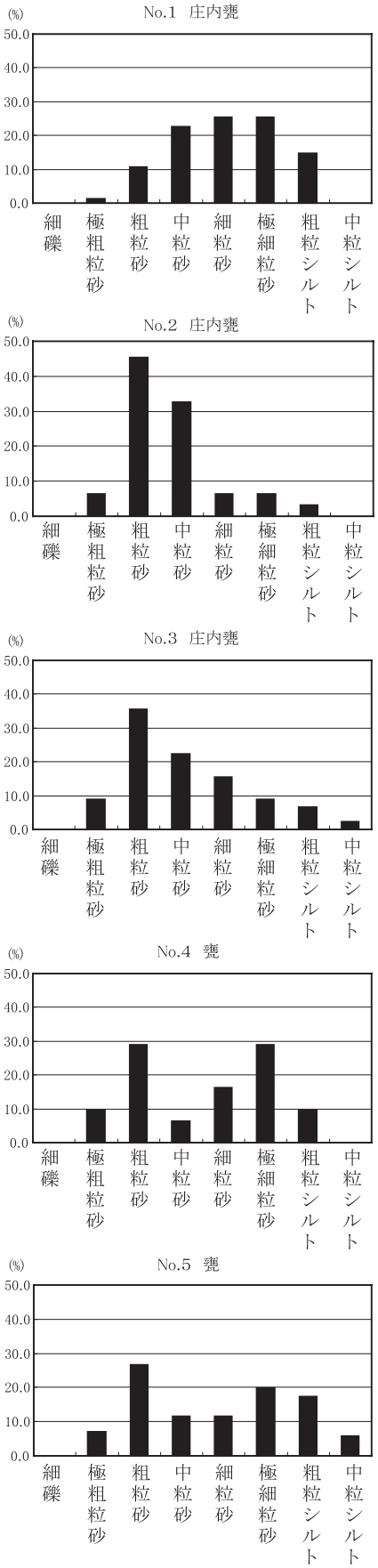


図２.胎土中の砂の粒径組成(1)

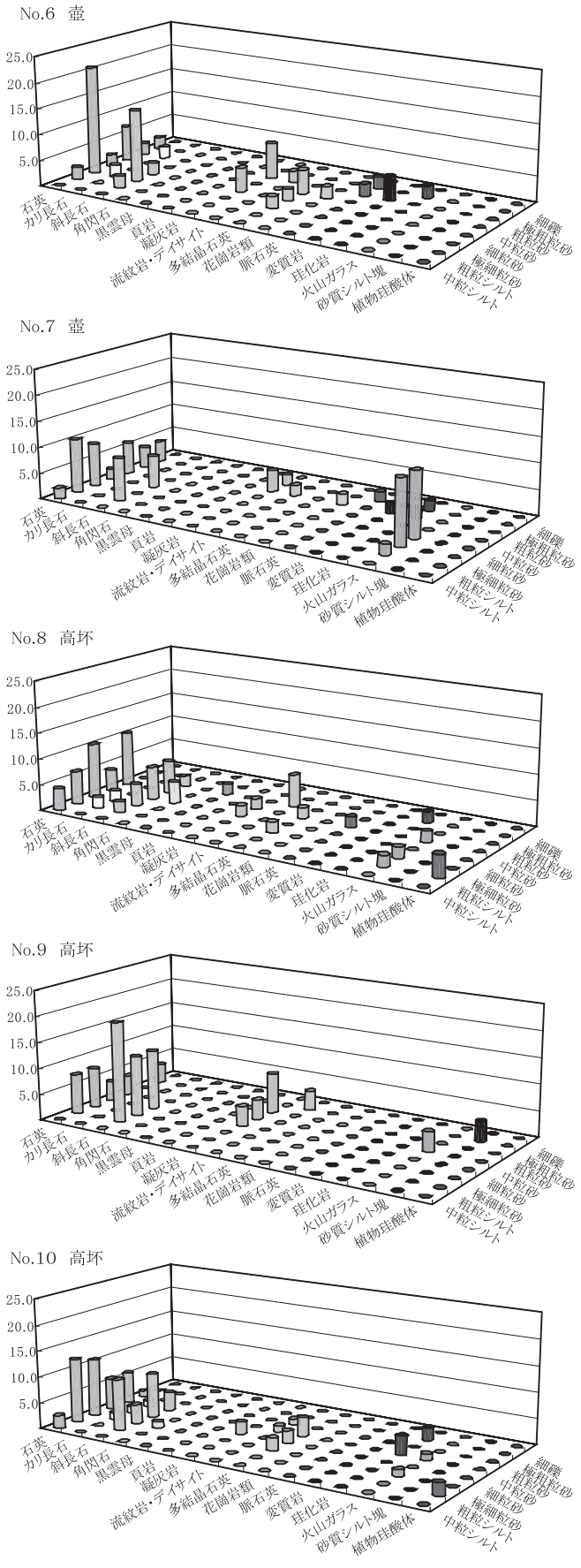


図１.各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

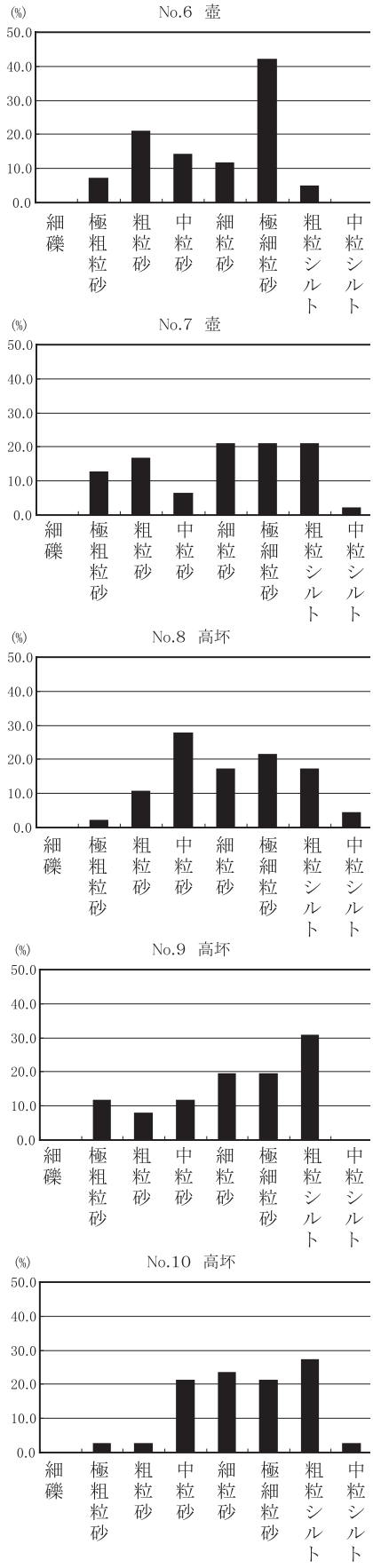


図２.胎土中の砂の粒径組成(2)

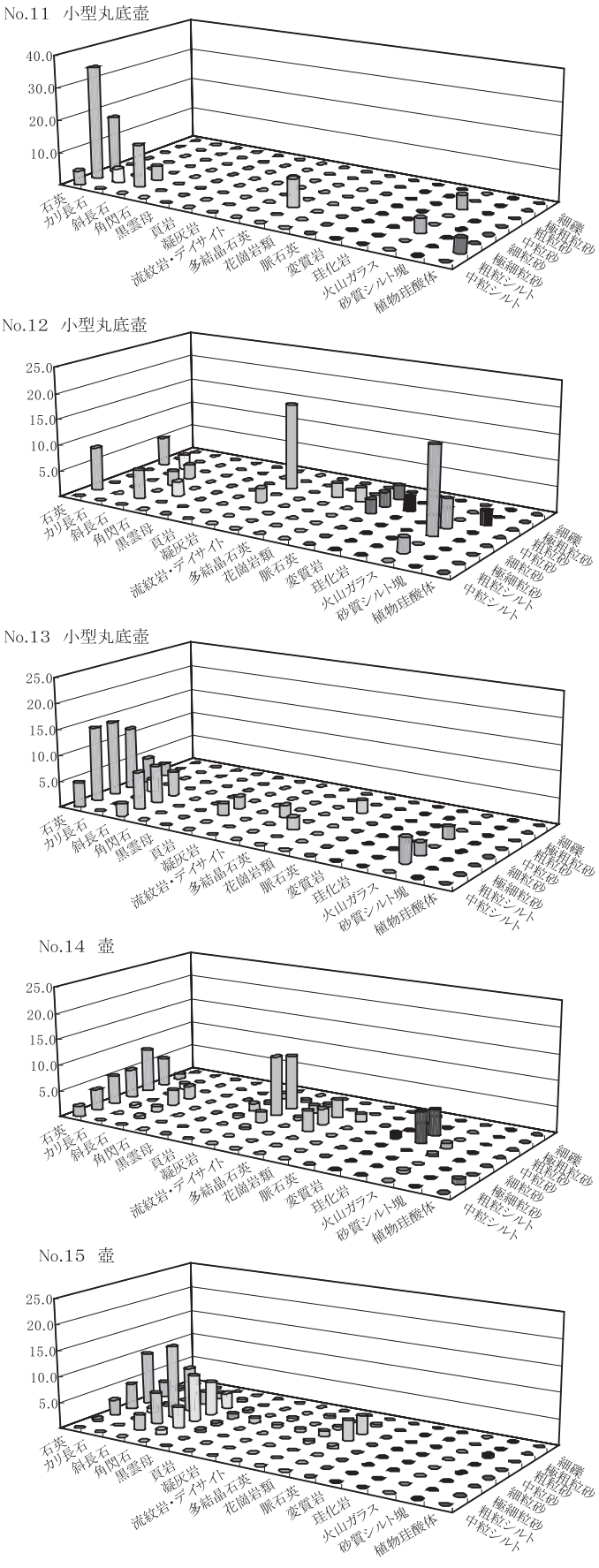


図１.各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)

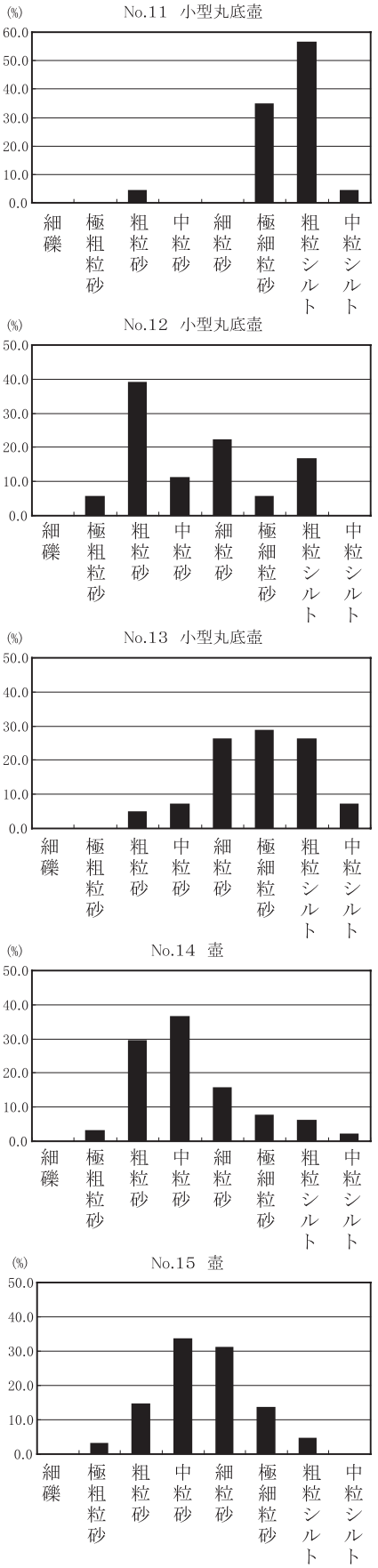


図２.胎土中の砂の粒径組成(3)

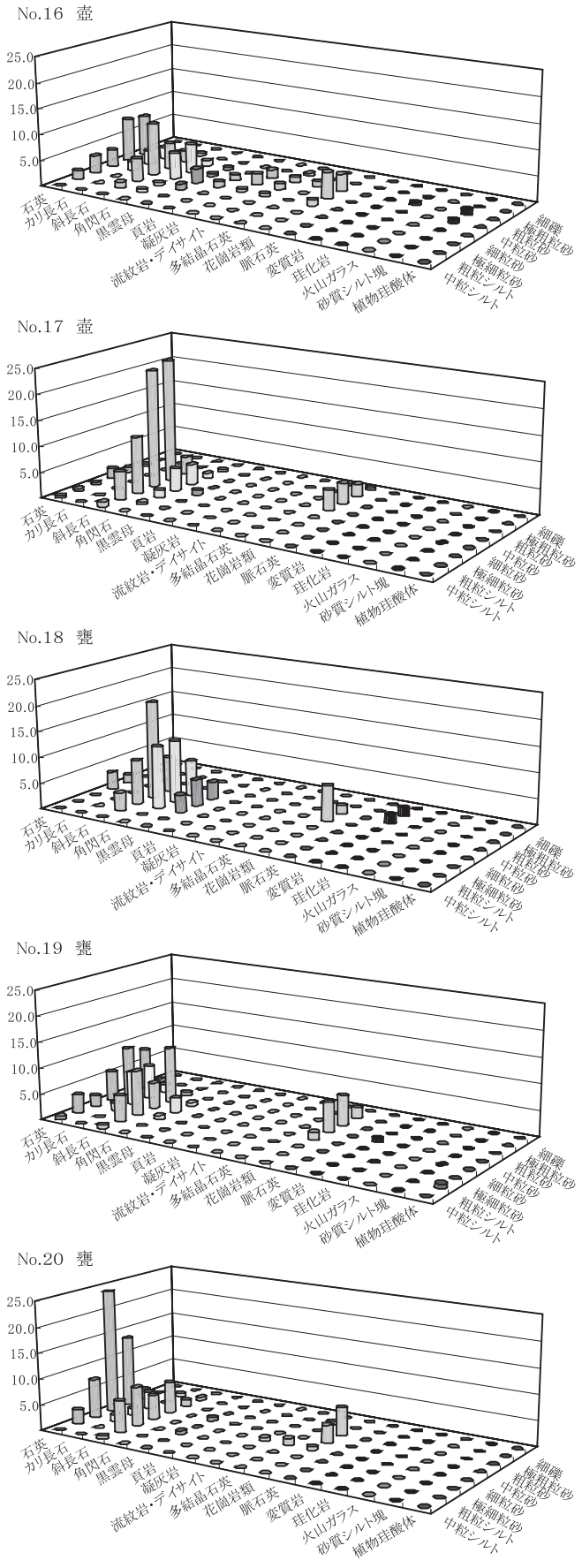


図１.各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(4)

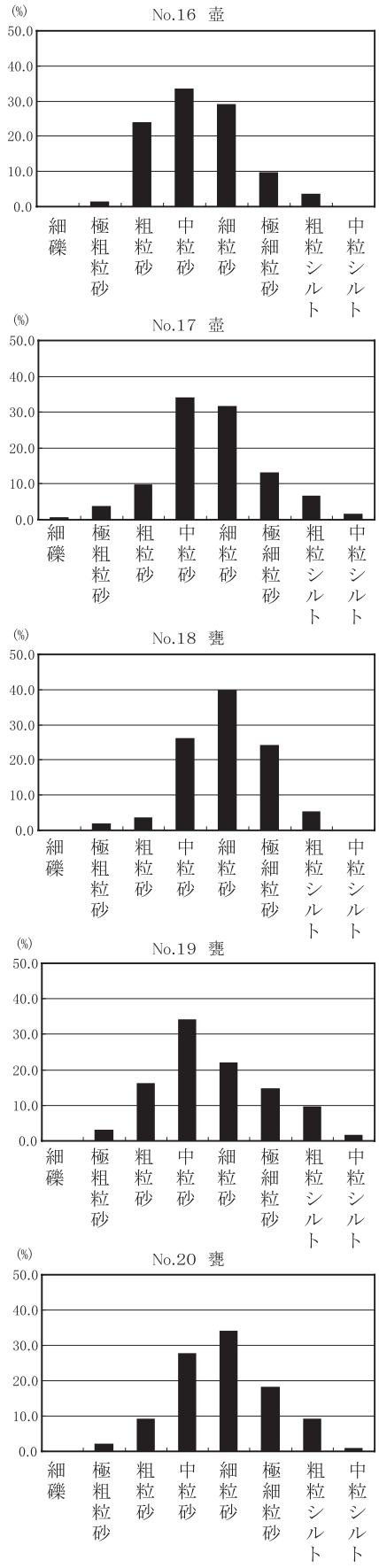


図２.胎土中の砂の粒径組成(4)

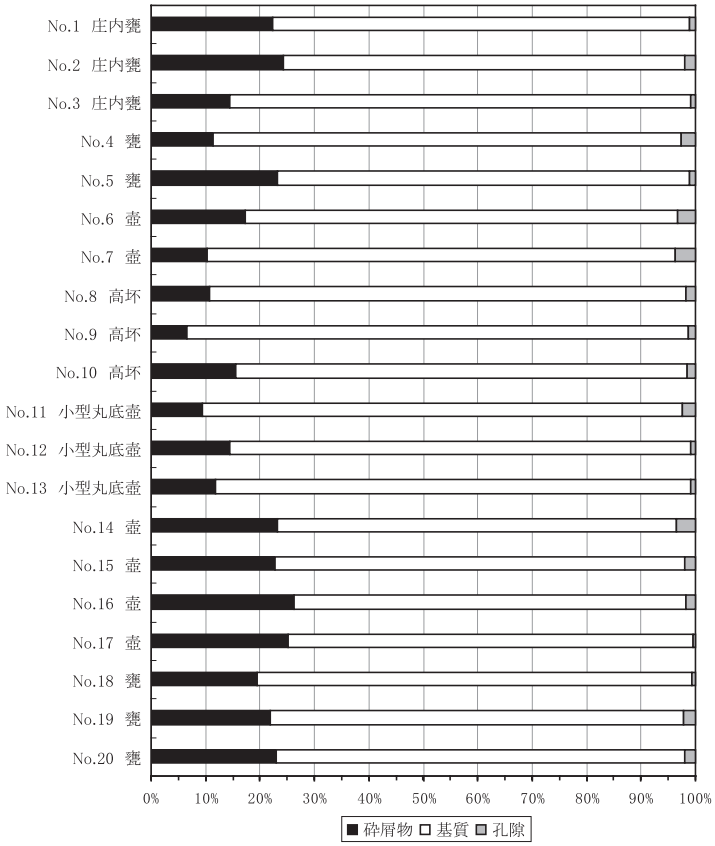


図3　粉屑物・基質・孔隙の割合

るいは斜長石の方がやや少なく、少量のカリ長石を伴うことが特徴であり、岩石片は花崗岩類以外はほとんど含まれないことが特徴となる。これに分類される試料は、No. 1 と No.19 である。C1b 類は、花崗岩類以外にも頁岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイトなどの岩石片を微量伴うことを特徴とし、No.15 と No.16 がこれに分類される。C1c 類は、鉱物片の組成において石英が少量しか含まれず、カリ長石が含まれないのに対して斜長石が多量に含まれることが特徴であり、また試料によっては微量の単斜輝石も含まれる。岩石片は花崗岩類以外はほとんど含まれないことが特徴となる。これに分類される試料は、No.17 と No.18 である。

No.20 は、酸化角閃石と黒雲母がともに極めて微量であるため、C1 類にも C2 類にも分類されない。特徴としては、鉱物片では石英の方が斜長石よりもかなり多く、少量のカリ長石を伴い、岩石片では花崗岩類以外に極めて微量ながらも流紋岩・デイサイトを伴っている。これまでの C 類の分類では、C6 類まで設定されているが、このような特徴は、いずれにも該当しないため、ここで C7 類を設け、No.20 の分類を C7 類とする。

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料によりことなり、２つのピークを持つ双峰性のヒストグラムを示す試料も認められる。ここでは、モードを示す粒径とモードに次いで多い粒径の２つまたは３つの粒径の組み合わせを示すことで各試料の特徴とすると、以下のような状況が認められる。

粗粒シルトと極細粒砂：No. ９、11

粗粒シルト～細粒砂：No. ７、10、13

極細粒砂と細粒砂：No. 1

極細粒砂と中粒砂：No. 8

極細粒砂と粗粒砂：No. 4、5、6

細粒砂と中粒砂：No.15 ～ 20

細粒砂と粗粒砂：No.12

中粒砂と粗粒砂：No. 2、3、14

砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物の割合が 20%未満と 20%以上で２分することができる。前者をⅠ類とし、後者をⅡ類とすると、今回の試料では以下の通りに分けられる。

Ⅰ類：No. 3、4、6 ～ 13

Ⅱ類：No. 1、2、5、14 ～ 20

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および砕屑物の量比における各分類結果は、一覧にして表２に併記する。

4. 考察

（1）胎土の由来と発掘調査所見による産地の可能性

今回の試料では、全試料について、発掘調査所見によりその産地が推定されている。本分析法により産地を検討する場合、鉱物･岩石組成に着目し、その組成から推定される地質学的背景を有する地域が、産地として推定されている地域内に認められるか否かということから考察することができる。今回の分析では、細分類も含めれば、６種類もの組成を認めることができた。以下に、これら各種類について鉱物や岩石の由来する地質とその分布域について述べる。

最も多くの試料が分類されたＦ６類は、当社が以前に分析した飯田遺跡出土の庄内式とされた甑、甕、製塩土器の胎土と同様の分類である。これらの試料は、発掘調査所見によりいずれも地元産と考えられていたが、Ｆ６類の鉱物・岩石組成も飯田遺跡周辺の地質学的背景と整合すると考えられた。すなわち、結晶質の凝灰岩や流紋岩・デイサイトは、姫路市内に分布する丘陵を構成している中生代白亜紀の相生層群の中の上部亜層群に相当する伊勢層に由来し、花崗岩類は、飯田遺跡至近の北西方の丘陵の北側に分布する丘陵（桜山貯水池を囲んでいる）を構成している白亜紀 - 古第三紀の斑状角閃石黒雲母花崗閃緑岩（桜山岩体）に由来し、さらに火山ガラスは、姫路市中心市街地を取り囲む丘陵の縁辺に形成された山麓緩斜面堆積物中に挟まれるテフラ層に由来すると考えられた（以上、猪木（1981）、日本の地質「近畿地方」編集委員会（1987）、山元ほか（2000）の地質記載参照）。今回の分析でも、F6 類に分類された試料は、飯田遺跡の位置を含む姫路市およびその周辺域で作られた可能性が高いと考えられる。F6 類に分類された試料は、庄内甕の No. 2、3、No. 4 ～ 10 までの甕、壺および高坏、小形丸底壺の No.12、讃岐型の壺の No.14 であり、これらの発掘調査所見による産地は全て播磨産となっている。したがって、F6 類に分類された試料については、発掘調査所見と胎土分析所見とが一致する結果になったと言える。

発掘調査所見により播磨産とされた試料の中には、A2 類が２点、C1a 類も１点認められた。A2 類については、F6 類との違いは凝灰岩の有無のみであり、それ以外の岩石片の組成は、頁岩や流紋岩・デイサイト、花崗岩類、火山ガラスを含むことまでほぼ同様である。したがって、A2 類についても、その地質学的背景は、F6 類と同様であると考えられる。両者の違いは、砂あるいは粘土を採取した場所の背後の丘陵を構成している伊勢層が凝灰岩の少ない層位であったことなどに起因すると考えられる。

A2 類に分類されている試料は、No.11 と 13 の２点の小型丸底壺であるが、２点ともに播磨産とされている。すなわち、A2 類の試料も、発掘調査所見が胎土分析により支持された。なお、F6 類に分類された試料とは、材料となった土や粘土の採取地がおそらく異なっていた可能性が高いと考えられ、その場合、製作地も異なっていたと考えられる。

C1a 類は、播磨産とされた No. 1 の庄内甕のほかに、吉備産とされた No.19 の甕の胎土も分類されている。現時点では、発掘調査所見による吉備とは旧吉備国のどこまでの範囲を示しているかは不明であるが、例えば地理的には岡山県瀬戸内沿岸地域を想定した場合、この地域には広い範囲で花崗岩類の分布が認められている（松浦ほか（2002）、日本の地質「中国地方」編集委員会編（1987）など）。しかし、この花崗岩類は、主に黒雲母花崗岩（有色鉱物は黒雲母が多く、斜長石よりもカリ長石の方が多い）から構成されていることにより、C1a 類の由来する地質とはならない。したがって、No.19 の吉備産という所見については、分析結果からは支持されない。一方、No. 1 の庄内甕は F ６類すなわち地元産とされた No. ２や３と同様に播磨産という所見が示されている。C1a 類から推定される花崗岩類としては、カリ長石よりも斜長石が多く、有色鉱物は角閃石を主体として黒雲母を伴う、角閃石黒雲母花崗閃緑岩などがあげられる。この岩質は、前述した桜山岩体の岩質とほぼ同様であることから、No. 1 の播磨産とされた所見の方は、分析結果と整合すると言うことができる。おそらく、桜山岩体からなる丘陵内の谷内の堆積物を想定すれば、C1a 類のような胎土となる可能性がある。このことは、No.19 の甕についても同様であるから、分析結果からは、No.19 の甕は吉備産よりも播磨産である可能性の方が高いと考えられる。

C1b 類は、No.15 と No.16 のともに讃岐産とされた壺が分類された胎土である。C1b 類の特徴のうち、花崗岩類以外に供伴する鉱物の種類は、F6 類や A2 類とほぼ同様である。また、C1b 類の花崗岩類もその鉱物組成から角閃石黒雲母花崗閃緑岩であることが推定される。これらのことから、C1b 類についても、その地質学的背景は、F6 類や A2 類とほぼ同様であると言える。すなわち、C1b 類の試料も、姫路市および周辺域で作られた可能性が高いと考えられる。なお、讃岐産といった場合の讃岐の地域を讃岐平野とした場合、その主な地質学的背景は、中生代白亜紀後期の領家帯の花崗岩類と新生代新第三紀中新世の流紋岩・デイサイト火砕岩および安山岩火砕岩・溶岩からなる讃岐層群である（日本の地質「四国地方」編集委員会編, 1991; 牧本ほか, 1995; 松浦ほか, 2002）。領家帯の花崗岩は、角閃石黒雲母花崗閃緑岩を主要な岩相の一つとするが、同程度に黒雲母花崗岩も主要な岩相となっており、さらに片麻状（圧力により変形した構造）を呈することも特徴とされている。C1b 類の岩石片の種類構成は、上述した讃岐平野の地質学的背景とは一致せず、さらに C1b 類の花崗岩類の岩石片には顕微鏡下でも変形構造は認められなかった。これらのことから、C1b 類に分類された No.15 と 16 が讃岐（平野）産である可能性は低いと考えられる。

C1c 類は、讃岐産とされた No.17 の壺と河内産とされた No.18 の壺が分類された胎土である。C1c 類の鉱物組成から推定される花崗岩類としては、斜長石が突出して多く、石英は微量、カリ長石は含まれず、有色鉱物では角閃石が多く、微量の黒雲母を伴うことから、角閃石黒雲母トーナル岩または同石英閃緑岩があげられる。なお、No.17 の単斜輝石も花崗岩類に由来する可能性が高い。このような岩相の花崗岩類は、上述した桜山岩体、岡山県瀬戸内沿いの花崗岩類、讃岐平野の領家帯の花崗岩類のいずれにも含まれていない。播磨平野周辺域でこのような岩石の分布をみると、小豆島南東部の坂手湾を囲む北側および東側の両半島のほぼ全域にわたって分布する中生代白亜紀の塩基性岩類のなかに、同様の岩

石の分布が認められている。C1c 類は、供伴する岩石も認められないことから、例えば、この半島内で採取された砂あるいは粘土の鉱物･岩石組成は C1c 類のようになる可能性はある。しかし、現時点では、No.17 と No.18 の壺を小豆島産と特定するまでには至らない。自然堆積物の確認といった分析による検証も必要であるが､小豆島における土器の産出状況まで含めて検討する必要があると考えられる。なお、河内地域の主要な地質学的背景は、領家帯の花崗岩類であることから、No.18 が河内産である可能性は低いと考えられる。

C7 類は、因幡産とされた No.20 の壺が分類された胎土である。C7 類の鉱物組成から推定される花崗岩類としては、角閃石黒雲母または黒雲母角閃石花崗閃緑岩があげられる。また、流紋岩・デイサイトが供伴することも C7 類の特徴である。発掘調査所見で示された因幡産の因幡という地域を鳥取平野とした場合、鳥取平野の主要な地質学的背景は、中国山地東北部に分布する山陰帯と呼ばれる花崗岩類である。この花崗岩類は、主に黒雲母花崗岩と角閃石黒雲母花崗閃緑岩から構成されている（日本の地質「中国地方」編集委員会編, 1987）ことから、花崗岩類の種類からは、C7 類は鳥取平野に由来する可能性があるように見えるが、しかし、流紋岩・デイサイトの分布が鳥取平野周辺にはほとんど認められない。したがって､現時点では C7 類に分類された No.20 が因幡産であることは､分析からは支持されない。また、C7 類の想定される地域も、現時点では具体的に示すことはできない。

（2）胎土と器種との対応関係

胎土と器種との関係では、粒径組成および砕屑物の割合と器種との間に有意と考えられる対応関係が認められる。以下に器種ごとに述べる。

1）庄内甕

鉱物・岩石組成で C1a 類 1 点と F6 類 2 点に分かれたが、粒径組成でも、モードの粒径と 2 番目に多い粒径の組み合わせ（以下粒径組み合わせとする）をみると、C1a 類の試料は極細粒砂 - 細粒砂、F6 類の試料は粗粒砂 - 中粒砂に別れ、F6 類の方が砂が全体的に粗粒傾向であることが窺える。なお、F6 類の庄内甕は、下記の播磨産とされた甕、壺、高坏、小型丸底壺に比べても粗粒傾向であると言える。

2）播磨産とされた甕、壺、高坏、小型丸底壺

甕は 2 点ともに極細粒砂 - 粗粒砂であり、同様の組み合わせは No. 6 の壺にも認められる。また、F6 類の小型丸底壺も細粒砂 - 粗粒砂を示し、これらは他の壺や高坏および他の小型丸底壺に比べて粗粒傾向を示す。No. 7 の壺と 3 点の高坏および A2 類に分類された No.11 と 13 の小型丸底壺は、粒径組み合わせが中粒砂以下であり、細粒傾向の胎土であると言える。

3）讃岐型で播磨産とされた壺、讃岐産とされた壺、河内産・吉備産・因幡産とされた甕

讃岐型で播磨産とされた壺は中粒砂 - 粗粒砂であり、同様の組み合わせは、上述した播磨産とされた庄内甕にも認められる。讃岐型で播磨産とされた壺以外の試料はいずれも細粒砂 - 中粒砂である。この組み合わせは、上述した播磨産とされたいずれの試料にも認められない。前述したように、これらの試料の中には、播磨産の可能性のあるものも含まれているが、砂の粒径組成は異なっている。この砂の粒径組成の違いが土器の質感の違いとなって、発掘調査所見では産地の違いとして示された可能性があると考えられる。

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

猪木幸男, 1981, 20 万分の 1 地質図幅「姫路」. 地質調査所 .
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.
伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
伊東隆夫, 2006, 横田遺跡出土木材の樹種同定 .「横田遺跡・横田北古墳群発掘調査報告書」, 兵庫県文化財調査報告第 303 冊, 兵庫県教育委員会, 96-102.
牧本　博・利光誠一・高橋　浩・水野清秀・駒澤正夫・志和龍一, 1995, 20 万分の 1 地質図幅「徳島」, 地質調査所 .
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－. 日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集, 120-121.
松浦浩久・栗本史雄・吉田史郎・斎藤文紀・牧本　博・利光誠一・巌谷敏光・駒澤正夫・広島俊男, 2002, 20 万分の 1 地質図幅「岡山及丸亀」. 産業技術総合研究所地質調査総合センター .
日本の地質「中国地方」編集委員会, 1987, 日本の地質 7　中国地方 . 共立出版, 290p.
日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質 6　近畿地方 . 共立出版, 297p.
日本の地質「四国地方」編集委員会, 1991, 日本の地質 8　四国地方 . 共立出版, 266p.
Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（編）, 2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社, 70p.［Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.
嶋倉巳三郎, 1991, 下三草・諏訪ノ下遺跡出土の木材樹種 .「下三草・諏訪ノ下遺跡」, 加東郡教育委員会, 66-69.
島地　謙, 1996, 玉津田中遺跡出土木製品の樹種 .「神戸市西区　玉津田中遺跡　－第 6 分冊－（総括編）　田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」, 兵庫県文化財調査報告第 135-6 冊, 兵庫県教育委員会, 15-49.
島地　謙・林　昭三, 1990, 上板井遺跡出土木器の樹種 .「上板井遺跡発掘調査報告書」, 兵庫県文化財調査報告第 76 冊, 兵庫県教育委員会, 79-86.
島地　謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織 . 地球社, 176p.
高橋　敦, 2007, 大中遺跡出土炭化材の樹種 .「大中遺跡Ⅲ　兵庫県立考古博物館建設に伴う大中遺跡 (第 22 次) 発掘調査報告書」, 兵庫県文化財調査報告第 319 冊, 兵庫県教育委員会, 61-64.
Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編）, 1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社, 122p.［Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.
山元孝広･栗本史雄･吉岡敏和, 2000, 龍野地域の地質 . 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 66p.

Ⅶ　おわりに

長越遺跡Ⅲの調査は2009年２～３月に手柄に位置する竹の前遺跡と合わせて実施した。調査面積440㎡と狭小であったが多大な成果を挙げることが出来た。調査地の北半が集落域､南半が旧河道であった。住居跡は多くの切り合いがあり、人口集中部分であったことが把握された。竪穴住居跡14棟、落ち込み３基、土坑４基、溝18条とピット数基が検出された。

長越遺跡は1956（昭和31）年に増田重信氏によって飯田集落の下水管埋設工事の際に土器が採集され知られることとなった遺跡である｡著名になったのは姫路バイパス建設に伴って全面調査が実施され、多量の庄内甕を保有する古墳時代初頭の集落跡であることが明らかになってからである。その調査は、昭和48年度に確認調査が鎌木義昌氏を担当者として瀬戸内考古学研究所によって実施され、その結果を受けて、姫路バイパス本線部分の全面調査が昭和49・50年度に兵庫県教育委員会を調査主体として行われた。その報告は兵庫県文化財調査報告第12冊「播磨長越遺跡」として松下　勝氏編集によって刊行されている。私も幸いなことに、その時に学生として調査に参加し多くを学ばせて戴いた。

次に船場川河川改修に伴って、平成５年度に分布調査からはじまり、下流から順に工事が進められた。2003（平成15）年に飯田橋以南西岸の本発掘調査を行い、長越Ⅲ～Ⅳに該当する竪穴住居跡を５棟検出し、兵庫県文化財調査報告第375冊『播磨・長越遺跡Ⅱ』として2010年に刊行した。報告書整理作業時に今回の調査を実施した。長越遺跡Ⅰとの違いは長越遺跡Ⅱは弥生中期の土器が多く出土し、竪穴住居跡が５棟と少ないことである。長越遺跡Ⅰと今回調査した長越遺跡Ⅲの方に類似点が多い。

長越遺跡の東側には密接な関係がある畑田遺跡が存在する。昭和50年代以降、姫路市教育委員会によって長期に亘って調査が行われ、多くの問題を提起している。長越遺跡が庄内期に限られた集落であるのに対して弥生時代中期から長越遺跡と同時代、そして古墳時代後期から奈良･中世へと続いている。そして特記されるのは、庄内期において柵で囲まれた中心施設を検出している点である。この時期の周溝墓も特筆される。首長居館の存在と前代から続いて後世に続く集落であることが大きな違いである。長越遺跡の短期間の集落とは大きく異なっている。今回平行して調査した竹の前遺跡も弥生前期からの遺跡で同様な性格を有するかもしれない。船場川流域には小山遺跡・橋詰遺跡など庄内甕を保有する遺跡が並び、細かい調査が行われれば評価も変わってこよう。同様に西側水尾川流域の遺跡群も検討が必要である。長越遺跡Ⅰと同時期に調査された構権現遺跡や中地天神遺跡と遅れて調査された東川遺跡である。これら遺跡群も船場川流域と一帯となって隆盛したように思われる。

遺構

今回14棟の竪穴住居跡を調査したが、竪穴住居跡をはじめ溝・落ち込みとの多くの切り合い関係がある。遺構の切り合い関係を示すと

SD11 → SD06 → SH13 → SH02
SH12 → SH06 → SH04
SH06 → SH14 → SH03
SH06 → SD09 → SD10 ← SK02
SH05・SH08・SK04 → SD09
SH10 → SX03 → SH11 → SH09　　となり、SH01・SH07には切り合い関係がない。

表４　　長越遺跡竪穴住居跡一覧表

遺構名	平面形	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	壁溝	高床部	炭化材	主柱穴	10土坑	時期	備考
SH01a	方形	4.20	3.30	0.20	あり	あり	あり	4本		4期	
SH01b	長方形	4.40	3.10	0.15		あり	あり			5期	
SH02a	方形	6.25	5.60	0.25						5期	SH13を切る
SH02b	方形	5.70	5.10	0.25	あり	あり		4本		5期	SH13を切る
SH03	方形	4.95	4.95	0.15	あり	あり	あり	4本	あり	5期	SH14を切る
SH04	長方形	4.30	3.40	0.10				4本		4期	SH06を切る
SH05	方形	(1.40)	(1.30)	0.10						4期	SD09に切られる
SH06	長方形	4.10	3.45	0.15			あり		あり	3期	SH12を切る
SH07	方形	(1.90)	(1.30)	0.00	あり					5期	
SH08	方形	(2.45)	(1.70)	0.05						4期	SD09に切られる
SH09	方形	(3.40)	4.00	0.10	あり		あり			5期	SH11を切る
SH10	方形	4.50	4.15	0.50	あり			4本		2期	上にSH09
SH11	方形	5.10	(2.65)	0.25				4本？		4期	SD11を切る
SH12	方形	(0.95)	(2.10)	0.05						2期	SH06他に切られる
SH13	方形	(3.10)	(0.70)	0.20						4期	SH02に切られる
SH14	方形	(2.80)	4.80	0.15						4期	SH03に切られる

（　　）は残存長

最も古い遺構はSD11で次がSD06で、最も新しい遺構はSD10でその前がSD09である。新古段階の両端が溝であるのは偶然であろうか。相互の切り合い関係に各遺構の埋土・検出したレベルや竪穴住居跡の属性を加味して検討すると、７期に分けられる。

１期　SD11

２期　SD06・SH12・SH10

３期　SH06・SX03（SH10上層）

４期　SH13・SH04・SH14・SH11・SH05・SH08・SK02～SK04

５期　SH01～SH03・SH07・SH09

６期　SD09

７期　SD10

竪穴住居跡で切られているものは内容が不明である。特に古い段階の住居跡は不明な点が多い。すべて方形プランである。SH01・SH07は壁溝があり浅いことから、５期にした。各期の特徴を示すと、２期のSH10は深く掘り下げられている。３期のSH06も壁が高く深い住居跡であり、壁溝がある。４期の住居跡は浅く残存度が悪い。５期のSH02・SH03は方形プランで高床部を有し、壁溝も持っている。主柱穴は４本であり、隅に土坑を設けている。共通点の多い竪穴住居跡で、壁溝を特徴と考え、SH01・SH07も５期とした。

１・６・７期には竪穴住居跡はない。高床部があるのは、SH01･SH02･SH03の３棟、壁溝があるのは、SH01・SH02・SH03・SH07・SH09の５棟である。今回の調査では、古い時期は深く掘り下げられ、３期から壁溝が見られる。ベッド状遺構（高床部）は５期に認められる。

遺物

遺構は切り合い関係が多く､時期を細分した。それに合わせて遺物も単純に分類出来ればと思ったが、簡単には行かなかった。細かい差は当然あるはずであるが、大きな時期差は認められない。２期はやや古そうな口縁部などであるが、３期には庄内甕が入り、確立された播磨型と河内型がある。小型精製土器も入り長越Ⅱ式以降であることが理解される。この時期から山陰・東四国の土器は搬入されている。

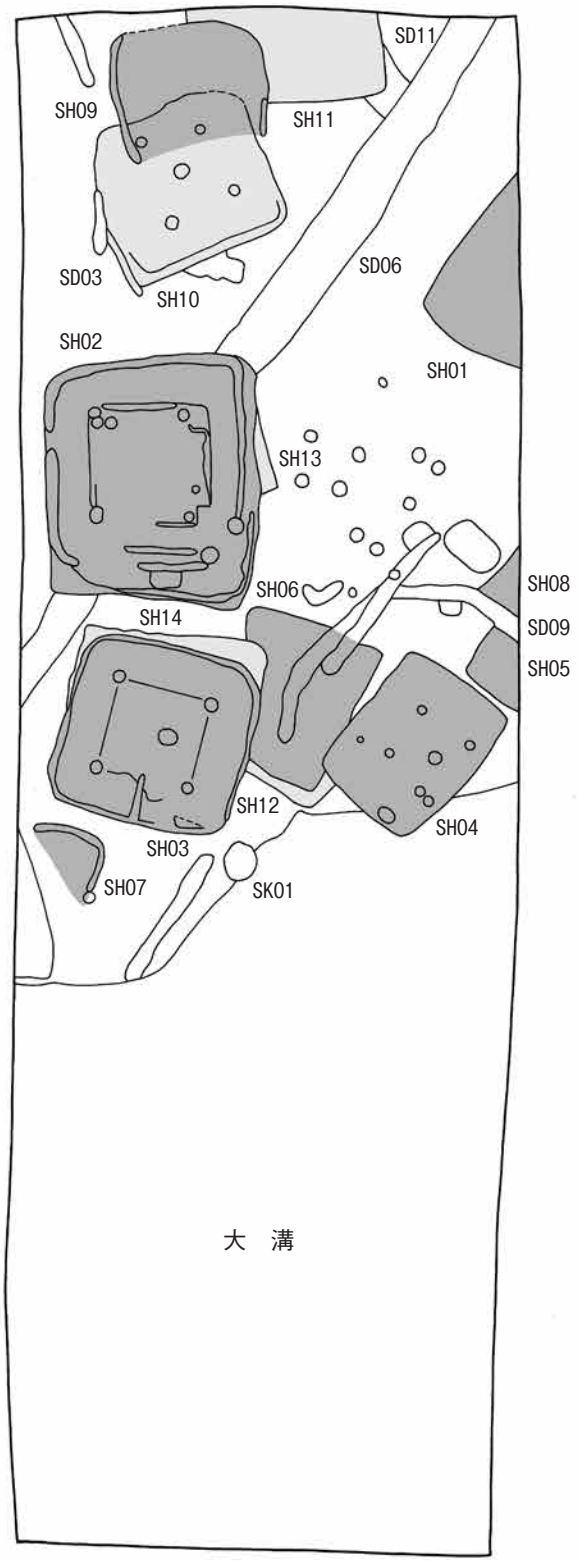
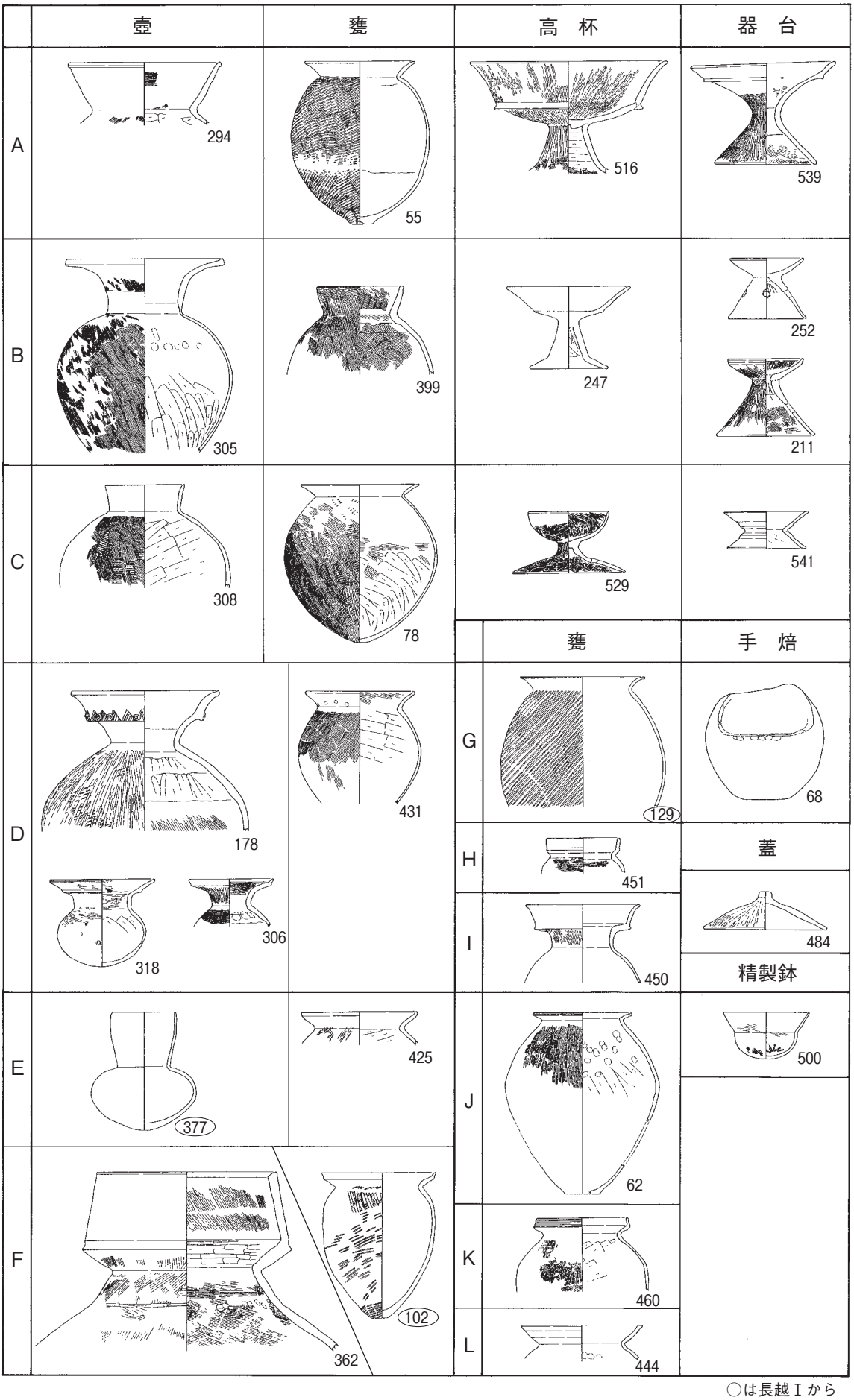

SD11
SH09
SH11
SD03
SH10
SD06
SH02
SH01
SH13
SH08
SH06
SH14
SD09
SH05
SH12
SH04
SH03
SH07
SK01
大　溝
0
10m

図13　遺構配置図



○は長越Ⅰから

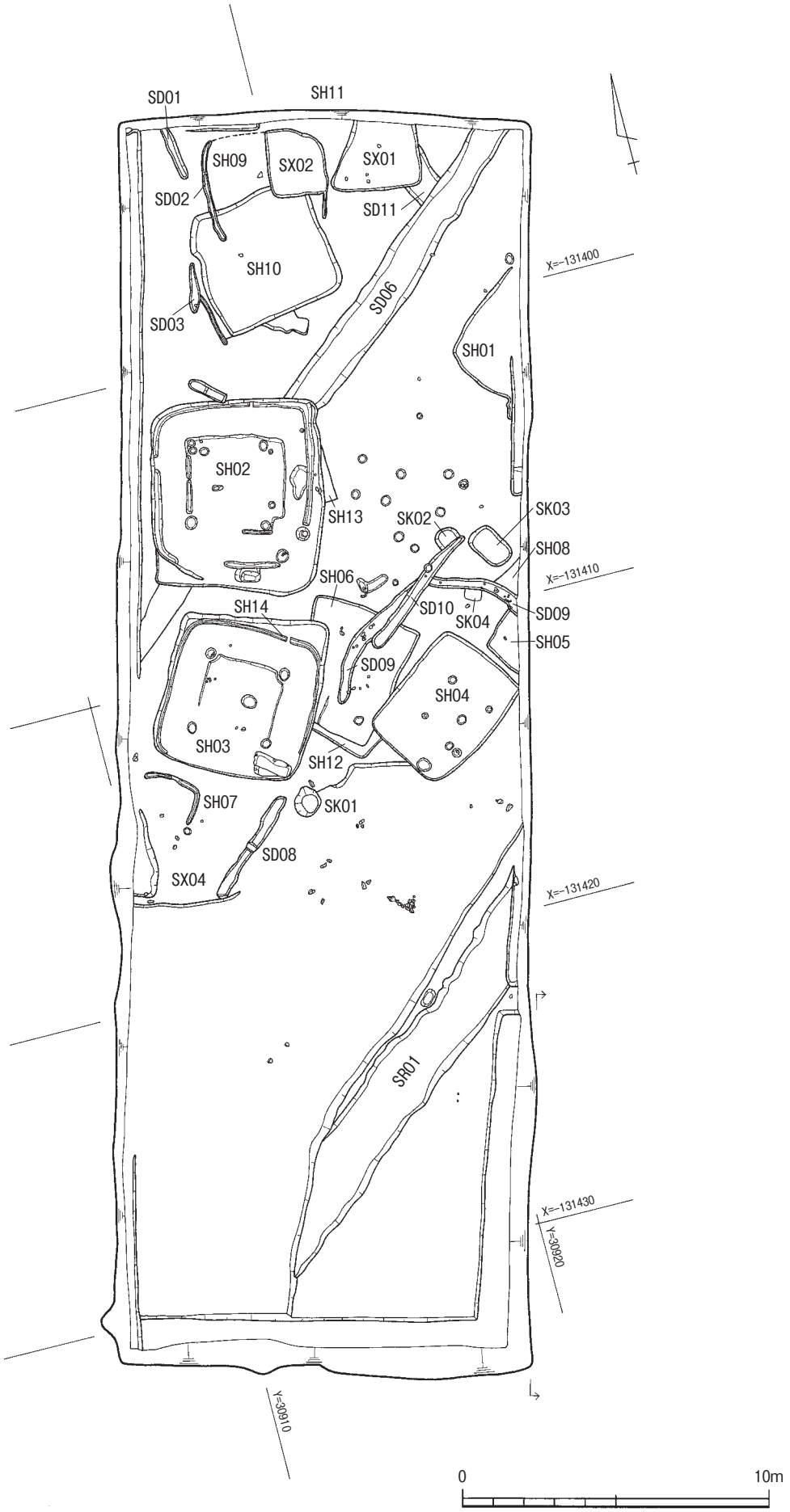
図14　土器分類表

搬入品は４期さらに５期になって増加する傾向にある。SH04 の土器は古相を示すものが含まれ編年観に苦慮する。整合しないセット関係である。５期には布留傾向甕が見られる。

播磨での庄内甕は船場川流域と太子町に集中する傾向がある。長越遺跡はその中で最初に多量の庄内甕を出土した遺跡で、庄内甕播磨発生説の根拠となった遺跡である。年とともに遺跡数や出土量・内容など当然変化しているが、大局的な長越遺跡の位置付けは変わることはない。短期間の集落で今回の調査でさらに稠密度が増したことになる。長越遺跡Ⅲは長越遺跡Ⅰよりも切り合い関係が多く密度の高い地域である。性格はⅠと似通っている。Ⅱが分村的な要素を考えたが、Ⅲは拡大した同一の集落と考えられる。畑田遺跡での首長館と推定される住居域との比較は行っていないが、重要である。長越遺跡の方が住居跡の密度は決定的に多く搬入土器も多く庄内甕も多い。そして庄内期のより新しい段階は長越遺跡が圧倒すると思われるが何故であろうか。首長館を東に築き、ムラの移動を行い、少しの時を経て集落を廃したのであろうか。そして移動したと考えるのが妥当かもしれない。

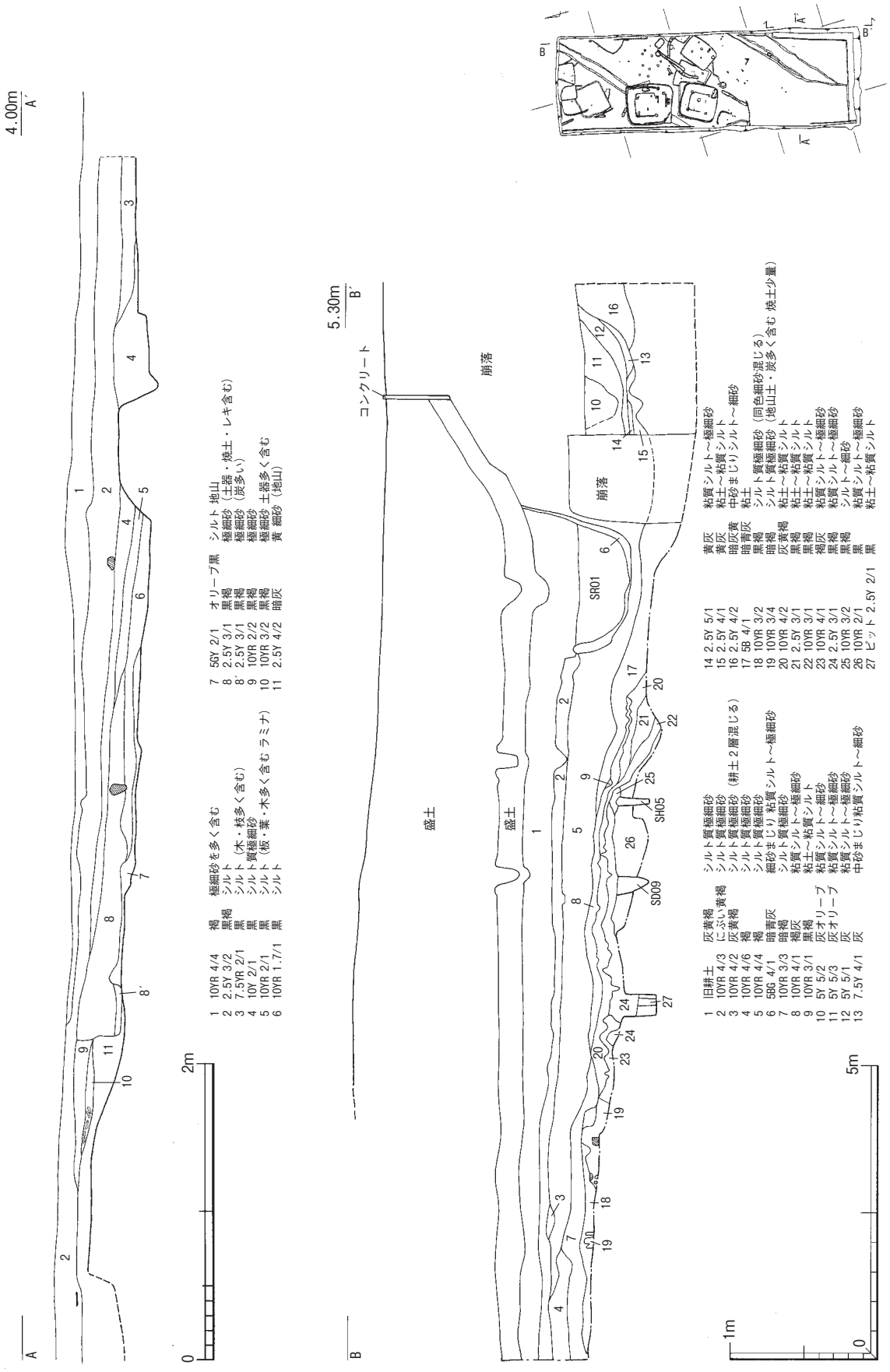
最後に長越遺跡Ⅱの「おわりに」で、本報告で長越遺跡Ⅱのまとめの足りない部分を補完し、長越遺跡の十分な位置付けを示すつもりでいたが、またまた力が及ばずその責を果たすことが出来なかった。これからも無理かもしれないが、どこかでほんの一部でも還元できたらと思っている。長越遺跡は思い出深く出発点の遺跡であり、終着点となるはずであったが、また先の課題となってしまった。「長越遺跡Ⅱ」で記したように２人の方の影響力に支えられ、また怯え？ながら、今後に期したいと思う。

図　版


SD01
SH11
SH09
SX02
SX01
SD02
SD11
SH10
SD06
SD03
X=-131400
SH01
SH02
SH13
SK02
SK03
SH08
X=-131410
SH06
SD10
SD09
SH14
SK04
SH05
SD09
SH04
SH03
SH12
SH07
SK01
SD08
SX04
X=-131420
SR01
X=-131430
Y=30920
Y=30910
0
10m

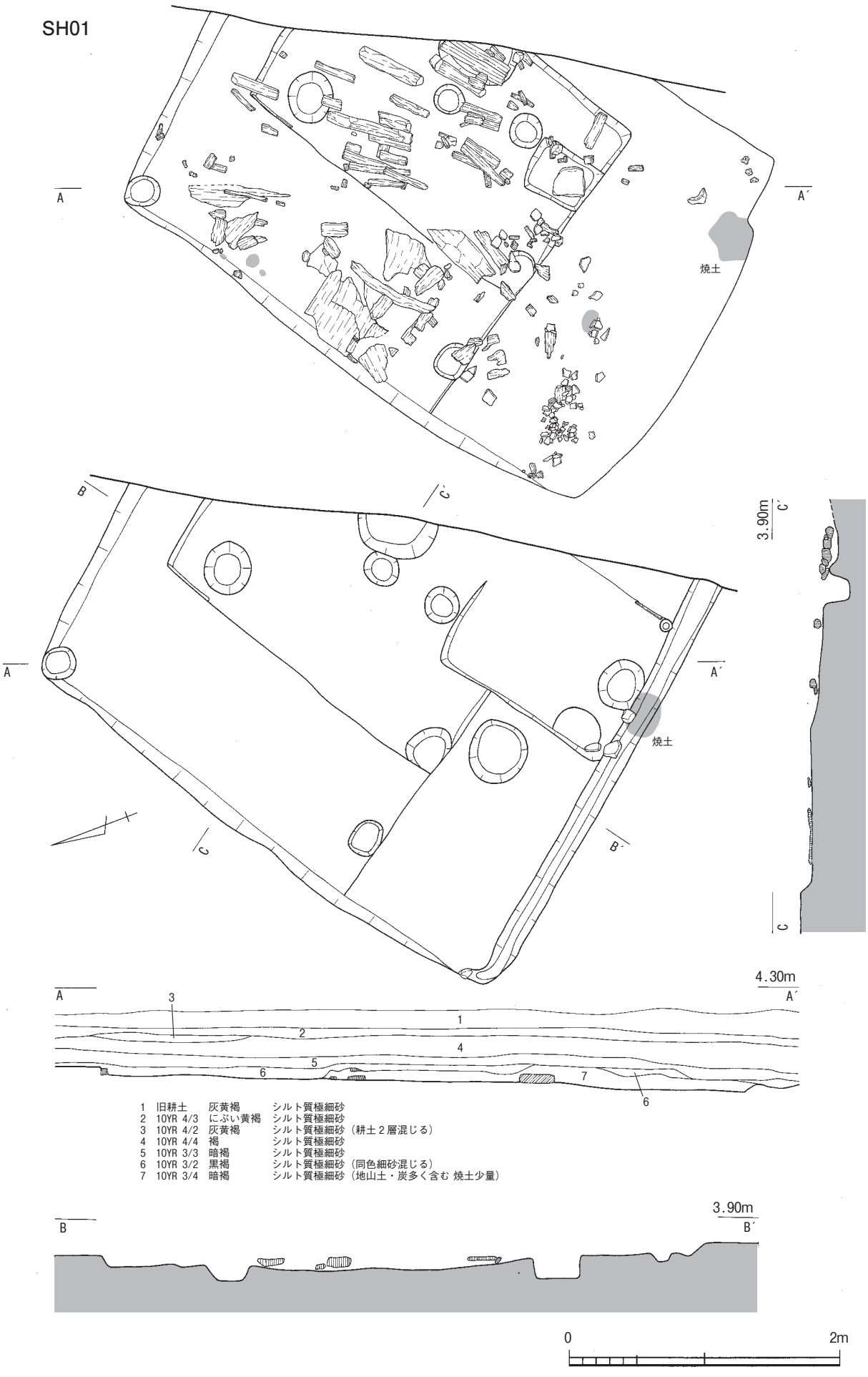
調査区平面図

図版 2


4.00m
A
A'
1 10YR 4/4 褐 極細砂を多く含む
2 2.5Y 3/2 黒褐 シルト (木・枝多く含む)
3 7.5YR 2/1 黒 シルト質極細砂
4 10Y 2/1 黒 シルト質極細砂
5 10YR 2/1 黒 シルト (板・葉・木多く含む ラミナ)
6 10YR 1.7/1 黒 シルト
7 5GY 2/1 オリーブ黒 シルト 地山
8 2.5Y 3/1 黒褐 極細砂 (土器・焼土・レキ含む)
8' 2.5Y 3/1 黒褐 極細砂 (炭多い)
9 10YR 2/2 黒褐 極細砂
10 10YR 3/2 黒褐 極細砂 土器多く含む
11 2.5Y 4/2 暗灰 黄 細砂 (地山)
0
2m
5.30m
B
B'
コンクリート
崩落
盛土
SR01
SH05
SD09
1 旧耕土 灰黄褐 シルト質極細砂
2 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
3 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質極細砂 (耕土 2 層混じる)
4 10YR 4/6 褐 シルト質極細砂
5 10YR 4/4 褐 シルト質極細砂
6 5B6 4/1 暗青灰 細砂まじり 粘質シルト～極細砂
7 10YR 3/3 暗褐 シルト質極細砂
8 10YR 4/1 褐灰 粘質シルト～極細砂
9 10YR 3/1 黒褐 粘土～粘質シルト
10 5Y 5/2 灰オリーブ 粘質シルト～細砂
11 5Y 5/3 灰オリーブ 粘質シルト～極細砂
12 5Y 5/1 灰 粘質シルト～極細砂
13 7.5Y 4/1 灰 中砂まじり粘質シルト～細砂
14 2.5Y 5/1 黄灰 粘質シルト～極細砂
15 2.5Y 4/1 黄灰 粘土～粘質シルト
16 2.5Y 4/2 暗灰黄 中砂まじりシルト～細砂
17 5B 4/1 暗青灰 粘土
18 10YR 3/2 黒褐 シルト質極細砂 (同色細砂混じる)
19 10YR 3/4 暗褐 シルト質極細砂 (地山土・炭多く含む 焼土少量)
20 10YR 4/2 灰黄褐 粘土～粘質シルト
21 2.5Y 3/1 黒褐 粘土～粘質シルト
22 10YR 3/1 黒褐 粘土～粘質シルト
23 10YR 4/1 褐灰 粘質シルト～極細砂
24 2.5Y 3/1 黒褐 粘質シルト～極細砂
25 10YR 3/2 黒褐 シルト～細砂
26 10YR 2/1 黒 粘質シルト～極細砂
27 ヒット 2.5Y 2/1 黒 粘土～粘質シルト
0
1m
5m

土層断面図

SH01

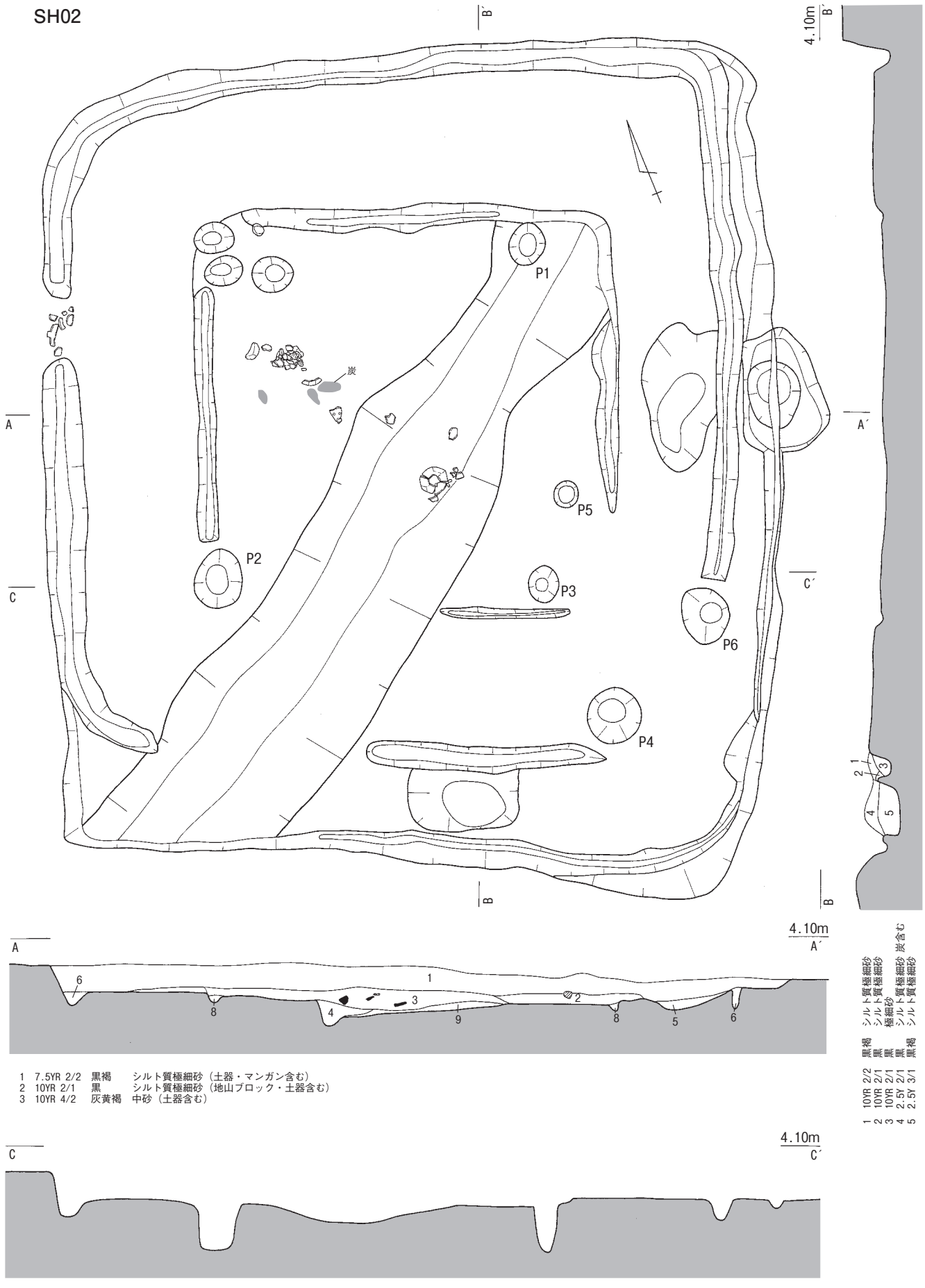


1 旧耕土 灰黄褐 シルト質極細砂
2 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
3 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質極細砂（耕土 2 層混じる）
4 10YR 4/4 褐 シルト質極細砂
5 10YR 3/3 暗褐 シルト質極細砂
6 10YR 3/2 黒褐 シルト質極細砂（同色細砂混じる）
7 10YR 3/4 暗褐 シルト質極細砂（地山土・炭多く含む 焼土少量）

0 2m

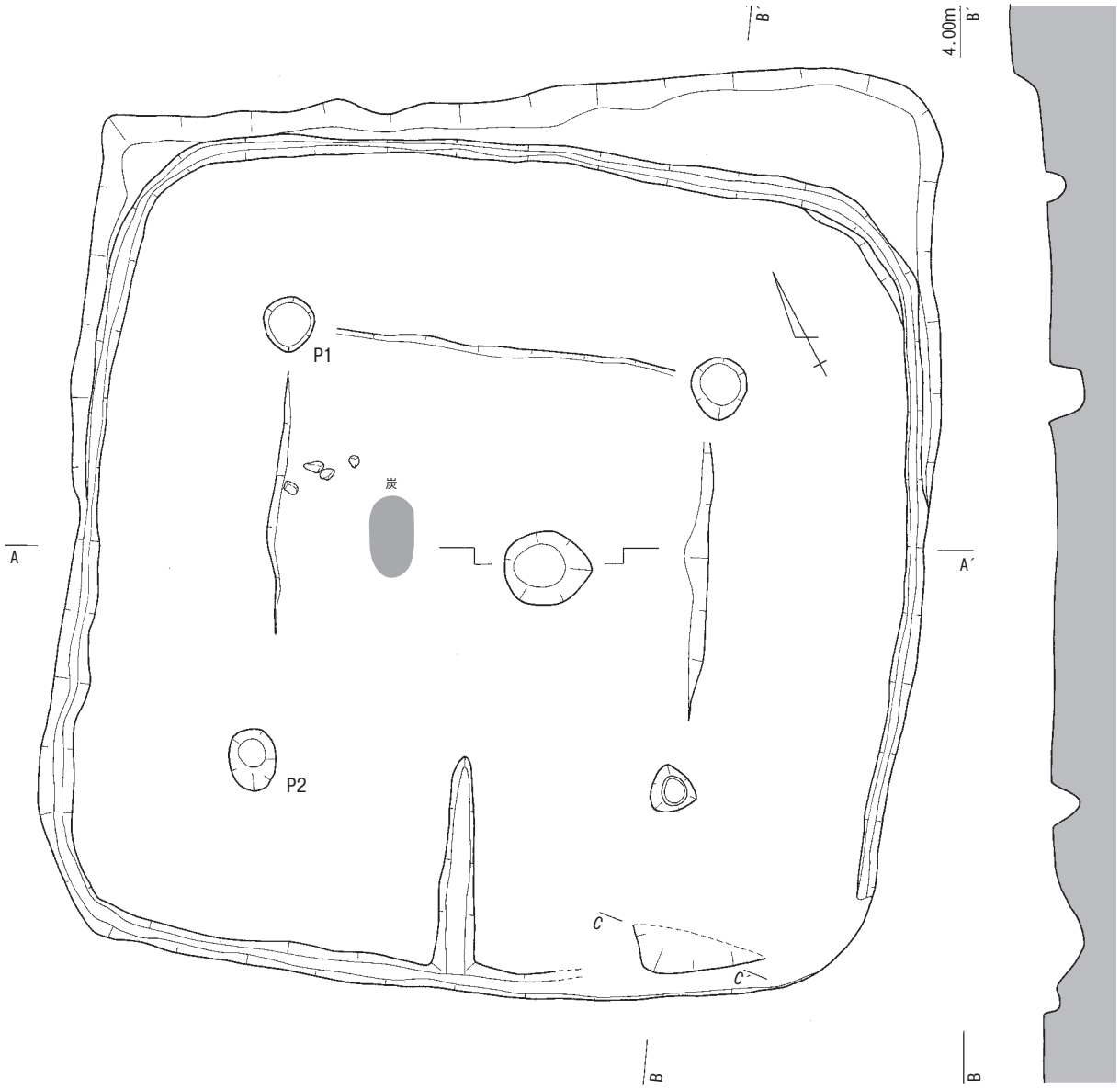
SH01実測図

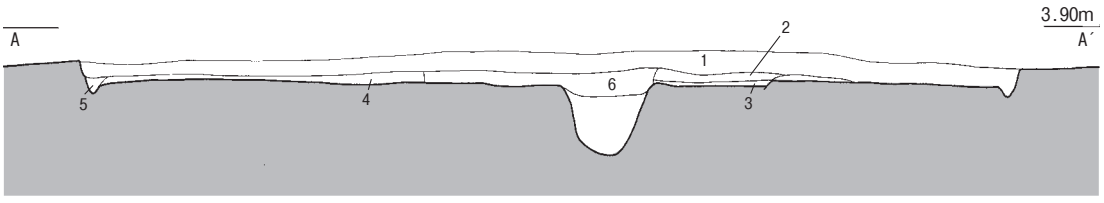
図版 4


SH02
P1
P2
P3
P4
P5
P6
炭
A
A´
B
B´
C
C´
4.10m
1 7.5YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂（土器・マンガン含む）
2 10YR 2/1 黒 シルト質極細砂（地山ブロック・土器含む）
3 10YR 4/2 灰黄褐 中砂（土器含む）
1 10YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂
2 10YR 2/1 黒 シルト質極細砂
3 10YR 2/1 黒 極細砂
4 2.5Y 2/1 黒 シルト質極細砂 炭含む
5 2.5Y 3/1 黒褐 シルト質極細砂
0
2m

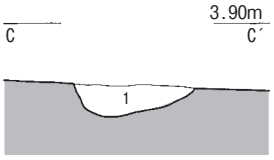
SH02実測図

SH03





1 10YR 2/3 黒褐 シルト質極細砂（地山土含む）
2 10YR 3/1 黒褐 シルト質極細砂（地山土含む）
3 10YR 2/1 黒 シルト質極細砂（炭含む）
4 10YR 4/2 褐灰 シルト質極細砂（地山土含む）
5 10YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂
6 10YR 3/1 黒褐 シルト質極細砂（炭含む）

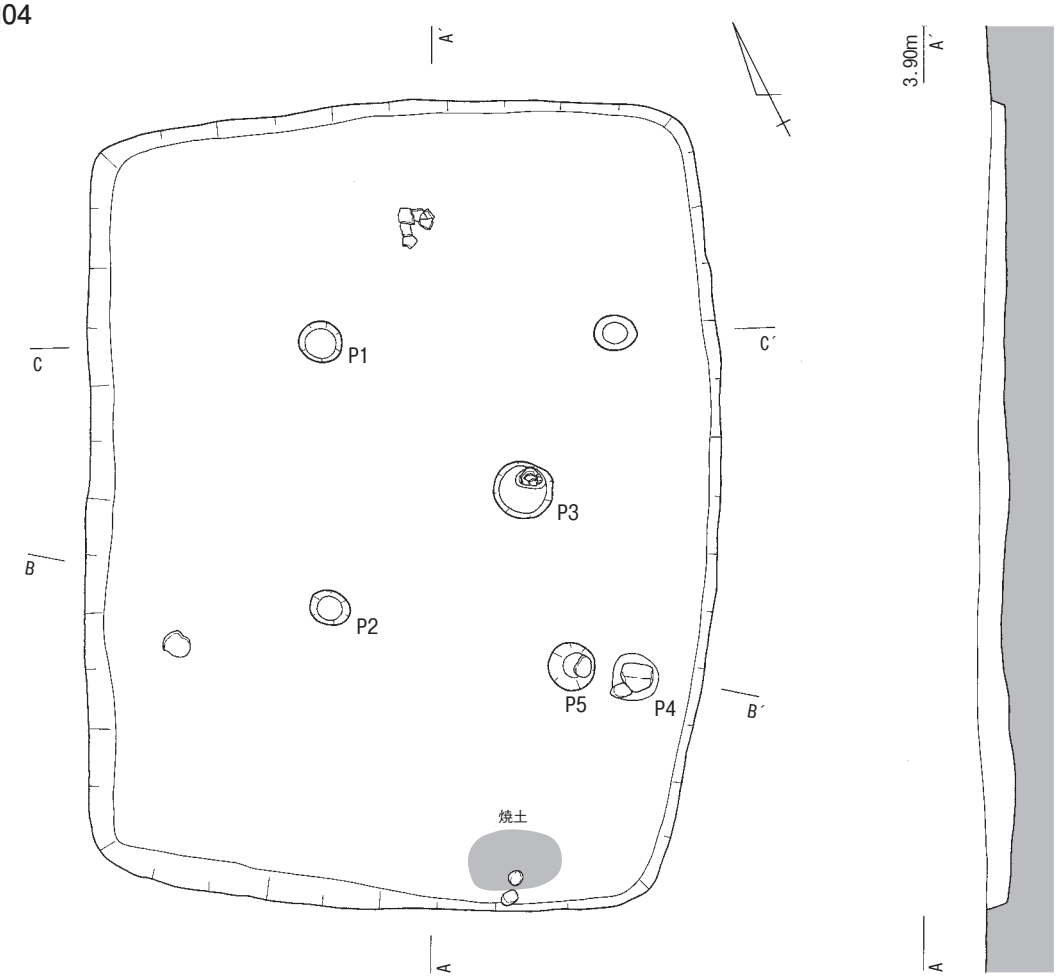


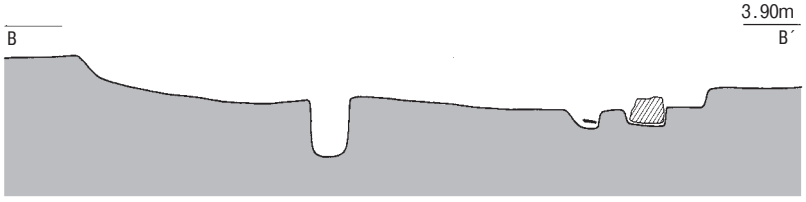
1 2.5Y 1/2 黒 シルト質極細砂（炭・地山土ブロック多く入る）

SH03実測図

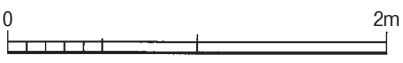
図版 6

SH04

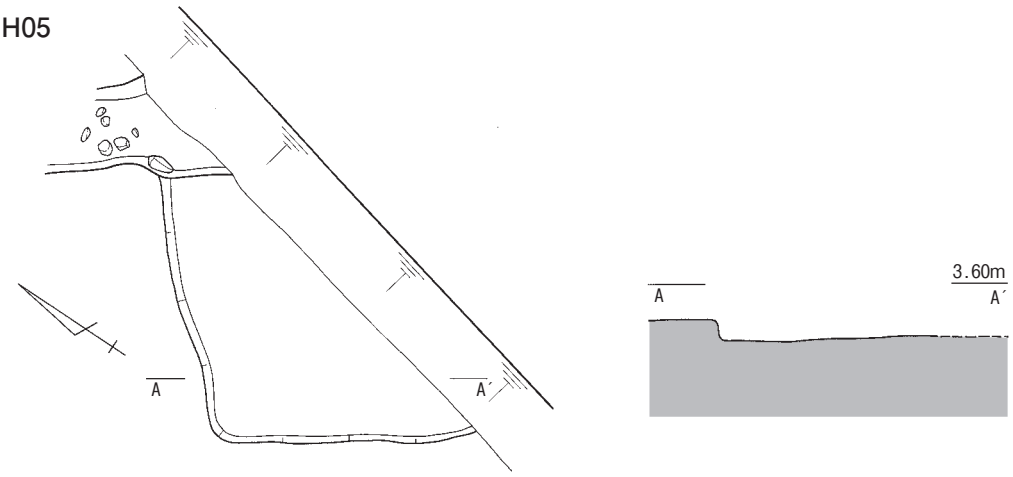




SH04実測図



SH05

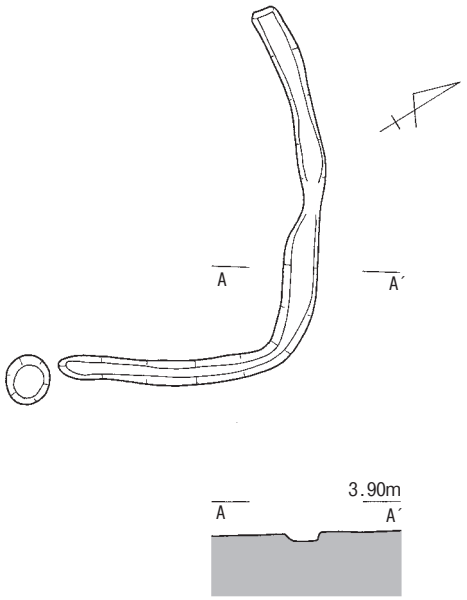


SH06

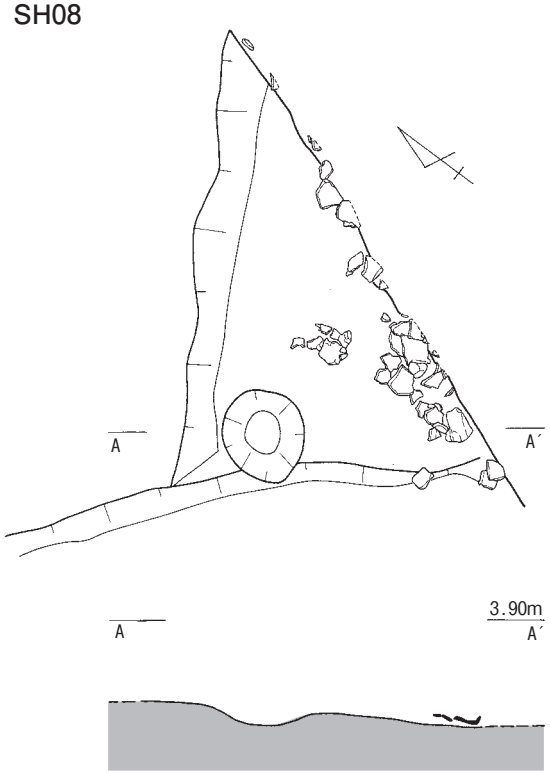
SH05・SH06実測図

図版 8

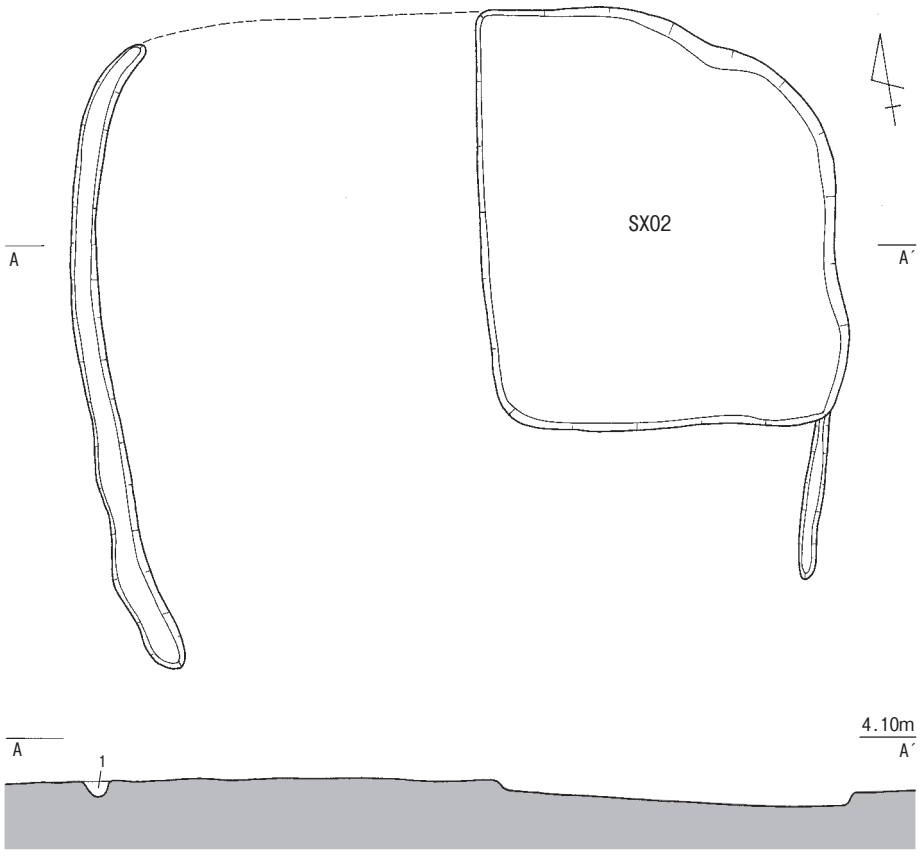
SH07



SH08



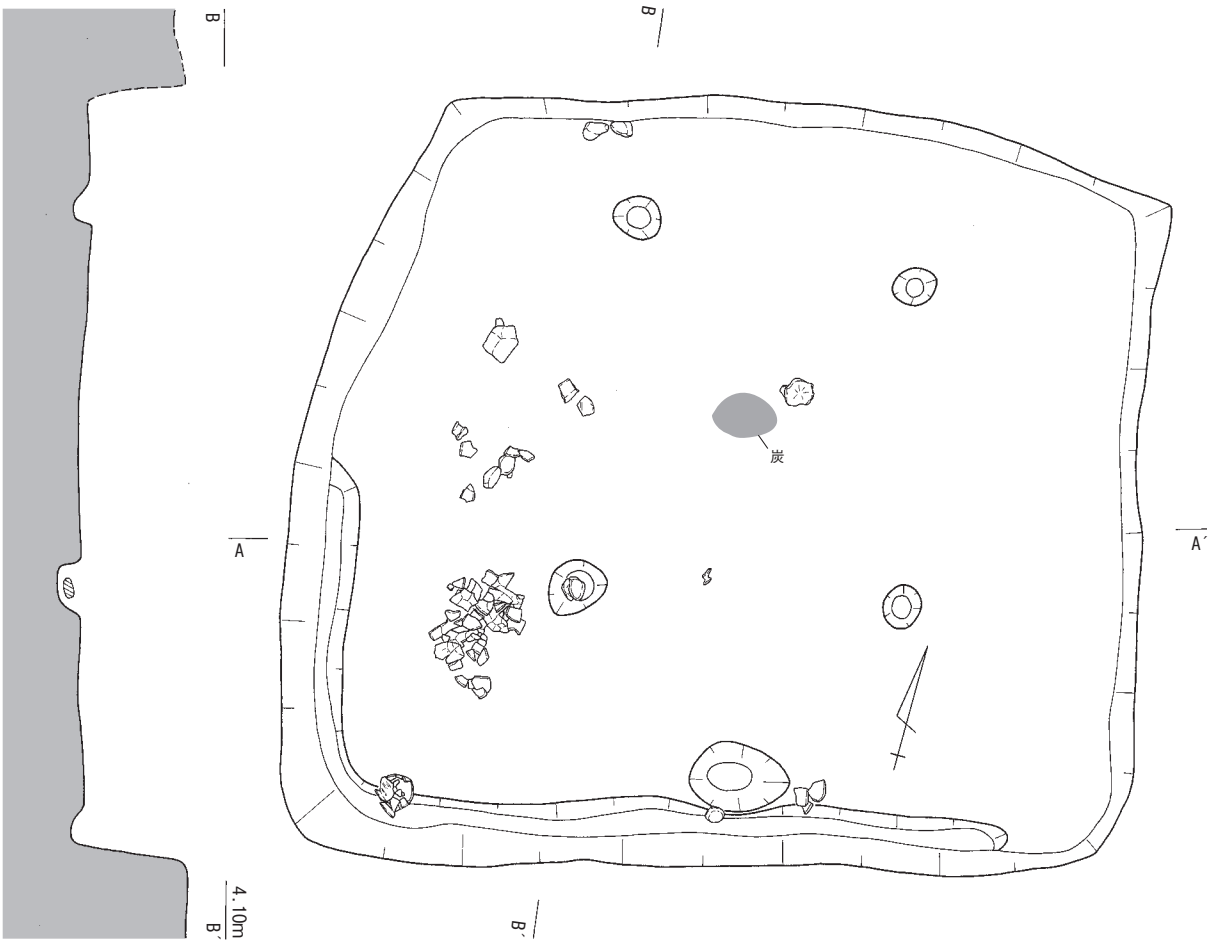
SH09

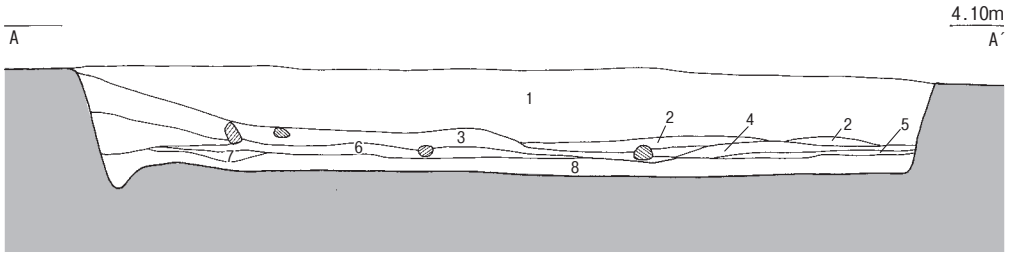


1　7.5Y 2/2　オリーブ黒　シルト質極細砂

SH07～SH09実測図

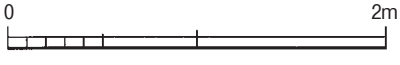
SH10





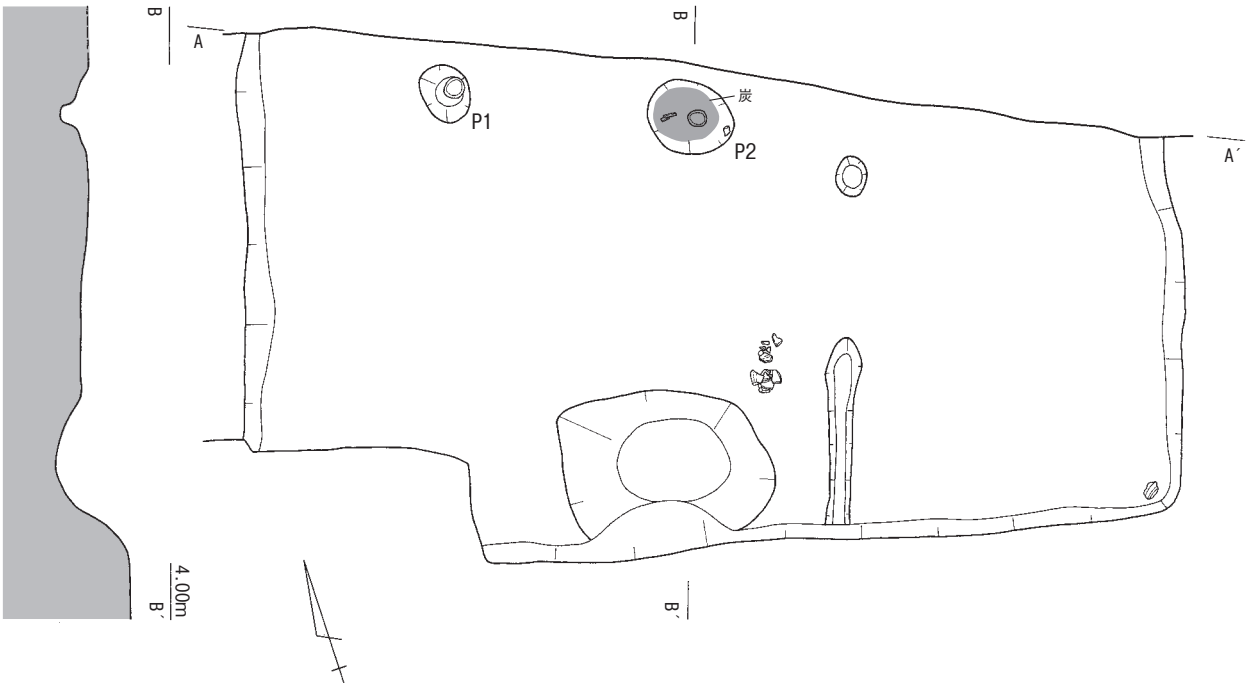
1 10YR 3/3 暗褐 シルト質極細砂（地山土・炭・10YR 4/1 褐灰 シルトのブロック多く含む）
（10YR 5/6 黄褐 シルト質極細砂）
2 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂（地山ブロック多く・炭少量含む）
3 10YR 4/4 褐 シルト質極細砂（地山ブロック多く・炭少量含む）
4 2.5Y 4/3 オリーブ褐 細砂
5 2.5Y 4/1 黄灰 シルト質極細砂（地山土含む）
5´ 2.5Y 4/1 黄灰 シルト質極細砂（地山土含む）
6 2.5Y 3/1 黒褐 シルト
7 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 シルト質極細砂（地山土含む）
8 10YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂（地山土含む）

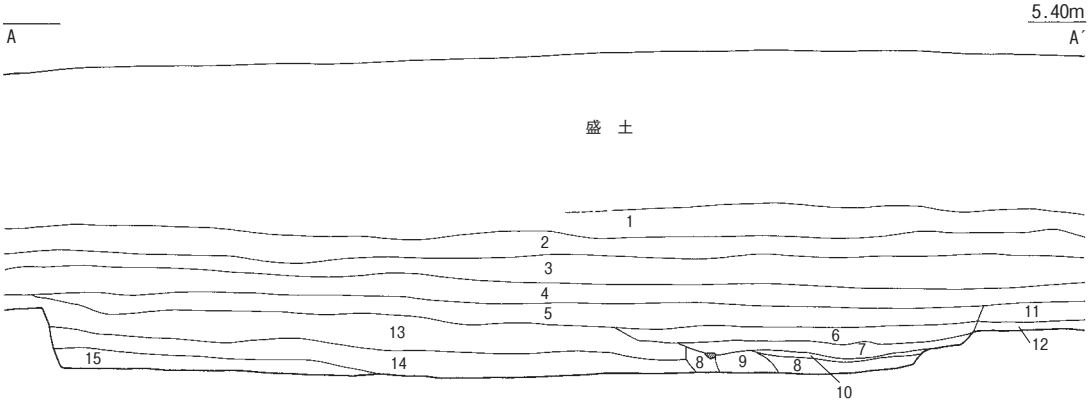
SH10実測図



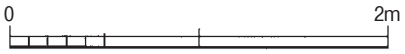
図版10

SH11



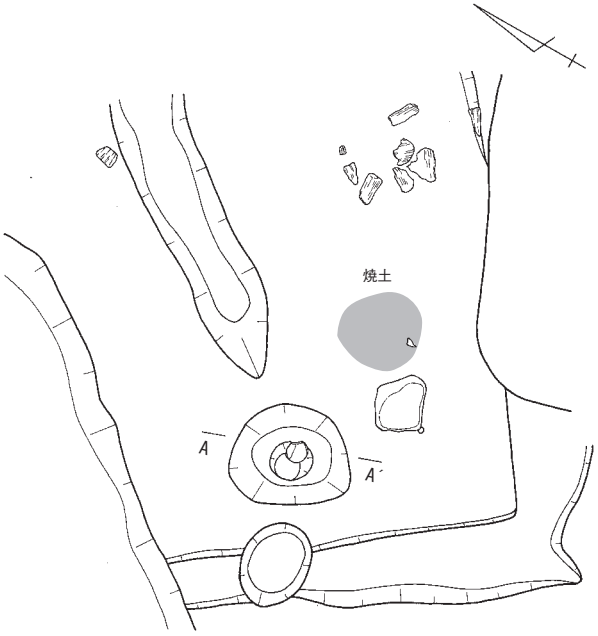


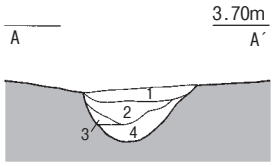
1 耕土
2 5Y 5/3 オリーブ黄 シルト質極細砂
3 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
4 10YR 3/3 暗褐 シルト質極細砂 (Mn含む)
5 10YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂
6 10YR 3/2 黒褐 シルト質極細砂 (Mn含む) ———— SX01
7 10YR 4/1 褐灰 シルト質極細砂 (粘性強い)
8 10YR 3/1 黒褐 シルト質極細砂 (地山土・炭含む) ———— SD11
9 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質極細砂 (7層・地山土多く含む)
10 10YR 4/1 褐灰 細～中砂 (ラミナ状になる) ———— SD11
11 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質極細砂
12 地山土 (上から影響を受けた部分)
13 5層と地山が混じった層 (5層が多い 7～8割)
14 5層と地山が混じった層 (地山が多い 6割位)
15 2.5Y 4/1 黄灰 シルト質極細砂 (炭含む)



SH11実測図

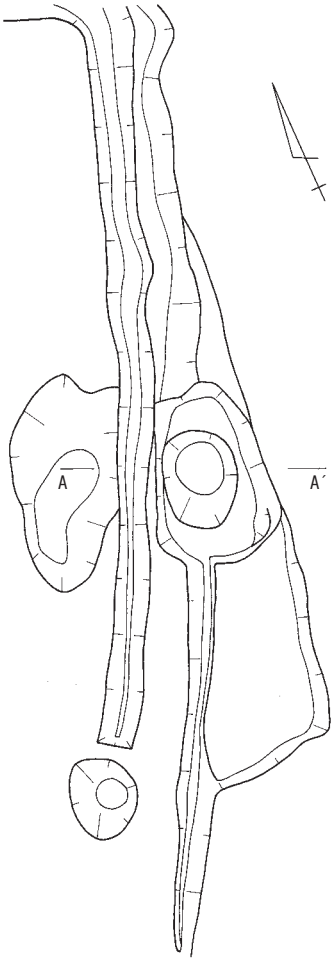
SH12



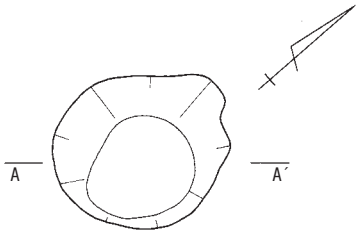


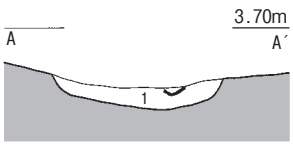
1　7.5YR 2.2　黒褐　シルト質極細砂（地山・炭・焼土・レキ含む）
2　10YR 1.7/1　黒　シルト質極細砂（地山・炭・焼土含む）
3　5Y 2/1　黒　シルト質極細砂（焼土・炭含む）
4　2.5GY 2/1　黒　シルト質極細砂（炭・土器含む）

SH13



SK01

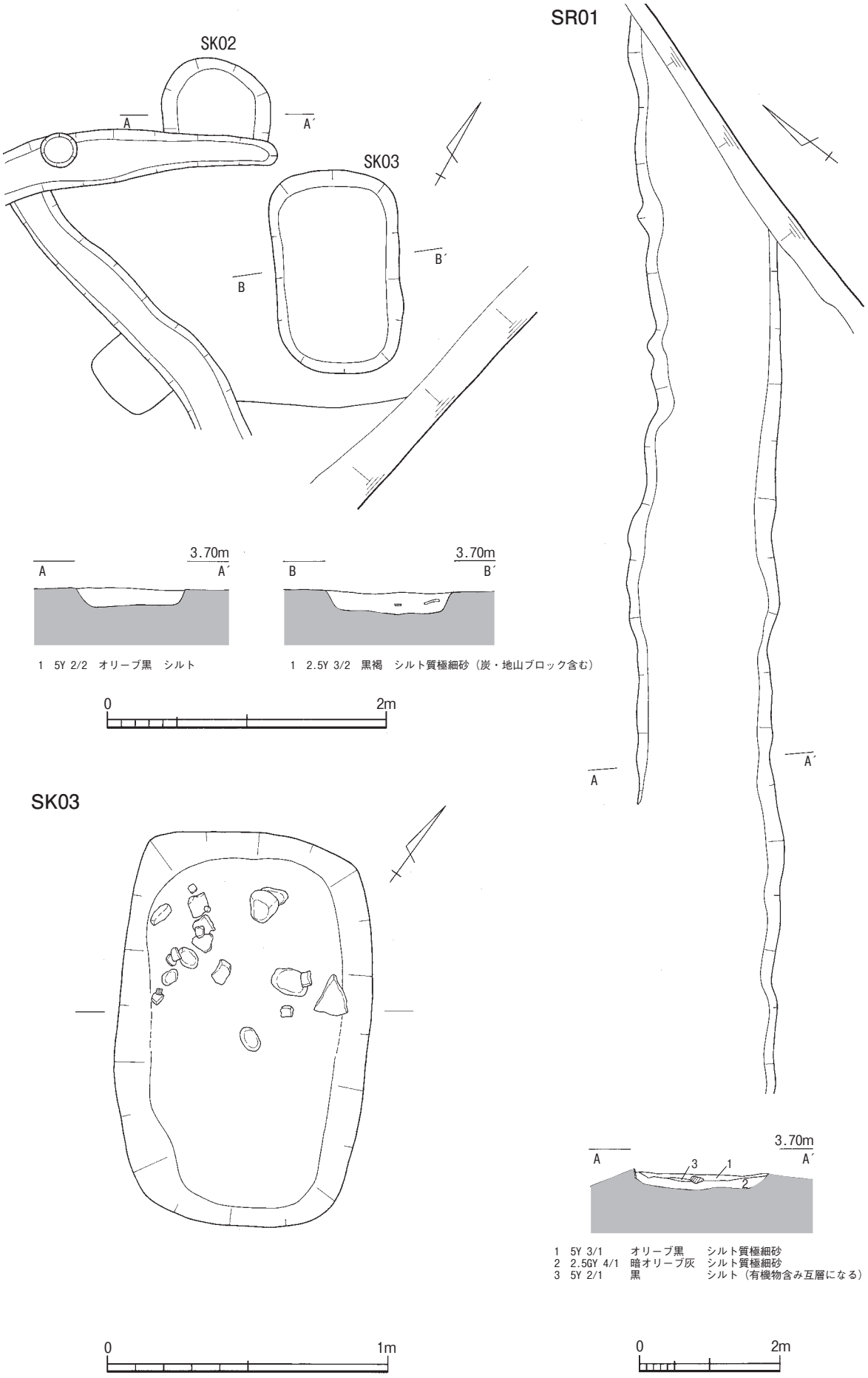




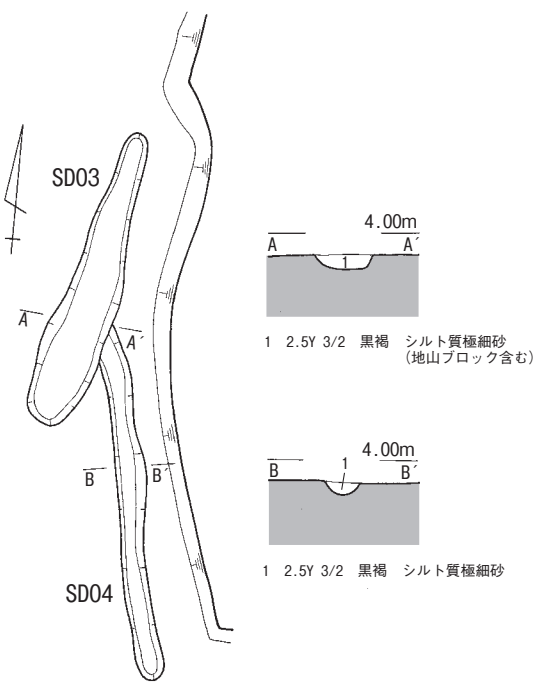
1　5Y 2/2　オリーブ黒　シルト 炭含む

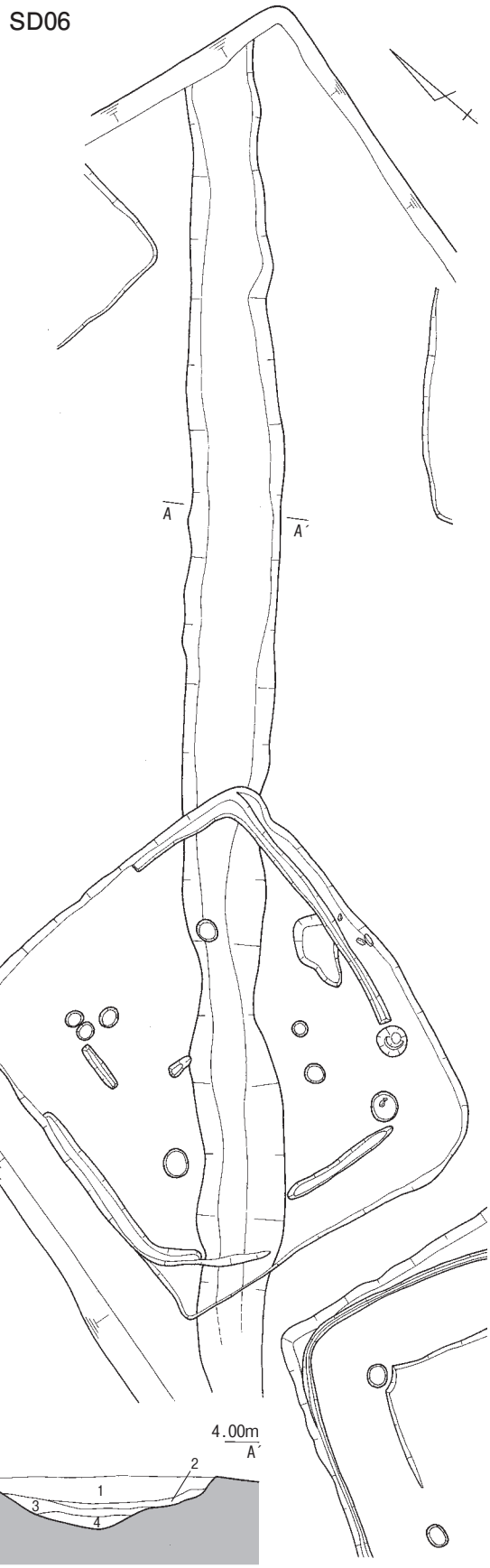
SH12・SH13・SK01実測図

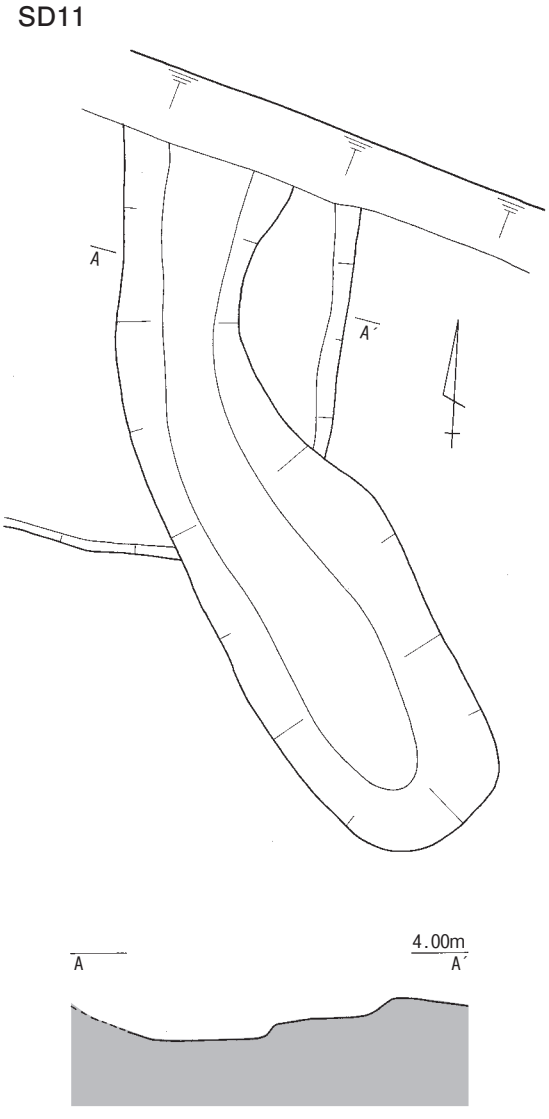
図版12



SK02・SK03・SR01実測図



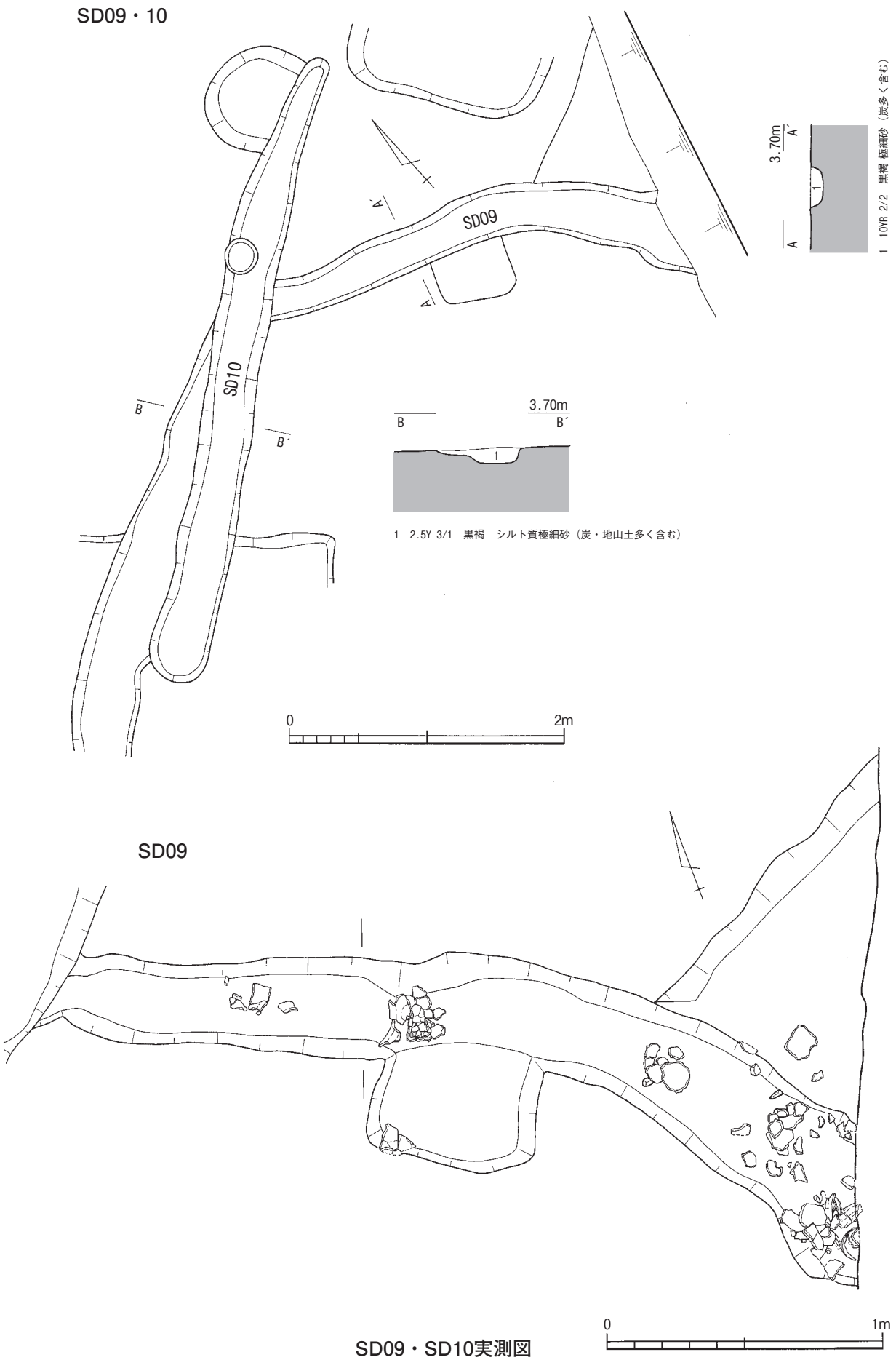




0 2m

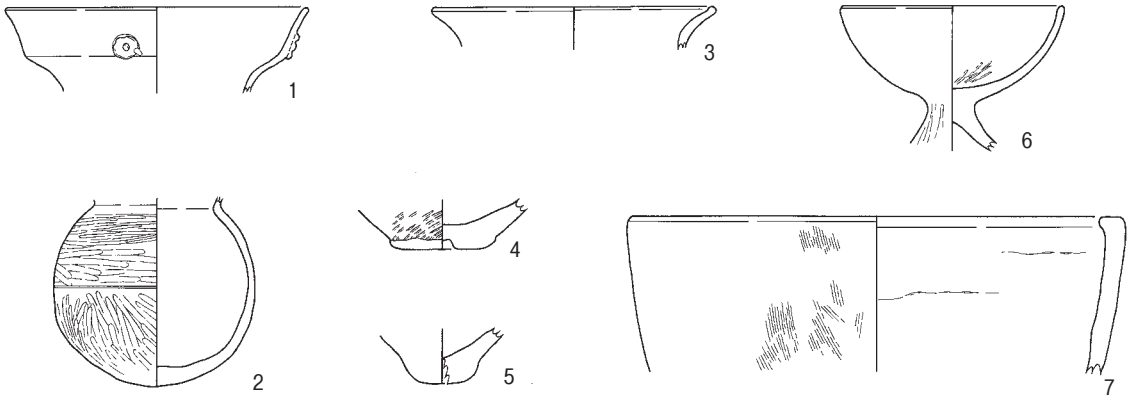
SD03・SD06・SD11実測図

図版14

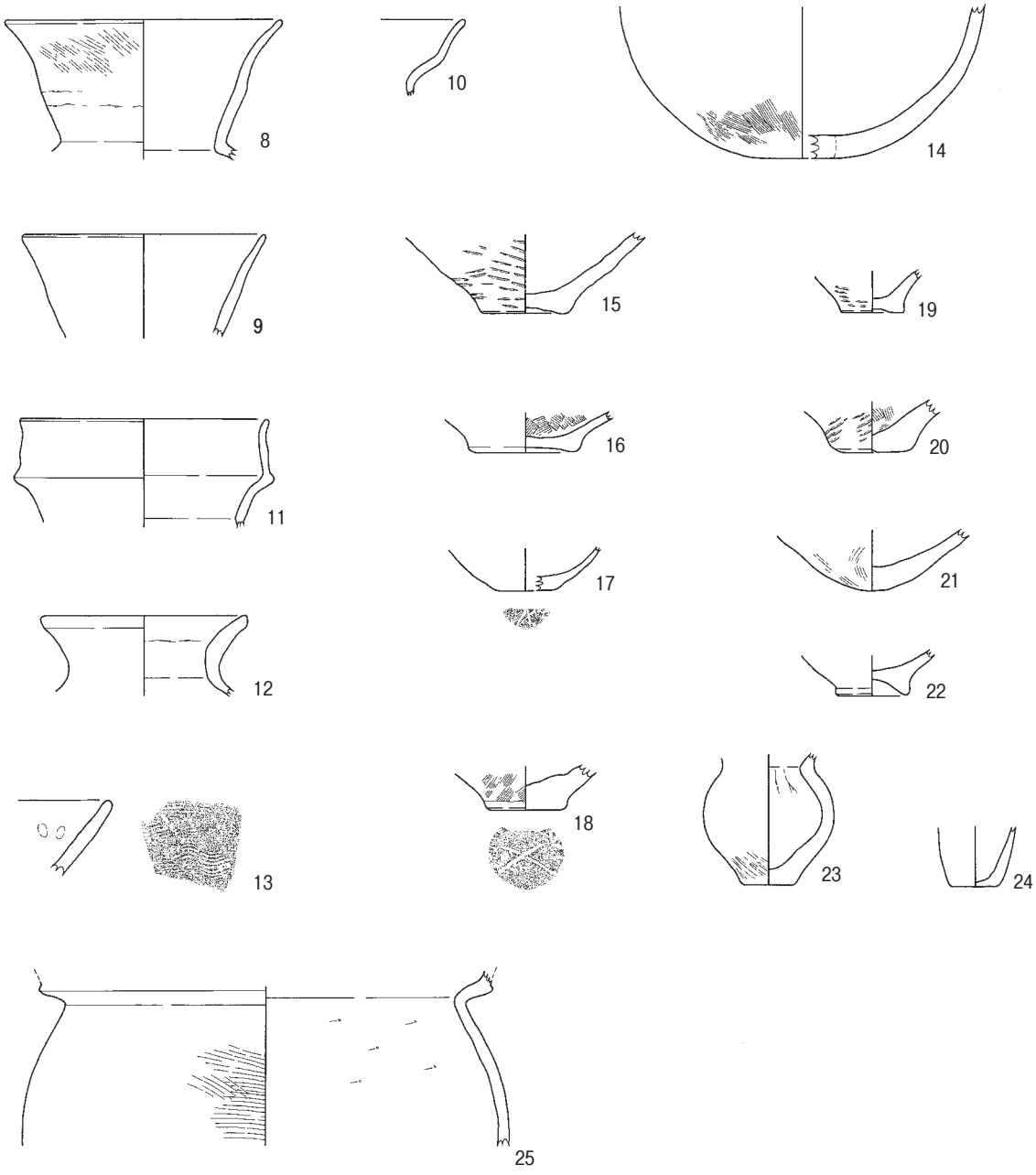


SD09・SD10実測図

SH01



SH02

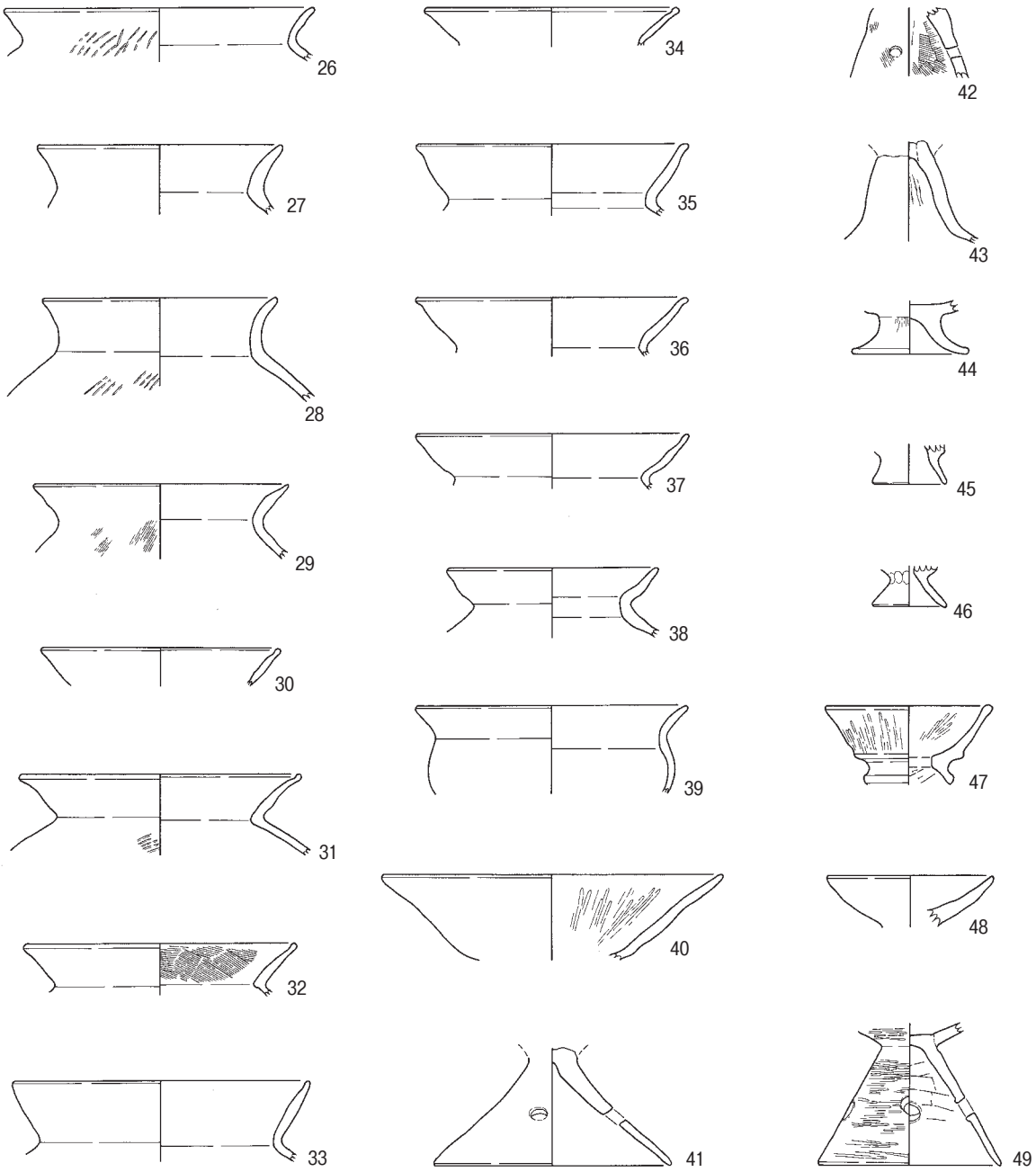


0 20cm

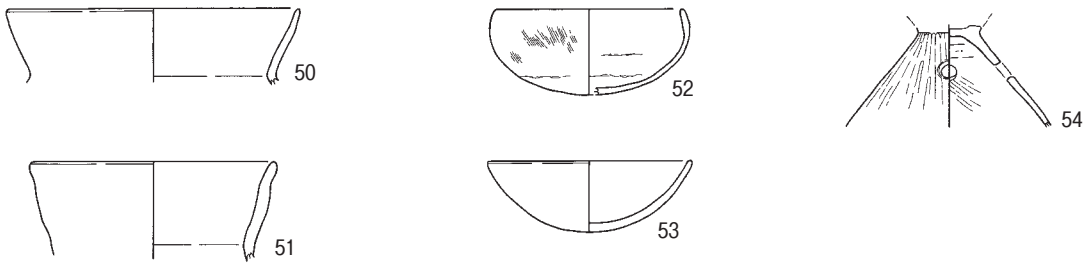
土器実測図(1)

図版16

SH02



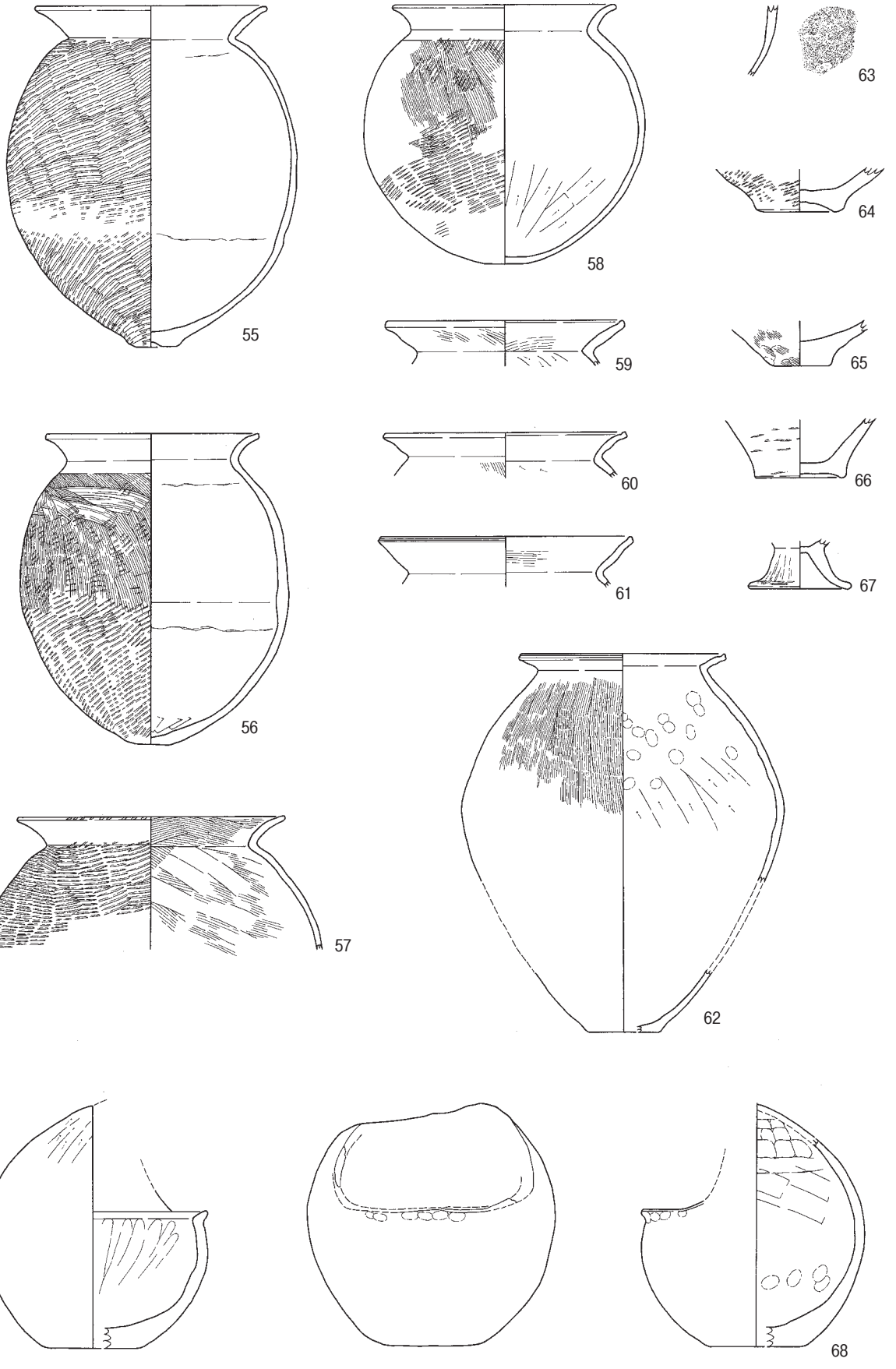
SH03



0 20cm

土器実測図(2)

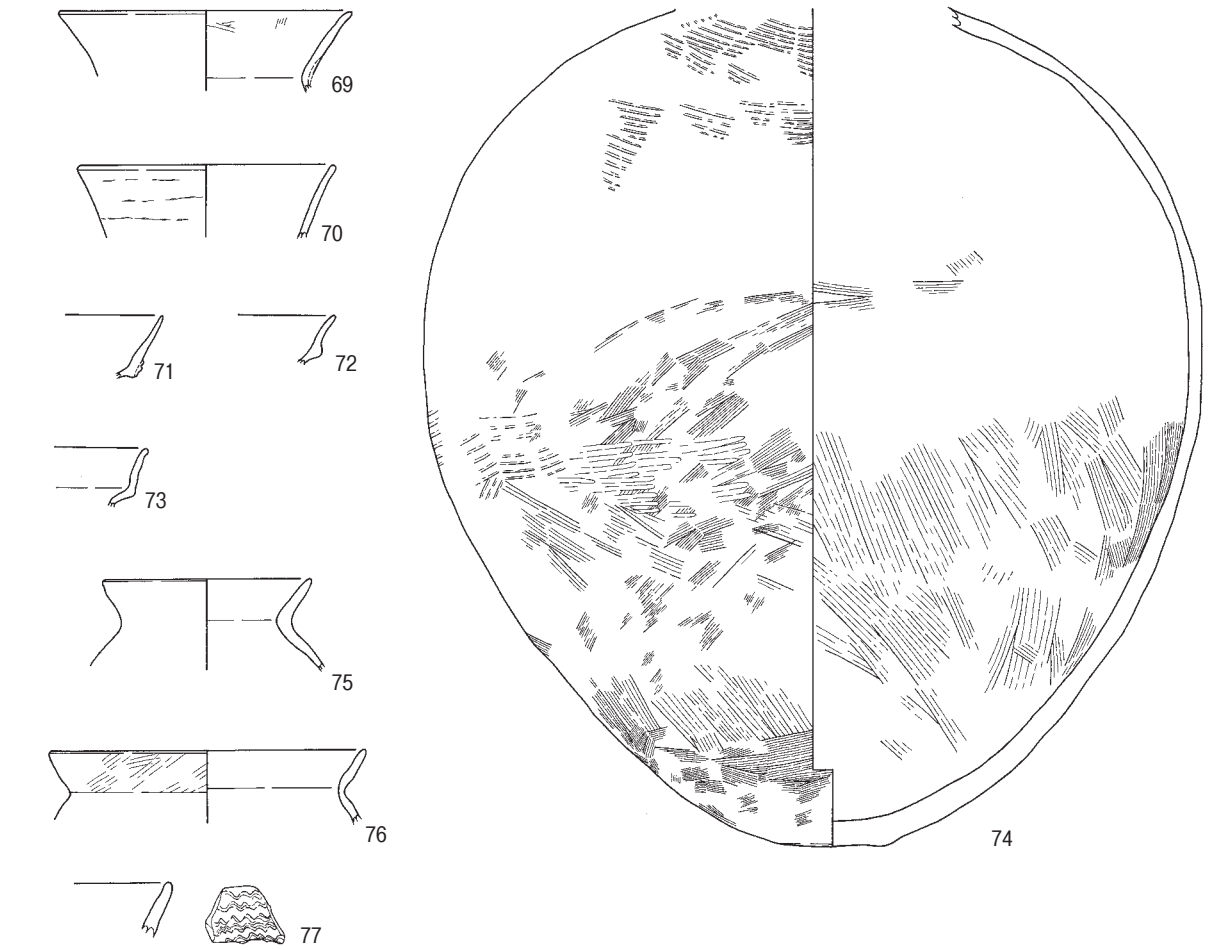
SH04



土器実測図(3)

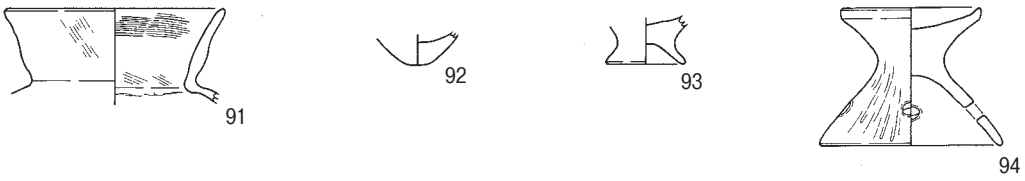
図版18

SH06

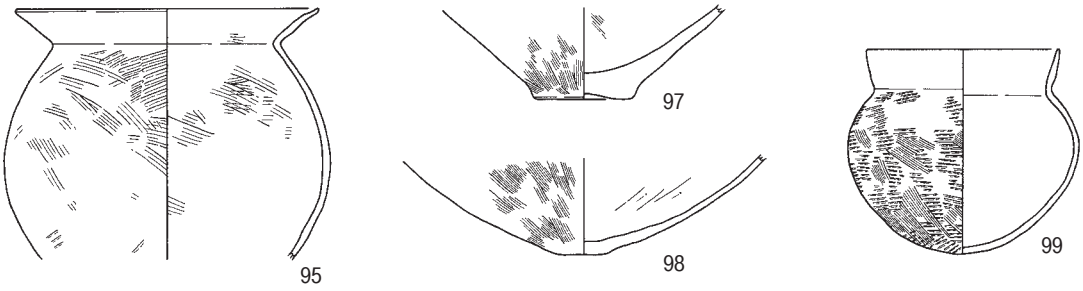


土器実測図(4)

SH05

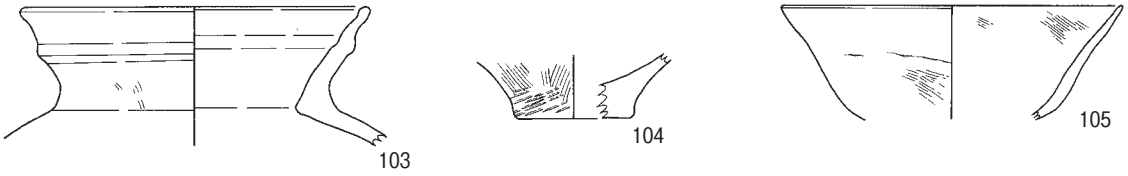


SH08

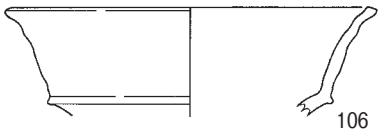


SH10

SH11

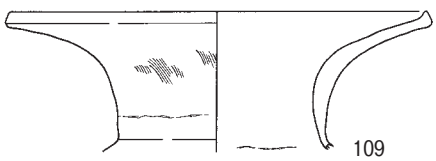


SK01



SK03

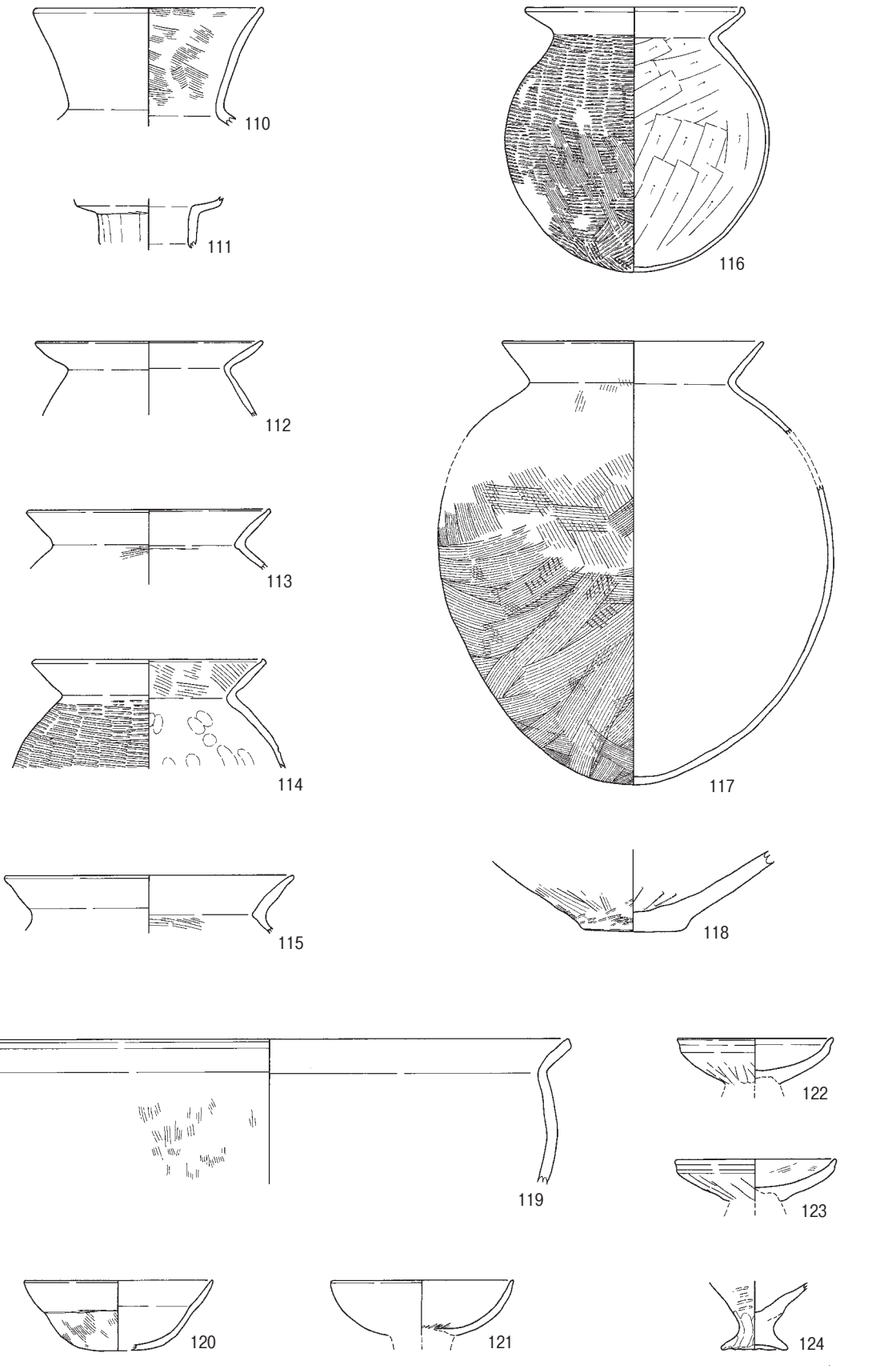
SX01



土器実測図(5)

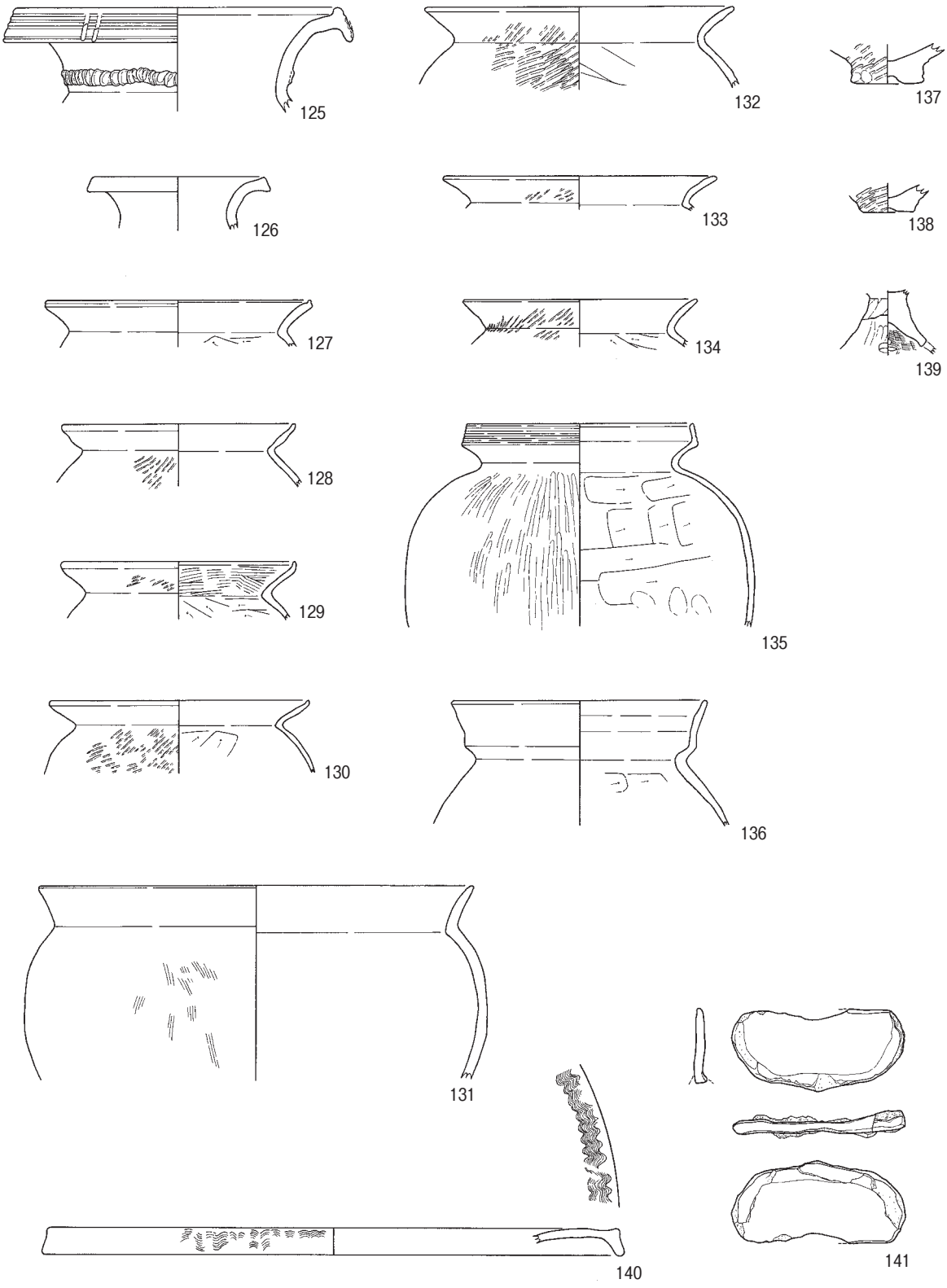
図版20

SX03



土器実測図(6)

SX04

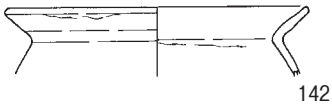


0 20cm

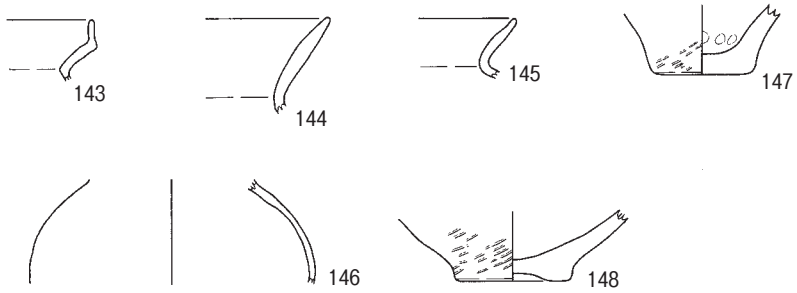
土器実測図(7)

図版22

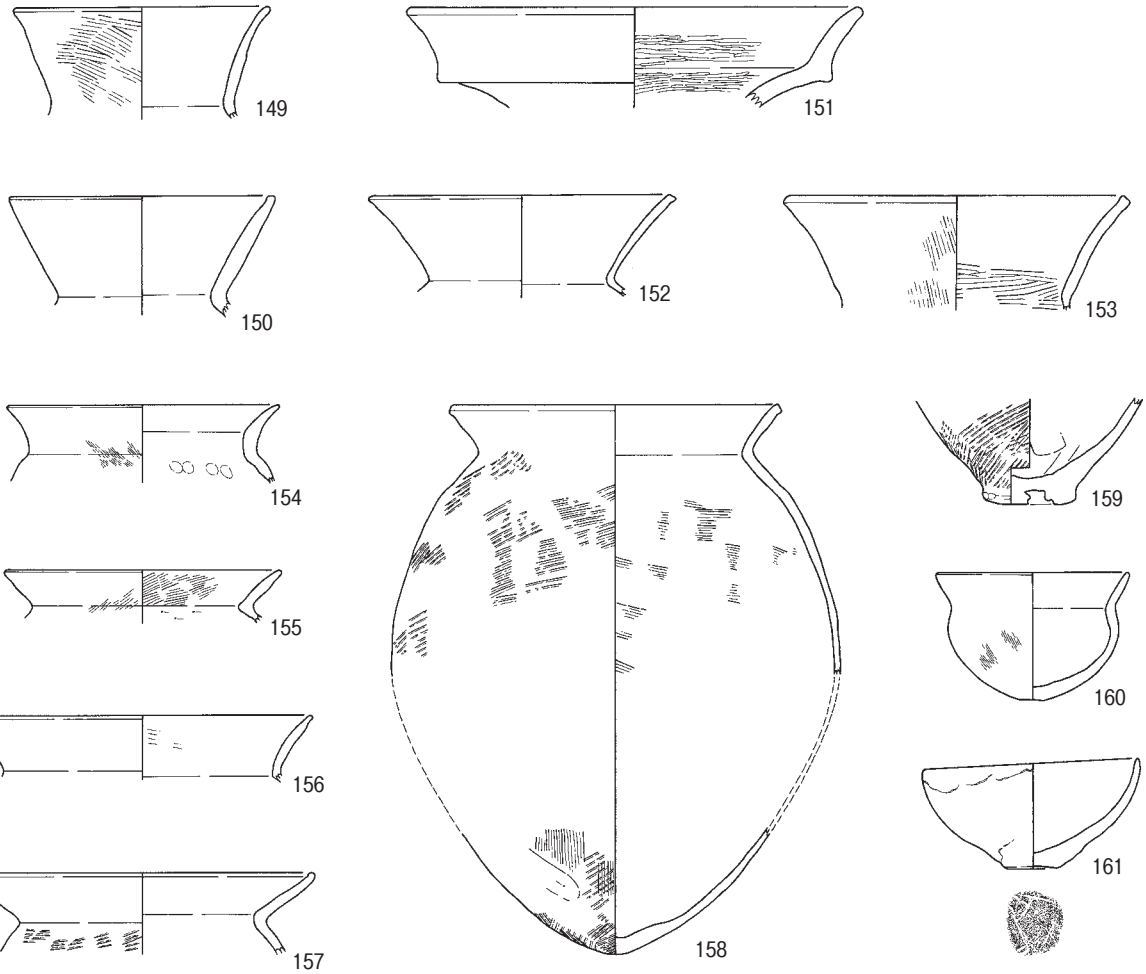
SD01



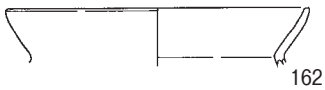
SD06



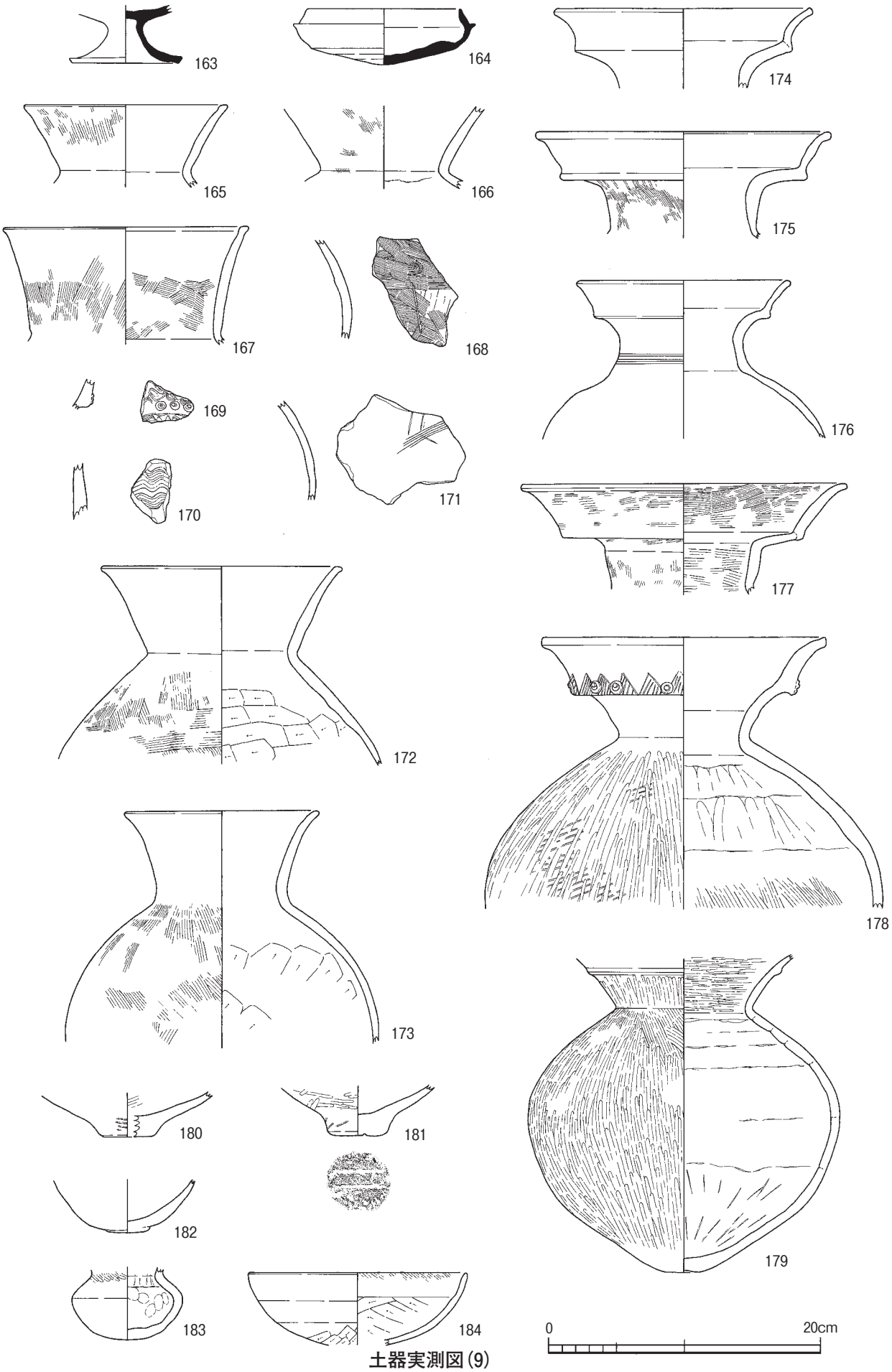
SD09



SD11

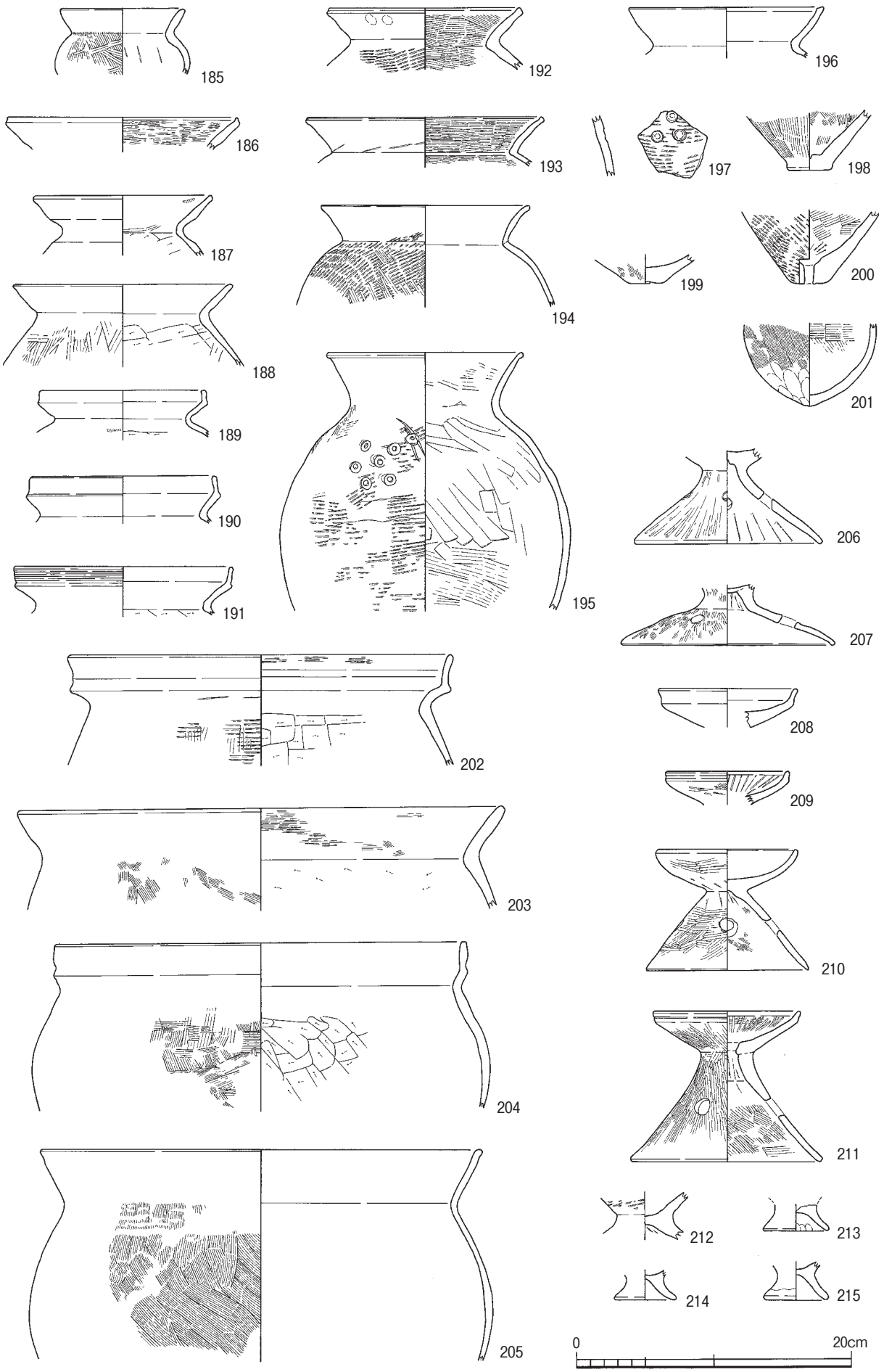


土器実測図(8)

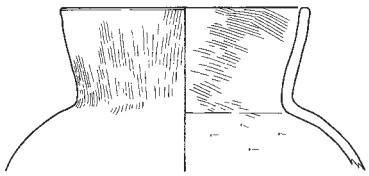

163
164
174
165
166
175
167
168
176
169
171
170
177
172
178
173
180
181
182
179
183
184
0
20cm

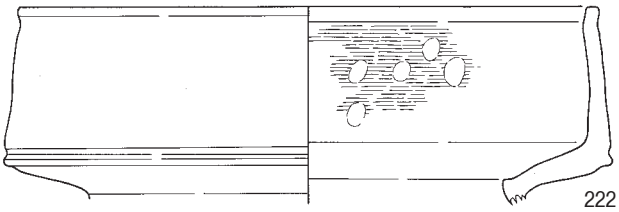
土器実測図(9)

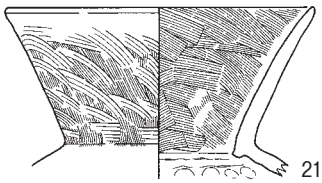
図版24

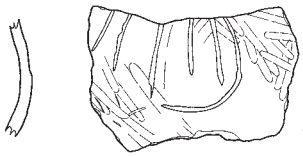


土器実測図(10)


216

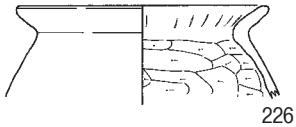

222

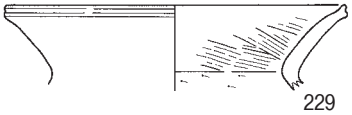

217

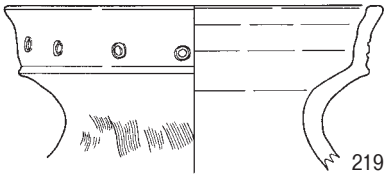

224

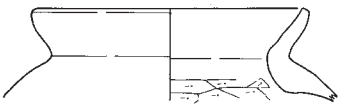
225

218

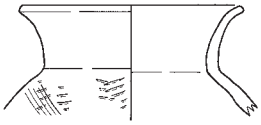

226

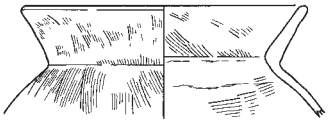

229

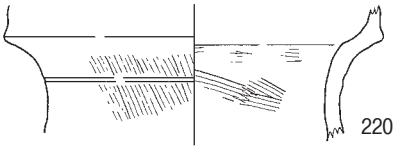

219

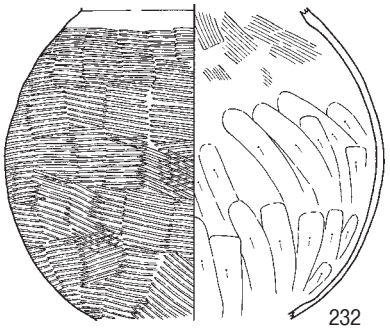

227

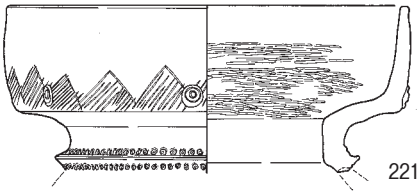
230

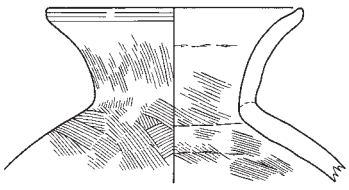

228


231

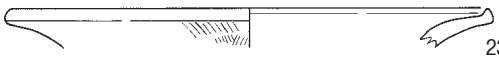

220

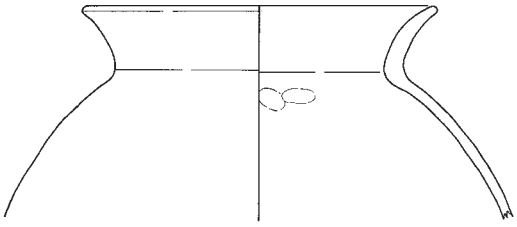

232

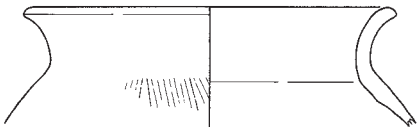

221


223

233

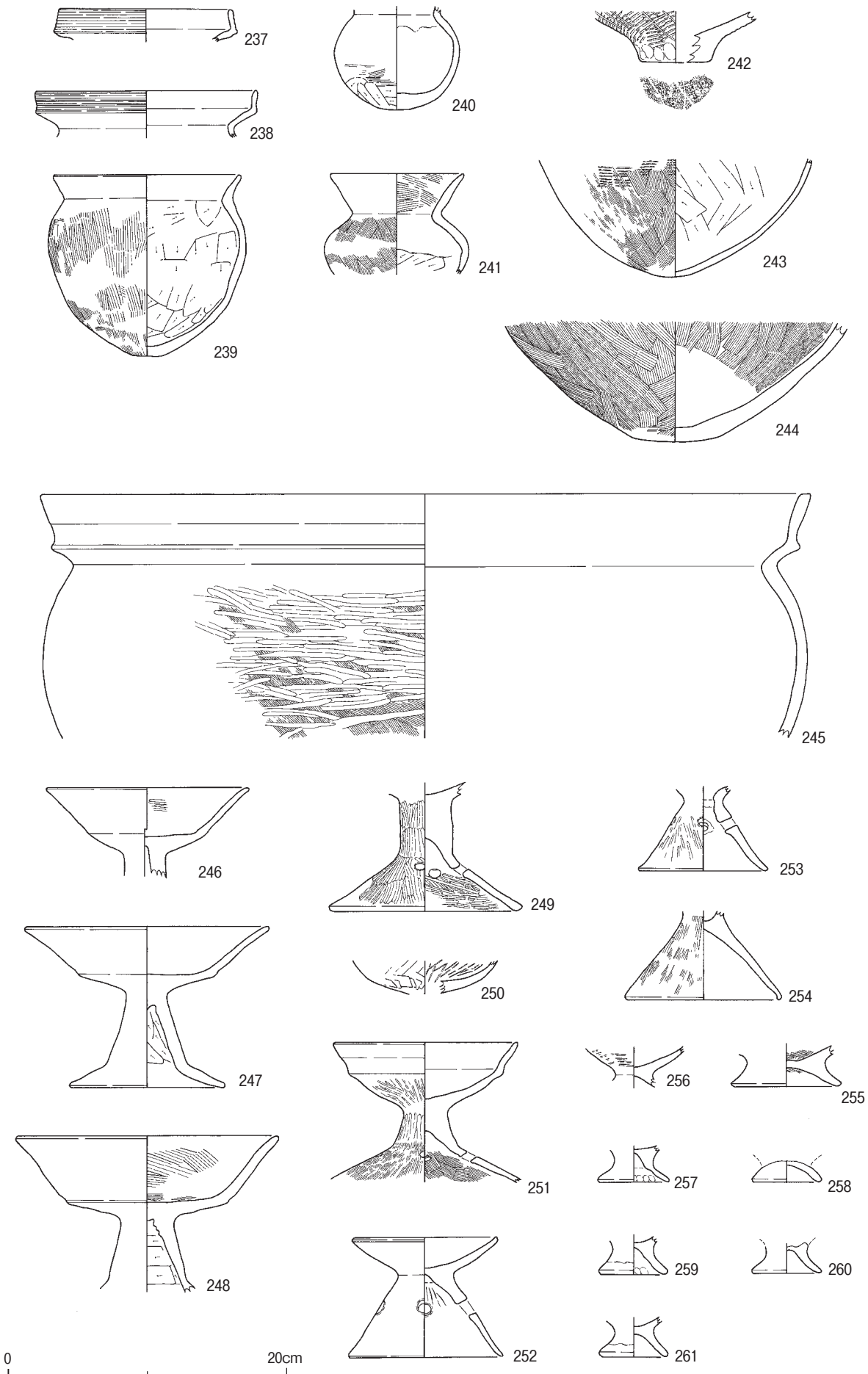

235


236

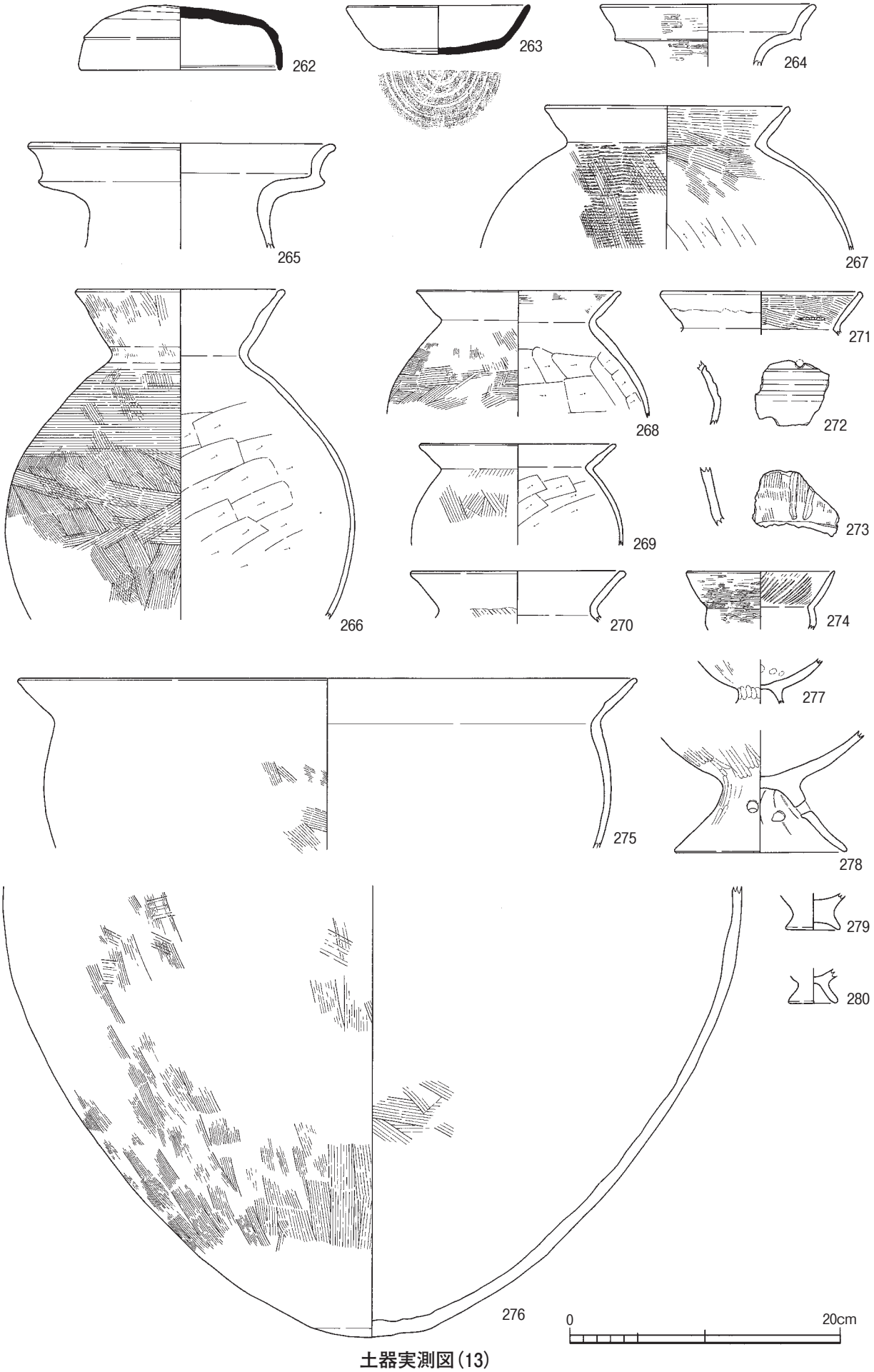

234

土器実測図(11)

図版26

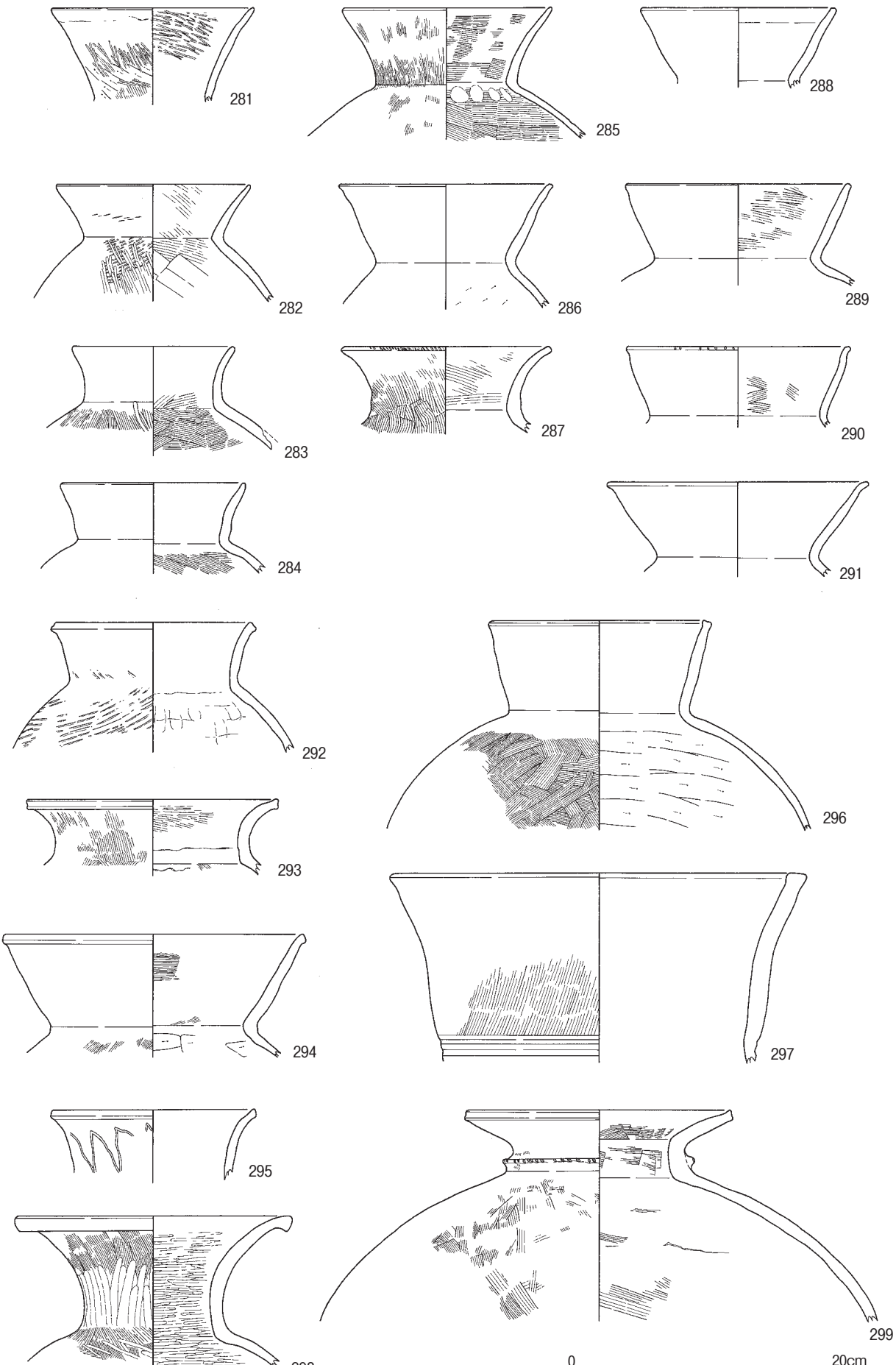


土器実測図(12)

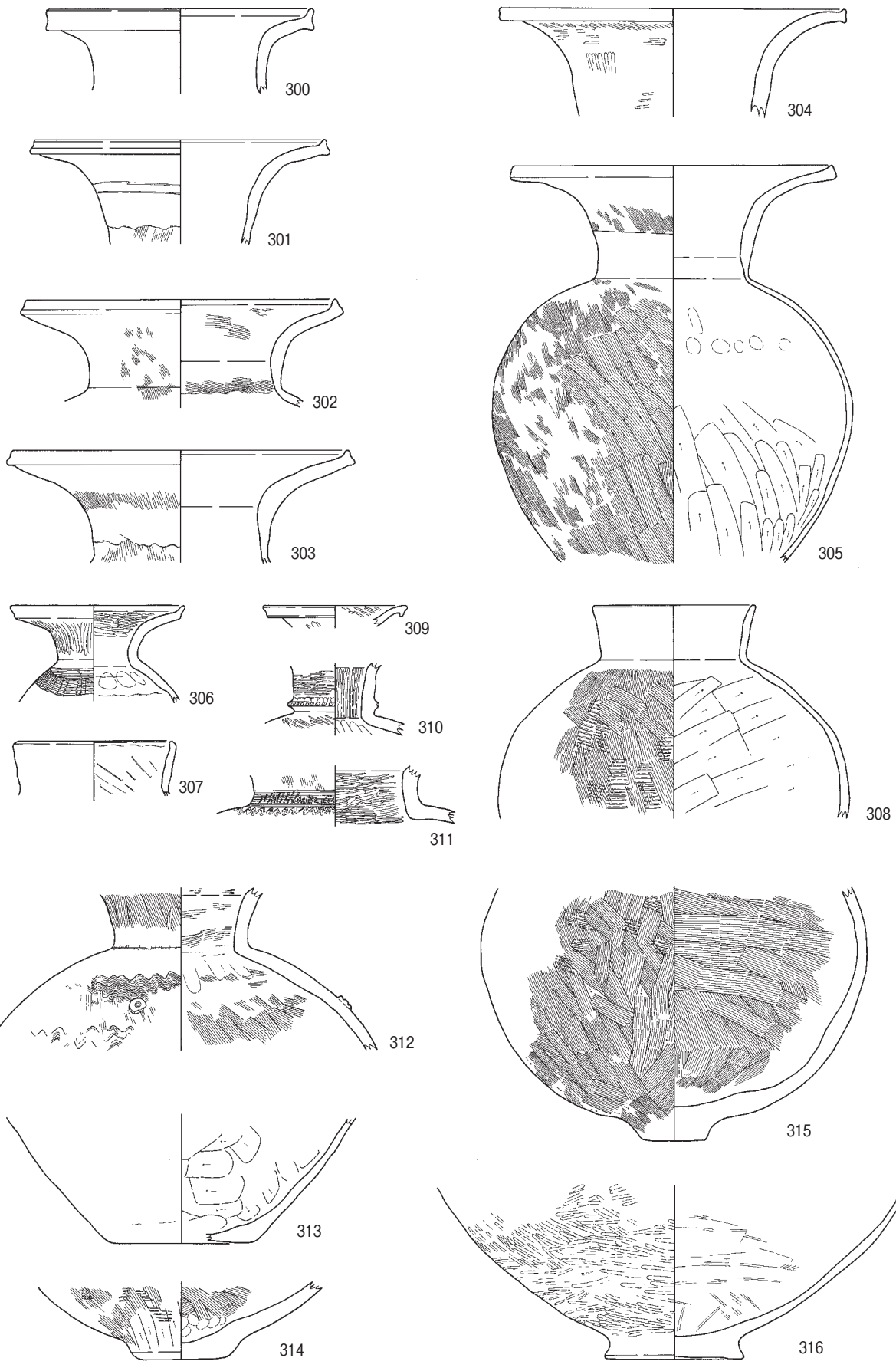

262
263
264
265
267
266
268
271
272
269
273
270
274
277
275
278
279
276
280
0
20cm

土器実測図(13)

図版28

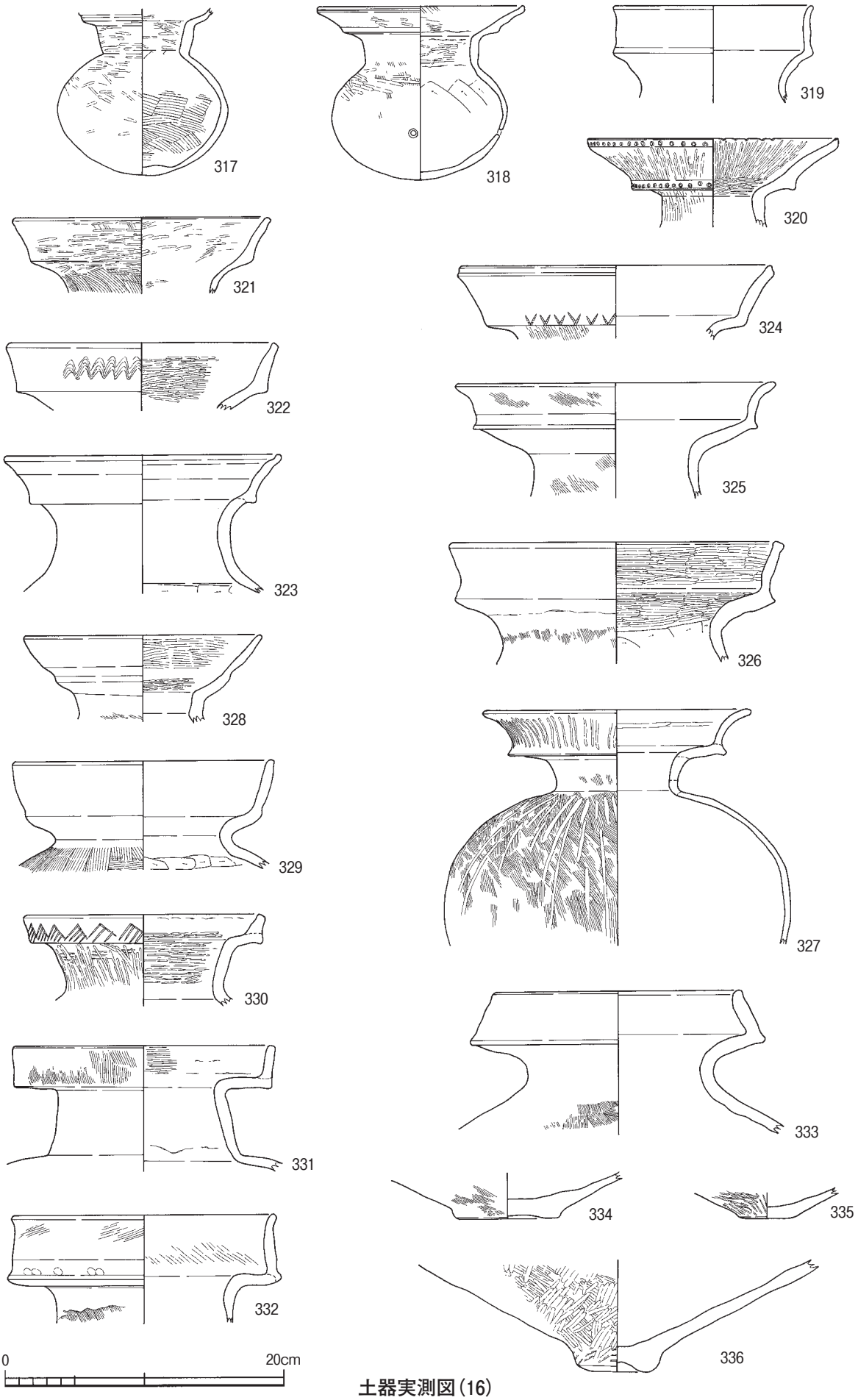


土器実測図(14)

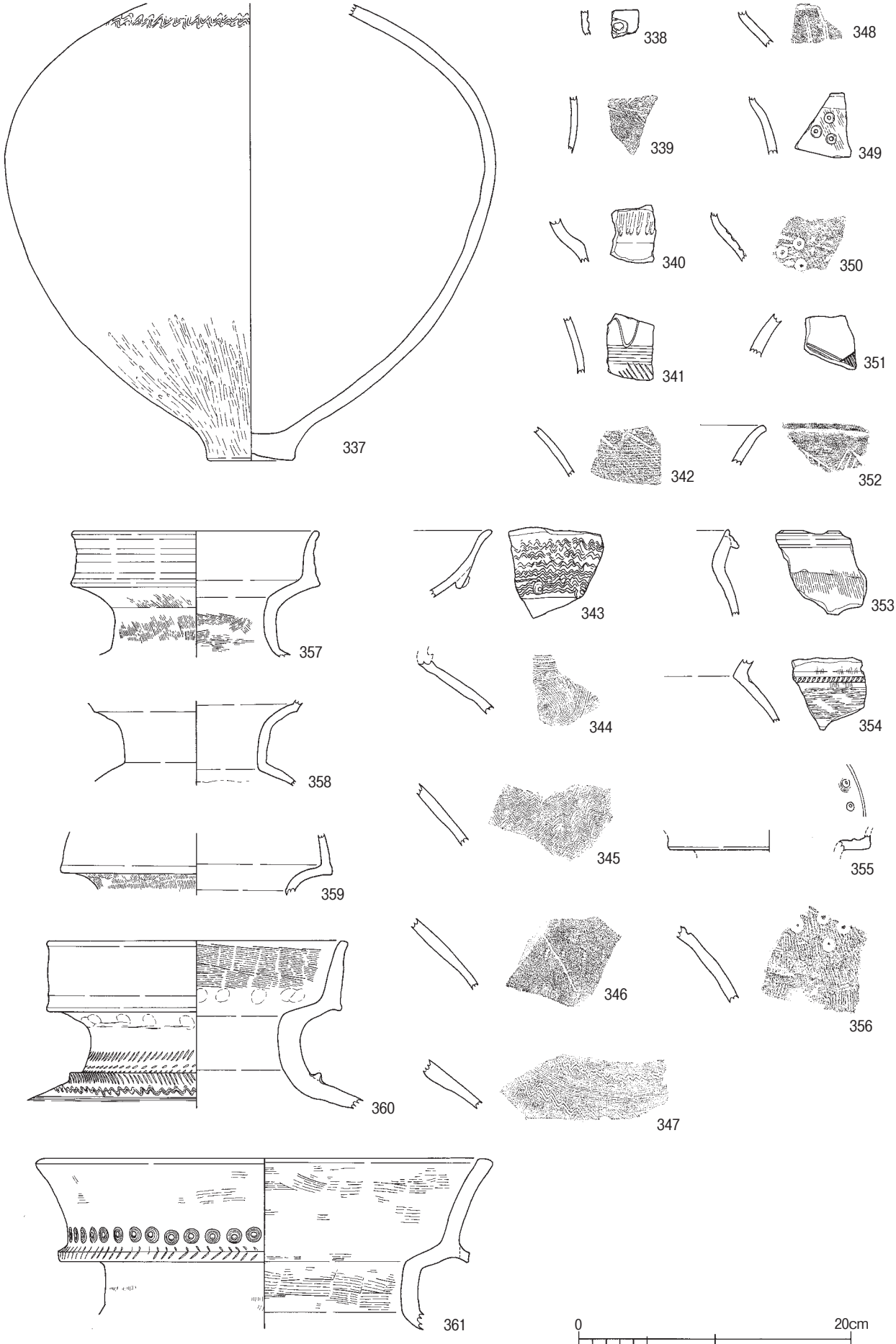

300
301
302
303
304
305
306
307
309
310
311
308
312
313
314
315
316
0
20cm

土器実測図(15)

図版30

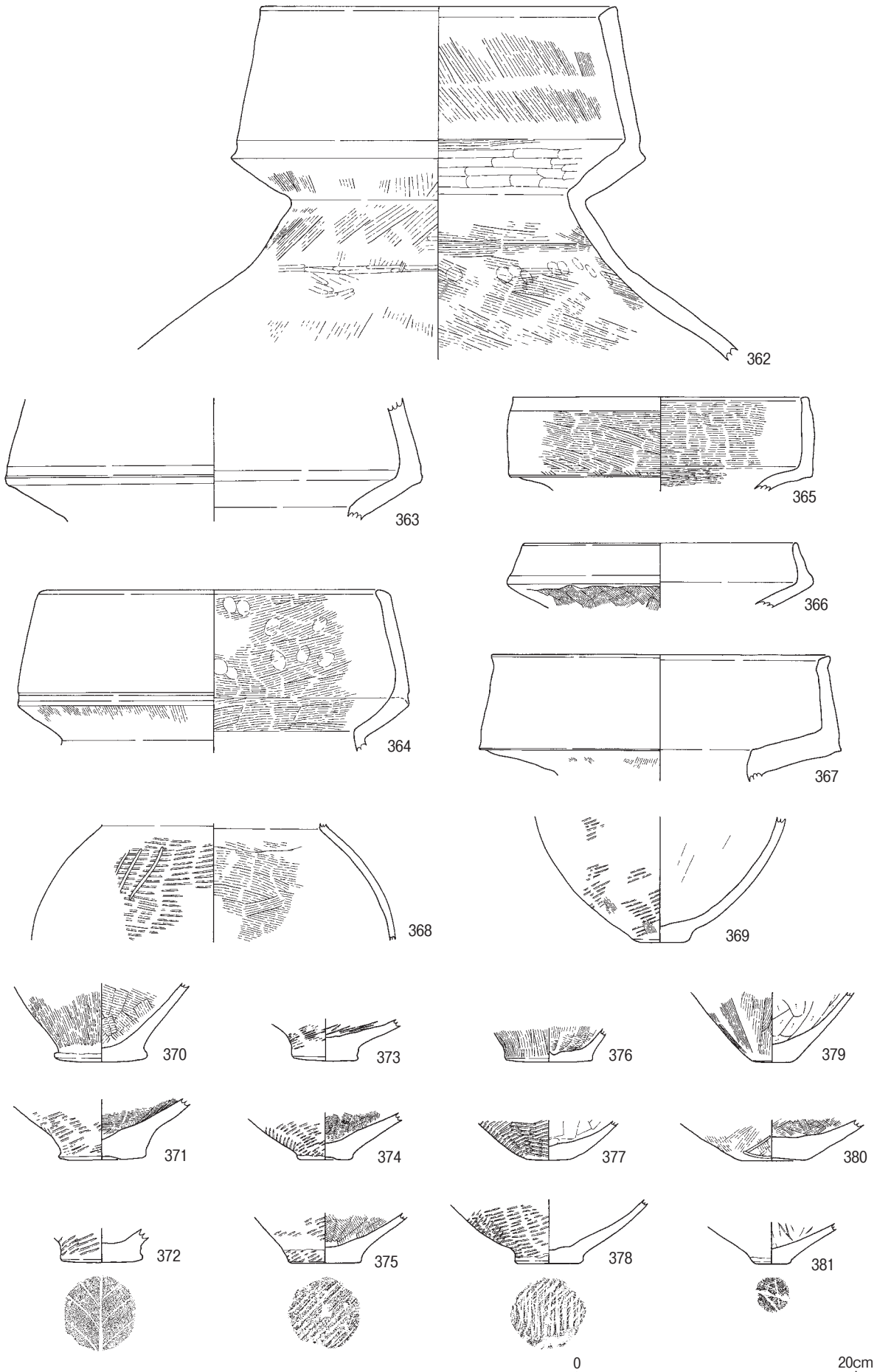


土器実測図(16)

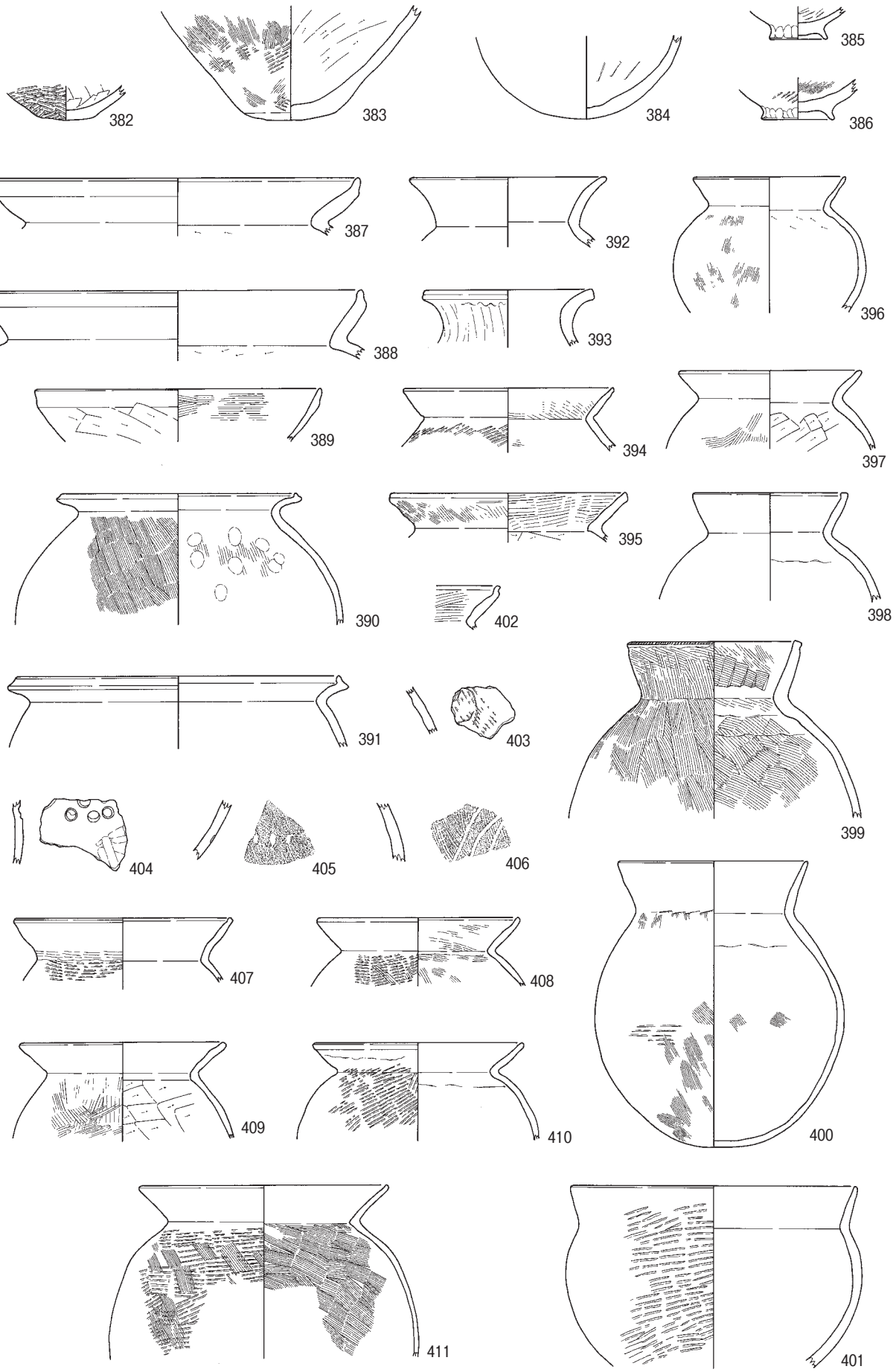

337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
0
20cm

土器実測図（17）

図版32

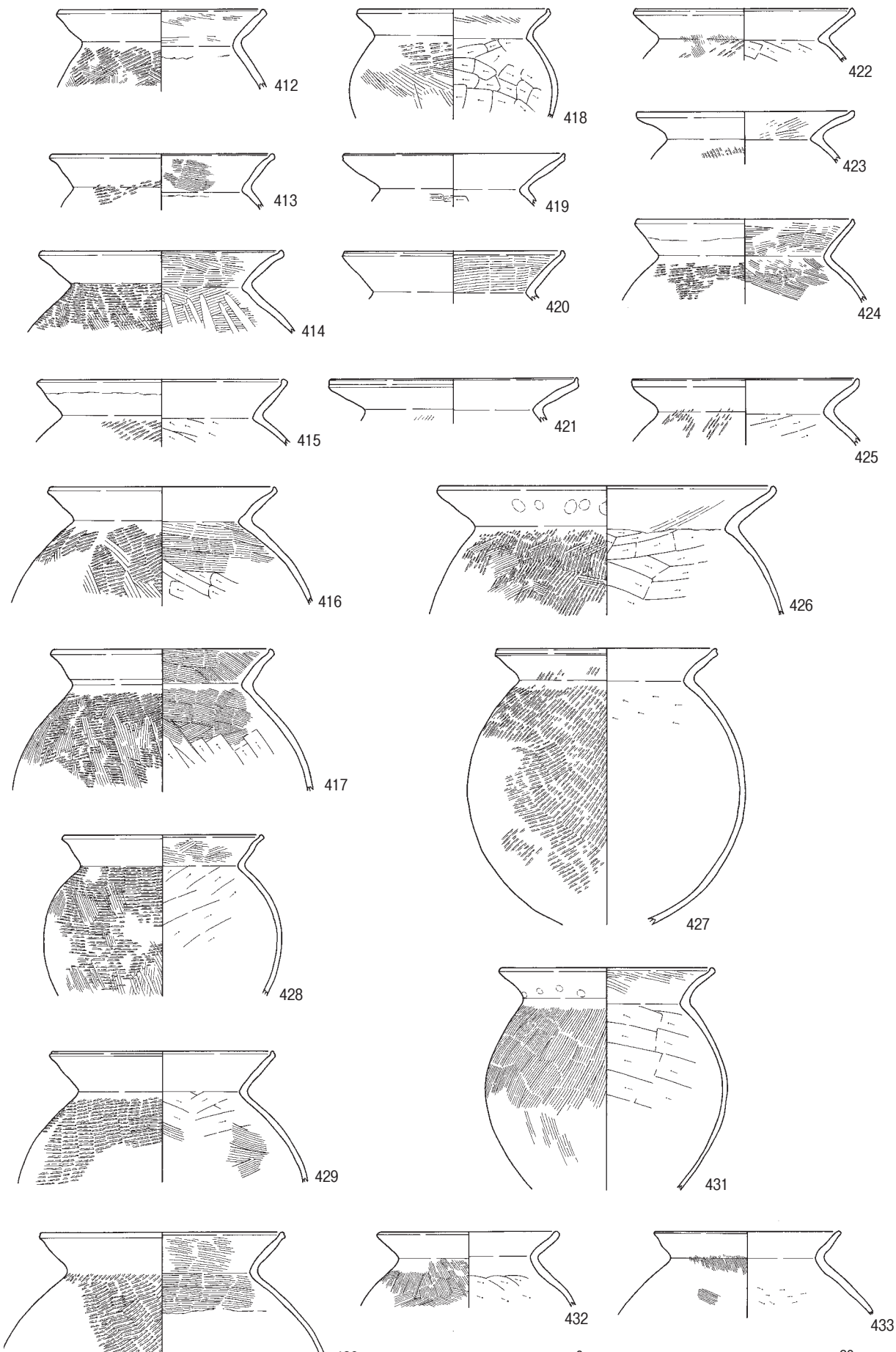


土器実測図(18)

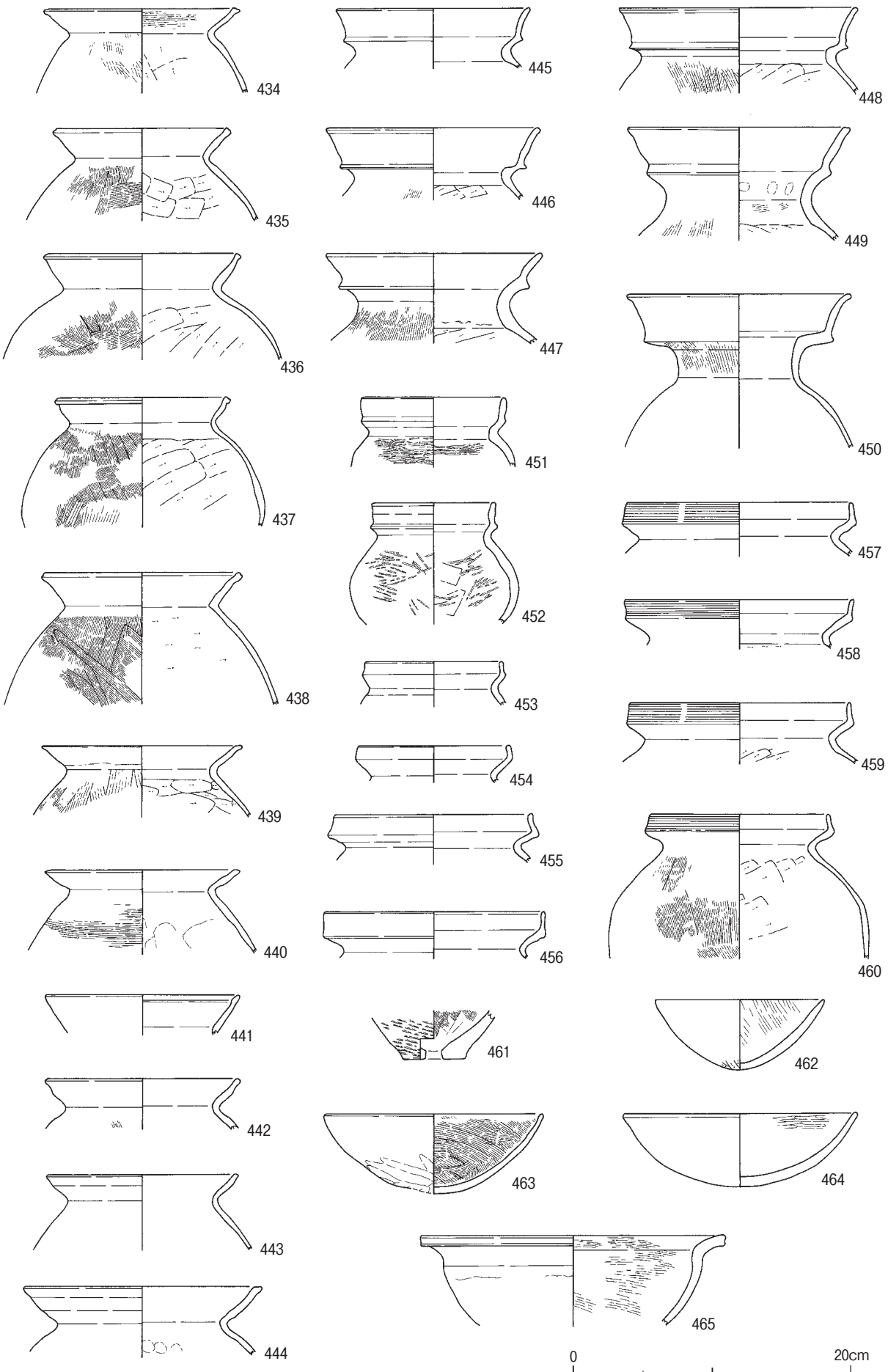

382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
0
20cm

土器実測図(19)

図版34

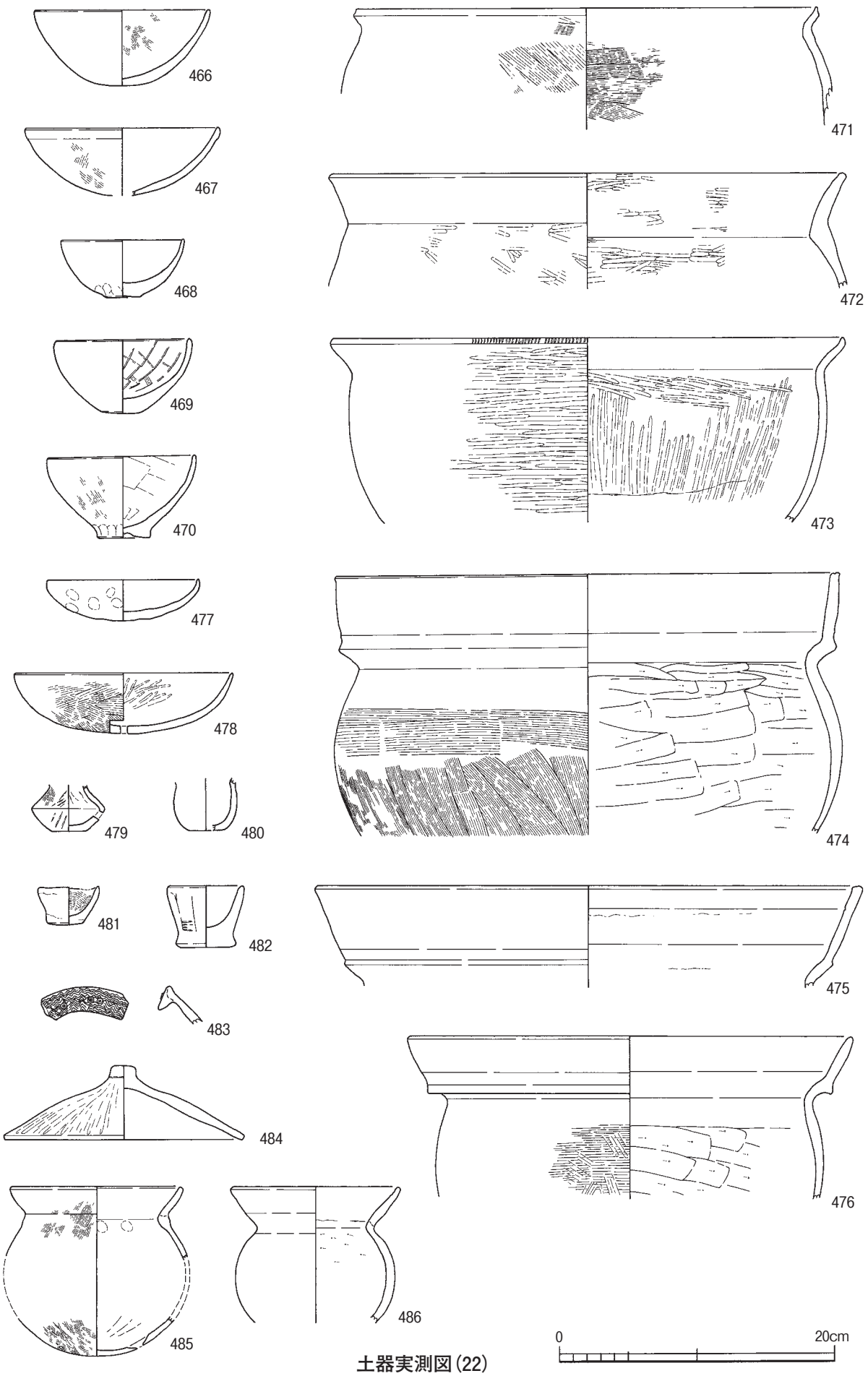


土器実測図(20)

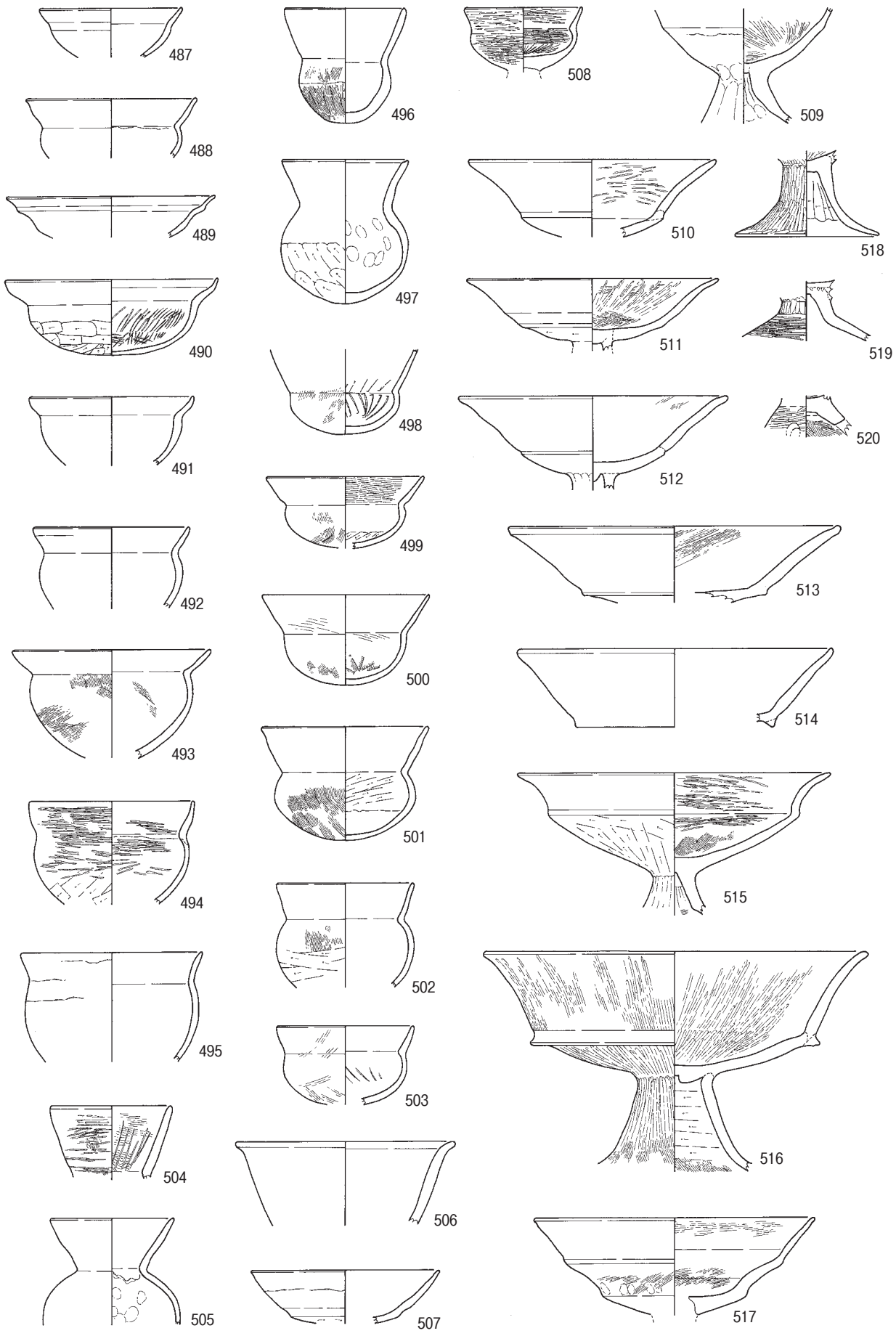

434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
451
452
453
454
455
456
461
463
448
449
450
457
458
459
460
462
464
465
0
20cm

土器実測図(21)

図版36

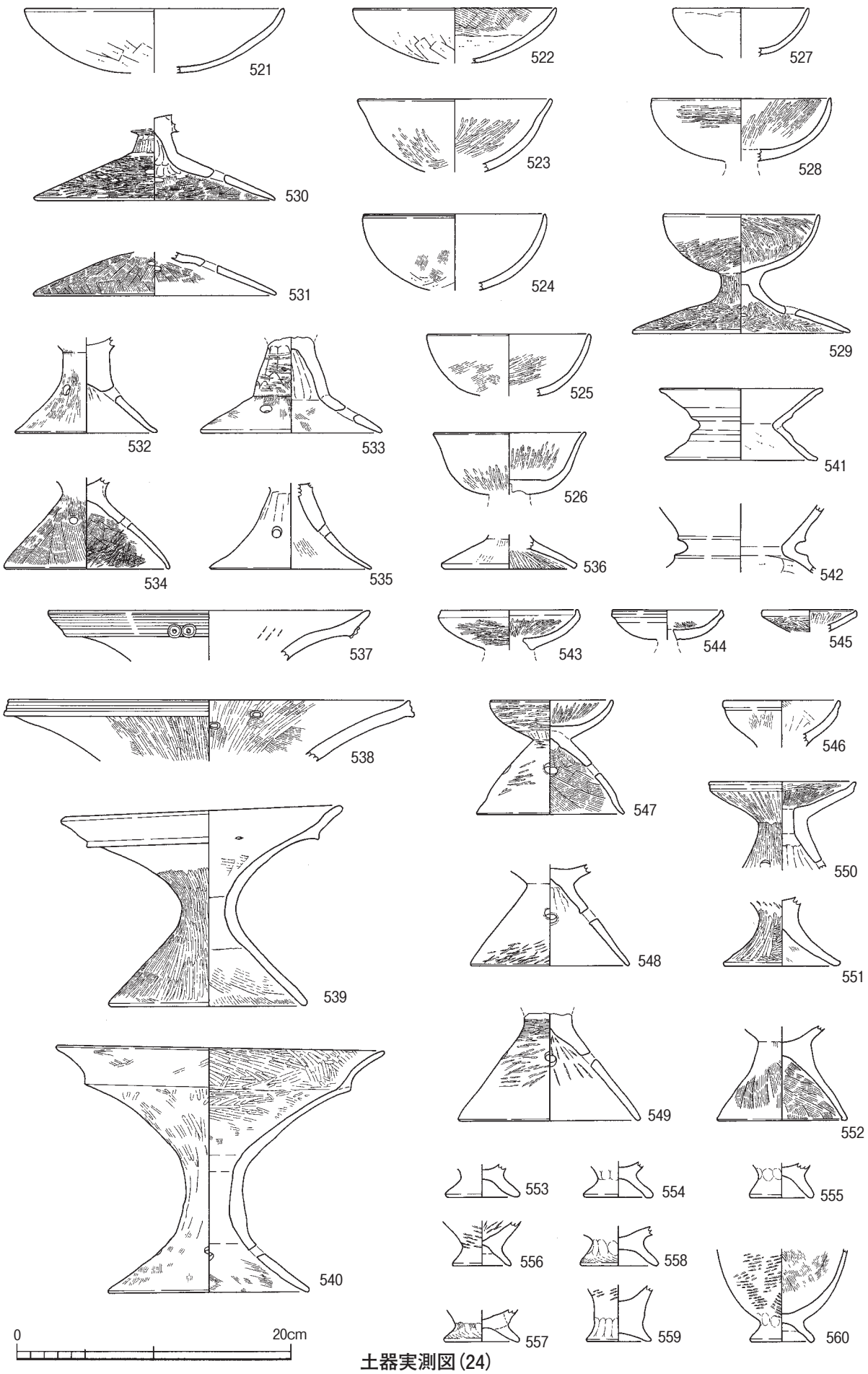


土器実測図(22)


487
488
489
490
491
492
493
494
495
504
505
496
497
498
499
500
501
502
503
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
0
20cm

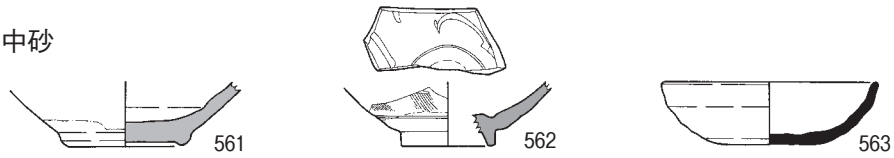
土器実測図(23)

図版38

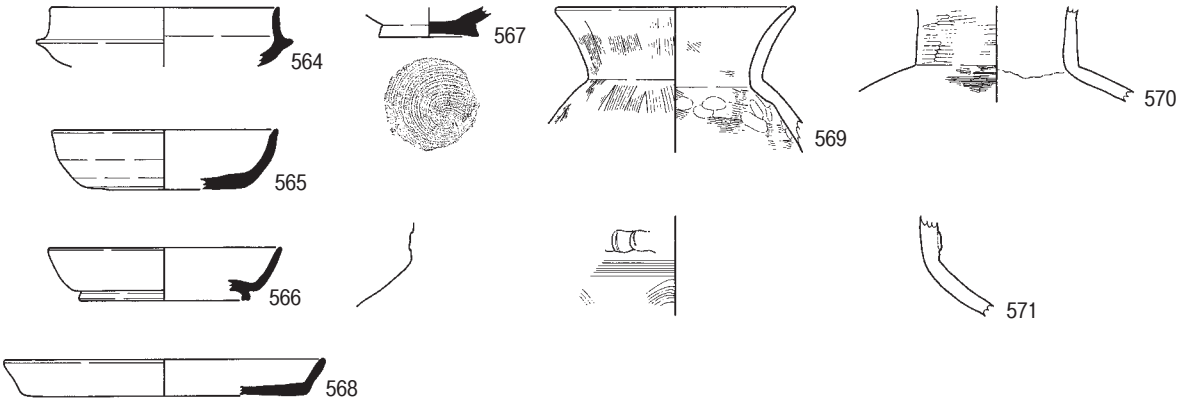


土器実測図(24)

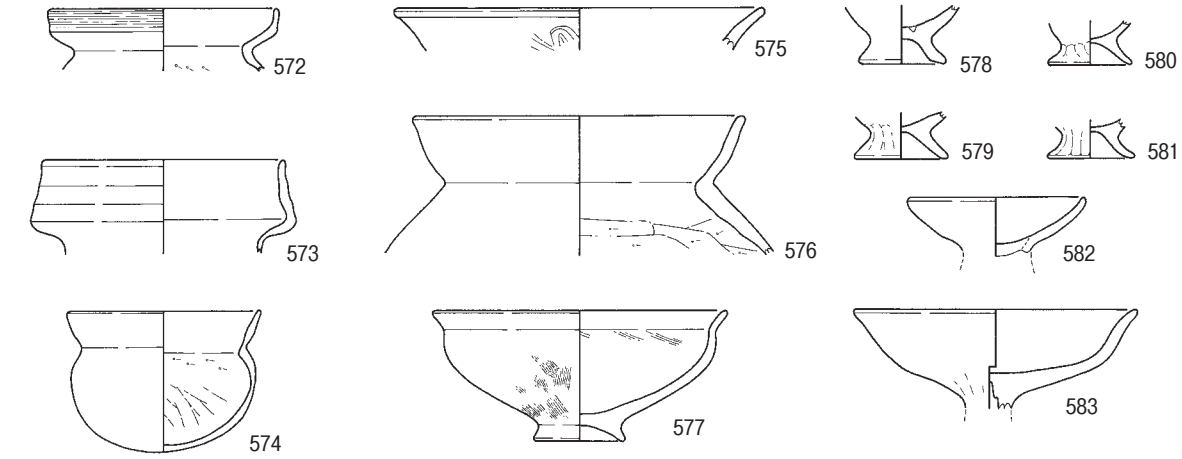
黄灰中砂



灰砂礫

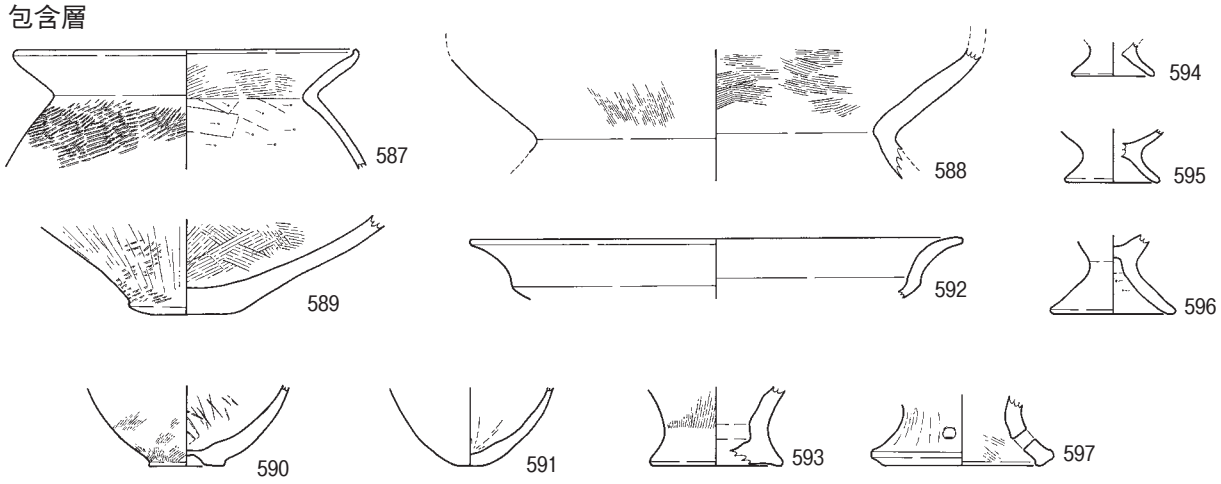


礫層



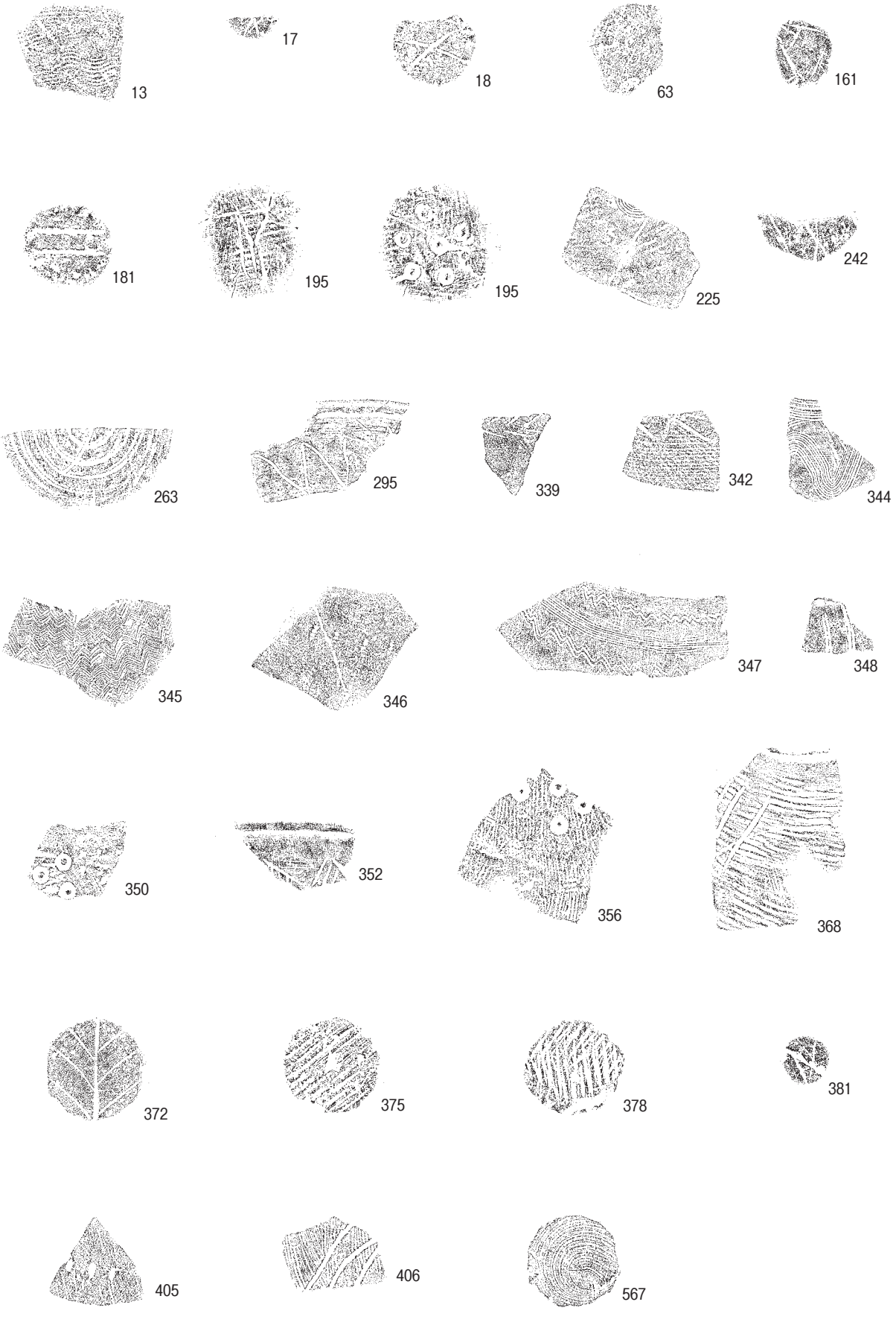
褐灰シルト

包含層

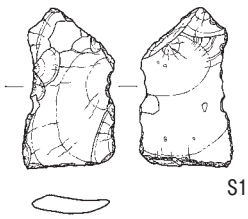


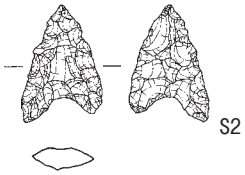
土器実測図(25)

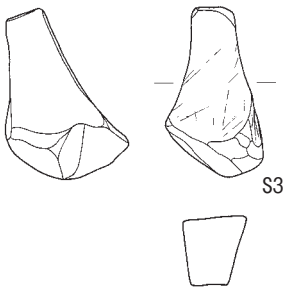
図版40

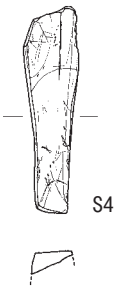


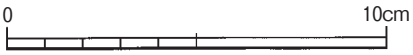
土器文様他拓影





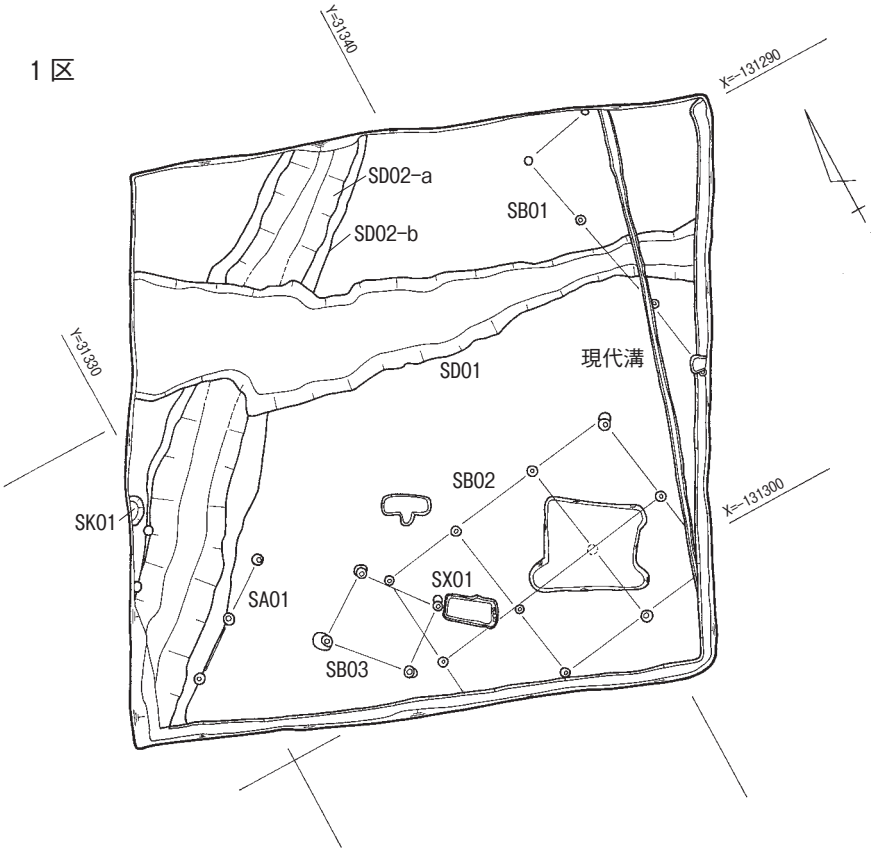


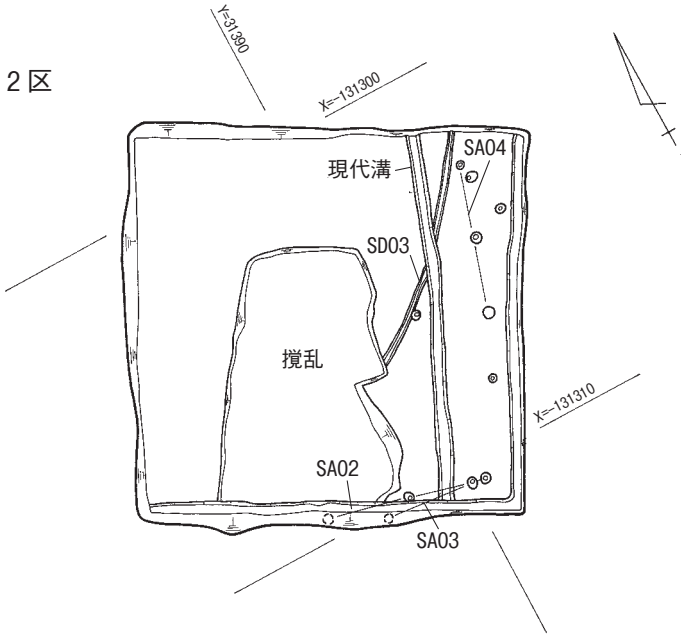




石器実測図

図版42



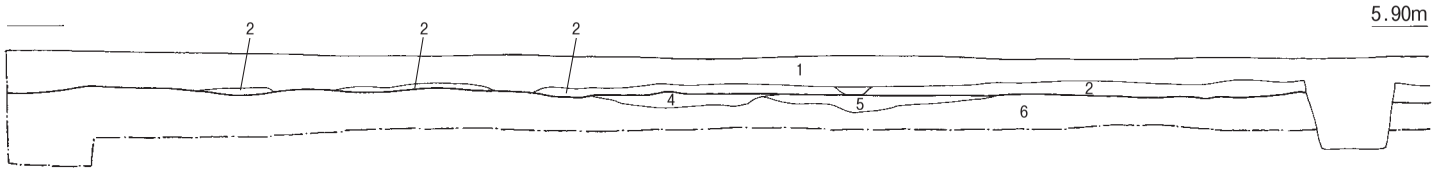


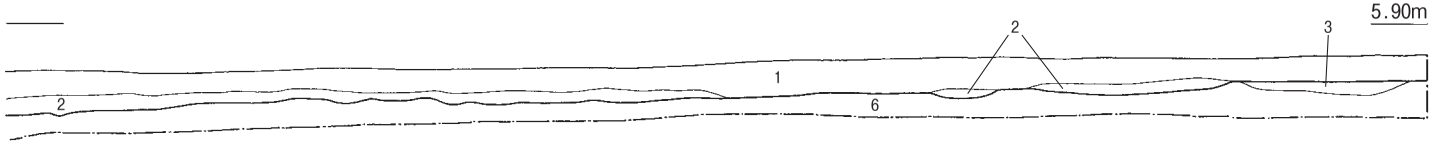
竹の前遺跡平面図

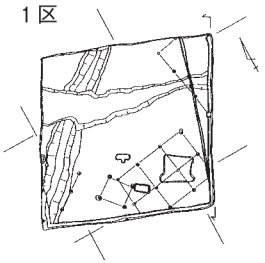
0 10m

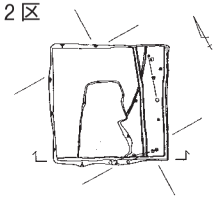
竹の前遺跡土層図

1区東壁



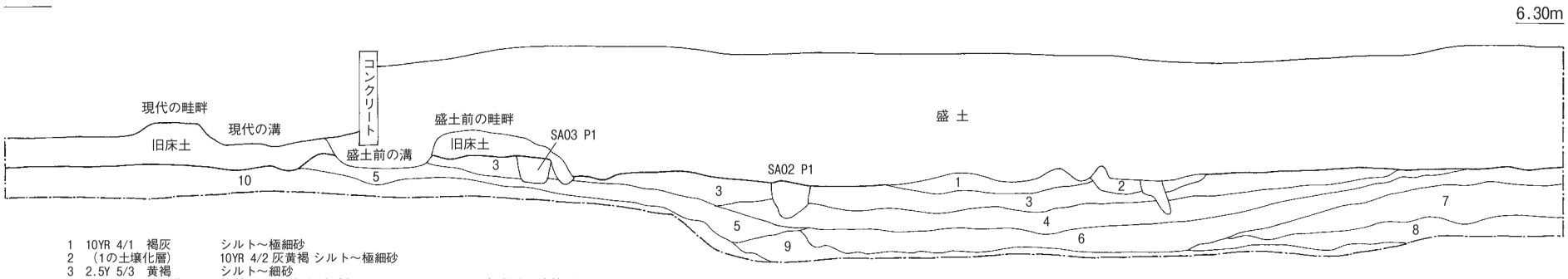




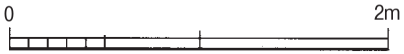


1	(現耕土)	10YR 4/2	灰黄褐	極細砂～細砂
2	(旧耕土)	10YR 5/2	灰黄褐	シルト質極細砂～細砂
3	(南北溝埋土)	10YR 5/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂～細砂
4	(SR01-a埋土)	10YR 5/3	にぶい黄褐	中砂混じりシルト～極細砂
5	(SR01-b埋土)	10YR 5/2	灰黄褐	中砂混じりシルト～細砂
6	(ベース)	10YR 4/3	にぶい黄褐	シルト混じり細砂～中砂

2区南壁

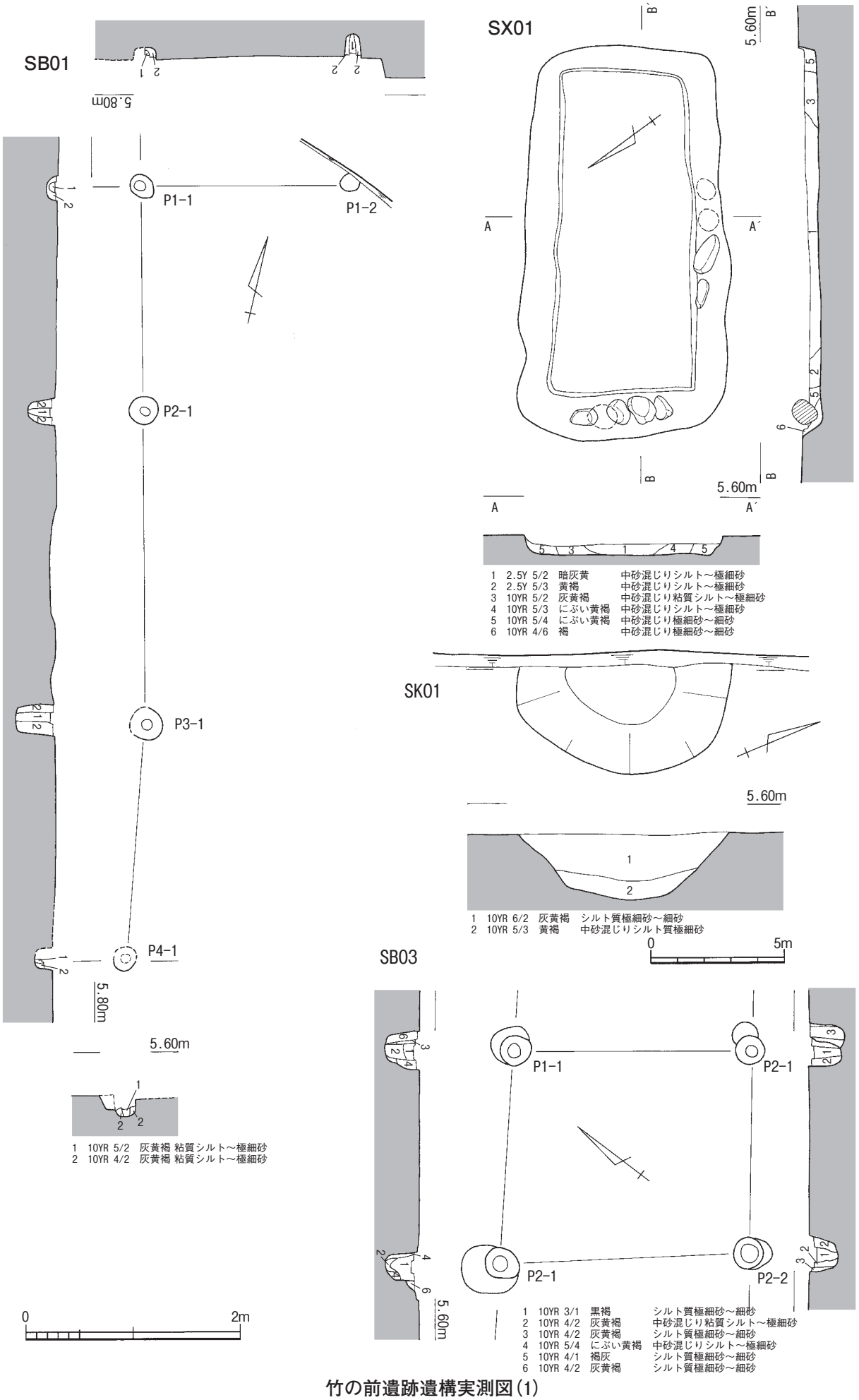


1	10YR 4/1	褐灰	シルト～極細砂
2	(1の土壌化層)	10YR 4/2 灰黄褐	シルト～極細砂
3	2.5Y 5/3	黄褐	シルト～細砂
4	2.5Y 5/2	暗灰黄	粘質シルト～極細砂（白っぽくべたっとしている）鉄分の沈着がみられる
5	2.5Y 5/4	黄褐	粘質シルト～極細砂 4層のように白っぽさはない 6層に近いがしまりが弱く粒子が粗い
6	2.5Y 4/2	暗灰黄	粘質シルト～極細砂 4層より粘性が強く鉄分の沈着も顕著である
7	10YR 4/2	灰黄褐	粘土～粘質シルト
8	10YR 3/1	黒褐	粘土～粘質シルト
9	2.5Y 5/1	黄灰	粘土～粘質シルト 下半は粒子がやや粗めで砂質 上半はほぼ粘土
10	10YR 4/3	にぶい黄褐	シルト～シルト質極細砂

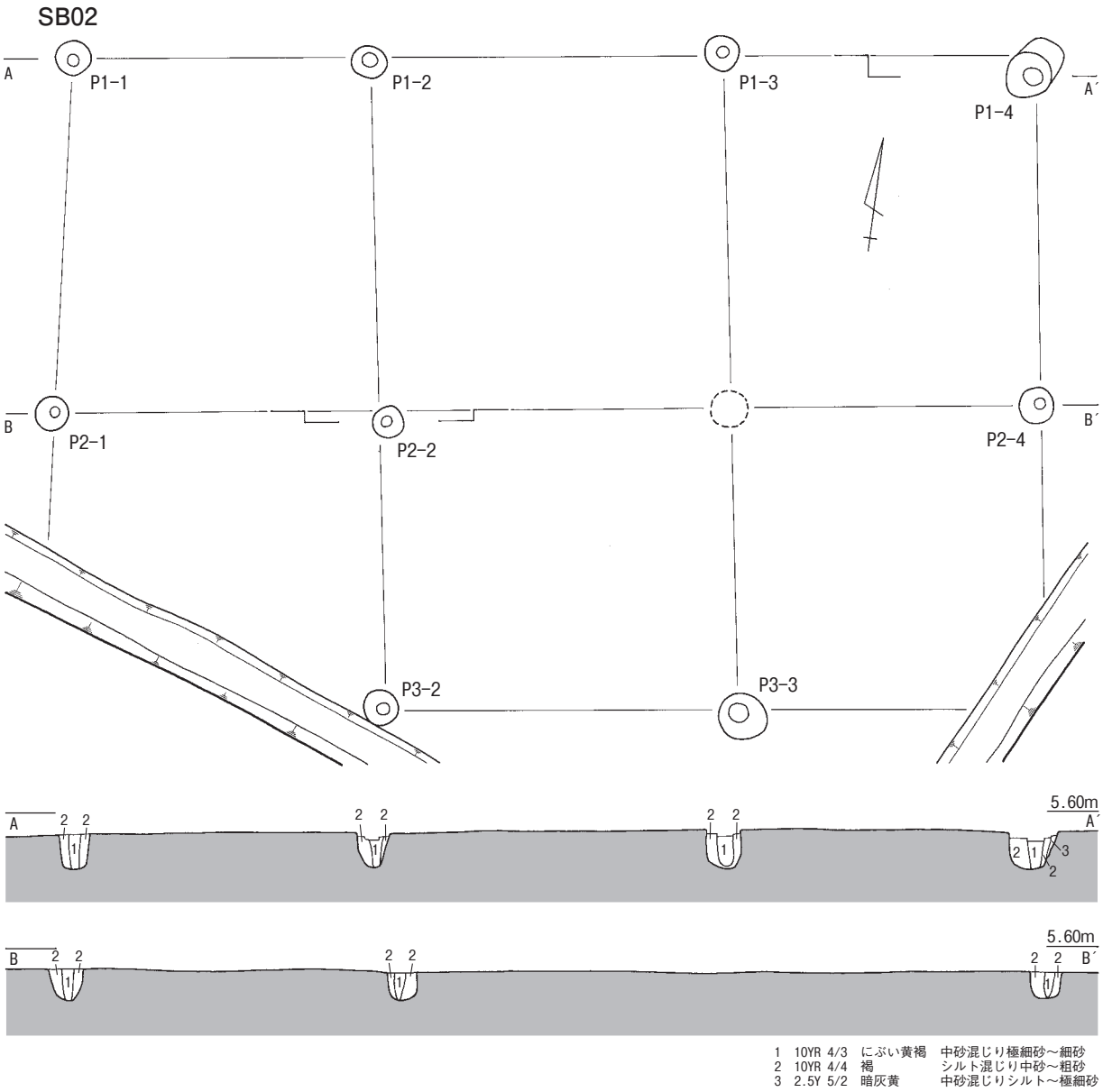


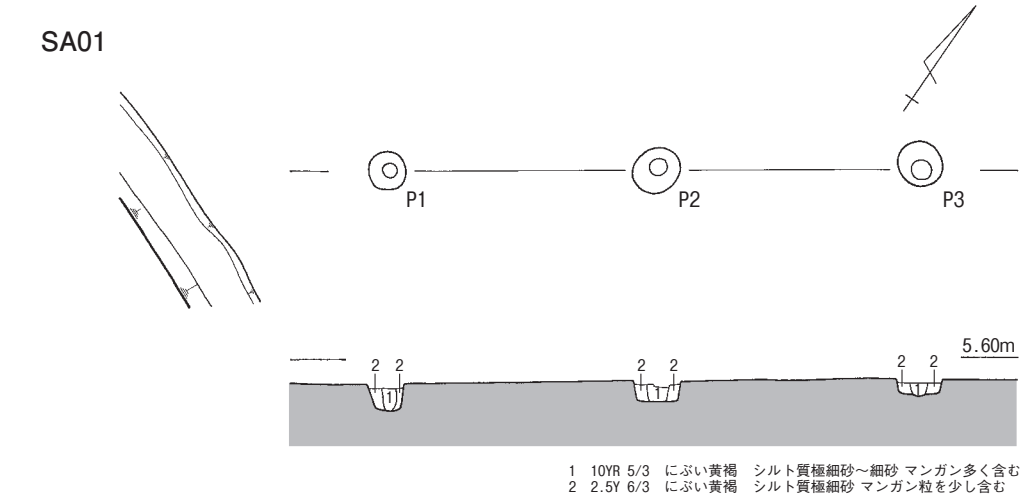
図版43

図版44



竹の前遺跡遺構実測図(1)



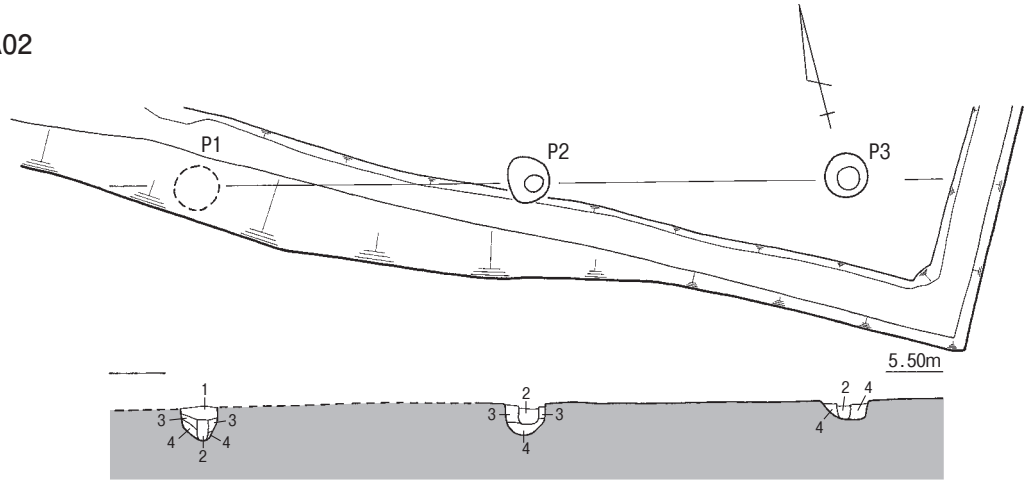


0 2m

竹の前遺跡遺構実測図(2)

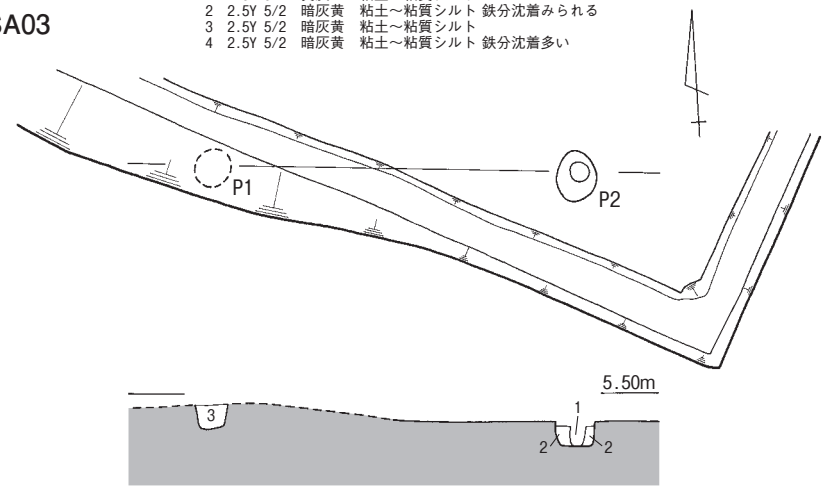
図版46

SA02



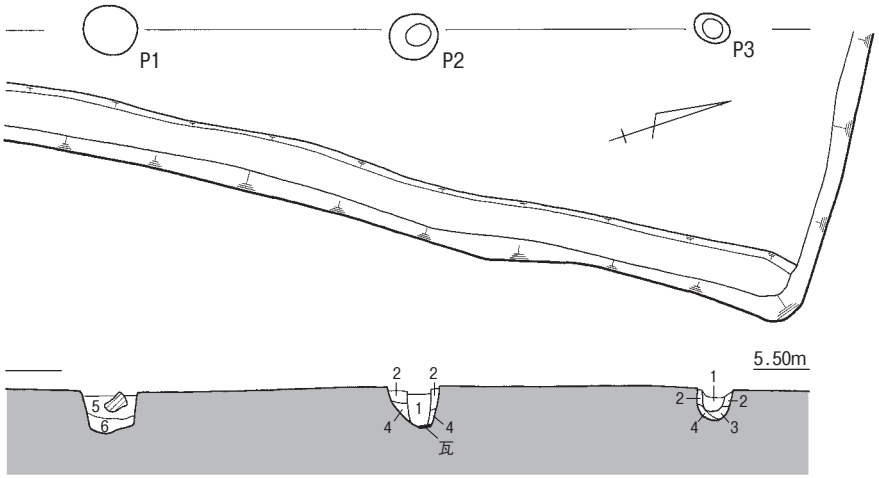
1　2.5Y 5/1　黄灰　　粘土～粘質シルト
2　2.5Y 5/2　暗灰黄　粘土～粘質シルト 鉄分沈着みられる
3　2.5Y 5/2　暗灰黄　粘土～粘質シルト
4　2.5Y 5/2　暗灰黄　粘土～粘質シルト 鉄分沈着多い

SA03



1　2.5Y 4/2　暗灰黄　粘質シルト～極細砂
2　2.5Y 5/3　黄褐　　中砂混じり粘質シルト
3　10YR 4/2　灰黄褐　シルト～極細砂

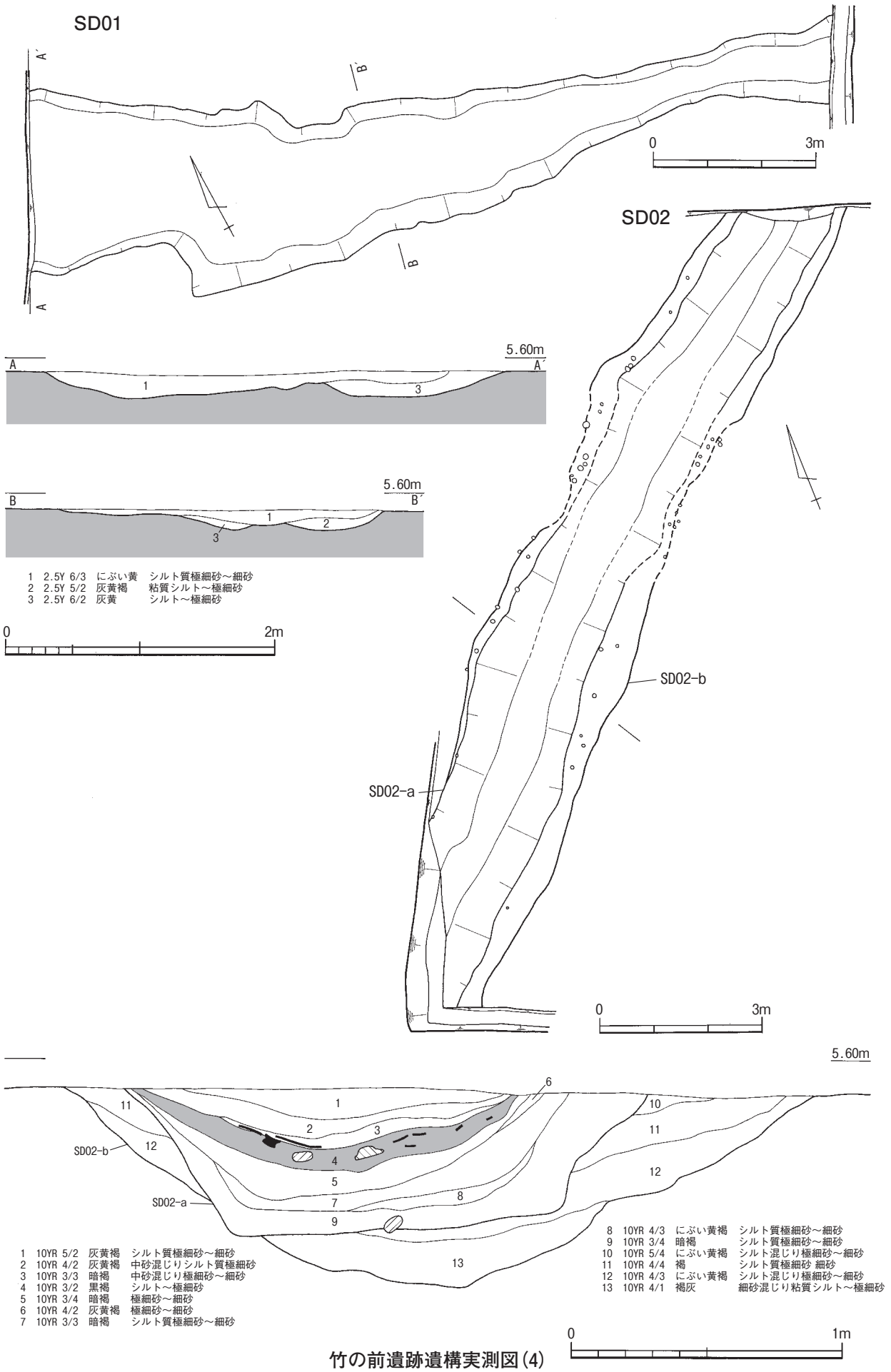
SA04



1　10YR 5/2　灰黄褐　　シルト～極細砂 ベースをわずかに含む
2　10YR 5/4　にぶい黄褐　極細砂～細砂
3　10YR 5/6　黄褐　　シルト質極細砂～細砂
4　10YR 5/2　灰黄褐　　中砂混じり極細砂～細砂
5　10YR 5/1　褐灰　　シルト～極細砂 ベースをブロック状に含む
6　10YR 5/3　にぶい黄褐　中砂混じりシルト～極細砂 ベース下半の細～中砂をわずかに含む

0　2m

竹の前遺跡遺構実測図(3)

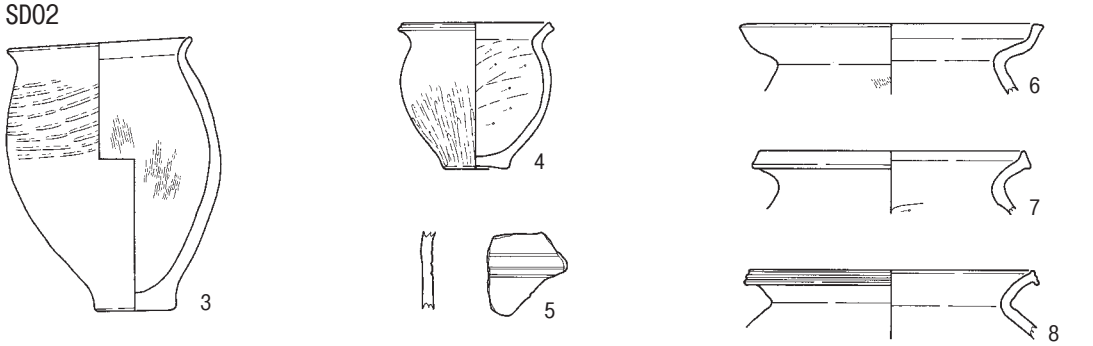


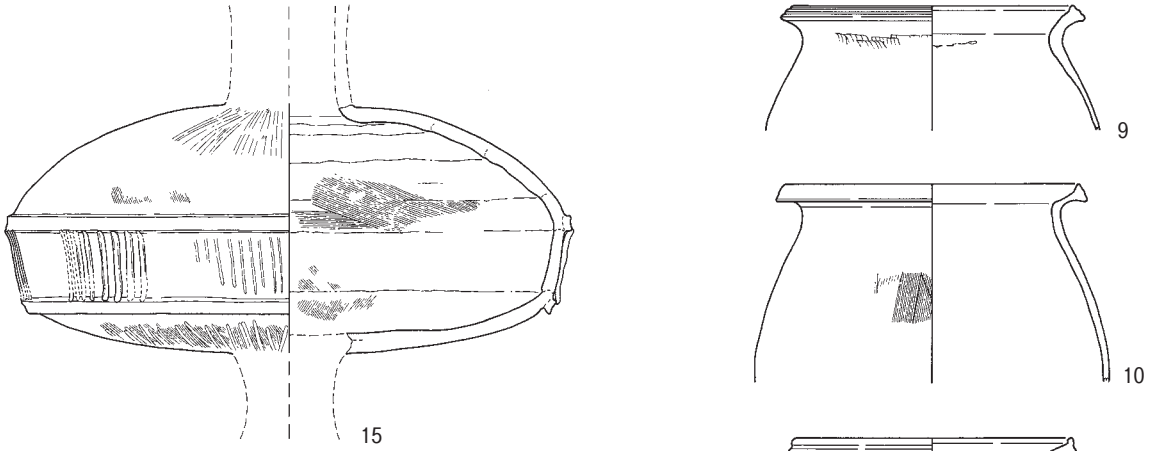
竹の前遺跡遺構実測図(4)

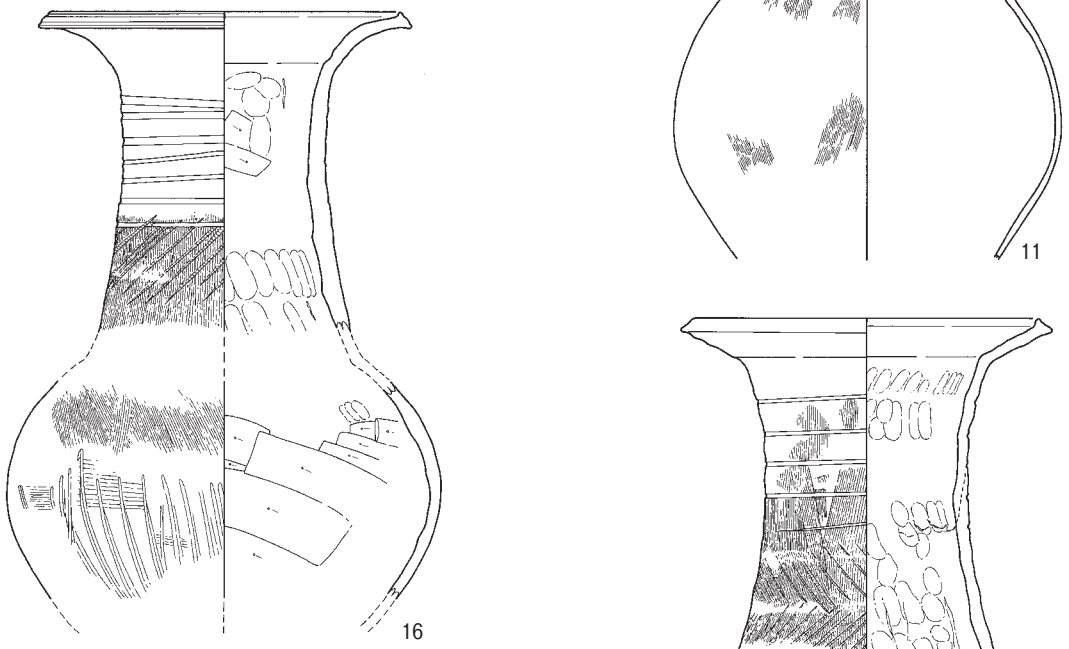
図版48

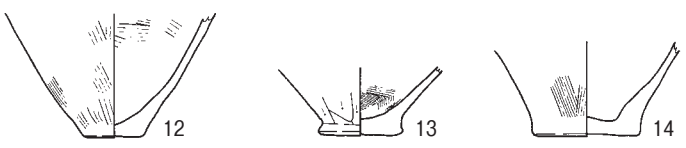
1区 SD01

1区 SD02

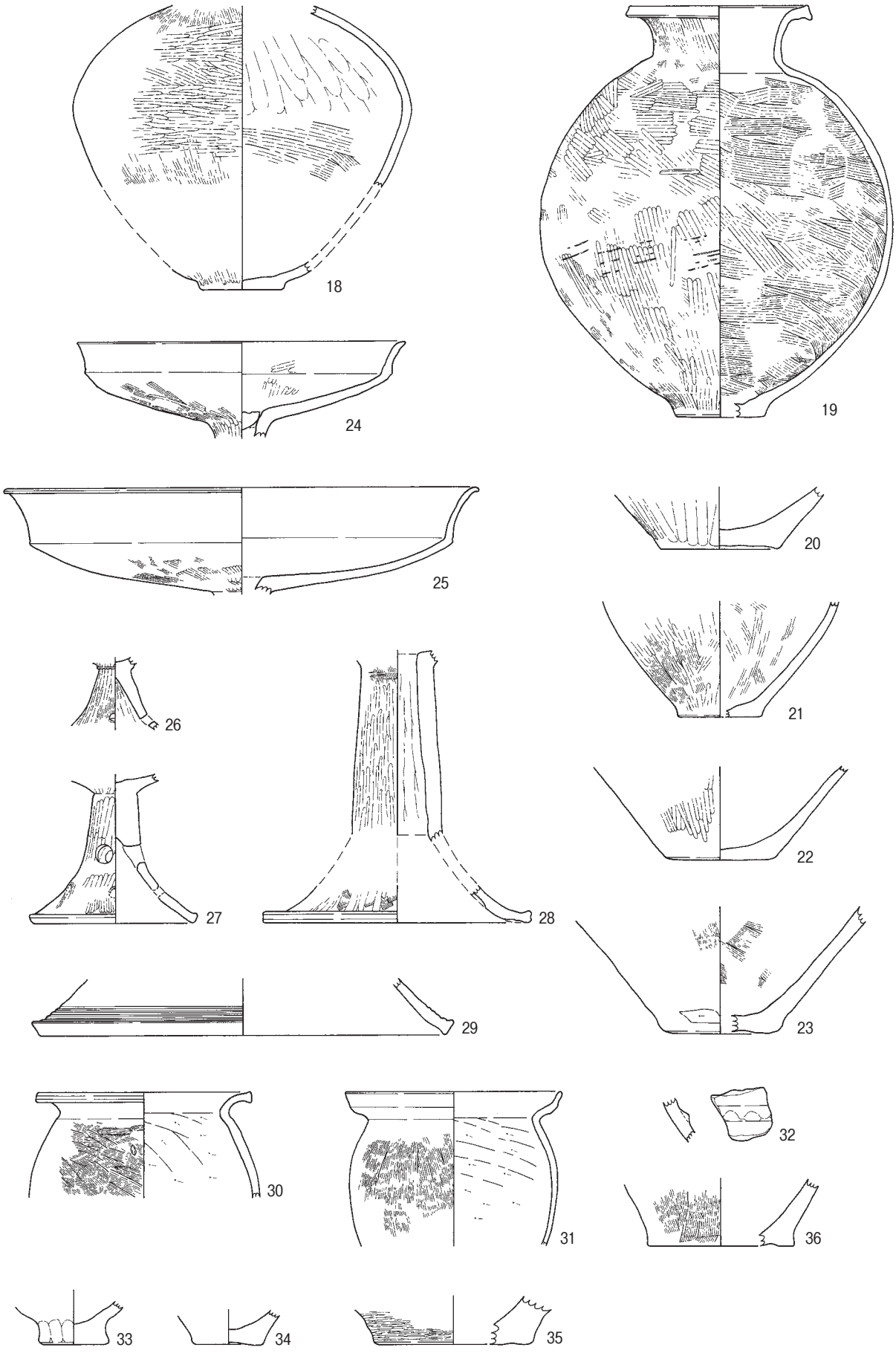








竹の前遺跡土器実測図(1)



竹の前遺跡土器実測図(2)

写　真　図　版

空中写真（南西上空から）

空中写真（南東上空から）

写真図版 2

空中写真（国土地理院撮影）

調査区空中写真（東上空から）

調査区空中写真（南上空から）

写真図版 4

調査区空中写真

飯田橋からの景色（後方は長越遺跡Ⅰ）

全景（南から）

写真図版 6

調査区全景（南から）

全景（北から）

竪穴住居跡群（南東から）

写真図版 8

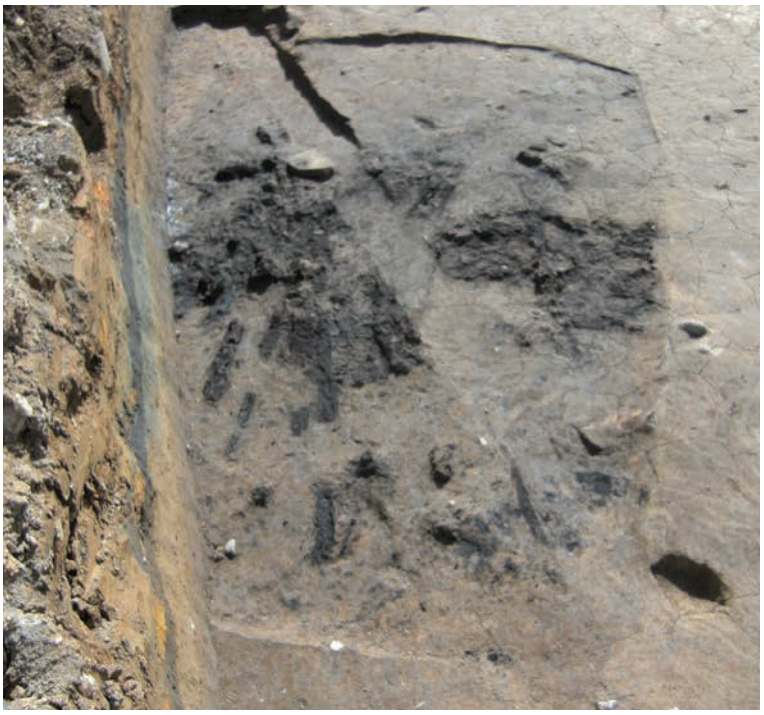
竪穴住居跡群（南から）

竪穴住居跡群（南西から）

SH01全景（西から）

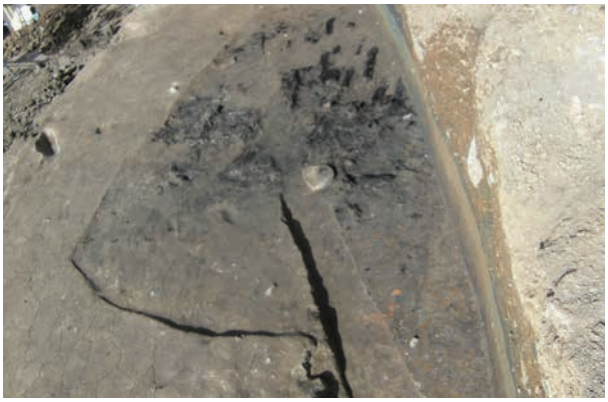
SH01全景（南から）

写真図版10



SH01検出状況
（北から）

SH01検出状況
（東から）



SH01検出状況（南から）

SH01検出状況（西から）

SH01炭化材検出状況

写真図版12

SH01低床部全景

低床部土坑・台石

台石検出状況

調査風景

調査風景

SH02全景（南から）

SH02堆積状況

壁溝堆積状況

床面土器出土状態

中央土坑堆積状況

写真図版14

SH03全景（南から）

SH03堆積状況（南から）

SH04・SH05全景（南西から）

SH04全景（南東から）

写真図版16

SH04全景（北東から）

SH04堆積状況

調査風景

遺物出土状態

中央土坑遺物出土状態（西から）

SH06・SH12全景（東から）

SH06・SH12全景（西から）

写真図版18

SH06焼土坑検出状況（東から）

SH06土器出土状態

SH06焼土坑断面（東から）

SH06焼土坑出土状態（東から）

SH06炉跡断面

SH06炭化材出土状態

SH06炭化材出土状態

SH06炭化材出土状態

SH06東壁炭化材　　SH06西壁炭化材

東壁断ち割り　　南壁断ち割り

SH06炭化材　　網代状炭化材（剥ぎ取り）

写真図版20

SH06土器出土状態（南から）

SH06土器出土状態

SH07（南から）

SH08（北から）

SH08（西から）

写真図版22

SH08土器出土状態（西から）

調査風景

SH09・10・11（南から）

SH09～11の切り合い

SH09（南から）

SH09・SH10遺物出土状態（南から）

SH10（南から）

写真図版24

SH10堆積状況（南から）

SH10土器出土状態

SH10・11の切り合い

調査風景

SH11（南から）

SH11炉跡

SH11土器出土状態

SH13（西から）

SH13（北から）

写真図版26

SK01土器出土状態

SK02アゼ（北西から）

SK03アゼ・土器出土状態（北西から）

SK02アゼ（北西から）

SD01アゼ（南から）

SD06アゼ（南から）

SD09（西から）

SD02上層アゼ（東から）

SD02土器出土状態（西から）

SD02土器出土状態（西から）

SD02土器出土状態（西から）

SR01（北から）

SR01（南から）

SR01アゼ（北から）

中央アゼ（南から）

写真図版28

旧河道土器出土状態

調査風景

SH04出土遺物

SH06出土遺物

SH09出土遺物

写真図版30

讃岐からの搬入品

山陰からの搬入品

庄内甕

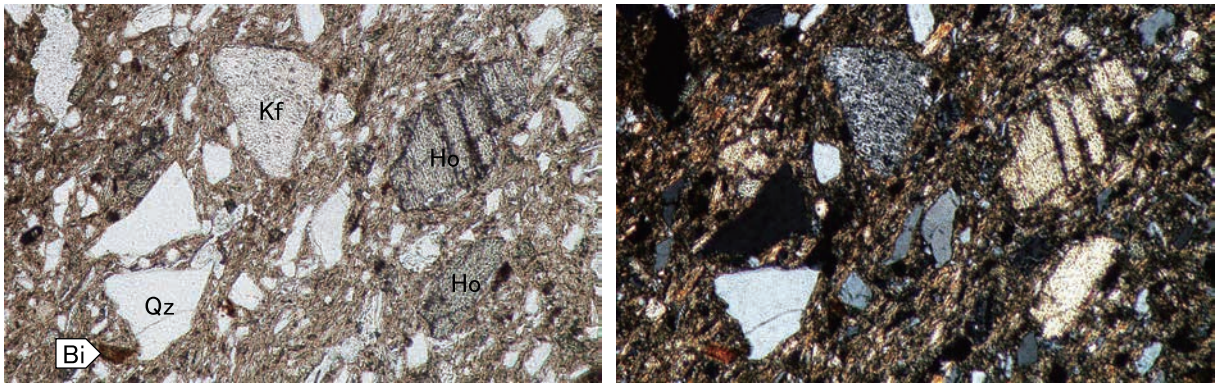
旧河道出土
（壺）

旧河道出土
（高杯・器台）

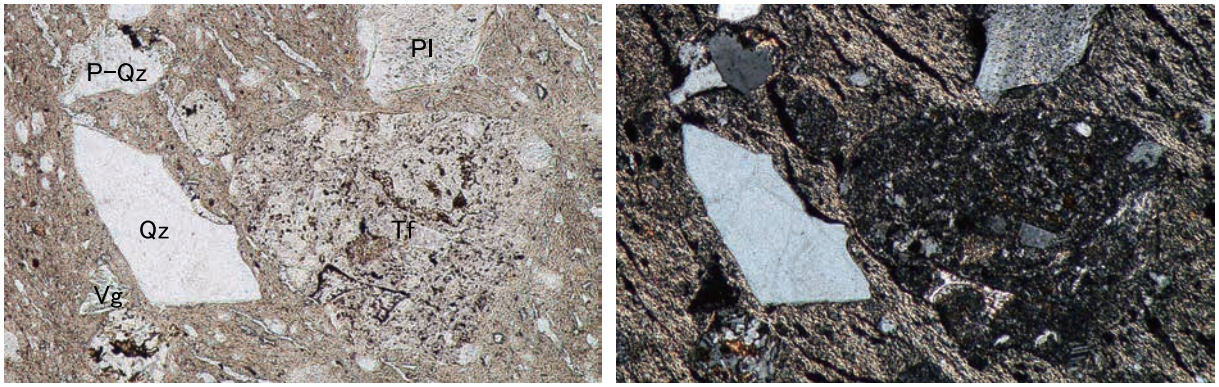
旧河道出土
（製塩土器）

写真図版32

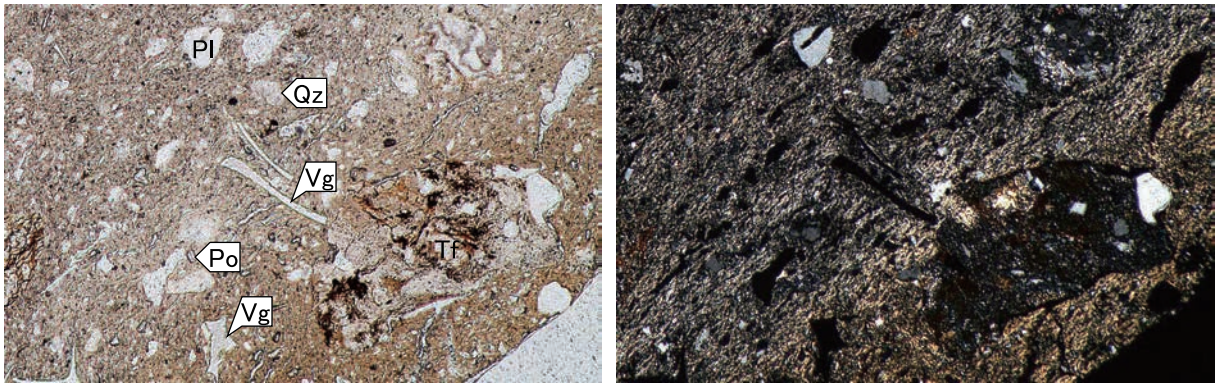
胎土薄片(1)



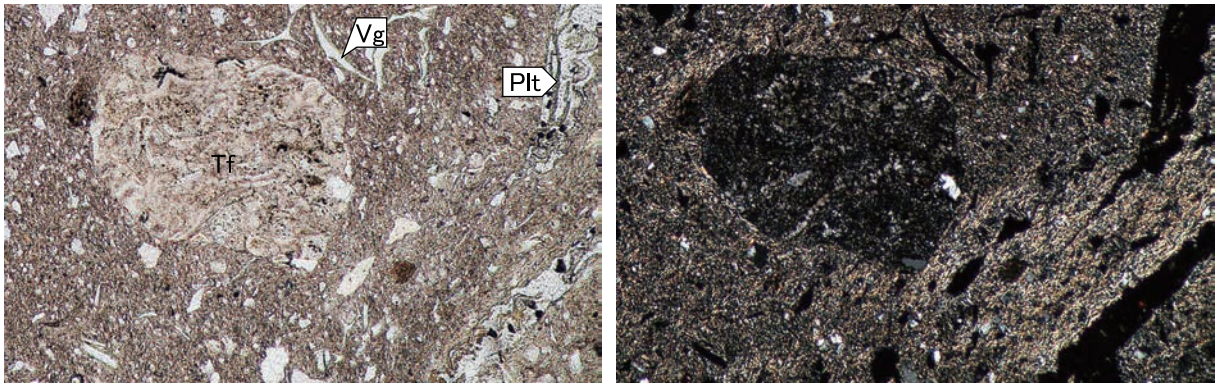
1.No.1(土師器　庄内甕　播磨産)



2.No.2(土師器　庄内甕　播磨産)



3.No.3(土師器　庄内甕　播磨産)

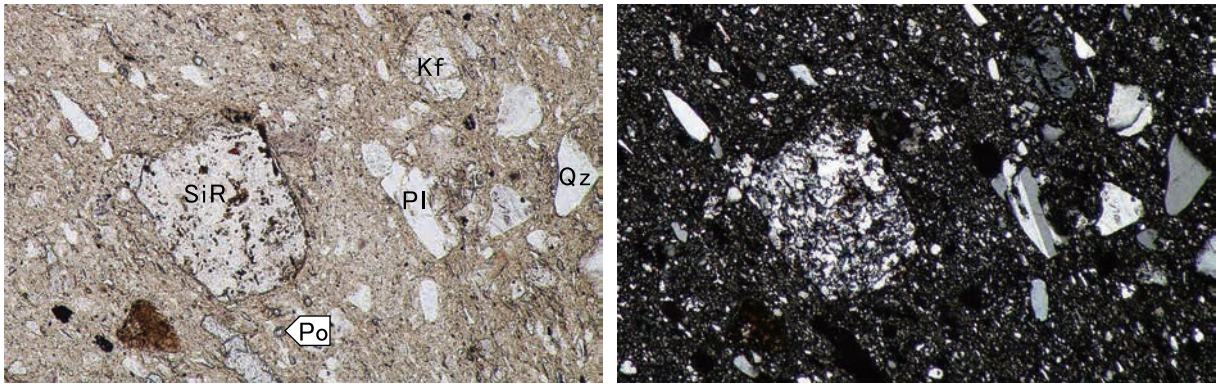


4.No.4(土師器　甕　播磨産)

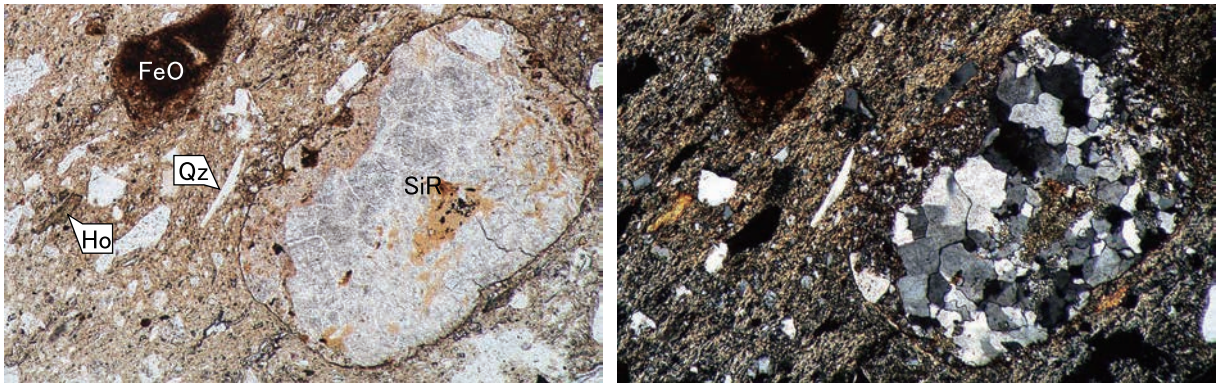
0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Tf:凝灰岩.
P-Qz:多結晶石英. Vg:火山ガラス. Po:植物珪酸体. Plt:植物片.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

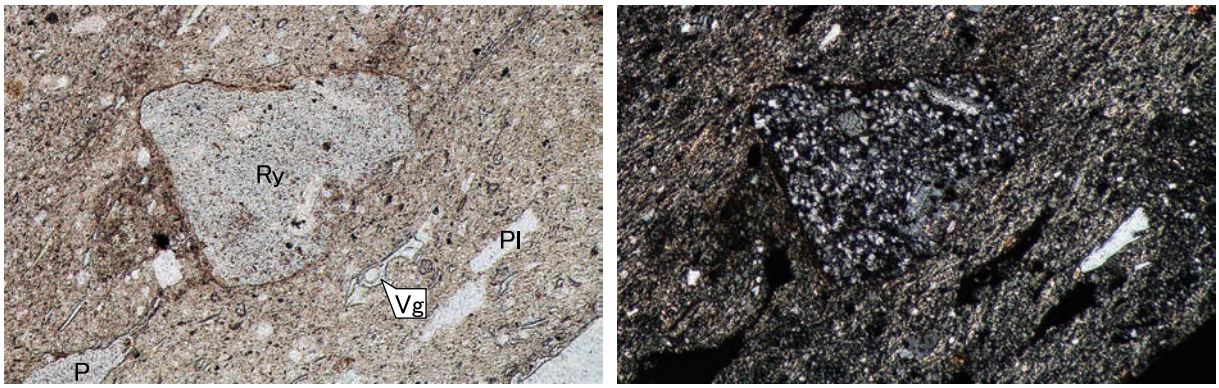
胎土薄片(2)



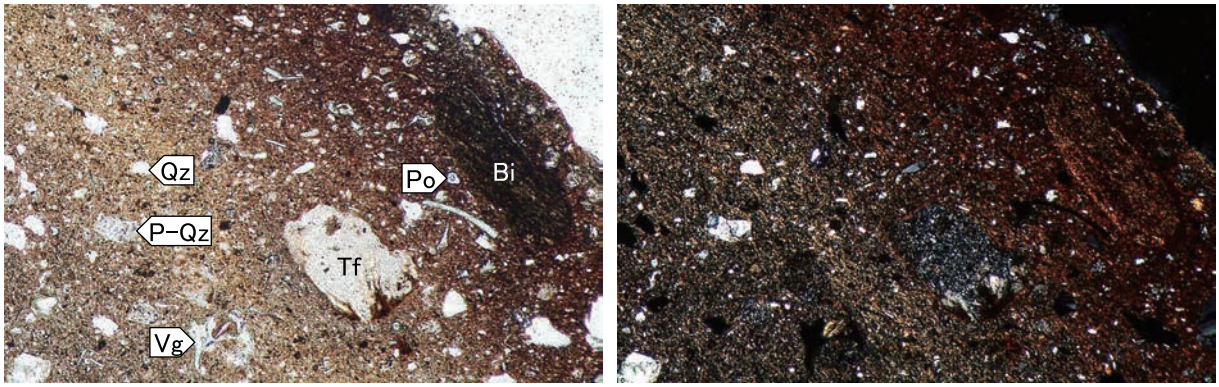
5.No.5(土師器　甕　播磨産)



6.No.6(土師器　甕　播磨産)



7.No.7(土師器　甕　播磨産)



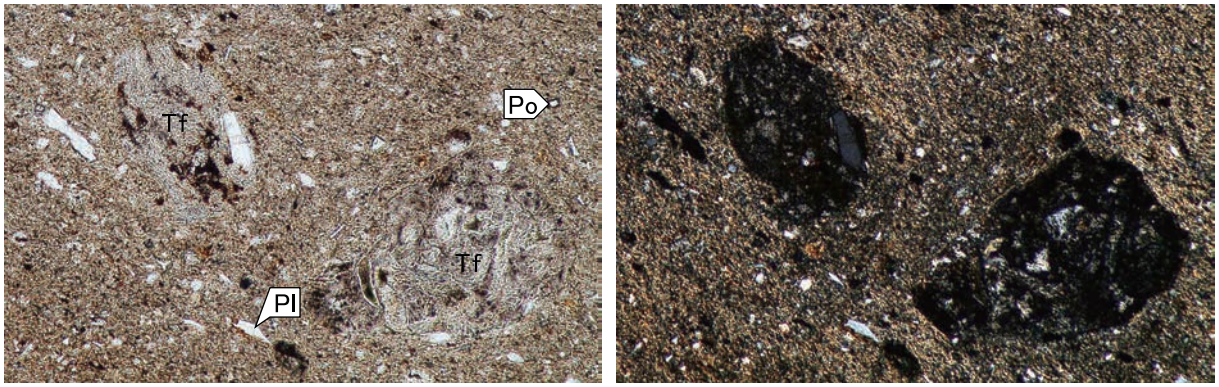
8.No.8(土師器　高杯　播磨産)

0.5mm

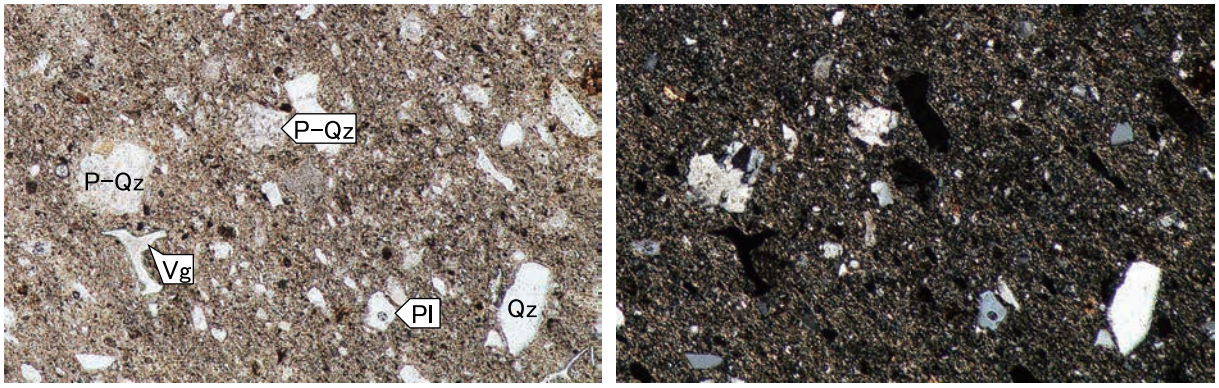
Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Tf:凝灰岩. Ry:流紋岩.
P-Qz:多結晶石英. SiR:珪化岩. Vg:火山ガラス. FeO:酸化鉄. Po:植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真図版34

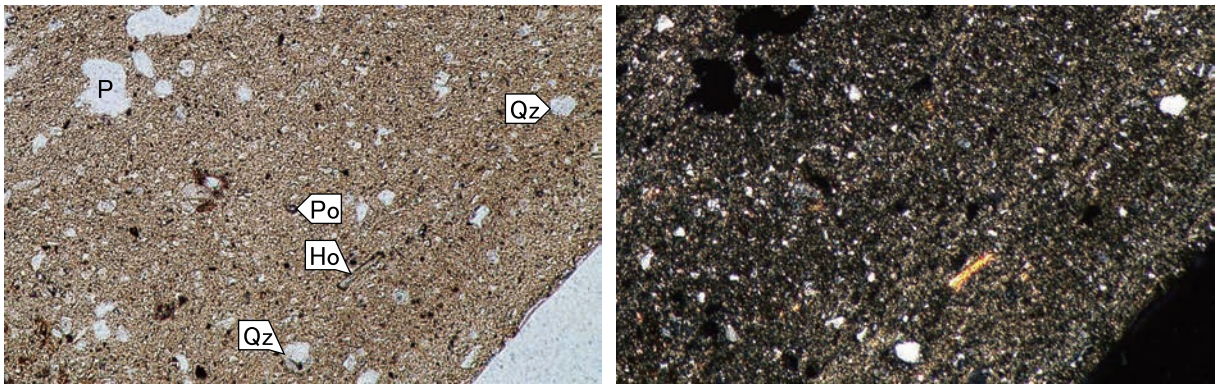
胎土薄片(3)



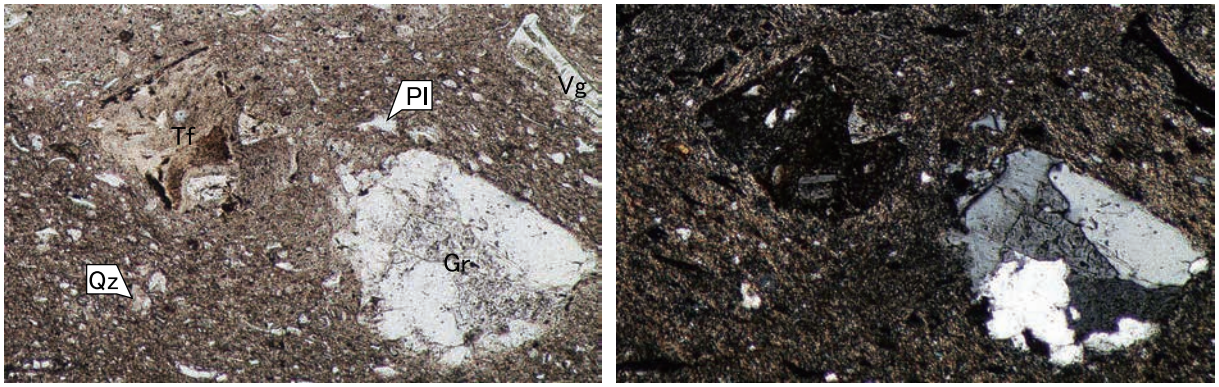
9.No.9(土師器　高杯　播磨産)



10.No.10(土師器　高杯　播磨産)



11.No.11(土師器　小形丸底壺　播磨産)

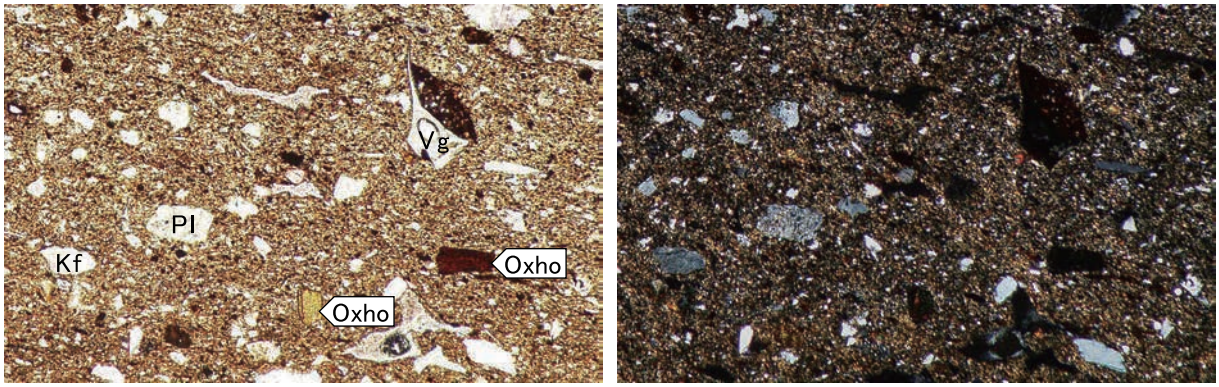


12.No.12(土師器　小形丸底壺　播磨産)

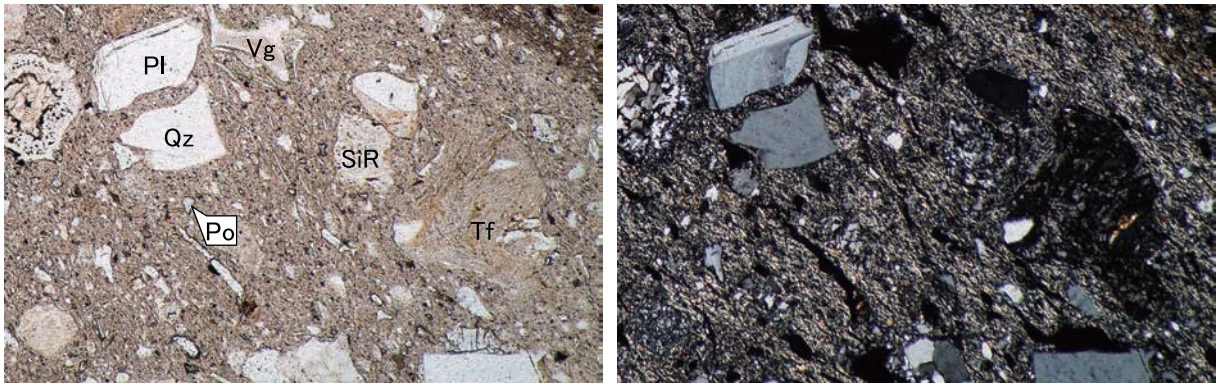
0.5mm

Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Tf:凝灰岩. P-Qz:多結晶石英. Gr:花崗岩.
Vg:火山ガラス. Po:植物珪酸体. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

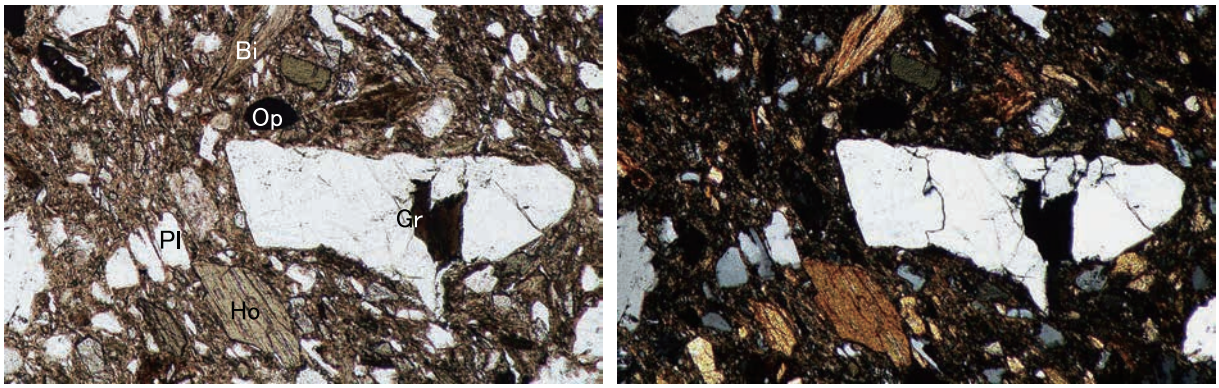
胎土薄片(4)



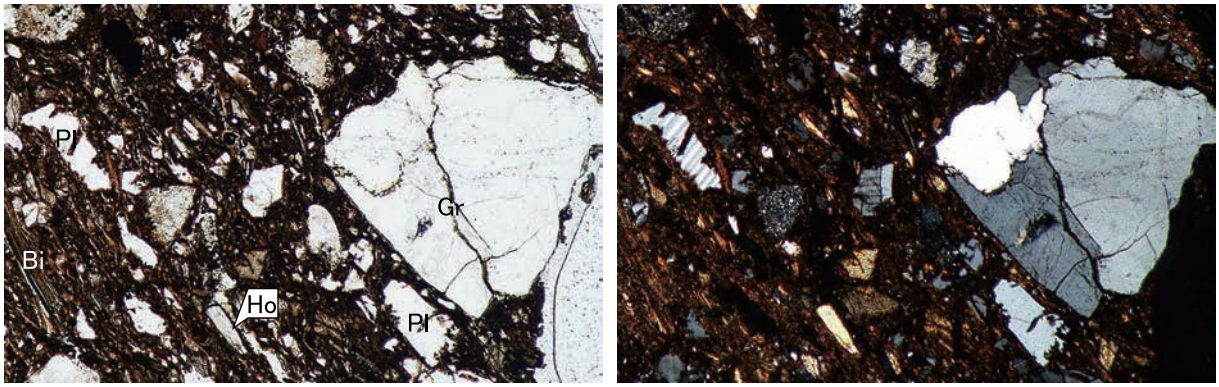
13.No.13(土師器　小形丸底壺　播磨産)



14.No.14(土師器　壺　讃岐型、播磨産)



15.No.15(土師器　壺　讃岐産)



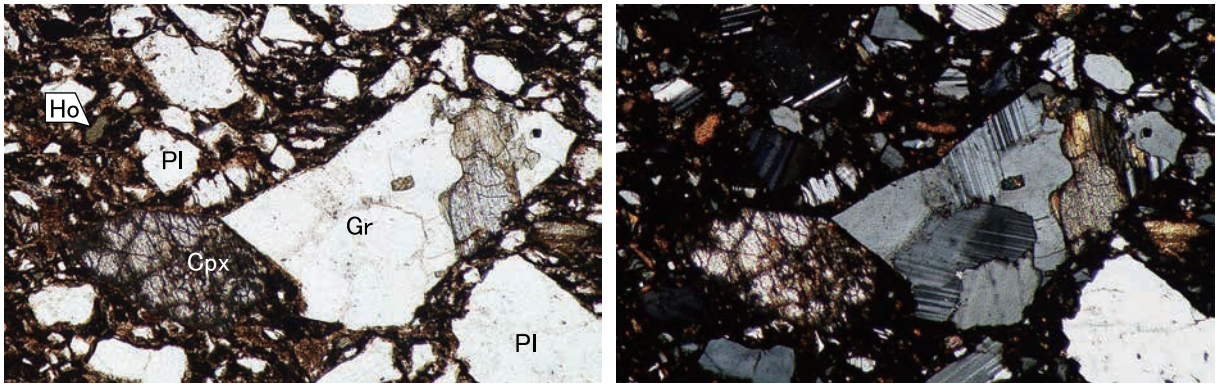
16.No.16(土師器　壺　讃岐産)

0.5mm

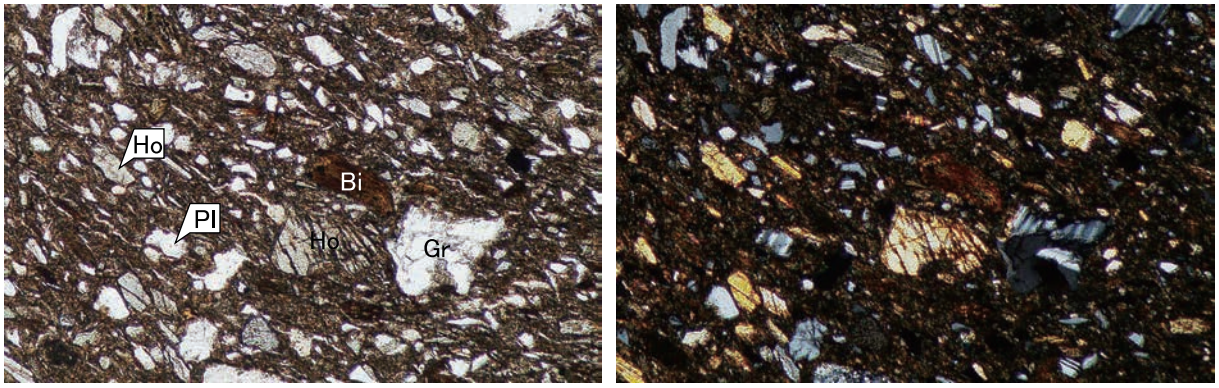
Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Oxho:酸化角閃石. Bi:黒雲母.
Op:不透明鉱物. Tf:凝灰岩. Gr:花崗岩. SiR:珪化岩. Vg:火山ガラス. Po:植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真図版36

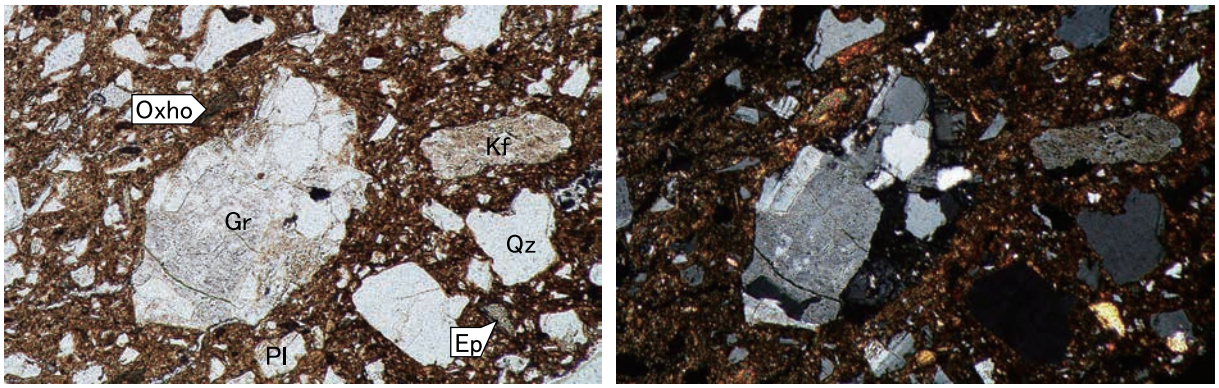
胎土薄片(5)



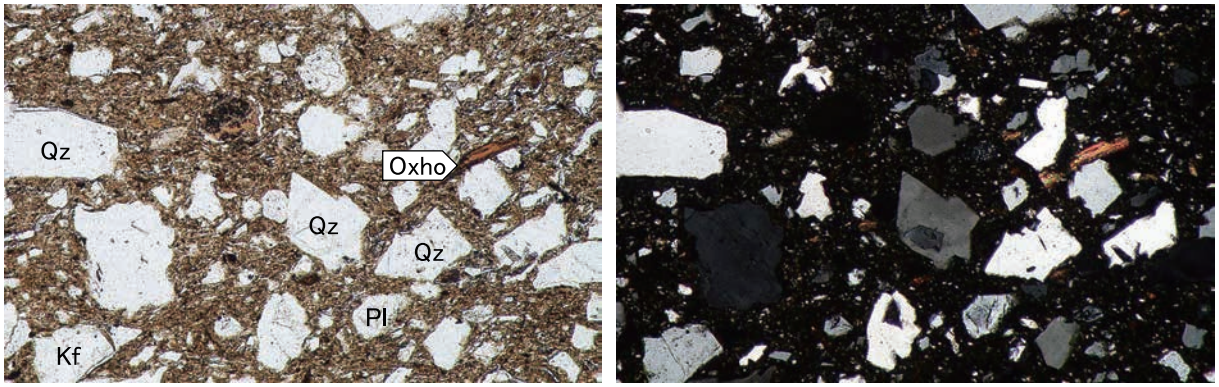
17.No.17(土師器　壺　讃岐産)



18.No.18(土師器　甕　河内産)



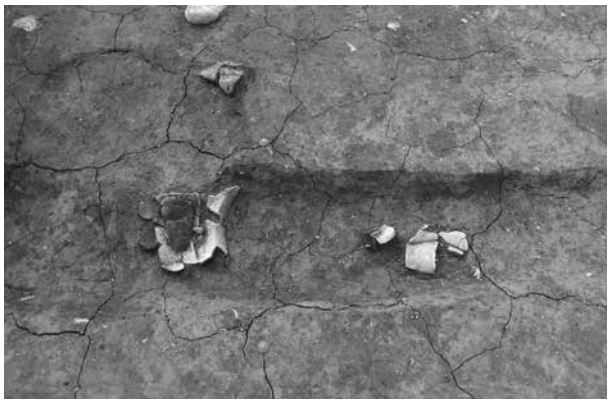
19.No.19(土師器　甕　吉備産)



20.No.20(土師器　甕　因幡産)

0.5mm

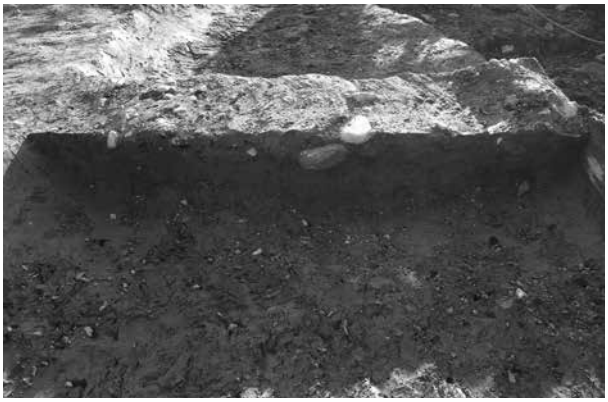
Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Cpx:単斜輝石. Ho:角閃石. Oxho:酸化角閃石.
Ep:緑レン石. Bi:黒雲母. Gr:花崗岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



SD09（西から）

SD10アゼ（南から）

SR01アゼ（南から）



SR01アゼ（北から）

SR01アゼ（北から）

SR01アゼ（北から）

SX01土器出土状態

SX02調査風景

写真図版38

SX04土器出土状態（東から）

現地説明会

考古学者養成セミナー

実測風景

上層スキ溝（南から）

上層水田アゼ（南から）

15年度調査区（長越Ⅱ）の現況

船場川ゴミ集積状況

出土遺物

旧河道出土遺物

出土遺物(1)

旧河道出土
讃岐搬入土器

旧河道出土製塩土器

暗灰砂出土鉢

出土遺物(2)

暗灰砂出土小形土器

暗灰砂出土甕

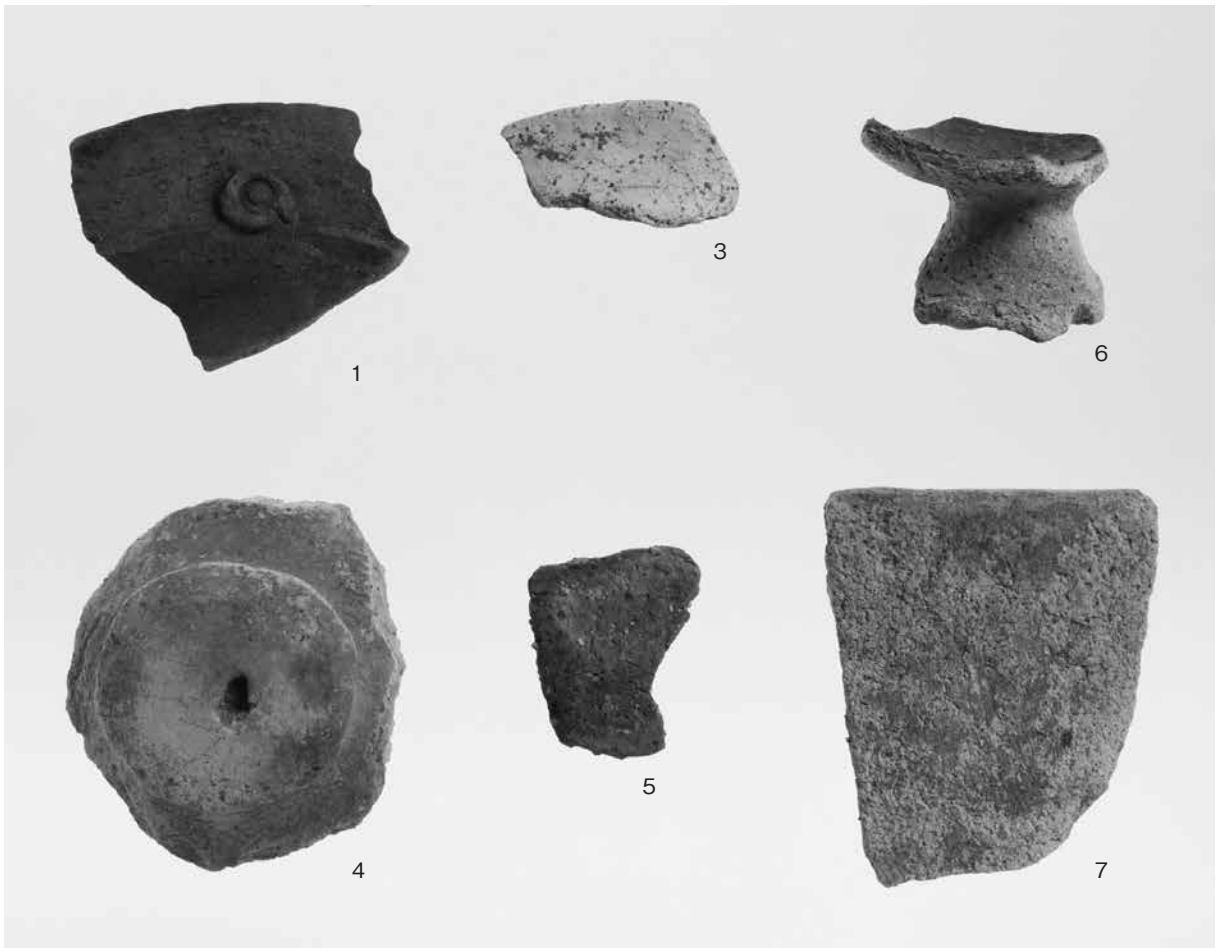
2

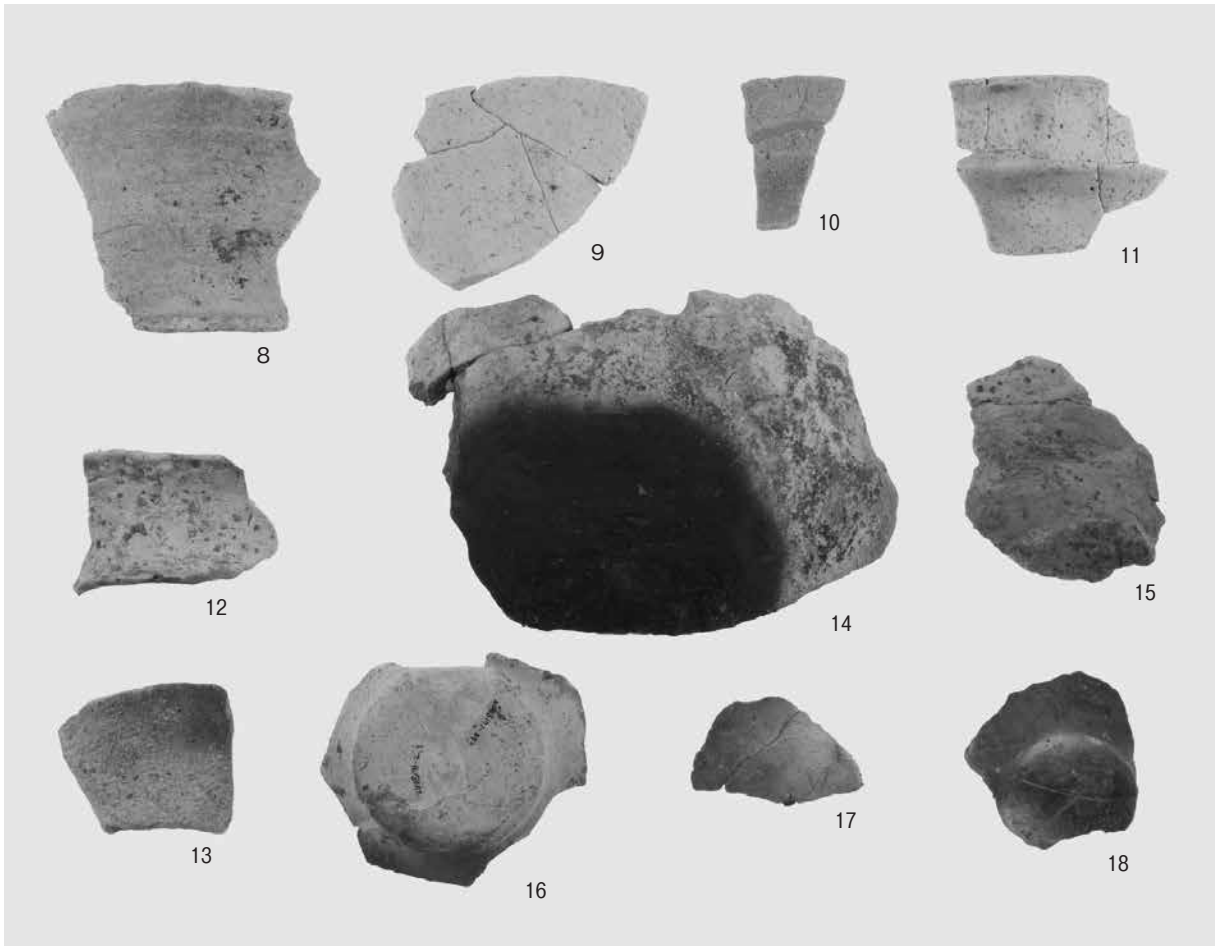
23

24

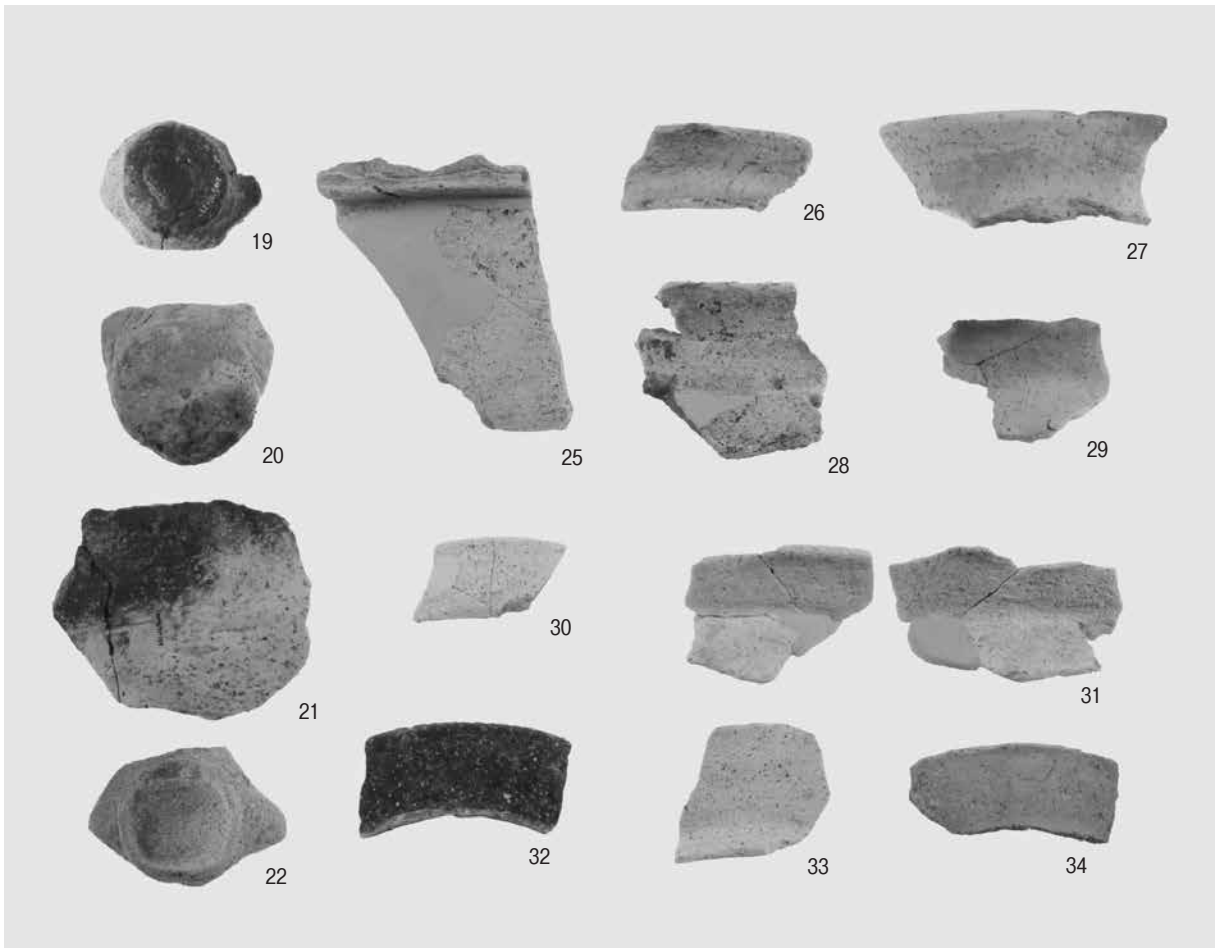
出土遺物(3)

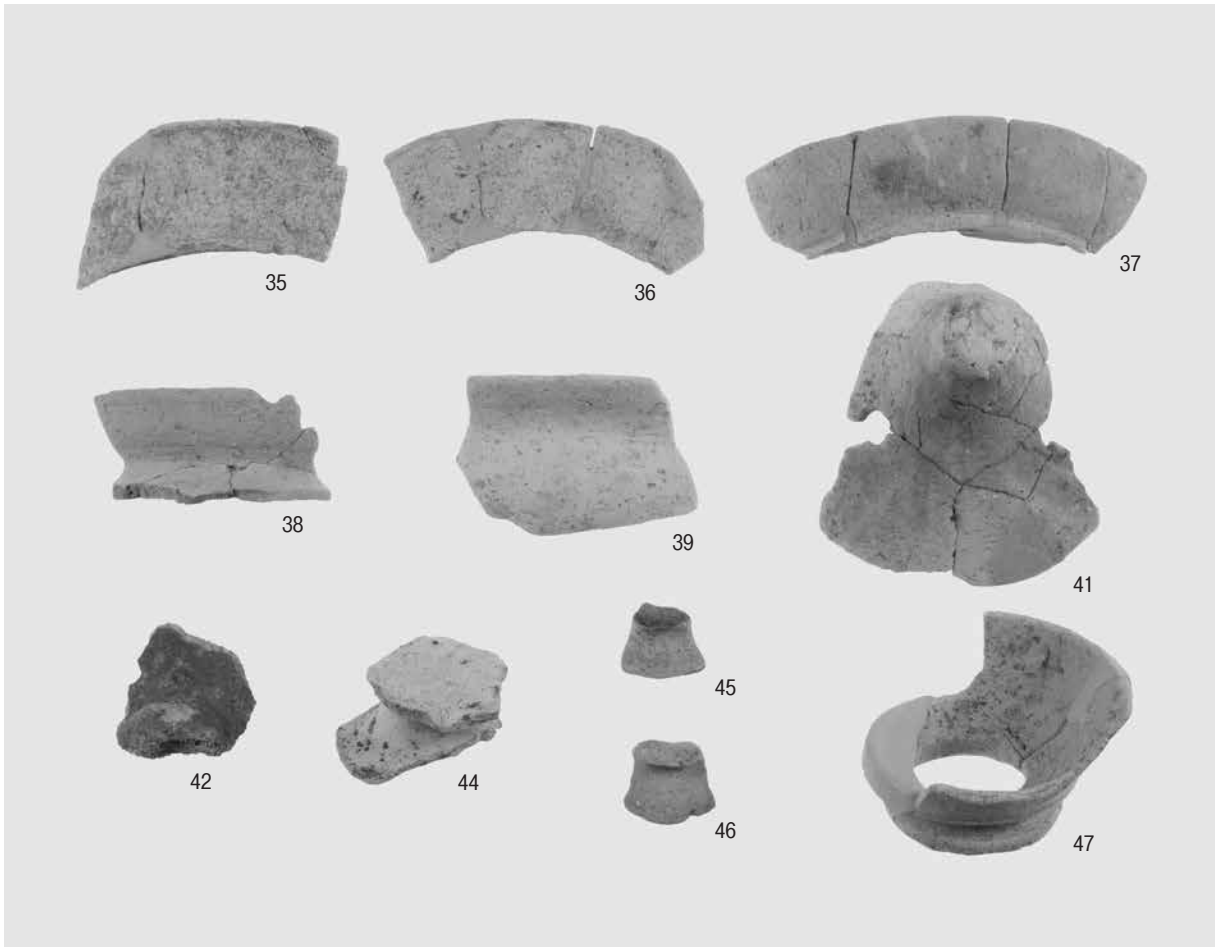
写真図版42





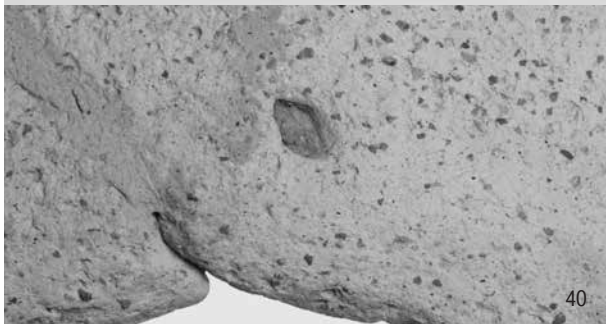
出土遺物(4)


19
20
25
26
27
28
29
21
30
31
22
32
33
34


35
36
37
38
39
41
42
44
45
46
47

出土遺物(5)

写真図版44

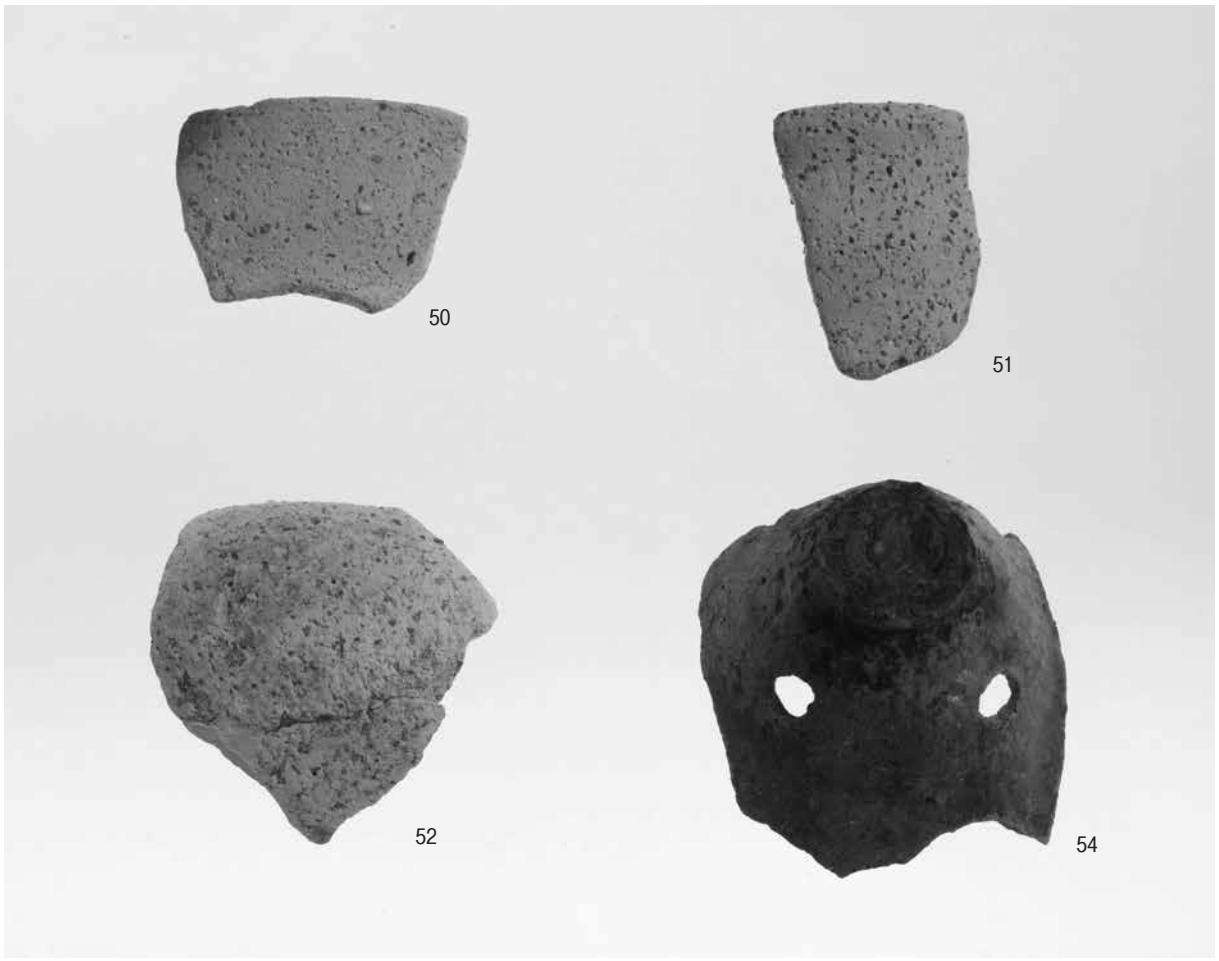


40

48

43

49



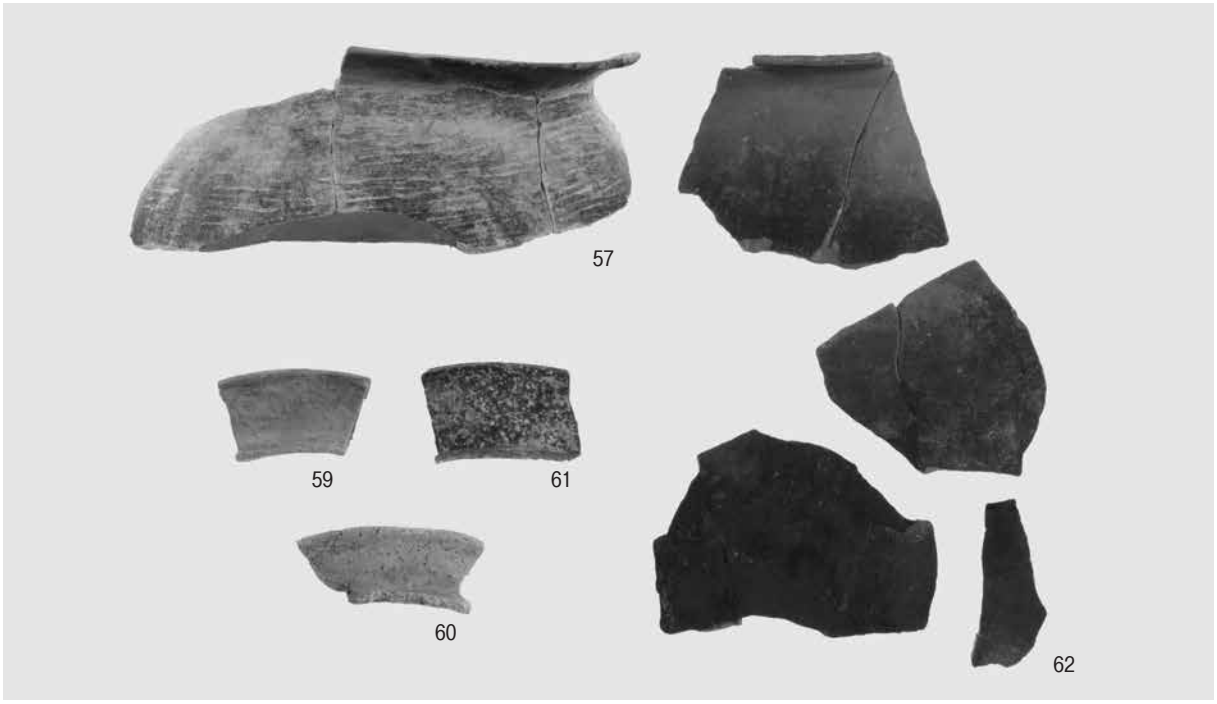
50

51

52

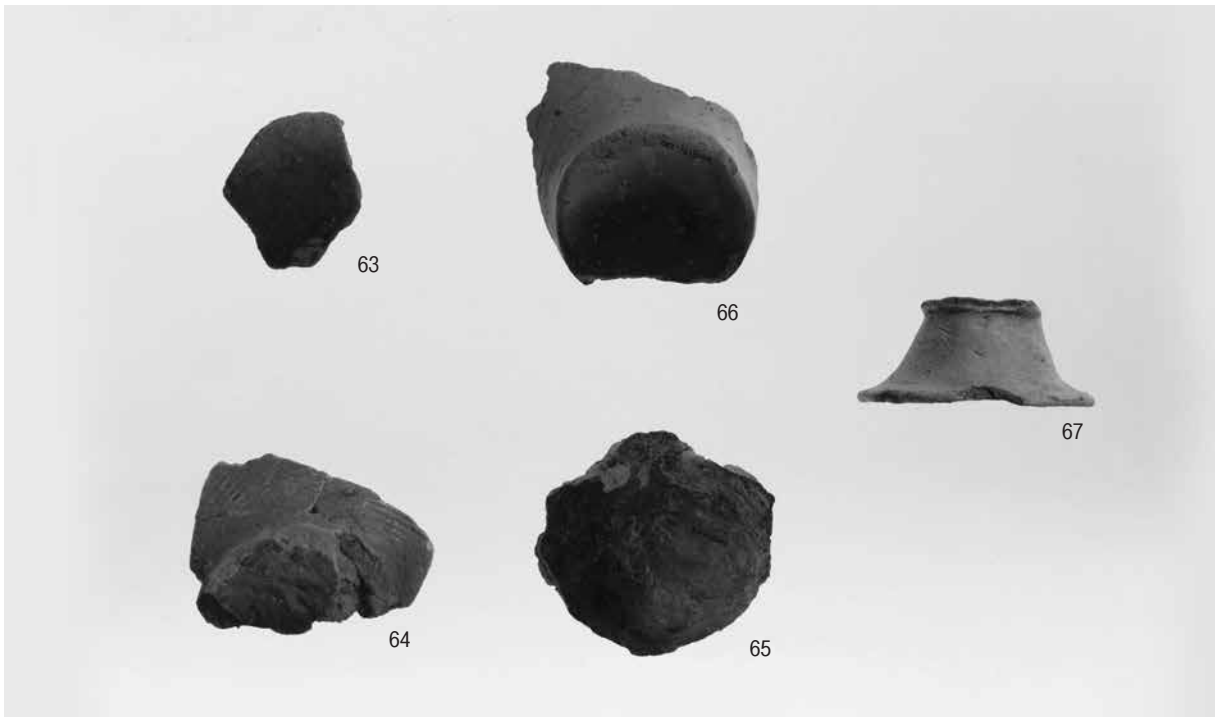
54

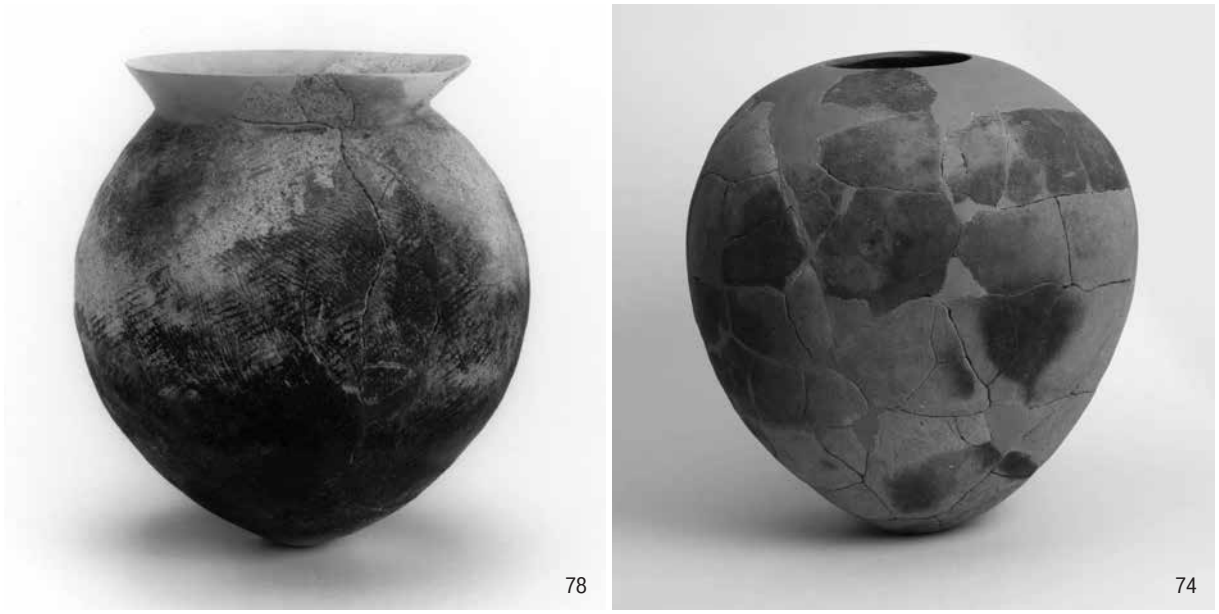
出土遺物(6)



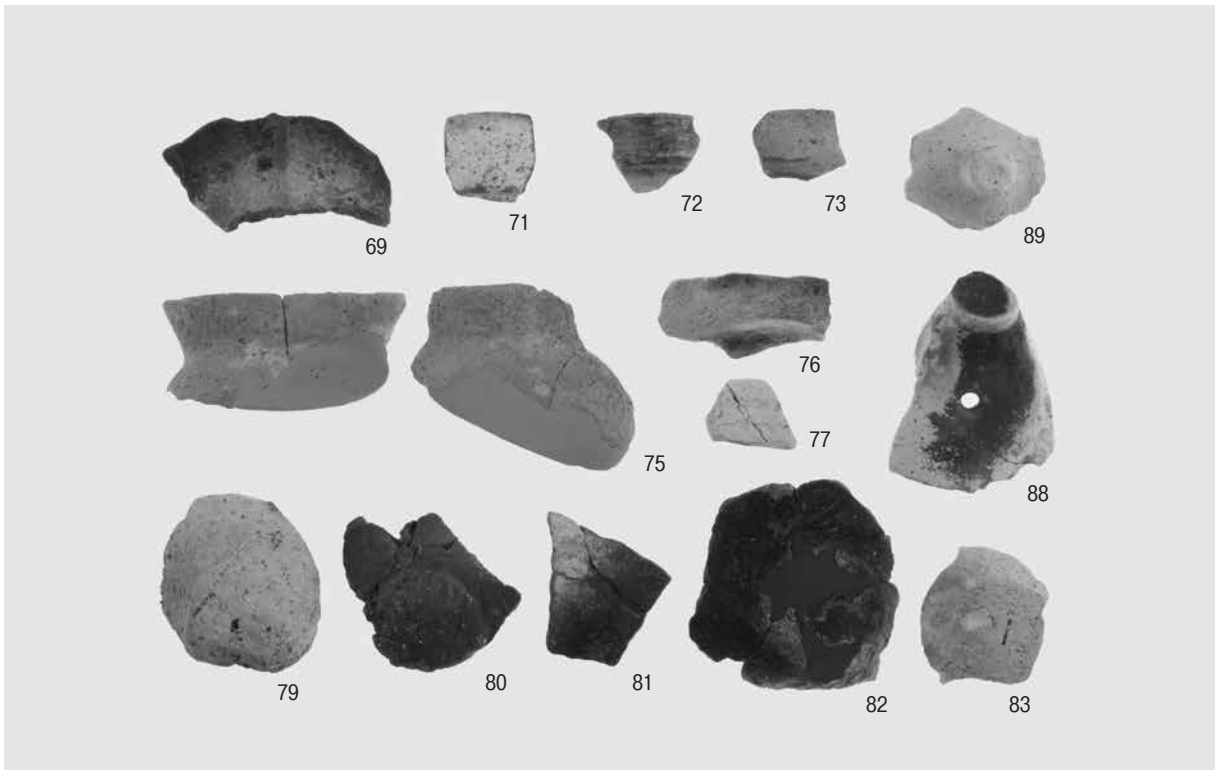
出土遺物(7)

写真図版46





出土遺物(8)



70

85

90

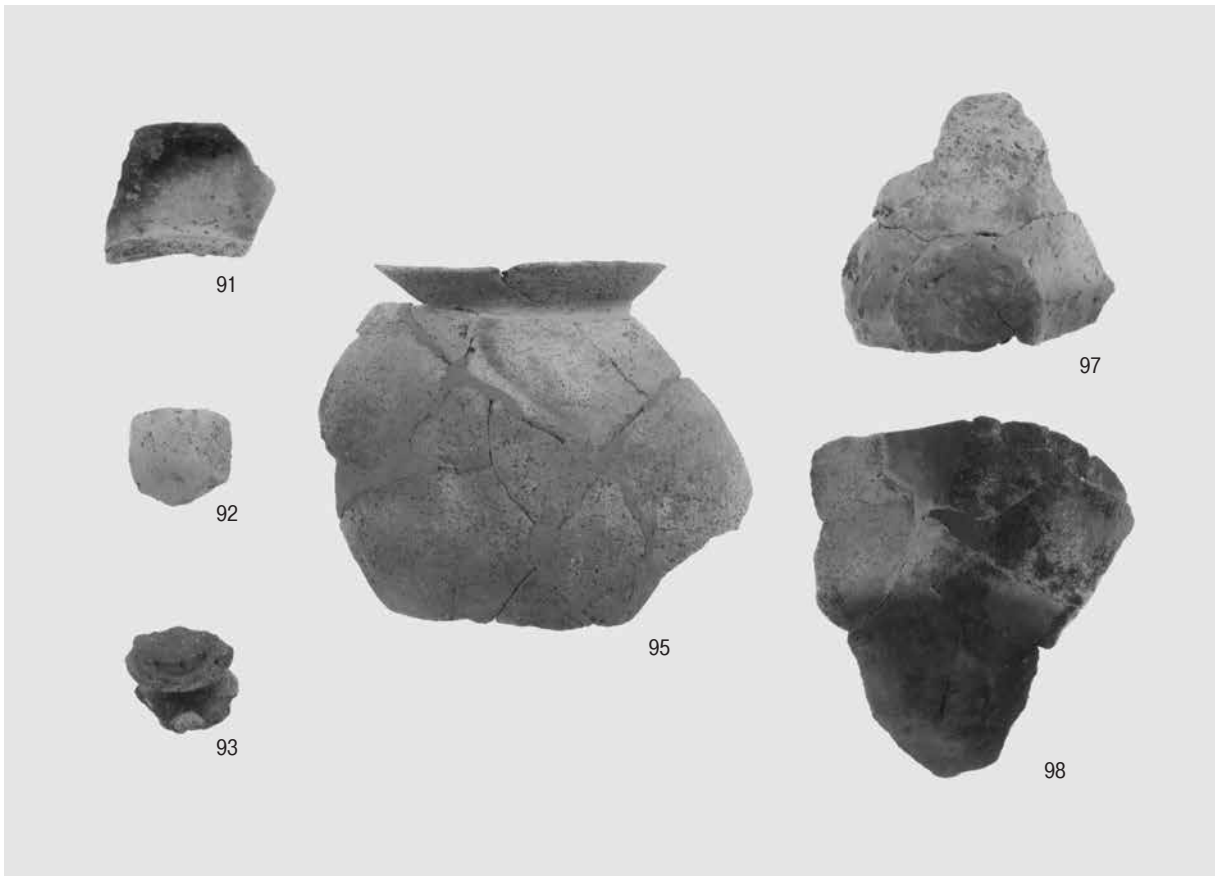
84

86

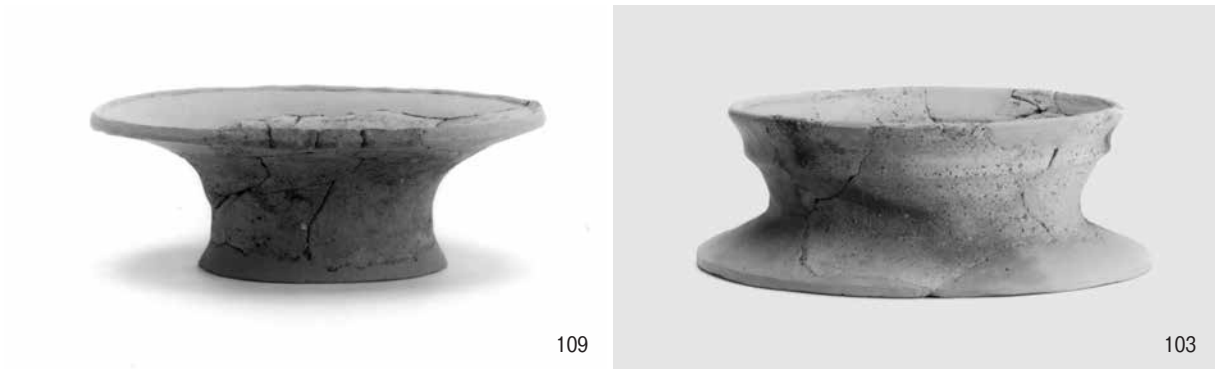
87

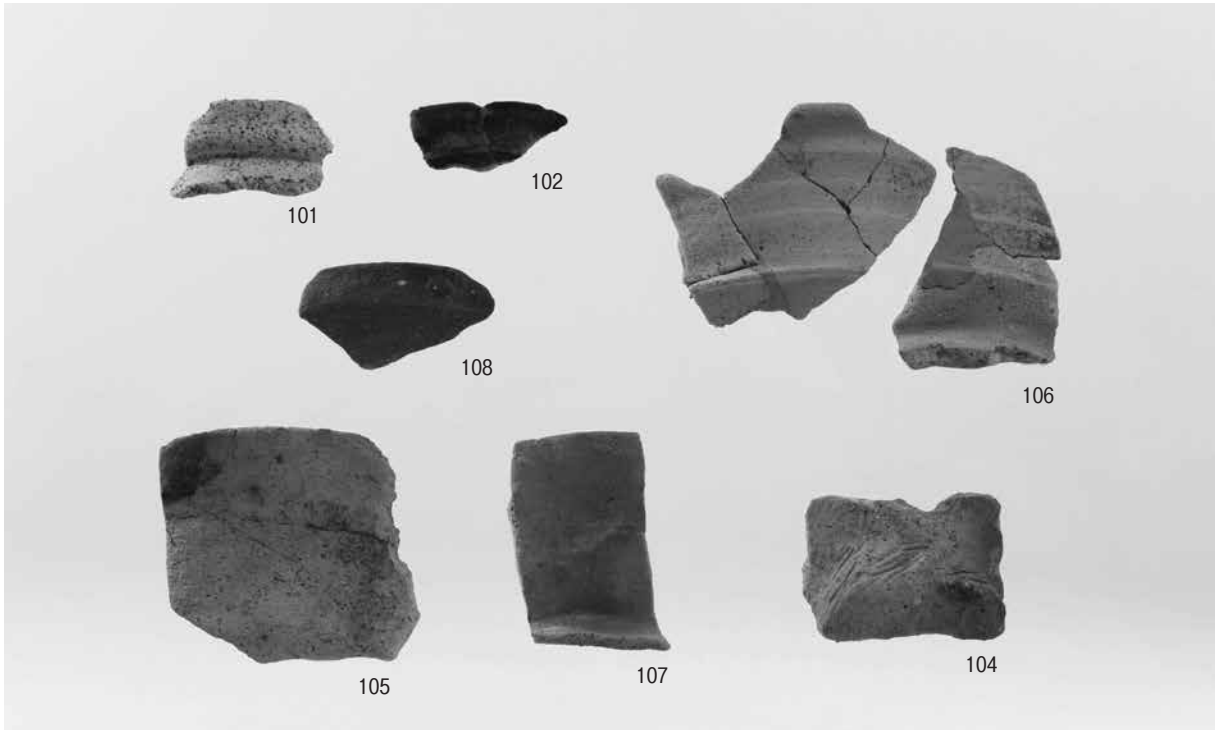
出土遺物(9)

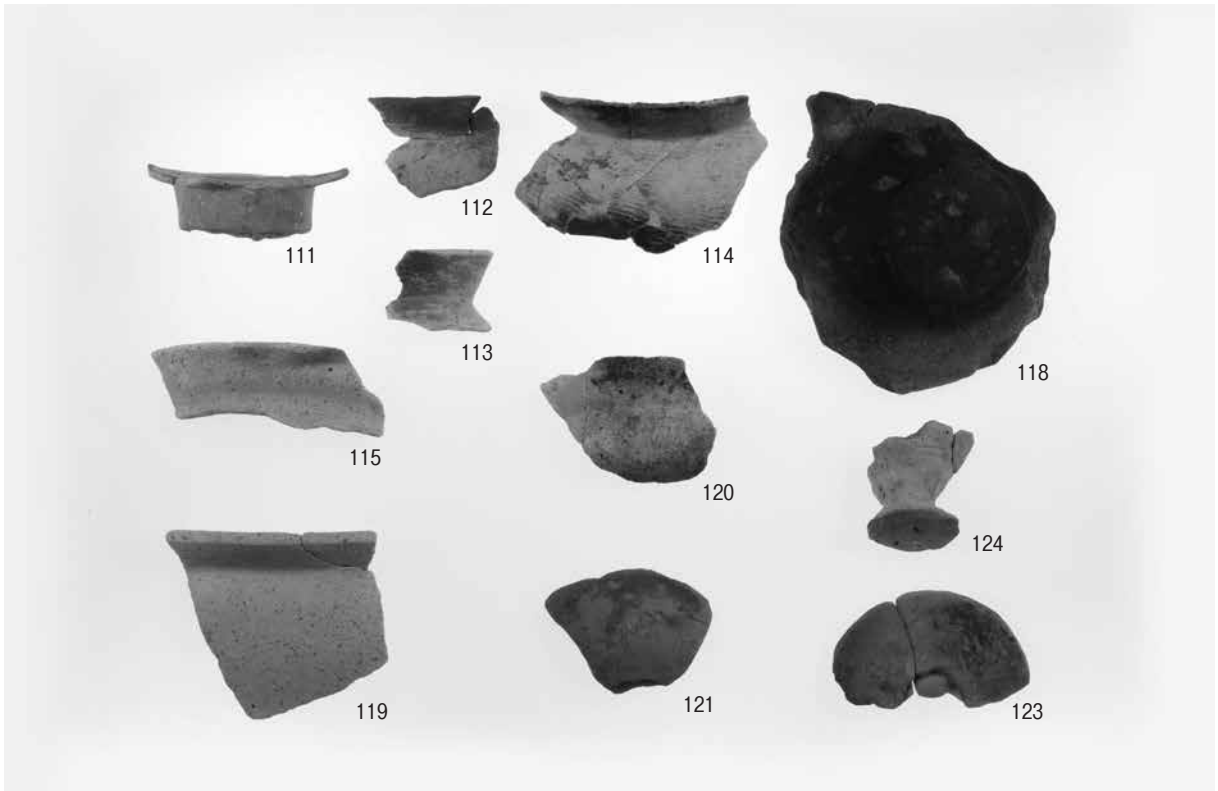
写真図版48



出土遺物(10)


109
103


101
102
108
106
105
107
104


111
112
113
114
118
115
120
124
119
121
123

出土遺物(11)

写真図版50

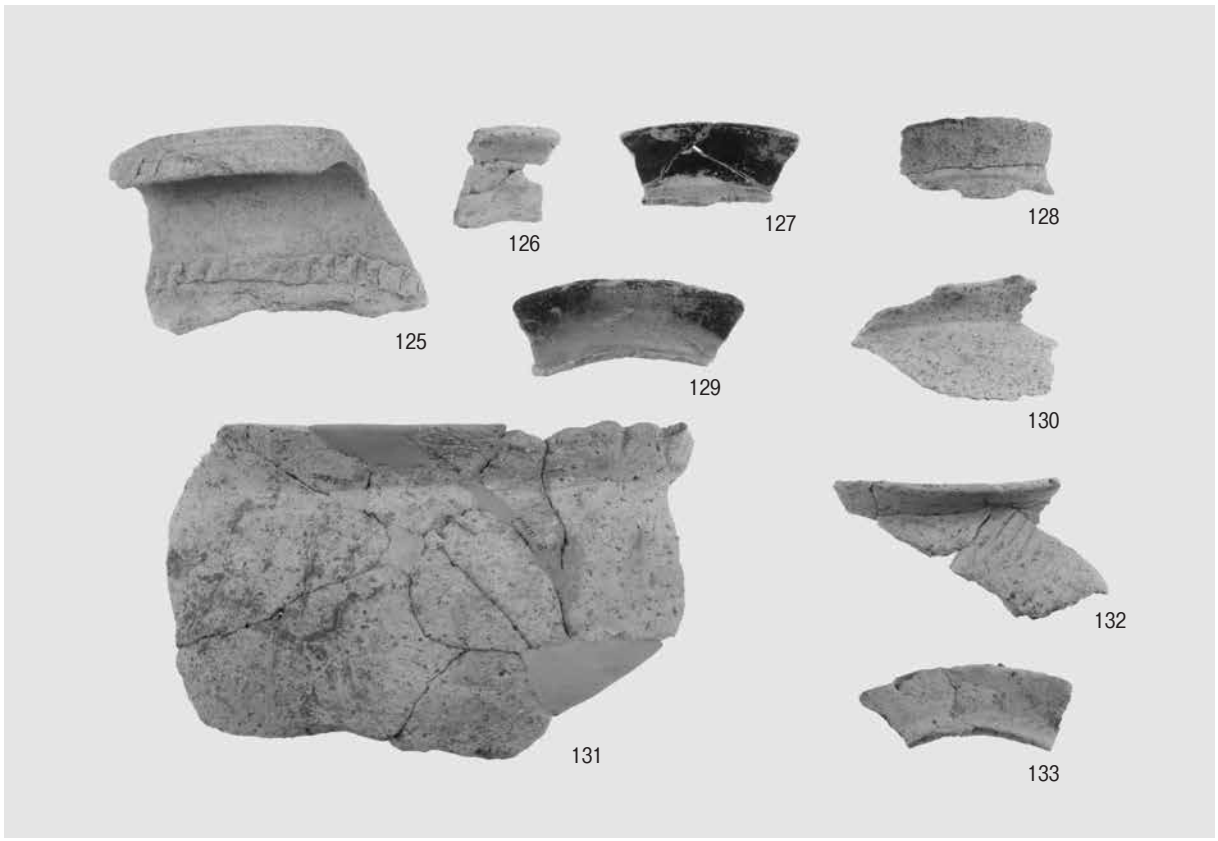
110

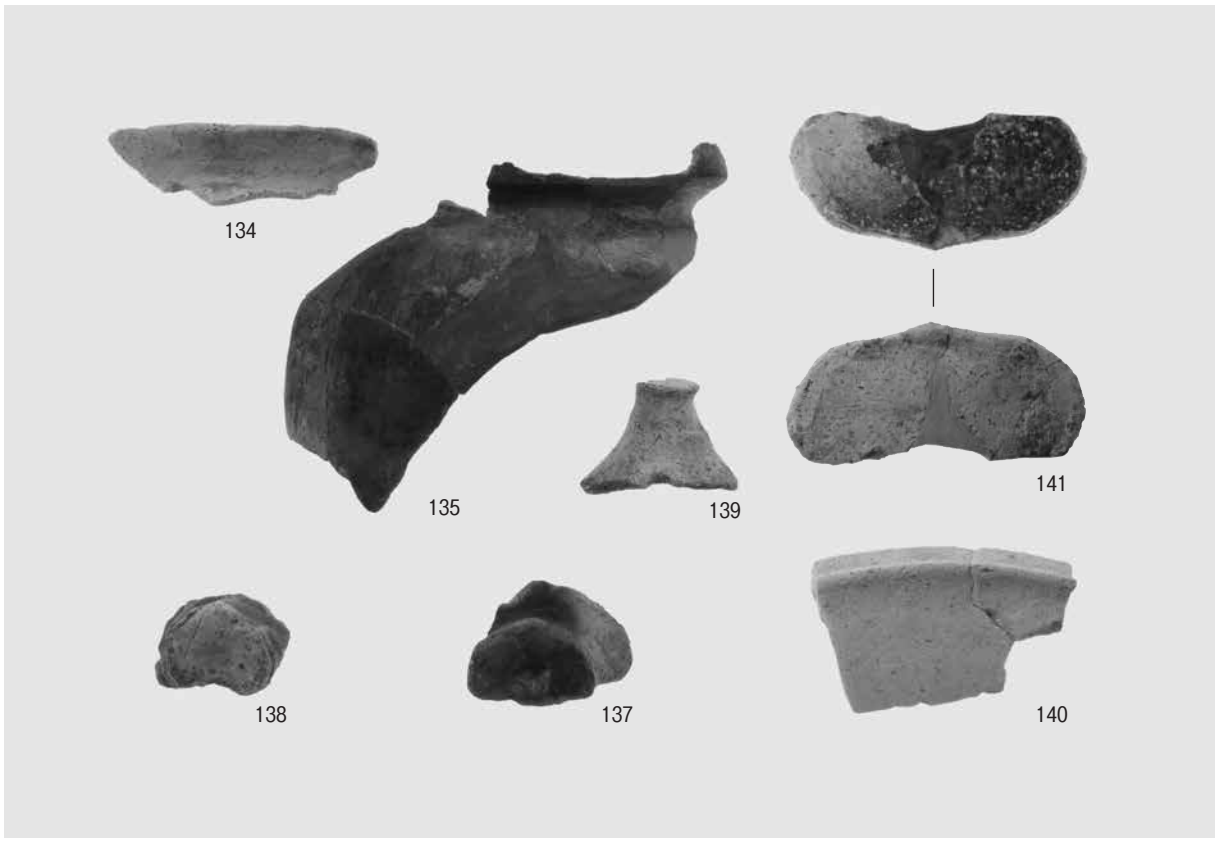
122

116

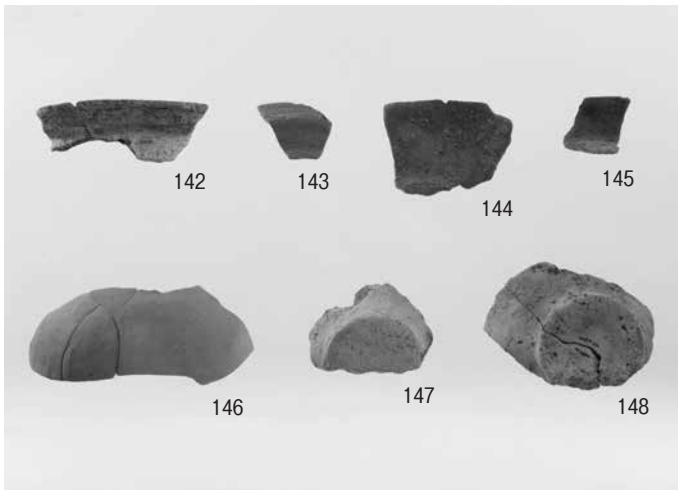
117

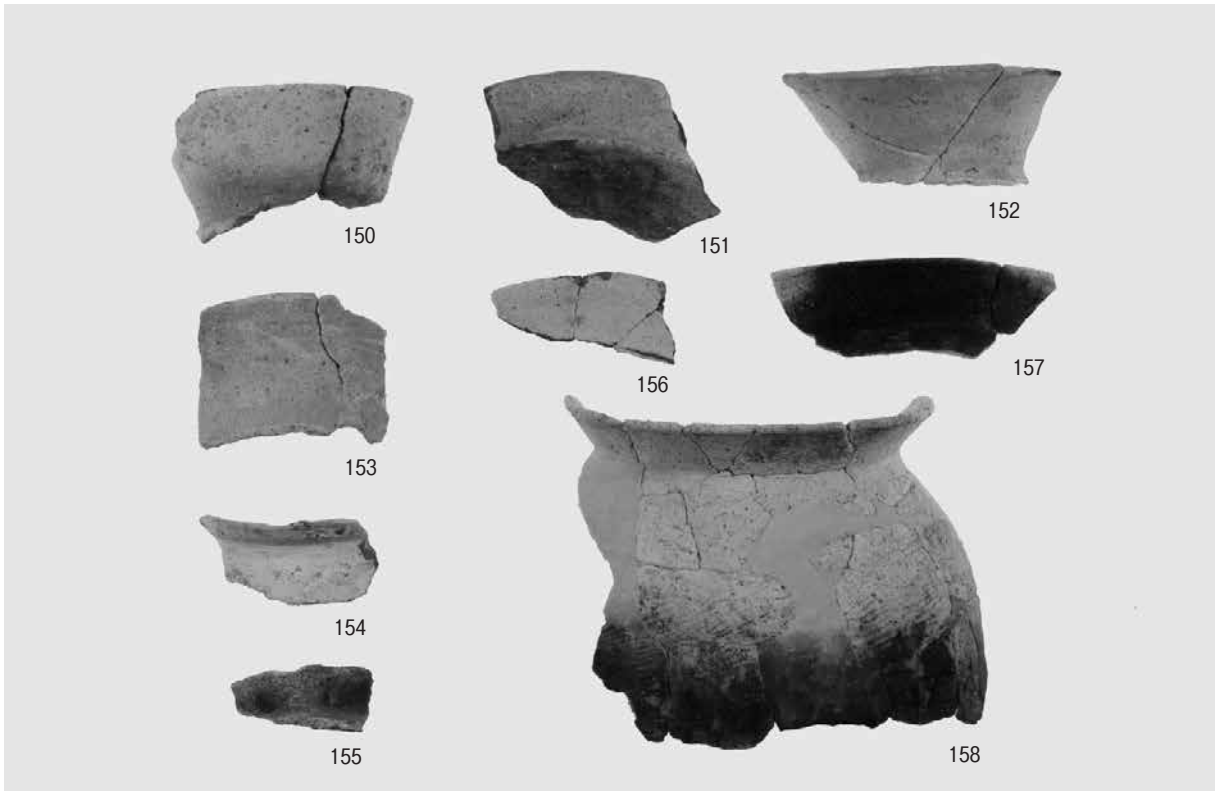
136


125
126
127
128
129
130
131
132
133


134
135
138
137
139
141
140

写真図版52





出土遺物(14)

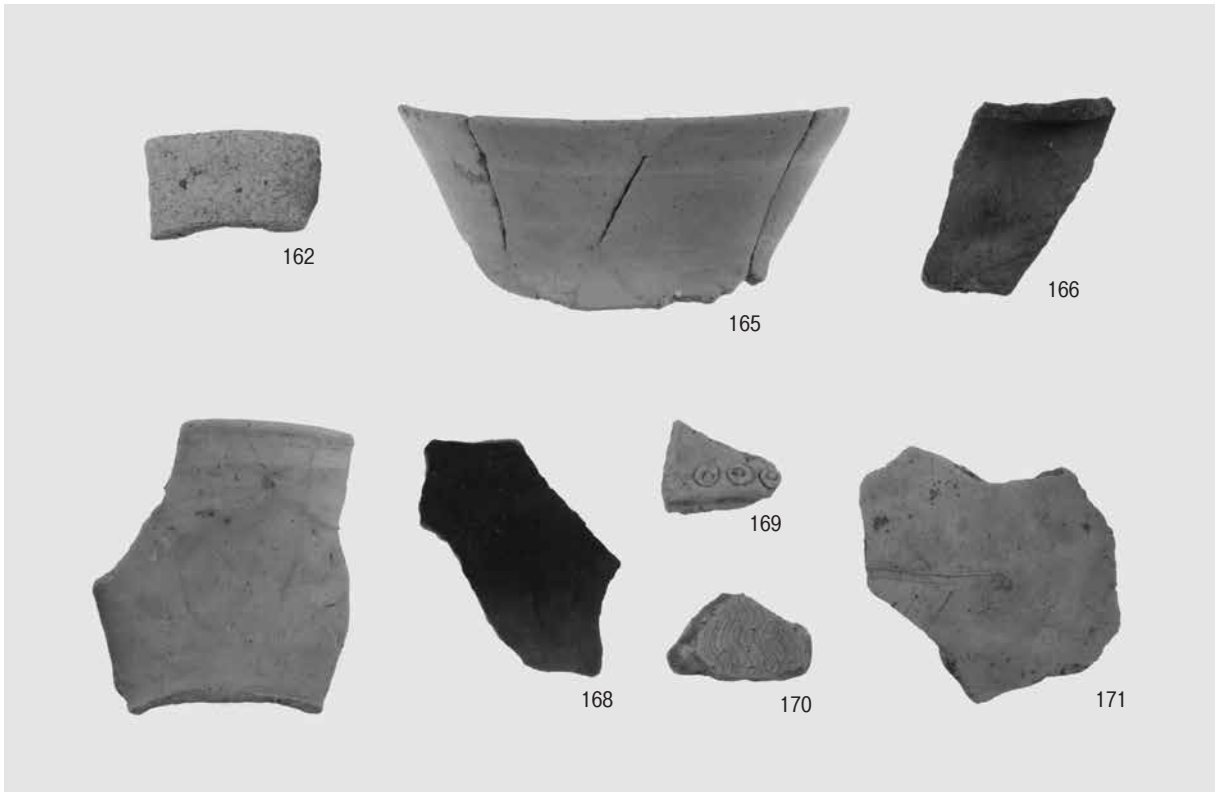
172

177

176

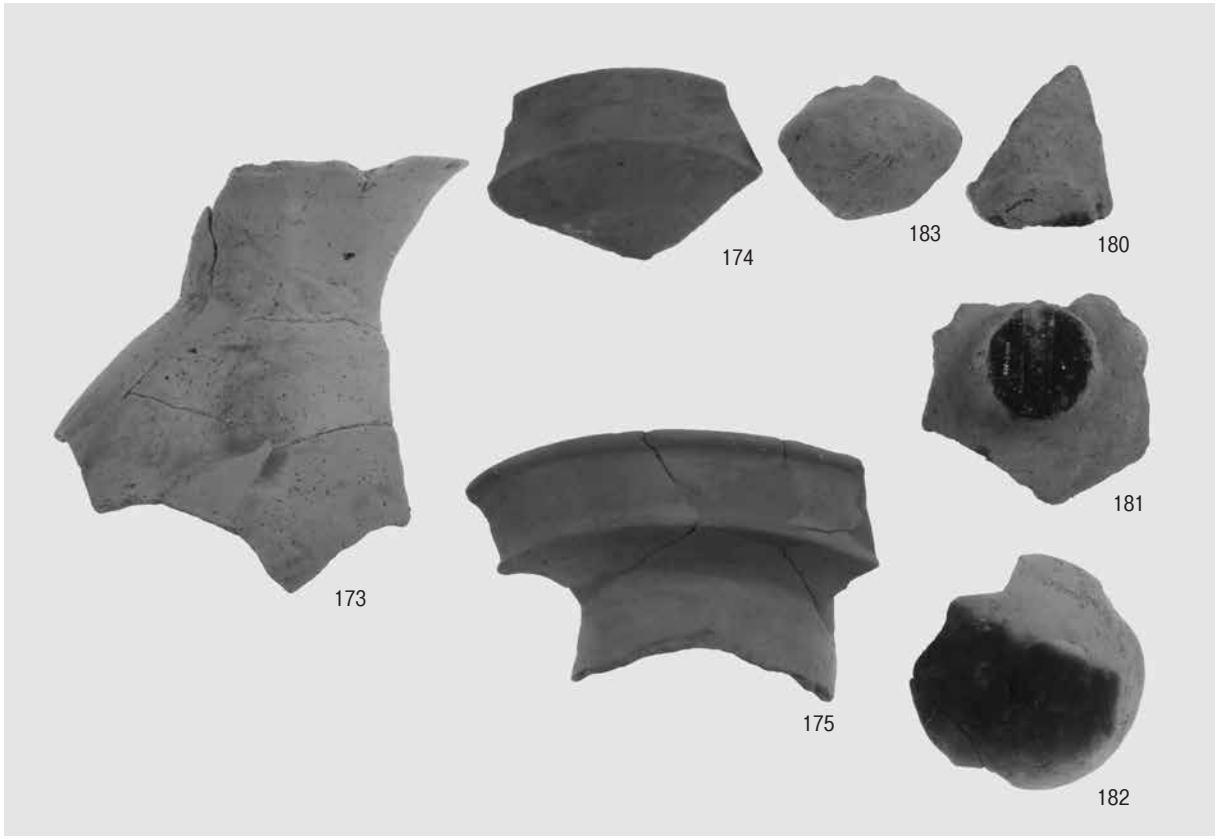
179

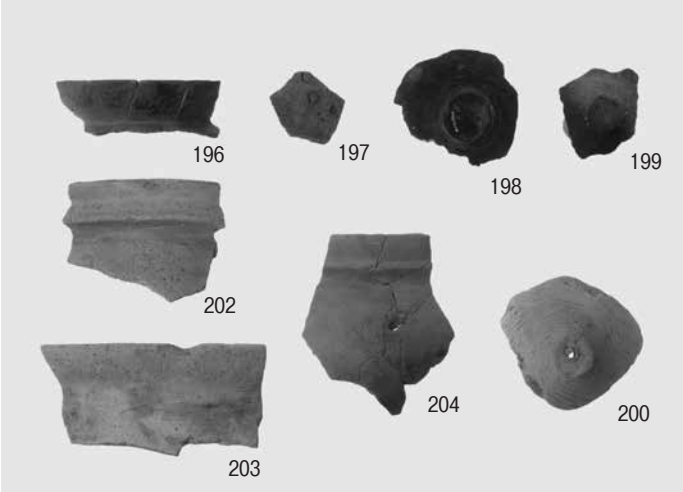
178



出土遺物(15)

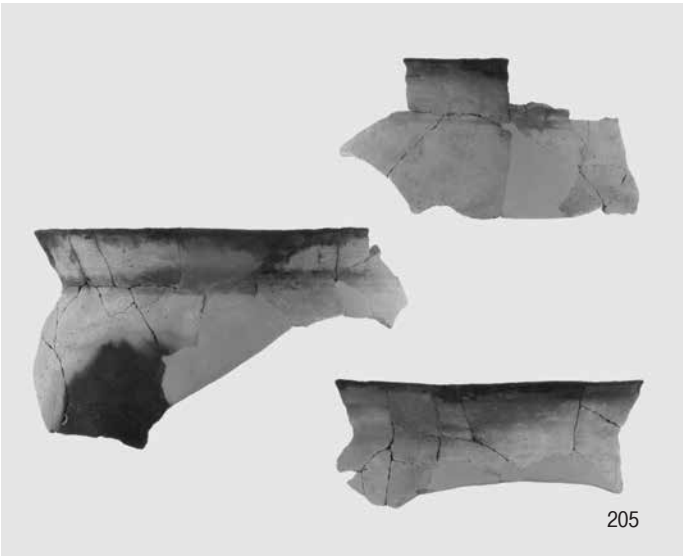
写真図版54



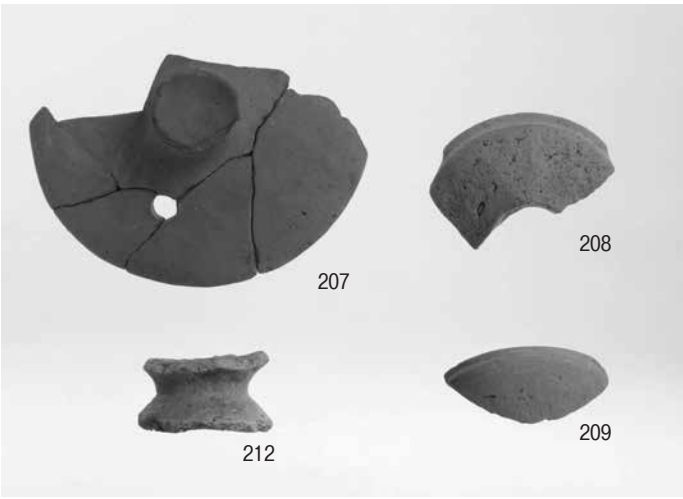

196
197
198
199
202
204
200
203

201

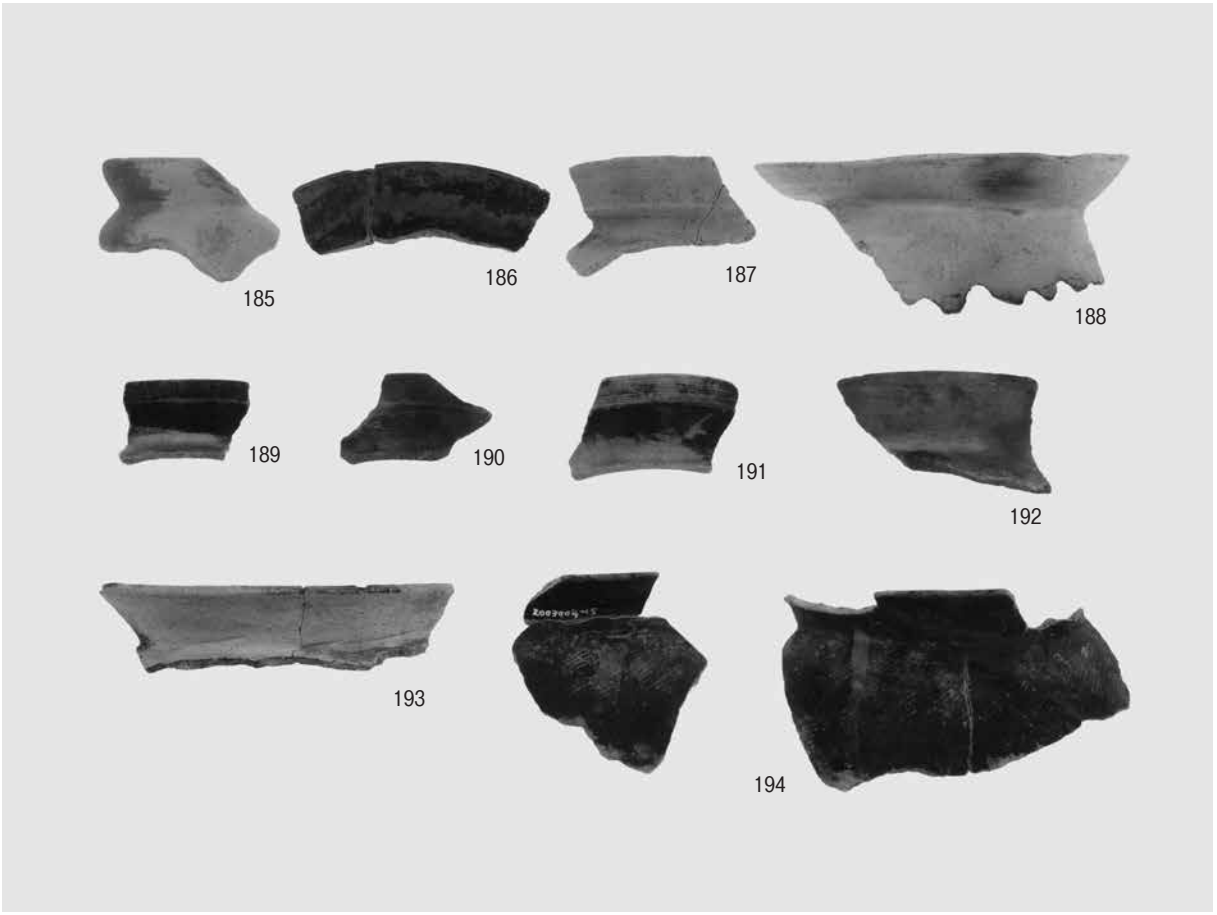
206


205

195


207
208
212
209

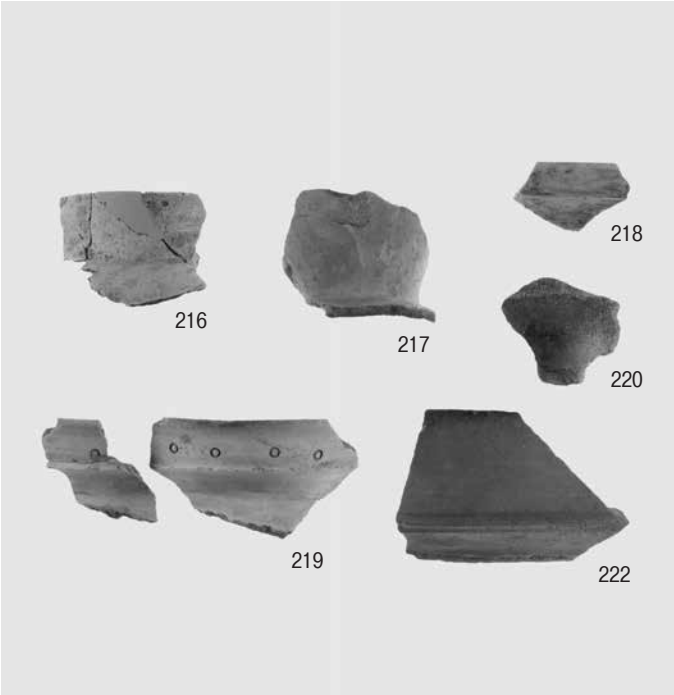
写真図版56



出土遺物(18)

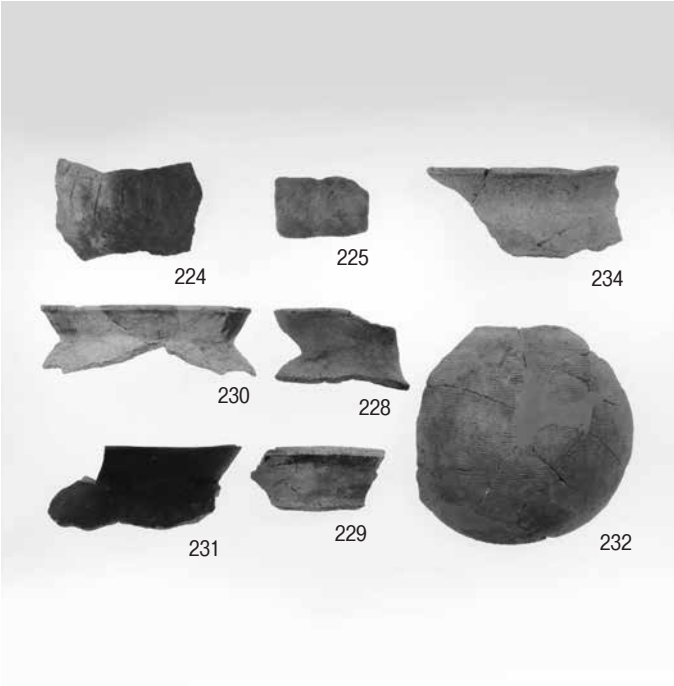
221

223


216
217
218
220
219
222

226

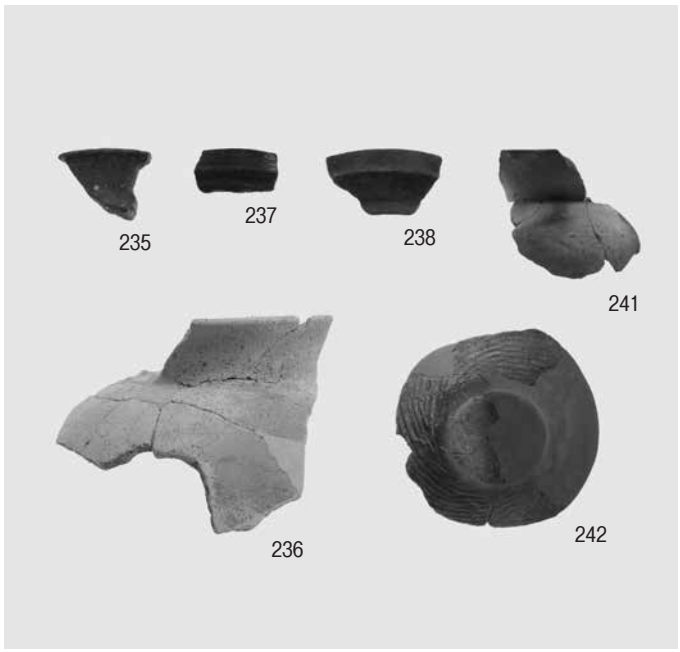
227

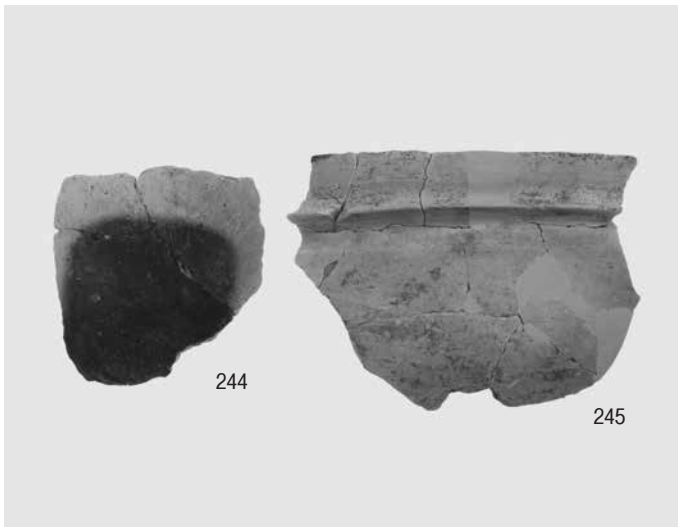

224
225
234
230
228
231
229
232

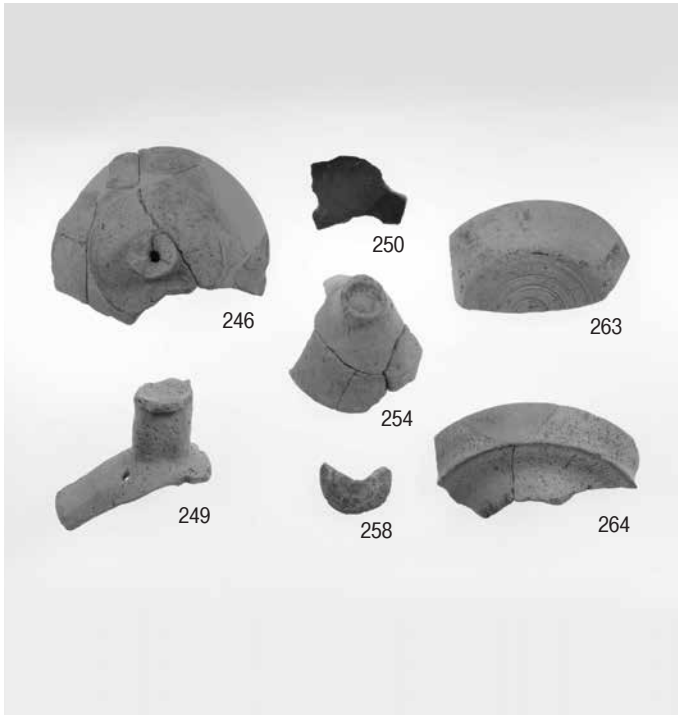
233

出土遺物(19)

写真図版58







出土遺物(20)

248

252

251

247

253

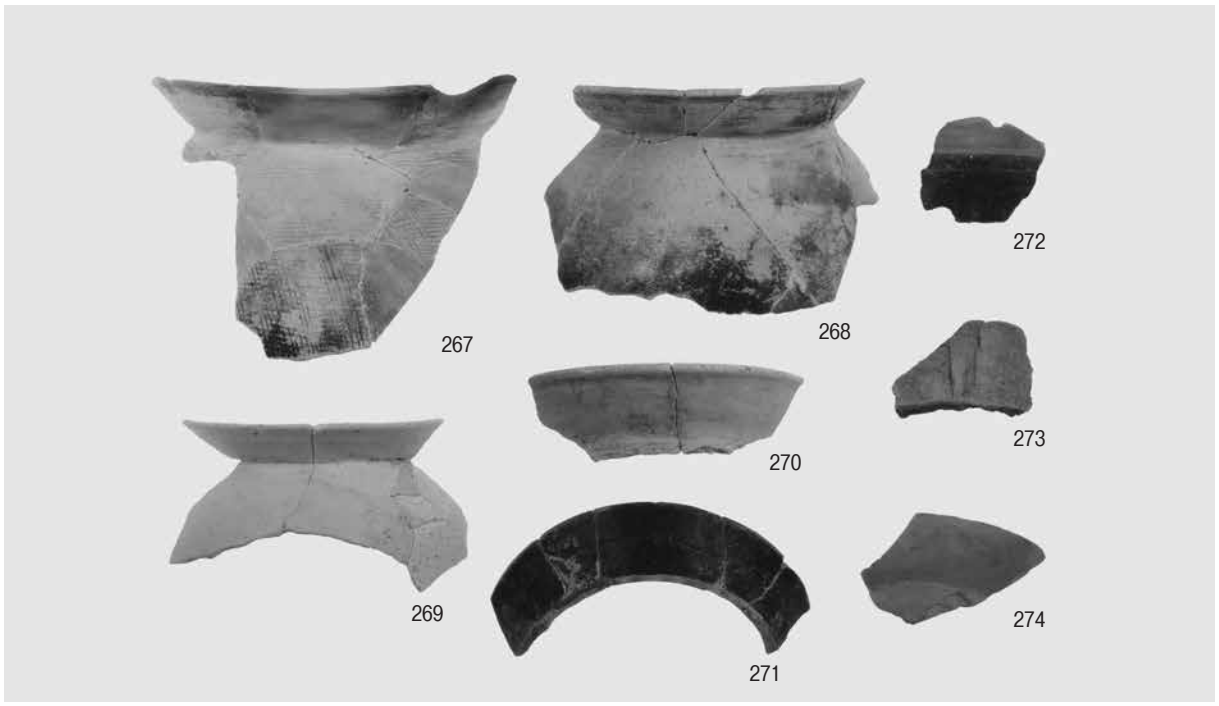
255

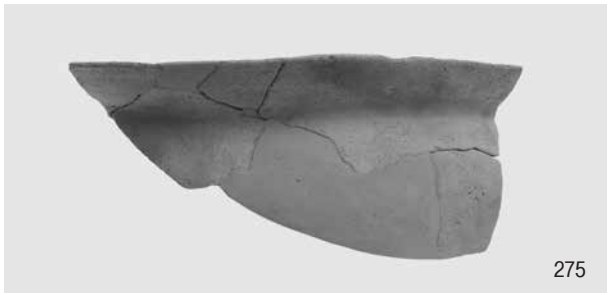
256 257 259

260 261 277

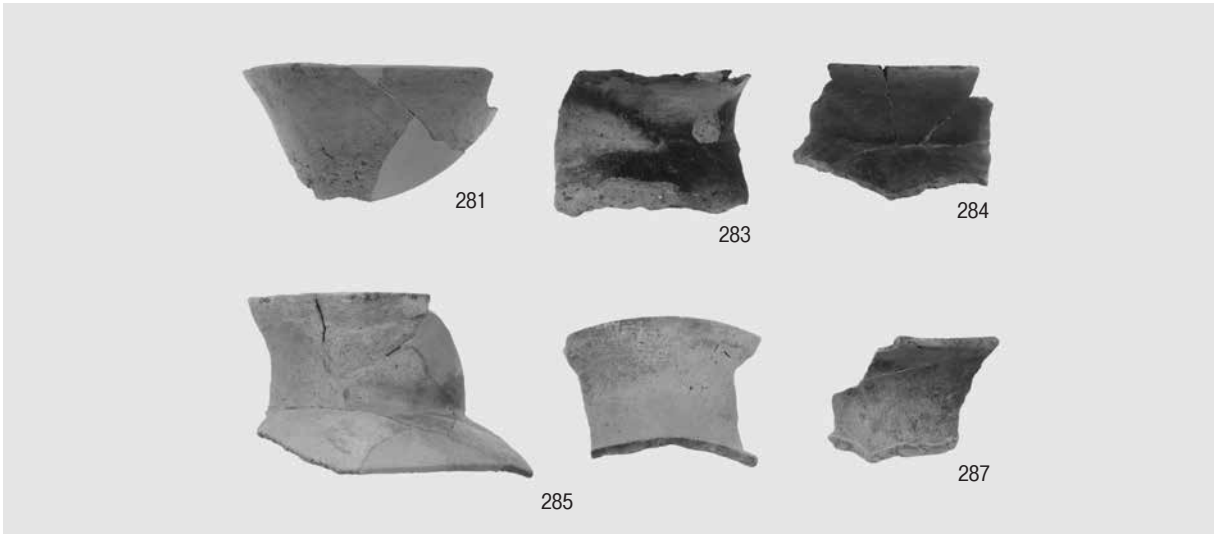
出土遺物(21)

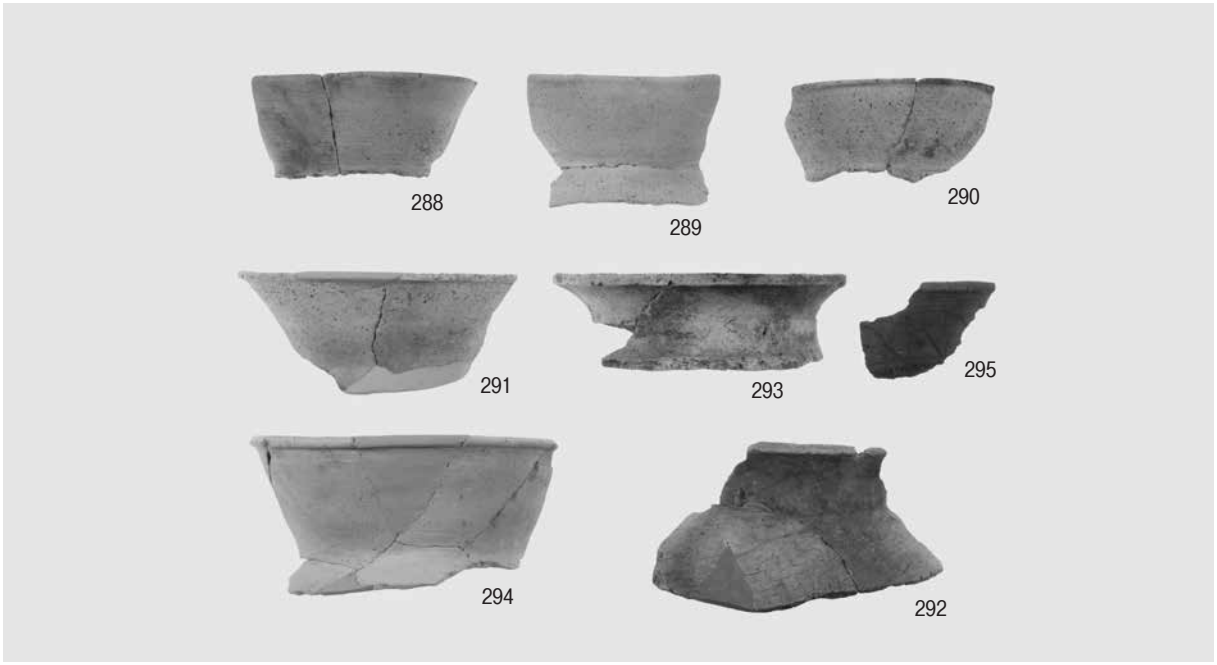
写真図版60





出土遺物(22)


281
283
284
285
287


288
289
290
291
293
295
294
292

282

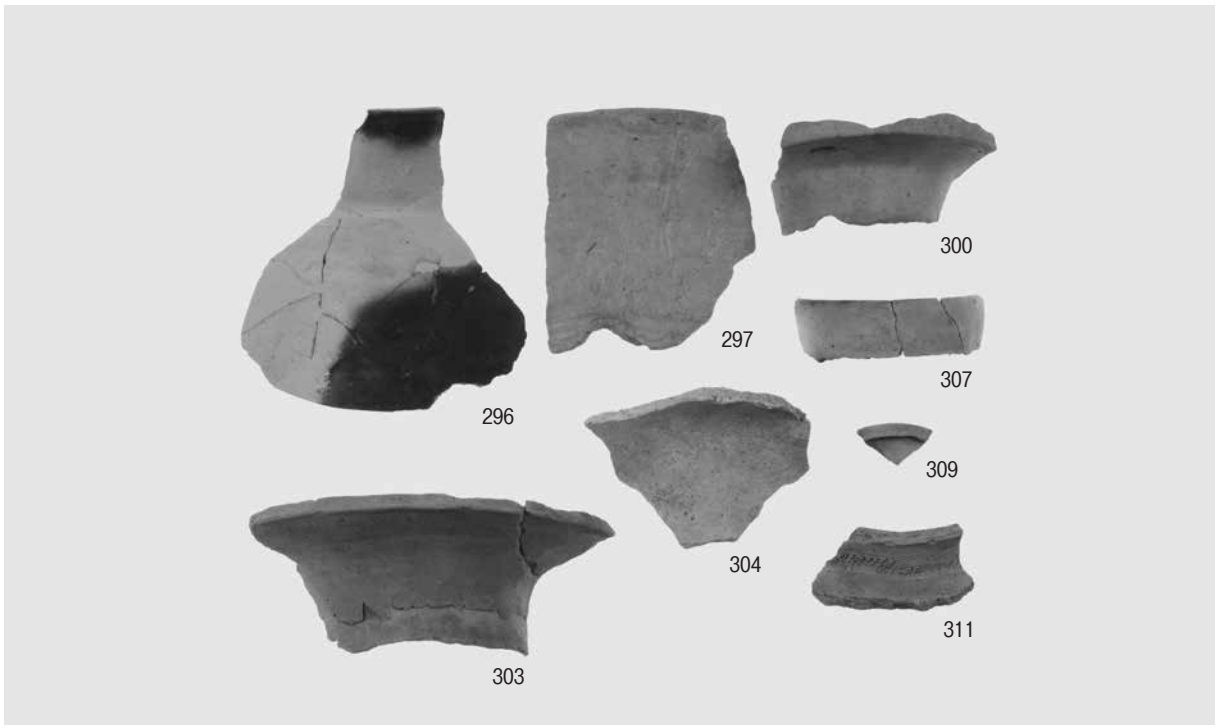
286

298

299

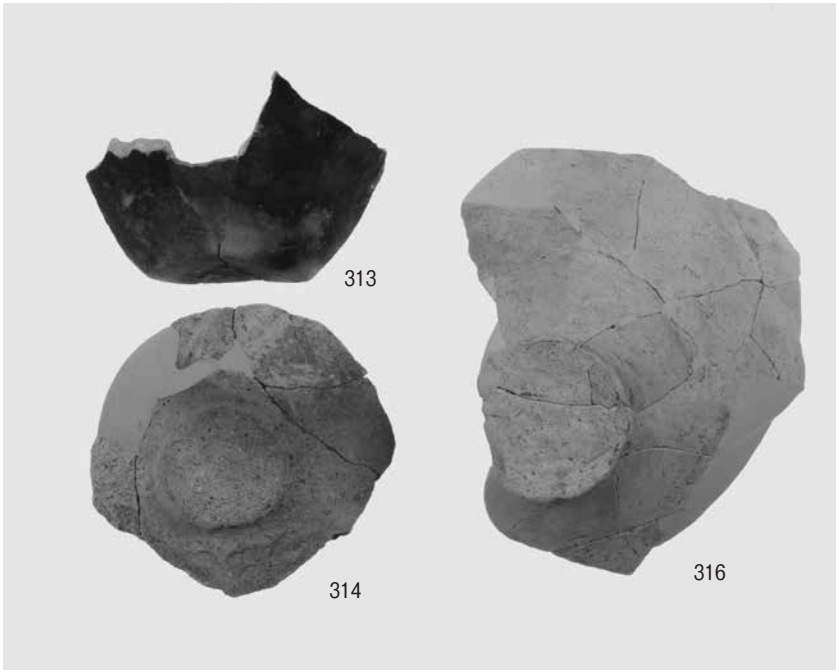
出土遺物(23)

写真図版62

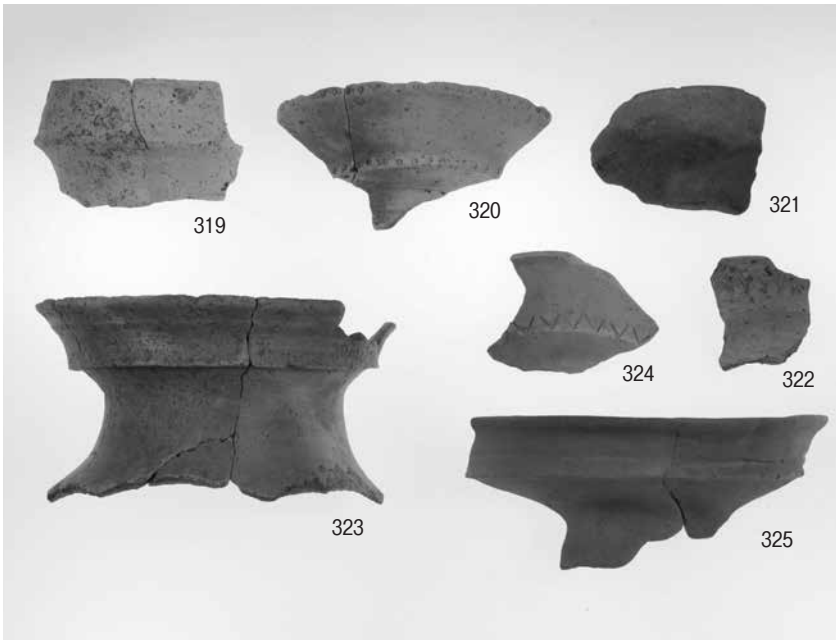


出土遺物(24)

317



318



312

315

出土遺物(25)

写真図版64

328

330

326

333

327

360

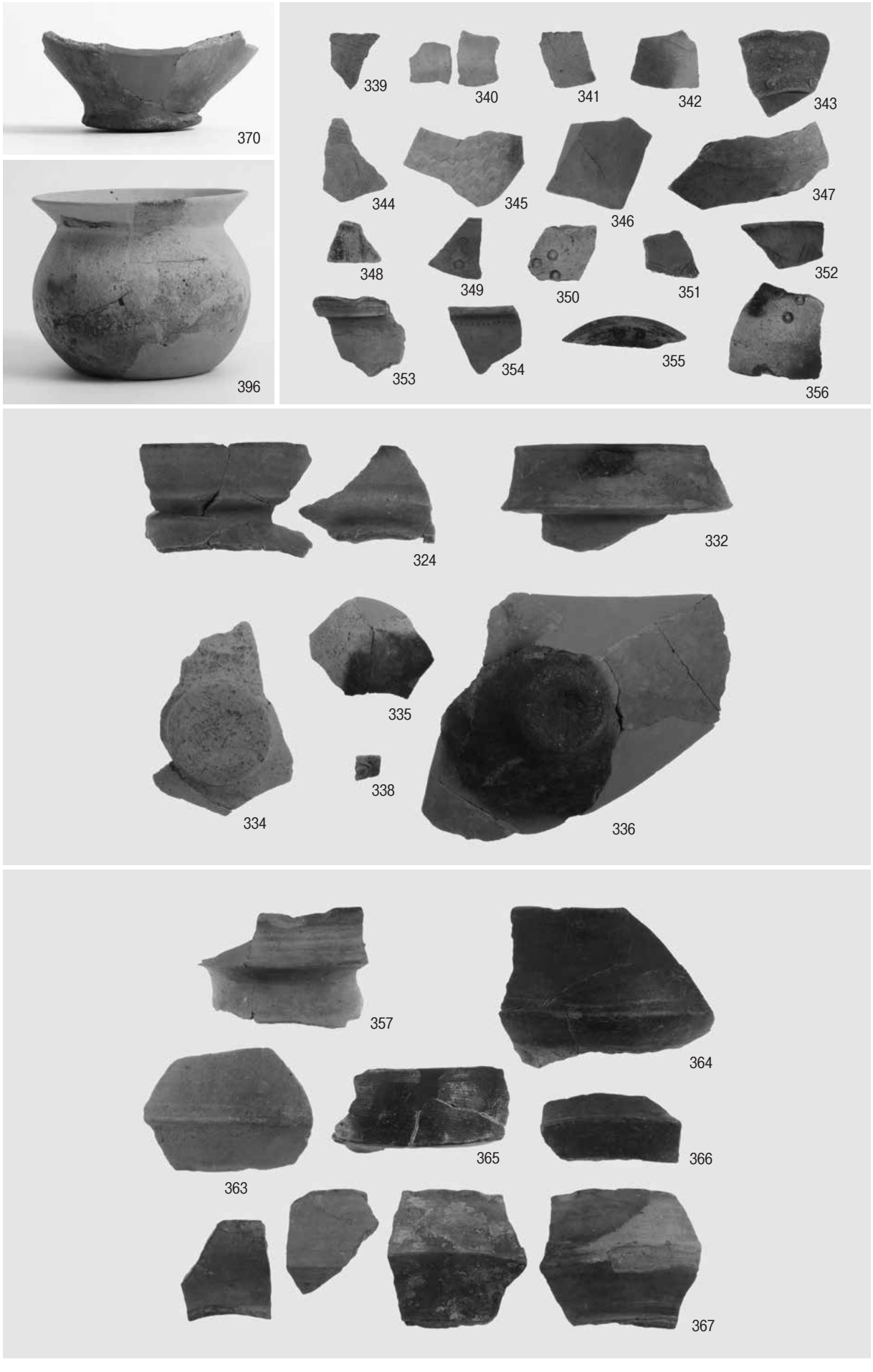
331

358

361

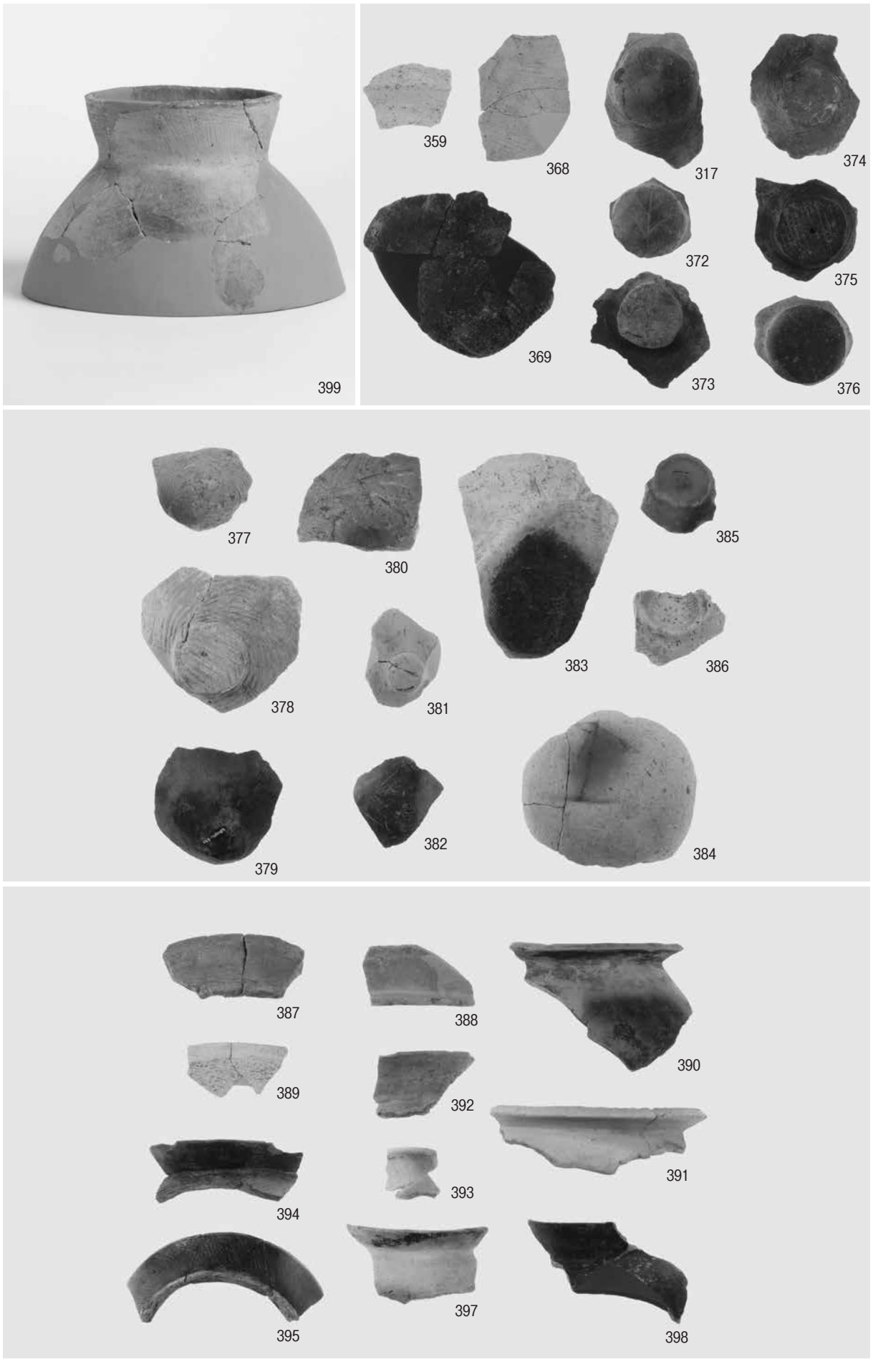
337

出土遺物(26)


370
396
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
324
332
335
338
334
336
357
364
365
366
363
367

出土遺物(27)

写真図版66



出土遺物(28)

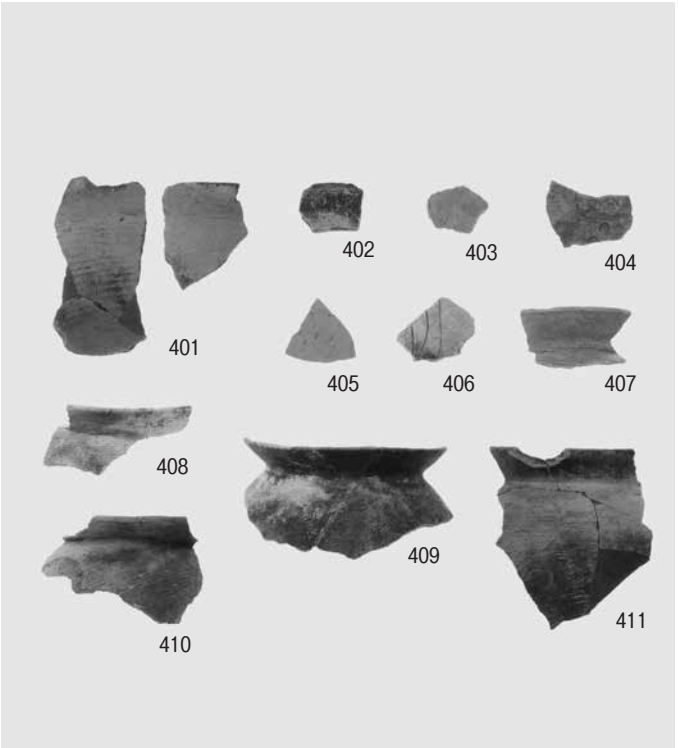
414

415

416

417

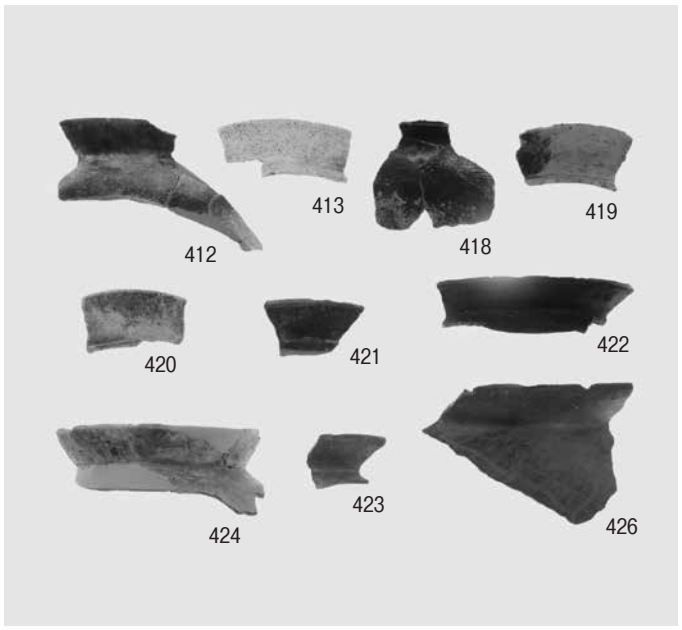
400



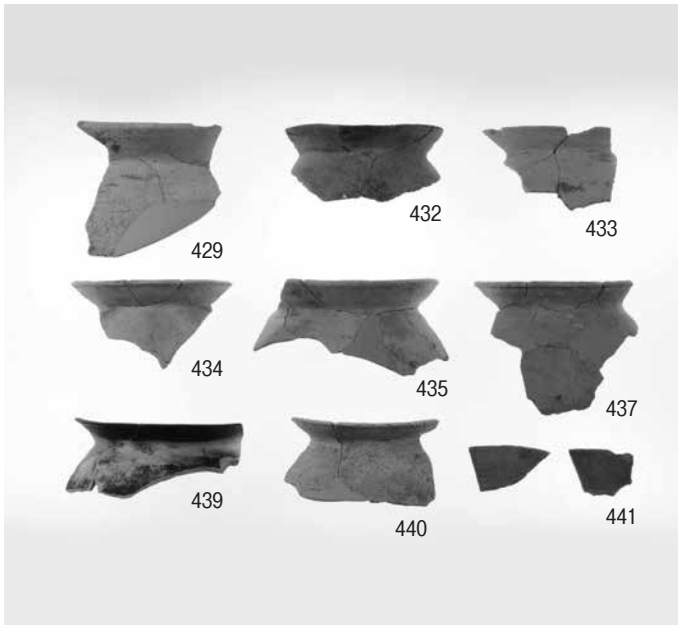
出土遺物(29)

写真図版68

425



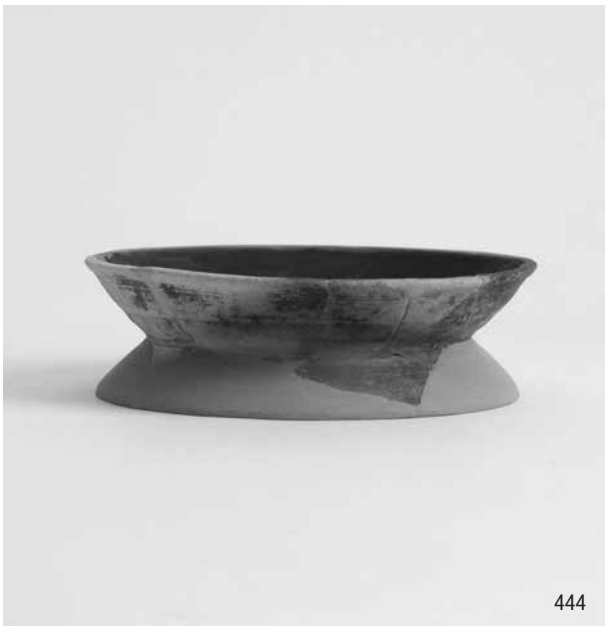
430



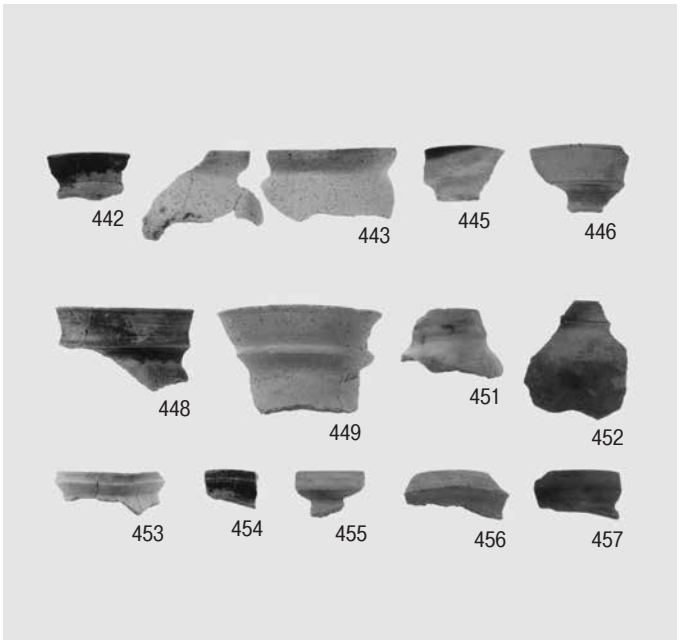
431

出土遺物(30)

436


444

438

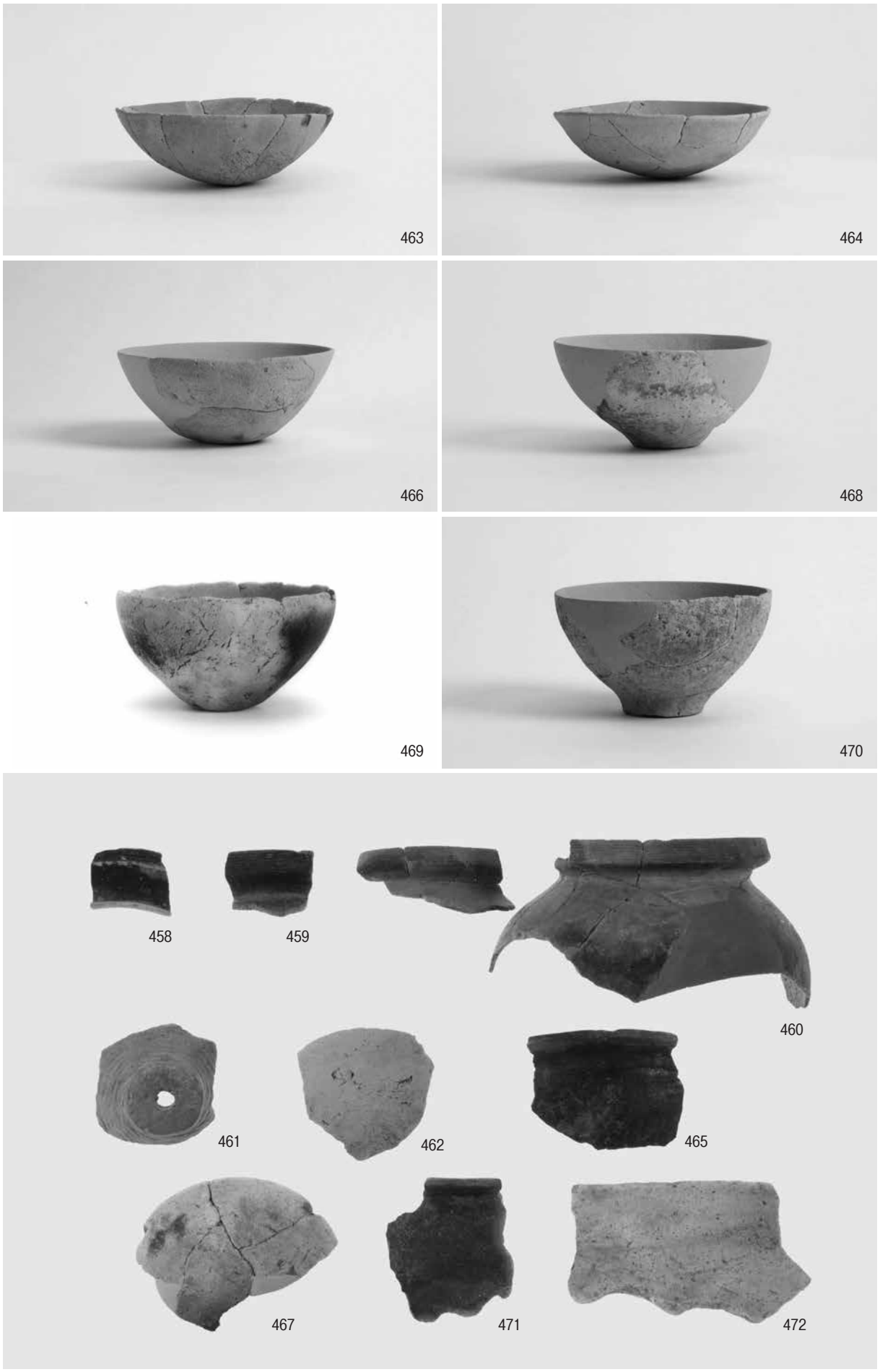


447

450

出土遺物(31)

写真図版70



出土遺物(32)

473

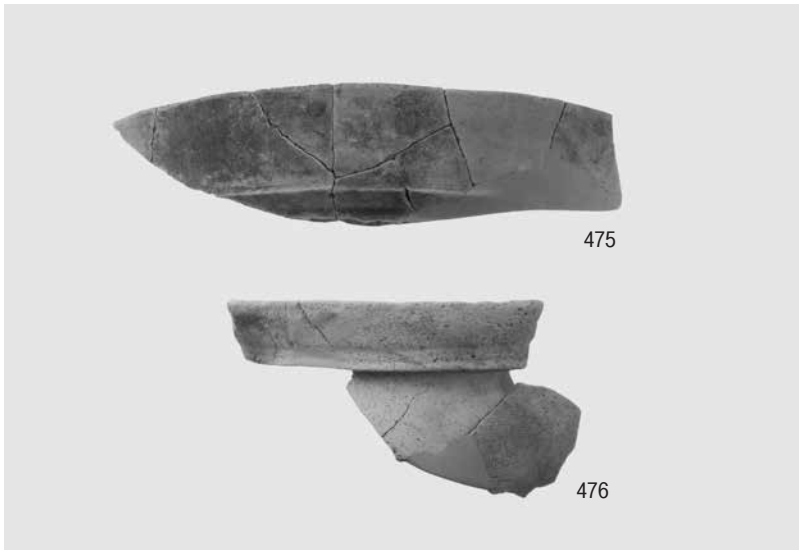
474

477

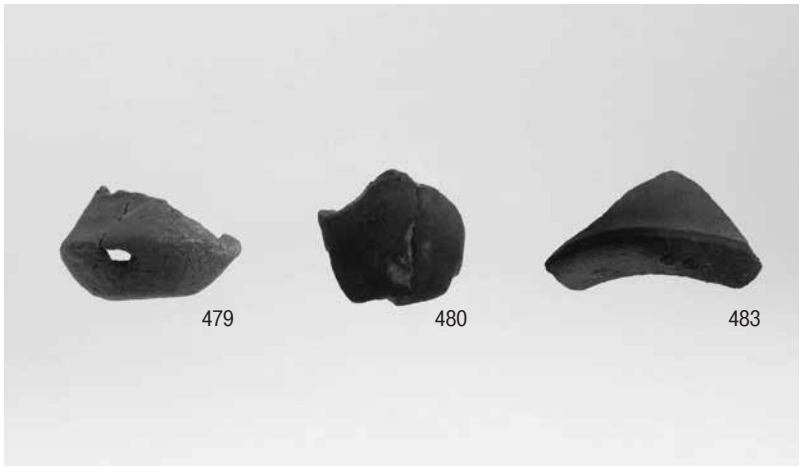
478

475

476



481

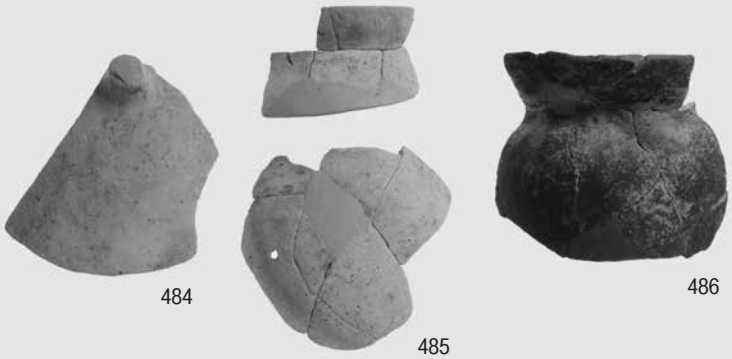

479
480
483

482

出土遺物(33)

写真図版72

490

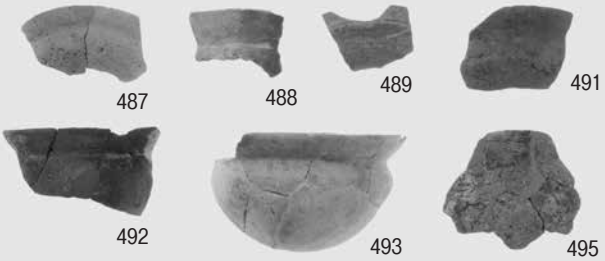


484

485

486

496



487

488

489

491

492

493

495

499

502

505

494

503

497

出土遺物(34)

498

504

500

509

501

508

516

出土遺物(35)

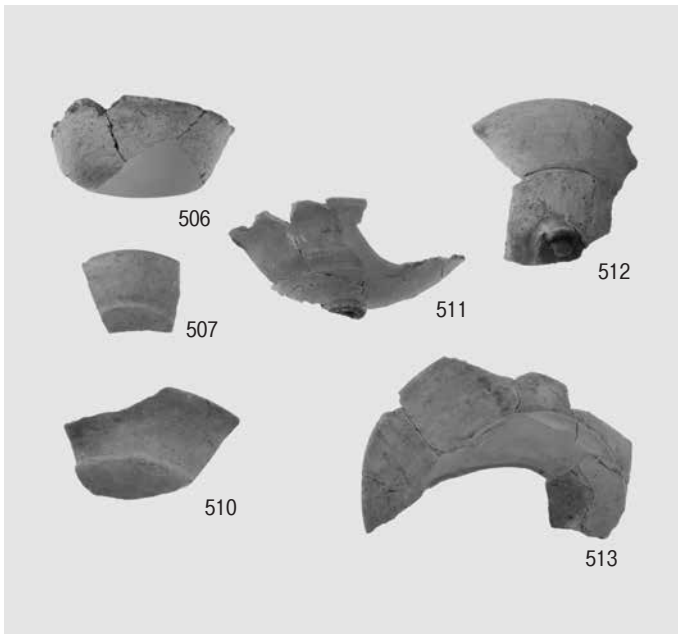
写真図版74

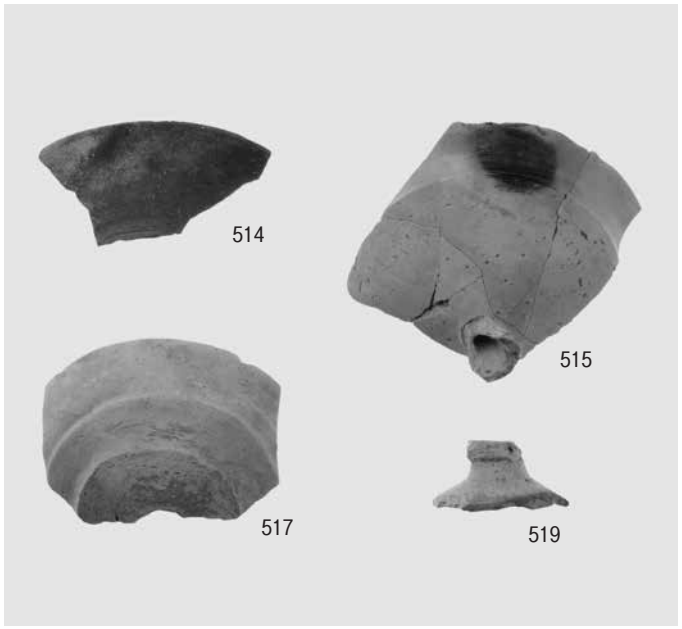
522

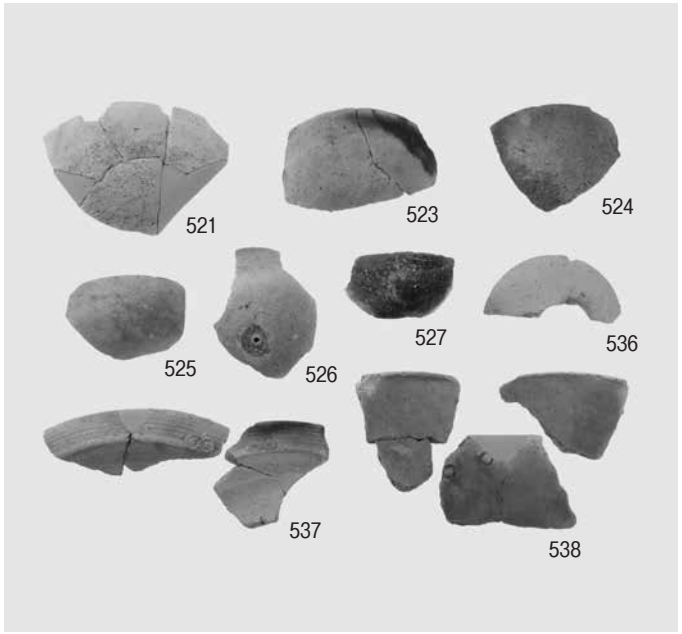
528

520

518



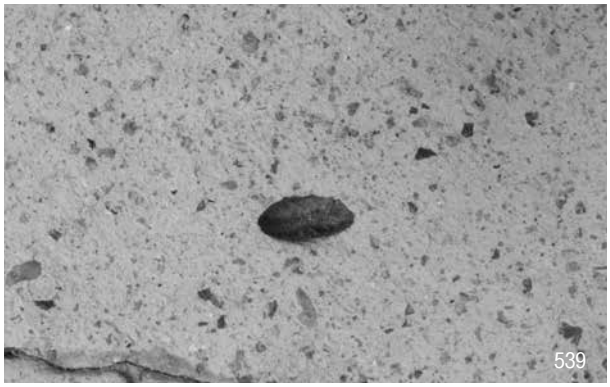




出土遺物(36)

529

533


539

530

534

531

写真図版76

542

543

544

545

546

540

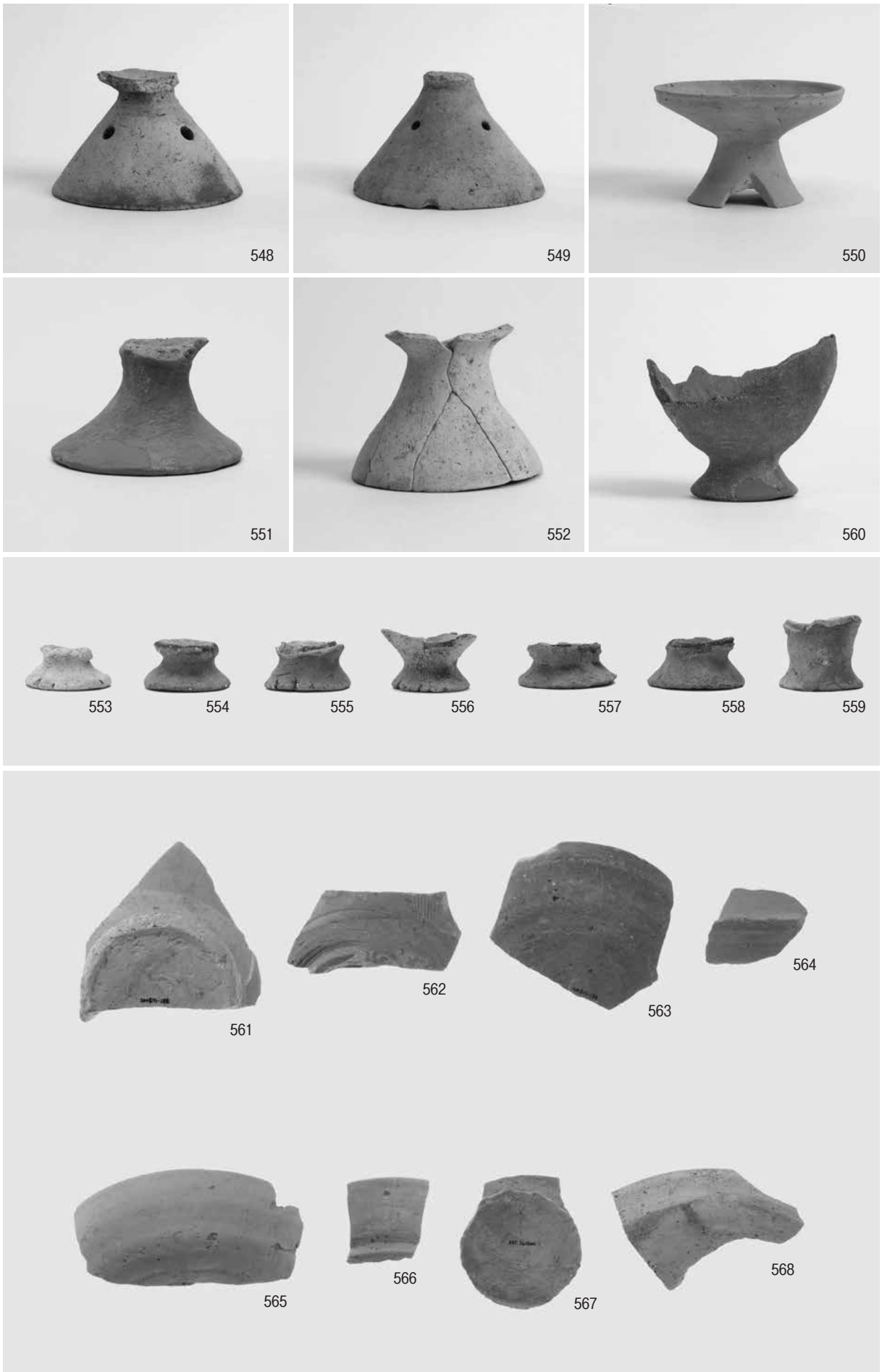
532

535

541

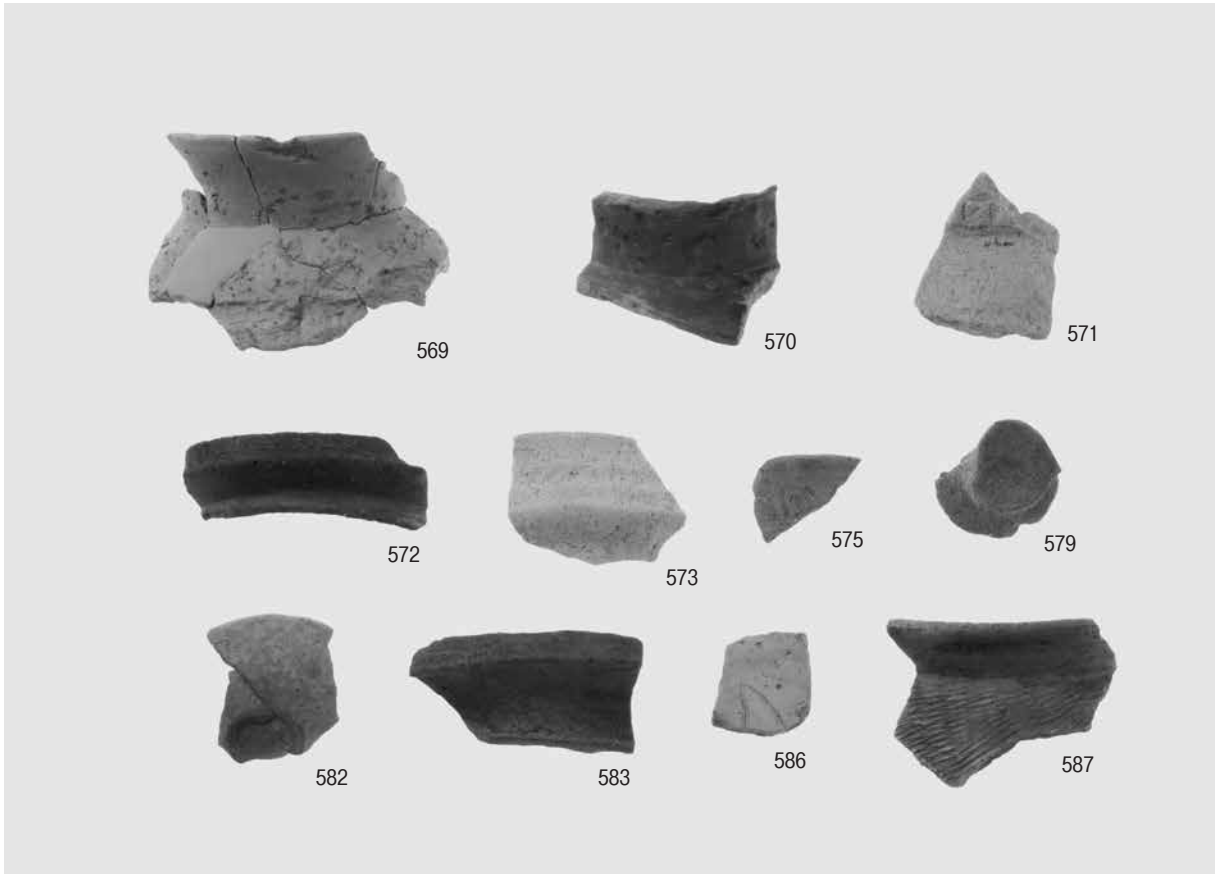
547

出土遺物(38)


548
549
550
551
552
560
553
554
555
556
557
558
559
561
562
563
564
565
566
567
568

出土遺物(39)

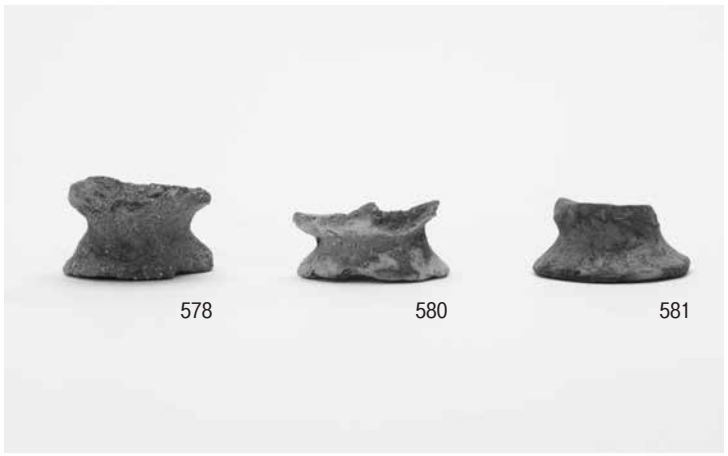
写真図版78



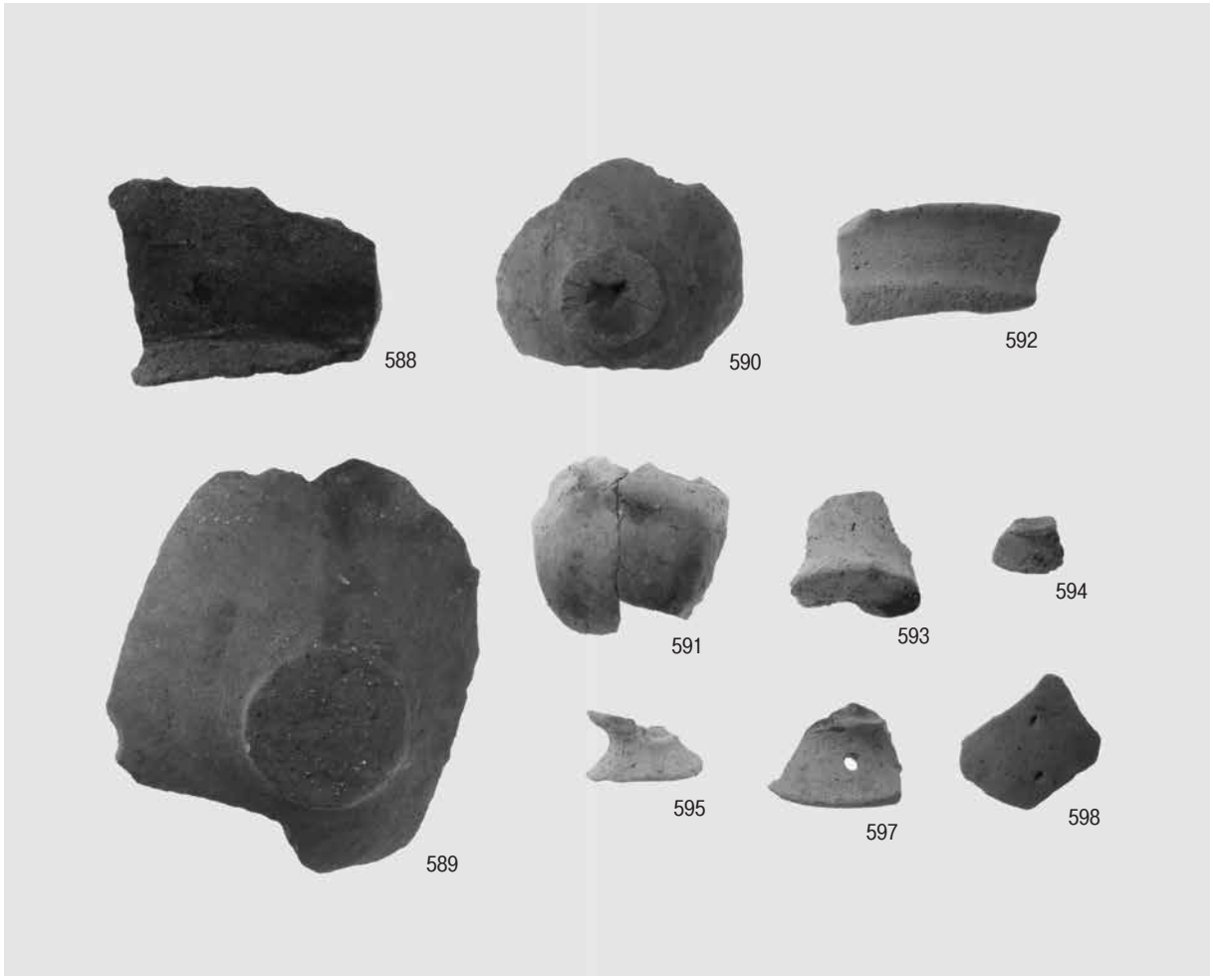
出土遺物(40)

583

596


578 580 581

584

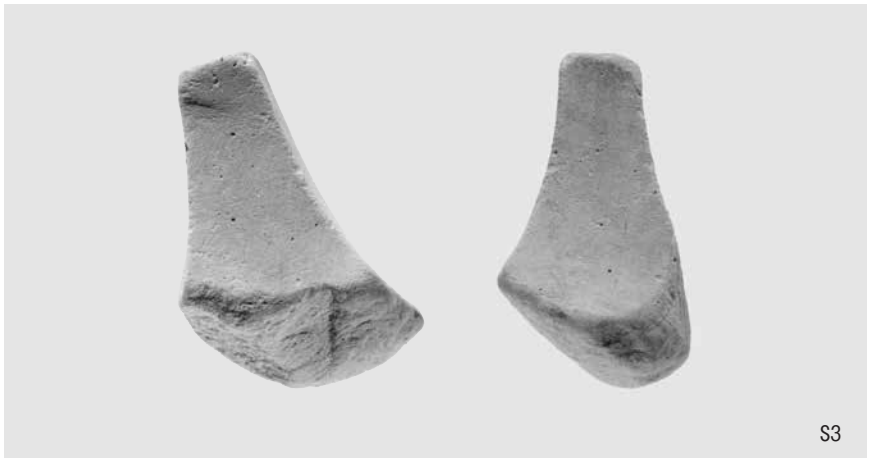

588 590 592 589 591 593 594 595 597 598

出土遺物(41)

写真図版80

S1

S2


S3

S4

竹の前遺跡

Ⅰ区全景（東から）

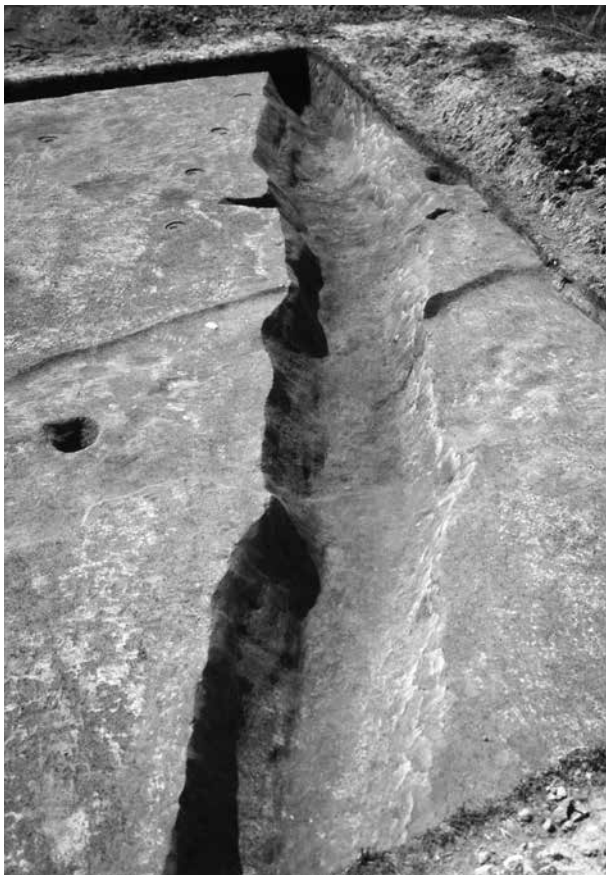
Ⅱ区全景（北から）

写真図版82

竹の前遺跡

SD02-a全景（南西から）

SD02-a中層土器出土状況（南西から）



SD02-a（北東から）

SD02-b（北東から）

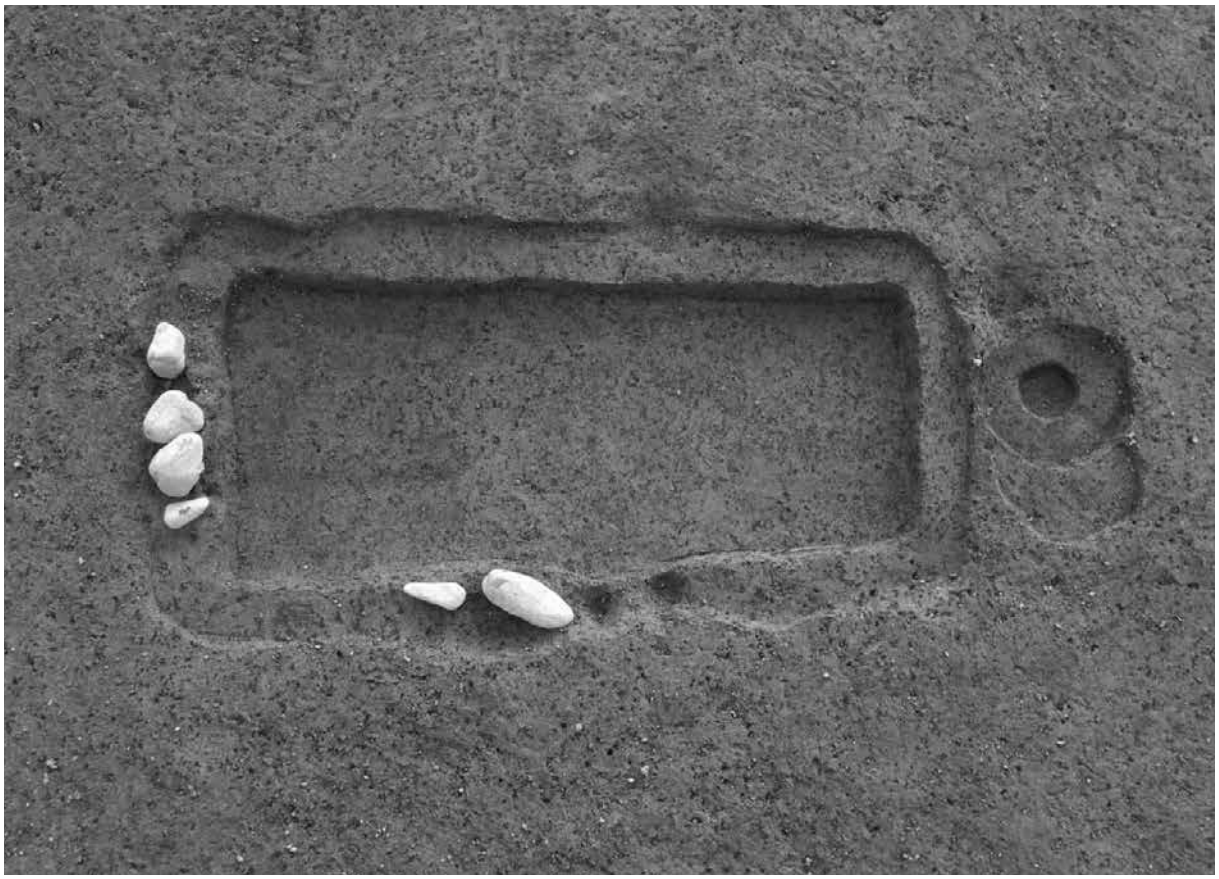
SD02土層断面（中央部・南西から）

SD02土層断面（北部・南から）

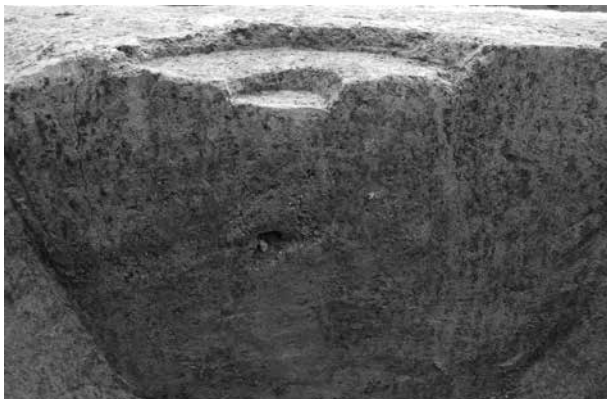
写真図版84

竹の前遺跡

SB02（北東から）



SX01（北東から）



SB01P2-1土層断面（西から）

SB02P1-1土層断面（東から）

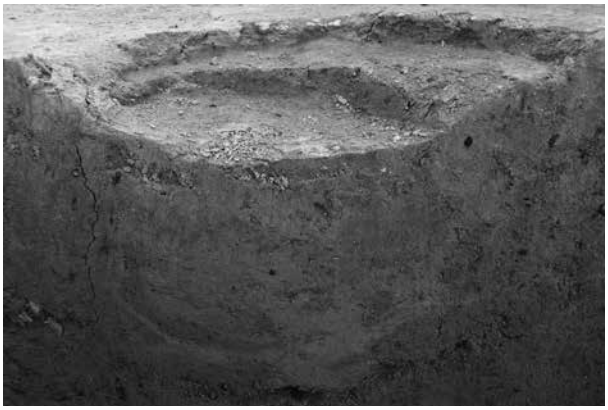
SB02P2-1土層断面（東から）

SB03P1-2土層断面（西から）

SA02P2土層断面（北から）

SA04P1土層断面（南西から）

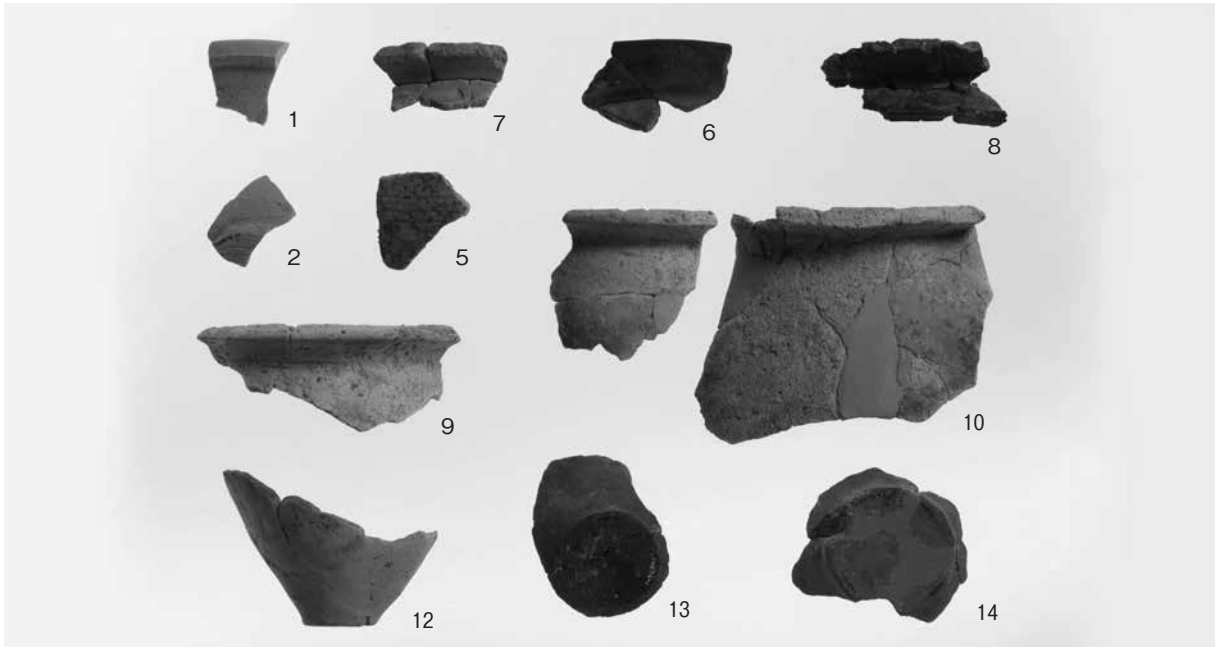
SA04P2土層断面（西から）



SA04P3土層断面（南西から）

写真図版86

竹の前遺跡



出土遺物(1)

竹の前遺跡

出土遺物(2)

写真図版88

竹の前遺跡

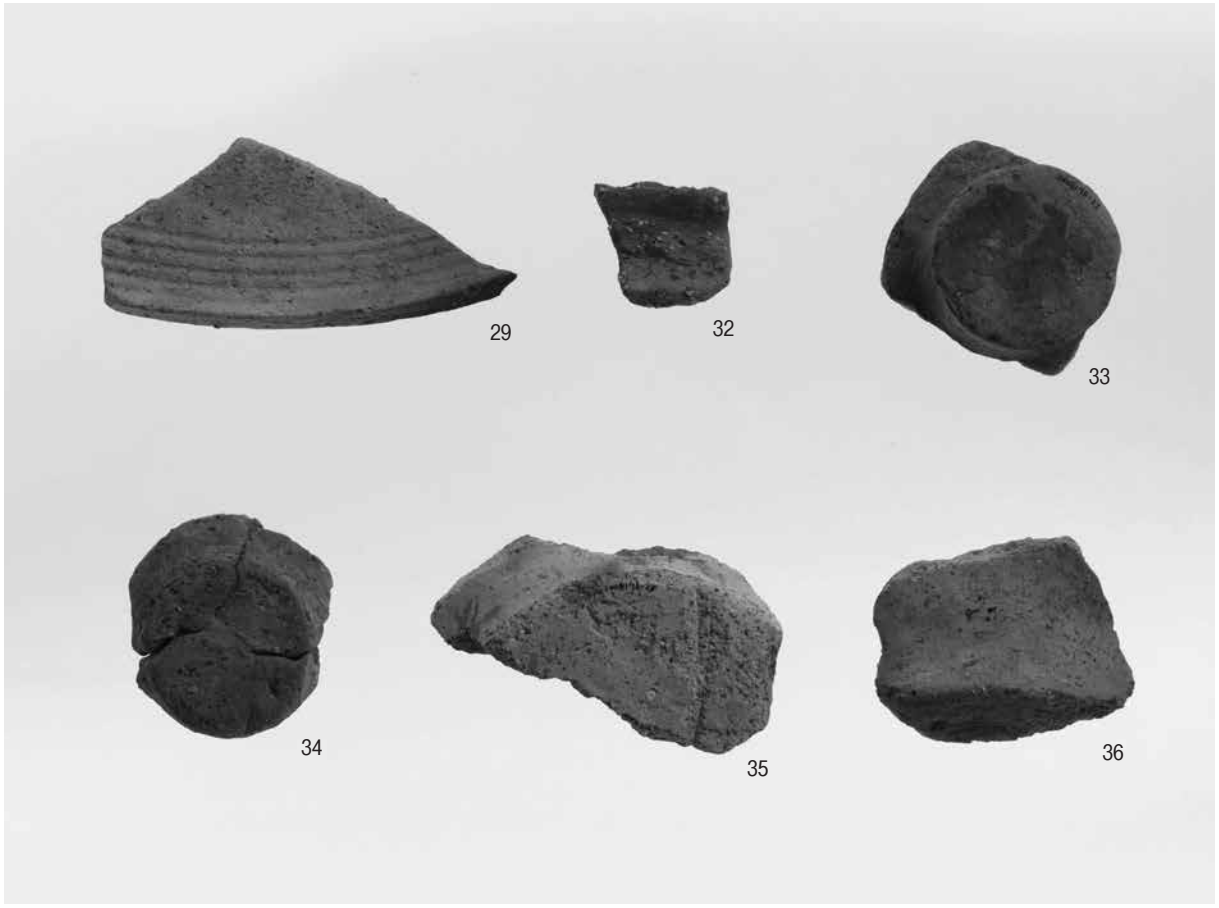
27

24

25

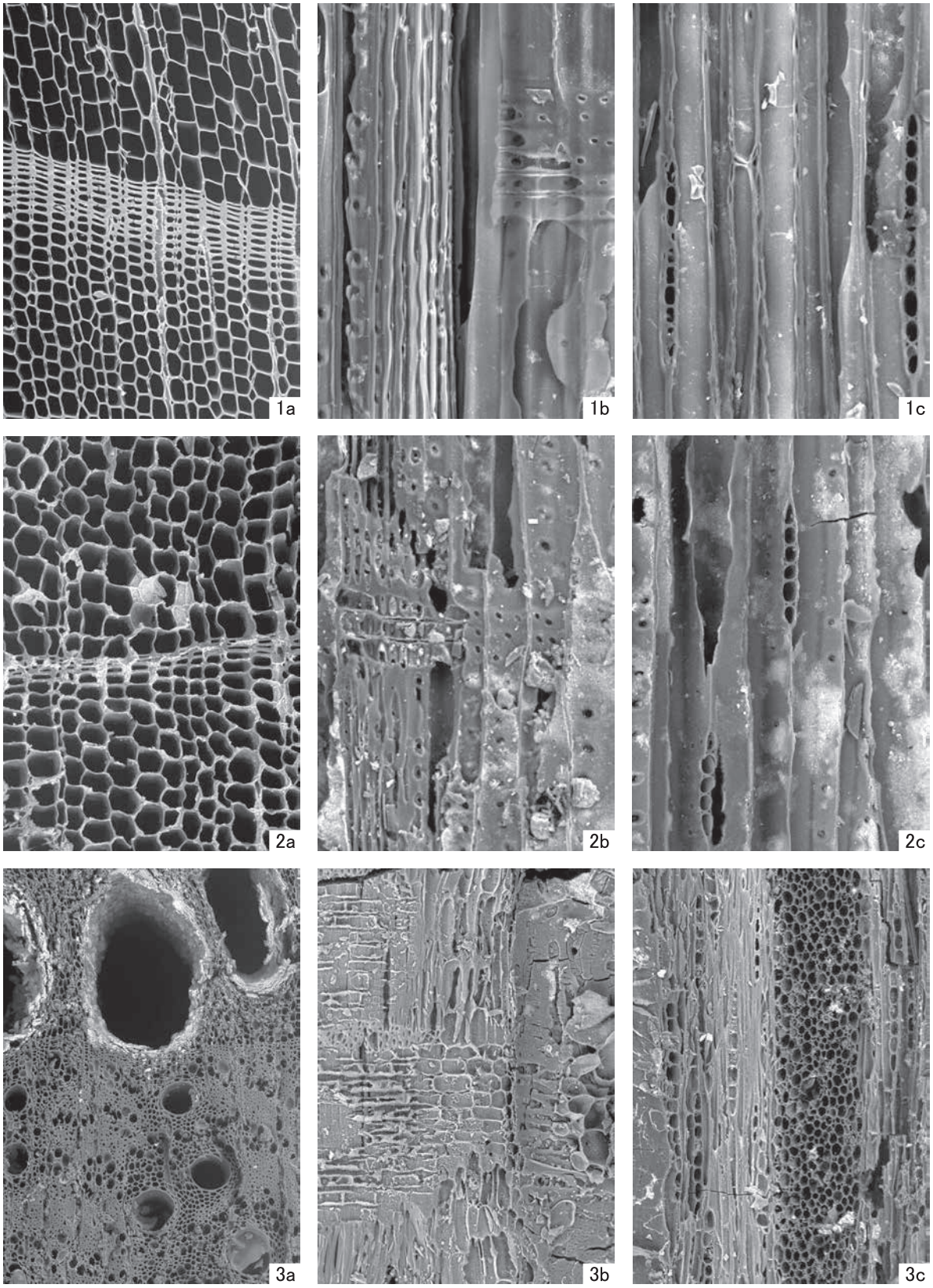
31

30



出土遺物(3)

炭化材(1)

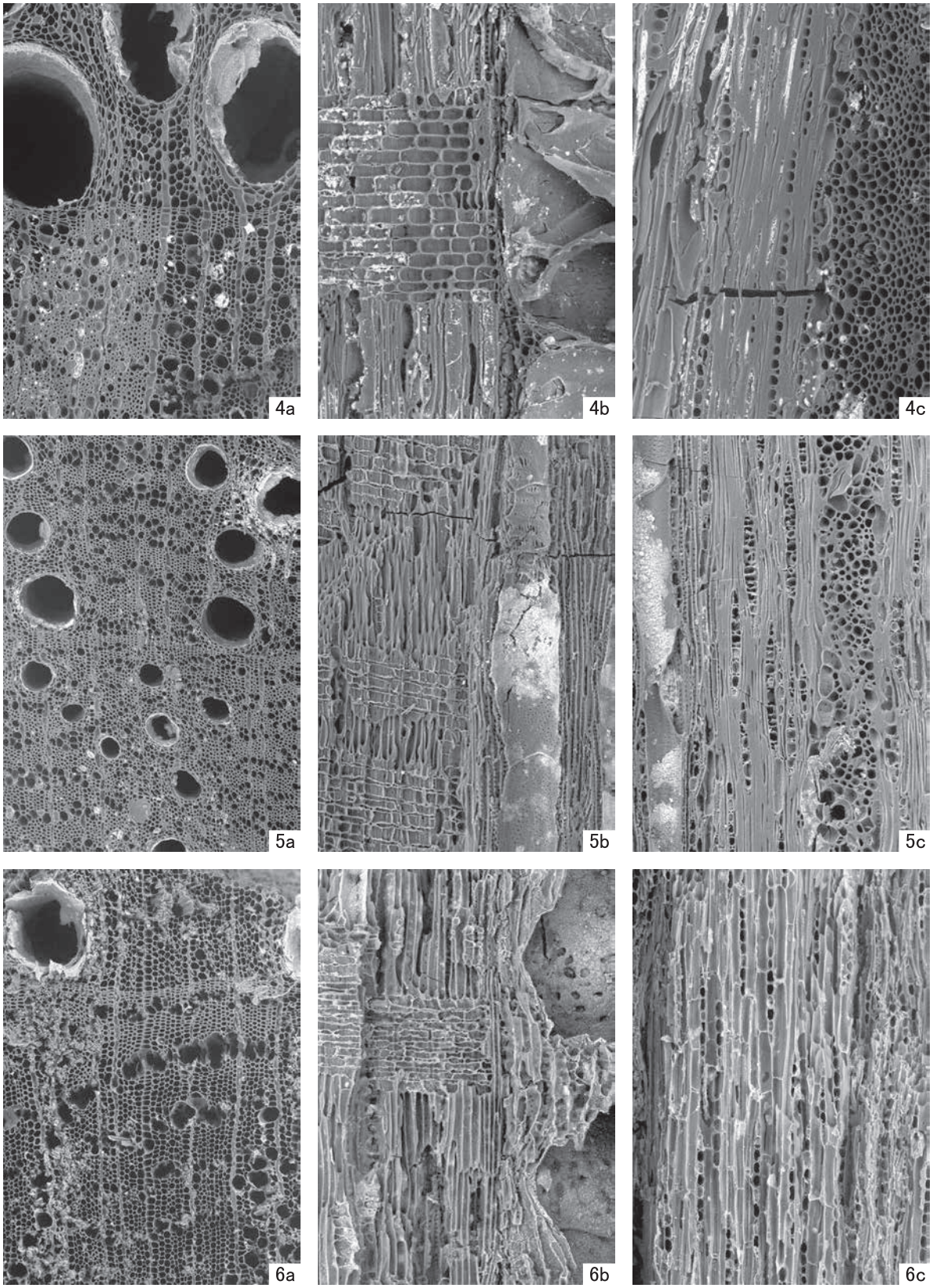


1.スギ(SH09)
2.ヒノキ(SH06)
3.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(SH01;壁)
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:3a
200 μ m:1−2a,3b,c
100 μ m:1−2b,c

写真図版90

炭化材(2)



4.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SH01;南東柱)
5.コナラ属アカガシ亜属(SH01;南西柱)
6.スダジイ(SH06)
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

報告書抄録

ふりがな	ながこしいせき
書名	長越遺跡Ⅲ
副書名	（二）船場川水系船場川　流域治水対策事業
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第432冊
編著者名	渡辺　昇・上田健太郎
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1　　TEL 079(437)5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10-1
発行年月日	2012年3月

所収遺跡名	所在地	コード				調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号	北緯	東経			
長越遺跡								
確認調査	兵庫県姫路市飯田	28201	2003076	34°48′52″	134°40′15″	2000.7.13～8.17	62㎡	（二）船場川水系船場川　流域治水対策事業
本発掘調査			2008171			2009.2.2～3.24	440㎡	
			遺跡番号					
			020414					
竹の前遺跡				34°48′58″	134°40′35″			
本発掘調査	兵庫県姫路市手柄		調査番号					
			2008175			2009.2.21～3.10	80㎡	
			遺跡番号					
			020435					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長越遺跡	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居跡・落ち込み・溝	古式土師器	
竹の前遺跡	集落跡	弥生時代後期	建物・溝	弥生土器	
		奈良時代	柱穴列	瓦	
		平安時代	掘立柱建物・柱穴列・溝	須恵器・陶磁器	

要約	長越遺跡は弥生時代終末から古墳時代にかけての兵庫県を代表する集落跡である。その東側の調査で、14棟の竪穴住居跡を調査した。狭い部分に集中して住居が築かれている。以前調査部分よりも新しい時期に集中して住居が築かれていたようである。庄内甕は保有しているが、搬入土器に変化が見られる。 竹の前遺跡は弥生時代後期の溝が検出されている。後期前半の古い集落跡で長越遺跡に先行し、畑田遺跡などとともに後期集落を考えるのに重要な資料である。

兵庫県文化財調査報告　第 432 冊

姫路市

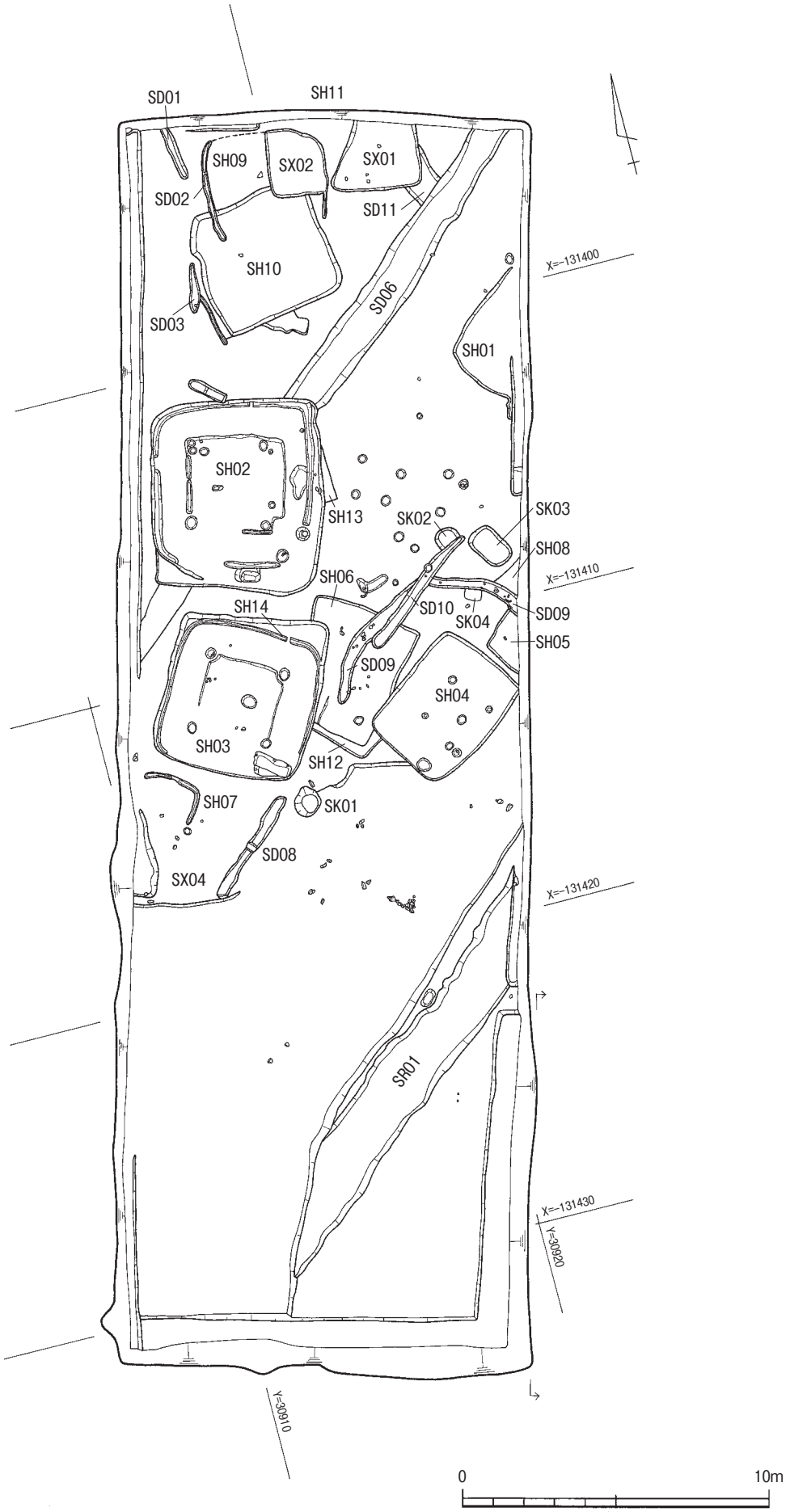
長越遺跡 Ⅲ

（飯田湯田遺跡）

2012 年 3 月 20 日発行

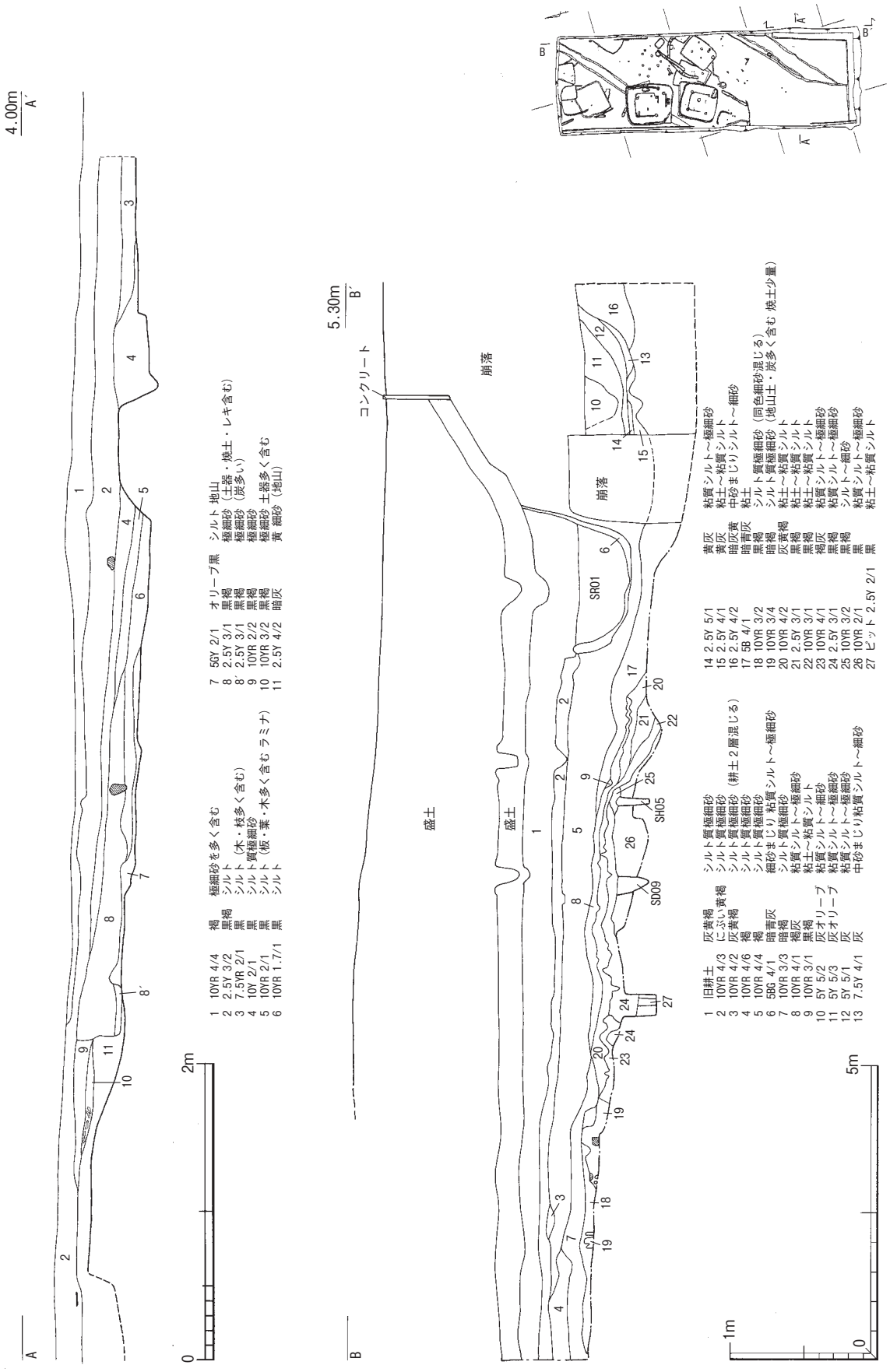
編　集　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
〒 675-0142　加古郡播磨町大中 1 － 1 － 1
発　行　兵庫県教育委員会
〒 650－8567　神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号
印　刷　富士高速印刷株式会社

図　版


SD01
SH11
SH09
SX02
SX01
SD02
SD11
SH10
SD06
SD03
X=-131400
SH01
SH02
SH13
SK02
SK03
SH08
X=-131410
SH06
SD10
SD09
SH14
SK04
SH05
SD09
SH04
SH03
SH12
SH07
SK01
SD08
SX04
X=-131420
SR01
X=-131430
Y=30920
Y=30910
0
10m

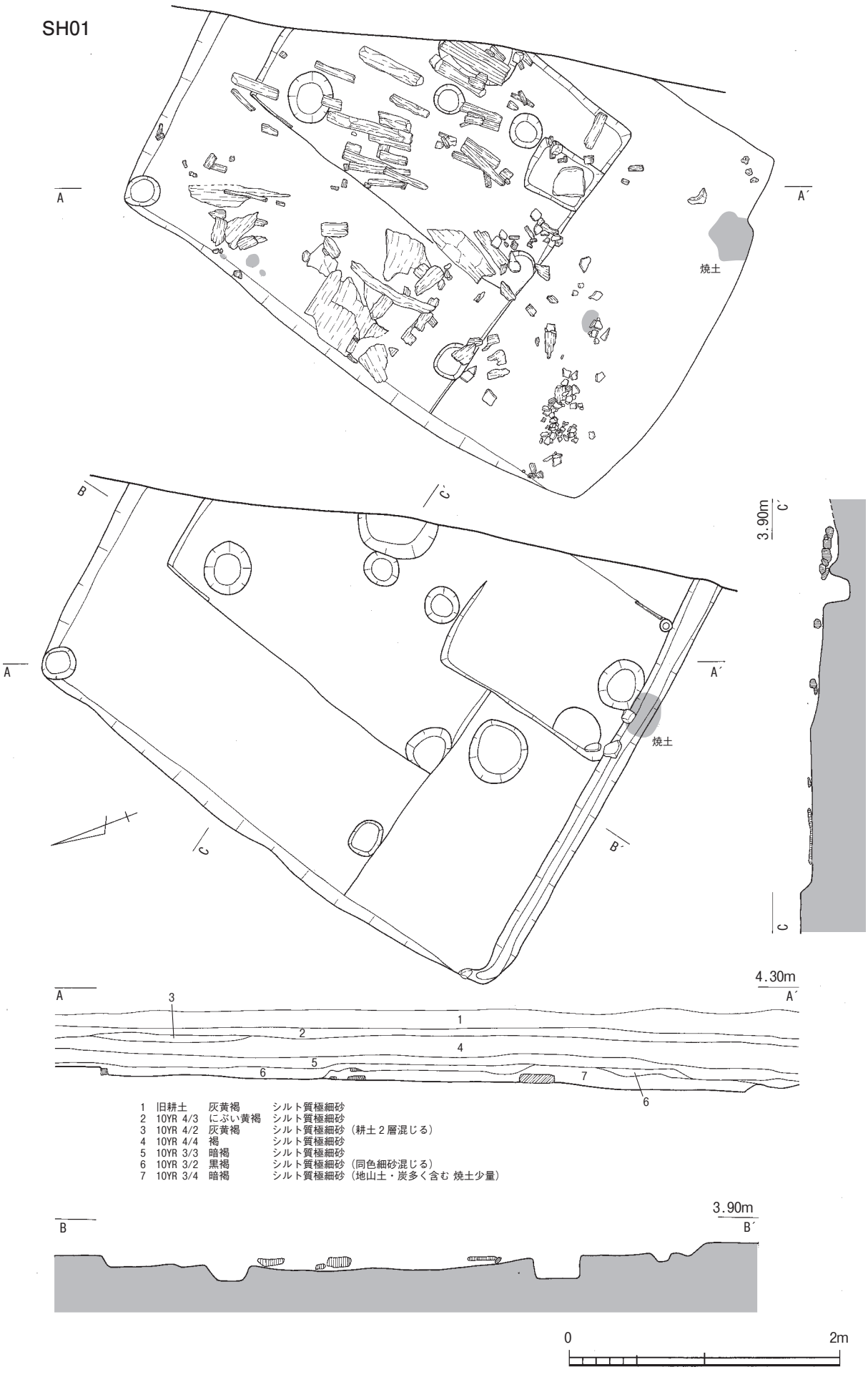
調査区平面図

図版 2


4.00m
A
A'
1 10YR 4/4 褐 極細砂を多く含む
2 2.5Y 3/2 黒褐 シルト (木・枝多く含む)
3 7.5YR 2/1 黒 シルト質極細砂
4 10Y 2/1 黒 シルト質極細砂
5 10YR 2/1 黒 シルト (板・葉・木多く含む ラミナ)
6 10YR 1.7/1 黒 シルト
7 5GY 2/1 オリーブ黒 シルト 地山
8 2.5Y 3/1 黒褐 極細砂 (土器・焼土・レキ含む)
8' 2.5Y 3/1 黒褐 極細砂 (炭多い)
9 10YR 2/2 黒褐 極細砂
10 10YR 3/2 黒褐 極細砂 土器多く含む
11 2.5Y 4/2 暗灰 黄 細砂 (地山)
0
2m
5.30m
B
B'
コンクリート
崩落
盛土
SR01
SH05
SD09
1 旧耕土 灰黄褐 シルト質極細砂
2 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
3 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質極細砂 (耕土 2 層混じる)
4 10YR 4/6 褐 シルト質極細砂
5 10YR 4/4 褐 シルト質極細砂
6 5B6 4/1 暗青灰 細砂まじり 粘質シルト～極細砂
7 10YR 3/3 暗褐 シルト質極細砂
8 10YR 4/1 褐灰 粘質シルト～極細砂
9 10YR 3/1 黒褐 粘土～粘質シルト
10 5Y 5/2 灰オリーブ 粘質シルト～細砂
11 5Y 5/3 灰オリーブ 粘質シルト～極細砂
12 5Y 5/1 灰 粘質シルト～極細砂
13 7.5Y 4/1 灰 中砂まじり粘質シルト～細砂
14 2.5Y 5/1 黄灰 粘質シルト～極細砂
15 2.5Y 4/1 黄灰 粘土～粘質シルト
16 2.5Y 4/2 暗灰黄 中砂まじりシルト～細砂
17 5B 4/1 暗青灰 粘土
18 10YR 3/2 黒褐 シルト質極細砂 (同色細砂混じる)
19 10YR 3/4 暗褐 シルト質極細砂 (地山土・炭多く含む 焼土少量)
20 10YR 4/2 灰黄褐 粘土～粘質シルト
21 2.5Y 3/1 黒褐 粘土～粘質シルト
22 10YR 3/1 黒褐 粘土～粘質シルト
23 10YR 4/1 褐灰 粘質シルト～極細砂
24 2.5Y 3/1 黒褐 粘質シルト～極細砂
25 10YR 3/2 黒褐 シルト～細砂
26 10YR 2/1 黒 粘質シルト～極細砂
27 ヒット 2.5Y 2/1 黒 粘土～粘質シルト
0
1m
5m

土層断面図

SH01

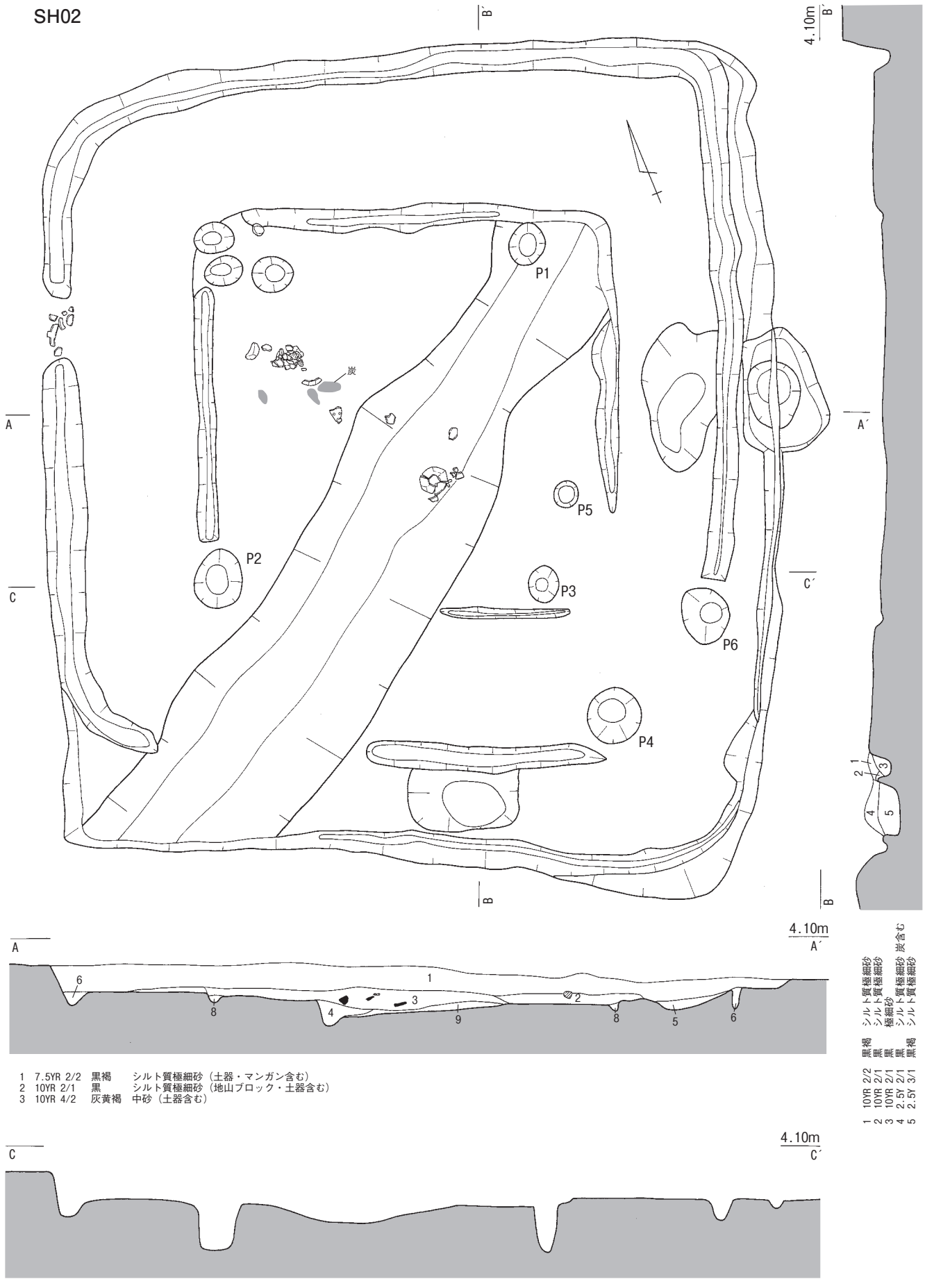


1 旧耕土 灰黄褐 シルト質極細砂
2 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
3 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質極細砂（耕土 2 層混じる）
4 10YR 4/4 褐 シルト質極細砂
5 10YR 3/3 暗褐 シルト質極細砂
6 10YR 3/2 黒褐 シルト質極細砂（同色細砂混じる）
7 10YR 3/4 暗褐 シルト質極細砂（地山土・炭多く含む 焼土少量）

0 2m

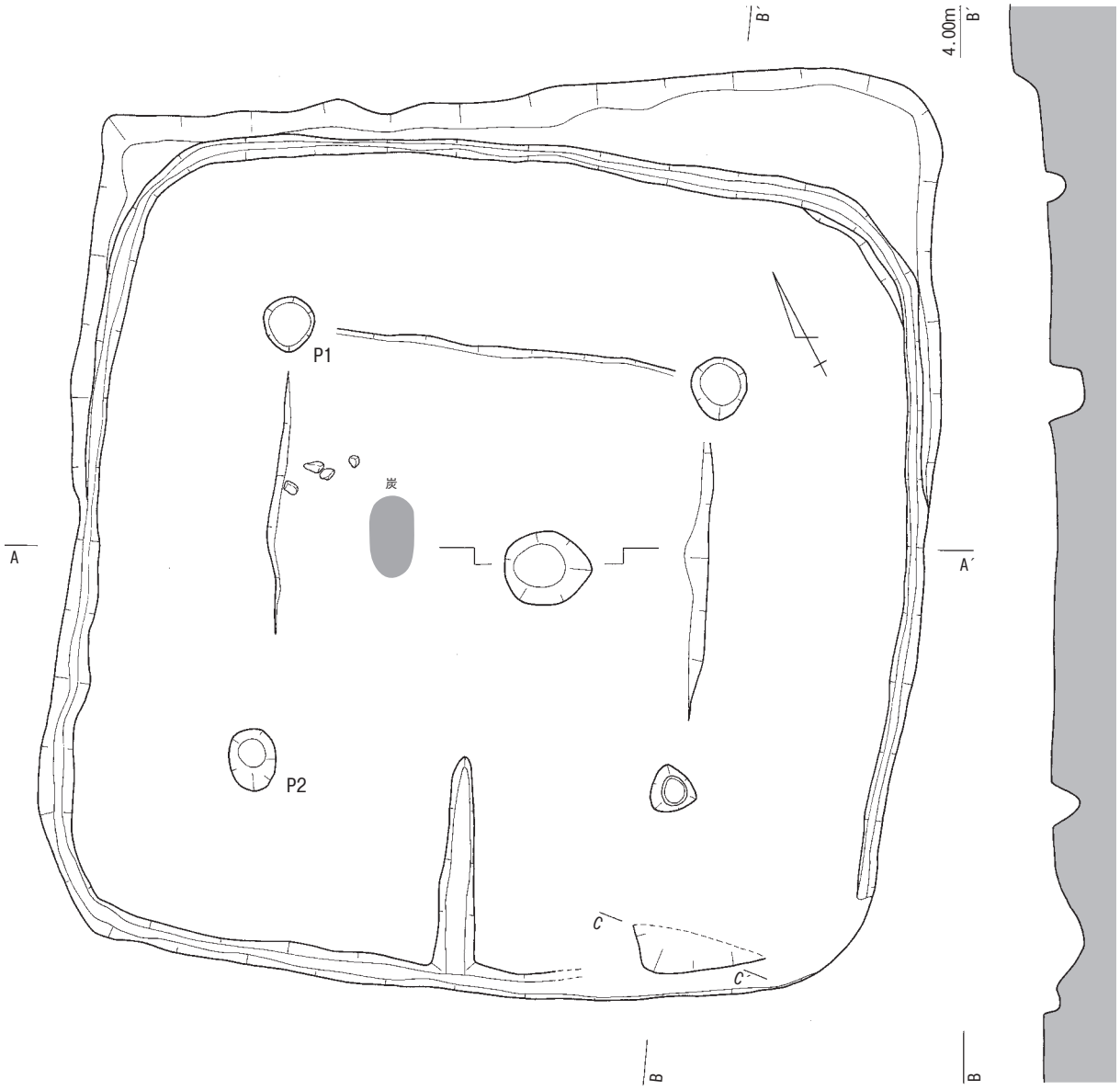
SH01実測図

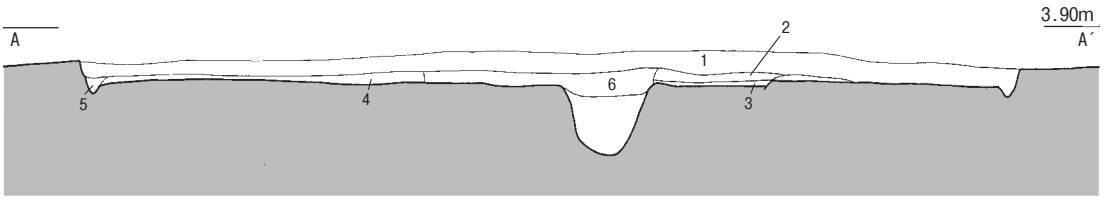
図版 4


SH02
P1
P2
P3
P4
P5
P6
炭
A
A´
B
B´
C
C´
4.10m
1 7.5YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂（土器・マンガン含む）
2 10YR 2/1 黒 シルト質極細砂（地山ブロック・土器含む）
3 10YR 4/2 灰黄褐 中砂（土器含む）
1 10YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂
2 10YR 2/1 黒 シルト質極細砂
3 10YR 2/1 黒 極細砂
4 2.5Y 2/1 黒 シルト質極細砂 炭含む
5 2.5Y 3/1 黒褐 シルト質極細砂
0
2m

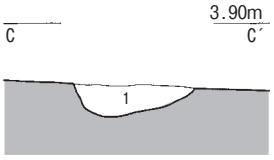
SH02実測図

SH03





1 10YR 2/3 黒褐 シルト質極細砂（地山土含む）
2 10YR 3/1 黒褐 シルト質極細砂（地山土含む）
3 10YR 2/1 黒 シルト質極細砂（炭含む）
4 10YR 4/2 褐灰 シルト質極細砂（地山土含む）
5 10YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂
6 10YR 3/1 黒褐 シルト質極細砂（炭含む）

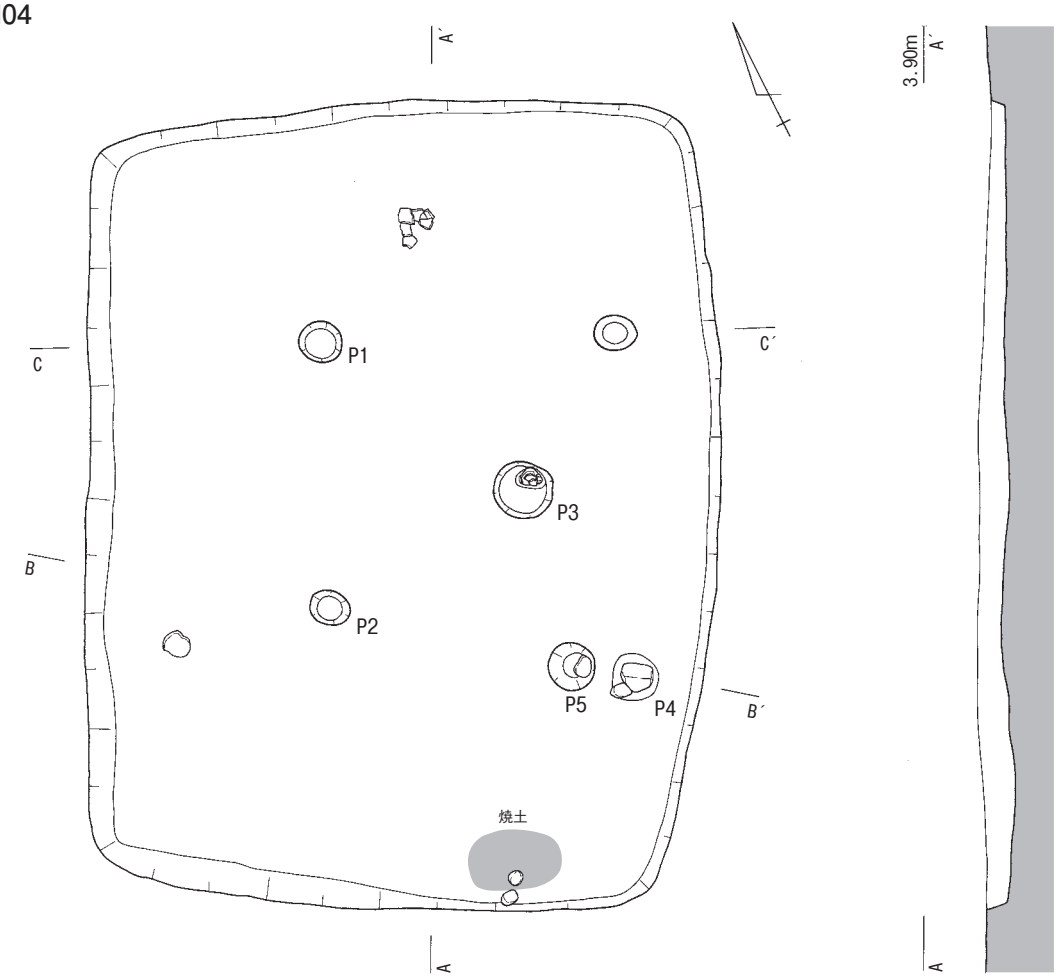


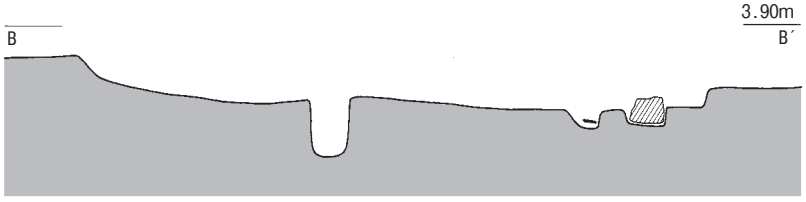
1 2.5Y 1/2 黒 シルト質極細砂（炭・地山土ブロック多く入る）

SH03実測図

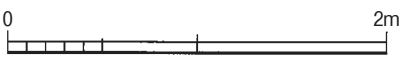
図版 6

SH04

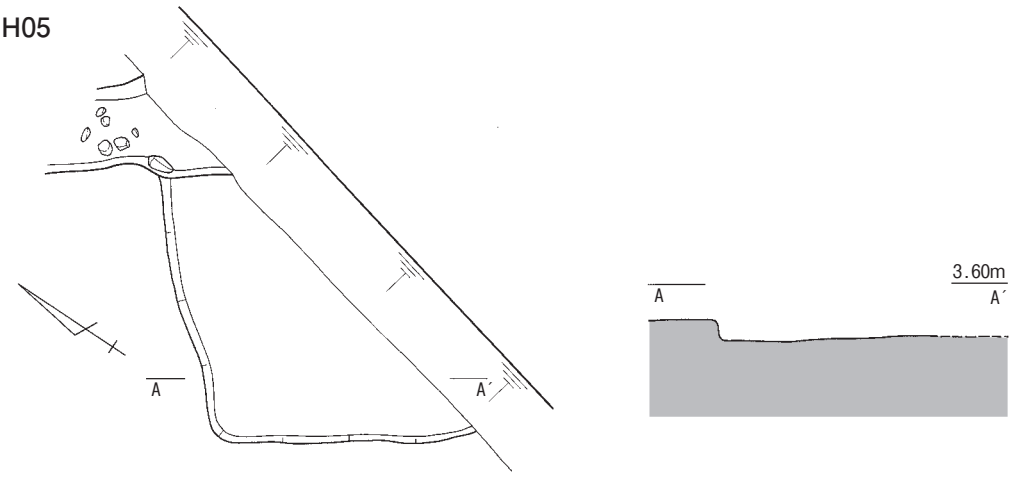




SH04実測図



SH05

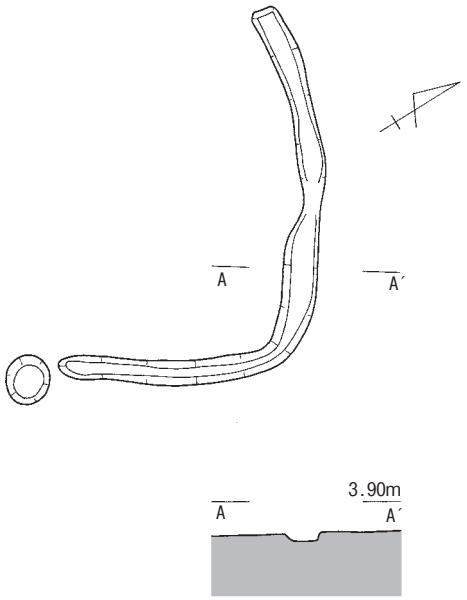


SH06

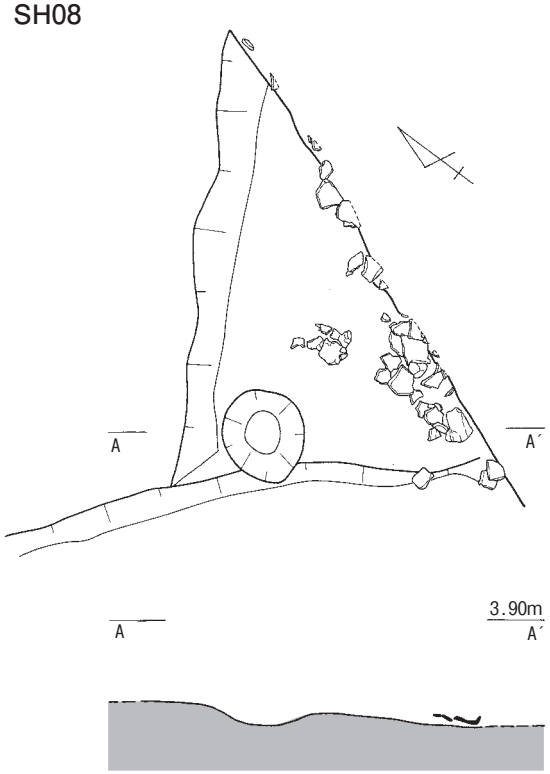
SH05・SH06実測図

図版 8

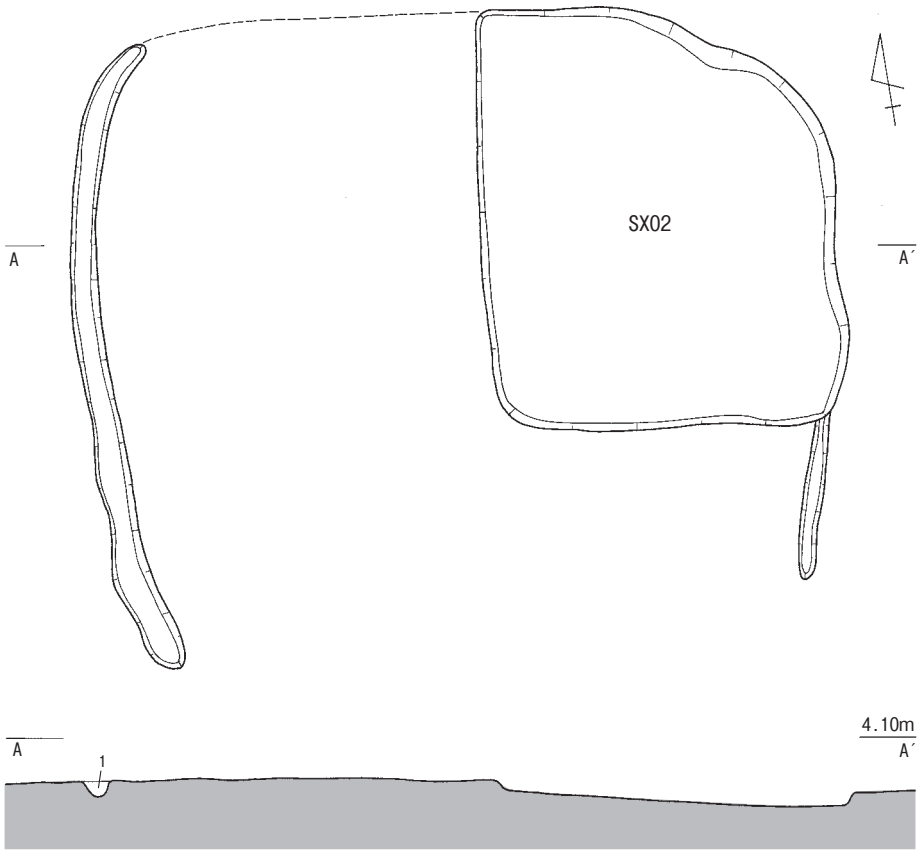
SH07



SH08



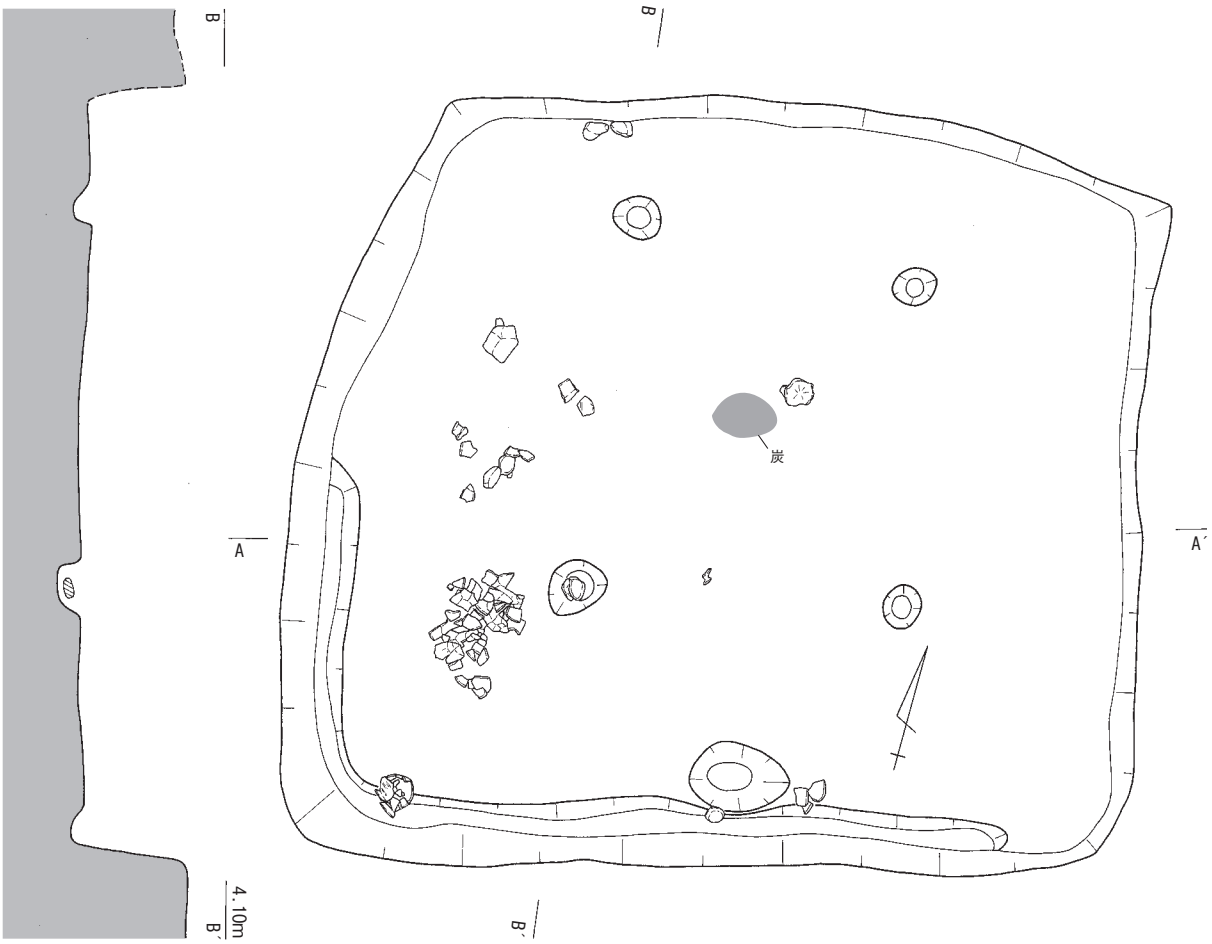
SH09

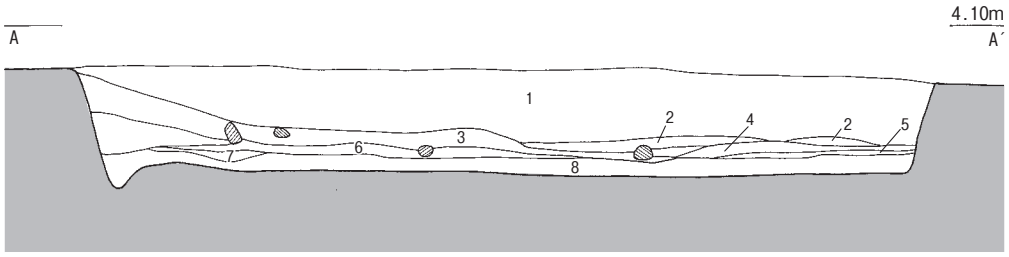


1　7.5Y 2/2　オリーブ黒　シルト質極細砂

SH07～SH09実測図

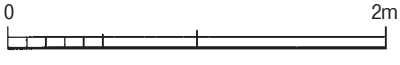
SH10





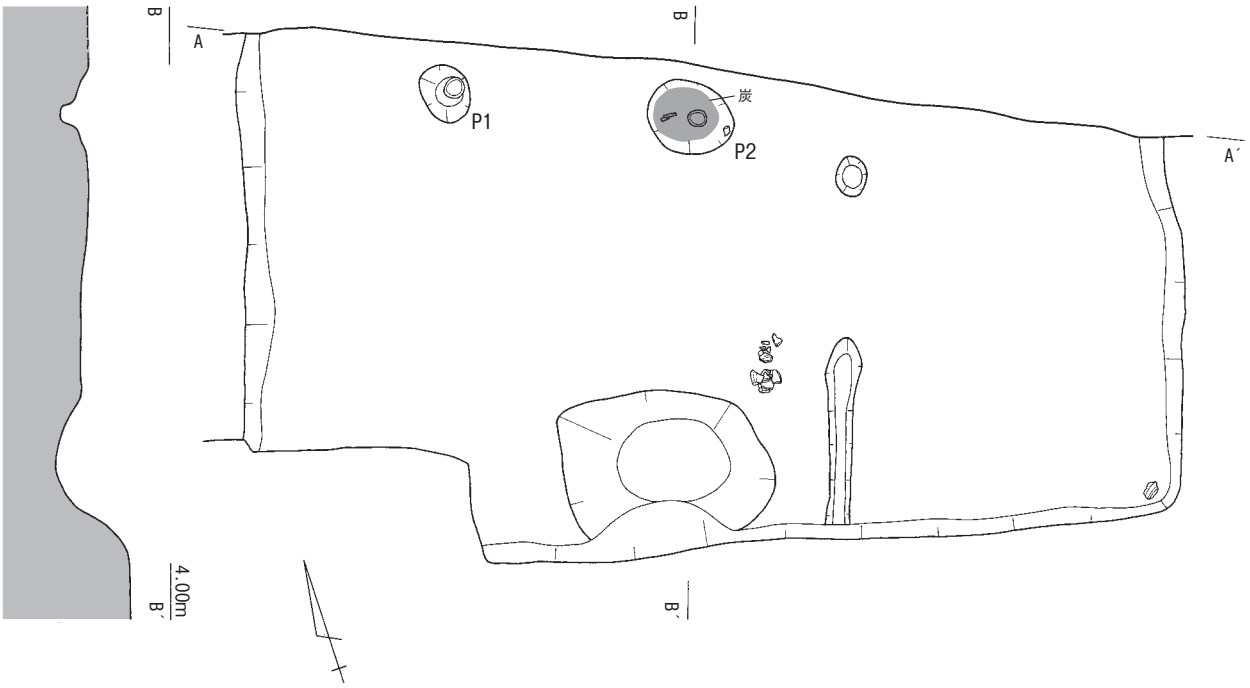
1 10YR 3/3 暗褐 シルト質極細砂（地山土・炭・10YR 4/1 褐灰 シルトのブロック多く含む）
（10YR 5/6 黄褐 シルト質極細砂）
2 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂（地山ブロック多く・炭少量含む）
3 10YR 4/4 褐 シルト質極細砂（地山ブロック多く・炭少量含む）
4 2.5Y 4/3 オリーブ褐 細砂
5 2.5Y 4/1 黄灰 シルト質極細砂（地山土含む）
5´ 2.5Y 4/1 黄灰 シルト質極細砂（地山土含む）
6 2.5Y 3/1 黒褐 シルト
7 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 シルト質極細砂（地山土含む）
8 10YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂（地山土含む）

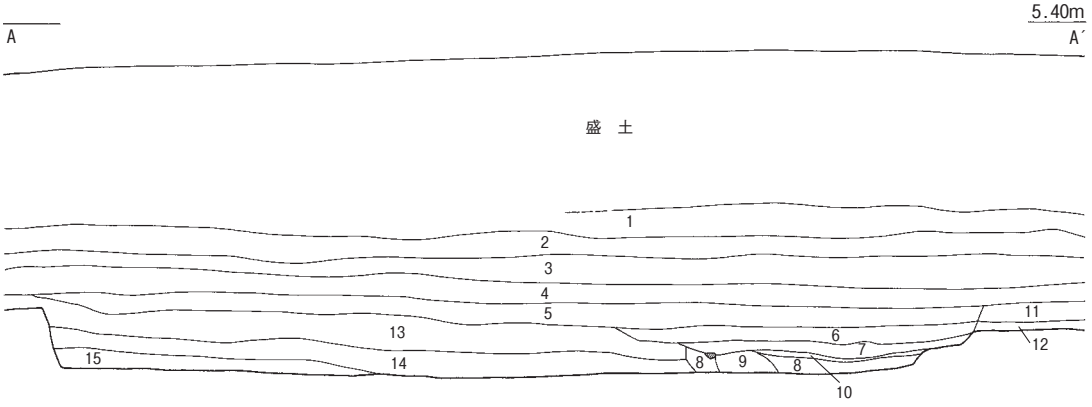
SH10実測図



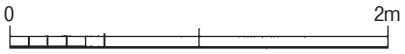
図版10

SH11



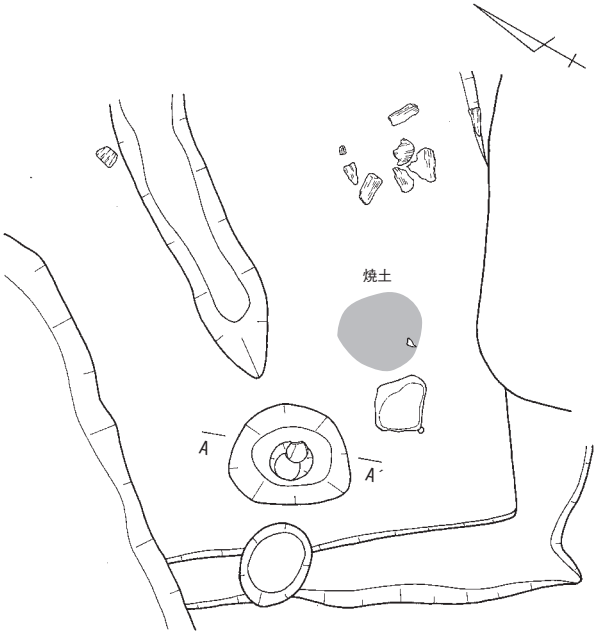


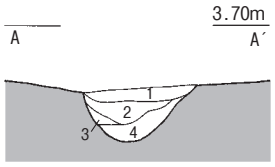
1 耕土
2 5Y 5/3 オリーブ黄 シルト質極細砂
3 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
4 10YR 3/3 暗褐 シルト質極細砂 (Mn含む)
5 10YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂
6 10YR 3/2 黒褐 シルト質極細砂 (Mn含む) ———— SX01
7 10YR 4/1 褐灰 シルト質極細砂 (粘性強い)
8 10YR 3/1 黒褐 シルト質極細砂 (地山土・炭含む) ———— SD11
9 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質極細砂 (7層・地山土多く含む)
10 10YR 4/1 褐灰 細～中砂 (ラミナ状になる) ———— SD11
11 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質極細砂
12 地山土 (上から影響を受けた部分)
13 5層と地山が混じった層 (5層が多い 7～8割)
14 5層と地山が混じった層 (地山が多い 6割位)
15 2.5Y 4/1 黄灰 シルト質極細砂 (炭含む)



SH11実測図

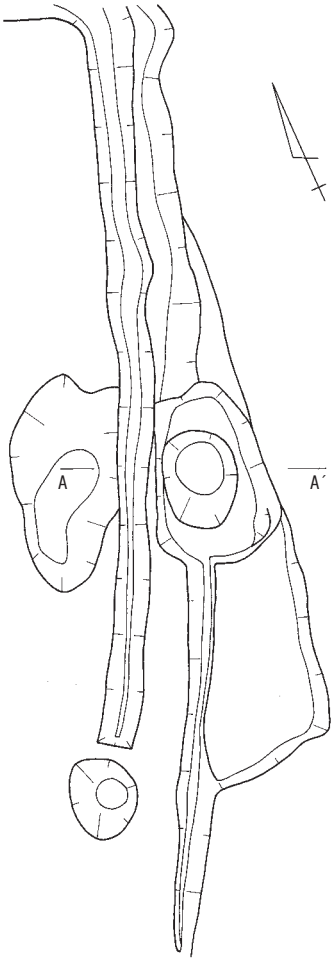
SH12



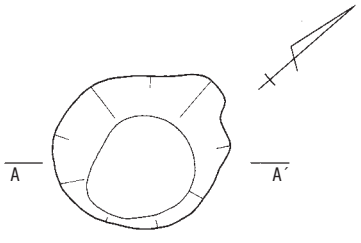


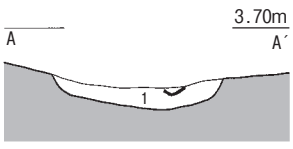
1　7.5YR 2.2　黒褐　シルト質極細砂（地山・炭・焼土・レキ含む）
2　10YR 1.7/1　黒　シルト質極細砂（地山・炭・焼土含む）
3　5Y 2/1　黒　シルト質極細砂（焼土・炭含む）
4　2.5GY 2/1　黒　シルト質極細砂（炭・土器含む）

SH13



SK01

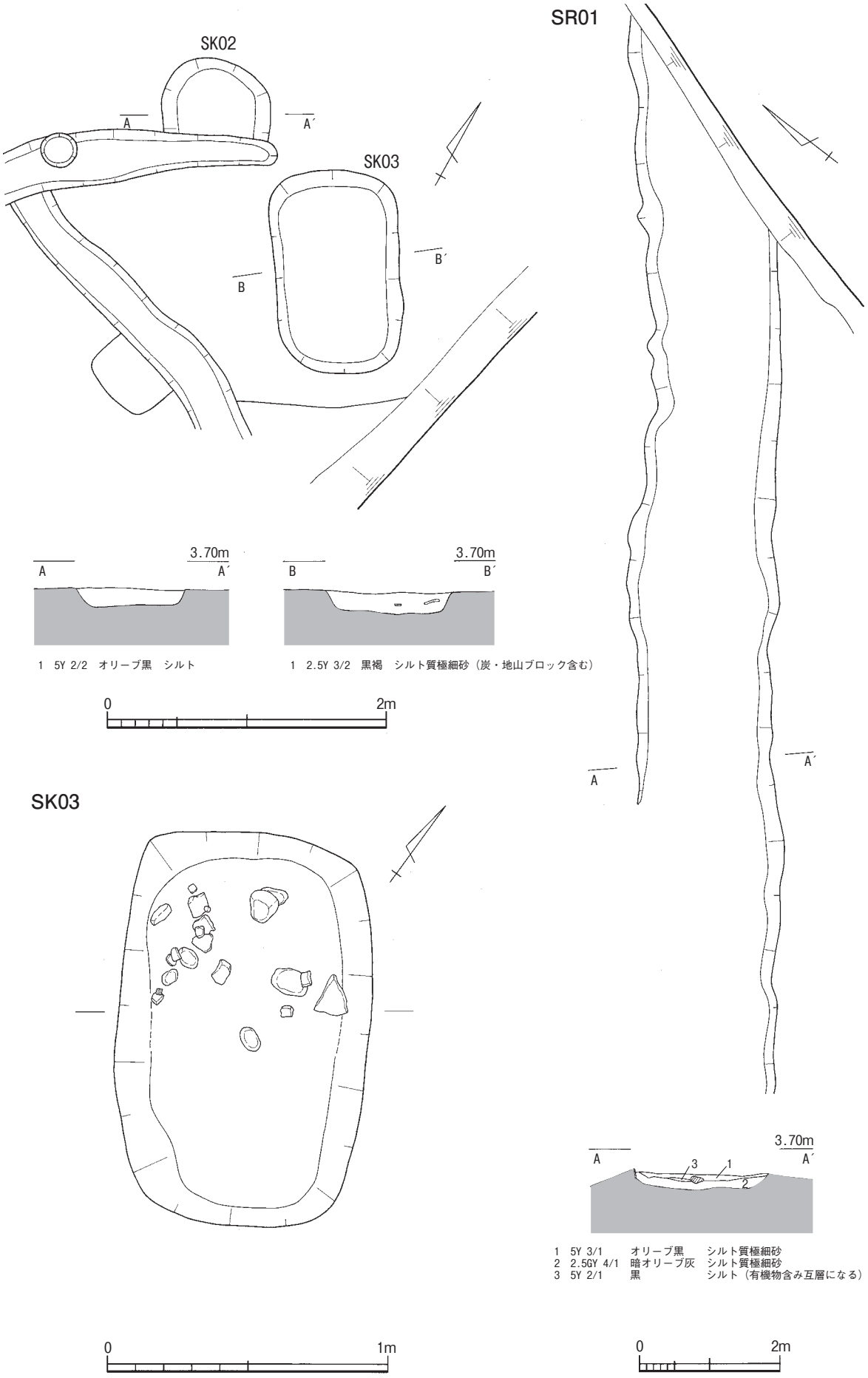




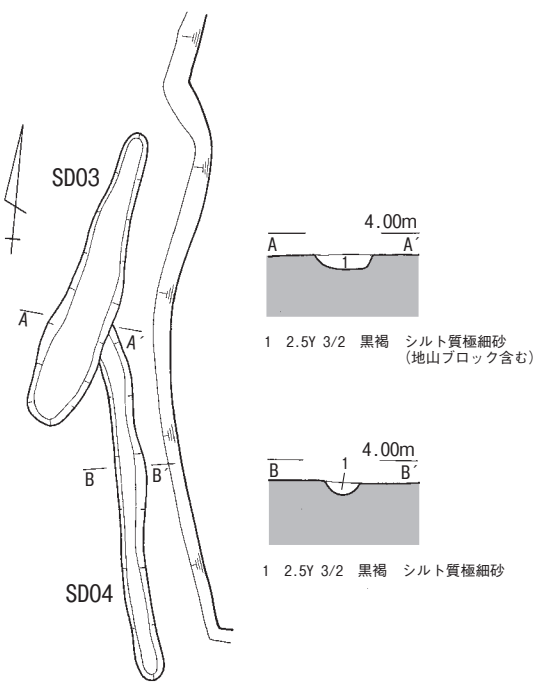
1　5Y 2/2　オリーブ黒　シルト 炭含む

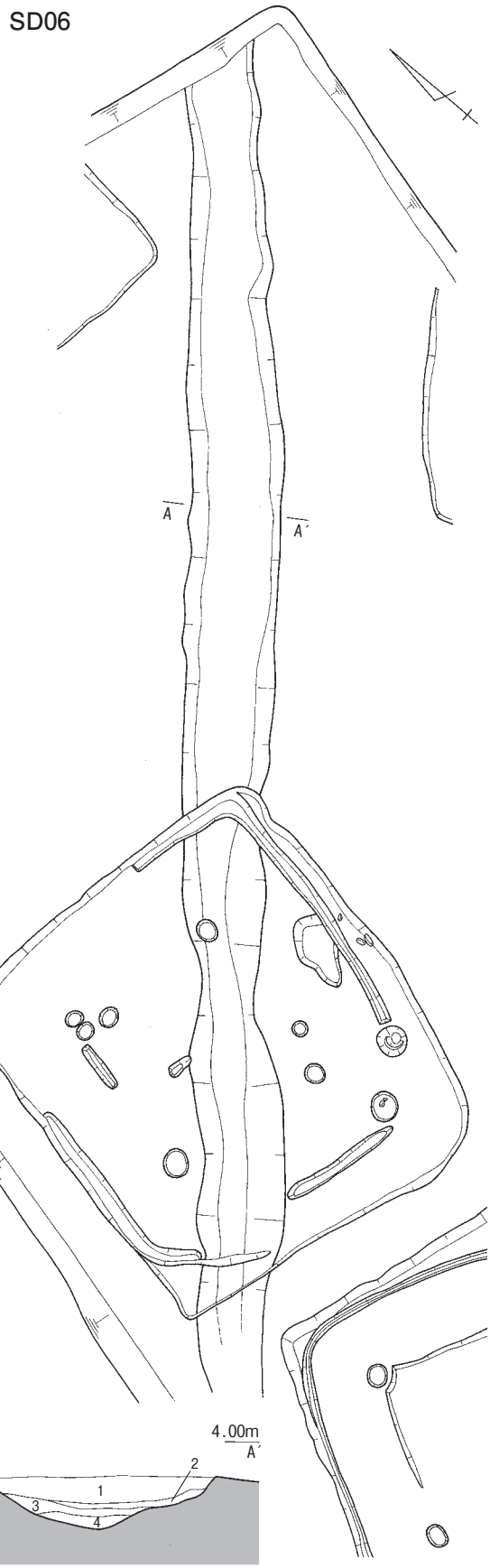
SH12・SH13・SK01実測図

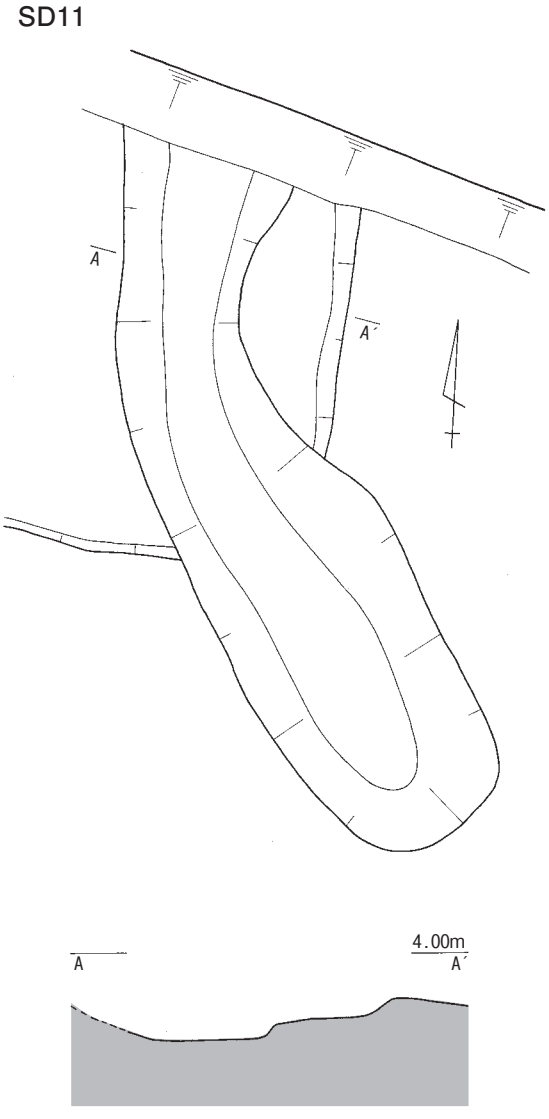
図版12



SK02・SK03・SR01実測図



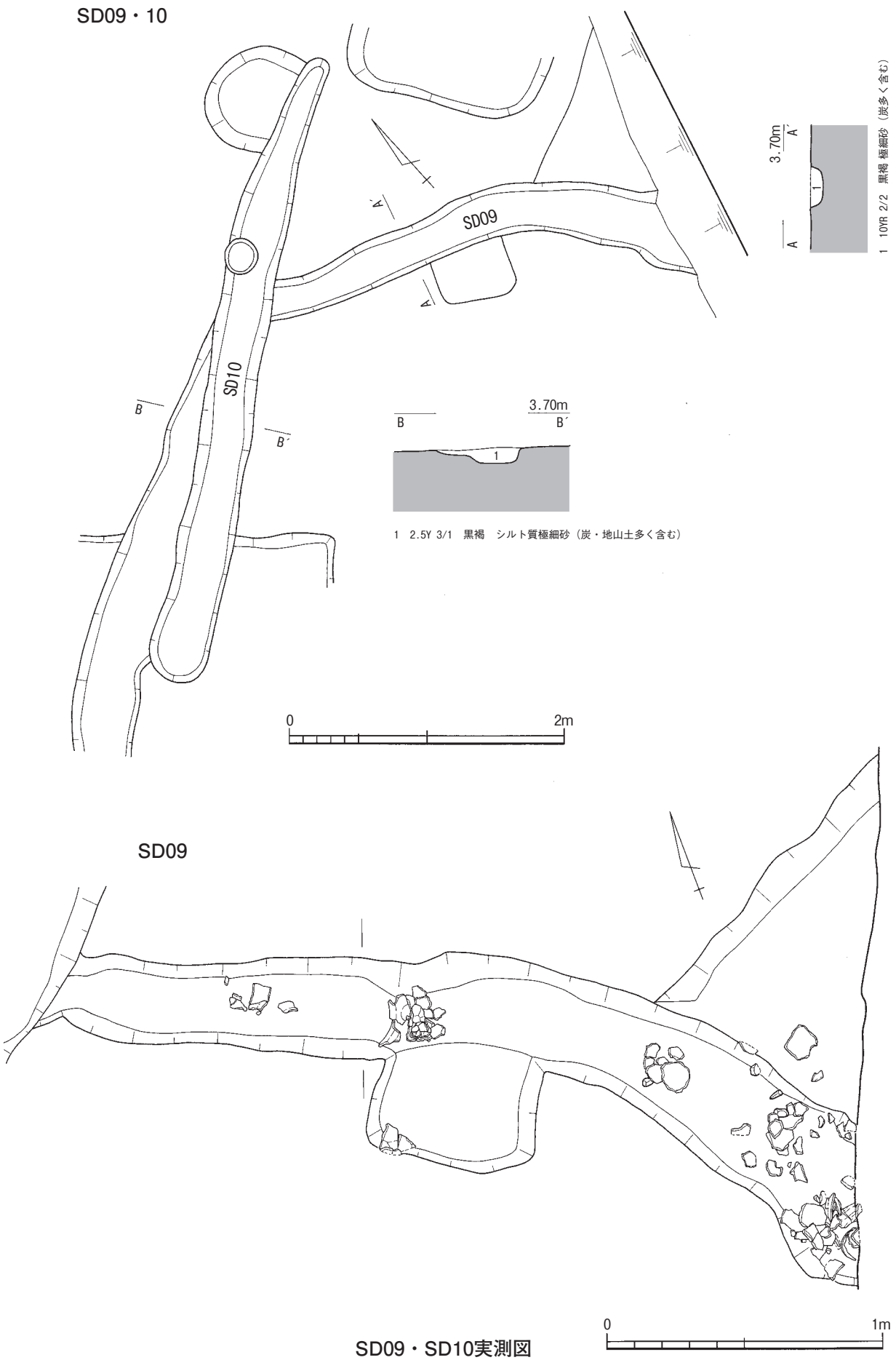




0 2m

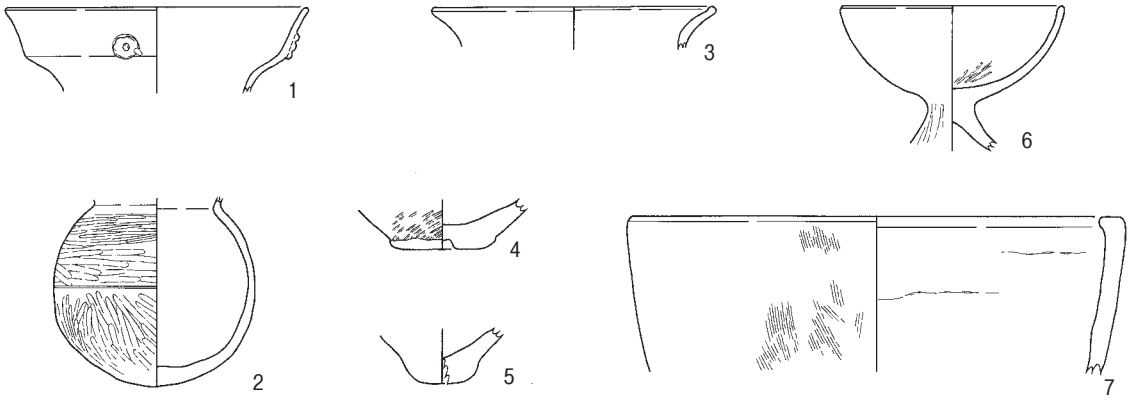
SD03・SD06・SD11実測図

図版14

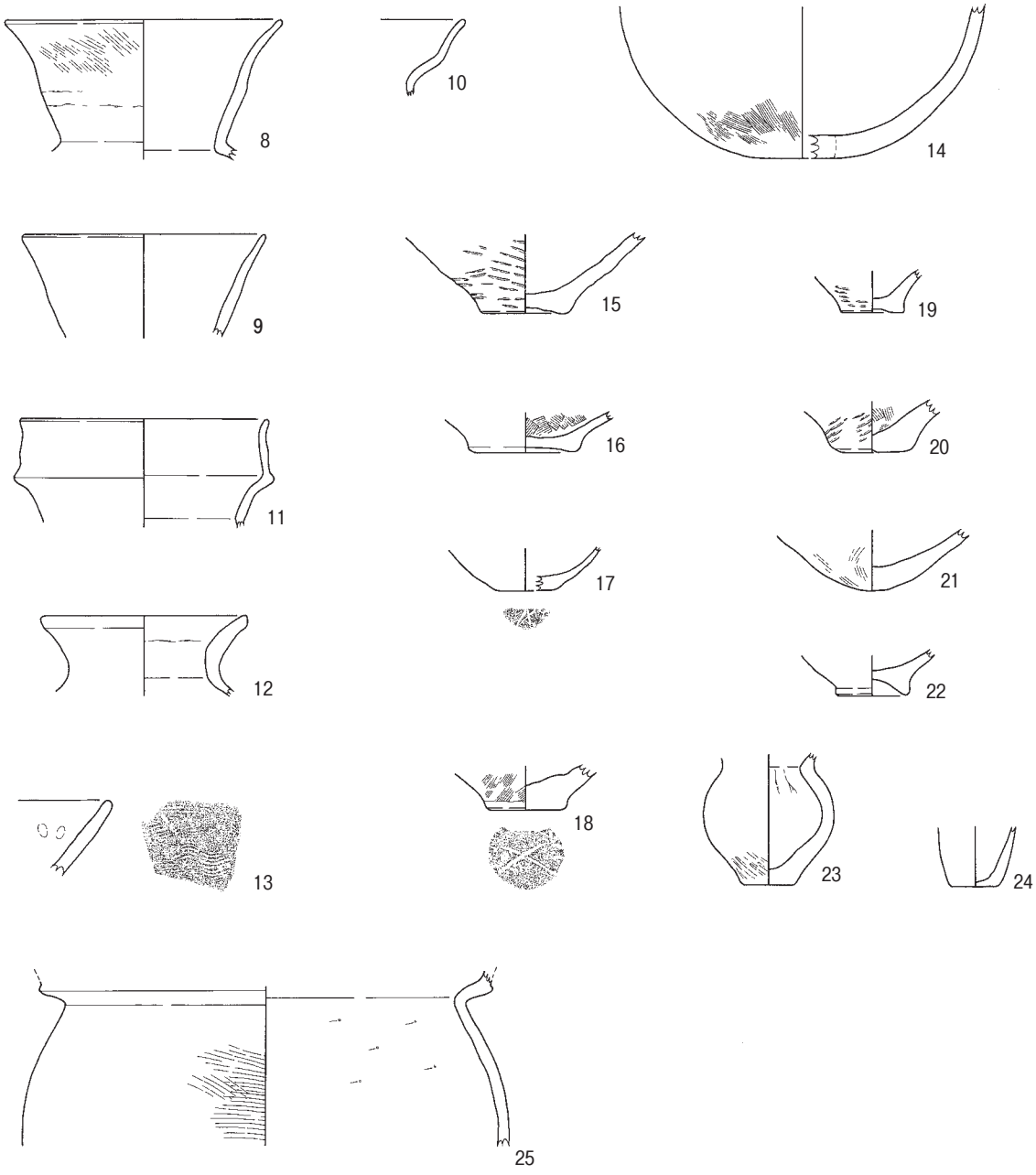


SD09・SD10実測図

SH01



SH02

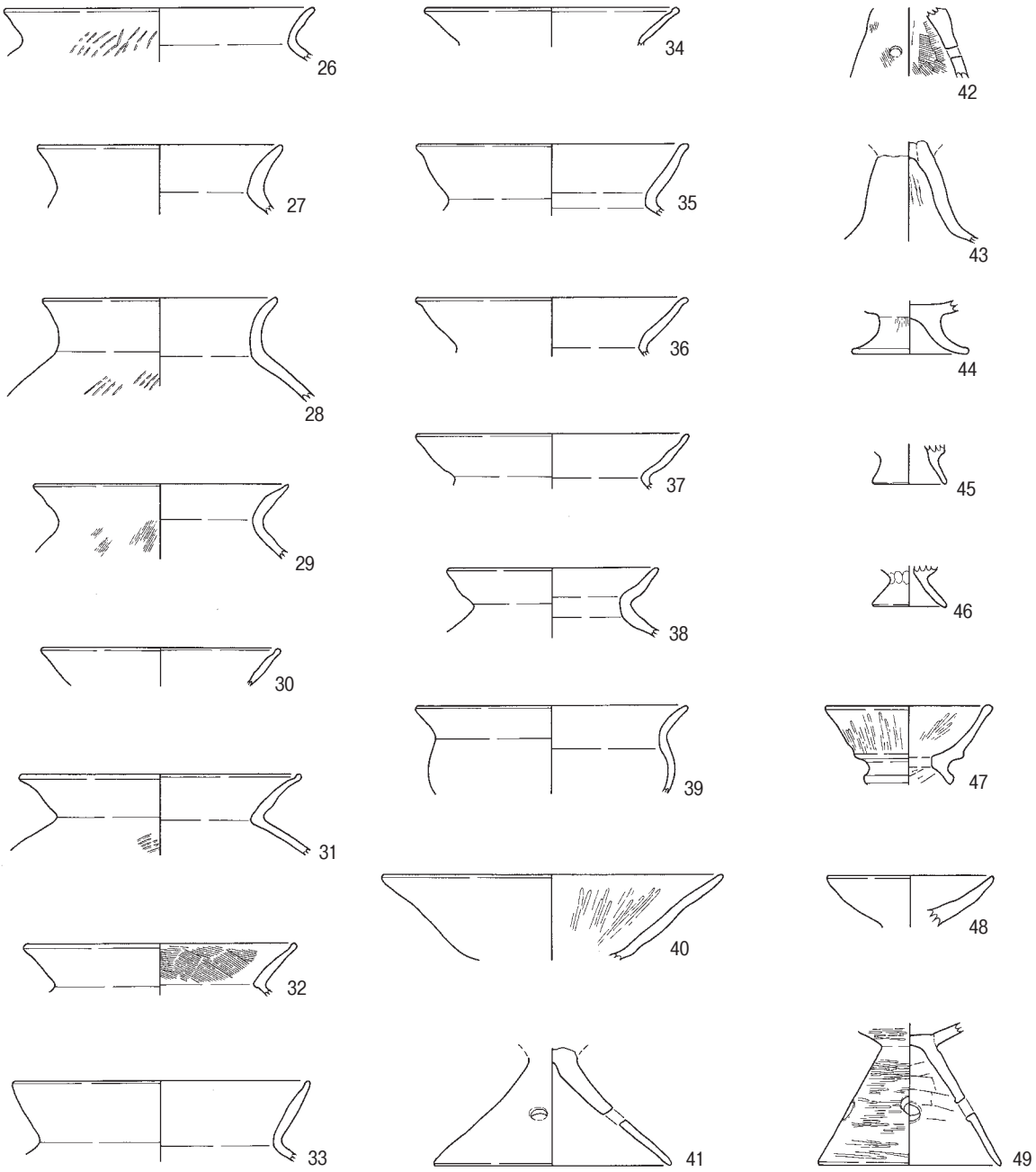


0 20cm

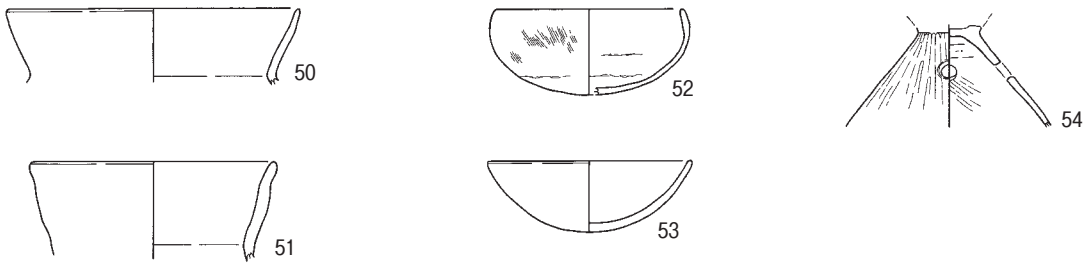
土器実測図(1)

図版16

SH02



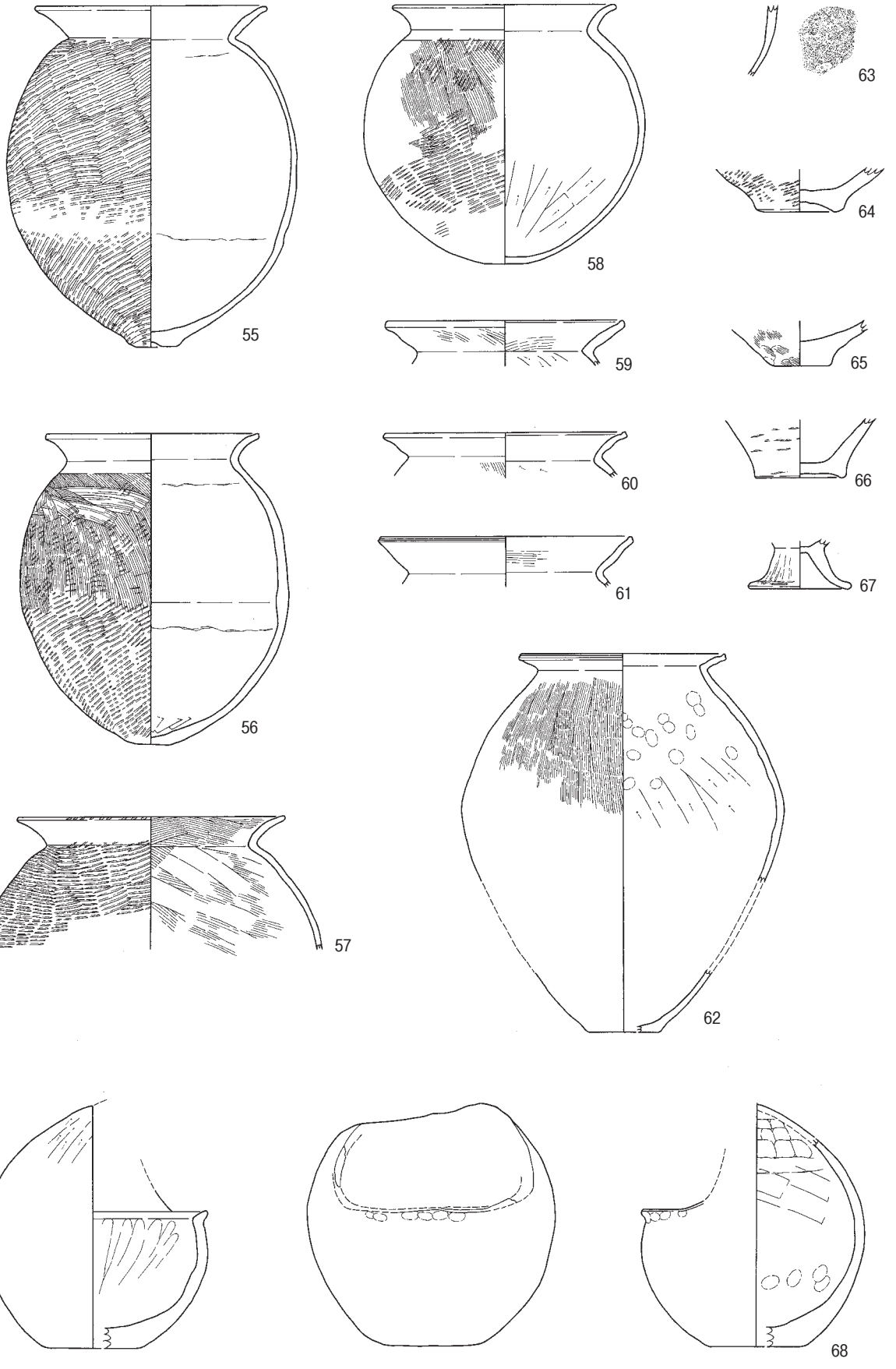
SH03



0 20cm

土器実測図(2)

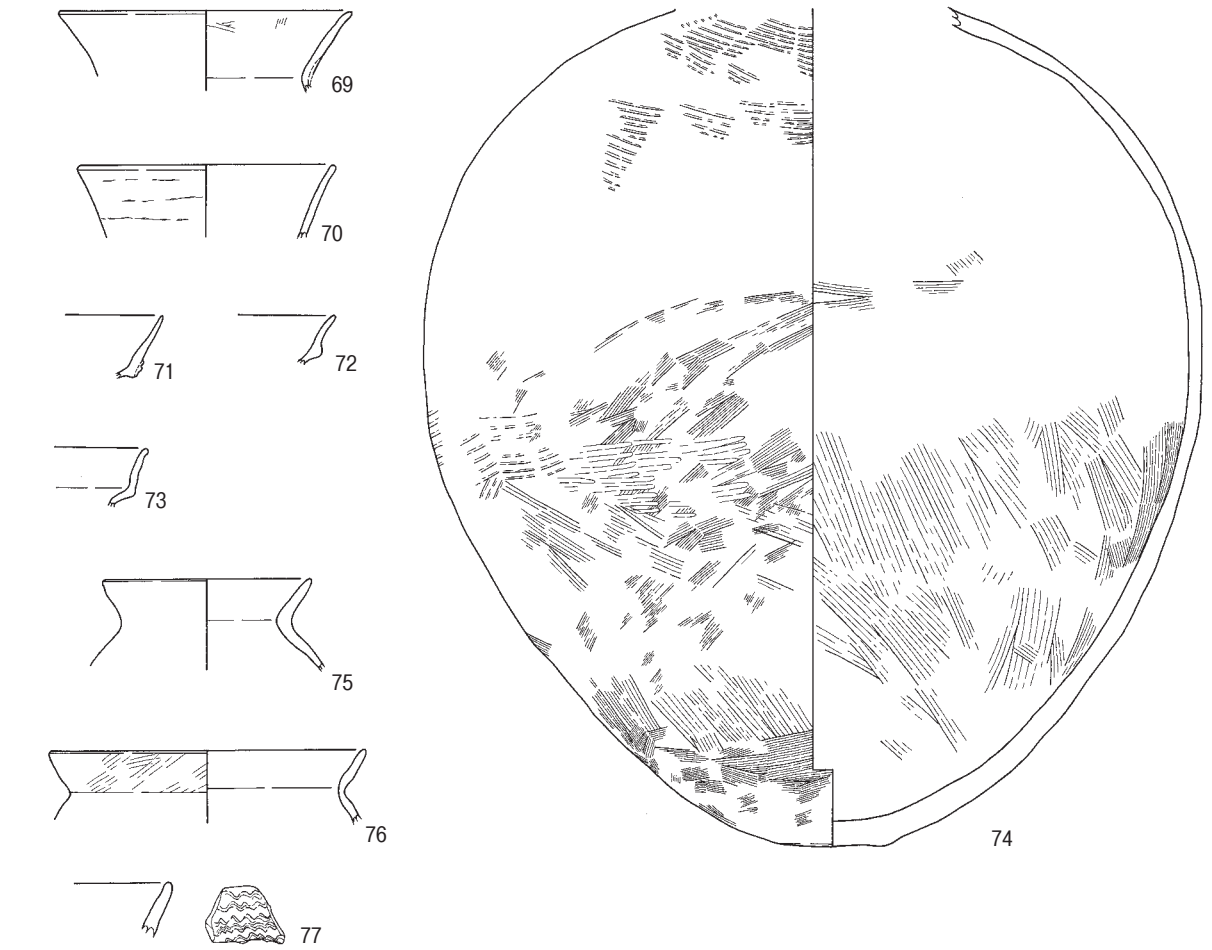
SH04



土器実測図(3)

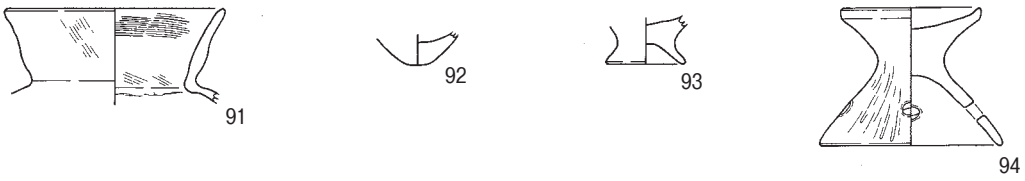
図版18

SH06

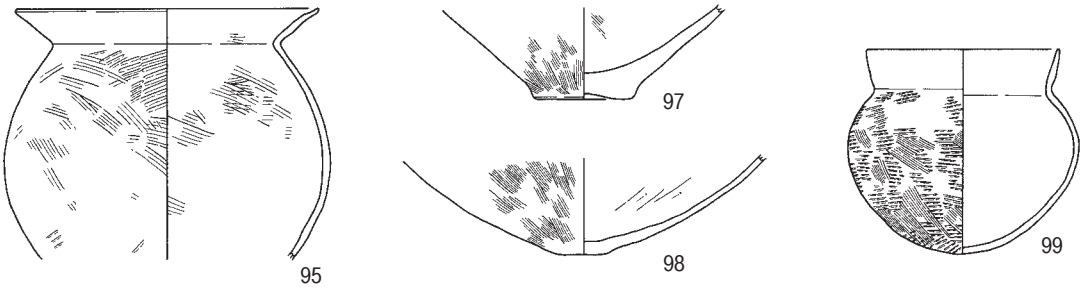


土器実測図(4)

SH05

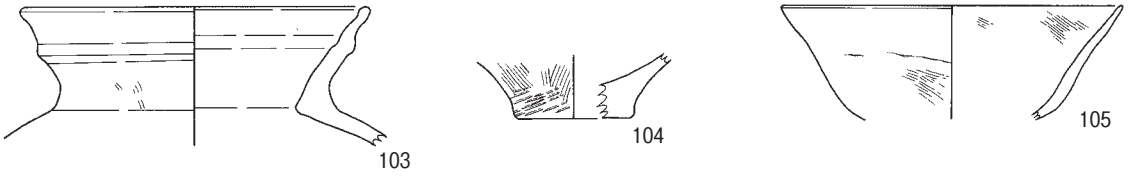


SH08

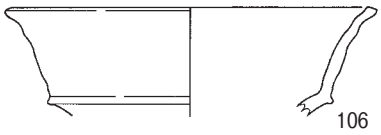


SH10

SH11

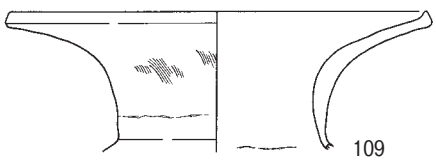


SK01



SK03

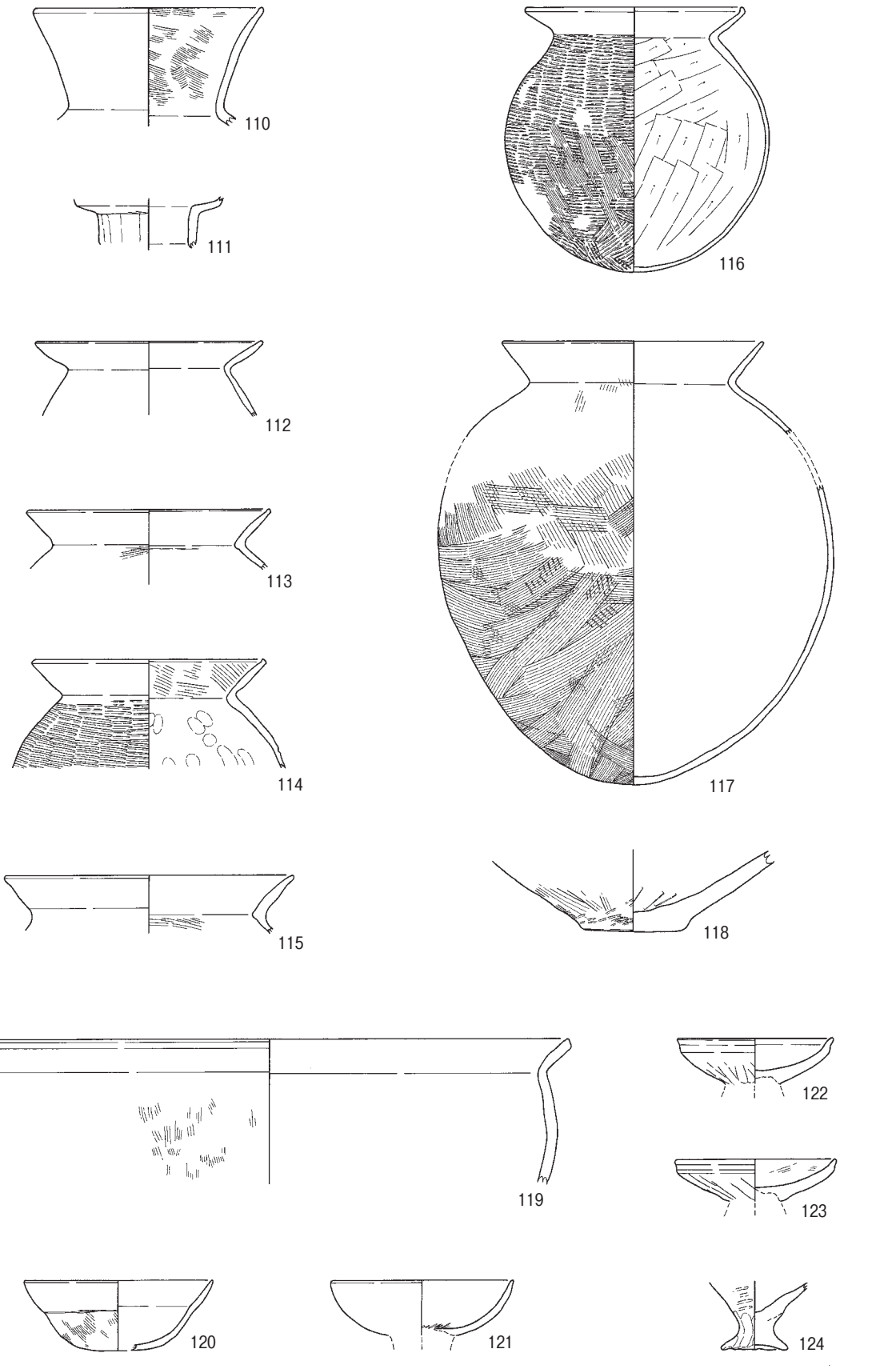
SX01



土器実測図(5)

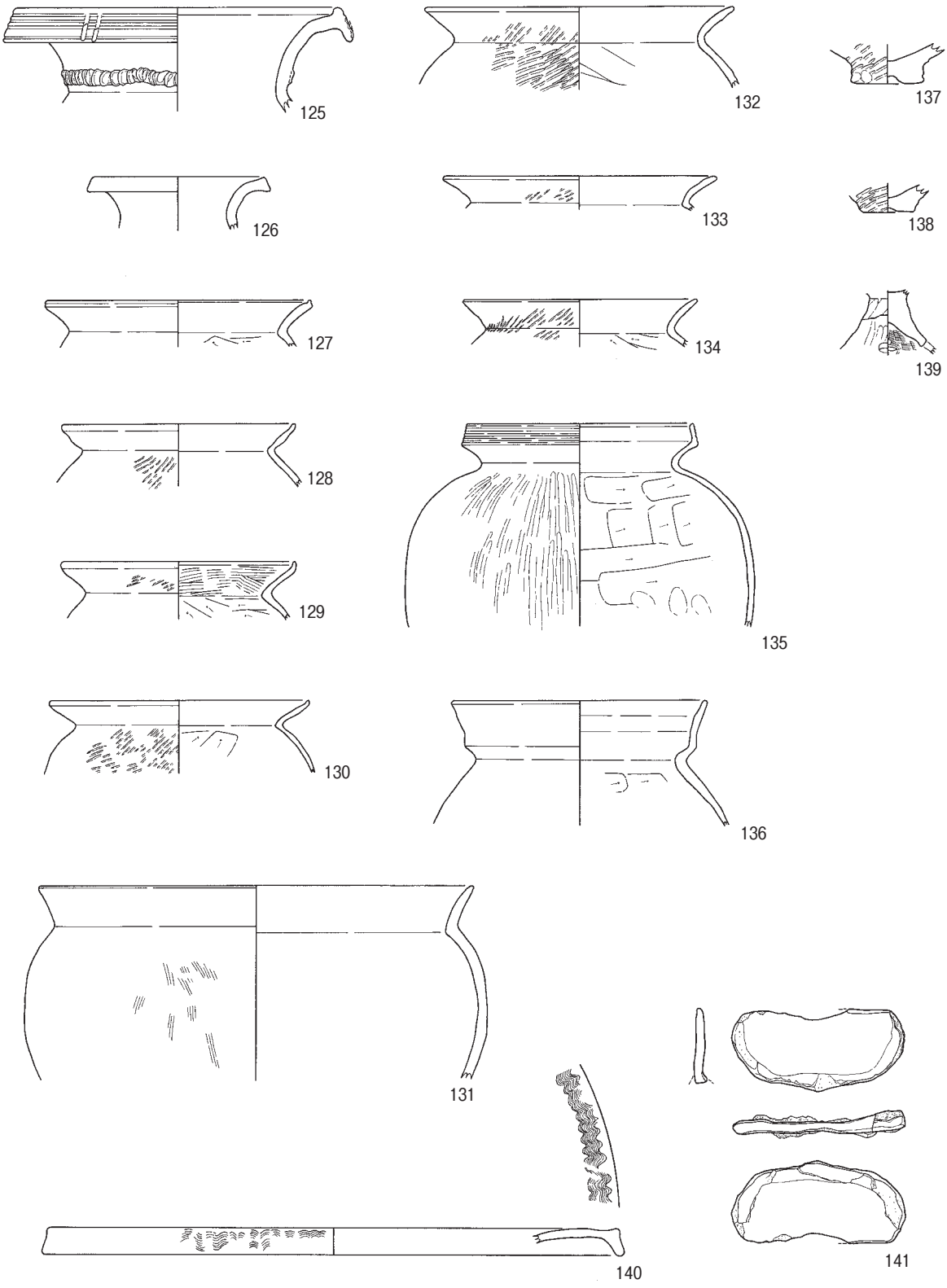
図版20

SX03



土器実測図(6)

SX04

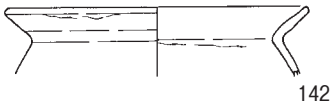


0 20cm

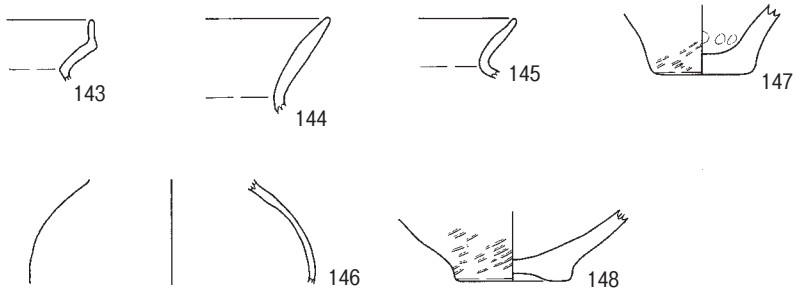
土器実測図(7)

図版22

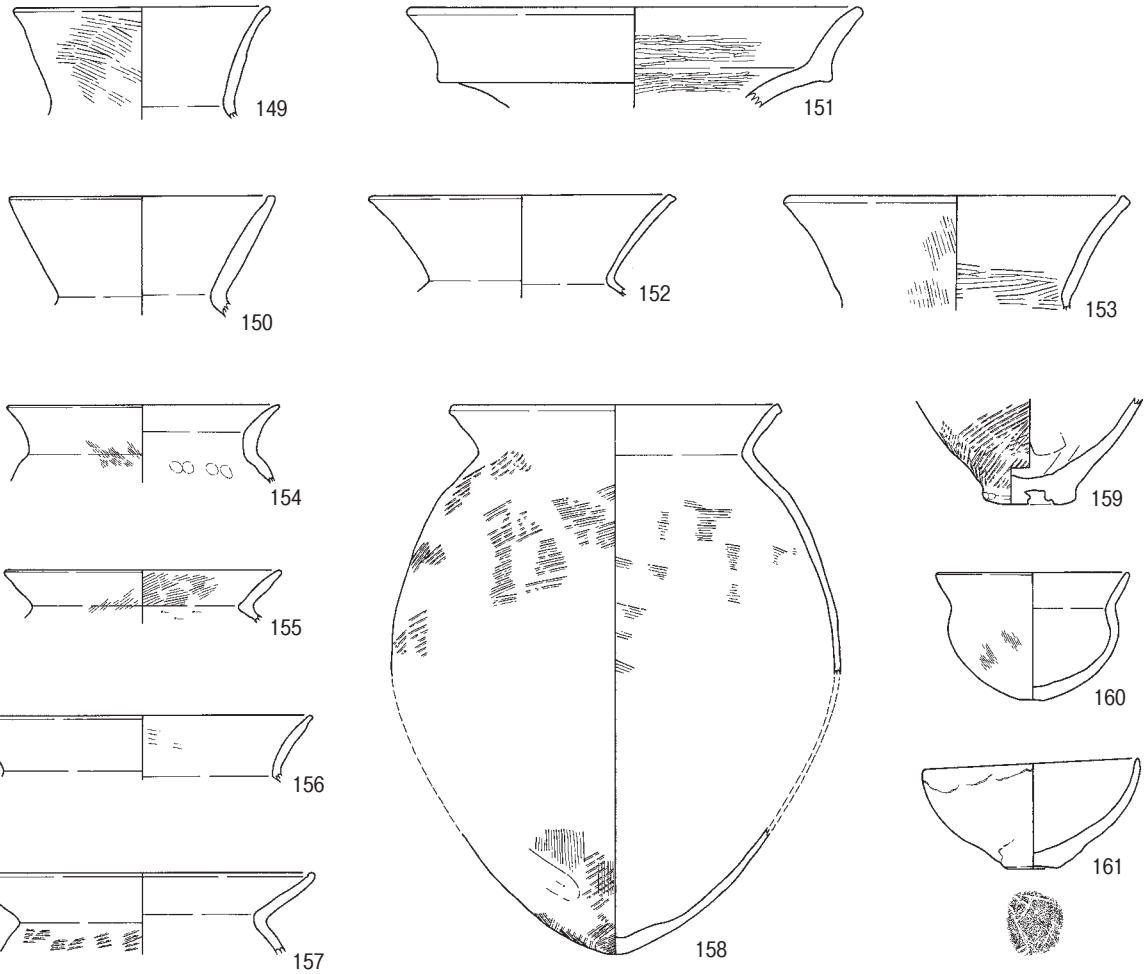
SD01



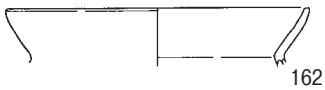
SD06



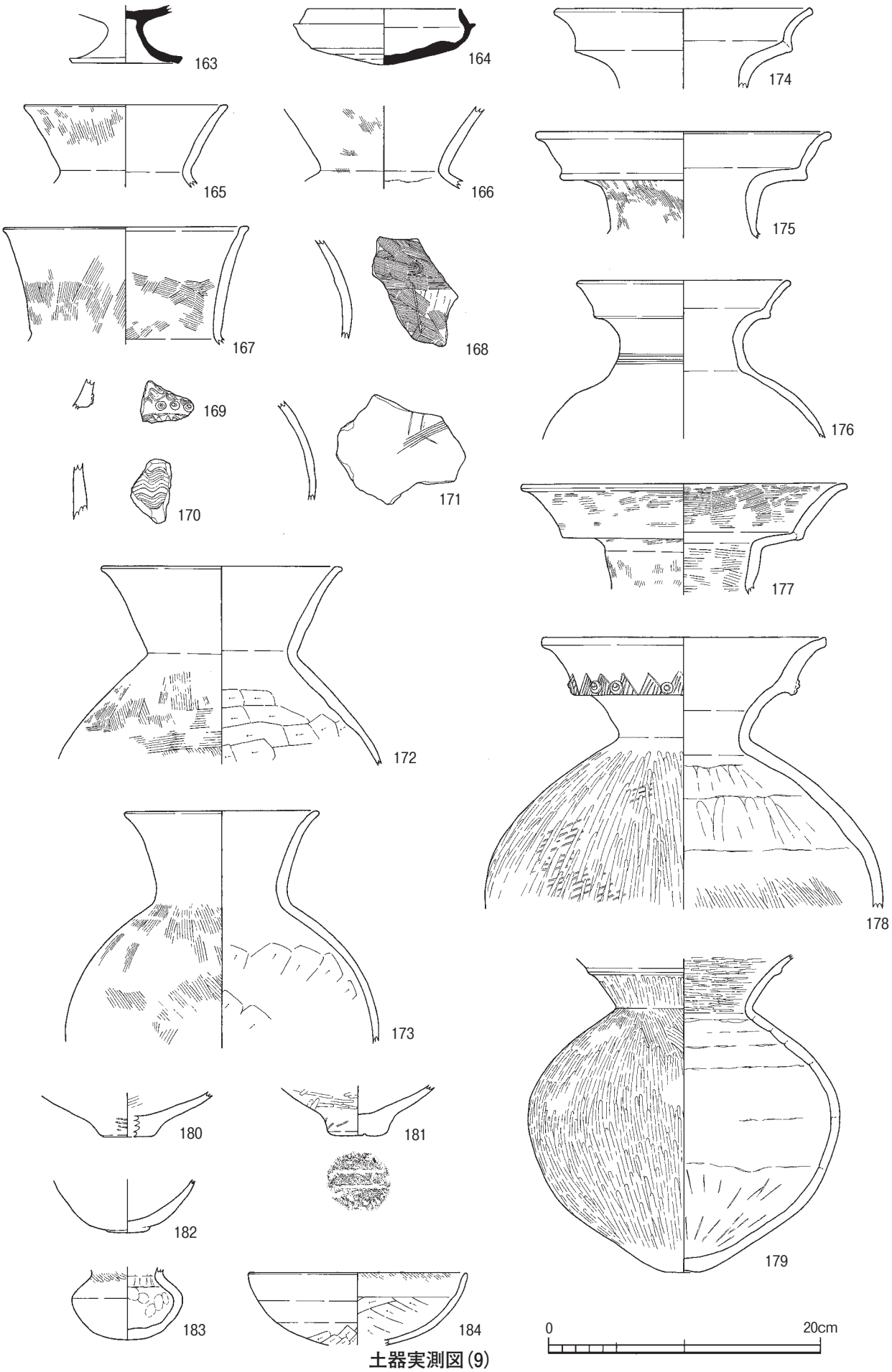
SD09



SD11

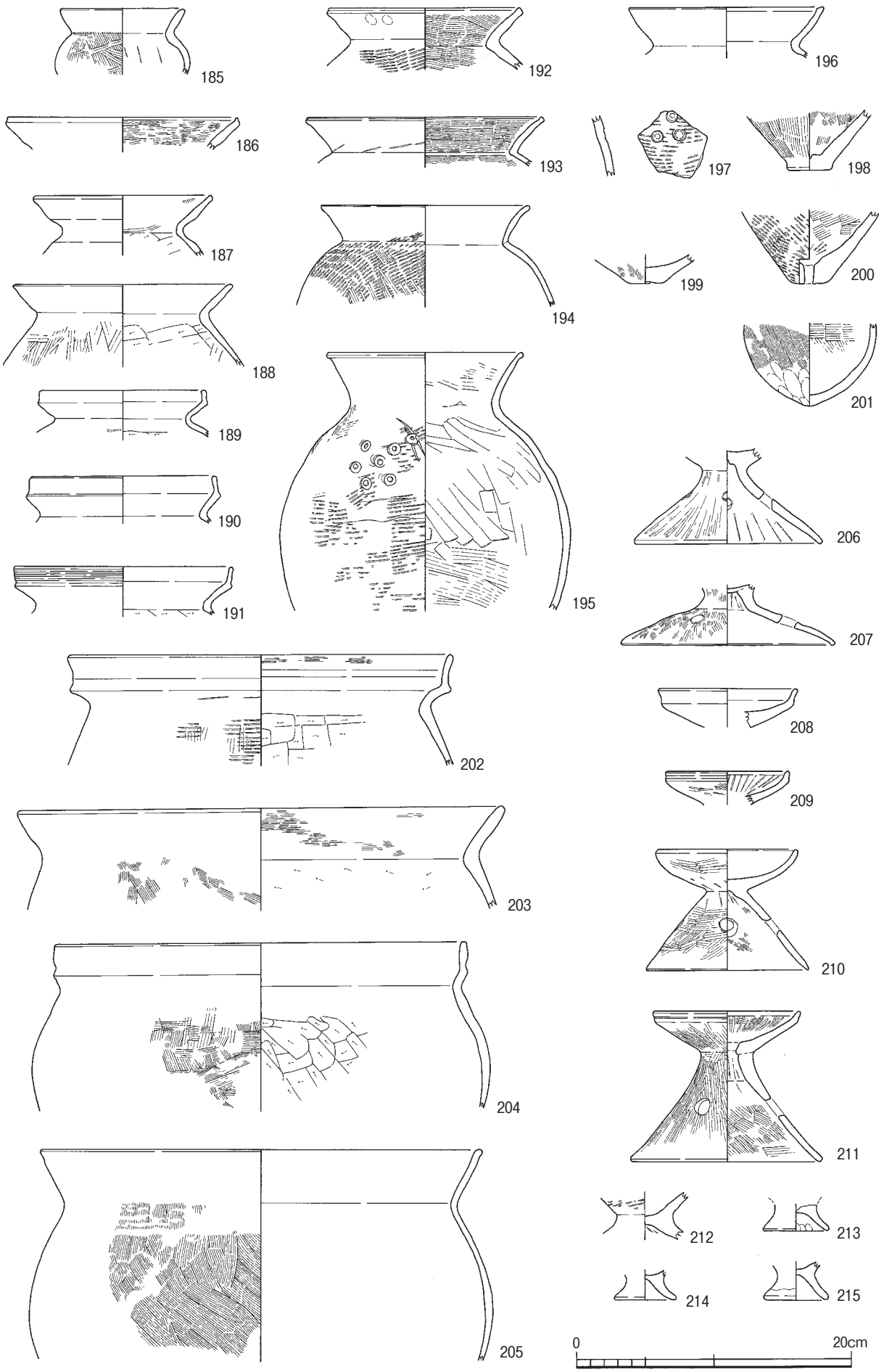


土器実測図(8)

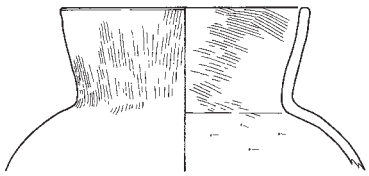

163
164
174
165
166
175
167
168
176
169
171
170
177
172
178
173
180
181
182
179
183
184
0
20cm

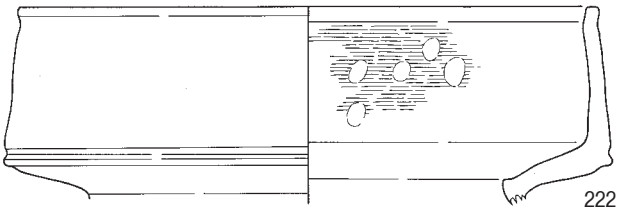
土器実測図(9)

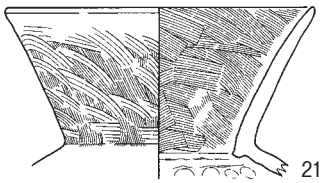
図版24

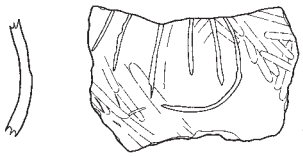


土器実測図(10)


216

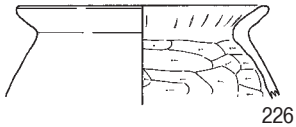

222

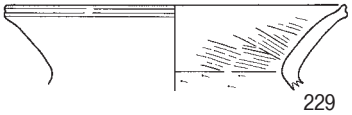

217

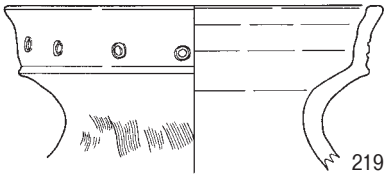

224

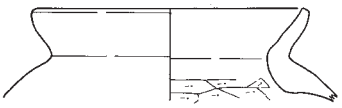
225

218

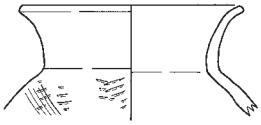

226

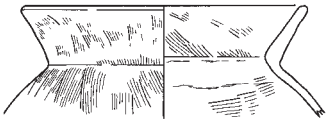

229

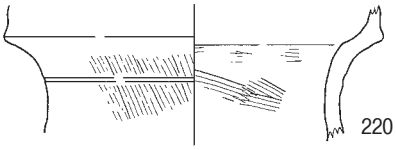

219

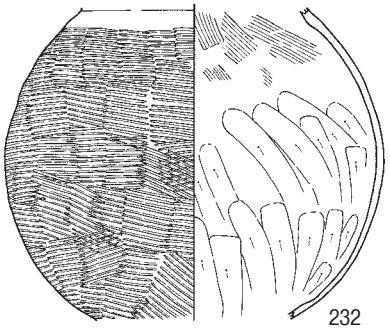

227

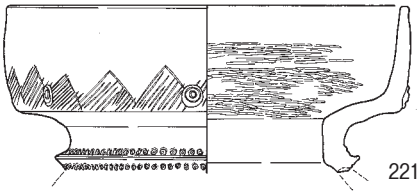
230

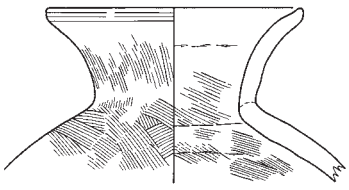

228


231

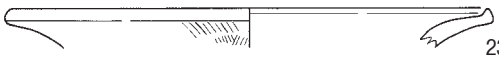

220

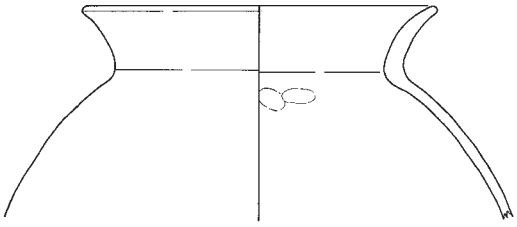

232

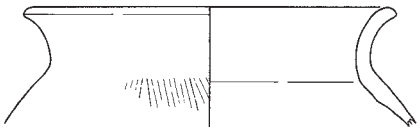

221


223

233

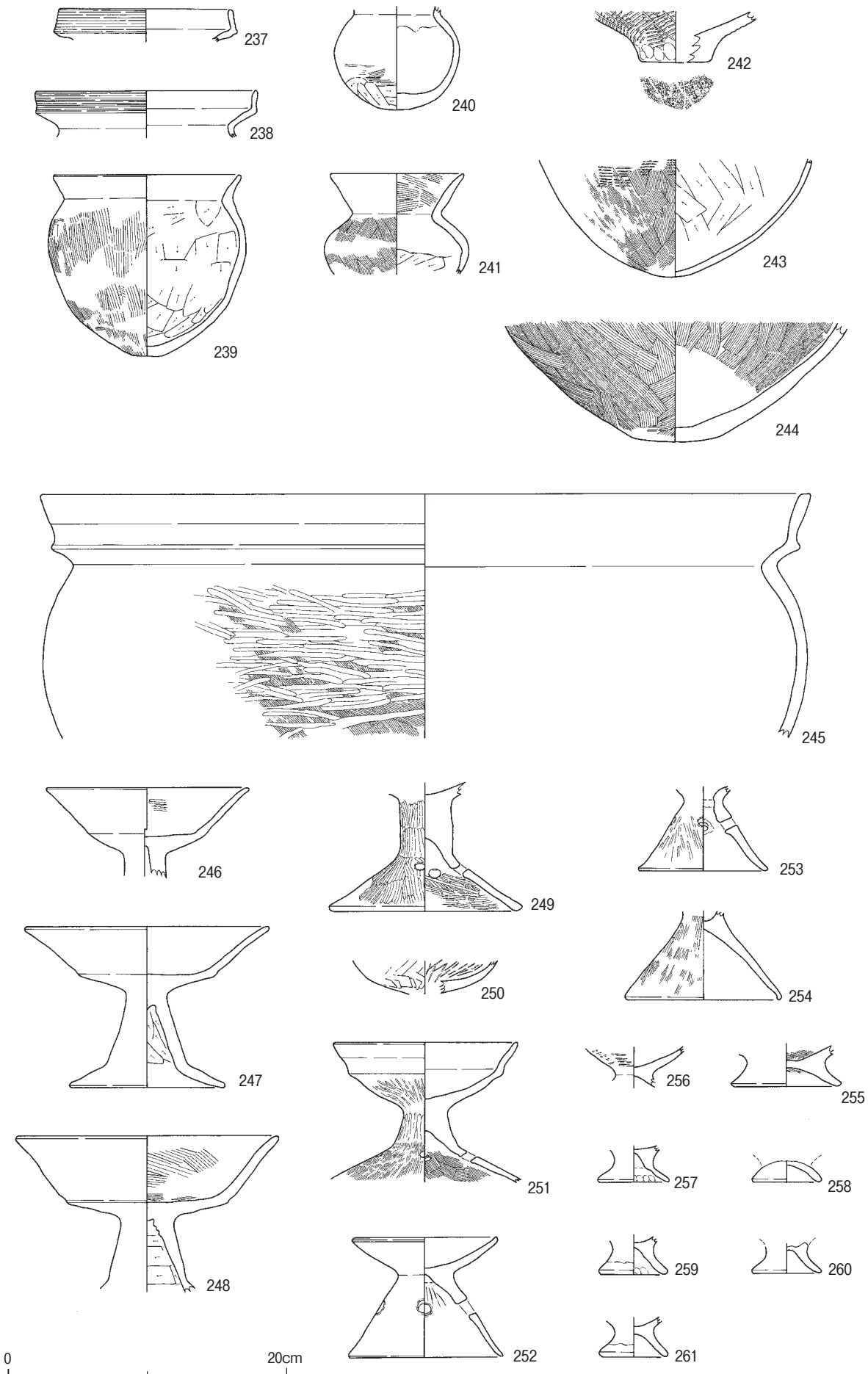

235


236

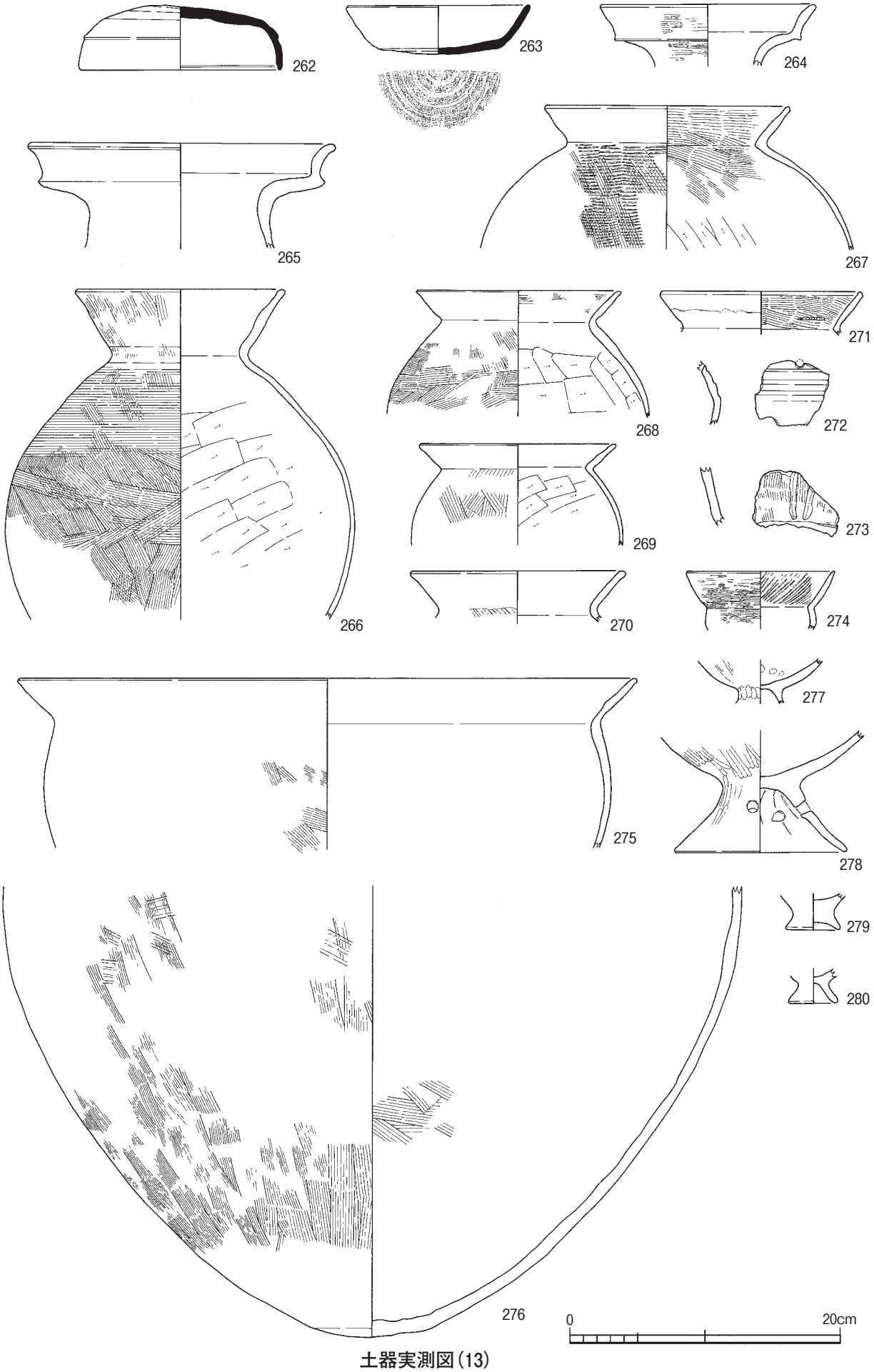

234

土器実測図(11)

図版26

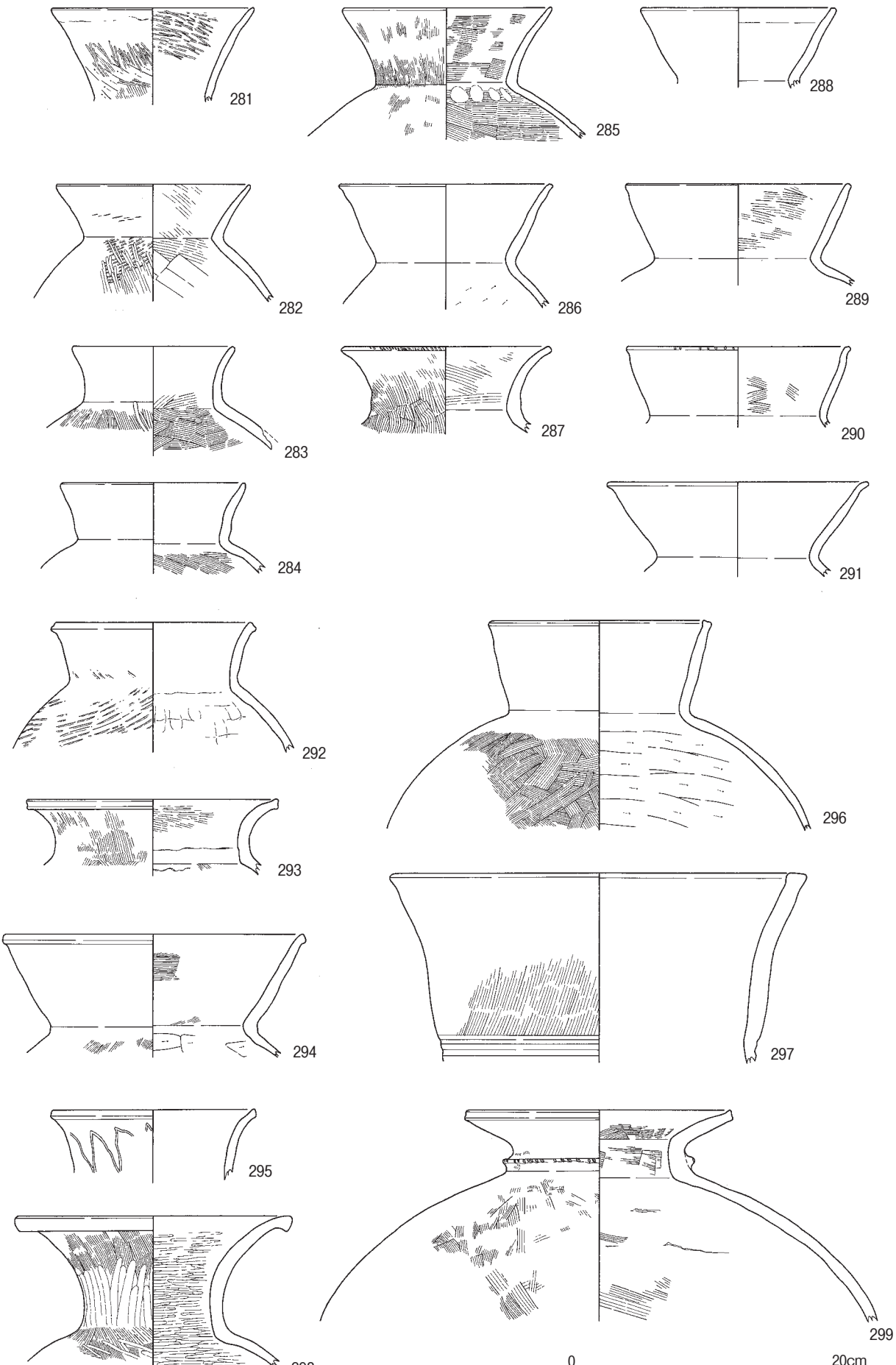


土器実測図(12)

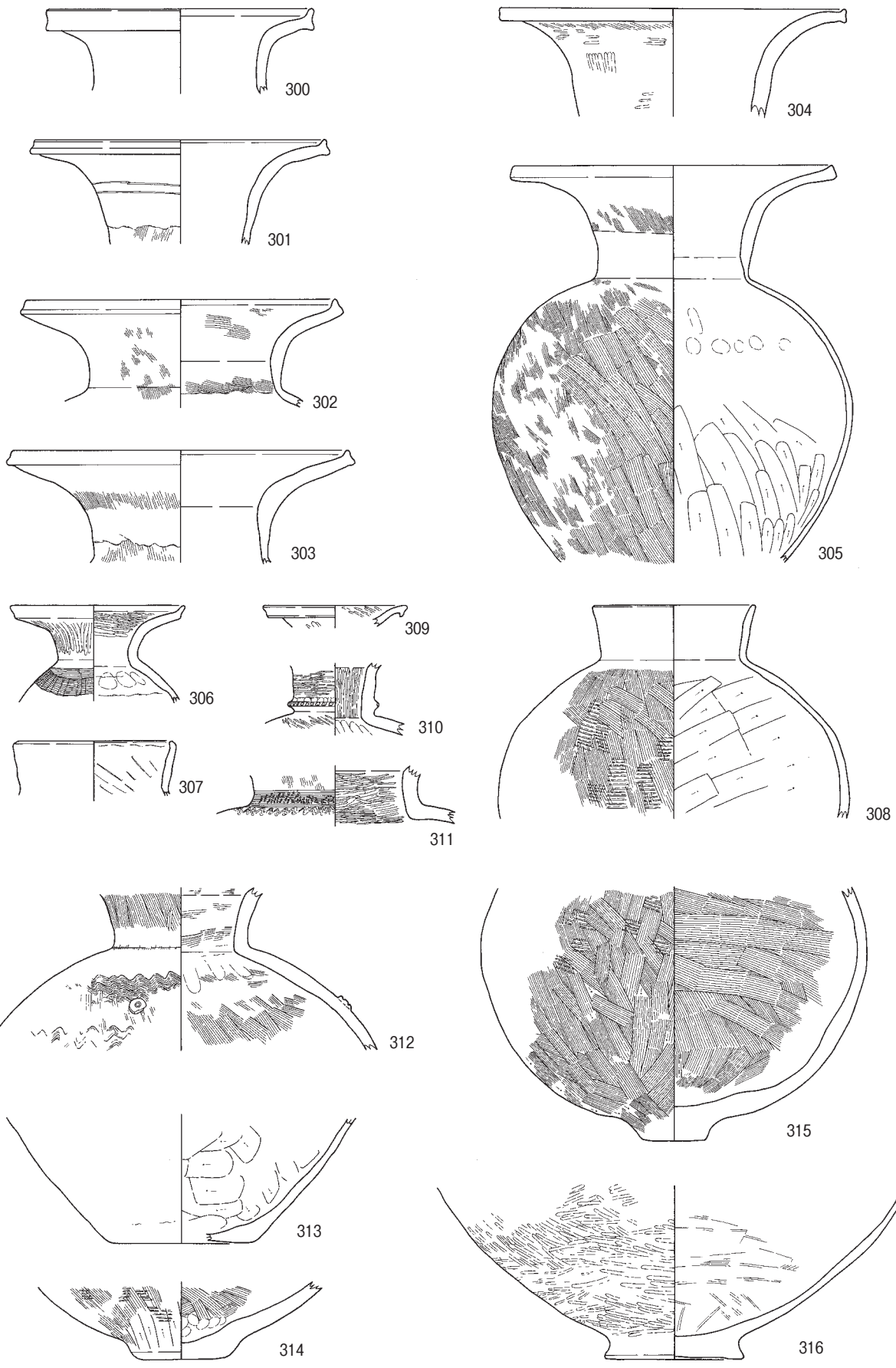

262
263
264
265
267
266
268
271
272
269
273
270
274
277
275
278
279
276
280
0
20cm

土器実測図(13)

図版28

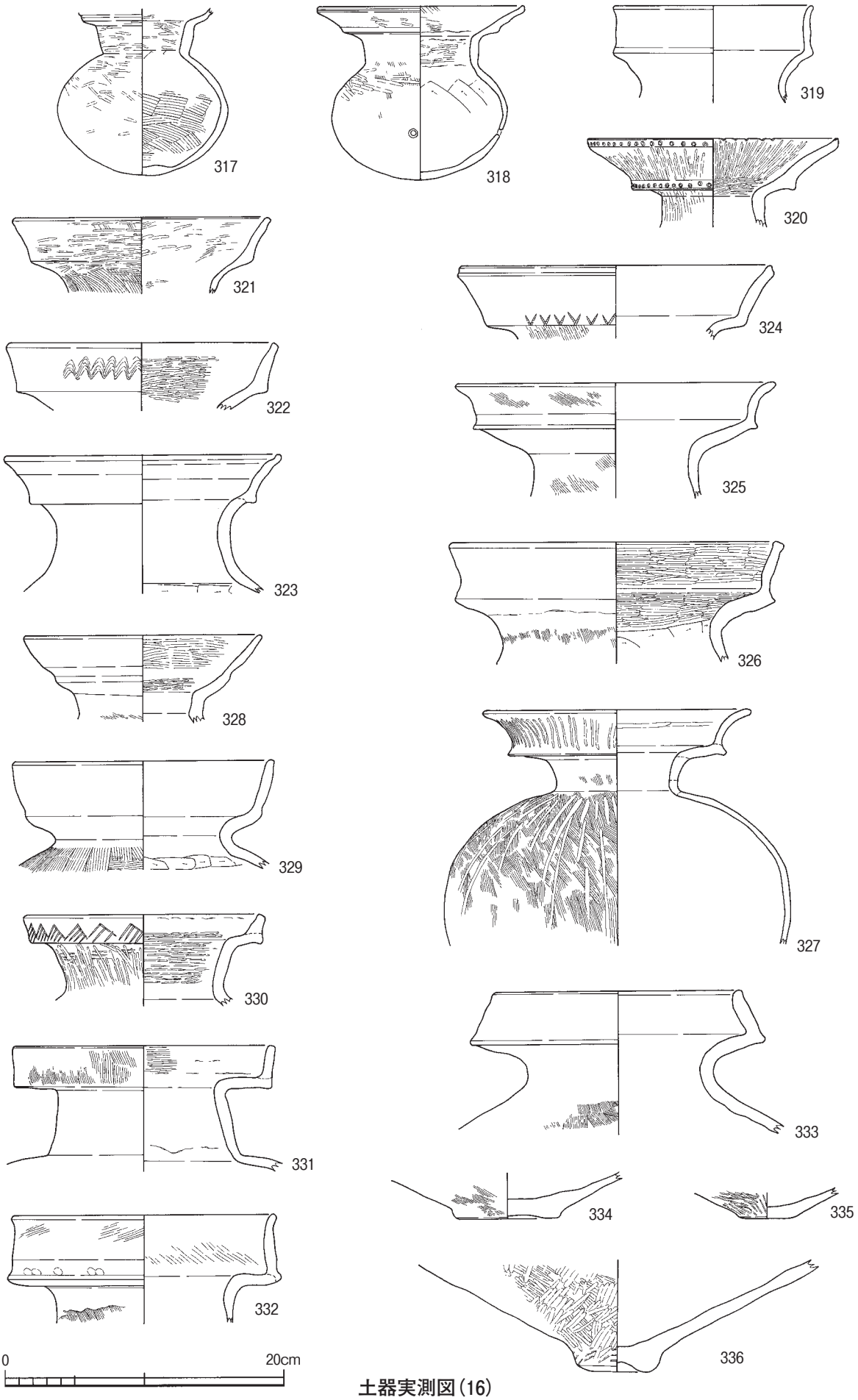


土器実測図(14)

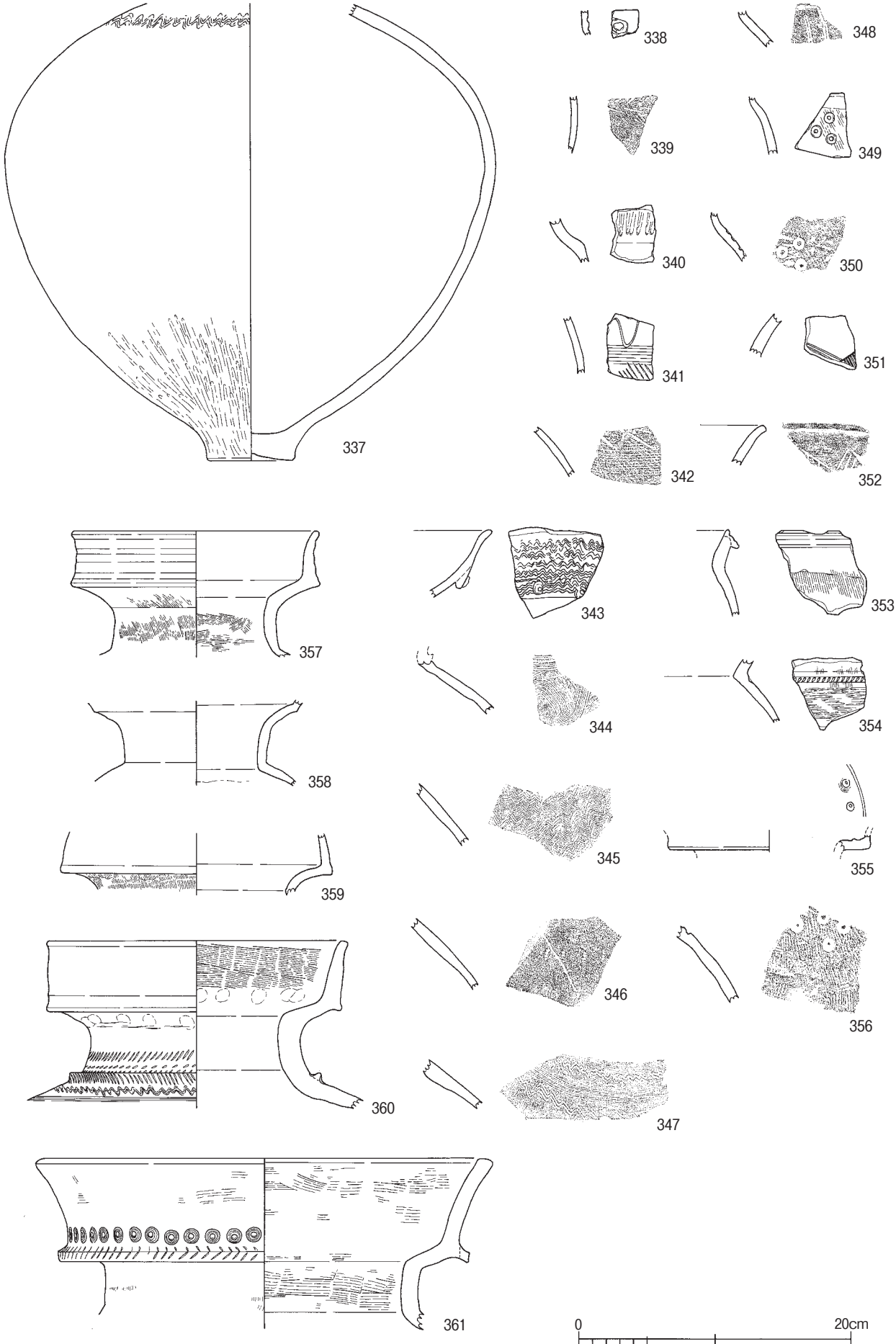

300
301
302
303
304
305
306
307
309
310
311
308
312
313
314
315
316
0
20cm

土器実測図(15)

図版30

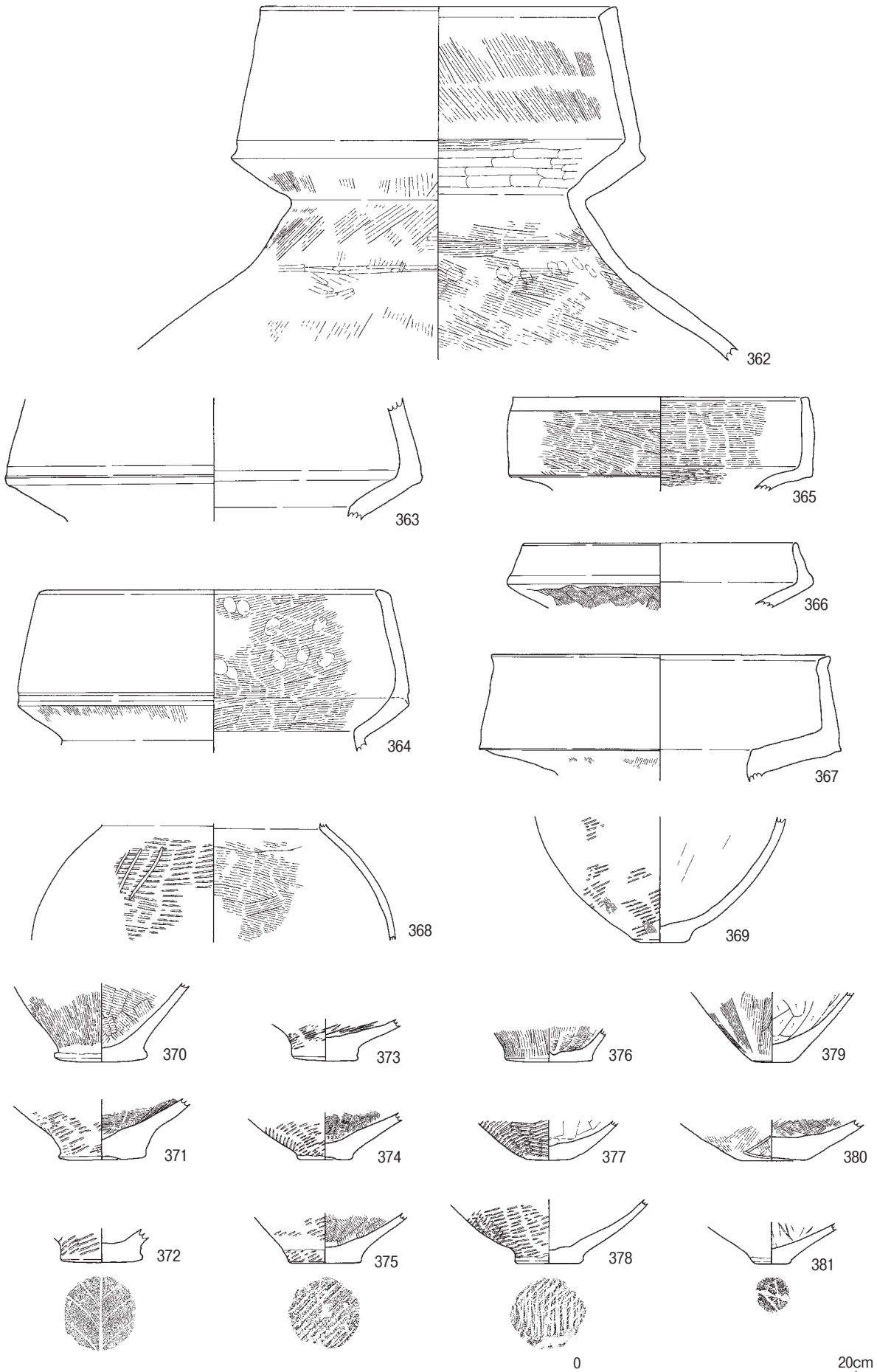


土器実測図(16)

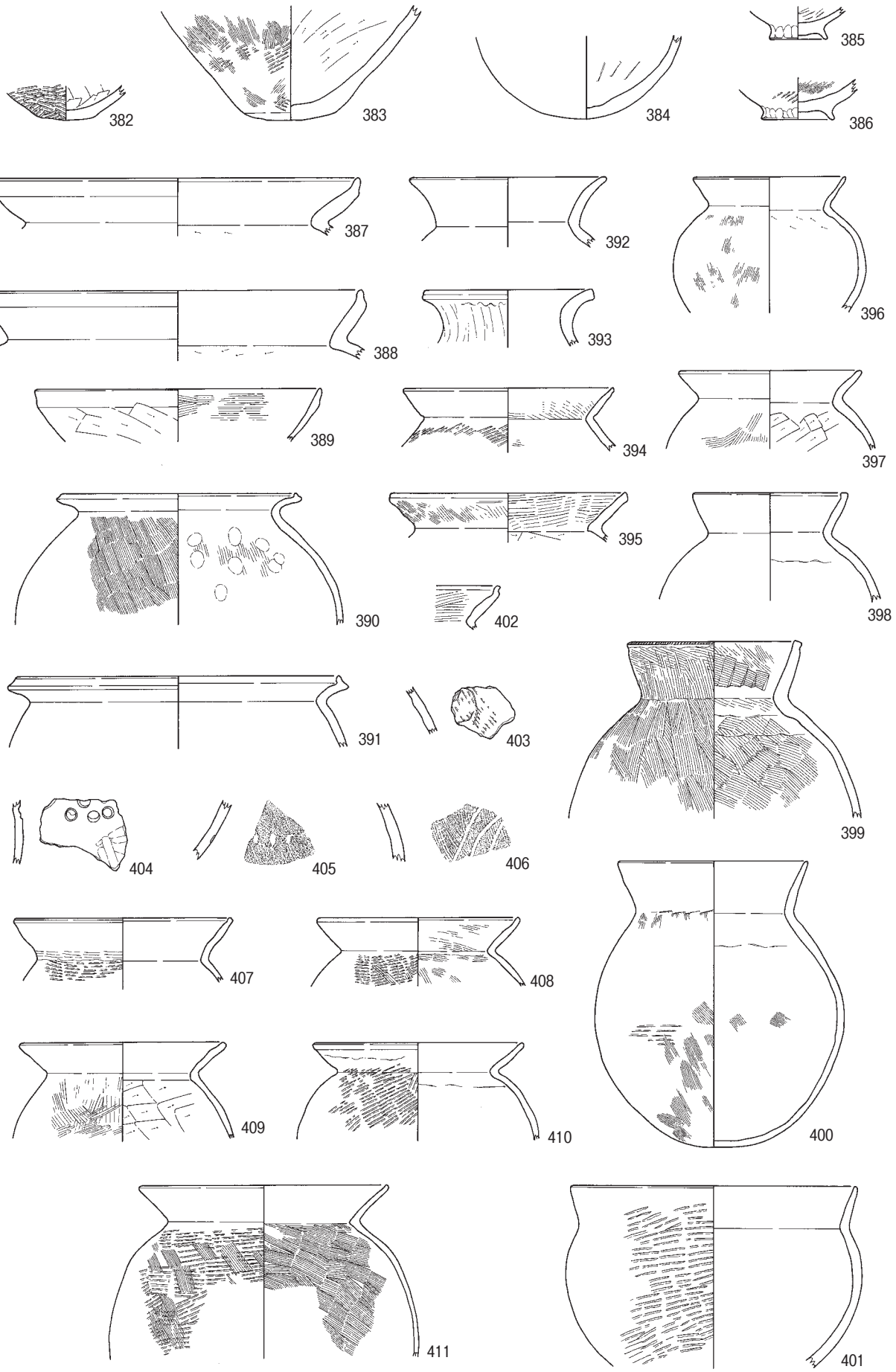

337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
0
20cm

土器実測図（17）

図版32

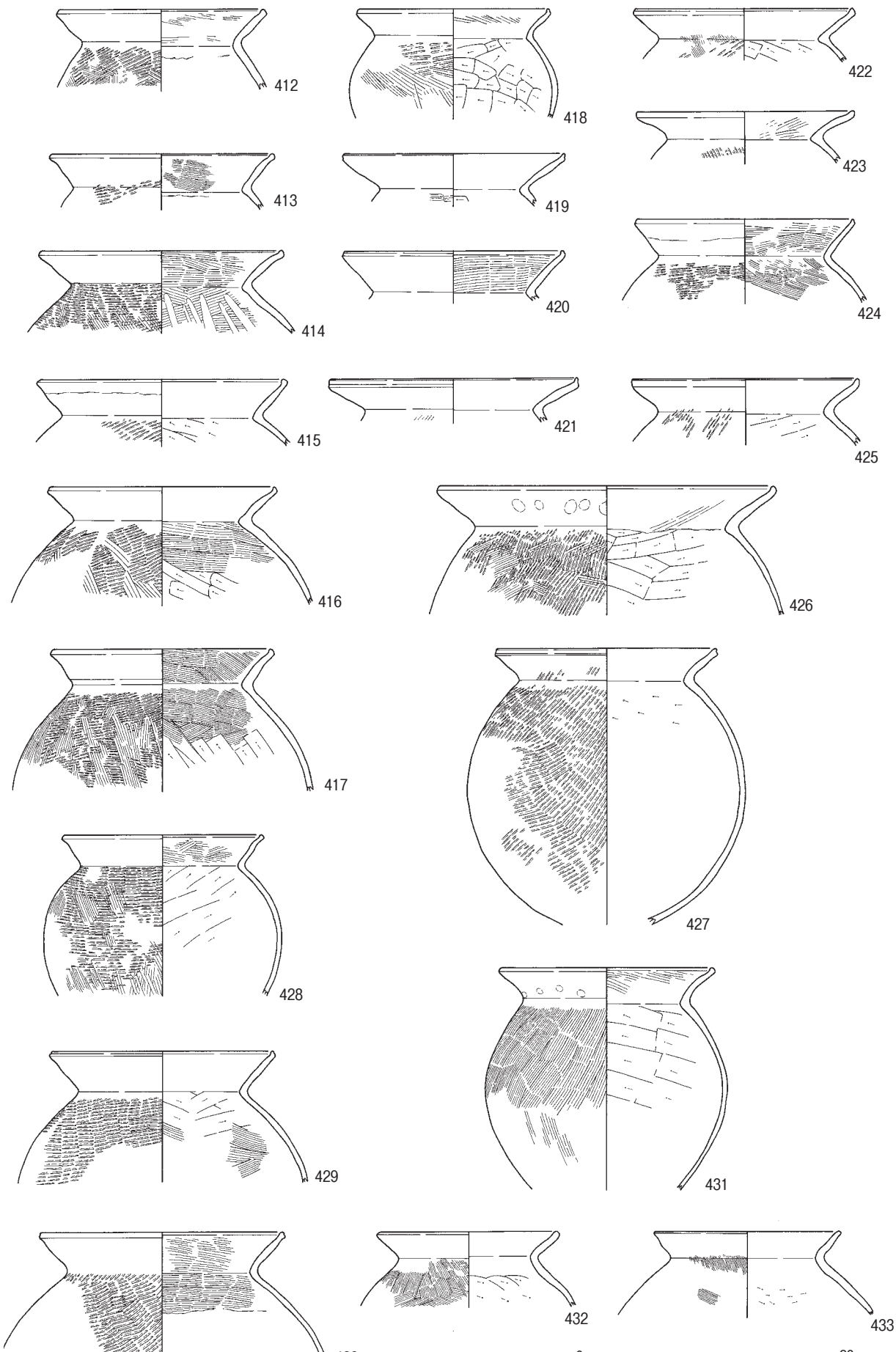


土器実測図(18)

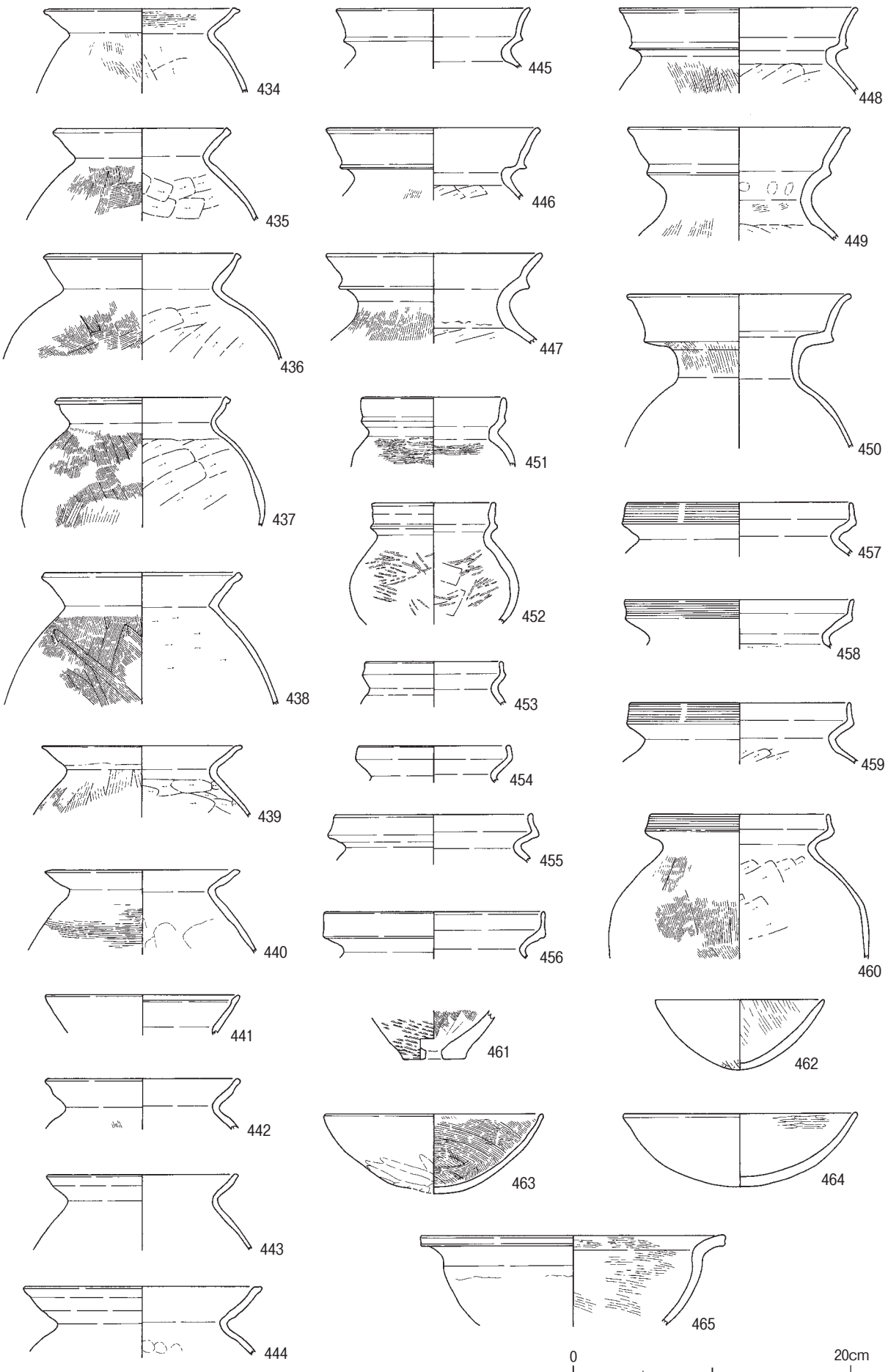

382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
0
20cm

土器実測図(19)

図版34

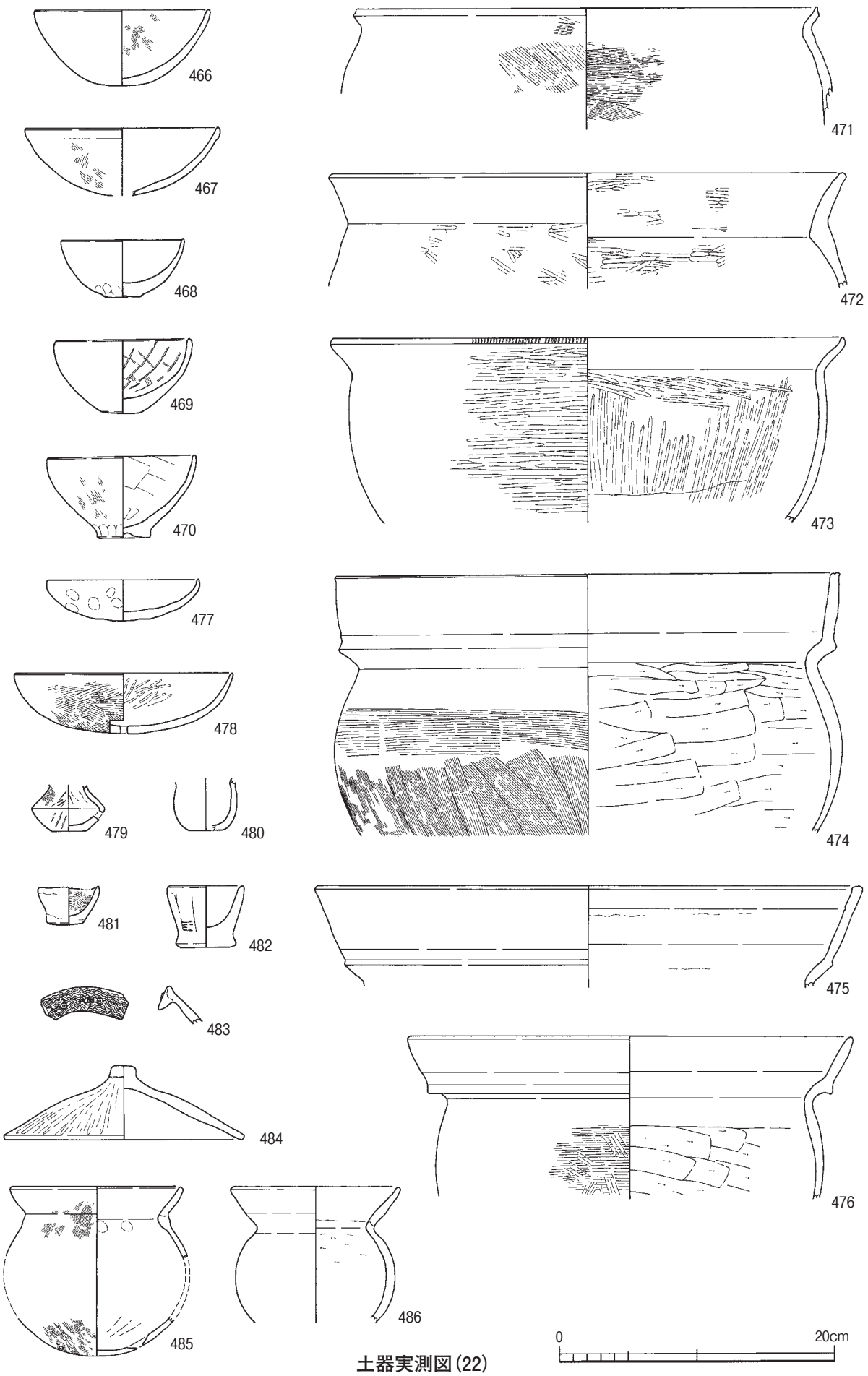


土器実測図(20)

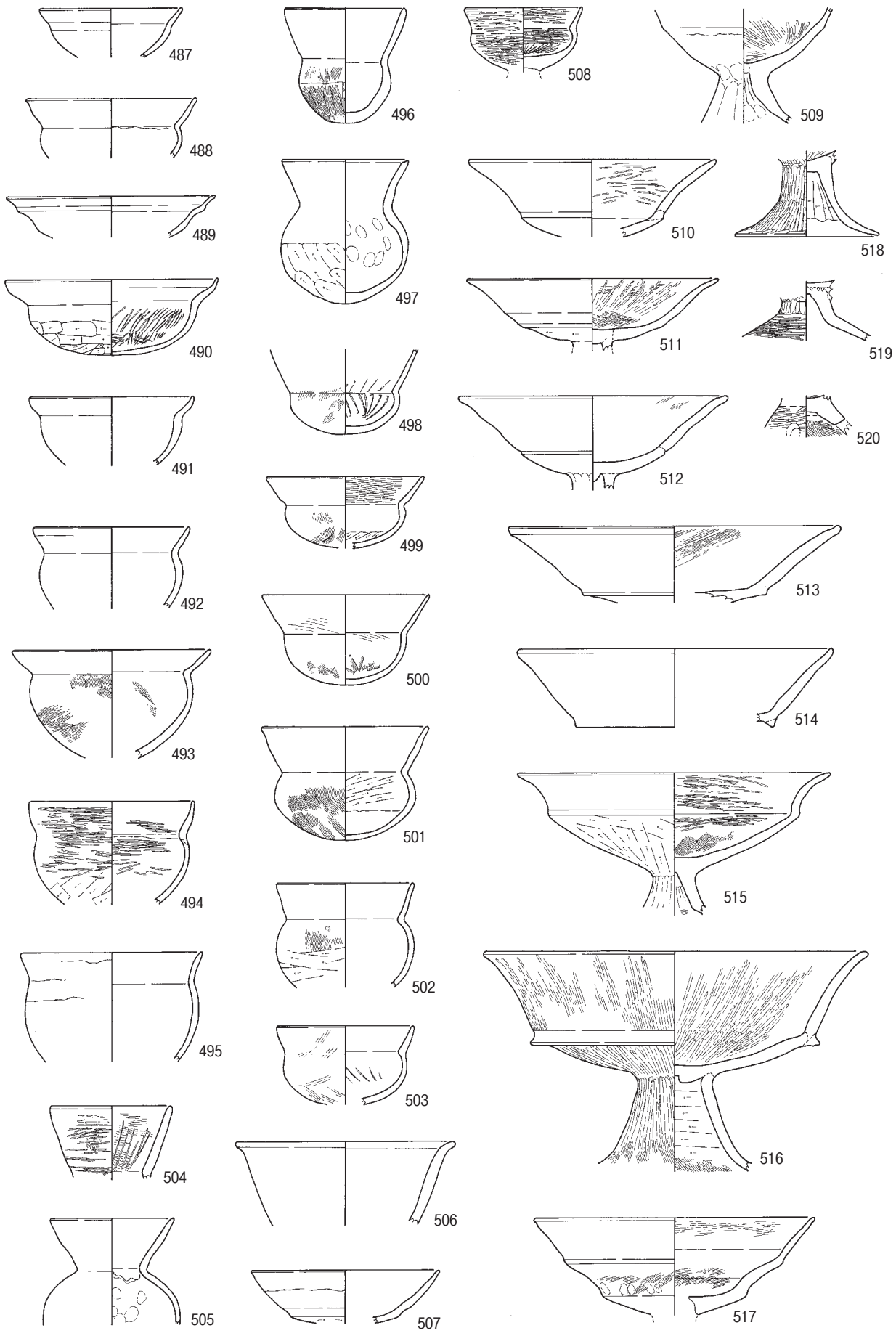

434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
451
452
453
454
455
456
461
463
448
449
450
457
458
459
460
462
464
465
0
20cm

土器実測図(21)

図版36

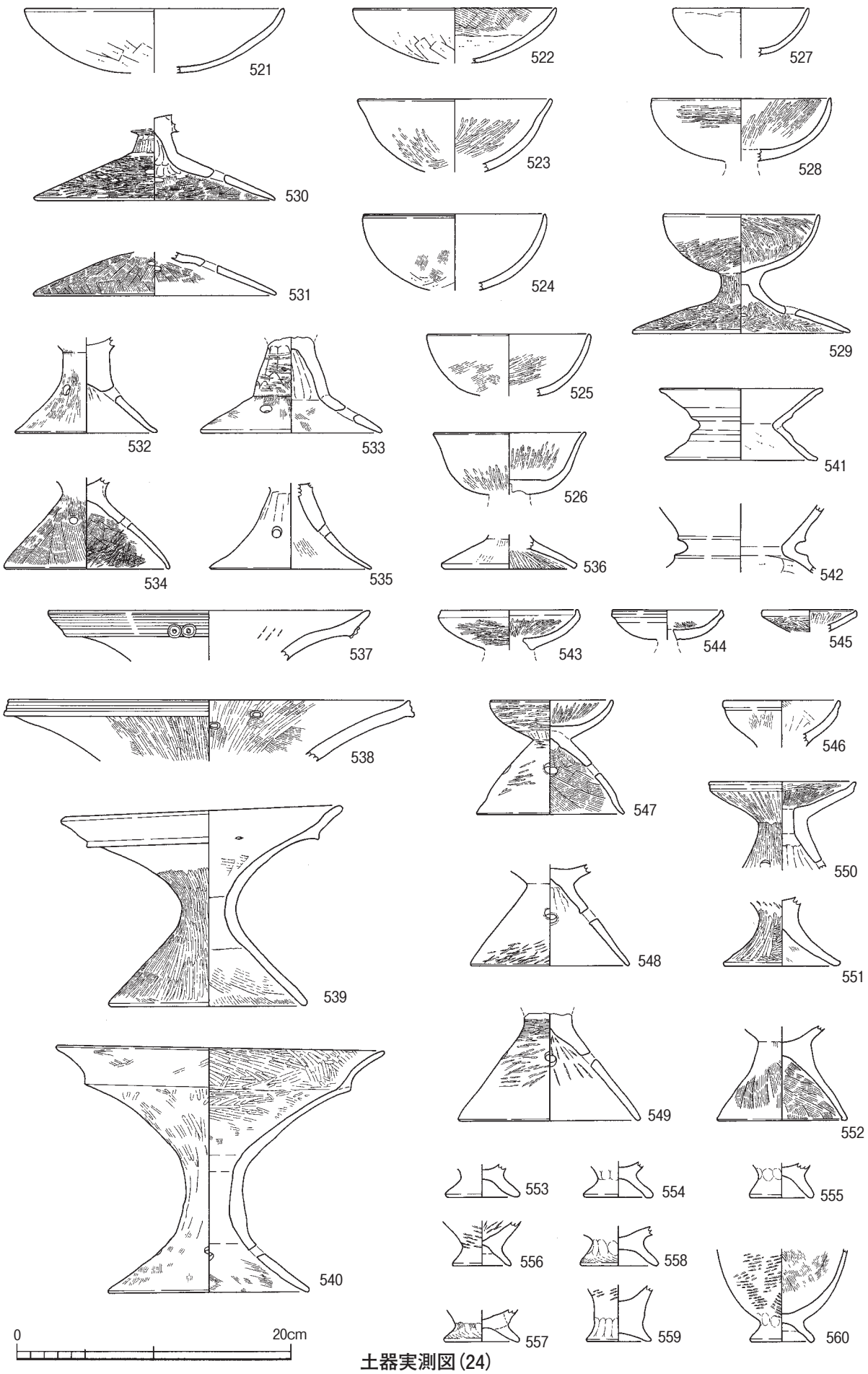


土器実測図(22)


487
488
489
490
491
492
493
494
495
504
505
496
497
498
499
500
501
502
503
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
0
20cm

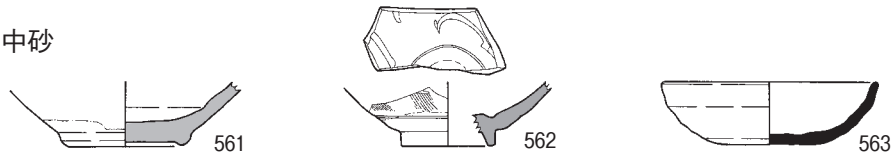
土器実測図(23)

図版38

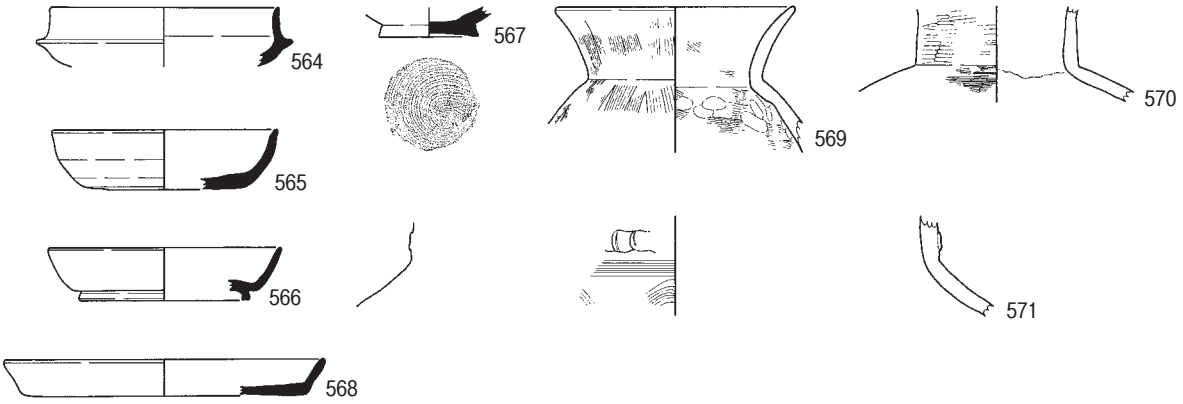


土器実測図(24)

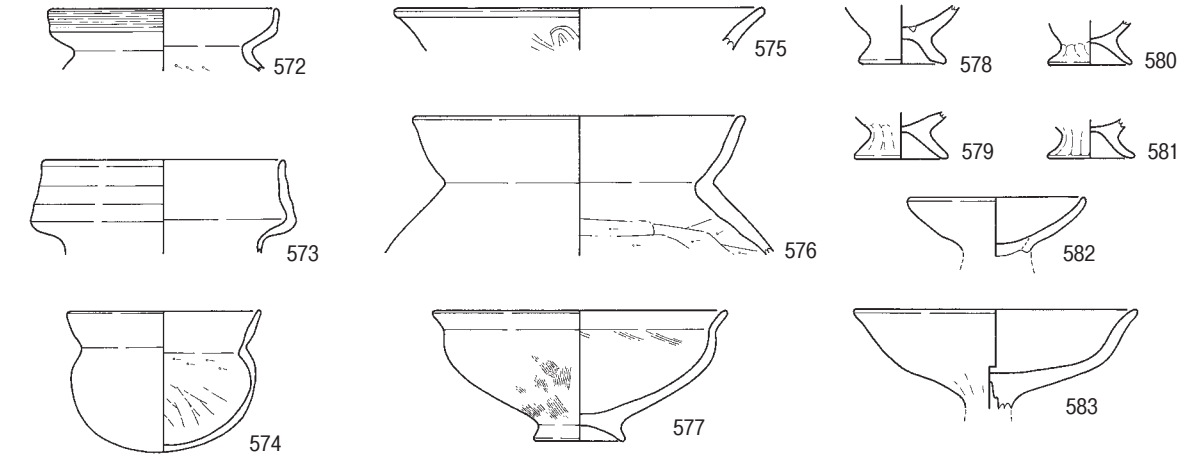
黄灰中砂



灰砂礫

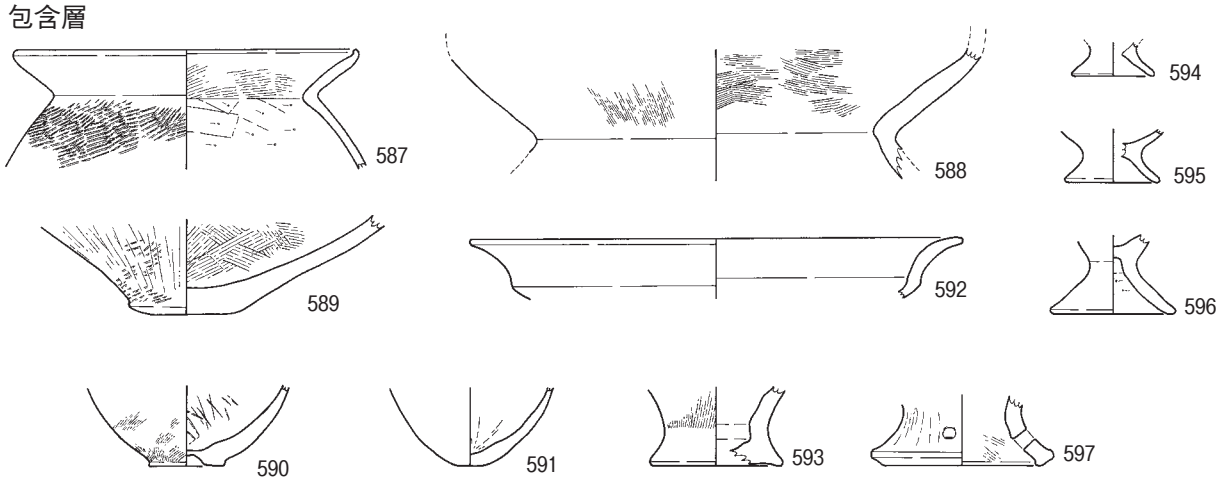


礫層



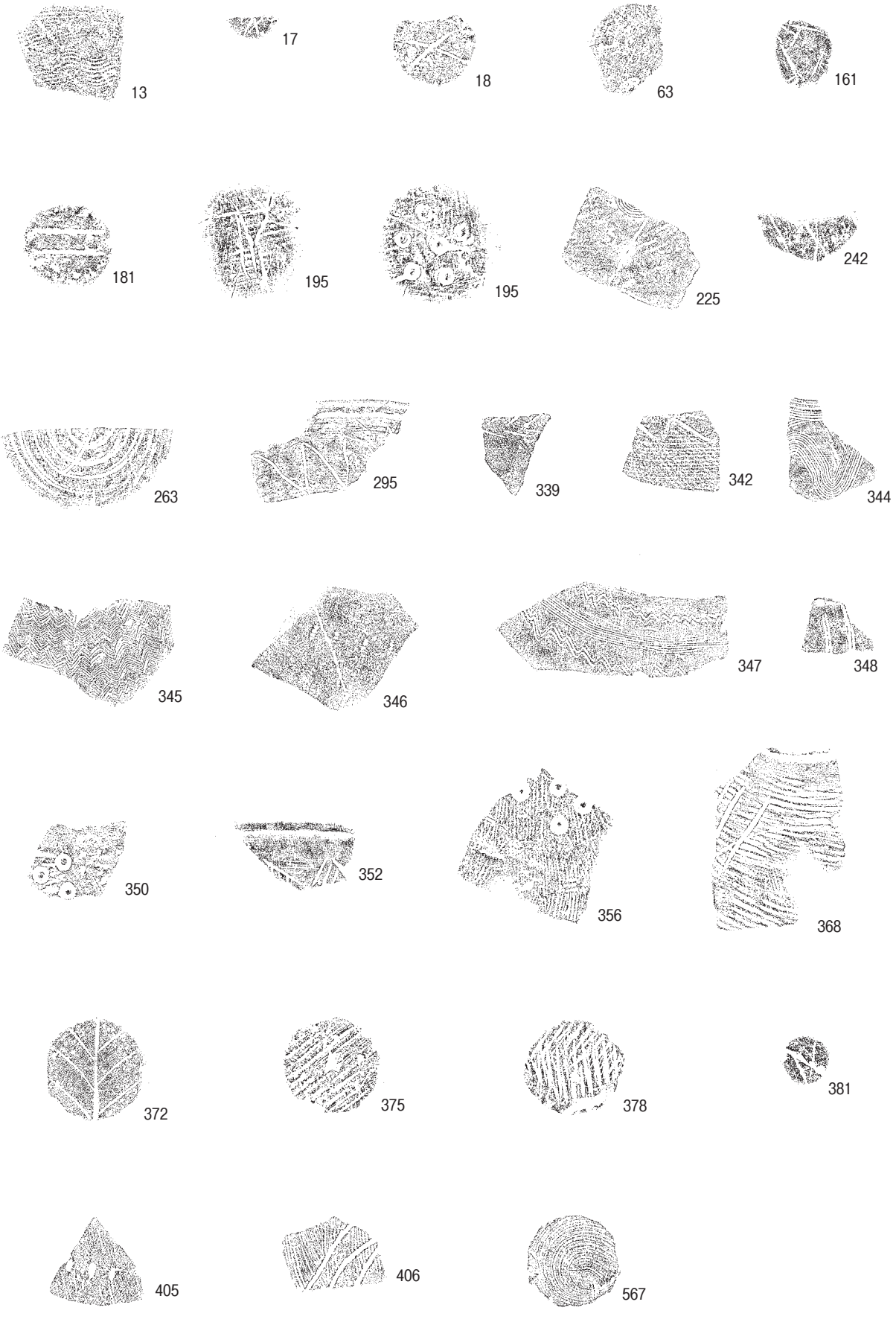
褐灰シルト

包含層

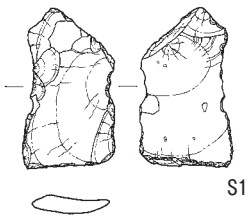


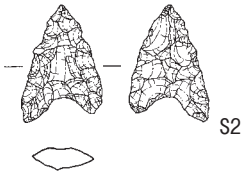
土器実測図(25)

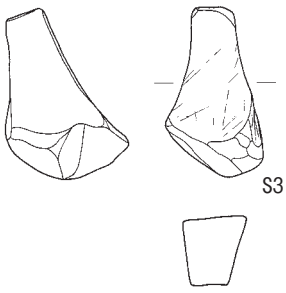
図版40

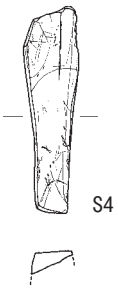


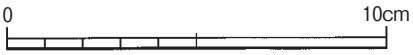
土器文様他拓影





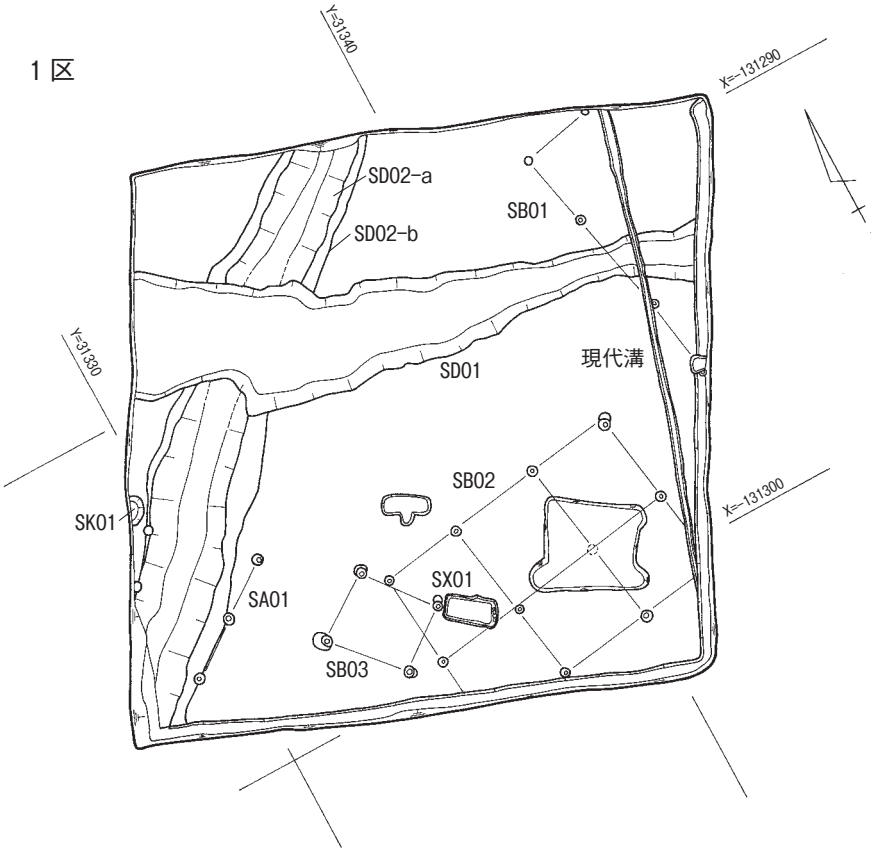


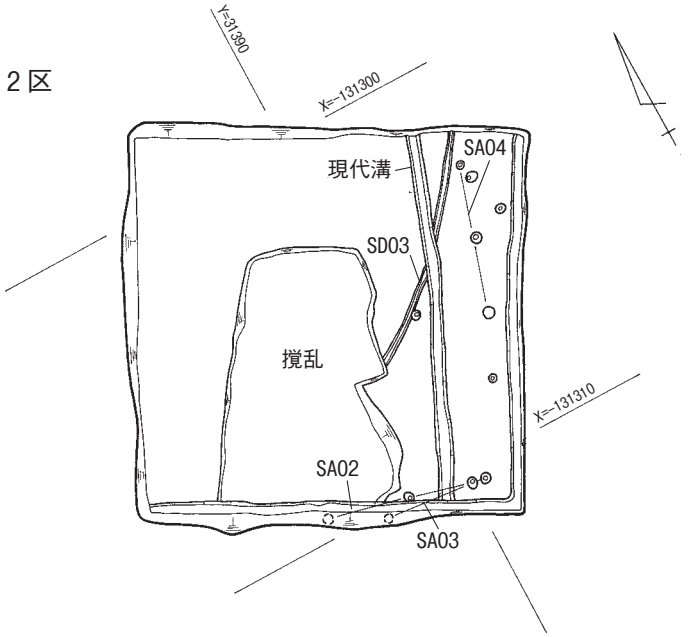




石器実測図

図版42



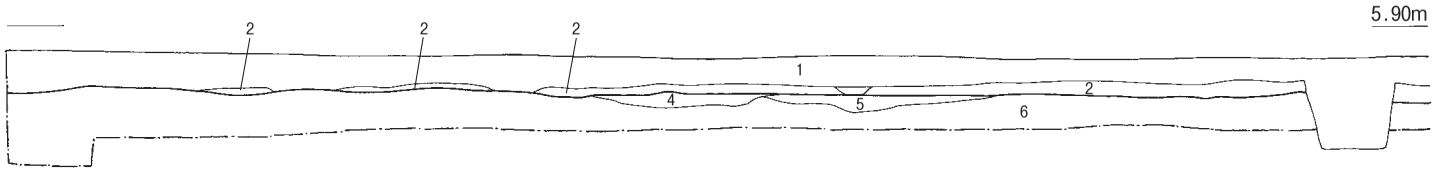


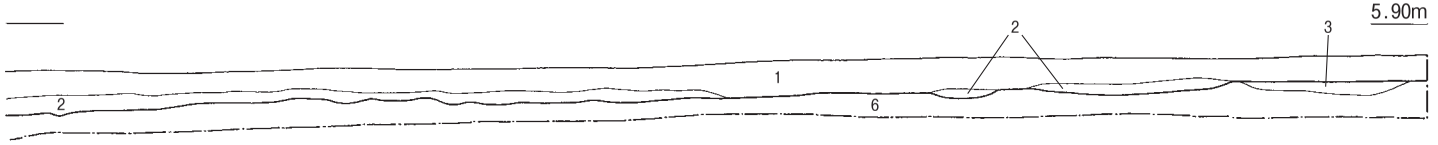
竹の前遺跡平面図

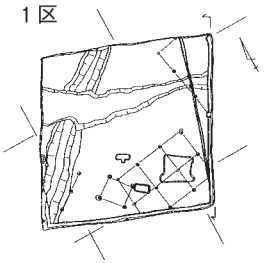
0 10m

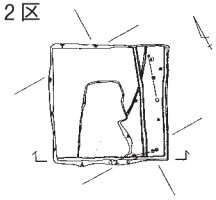
竹の前遺跡土層図

1区東壁



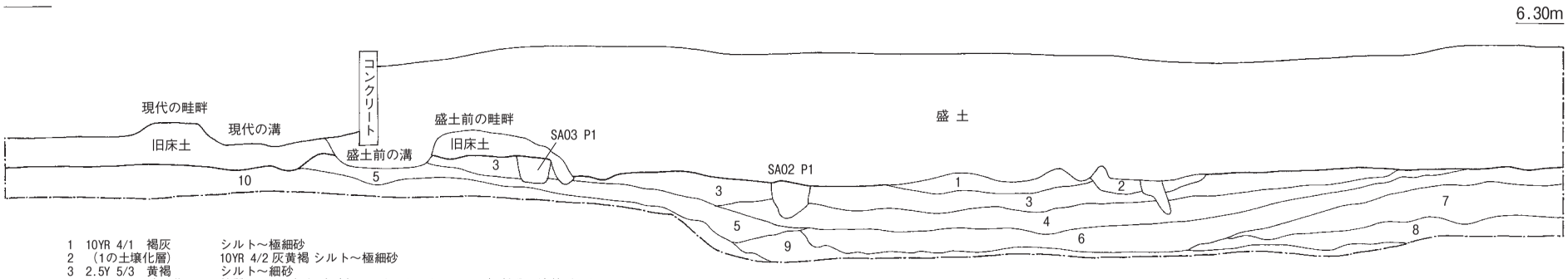




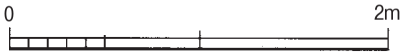


1	(現耕土)	10YR 4/2	灰黄褐	極細砂～細砂
2	(旧耕土)	10YR 5/2	灰黄褐	シルト質極細砂～細砂
3	(南北溝埋土)	10YR 5/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂～細砂
4	(SR01-a埋土)	10YR 5/3	にぶい黄褐	中砂混じりシルト～極細砂
5	(SR01-b埋土)	10YR 5/2	灰黄褐	中砂混じりシルト～細砂
6	(ベース)	10YR 4/3	にぶい黄褐	シルト混じり細砂～中砂

2区南壁

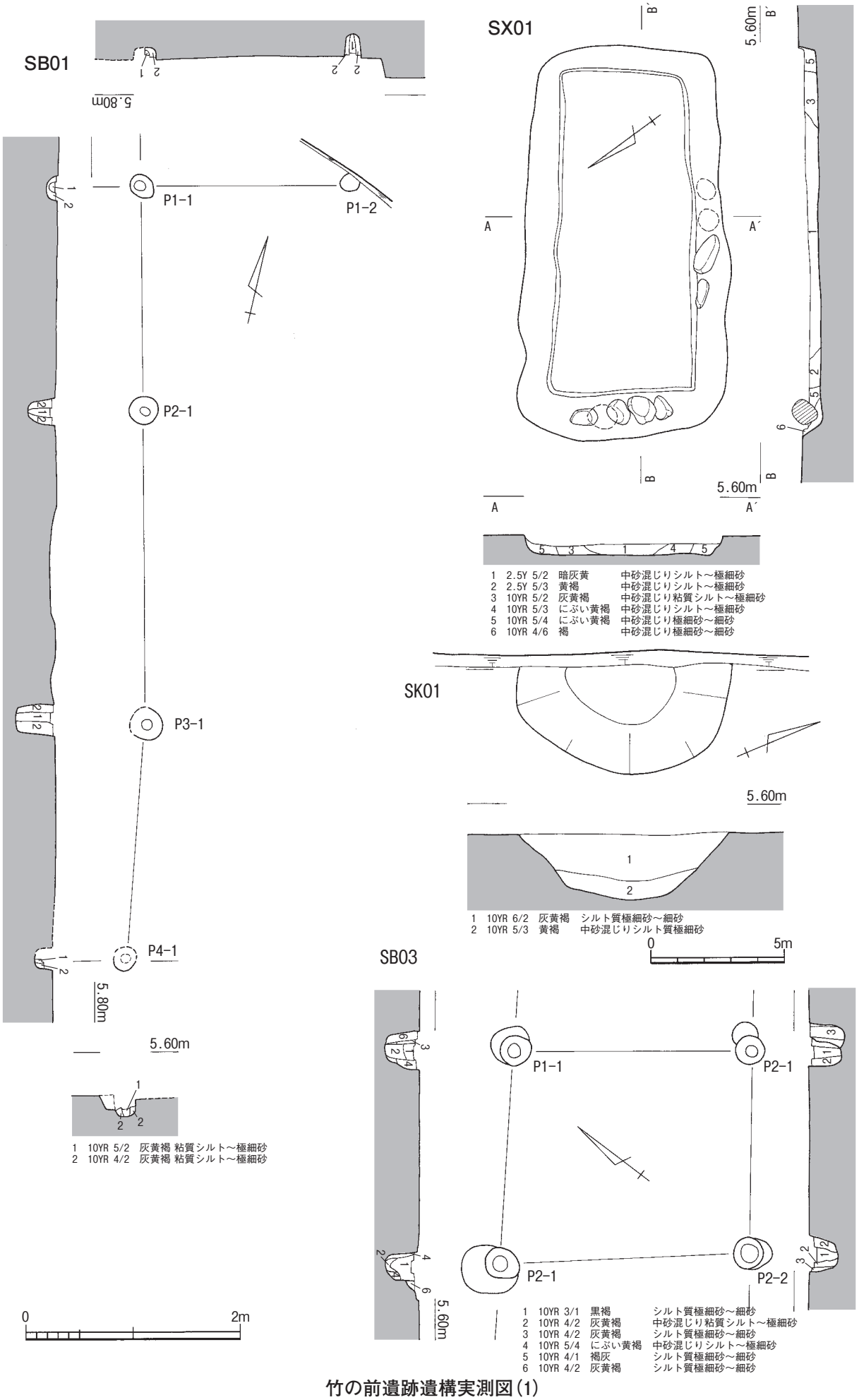


1	10YR 4/1	褐灰	シルト～極細砂
2	(1の土壌化層)	10YR 4/2 灰黄褐	シルト～極細砂
3	2.5Y 5/3	黄褐	シルト～細砂
4	2.5Y 5/2	暗灰黄	粘質シルト～極細砂（白っぽくべたっとしている）鉄分の沈着がみられる
5	2.5Y 5/4	黄褐	粘質シルト～極細砂 4層のように白っぽさはない 6層に近いがしまりが弱く粒子が粗い
6	2.5Y 4/2	暗灰黄	粘質シルト～極細砂 4層より粘性が強く鉄分の沈着も顕著である
7	10YR 4/2	灰黄褐	粘土～粘質シルト
8	10YR 3/1	黒褐	粘土～粘質シルト
9	2.5Y 5/1	黄灰	粘土～粘質シルト 下半は粒子がやや粗めで砂質 上半はほぼ粘土
10	10YR 4/3	にぶい黄褐	シルト～シルト質極細砂

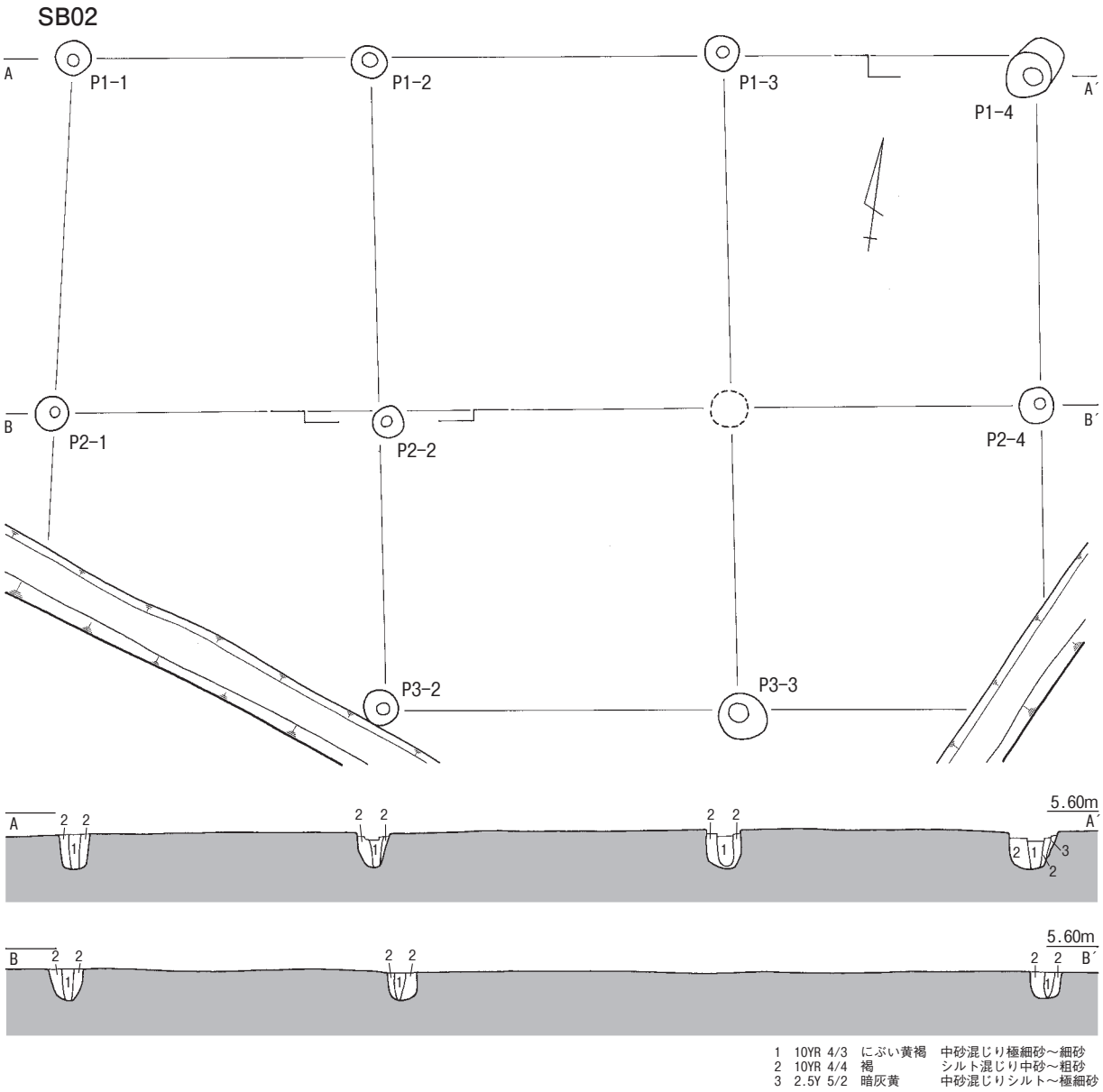


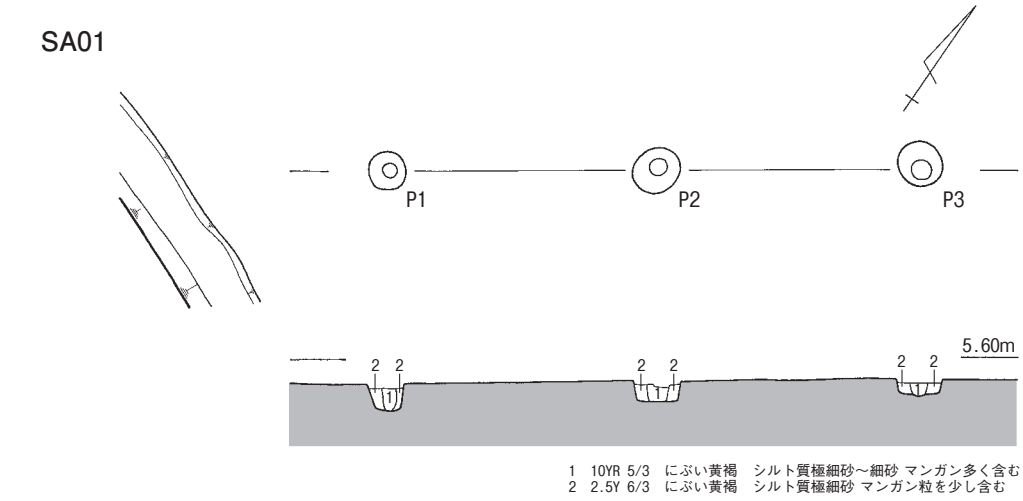
図版43

図版44



竹の前遺跡遺構実測図(1)



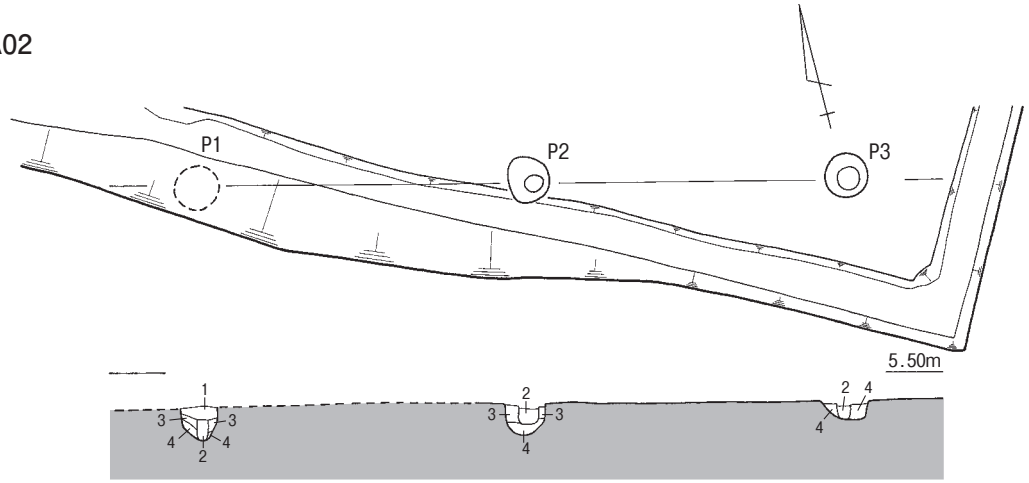


0 2m

竹の前遺跡遺構実測図(2)

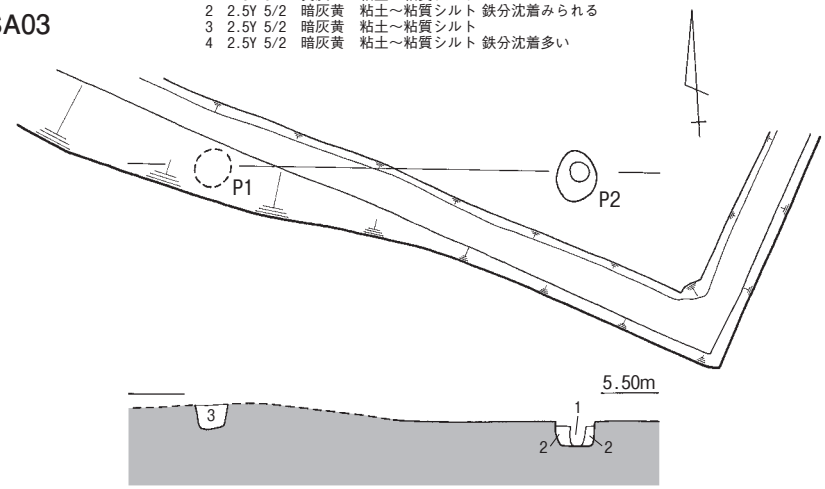
図版46

SA02



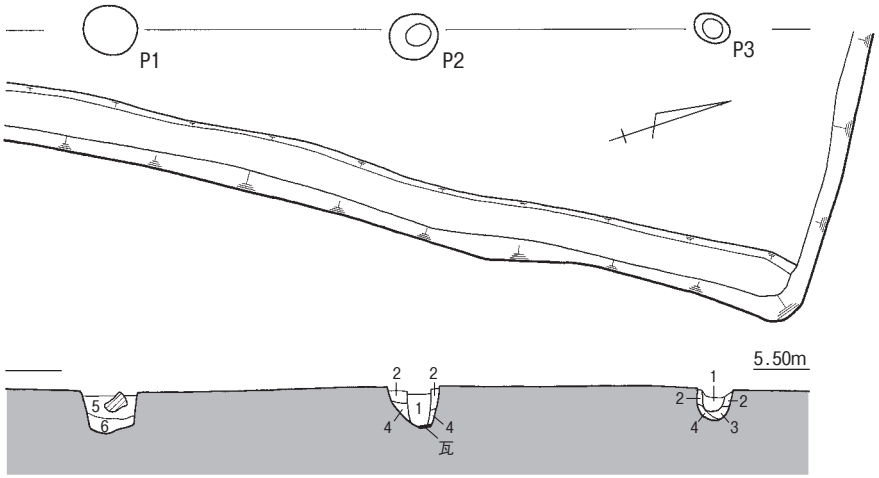
1　2.5Y 5/1　黄灰　　粘土～粘質シルト
2　2.5Y 5/2　暗灰黄　粘土～粘質シルト 鉄分沈着みられる
3　2.5Y 5/2　暗灰黄　粘土～粘質シルト
4　2.5Y 5/2　暗灰黄　粘土～粘質シルト 鉄分沈着多い

SA03



1　2.5Y 4/2　暗灰黄　粘質シルト～極細砂
2　2.5Y 5/3　黄褐　　中砂混じり粘質シルト
3　10YR 4/2　灰黄褐　シルト～極細砂

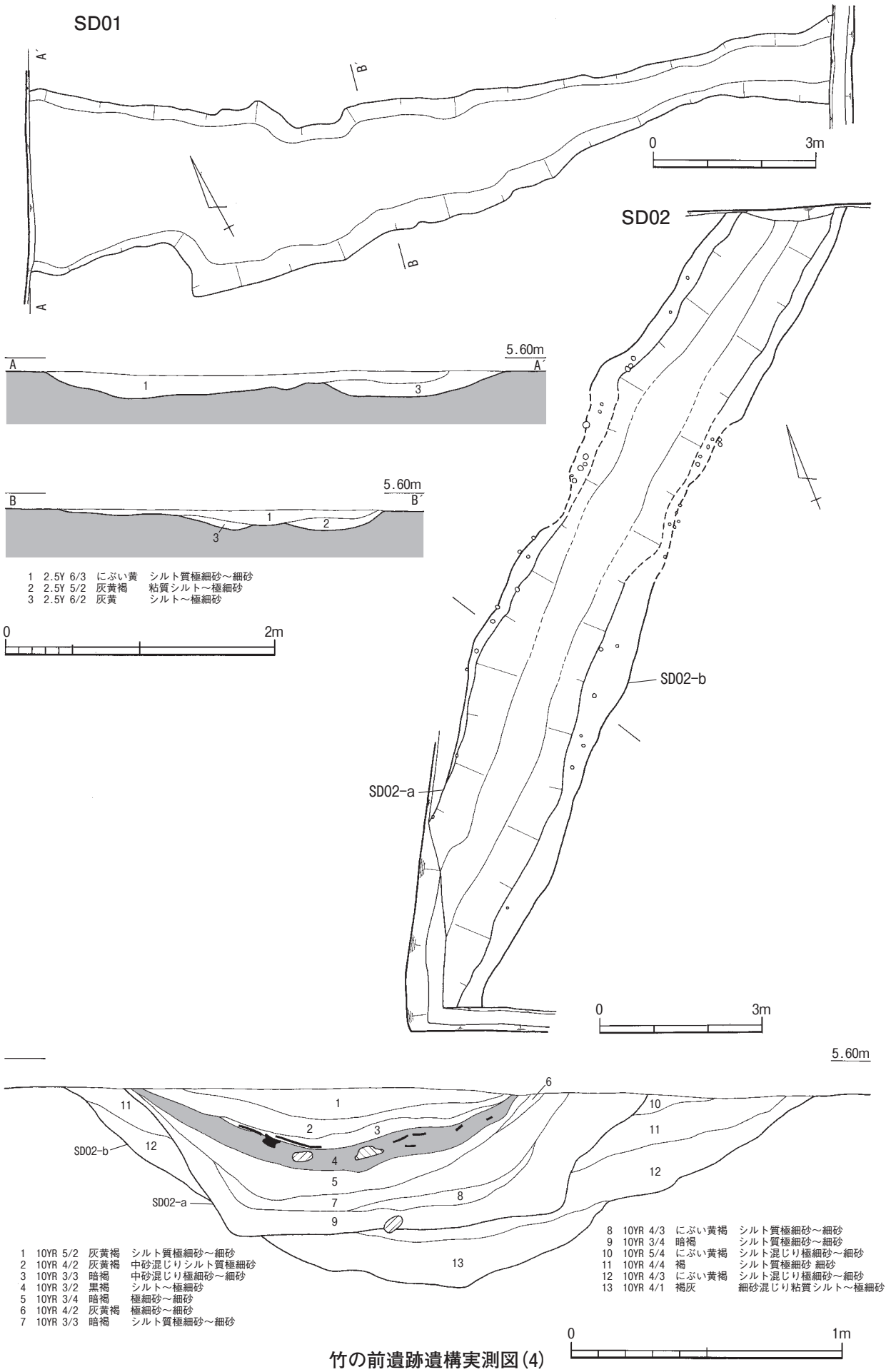
SA04



1　10YR 5/2　灰黄褐　　シルト～極細砂 ベースをわずかに含む
2　10YR 5/4　にぶい黄褐　極細砂～細砂
3　10YR 5/6　黄褐　　シルト質極細砂～細砂
4　10YR 5/2　灰黄褐　　中砂混じり極細砂～細砂
5　10YR 5/1　褐灰　　シルト～極細砂 ベースをブロック状に含む
6　10YR 5/3　にぶい黄褐　中砂混じりシルト～極細砂 ベース下半の細～中砂をわずかに含む

0　2m

竹の前遺跡遺構実測図(3)

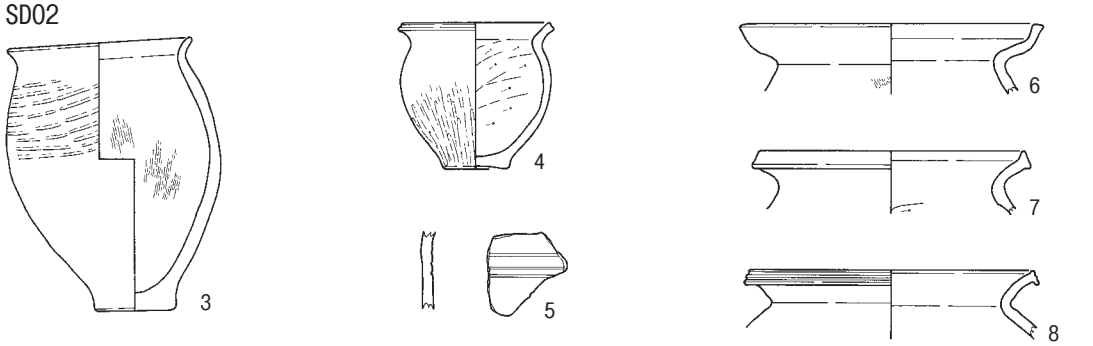


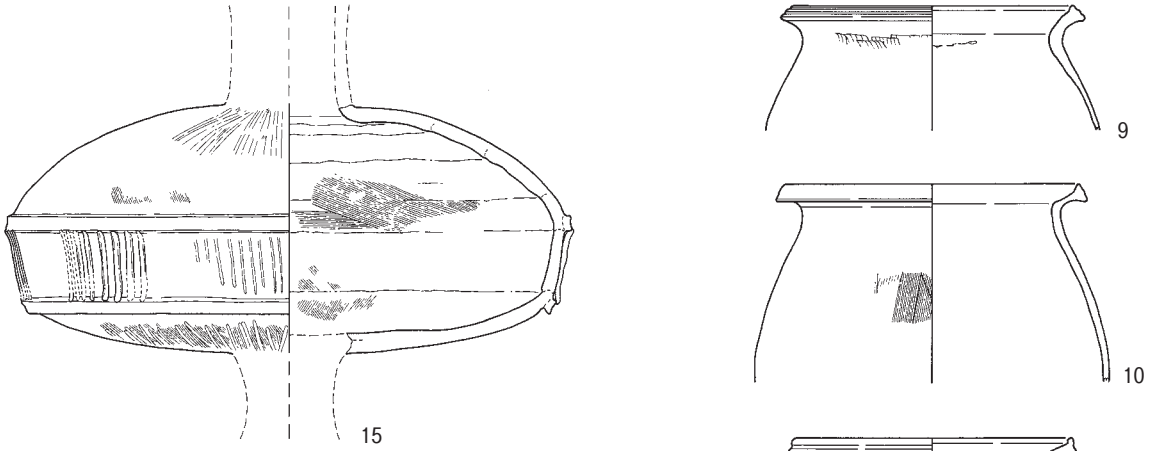
竹の前遺跡遺構実測図(4)

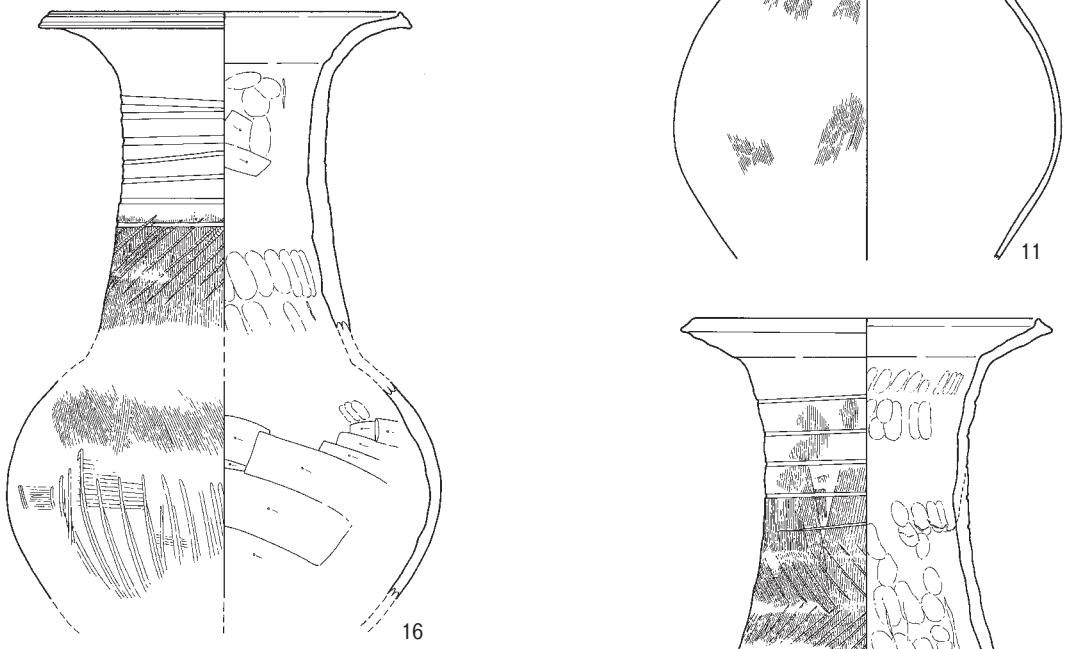
図版48

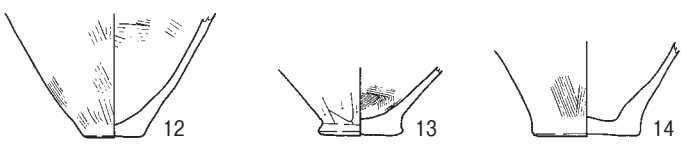
1区 SD01

1区 SD02

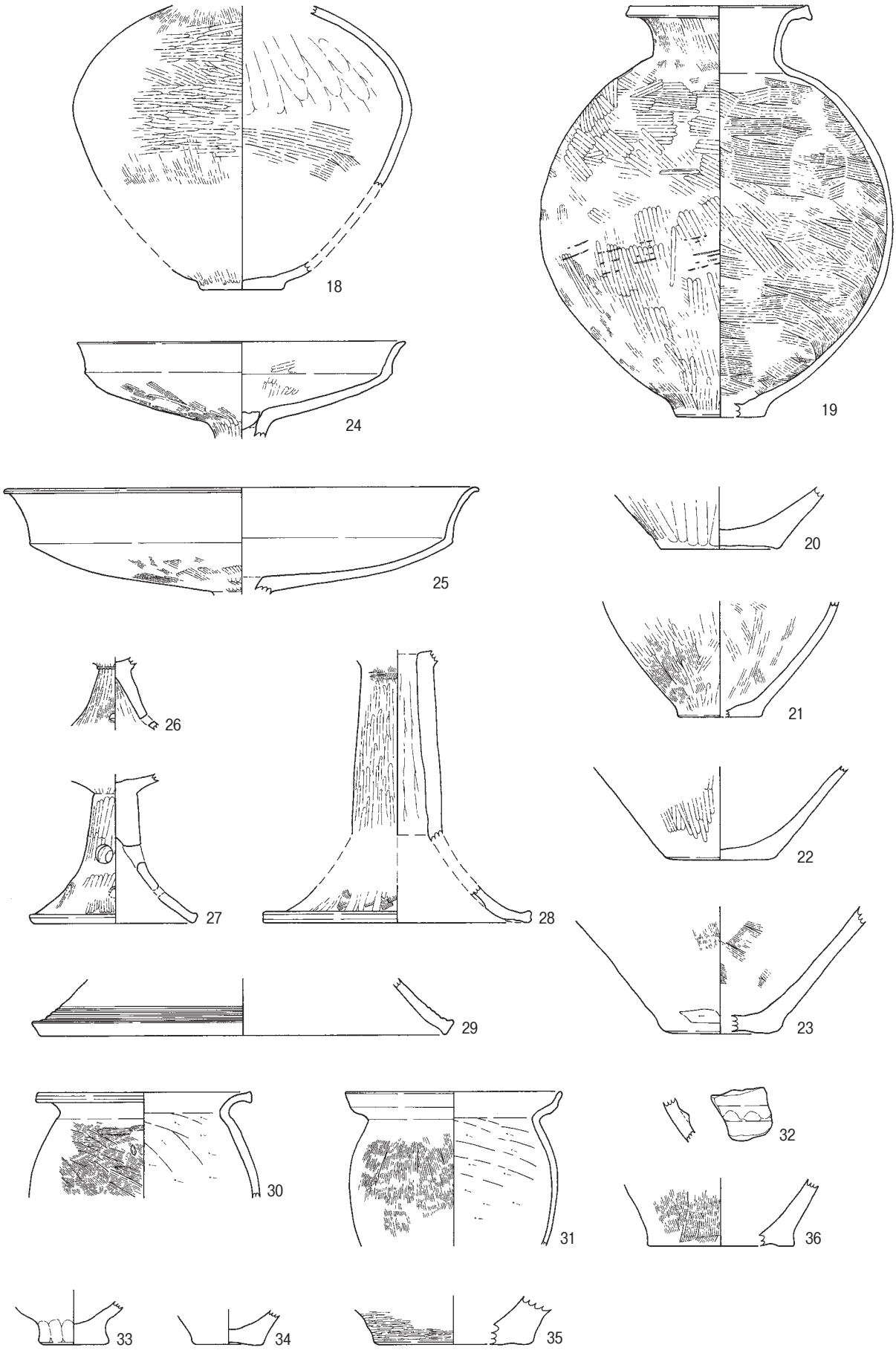








竹の前遺跡土器実測図(1)



竹の前遺跡土器実測図(2)

写　真　図　版

空中写真（南西上空から）

空中写真（南東上空から）

写真図版 2

空中写真（国土地理院撮影）

調査区空中写真（東上空から）

調査区空中写真（南上空から）

写真図版 4

調査区空中写真

飯田橋からの景色（後方は長越遺跡Ⅰ）

全景（南から）

写真図版 6

調査区全景（南から）

全景（北から）

竪穴住居跡群（南東から）

写真図版 8

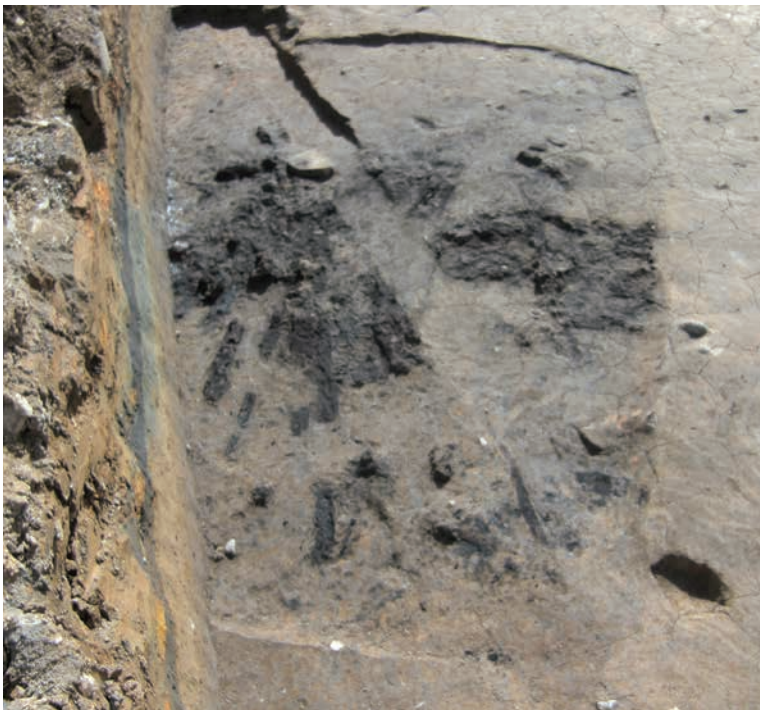
竪穴住居跡群（南から）

竪穴住居跡群（南西から）

SH01全景（西から）

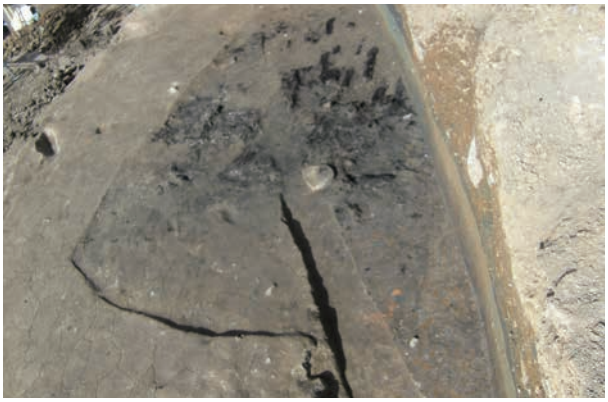
SH01全景（南から）

写真図版10



SH01検出状況
（北から）

SH01検出状況
（東から）



SH01検出状況（南から）

SH01検出状況（西から）

SH01炭化材検出状況

写真図版12

SH01低床部全景

低床部土坑・台石

台石検出状況

調査風景

調査風景

SH02全景（南から）

SH02堆積状況

壁溝堆積状況

床面土器出土状態

中央土坑堆積状況

写真図版14

SH03全景（南から）

SH03堆積状況（南から）

SH04・SH05全景（南西から）

SH04全景（南東から）

写真図版16

SH04全景（北東から）

SH04堆積状況

調査風景

遺物出土状態

中央土坑遺物出土状態（西から）

SH06・SH12全景（東から）

SH06・SH12全景（西から）

写真図版18

SH06焼土坑検出状況（東から）

SH06土器出土状態

SH06焼土坑断面（東から）

SH06焼土坑出土状態（東から）

SH06炉跡断面

SH06炭化材出土状態

SH06炭化材出土状態

SH06炭化材出土状態

SH06東壁炭化材

SH06西壁炭化材

東壁断ち割り

南壁断ち割り

SH06炭化材

網代状炭化材（剥ぎ取り）

写真図版20

SH06土器出土状態（南から）

SH06土器出土状態

SH07（南から）

SH08（北から）

SH08（西から）

写真図版22

SH08土器出土状態（西から）

調査風景

SH09・10・11（南から）

SH09～11の切り合い

SH09（南から）

SH09・SH10遺物出土状態（南から）

SH10（南から）

写真図版24

SH10堆積状況（南から）

SH10土器出土状態

SH10・11の切り合い

調査風景

SH11（南から）

SH11炉跡

SH11土器出土状態

SH13（西から）

SH13（北から）

写真図版26

SK01土器出土状態

SK02アゼ（北西から）

SK03アゼ・土器出土状態（北西から）

SK02アゼ（北西から）

SD01アゼ（南から）

SD06アゼ（南から）

SD09（西から）

SD02上層アゼ（東から）

SD02土器出土状態（西から）

SD02土器出土状態（西から）

SD02土器出土状態（西から）

SR01（北から）

SR01（南から）

SR01アゼ（北から）

中央アゼ（南から）

写真図版28

旧河道土器出土状態

調査風景

SH04出土遺物

SH06出土遺物

SH09出土遺物

写真図版30

讃岐からの搬入品

山陰からの搬入品

庄内甕

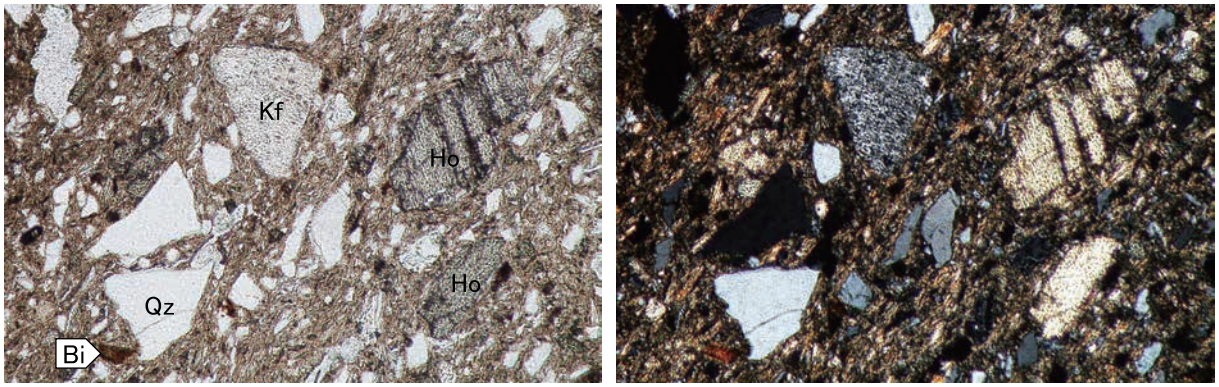
旧河道出土
（壺）

旧河道出土
（高杯・器台）

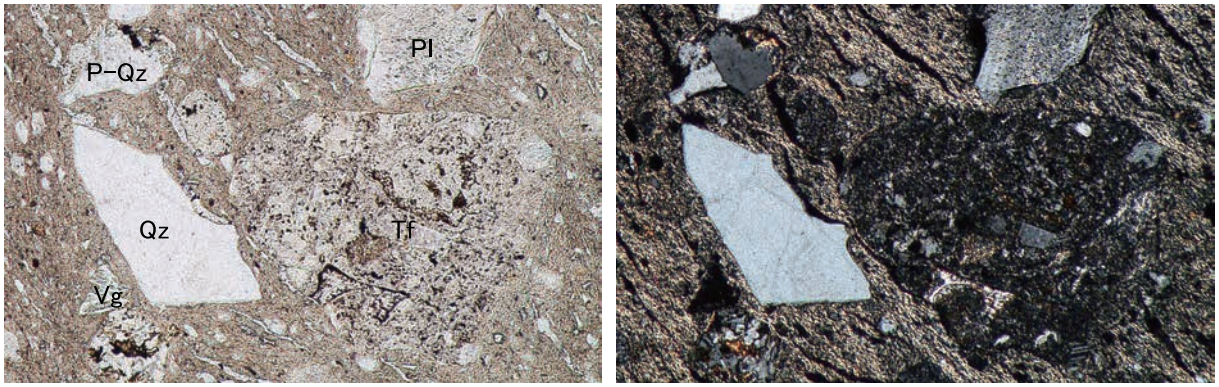
旧河道出土
（製塩土器）

写真図版32

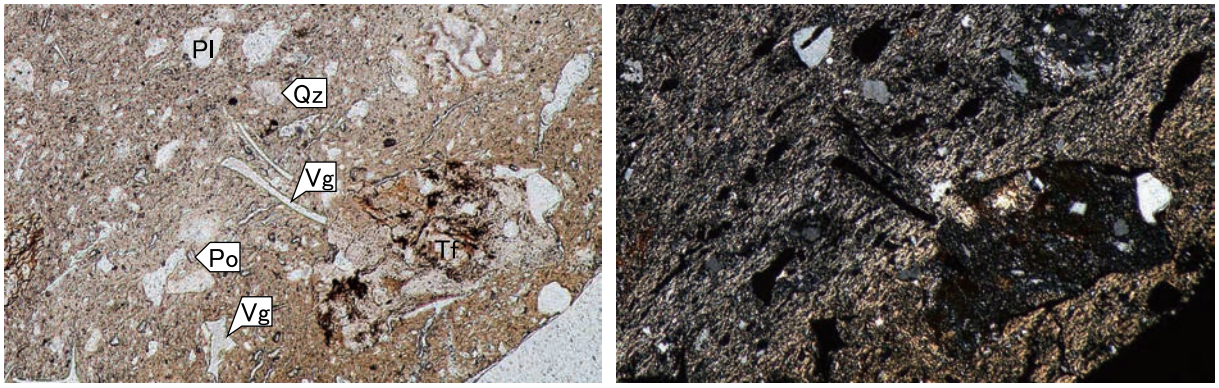
胎土薄片(1)



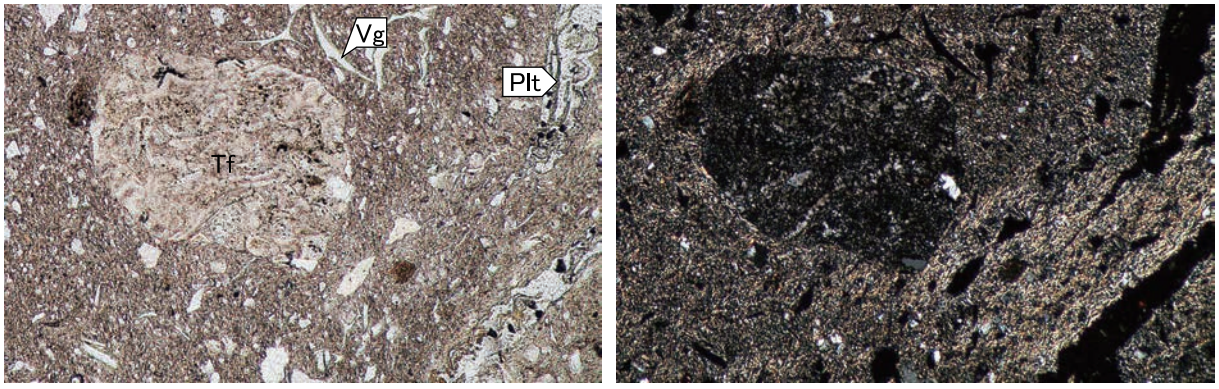
1.No.1(土師器　庄内甕　播磨産)



2.No.2(土師器　庄内甕　播磨産)



3.No.3(土師器　庄内甕　播磨産)

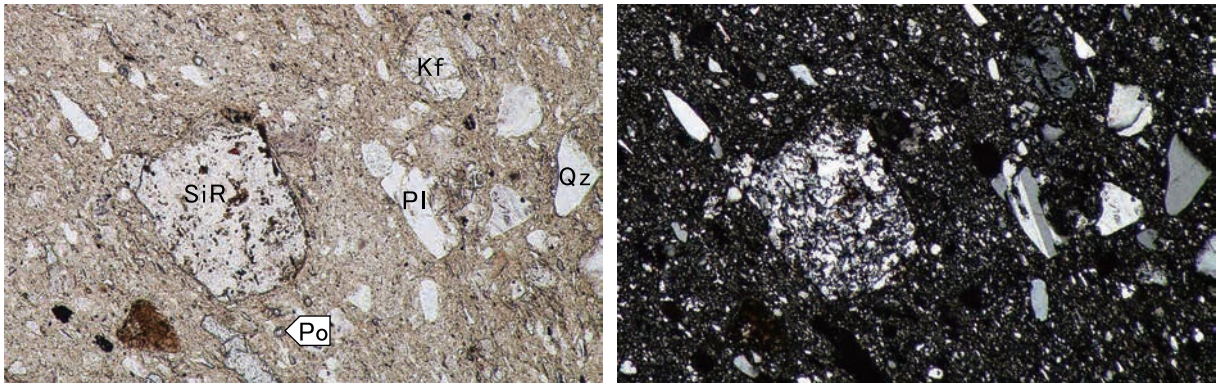


4.No.4(土師器　甕　播磨産)

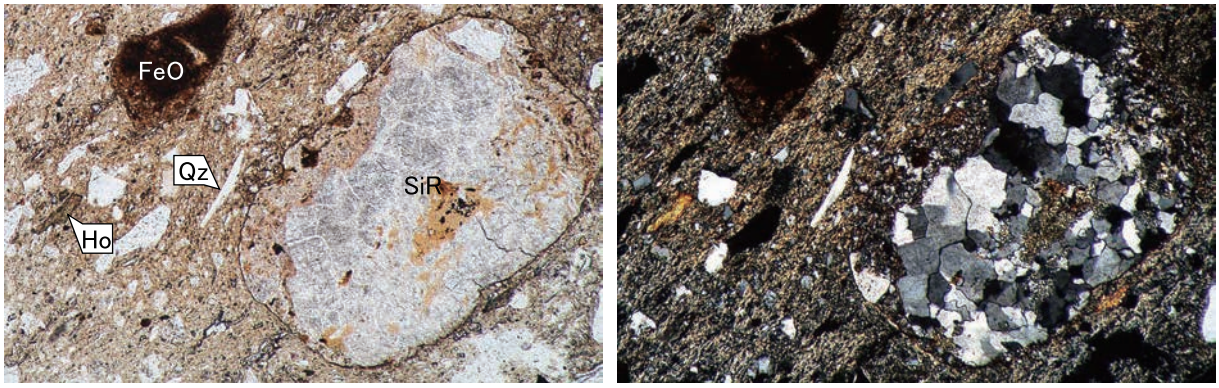
0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Tf:凝灰岩.
P-Qz:多結晶石英. Vg:火山ガラス. Po:植物珪酸体. Plt:植物片.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

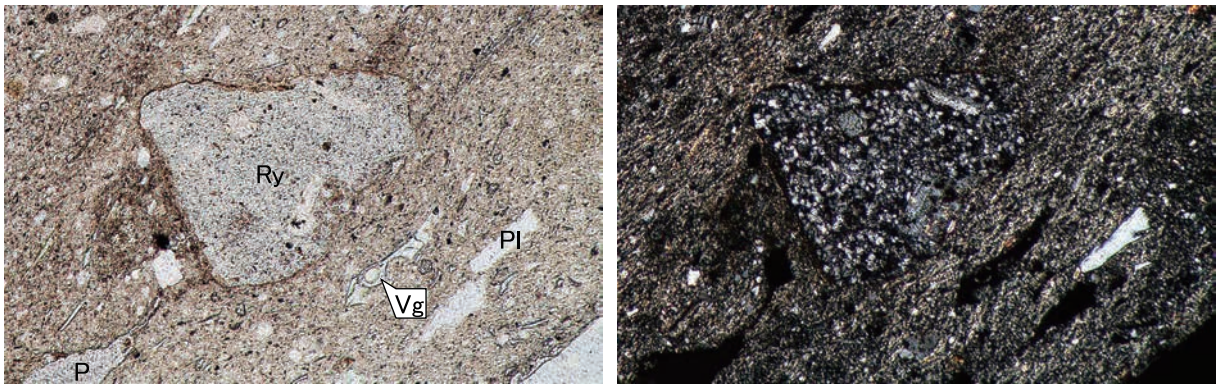
胎土薄片(2)



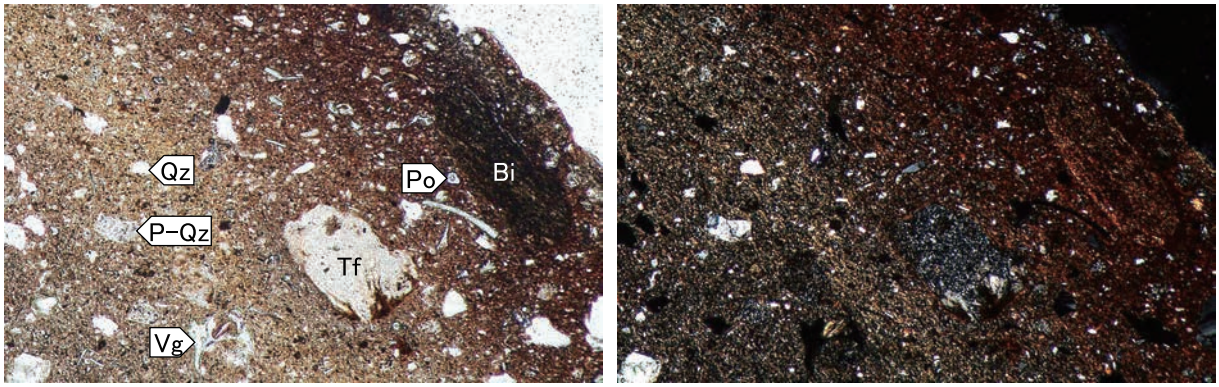
5.No.5(土師器　甕　播磨産)



6.No.6(土師器　甕　播磨産)



7.No.7(土師器　甕　播磨産)



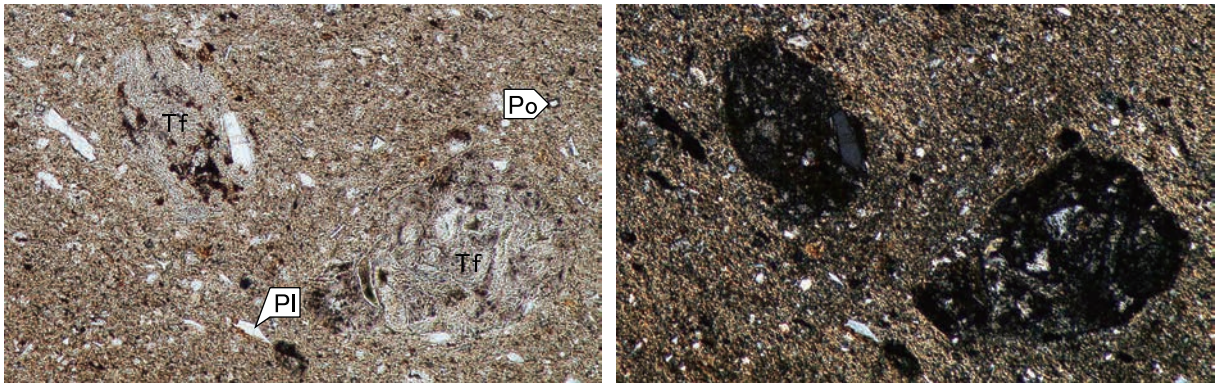
8.No.8(土師器　高杯　播磨産)

0.5mm

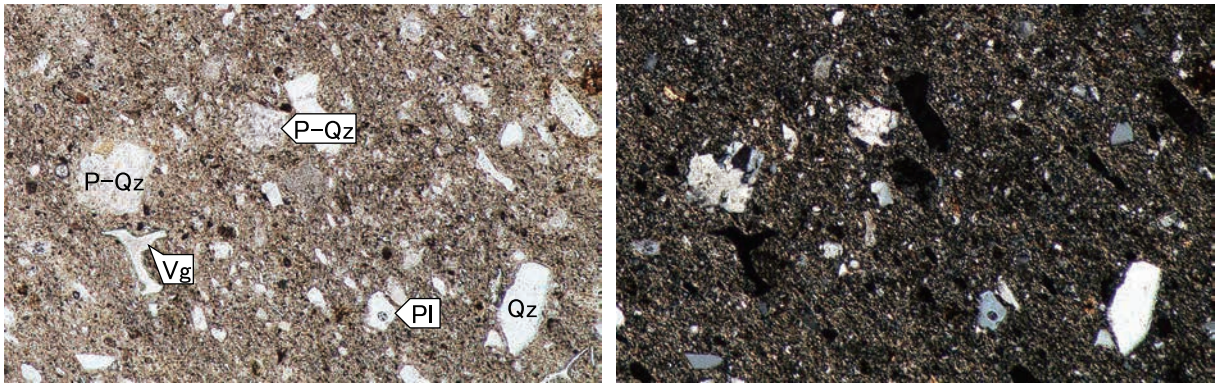
Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Tf:凝灰岩. Ry:流紋岩.
P-Qz:多結晶石英. SiR:珪化岩. Vg:火山ガラス. FeO:酸化鉄. Po:植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真図版34

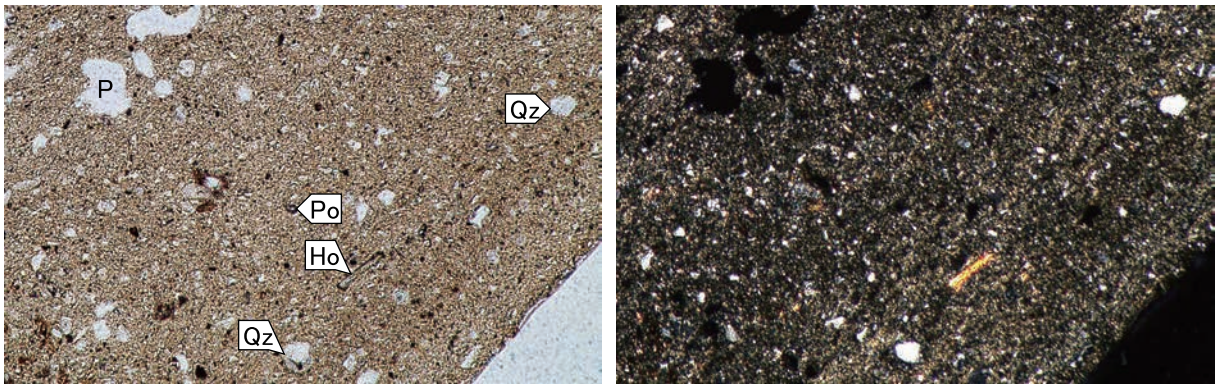
胎土薄片(3)



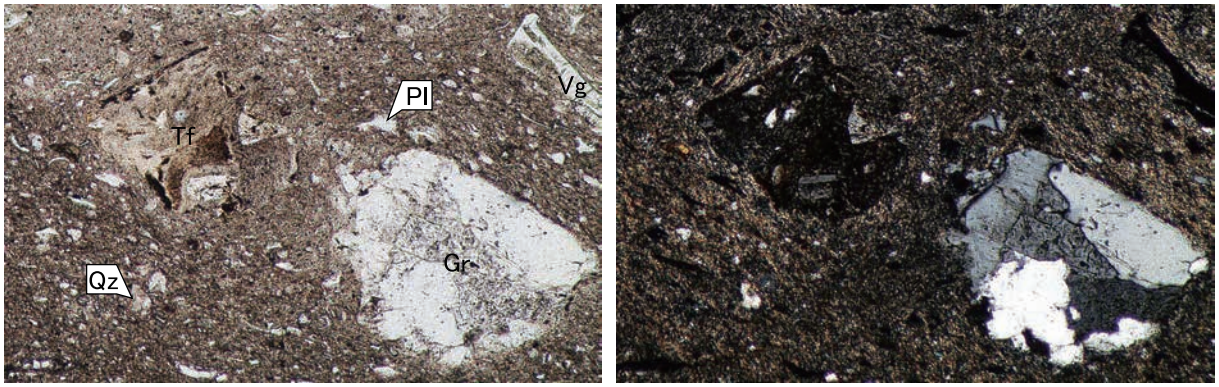
9.No.9(土師器　高杯　播磨産)



10.No.10(土師器　高杯　播磨産)



11.No.11(土師器　小形丸底壺　播磨産)

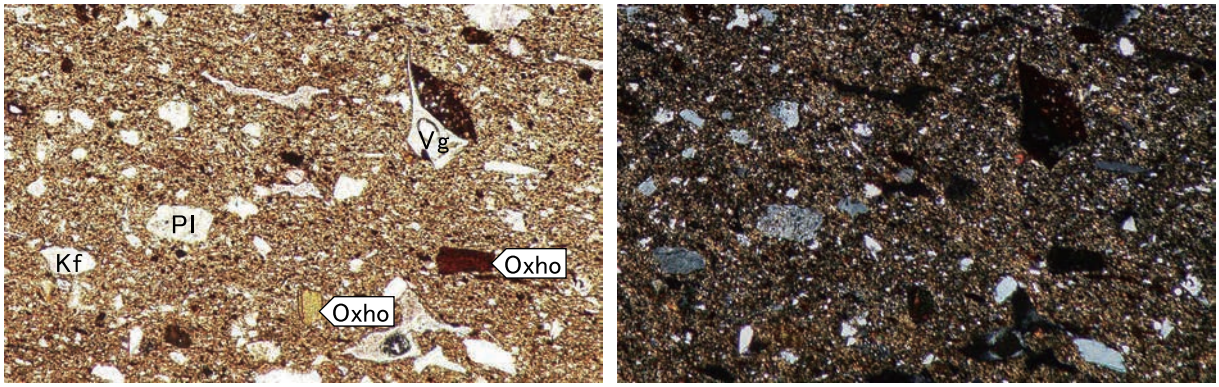


12.No.12(土師器　小形丸底壺　播磨産)

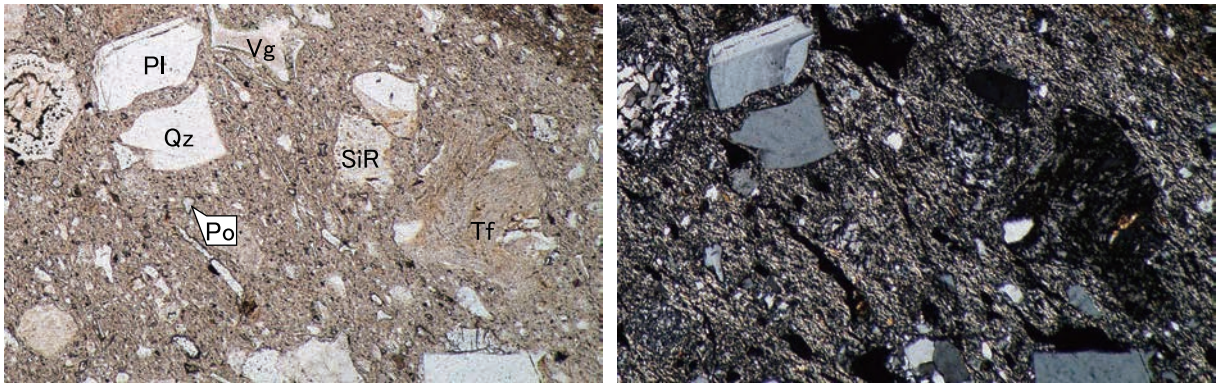
0.5mm

Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Tf:凝灰岩. P-Qz:多結晶石英. Gr:花崗岩.
Vg:火山ガラス. Po:植物珪酸体. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

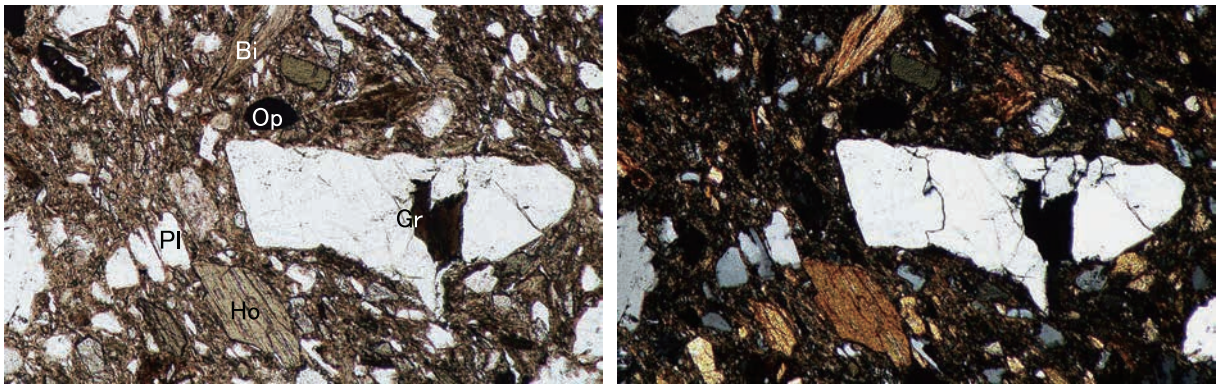
胎土薄片(4)



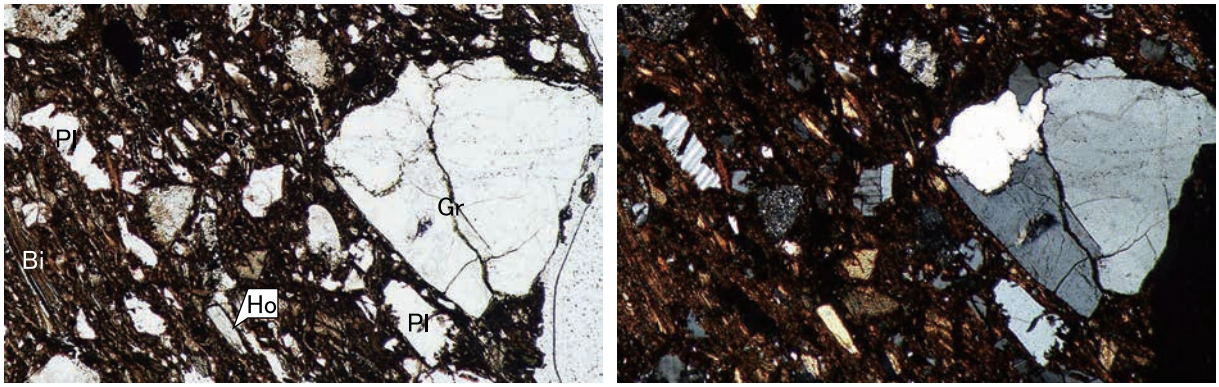
13.No.13(土師器　小形丸底壺　播磨産)



14.No.14(土師器　壺　讃岐型、播磨産)



15.No.15(土師器　壺　讃岐産)



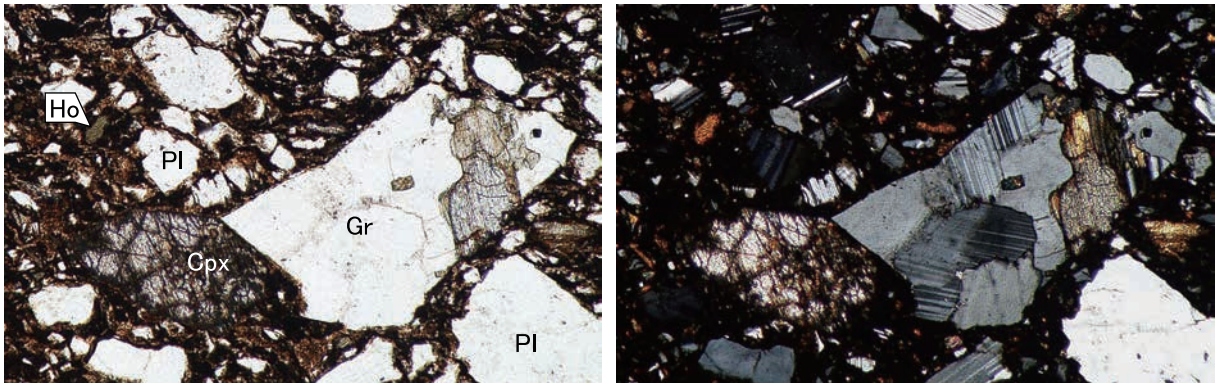
16.No.16(土師器　壺　讃岐産)

0.5mm

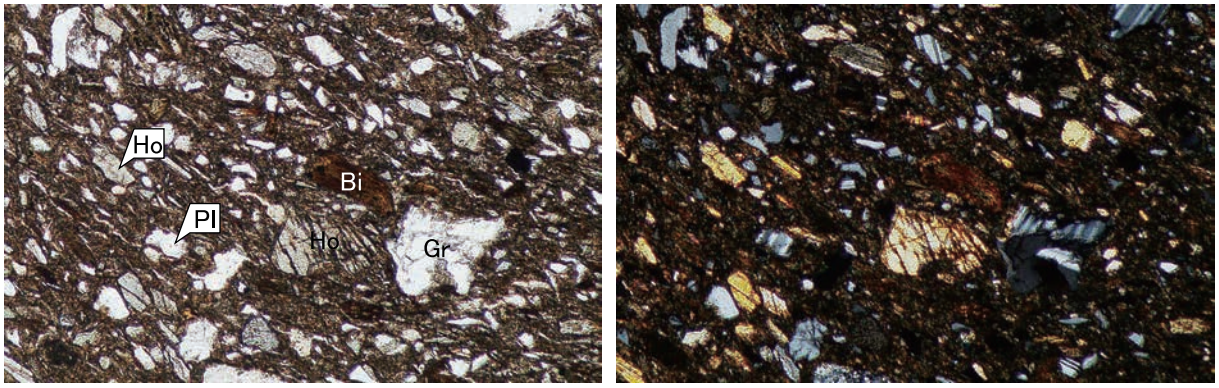
Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Oxho:酸化角閃石. Bi:黒雲母.
Op:不透明鉱物. Tf:凝灰岩. Gr:花崗岩. SiR:珪化岩. Vg:火山ガラス. Po:植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真図版36

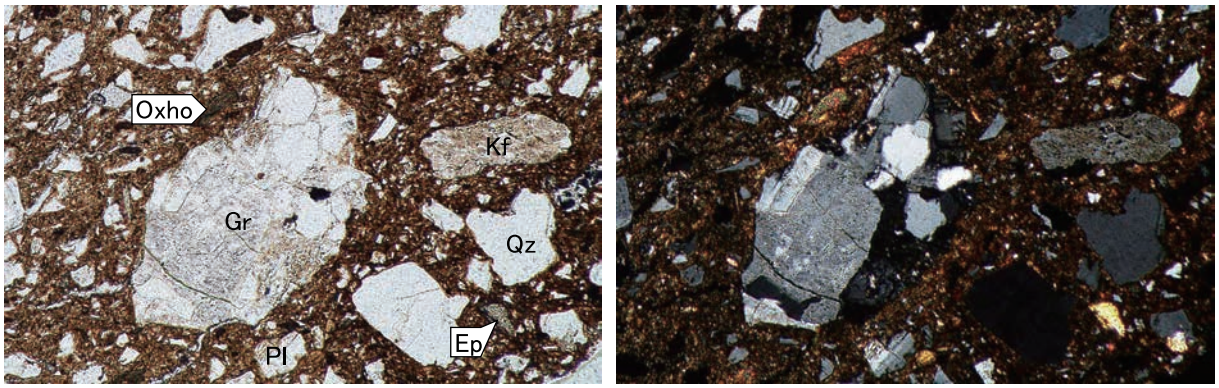
胎土薄片(5)



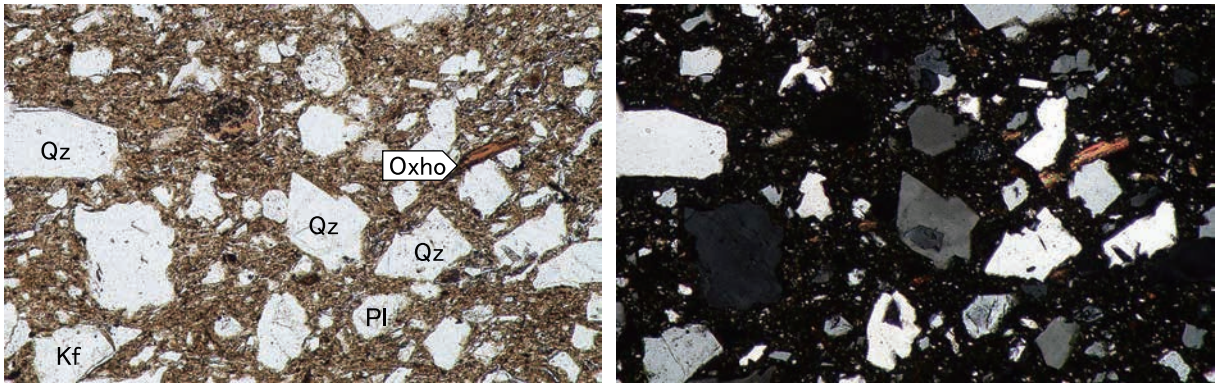
17.No.17(土師器　壺　讃岐産)



18.No.18(土師器　甕　河内産)



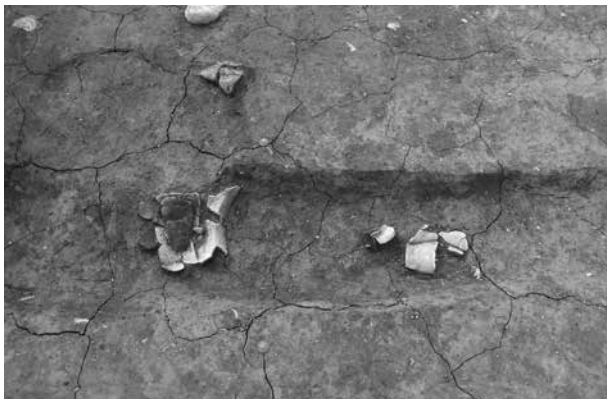
19.No.19(土師器　甕　吉備産)



20.No.20(土師器　甕　因幡産)

0.5mm

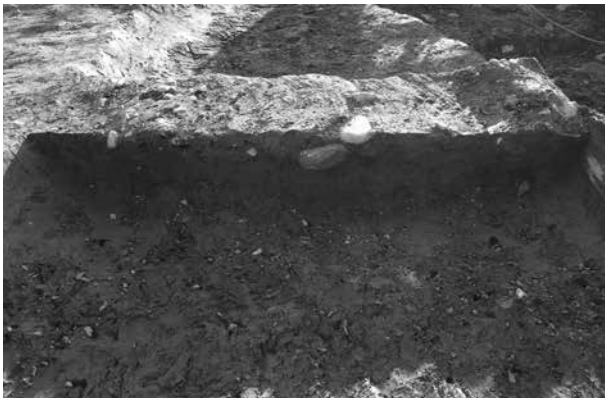
Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Cpx:単斜輝石. Ho:角閃石. Oxho:酸化角閃石.
Ep:緑レン石. Bi:黒雲母. Gr:花崗岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



SD09（西から）

SD10アゼ（南から）

SR01アゼ（南から）



SR01アゼ（北から）

SR01アゼ（北から）

SR01アゼ（北から）

SX01土器出土状態

SX02調査風景

写真図版38

SX04土器出土状態（東から）

現地説明会

考古学者養成セミナー

実測風景

上層スキ溝（南から）

上層水田アゼ（南から）

15年度調査区（長越Ⅱ）の現況

船場川ゴミ集積状況

出土遺物

旧河道出土遺物

出土遺物(1)

旧河道出土
讃岐搬入土器

旧河道出土製塩土器

暗灰砂出土鉢

出土遺物(2)

暗灰砂出土小形土器

暗灰砂出土甕

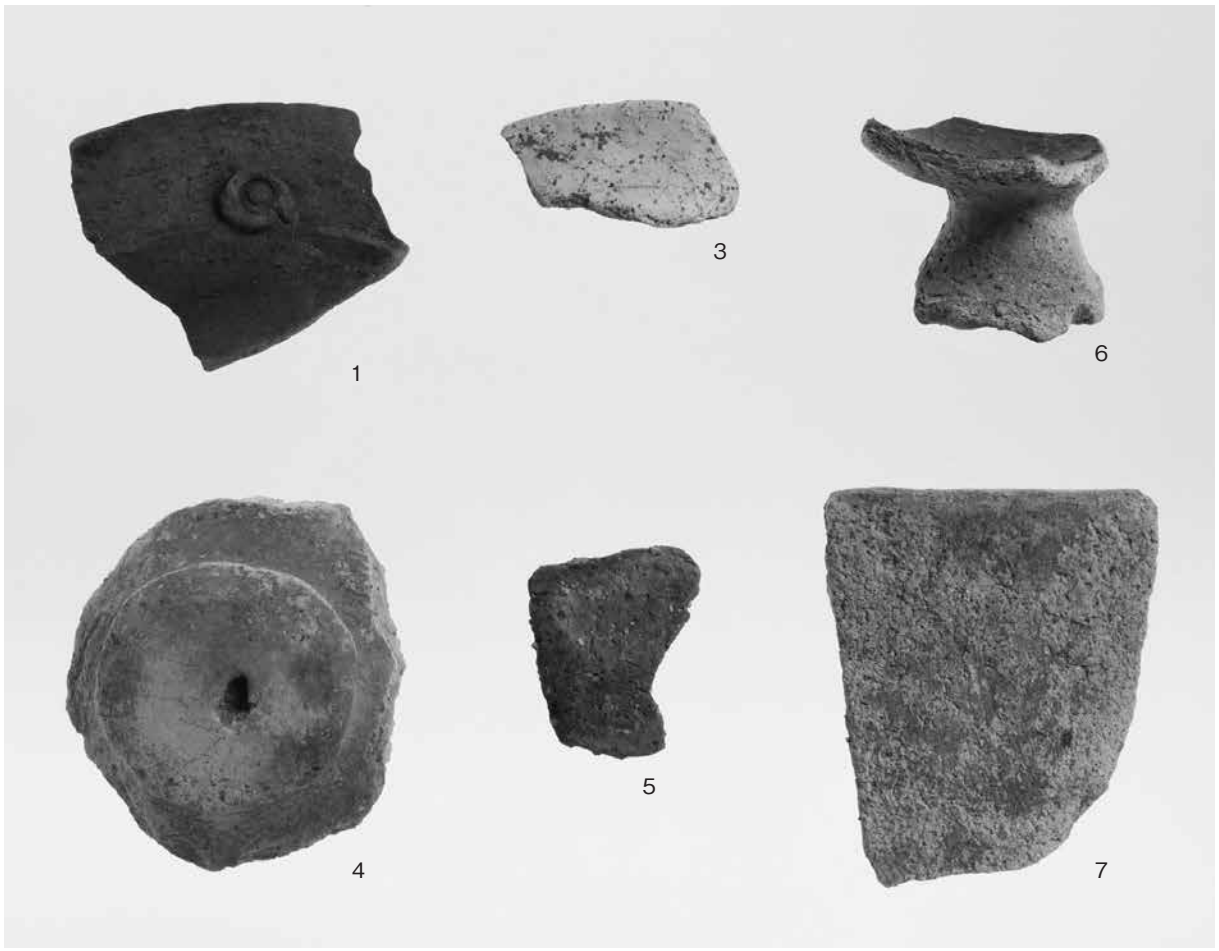
2

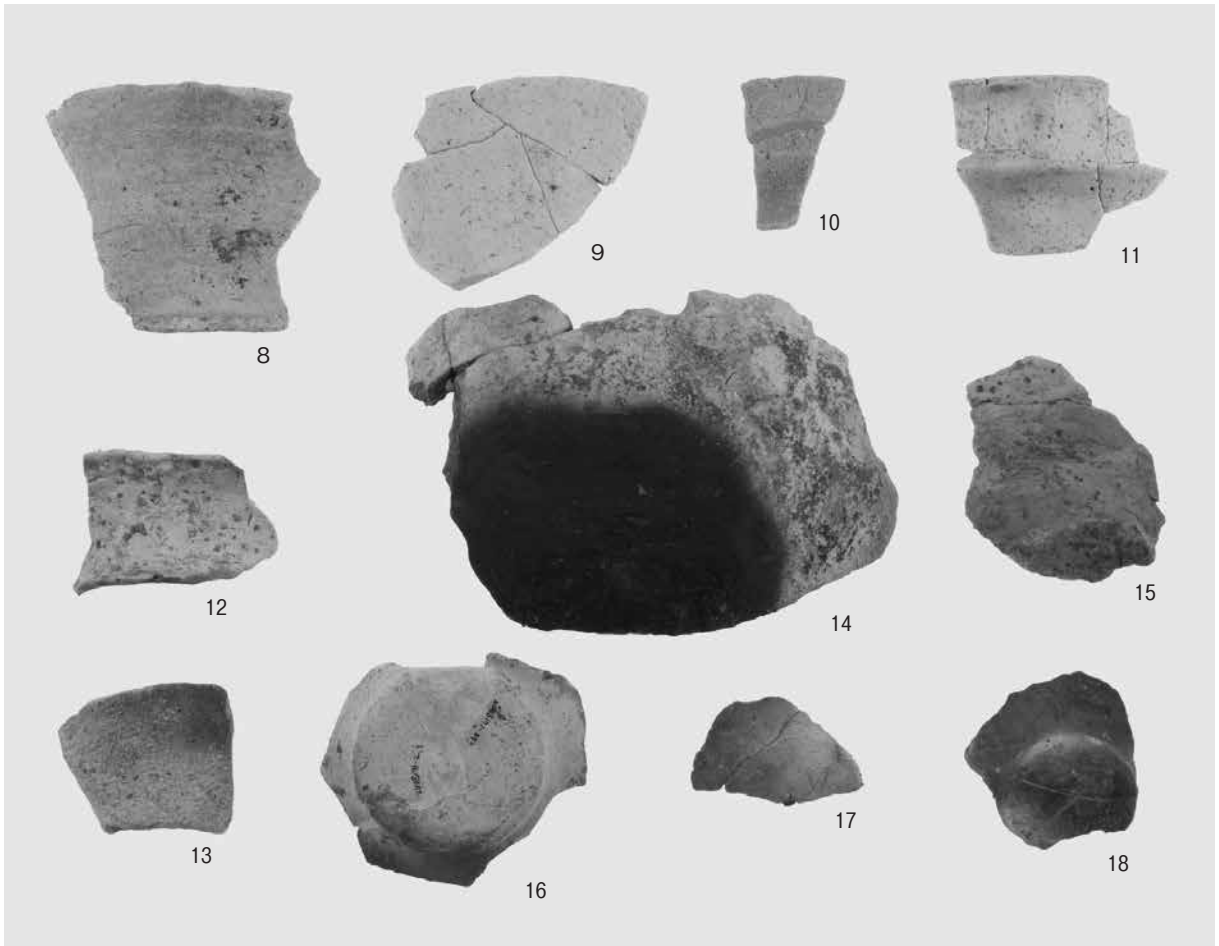
23

24

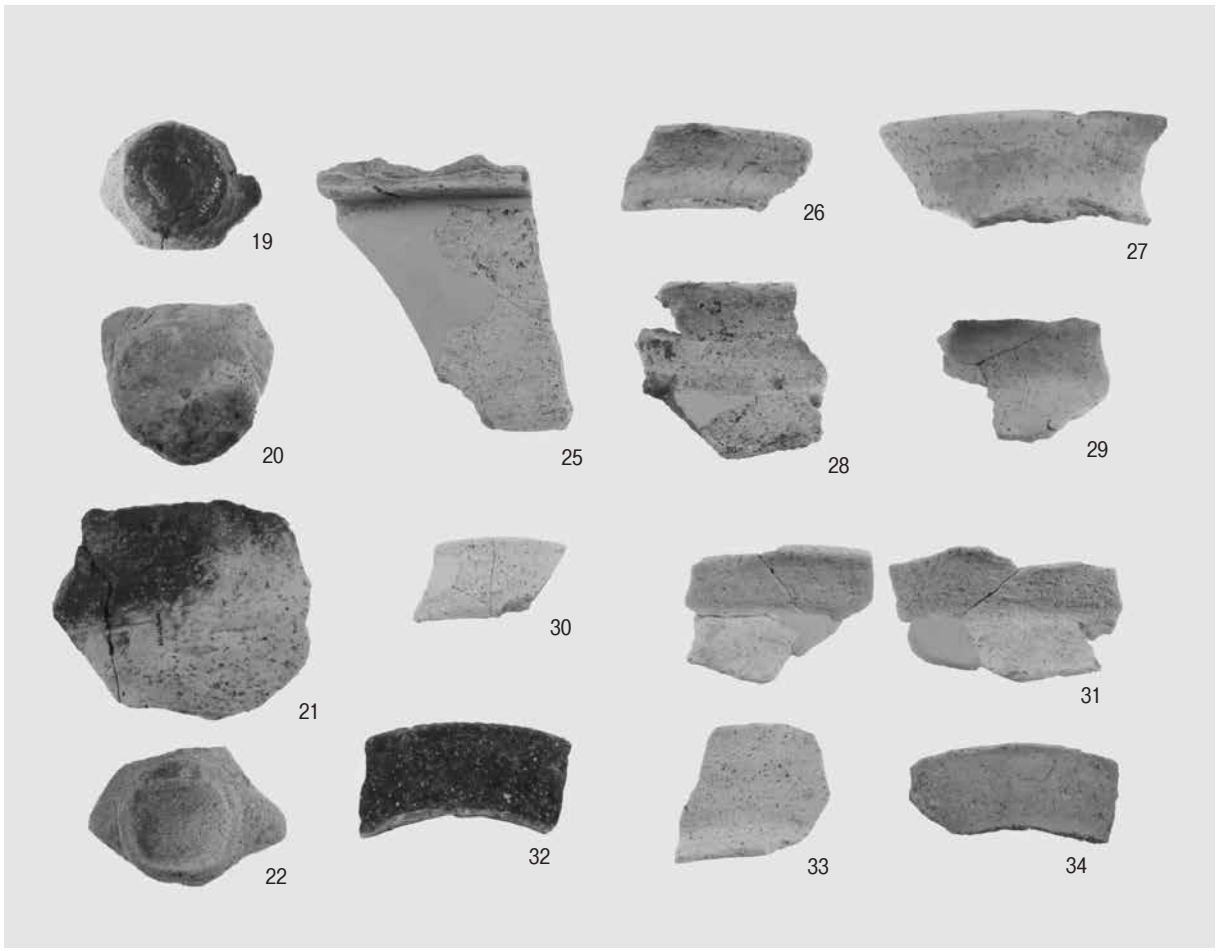
出土遺物(3)

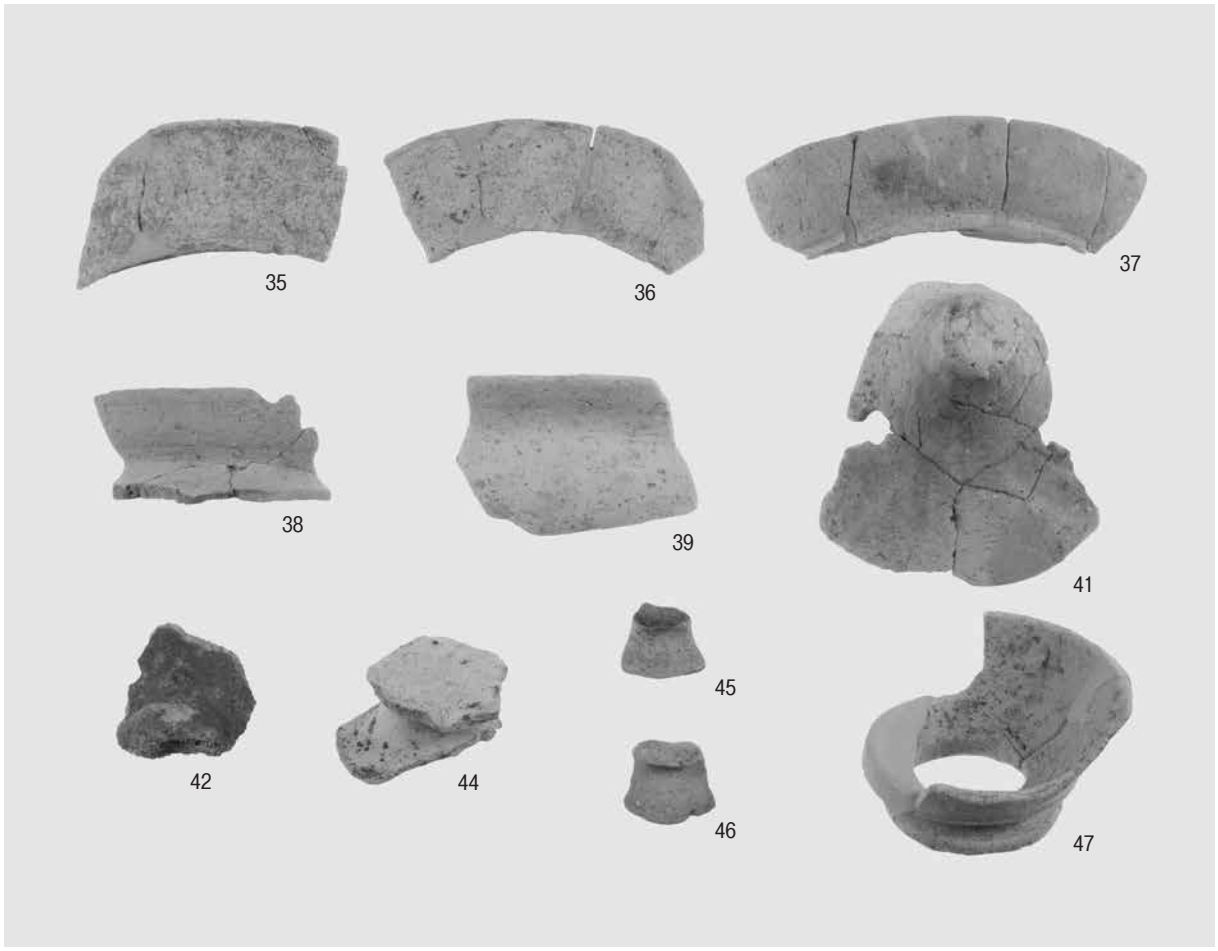
写真図版42





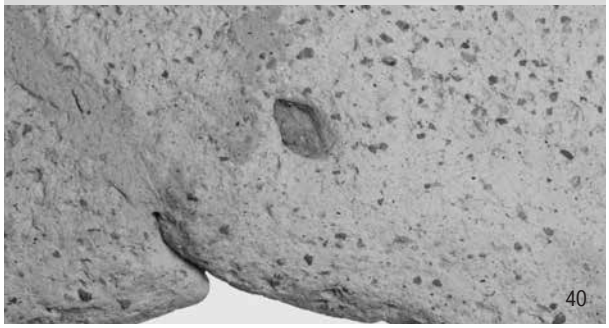
出土遺物(4)


19
20
25
26
27
28
29
21
30
31
22
32
33
34


35
36
37
38
39
41
42
44
45
46
47

出土遺物(5)

写真図版44

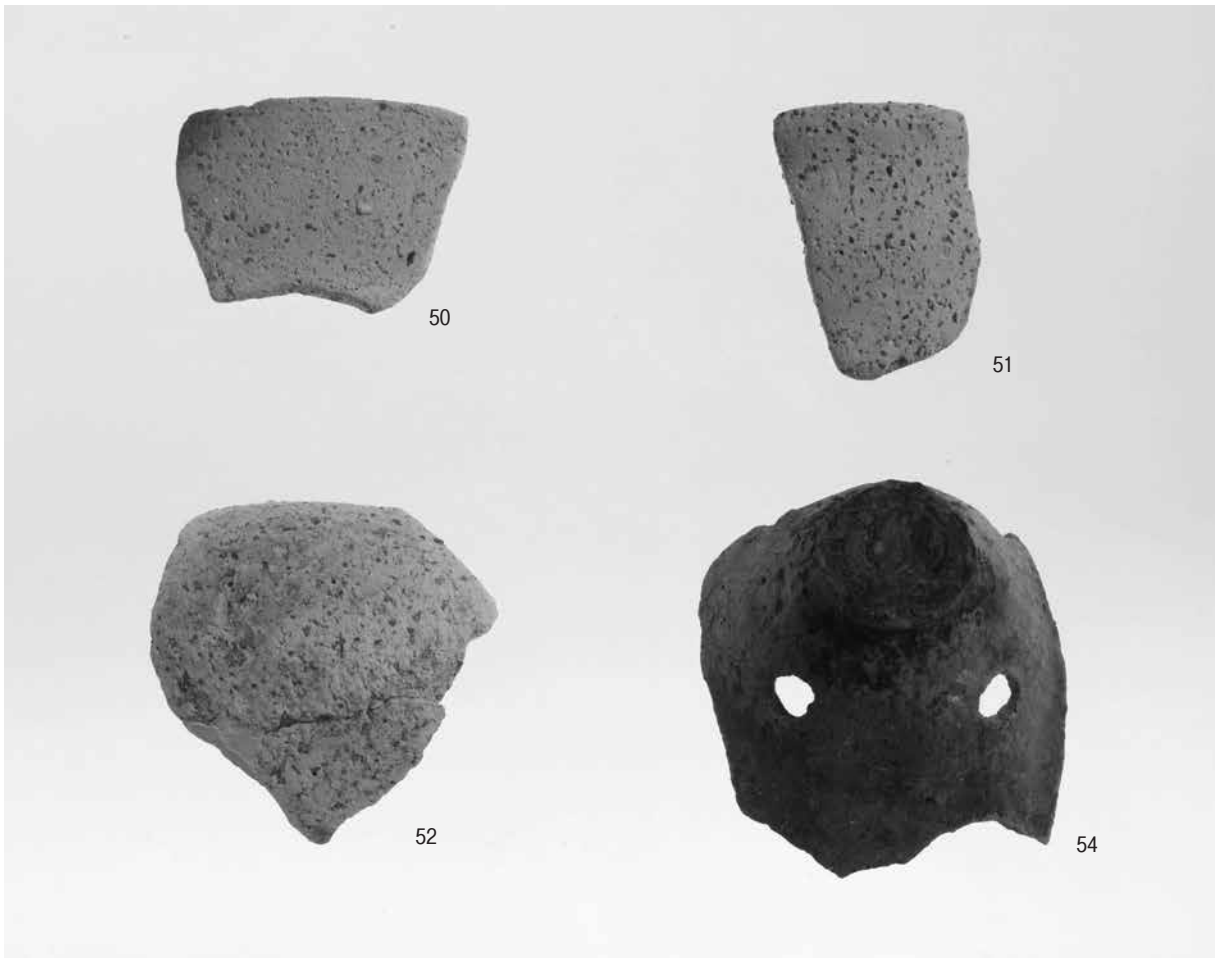


40

48

43

49



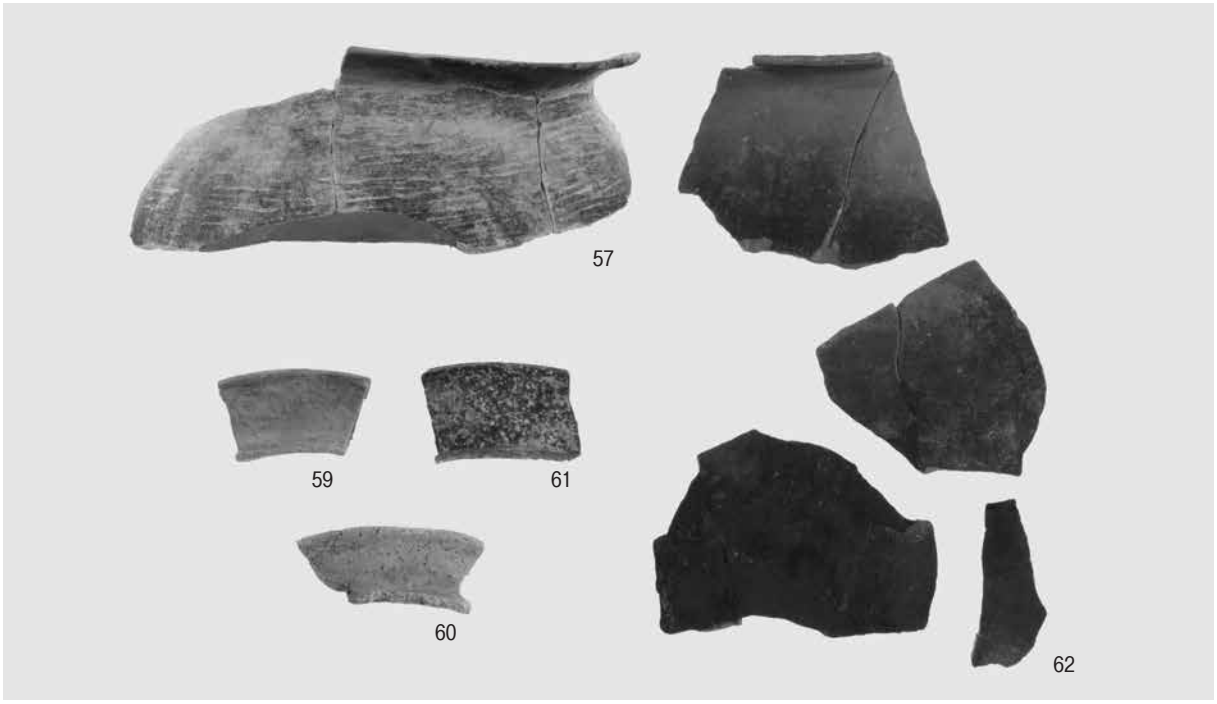
50

51

52

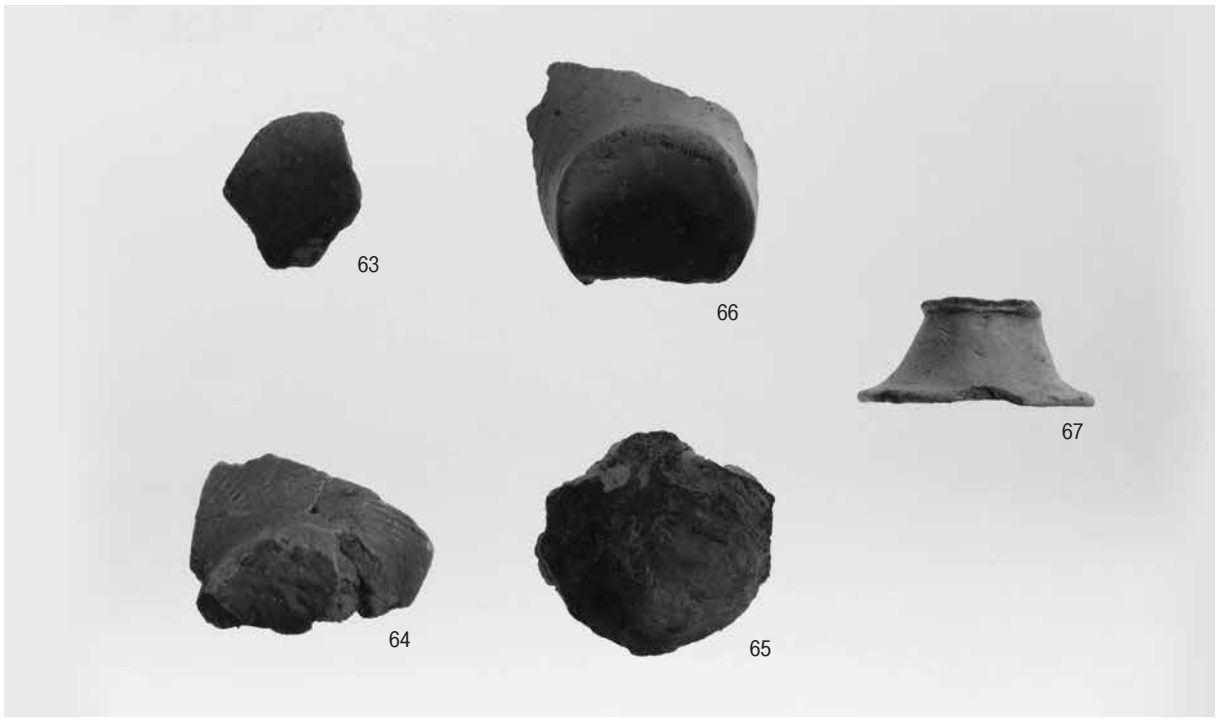
54

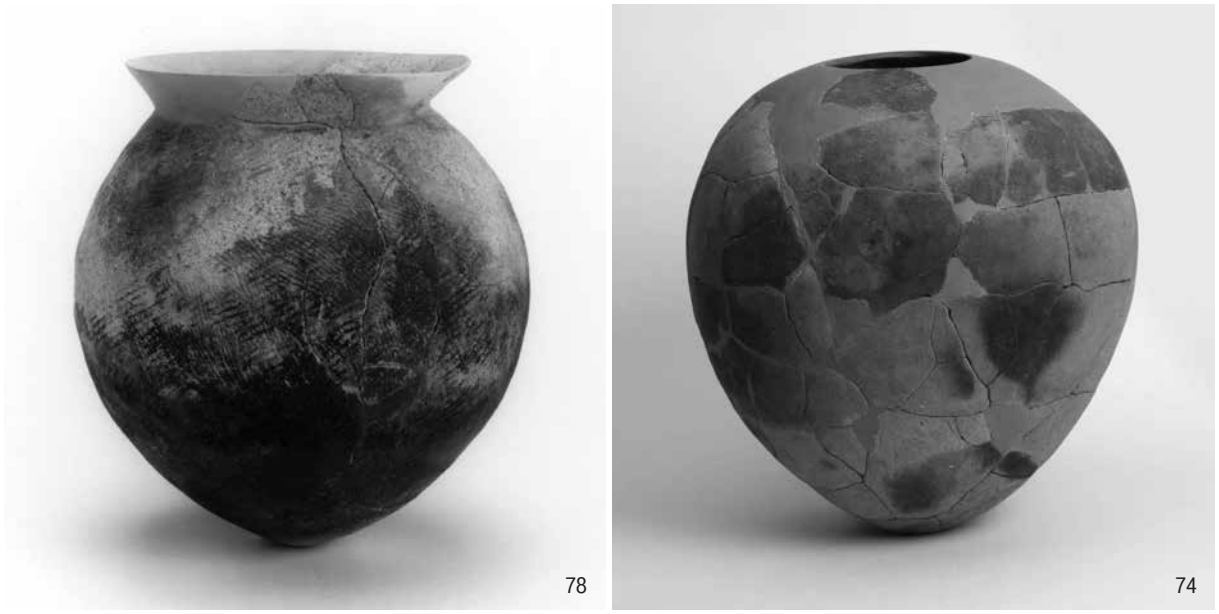
出土遺物(6)



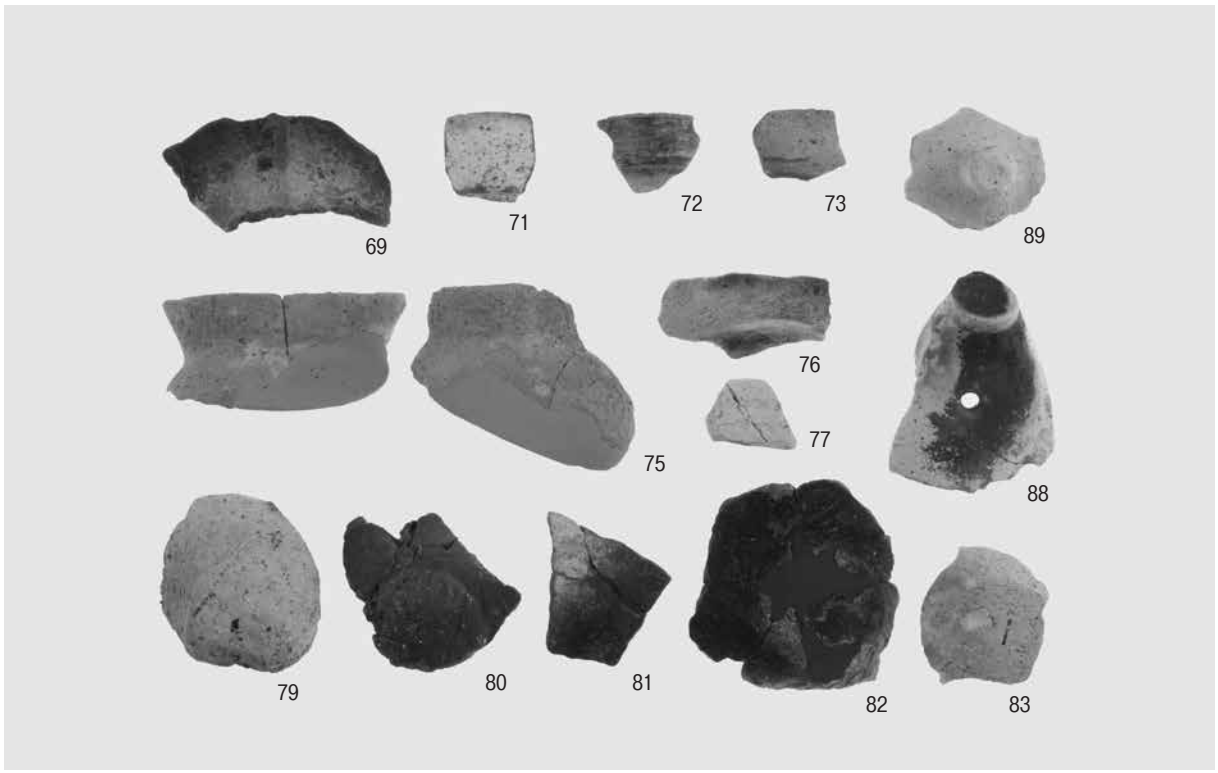
出土遺物(7)

写真図版46





出土遺物(8)



70

85

90

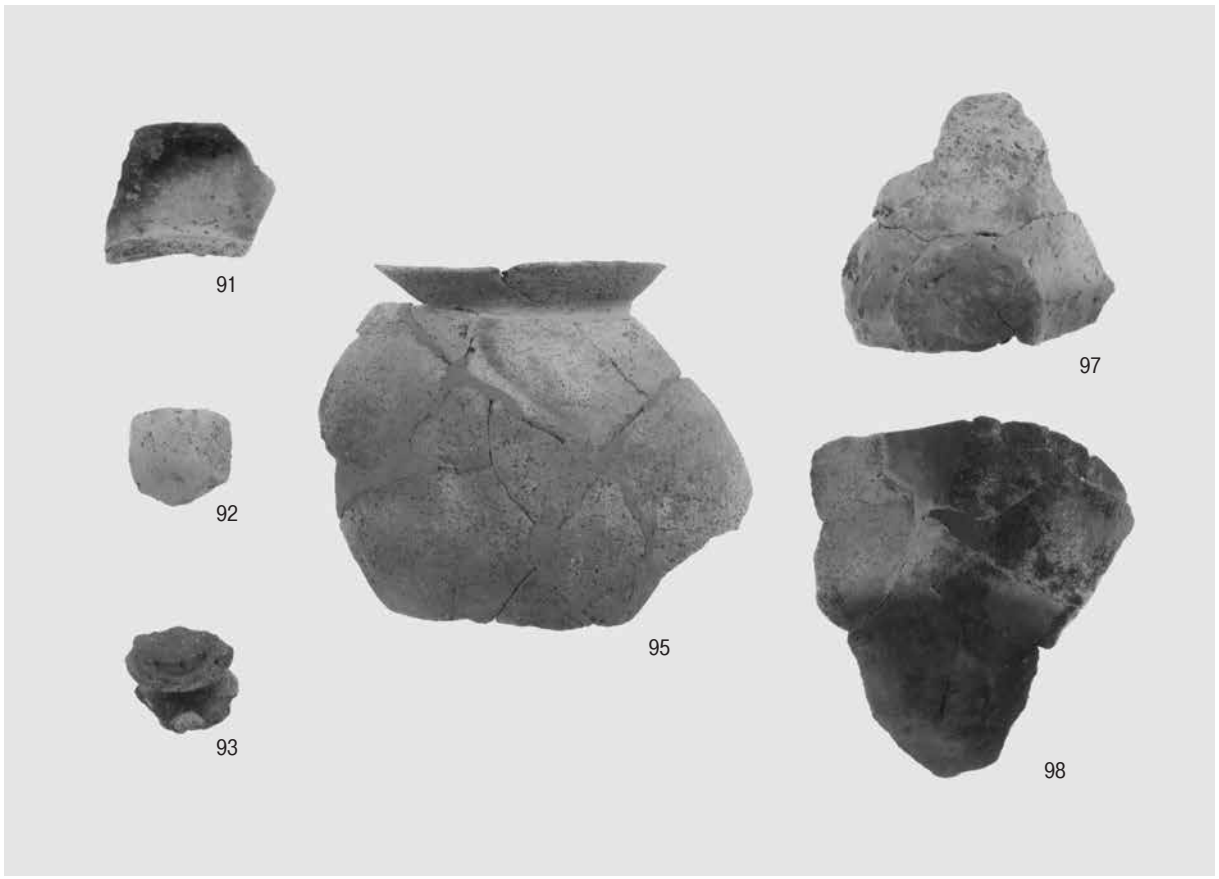
84

86

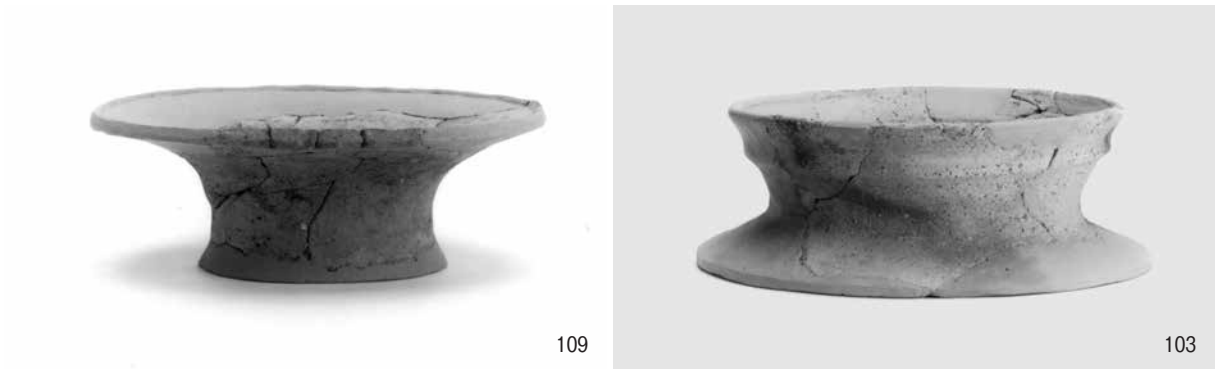
87

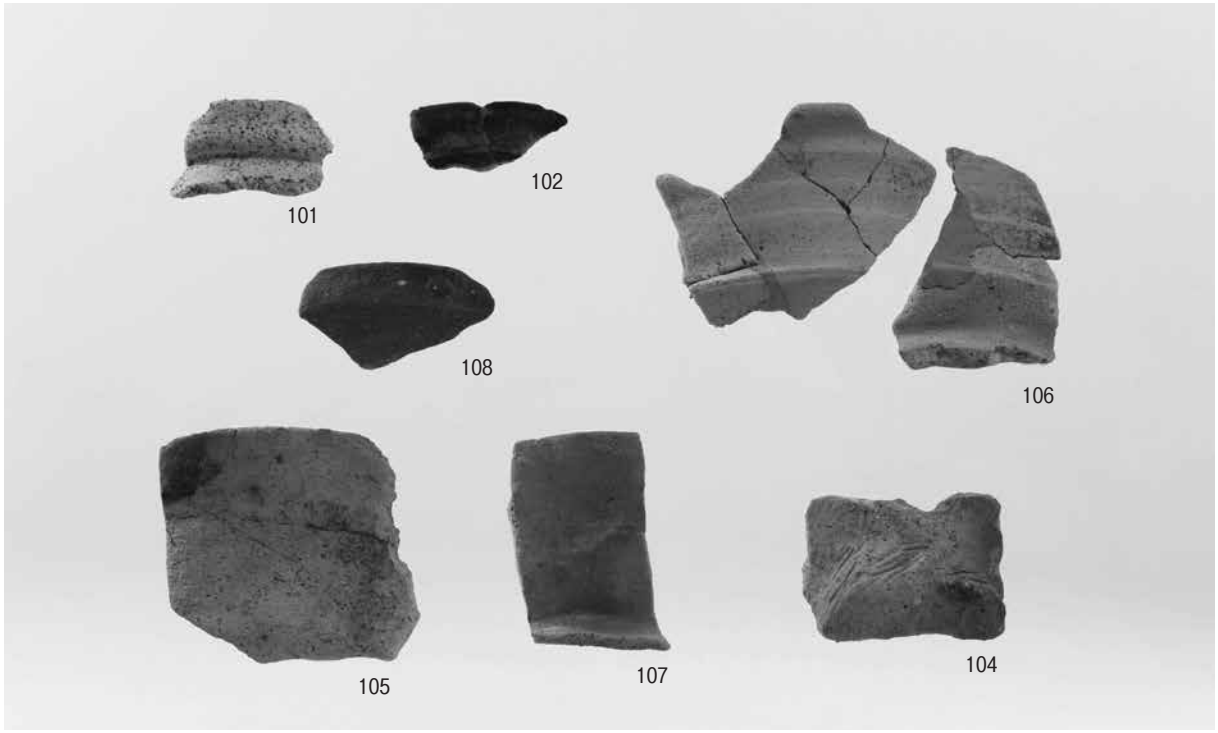
出土遺物(9)

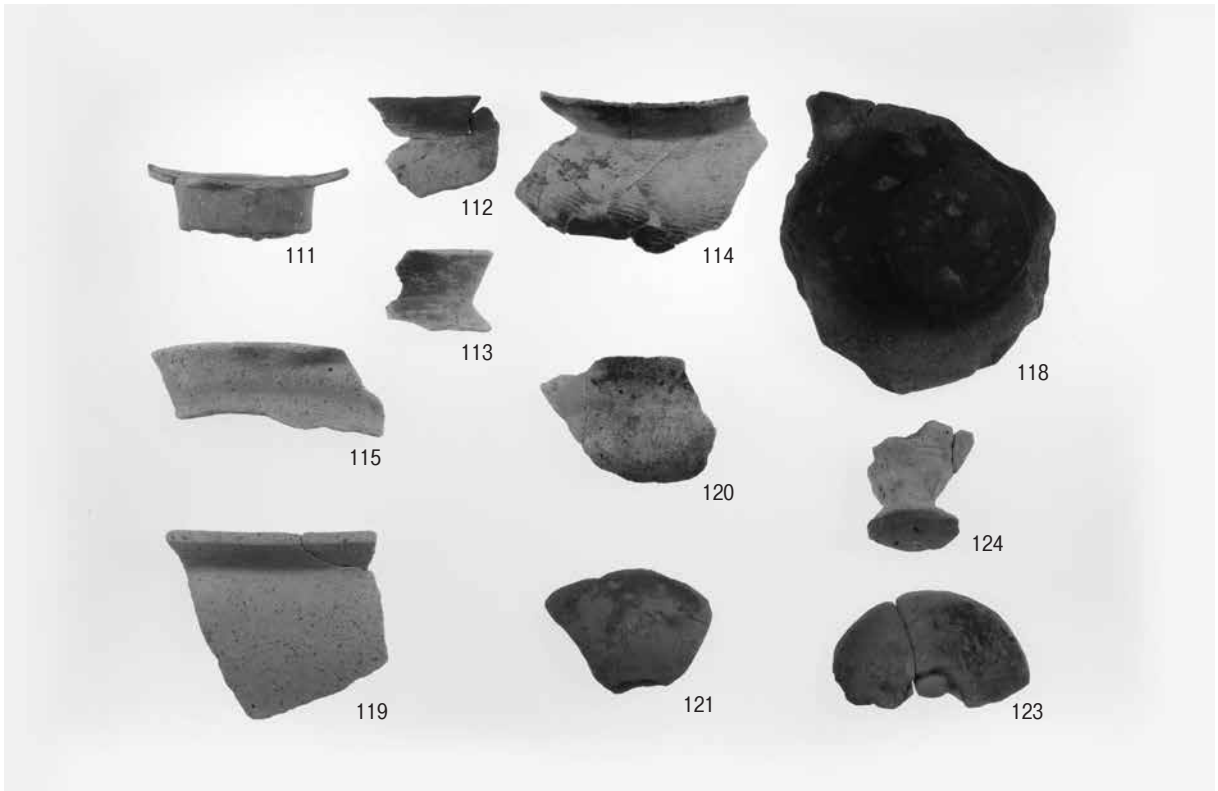
写真図版48



出土遺物(10)


109
103


101
102
108
106
105
107
104


111
112
113
114
118
115
120
124
119
121
123

出土遺物(11)

写真図版50

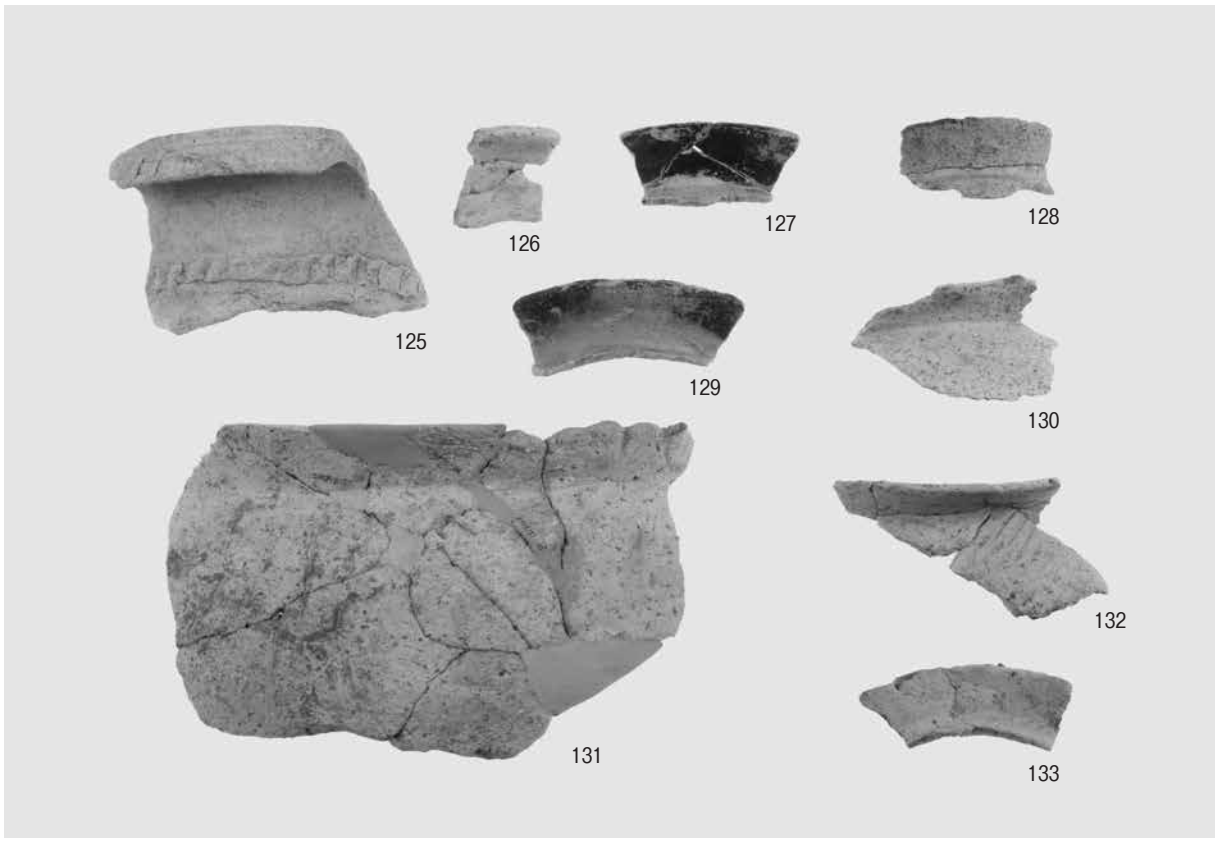
110

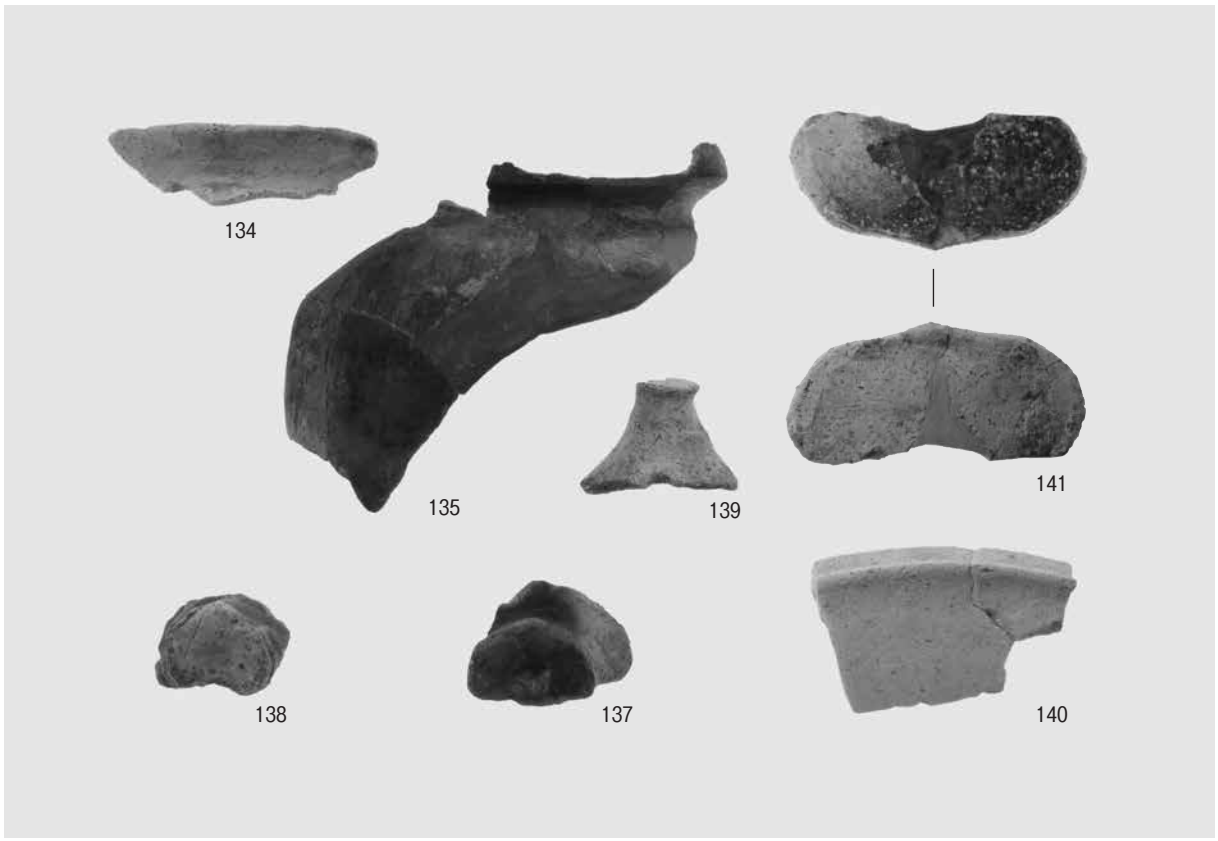
122

116

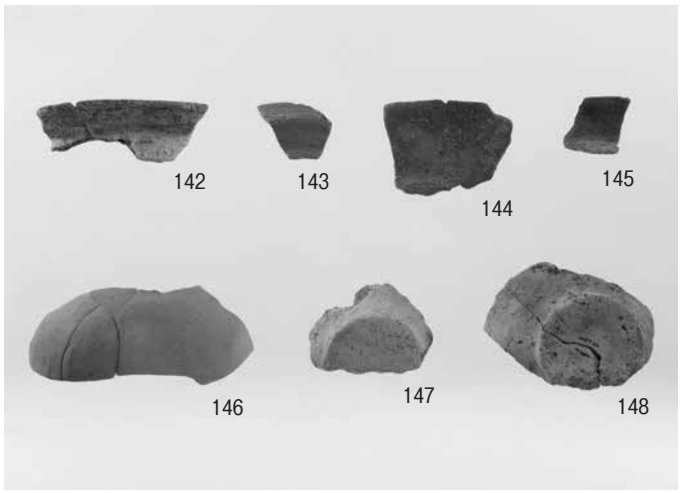
117

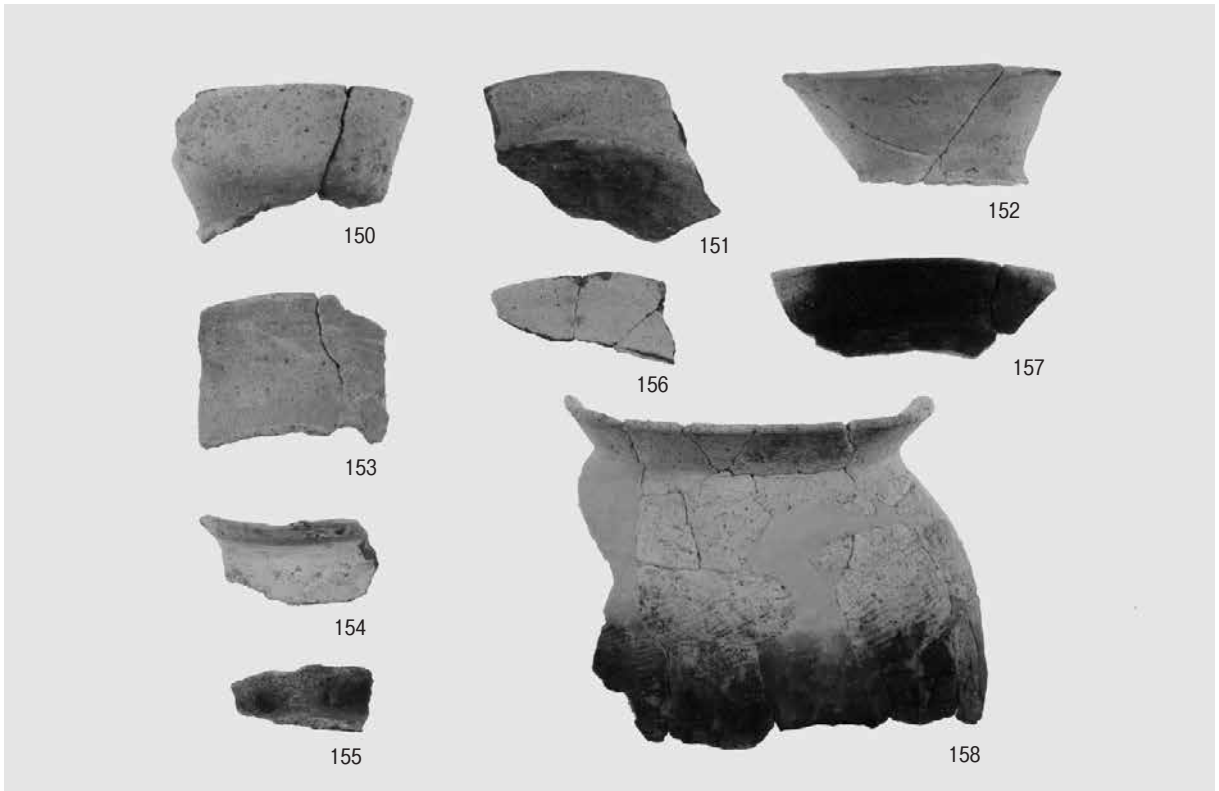
136


125
126
127
128
129
130
131
132
133


134
135
138
137
139
141
140

写真図版52





出土遺物(14)

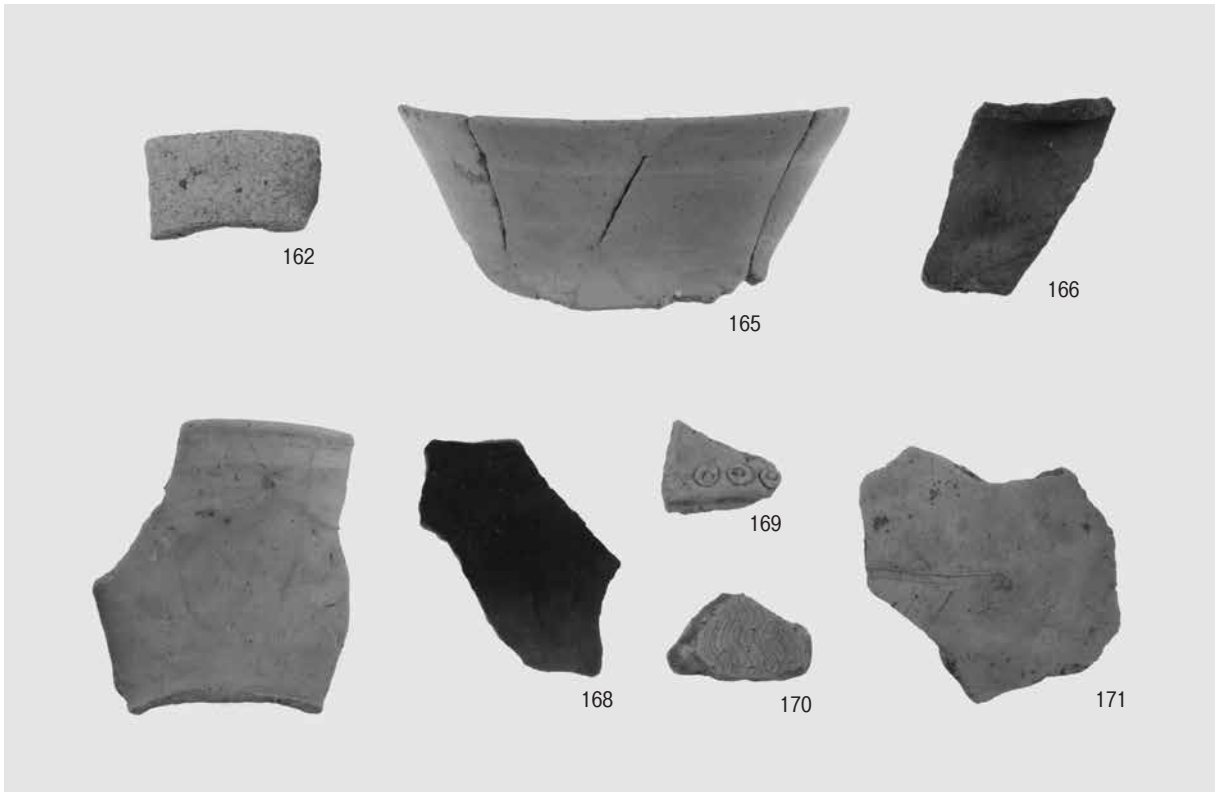
172

177

176

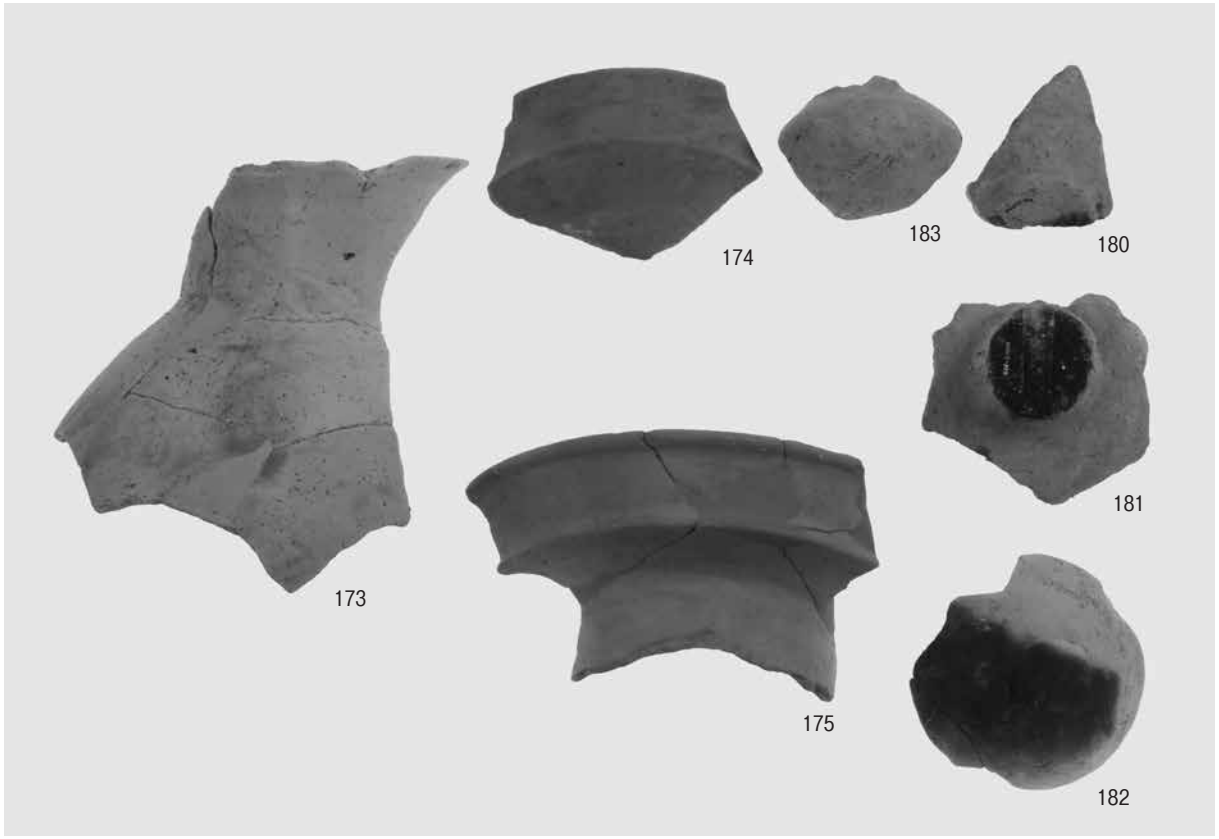
179

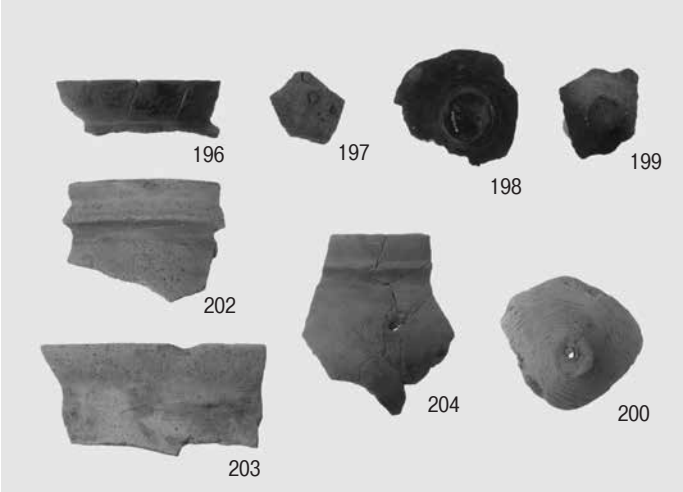
178



出土遺物(15)

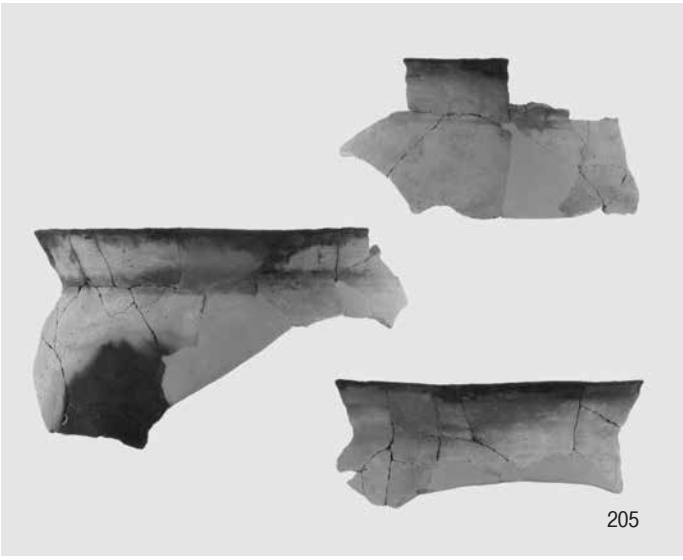
写真図版54



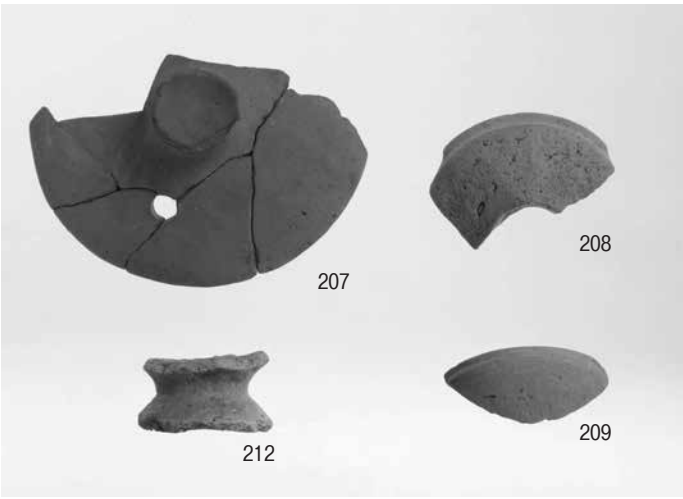

196
197
198
199
202
204
200
203

201

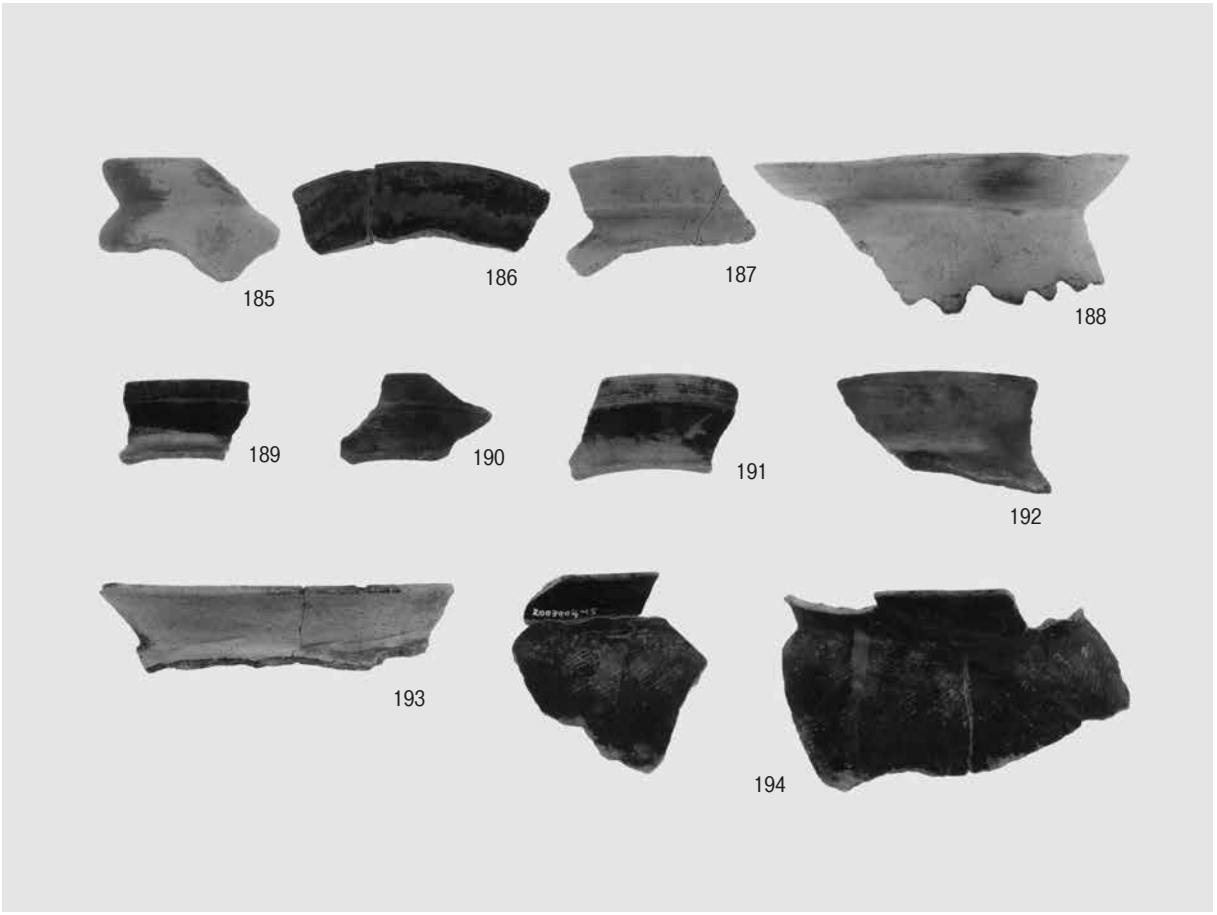
206


205

195


207
208
212
209

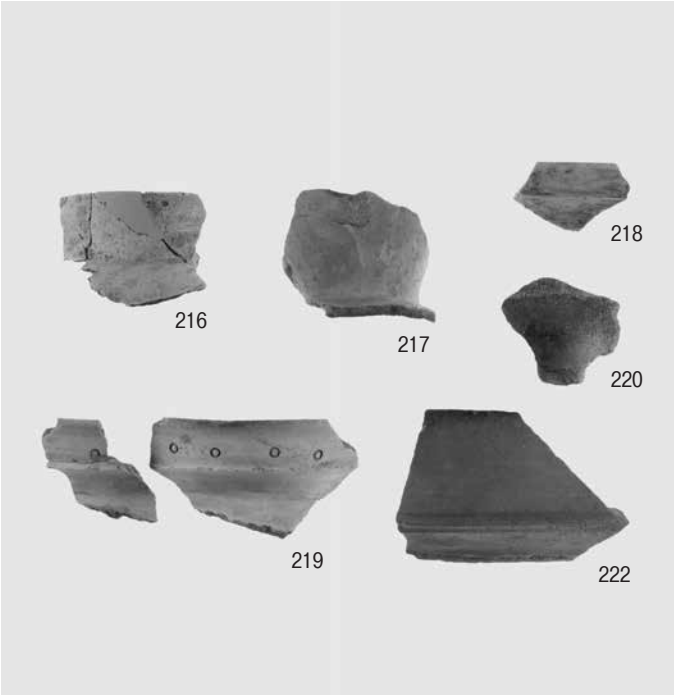
写真図版56



出土遺物(18)

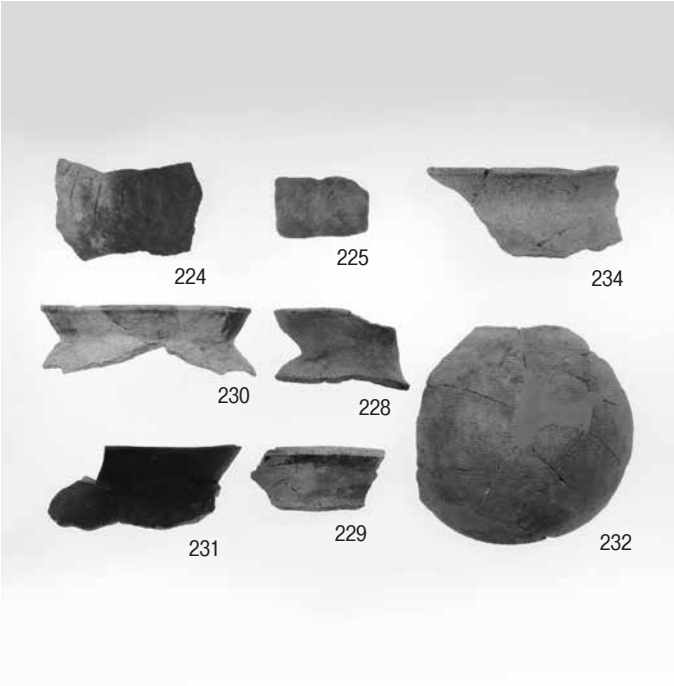
221

223


216
217
218
220
219
222

226

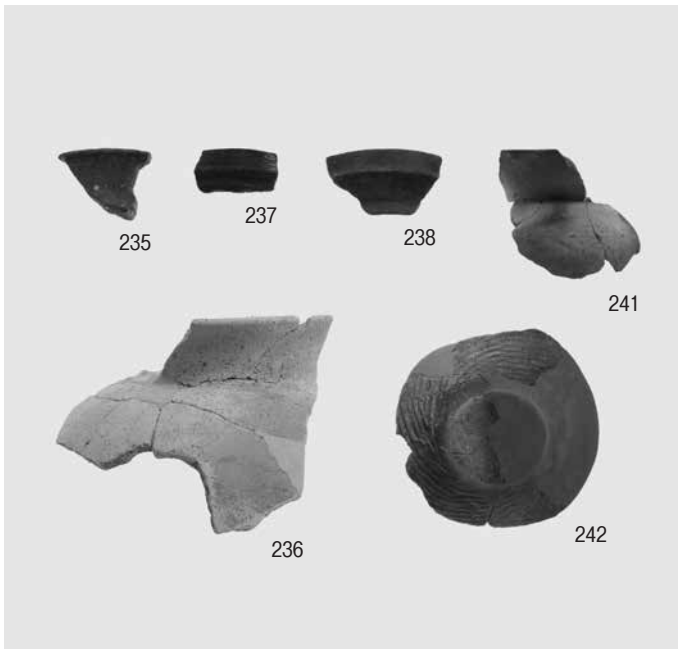
227

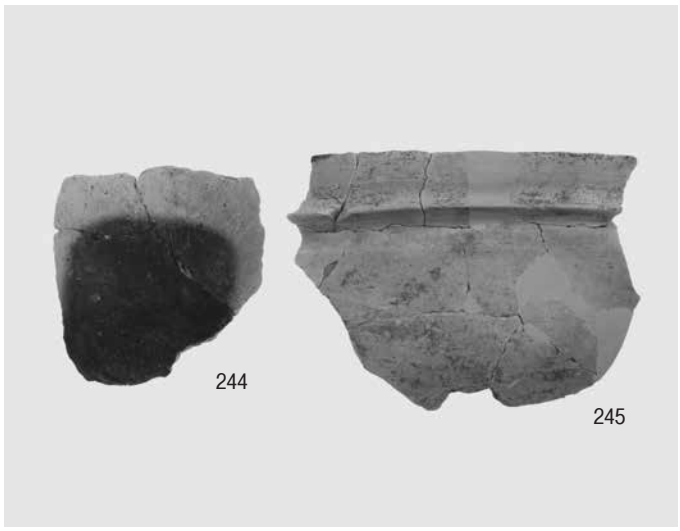

224
225
234
230
228
231
229
232

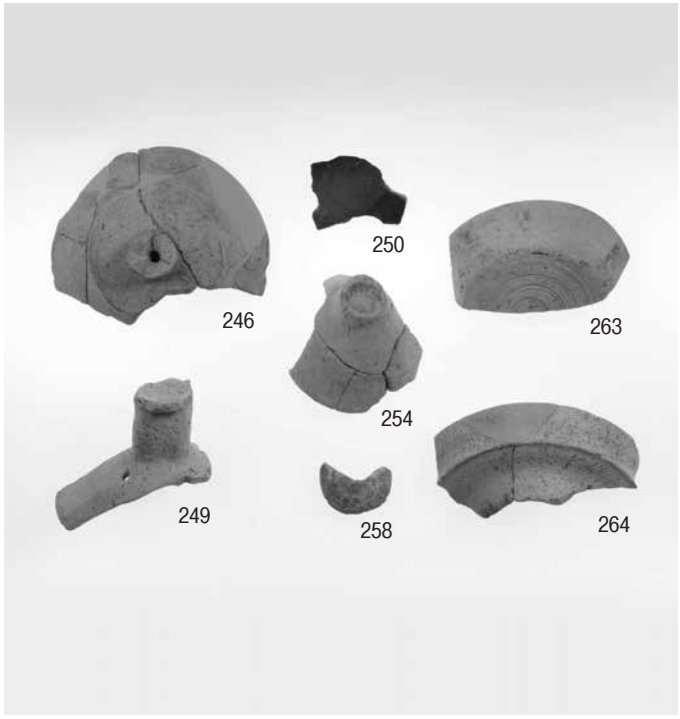
233

出土遺物(19)

写真図版58







出土遺物(20)

248

252

251

247

253

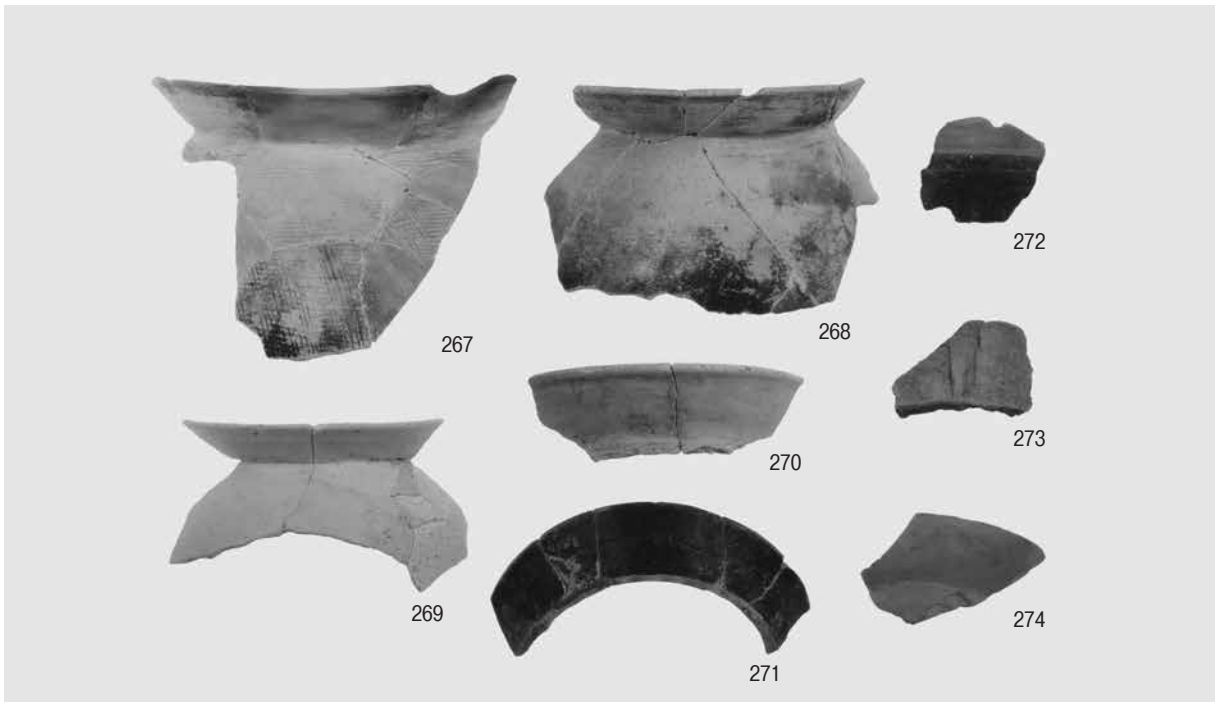
255

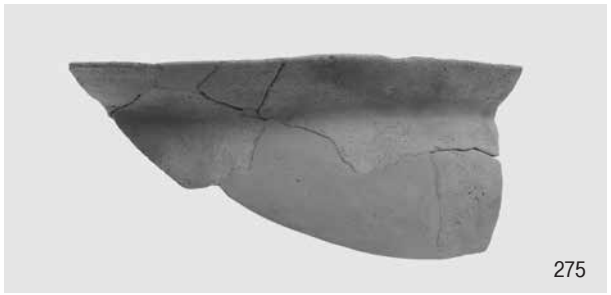
256 257 259

260 261 277

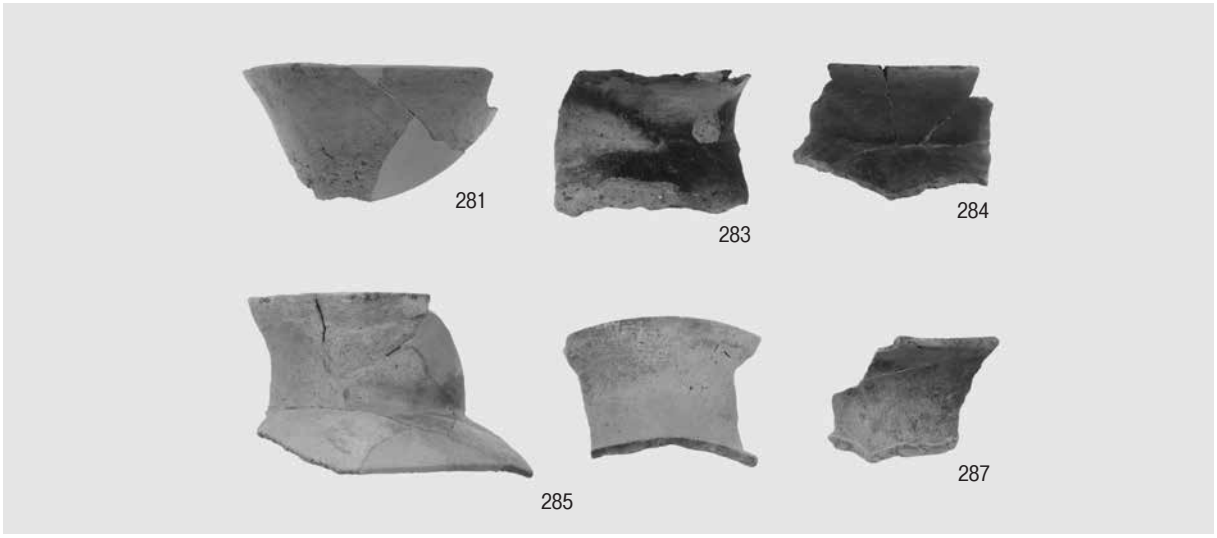
出土遺物(21)

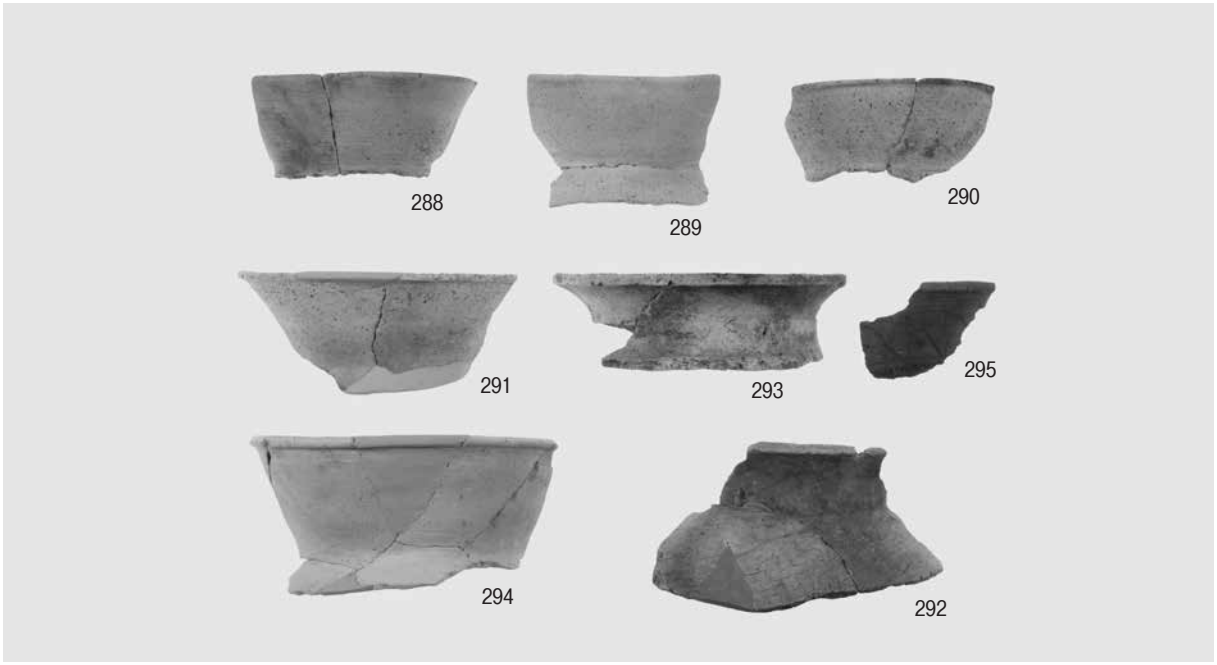
写真図版60





出土遺物(22)


281
283
284
285
287


288
289
290
291
293
295
294
292

282

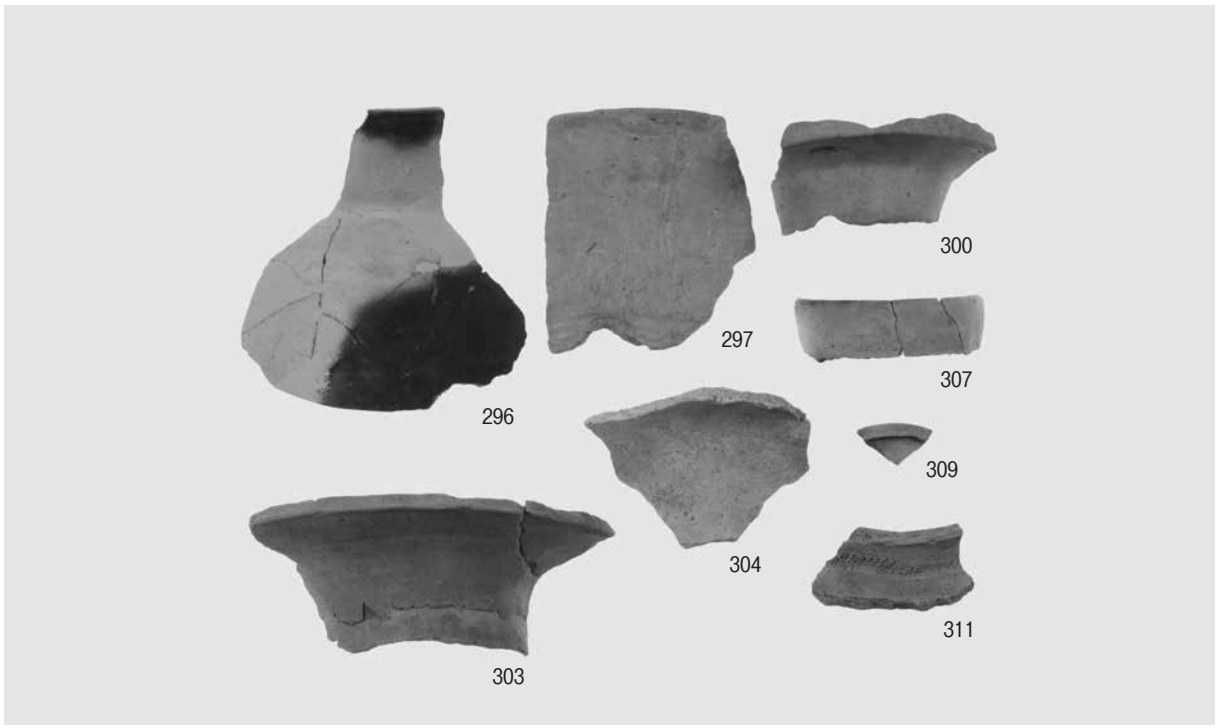
286

298

299

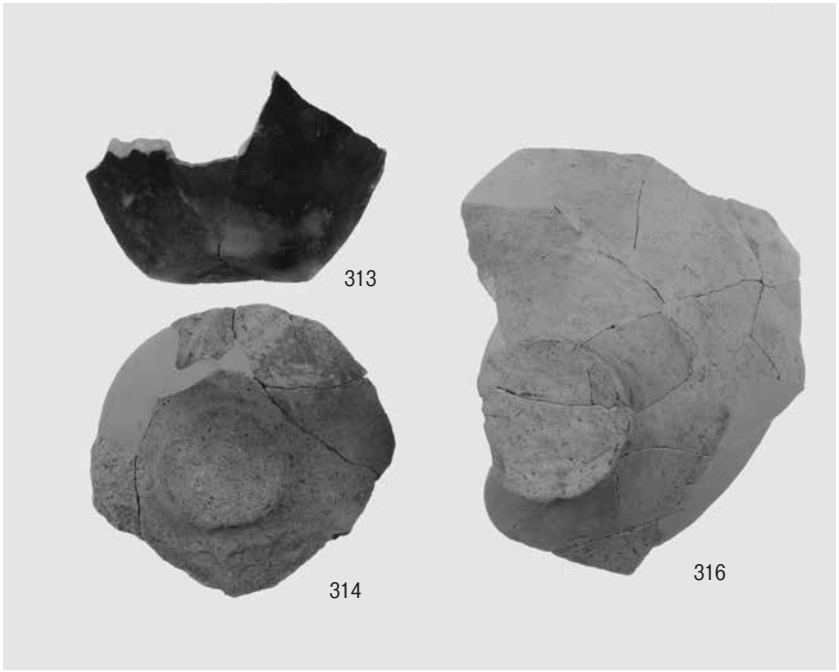
出土遺物(23)

写真図版62

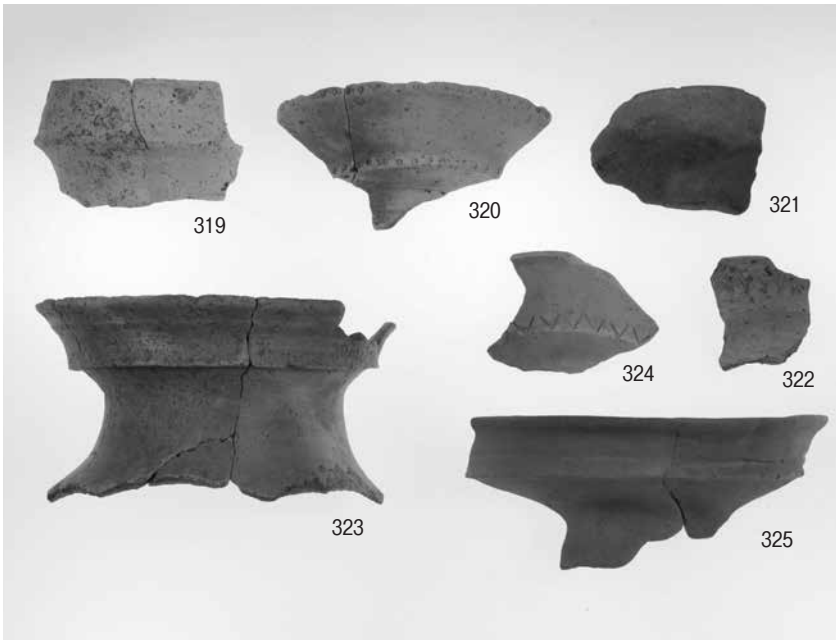


出土遺物(24)

317



318



312

315

出土遺物(25)

写真図版64

328

330

326

333

327

360

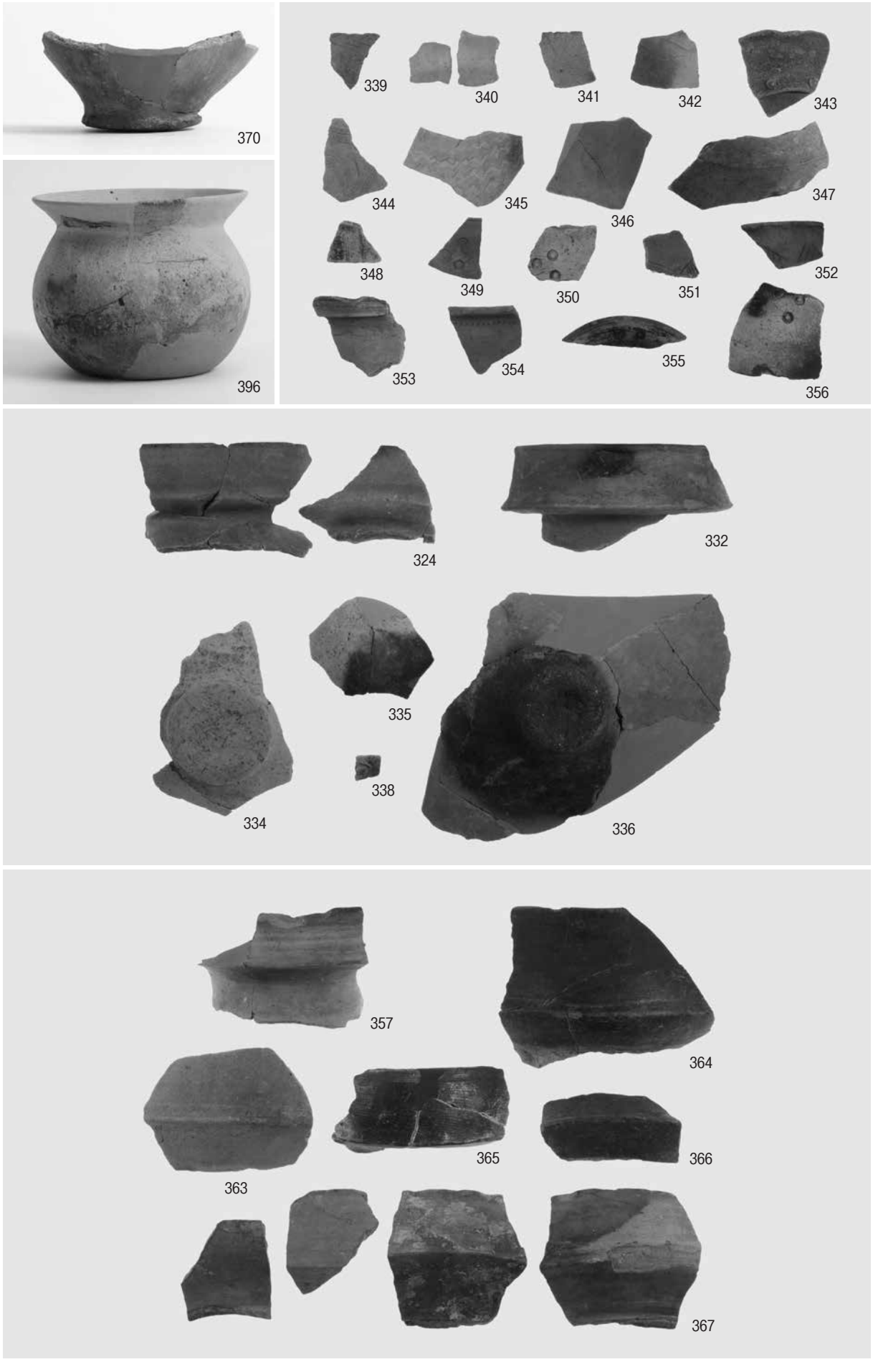
331

358

361

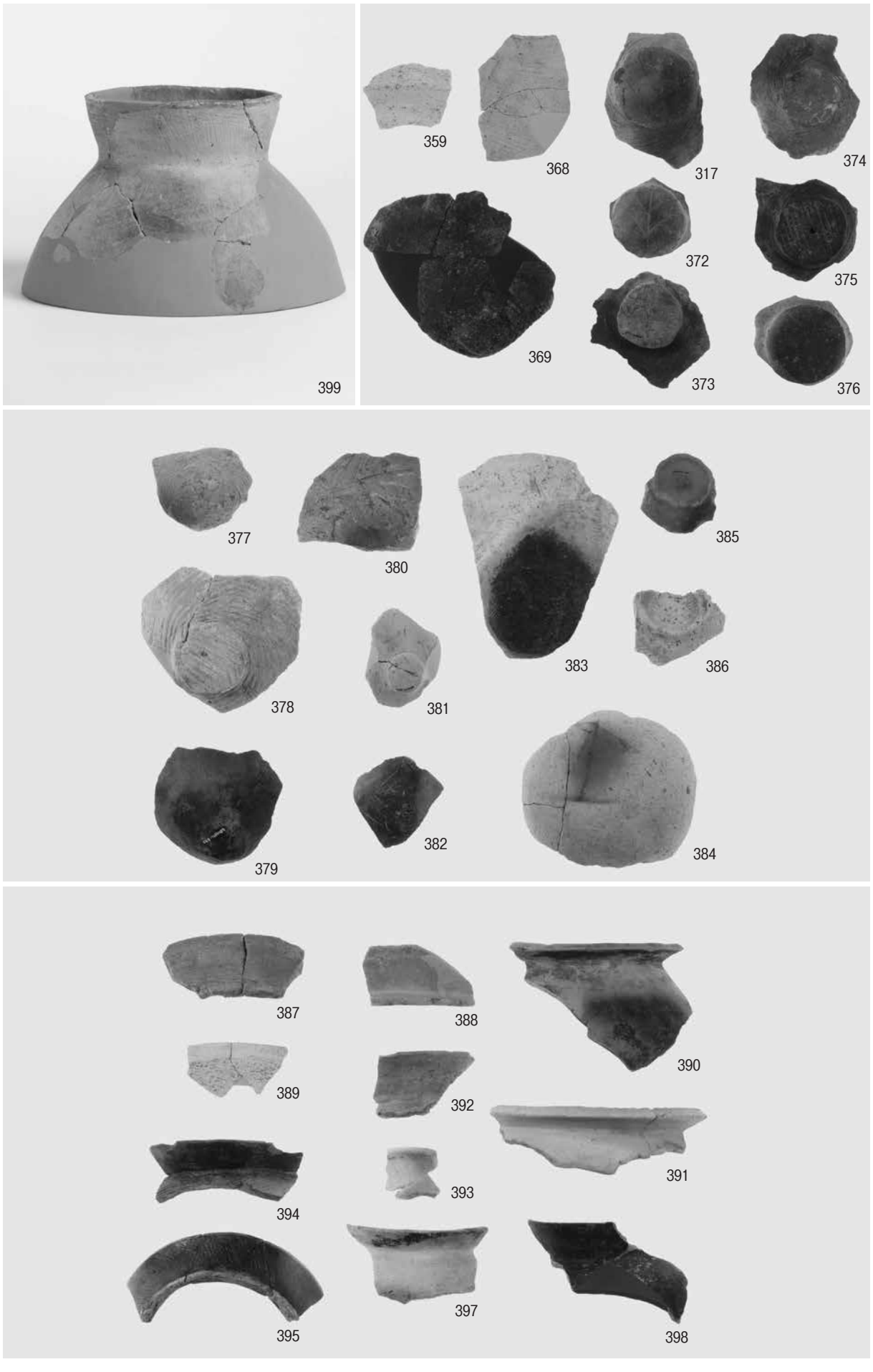
337

出土遺物(26)


370
396
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
324
332
335
338
334
336
357
364
365
366
363
367

出土遺物(27)

写真図版66



出土遺物(28)

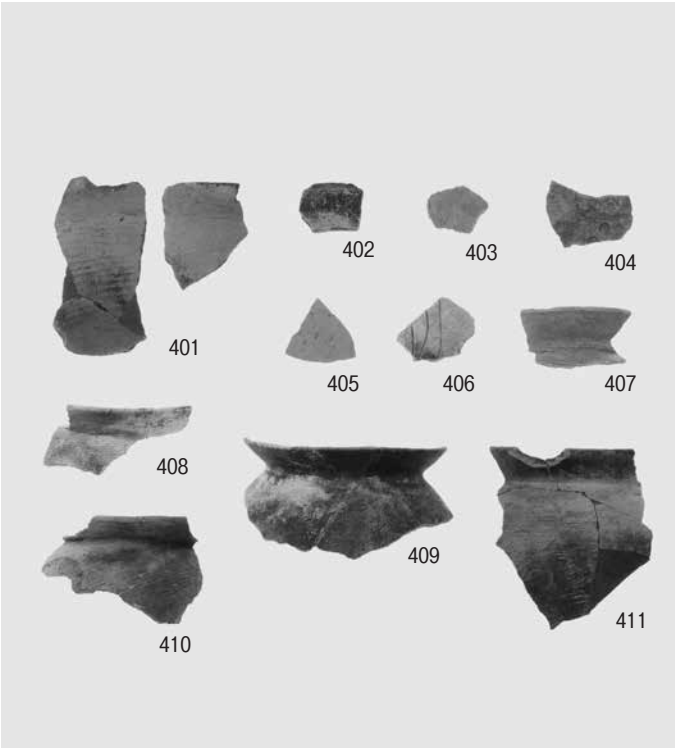
414

415

416

417

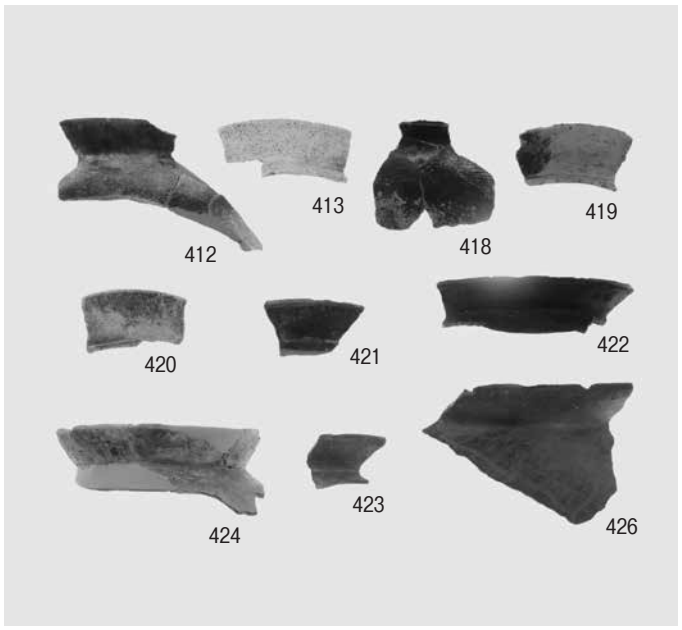
400



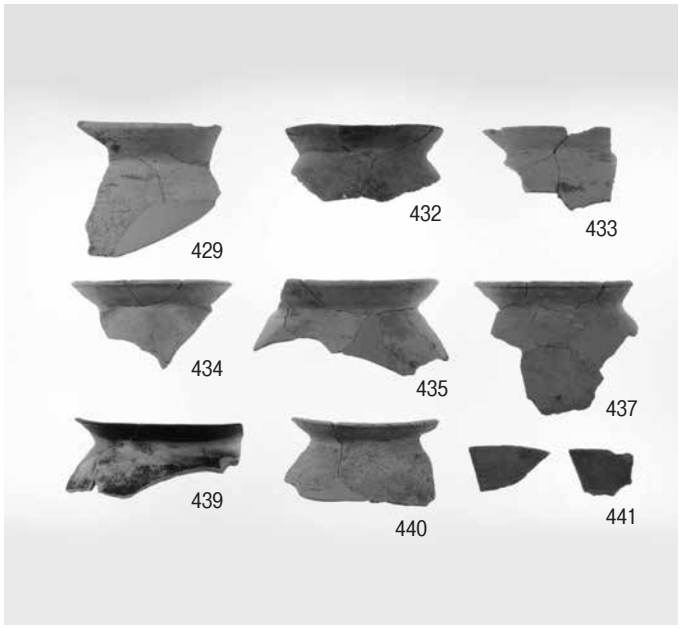
出土遺物(29)

写真図版68

425



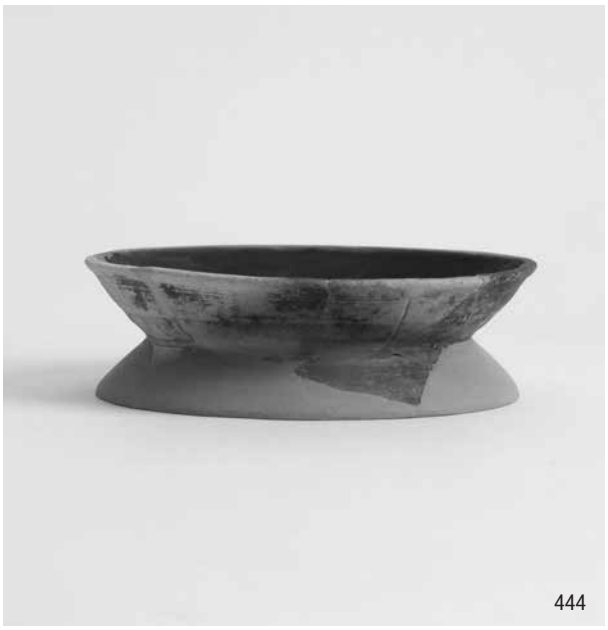
430



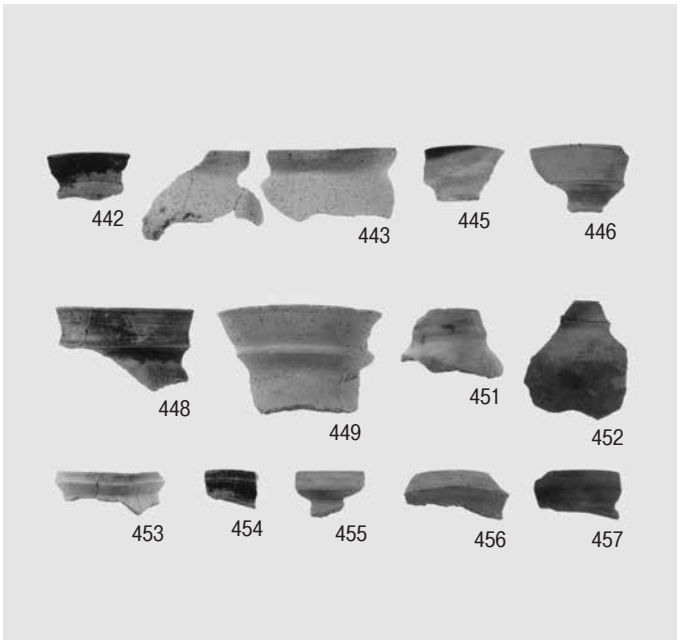
431

出土遺物(30)

436


444

438

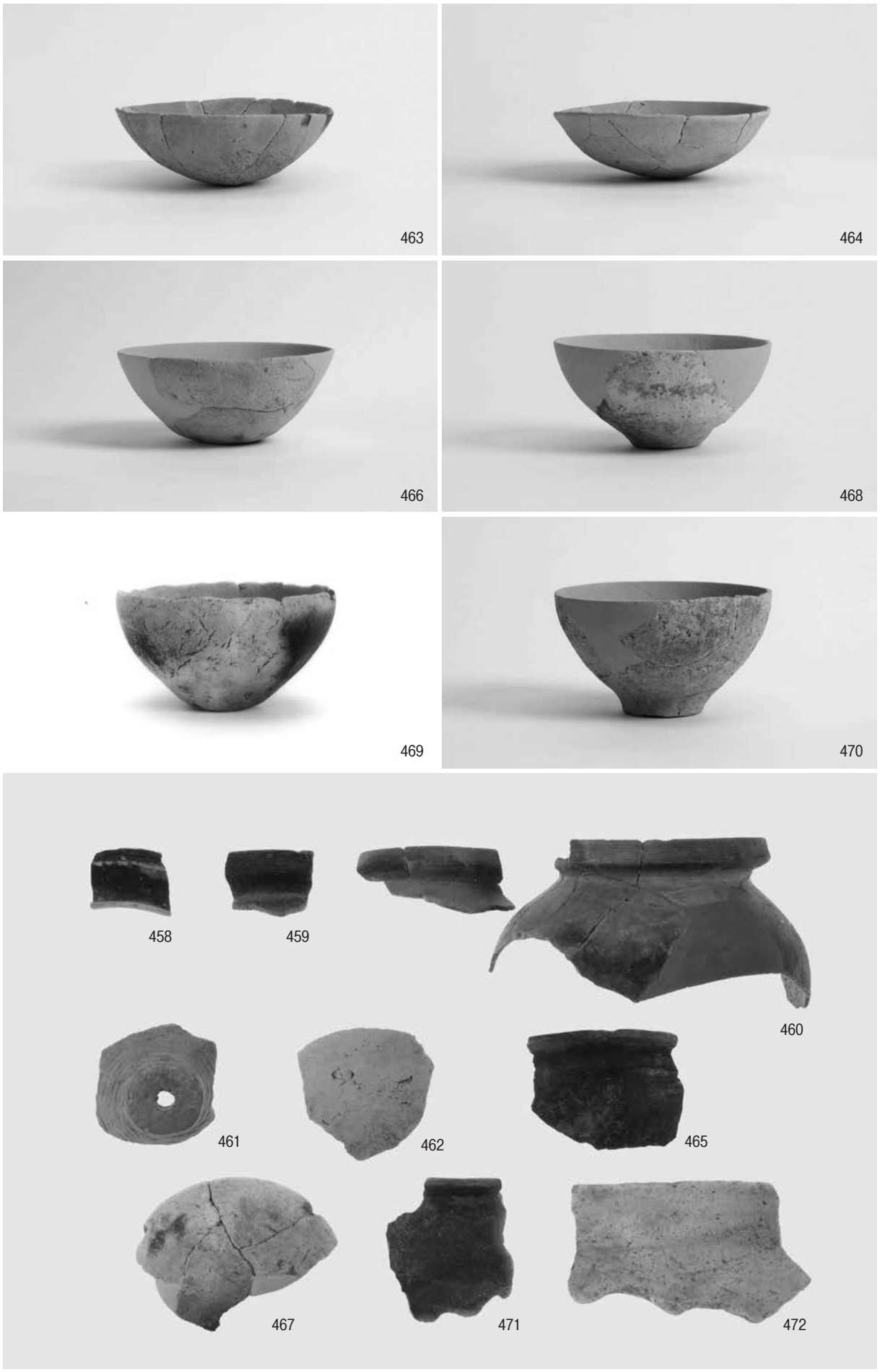


447

450

出土遺物(31)

写真図版70



出土遺物(32)

473

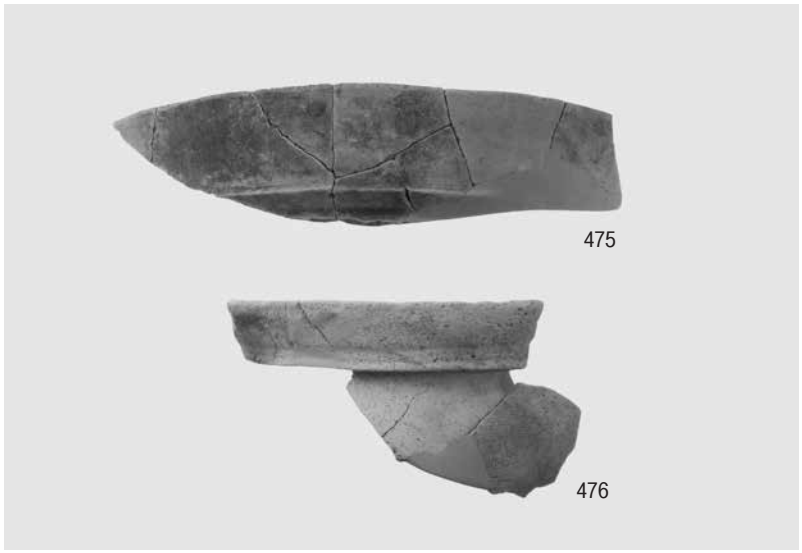
474

477

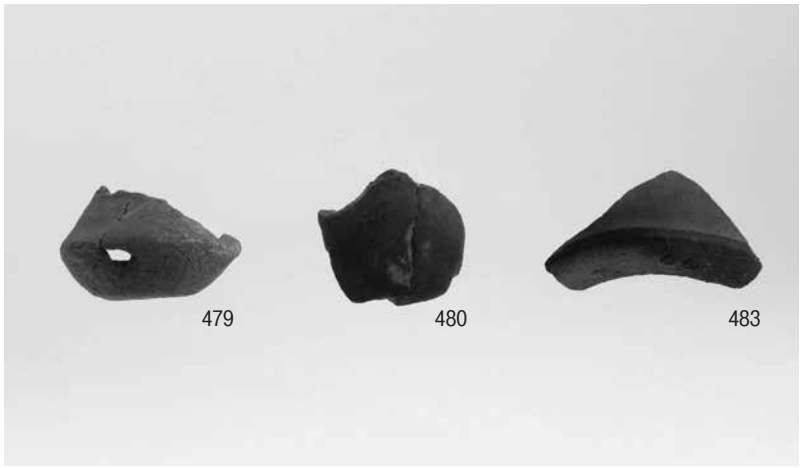
478

475

476



481

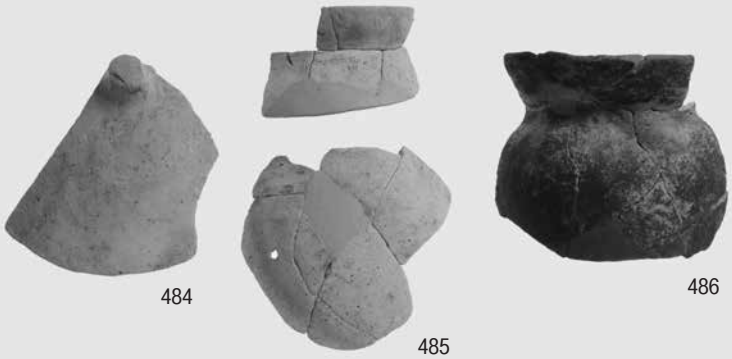

479
480
483

482

出土遺物(33)

写真図版72

490

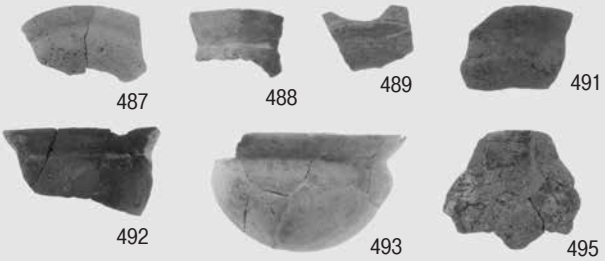


484

485

486

496



487

488

489

491

492

493

495

499

502

505

494

503

497

出土遺物(34)

498

504

500

509

501

508

516

出土遺物(35)

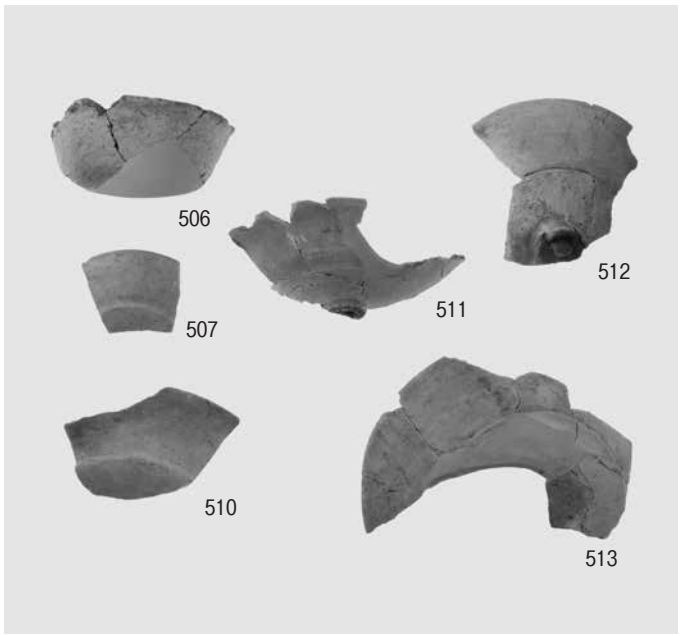
写真図版74

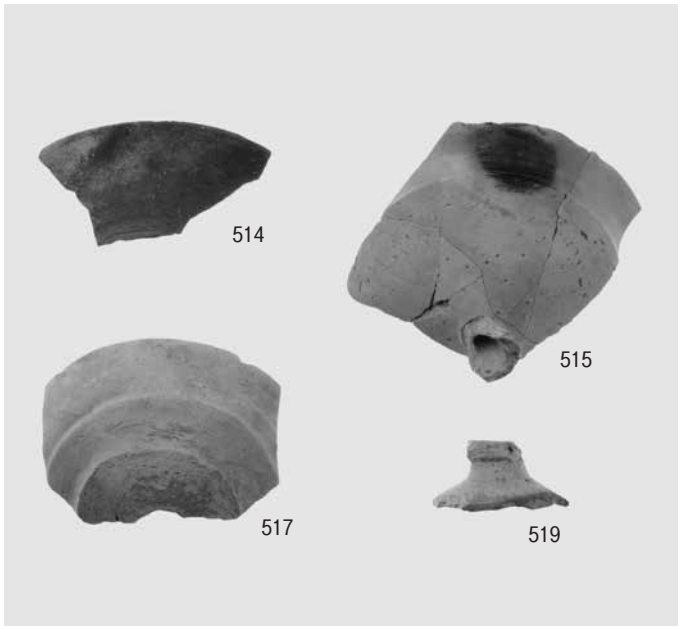
522

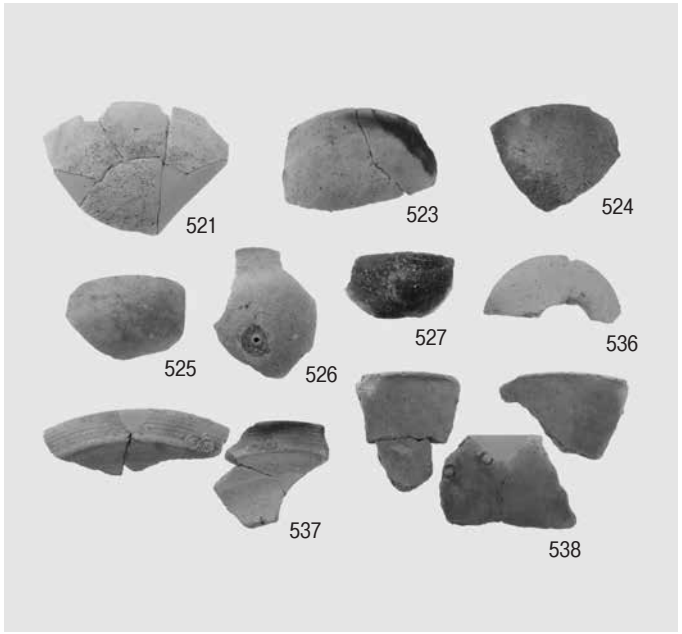
528

520

518



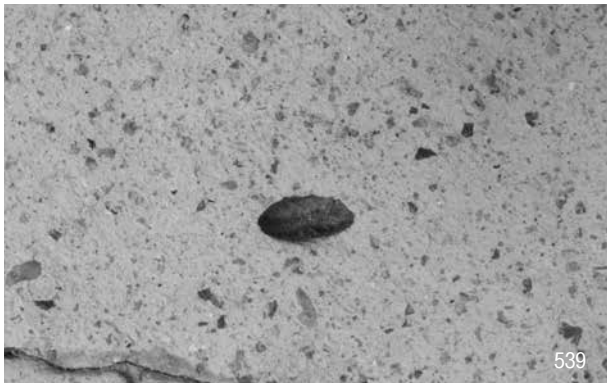




出土遺物(36)

529

533


539

530

534

531

写真図版76

542

543

544

545

546

540

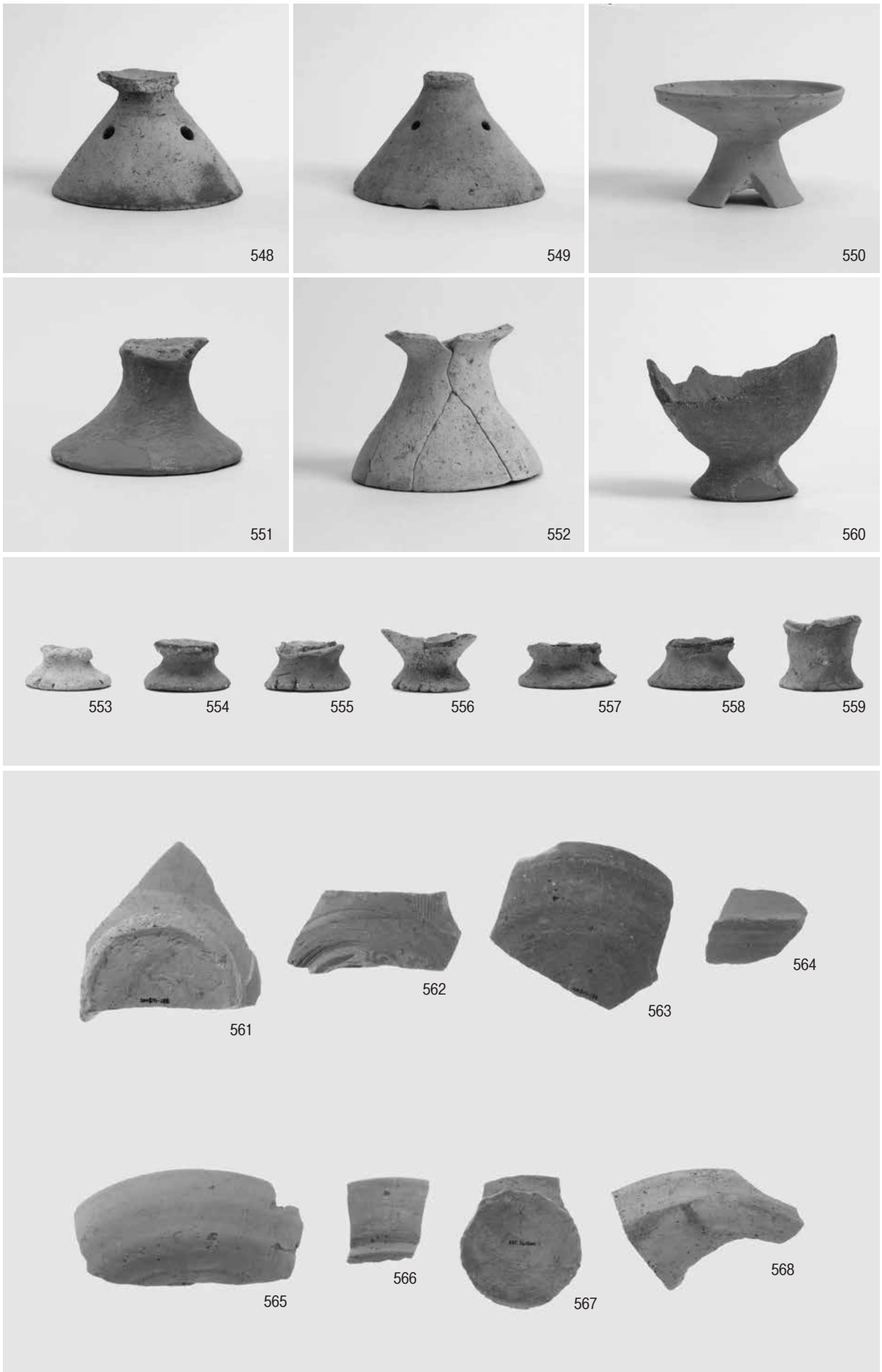
532

535

541

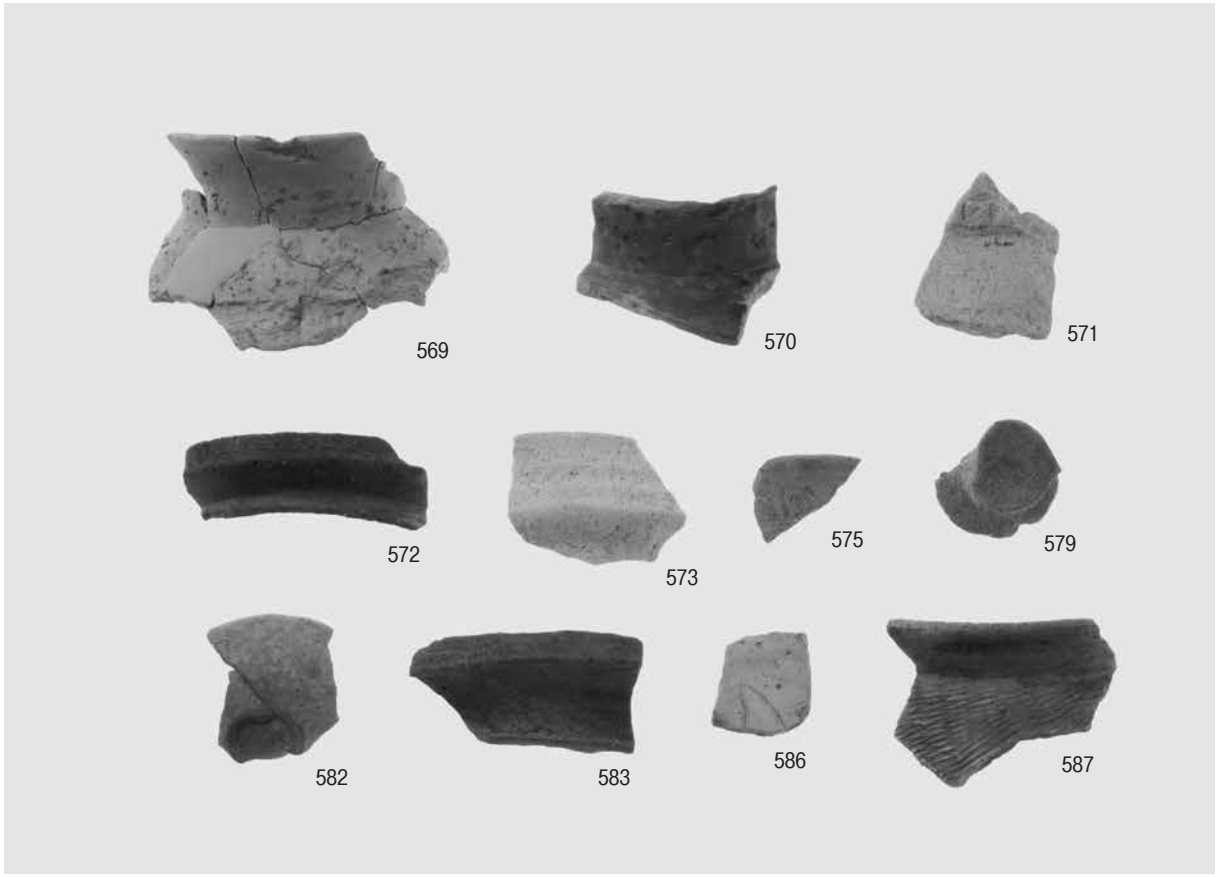
547

出土遺物(38)


548
549
550
551
552
560
553
554
555
556
557
558
559
561
562
563
564
565
566
567
568

出土遺物(39)

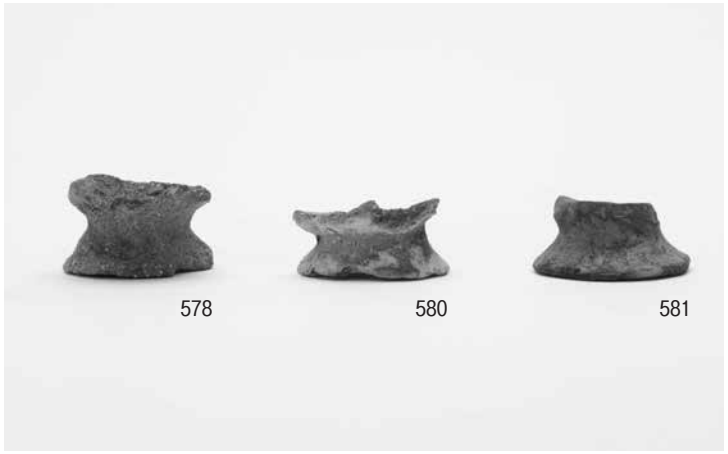
写真図版78



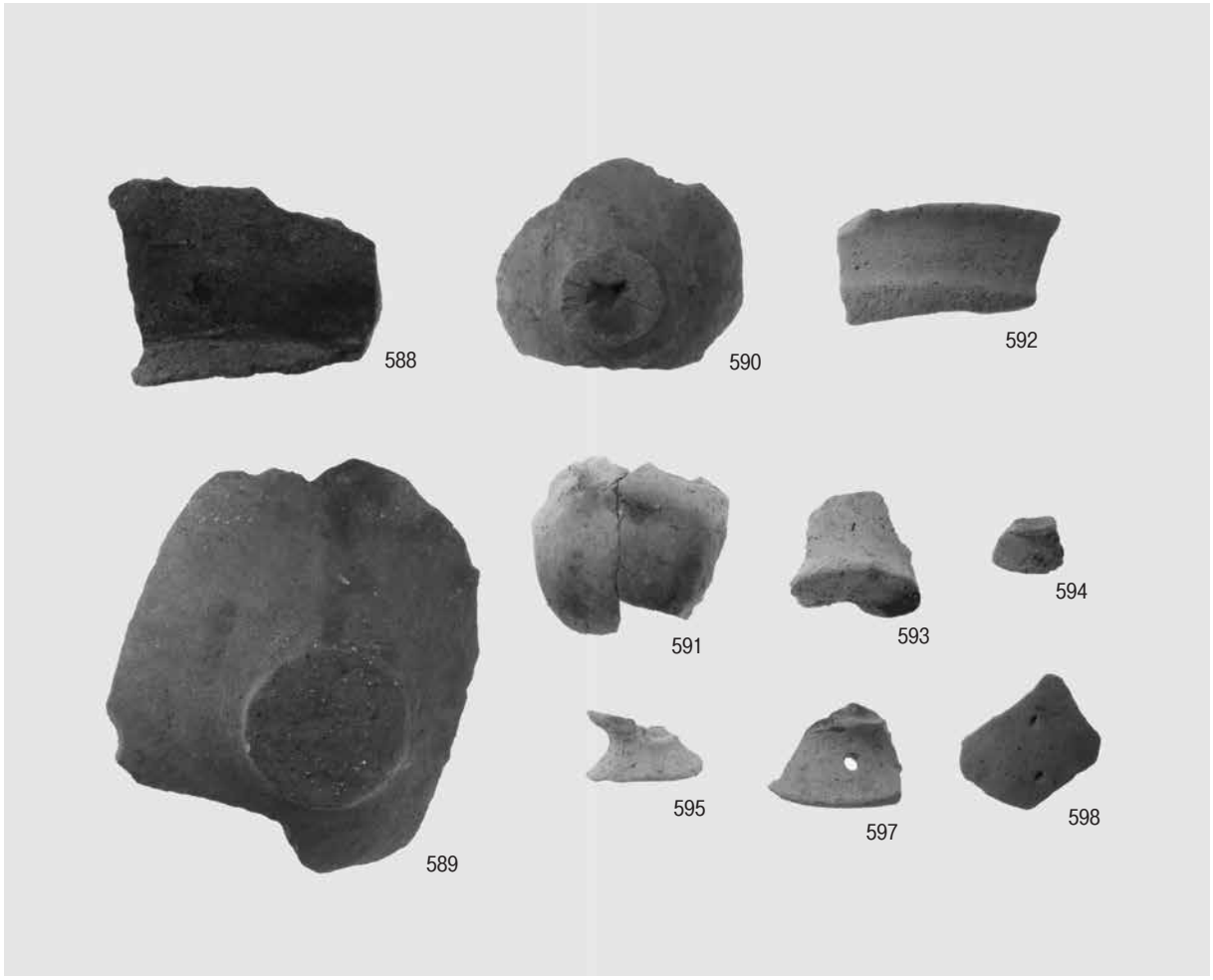
出土遺物(40)

583

596


578 580 581

584

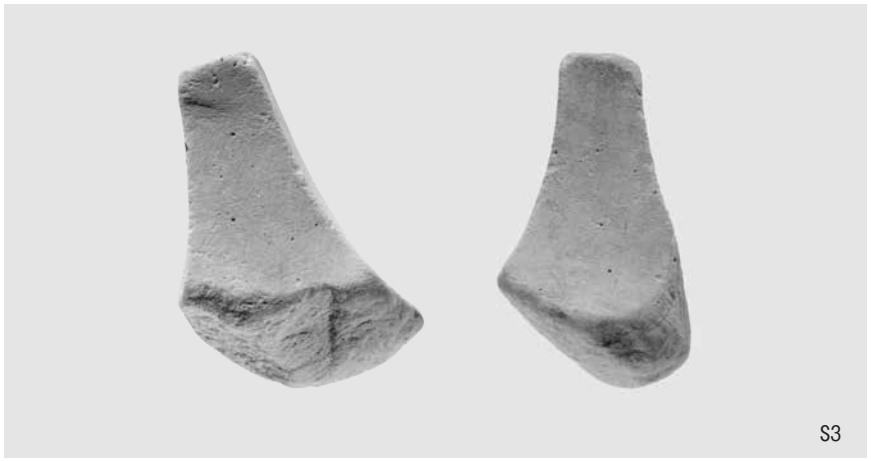

588 590 592 589 591 593 594 595 597 598

出土遺物(41)

写真図版80

S1

S2


S3

S4

竹の前遺跡

Ⅰ区全景（東から）

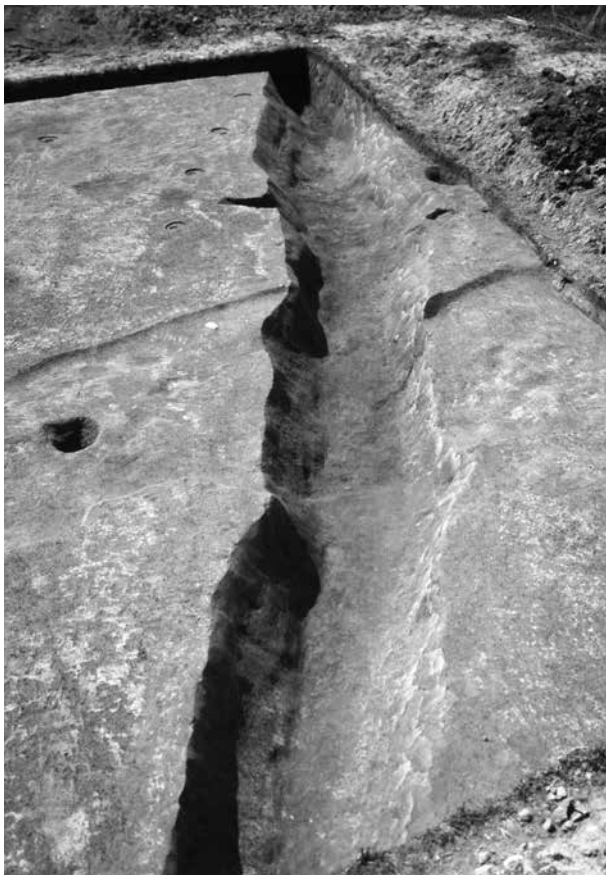
Ⅱ区全景（北から）

写真図版82

竹の前遺跡

SD02-a全景（南西から）

SD02-a中層土器出土状況（南西から）



SD02-a（北東から）

SD02-b（北東から）

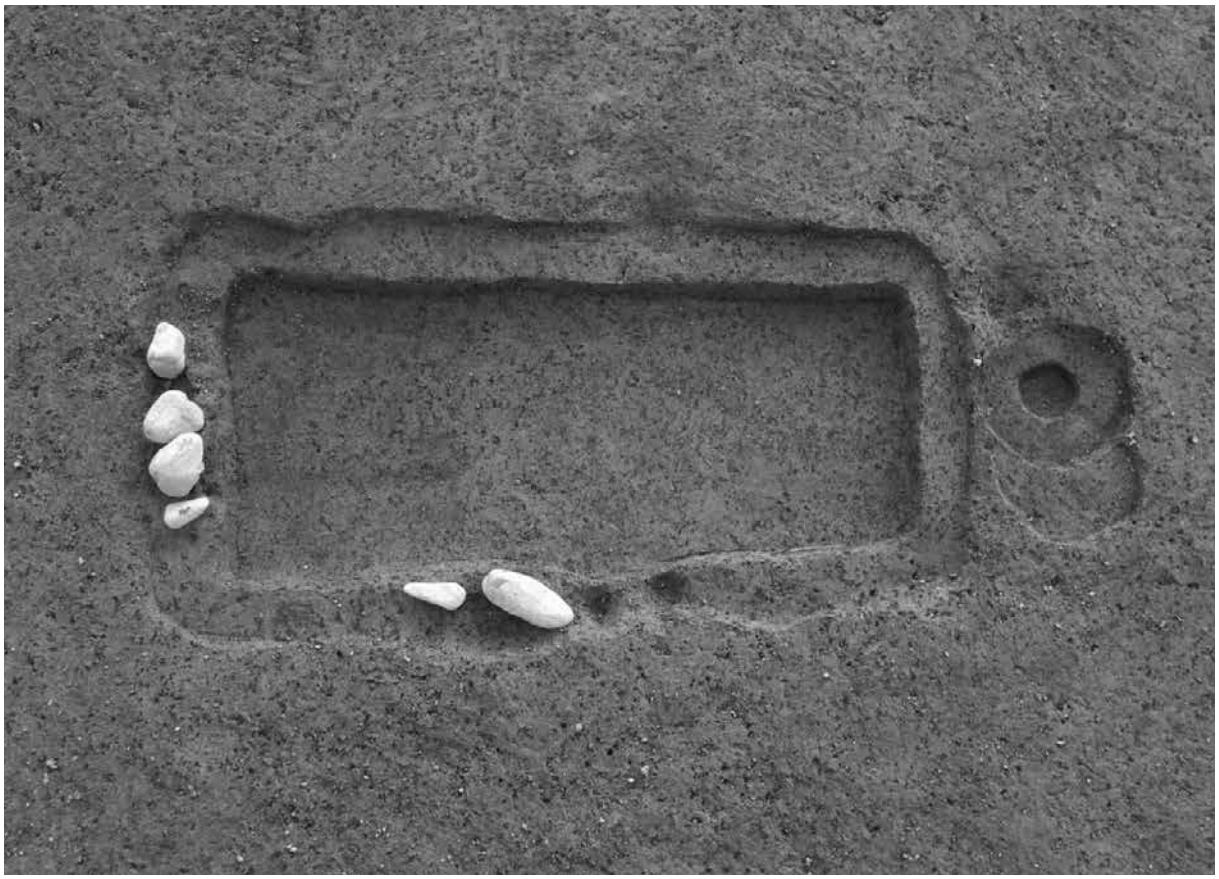
SD02土層断面（中央部・南西から）

SD02土層断面（北部・南から）

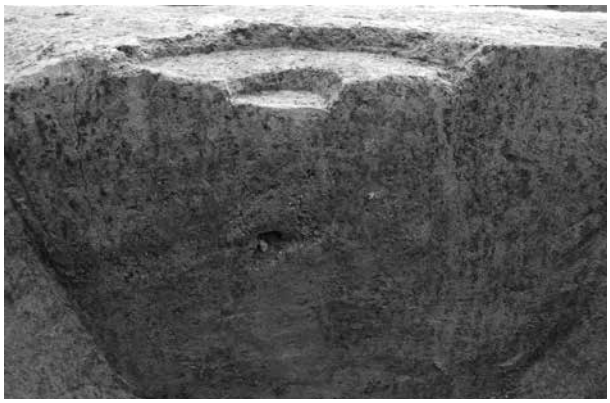
写真図版84

竹の前遺跡

SB02（北東から）



SX01（北東から）



SB01P2-1土層断面（西から）

SB02P1-1土層断面（東から）

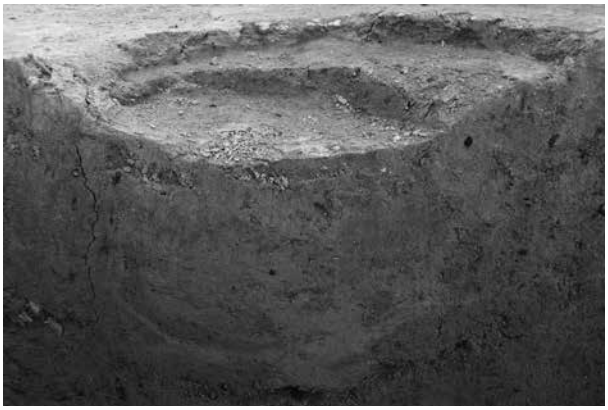
SB02P2-1土層断面（東から）

SB03P1-2土層断面（西から）

SA02P2土層断面（北から）

SA04P1土層断面（南西から）

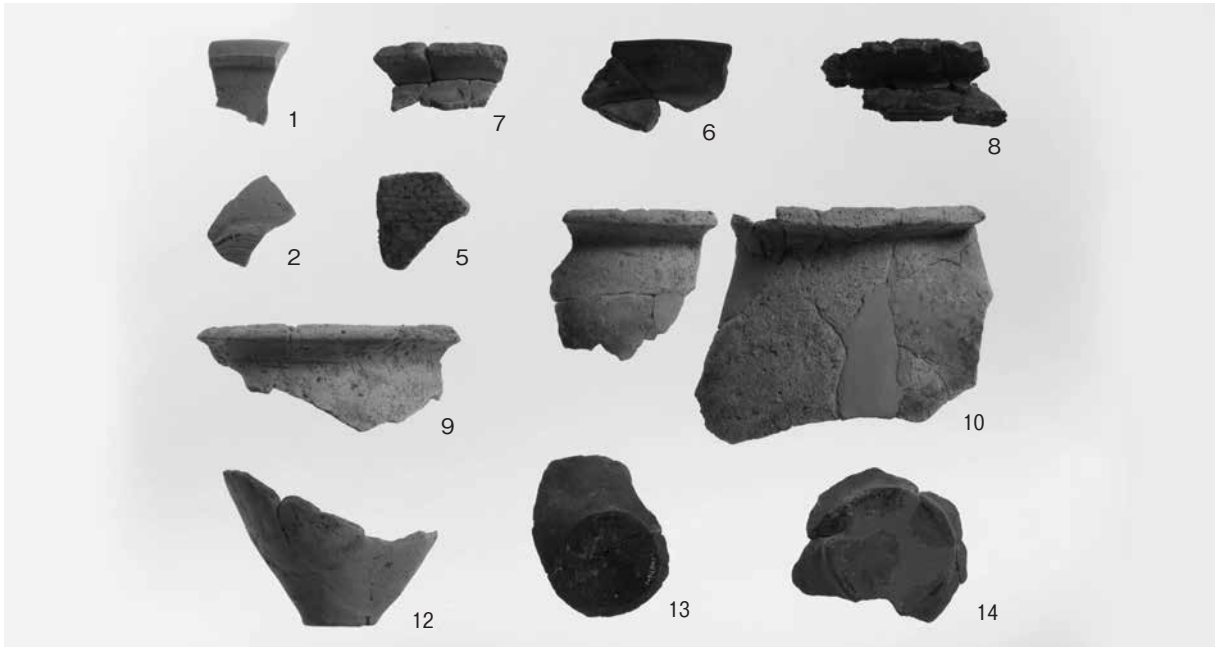
SA04P2土層断面（西から）



SA04P3土層断面（南西から）

写真図版86

竹の前遺跡



出土遺物(1)

出土遺物(2)

写真図版88

竹の前遺跡

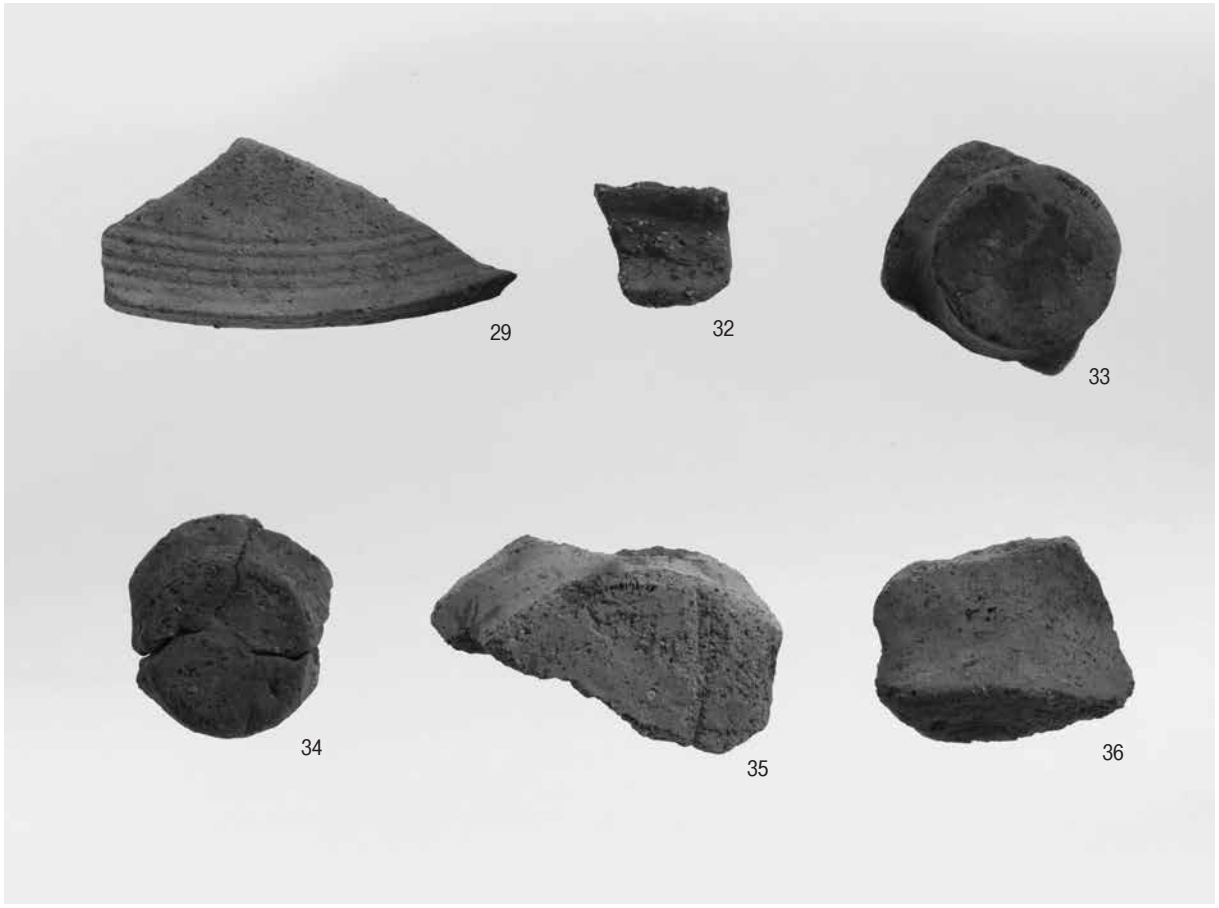
27

24

25

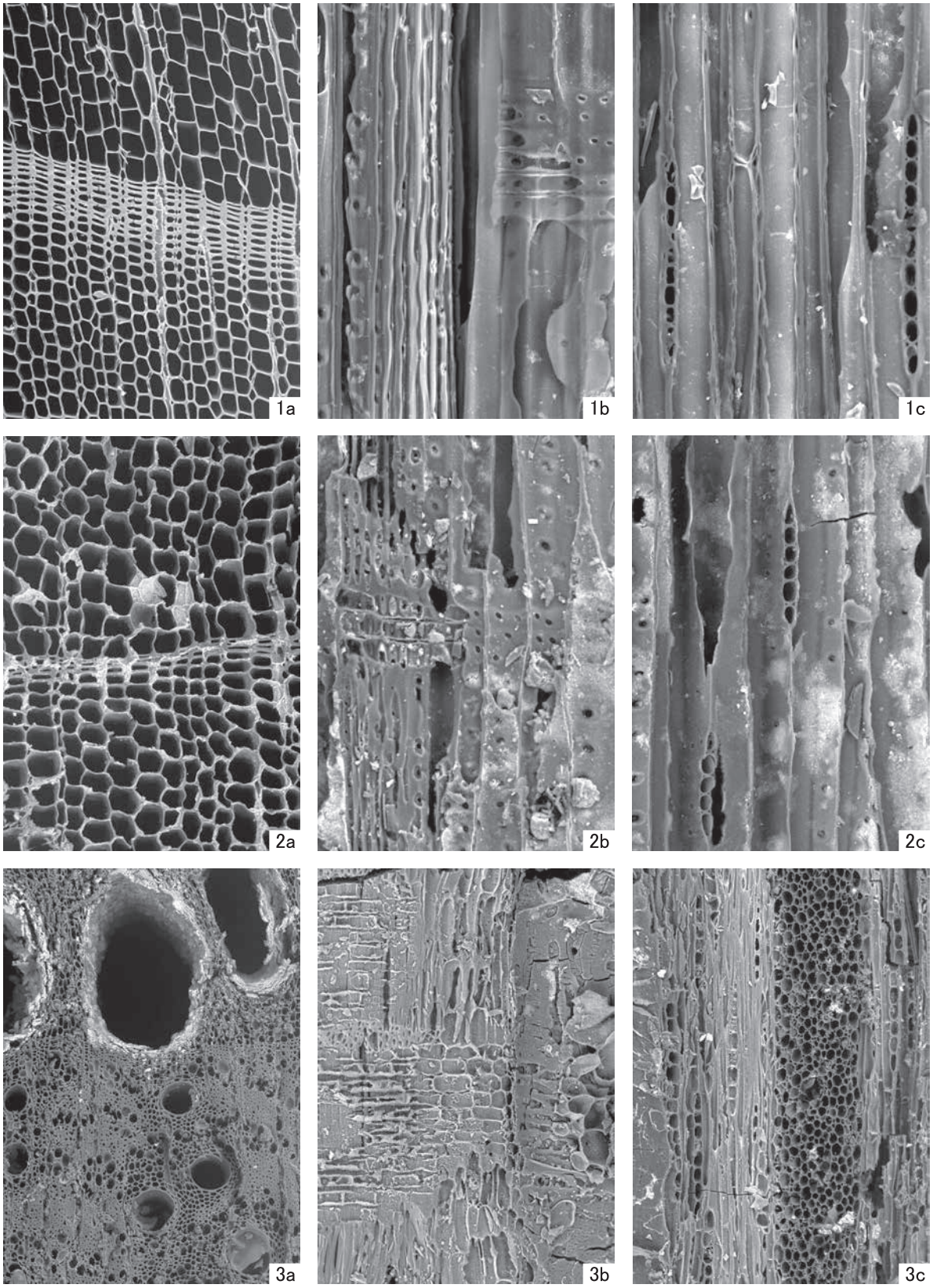
31

30



出土遺物(3)

炭化材(1)

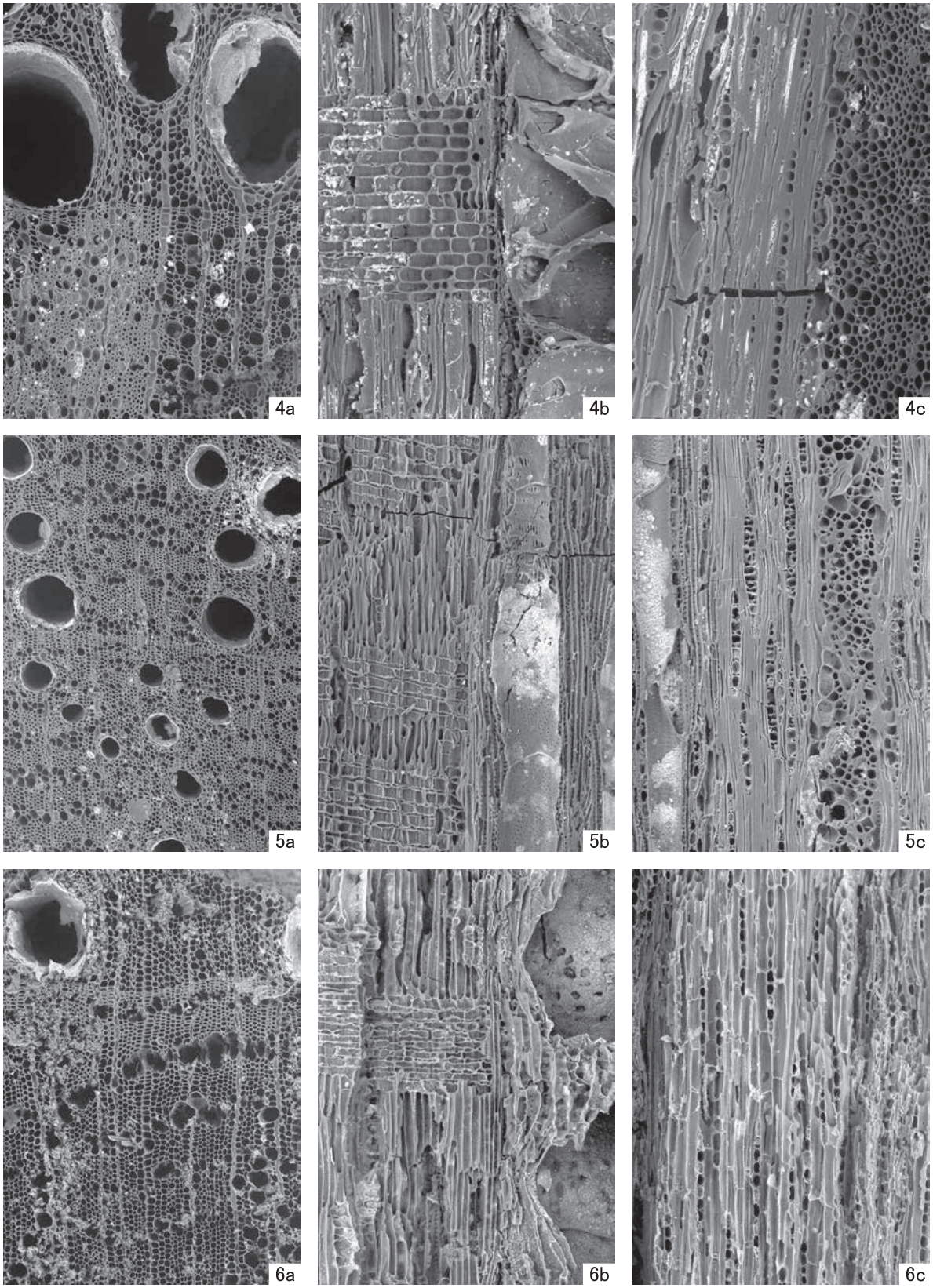


1.スギ(SH09)
2.ヒノキ(SH06)
3.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(SH01;壁)
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:3a
200 μ m:1−2a,3b,c
100 μ m:1−2b,c

写真図版90

炭化材(2)



4.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SH01;南東柱)
5.コナラ属アカガシ亜属(SH01;南西柱)
6.スダジイ(SH06)
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

報告書抄録

ふりがな	ながこしいせき
書名	長越遺跡Ⅲ
副書名	（二）船場川水系船場川　流域治水対策事業
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第432冊
編著者名	渡辺　昇・上田健太郎
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1　　TEL 079(437)5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10-1
発行年月日	2012年3月

所収遺跡名	所在地	コード				調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号	北緯	東経			
長越遺跡								
確認調査	兵庫県姫路市飯田	28201	2003076	34°48′52″	134°40′15″	2000.7.13～8.17	62㎡	（二）船場川水系船場川　流域治水対策事業
本発掘調査			2008171			2009.2.2～3.24	440㎡	
			遺跡番号					
			020414					
竹の前遺跡				34°48′58″	134°40′35″			
本発掘調査	兵庫県姫路市手柄		調査番号					
			2008175			2009.2.21～3.10	80㎡	
			遺跡番号					
			020435					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長越遺跡	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居跡・落ち込み・溝	古式土師器	
竹の前遺跡	集落跡	弥生時代後期	建物・溝	弥生土器	
		奈良時代	柱穴列	瓦	
		平安時代	掘立柱建物・柱穴列・溝	須恵器・陶磁器	

要約	長越遺跡は弥生時代終末から古墳時代にかけての兵庫県を代表する集落跡である。その東側の調査で、14棟の竪穴住居跡を調査した。狭い部分に集中して住居が築かれている。以前調査部分よりも新しい時期に集中して住居が築かれていたようである。庄内甕は保有しているが、搬入土器に変化が見られる。 竹の前遺跡は弥生時代後期の溝が検出されている。後期前半の古い集落跡で長越遺跡に先行し、畑田遺跡などとともに後期集落を考えるのに重要な資料である。

兵庫県文化財調査報告　第 432 冊

姫路市

長越遺跡 Ⅲ

（飯田湯田遺跡）

2012 年 3 月 20 日発行

編　集　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
〒 675-0142　加古郡播磨町大中 1 － 1 － 1
発　行　兵庫県教育委員会
〒 650－8567　神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号
印　刷　富士高速印刷株式会社